富来町貝田遺跡・貝田C遺跡

―県営ほ場整備事業貝田地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書―

1995

石川県立埋蔵文化財センター

富来町貝田遺跡・貝田Ｃ遺跡

石川県立埋蔵文化財センター

富来川流域遠景（北東から、㈱アジア航測提供）

富来川流域遠景（南西から、㈱アジア航測提供）

巻頭図版

貝田遺跡第３次発掘調査南調査区全景（西から）

貝田遺跡南調査区出土中世土師器・陶磁器

富来川流域と福良津（序文に代えて）

所長　橋本　澄夫

この報告書は、富来町貝田地内に所在する二遺跡の発掘調査記録であり、富来の歴史を解き明かす一つの指標となるものである。富来の街は富来川の河口付近に発達しているが、その歴史は古く、稲作を主体とした農耕文化の波及期（弥生時代）にまでさかのぼる。初期の農耕文化は、水利に恵まれた沖積平地にまず始まり、農耕の民たちの定着をみた。山がちな能登半島では、このような初期農耕（水田経営）の適地は、中小河川の流域や小盆地に限られ、半島の外浦地域でかなりの広さを擁する河川流域の平地は、邑知低地帯をひかえた羽咋川流域を除けば、於古川流域の旧福野潟周辺（志賀町）、富来川流域の平地（富来町）、八ケ川流域の門前地域（門前町）、輪島川流域の平地（輪島市）、町野川流域（輪島市）などを挙げ得るに過ず、これに準ずるものに酒見川（富来町）や仁岸川（門前町）の流域があろう。

能登外浦沿岸の弥生・古墳・古代の集落遺跡や首長墓（古墳）の分布は、於古川流域から輪島川流域の間に顕在し、現代の都市分布とほぼ重なっている。いずれも港湾として外海に開けた河川、内陸への交通路としての河川・川谷が有利に運用され、さらに背後に肥沃で広い耕作地と居住適地を擁したからであった。とくに高田遺跡・山王丸山遺跡・飛塚古墳・貝田遺跡群が点在する富来川の流域平地は、弥生時代から古代における政治的にも重要な拠点地域であり、半島における先進地域の一つだったと考えられる。

古代（奈良・平安時代）の富来といえば、福浦港（福良津）をひとつの窓口とした日渤交流の歴史がある。渤海国とわが国との交流は、８世紀代から10世紀始めごろにかけて行われ、渤海使の乗り込んだ大船は、日本海沿岸の諸地域に来着しているが、とりわけ加賀・能登の沿岸にたどり着くケースが多かった。宝亀３年（772）には、能登に漂着した渤海使を福良津に安置、延暦23年（804）には、能登に客館を造営し、元慶７年（883）には、渤海客の船建造のため福良泊の大木伐採を禁じたと伝えており、現在では、加賀・能登沿岸に来着した渤海船の修理や建造に当てられたのが福良津であり、また渤海への出港もこの入江からだったと考えられている。能登客館の造営地も福良津の近辺だとみるのが一般的であるが、入江の周辺には平地は少なく、能登客館の所在地については、候補遺跡は指摘されているものの、まだ考古学的に確認されているわけではない。

福良津における渡海船の修理・建造、使節の都への送迎、多くの乗員・水夫たちの滞在など、客館の管理・運営については、能登国（二次立国757年）が深く関与するものであり、福良津での動向は常に国衙官吏によって掌握されていたはずである。であるならば、福良津における渤海人たちの動きを国府に伝える出先機関の存在を想定しなければならない。国府（七尾）や寺家遺跡で知られる羽咋まではかなりの距離があり、情報の中継地としての出先官衙の存在が必要だったのではあるまいか。そして、福良津から最も近い開発先進地域が富来川流域であり、この地域には、奈良・平安時代に営まれていた集落遺跡の分布がかなり知られており、これまで発掘調査で確認されているものに、貝田遺跡・貝田Ｃ遺跡・山王丸山遺跡・高田遺跡・田中遺跡などがある。とりわけ和同開珎・木簡・斎串・馬歯・下駄などが出土した田中遺跡（昭和61年発掘）は、その祭祀的遺物類の検出から見ても官衙的色彩が濃厚であり、国府とも関係の深い施設だったことを想定させる。

田中遺跡から富来川河口までは約４キロ程度、河口付近から５キロほど船で南下すれば福良に達する。また田中遺跡からは、富来川をさかのぼり今田付近で山越えし、西谷内川・熊木川ぞいに下るコースをとれば、10数キロの道程で熊木川河口の七尾西湾岸に達する。能登半島でも外浦と内浦が最短の距離（陸路）で結ばれるのが富来～中島間なのであり、熊木川河口から乗船し、種ケ島・机島を左舷に眺めながら屏風瀬戸を通過すれば、海路約15キロほどで能登国の国の津だった鹿嶋津の浜に接岸できる。もし、能登最大の神域を擁する羽咋を経由したならば、その旅程は倍に及ぶこととなる。異邦の渤海人が福良津に滞在した期間、おそらく福良津は他と隔離した状態におかれ、能登国府出先の官人たちの管理・保護のもとにあった可能性がある。そして、その出先官衙こそ富来川流域におかれたのであり、現時点では、田中遺跡の官衛的性格に着目することが妥当だと考えている。

例　　言

1　本書は石川県羽咋郡富来町貝田（かいだ）地内に所在する埋蔵文化財包蔵地である貝田遺跡、貝田C遺跡の発掘調査報告書である。

2　上記2遺跡の発掘調査は、石川県農林水産部耕地整備課（現在は農地整備課）所管の県営ほ場整備事業貝田地区の施工に起因するもので、同課の依頼により石川県立埋蔵文化財センターが実施した。

3　発掘調査及び出土遺物整理、報告書刊行に係る費用は、一部文化庁から補助金を得た他は耕地整備課が負担した。

4　発掘調査から出土遺物整理、報告書刊行に至るまでには下記の機関、個人の協力を得た。

文化庁記念物課、石川県農林水産部耕地整備課、石川県羽咋土地改良事務所、社団法人石川県埋蔵文化財保存協会、穴水町教育委員会、珠洲市教育委員会、珠洲市立珠洲焼資料館、富来町教育委員会、中島町教育委員会、アジア航測株式会社、セントラル航業株式会社、宇野隆夫、越前慎子、大藤雅男、大薮智子、岡本伊佐夫、加賀真樹、川端敦子、小島和夫、下村好美、高田則晃、谷口克好、辻本馨、藤井専、的場勝俊、宮田進一、望月精司、山本純也、山本直人、四柳嘉章、吉岡康暢（個人名五十音順、敬称略）

5　上記2遺跡の発掘調査及び出土遺物整理は平成3年度から6年度にかけて継続して実施しており、内容、費用は下記の通りである。詳細は第II章に記した。

平成3年度	内容	貝田遺跡の第1次発掘調査、同第2次発掘調査
	費用	1,967,854円（第1次・第2次調査合算、県費・国庫補助金合算）
平成4年度	内容	貝田遺跡の第3次発掘調査、貝田C遺跡の発掘調査、発掘調査出土遺物の整理
	費用	7,840,413円（2遺跡合算、県費・国庫補助金合算）
平成5年度	内容	発掘調査出土遺物整理
	費用	5,515,638円（県費・国庫補助金合算）
平成6年度	内容	発掘調査出土遺物整理・報告書刊行
	費用	4,830,000円（県費・国庫補助金合算）

6　発掘調査出土遺物の整理については、平成4・5年度は社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に作業を委託して、平成6年度は石川県立埋蔵文化財センターの直営で行った。

7　出土遺物の写真撮影は大藤雅男が行い、写真図版の作成は安英樹が行った。

8　本報告書の執筆は、第IV章・第VII章第2節を柿田祐司が行った他は、安が行った。編集は各調査・執筆担当者と協議の上、安が行った。

9　本文・図版・挿図についての凡例は下記の通りである。

（1）遺跡名について一部改称したものがあり、詳細は第II章に記した。（2）方位は全て真北を指し、水平基準は海抜高である。（3）挿図の縮尺は図内に示した。（4）図版の出土遺物の縮尺は不同である。（5）出土遺物番号は挿図・図版で共通しており、同一層位出土で複数の挿図にまたがるものは連番、それ以外は図毎に1から振るものとした。（6）遺物挿図の須恵器、珠洲実測図は断面を黒塗りしている。（7）遺物挿図に使用したスクリーントーンが示すものは右の凡例の通りである。（8）注、引用・参考文献は一括して巻末に示した。

10　発掘調査で得られた記録資料、出土遺物は石川県立埋蔵文化財センターで保管している。

目　　次

報告書抄録

第Ⅰ章　遺跡の位置……（安）　1
　第1節　遺跡の位置……1
　第2節　周辺の遺跡……1

第Ⅱ章　経緯と経過……（安）　3

第Ⅲ章　貝田遺跡の第1次発掘調査……（安）　7
　第1節　調査の概要……7
　第2節　遺構と遺物……7
　第3節　小結……9

第Ⅳ章　貝田遺跡の第2次発掘調査……（柿田）　11
　第1節　調査の概要……11
　第2節　層序……12
　第3節　遺構と遺物……16
　第4節　小結……20

第Ⅴ章　貝田遺跡の第3次発掘調査……（安）　35
　第1節　調査の概要……35
　第2節　貝田遺跡南調査区……36
　第3節　貝田遺跡北調査区……119
　第4節　貝田遺跡工事立会区域……122

第Ⅵ章　貝田C遺跡の発掘調査……（安）　123
　第1節　調査の概要……123
　第2節　遺構……124
　第3節　遺物……126
　第3節　小結……139

第Ⅶ章　考察……143
　第1節　貝田遺跡・貝田C遺跡出土の土師器・須恵器について……（安）　143
　第2節　貝田遺跡出土の中世土師器について－加賀地域と対比して－……（柿田）　151
　第3節　遺跡の消長に見る富来川流域の動向……（安）　157

注・参考文献

図 版 目 次

巻頭図版

上　富来川流域遠景(北東から、㈱アジア航測提供)

下　富来川流域遠景(南西から、㈱アジア航測提供)

上　貝田遺跡第3次発掘調査南調査区全景(西から)

下　貝田遺跡南調査区出土中世土師器・陶磁器

図版１　遺跡周辺航空写真（㈱セントラル航業提供）

図版２上　遺跡周辺遠景（南西から）

図版２下　貝田遺跡遠景（南西から）

貝田遺跡第１次発掘調査

図版３上　パイプライン最東調査区全景（東から）

図版３下　パイプライン最東調査区全景（西から）

図版４上　パイプライン東調査区全景（東から）

図版４下　パイプライン東調査区全景（西から）

図版５上　排水路調査区全景（北から）

図版５下　排水路調査区全景（南から）

図版６上　パイプライン西調査区全景（東から）

図版６下　パイプライン西調査区全景（西から）

図版７上　パイプライン最西調査区全景（東から）

図版７下　パイプライン最西調査区全景（西から）

図版８上　東半調査区全景（西から）

図版８下　出土遺物

貝田遺跡第２次発掘調査

図版９上　No.13地区柱穴状ピット（北東から）

図版９下　No.14地区溝状遺構（北東から）

図版10上　No.12地区たち割り土層断面（北西から）

図版10中　No.12地区　パイプライン調査区北東壁土層断面（南から）

図版10下　No.13地区たち割り土層断面（南から）

図版11上　パイプライン調査区作業状況(北西から)

図版11中　パイプライン調査区作業状況(北西から)

図版11下　No.13＋10地区パイプライン調査区完掘状況（北西から）

図版12上　パイプライン調査区完掘状況(北西から)

図版12下　パイプライン調査区完掘状況(南東から)

図版13上　No.11＋10地区拡張部土師器甕出土状況、土層断面（南東から）

図版13下　No.11＋10地区拡張部土師器甕出土状況（南西から）

図版14上　No.11＋10地区拡張部完掘状況(南西から)

図版14下　調査区全景（南東から）

図版15　出土遺物（１）

図版16　出土遺物（２）

図版17　出土遺物（３）

図版18　出土遺物（４）

図版19　出土遺物（５）

図版20　出土遺物（６）

図版21　出土遺物（７）

図版22　出土遺物（８）

図版23　出土遺物（９）

貝田遺跡第３次発掘調査南調査区

図版24上　１区上位遺構面全景（北から）

図版24下　２～３区上位遺構面全景（北から）

図版25上　３～４区上位遺構面全景（北から）

図版25下　４～５区上位遺構面全景（北から）

図版26上　５～６区上位遺構面全景（北東から）

図版26下　掘立柱建物（東から）

図版27上　18号ピット（南西から）

図版27中　５区層17　土器・陶磁器出土状況（検出時、南から）

図版27下　５区層17　土器・陶磁器出土状況（検出時の遺物の下位のもの、南から）

図版28上　竪穴（北から）

図版28中　25号・26号ピット（南から）

図版28下　25号ピット（南から）

図版29上　１区下位遺構面全景（北から）

図版29下　２区下位遺構面全景（南から）

図版30上　３区下位遺構面全景（南から）

図版30下　４区下位遺構面全景（南から）

図版31上　５区下位遺構面全景（南から）

図版31下　６区下位遺構面全景（南から）

図版32右上　２区北半縦断面土層（西から）

図版32右下　２区南半縦断面土層（西から）

図版32左上　３区北半縦断面土層（西から）

図版32左下　３区南半縦断面土層（西から）

図版33右上　4区北半縦断面土層（西から）
図版33右下　4区南半縦断面土層（西から）
図版33左上　5区北半縦断面土層（西から）
図版33左下　5区南半縦断面土層（西から）
図版34上　3区畦畔（南から）
図版34中　4区東半畦畔（南から）
図版34下　4区畦畔(南北方向畦畔に近接、北から)
図版35上　4区西半畦畔（南から）
図版35下　5～6区畦畔（西から）
図版36上　3区遺物出土状況（北から）
図版36下　4区遺物出土状況（北から）
図版37上　4区遺物出土状況（北半部に木器集中、北から）
図版37中　4区遺物出土状況（北半部に木器集中、北から）
図版37下　4区遺物出土状況（南半部に中世土師器集中、西から）
図版38上　4区遺物出土状況（南半部に中世土師器集中、南から）
図版38中　5区遺物出土状況（南から）
図版38下　5区遺物出土状況（畦畔のコーナー部分に中世土師器集中、北から）
図版39上　2区下駄（第60図1）出土状況
図版39中　2区下駄（第60図2）出土状況
図版39下　2区下駄（第61図1）出土状況
図版40上　4区下駄（第62図1）出土状況
図版40中　4区下駄（第62図2）出土状況
図版40下　3区舟形出土状況
図版41上　4区漆器出土状況
図版41中　2区部材出土状況（段南部、西から）
図版41下　2～3区部材出土状況(段北部、南から)
図版42上　調査区全景（東から）
図版42下　調査区全景（西から）
図版43　出土遺物（1）
図版44　出土遺物（2）
図版45　出土遺物（3）
図版46　出土遺物（4）
図版47　出土遺物（5）
図版48　出土遺物（6）
図版49　出土遺物（7）
図版50　出土遺物（8）
図版51　出土遺物（9）
図版52　出土遺物（10）
図版53　出土遺物（11）
図版54　出土遺物（12）
図版55　出土遺物（13）
図版56　出土遺物（14）
図版57　出土遺物（15）
図版58　出土遺物（16）
図版59　出土遺物（17）
図版60　出土遺物（18）
図版61　出土遺物（19）
図版62　出土遺物（20）
図版63　出土遺物（21）
図版64　出土遺物（22）
図版65　出土遺物（23）
図版66　出土遺物（24）

貝田遺跡第3次発掘調査北調査区

図版67上　調査区全景（東から）
図版67下　調査区全景（西から）
図版68上　調査区北部全景（南から）
図版68下　調査区西部全景（東から）
図版69上　溝全景（北から）
図版69下　溝全景（東から）

貝田C遺跡発掘調査

図版70上　調査区（0～38m）全景（東から）
図版70下　調査区（0～38m）全景（西から）
図版71上　調査区（0～20m）近景（東から）
図版71下　調査区（38～64m）全景（北東から）
図版72上　調査区（38～50m）近景（北東から）
図版72下　調査区（50～64m）近景（北東から）
図版73上　調査区（78～110.5m）全景（北東から）
図版73下　調査区(78～110.5m)全景(南西から)
図版74上　落ち込み土層断面（西から）
図版74中　環石出土状況（北西から）
図版74下　環石出土状況（北西から、近接）
図版75　出土遺物（1）
図版76　出土遺物（2）
図版77　出土遺物（3）
図版78　出土遺物（4）
図版79　出土遺物（5）
図版80　出土遺物（6）

報告書抄録

ふりがな	とぎまちかいだいせき・かいだCいせき
書名	富来町貝田遺跡・貝田C遺跡
副書名	県営ほ場整備事業貝田地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	安　英樹・柿田祐司
編集機関	石川県立埋蔵文化財センター
所在地	〒921　石川県金沢市米泉町4丁目133番地　TEL. 0762－43－7692
発行年月日	西暦1995年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
貝田（かいだ）	石川県羽咋郡（いしかわけんはくいぐん） 富来町貝田（とぎまちかいだ）	17382	055	37度 8分 54秒	136度 45分 3秒	第1次 1991.11.28～ 1991.12.09 第2次 1992.02.06～ 1992.03.11 第3次 1992.06.15～ 1992.09.28	第1次 170 第2次 110 第3次 565	ほ場整備事業
貝田C（かいだ）	石川県羽咋郡（いしかわけんはくいぐん） 富来町貝田（とぎまちかいだ）	17382	070	37度 8分 58秒	136度 45分 11秒	貝田遺跡第3次と合算	200	同上

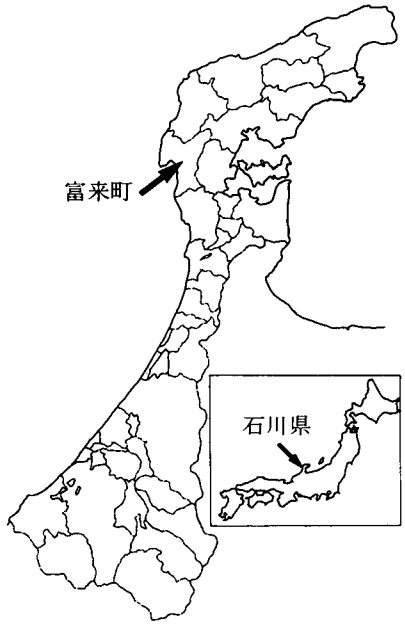
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
貝田	集落遺跡	縄文時代～中世	掘立柱建物1棟 竪穴1基 溝11条 ピット32穴 畦畔 段	弥生土器、土師器、須恵器、製塩土器、中世土師器、陶磁器、土錘、石器・石製品、木器・木製品、鉄器、鉄滓、鞴羽口、銭貨、種子・種実	低位丘陵に立地する複合集落遺跡と推定され、丘陵裾部では遺構面が積層する。中世前半期においては水田域から居住域への変遷が捉えられ、また中世土師器の盛んな投棄が認められる。遺物では中世土師器・陶磁器が良好な資料として特筆される。
貝田C	集落遺跡	弥生後期～中世	落ち込み1基	弥生土器、土師器、須恵器、製塩土器、中世土師器、陶磁器、石器、管玉、鞴羽口	低位山地の裾部に立地する複合集落遺跡の縁辺部と推定される。

第Ⅰ章　遺跡の位置

第１節　遺跡の位置

本書で報告される貝田遺跡、貝田Ｃ遺跡は石川県羽咋郡富来町貝田地内に所在する。富来町は日本海に突き出している能登半島の中程の、海流に直面する外浦地域の一角を占める。富来町はその主要河川である西の酒見川と東の富来川に挟まれた部分を町の中心地区とし、主に両河川の下流域に建築物が密集して街地化し、中流域は平野が水田化し、山地部裾を中心に集落が点在する状況にある。

富来川、酒見川流域の地勢は、標高200～250m 級の低山地、町西部から連なる海岸段丘、中流域の流路に沿って形成された谷底平野、下流域に形成された沖積平野、河口付近から下流域にかけて発達した砂丘、に区分することができる。低山地は平野から入り組む小谷や張り出す小丘陵をいくつも形成している。砂丘は平野部を覆い隠すように展開するが、高田地区、小袋地区では河川に分断されて独立丘陵上を呈している。貝田遺跡は富来川中流域の右岸に張り出す小丘陵上に、貝田Ｃ遺跡はその300m ほど上流の低山地裾部に、それぞれ立地している。



第１図　富来町の位置（Ｓ＝１／２,０００,０００）

第２節　周辺の遺跡

貝田遺跡（第２図１）、貝田Ｃ遺跡（３）の周辺の遺跡は縄文時代から中世まで各時代で認められる[1]が、ここでは主な遺跡[2]について時代別に列記しておきたい。

縄文時代には現在の地形がほぼ形成されていたと見られ、それに相関するように縄文土器や石器を出土する遺跡が見られるようになる。しかし石器の単独出土など、その実態が明らかでない遺跡が多い。

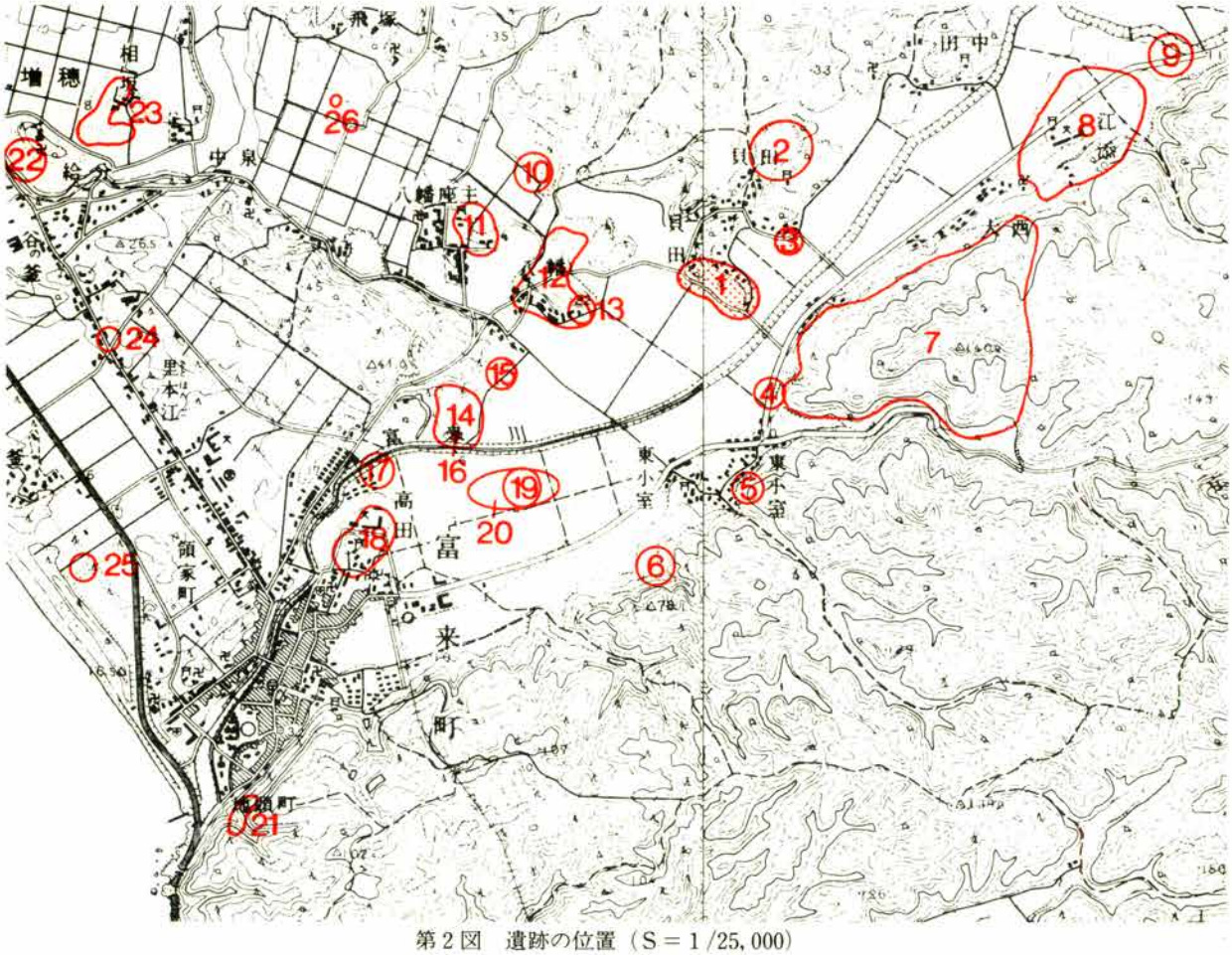
弥生時代には高田遺跡（18）と山王丸山遺跡（15）を代表的な遺跡として上げることができる。両遺跡とも発掘調査が実施されており、高田遺跡は中期の集落、山王丸山遺跡は中期・後期の墓域であることが判明している。

古墳時代には高田遺跡で中期・後期の祭祀遺構が確認されている。古墳は段丘部に飛塚古墳（26）があげられる程度で、山王丸山古墳（16）は実態が明らかでなく、富来川流域に確実なものを見出すことができない。

古代の遺跡は高田遺跡、田中遺跡（８）をあげる。田中遺跡は奈良時代から平安時代にかけて営まれた集落であり、木簡や和同開珎など、官的施設との関わりが考えられる遺物が出土している。

中世の遺跡としては地頭中世墳墓窟群（21）、木尾嶽城跡（７）、富来城跡（12）をあげる。集落遺跡は不明確な状況である。地頭中世墳墓窟群はヤグラと通称される、武士の墓として関東鎌倉で発達した墓制であり、北陸では非常に稀な存在である。木尾嶽城は富来川の左岸に位置する、大規模な山城であり、室町時代から戦国時代末期までこの地域の軍事的な拠点であろう。

富来川流域の遺跡については、全体的に正式な発掘調査例が少ないため、詳細が不明なものが多い。本書でなされる貝田遺跡、貝田Ｃ遺跡の報告で多少なりともこの地域の資料を増補したいと考えている。



第２図　遺跡の位置（S＝1/25,000）

第１表　遺跡一覧表

No.	県遺跡No.	遺　跡　名	時　代	備　考	No.	県遺跡No.	遺　跡　名	時　代	備　考
1	27055	貝田遺跡	縄文～中世	1991年・1992年県埋文センター発掘調査	14	27057	八幡山王遺跡	不詳	
2	27069	貝田Ｂ遺跡	不詳		15	27058	山王丸山遺跡	縄文～中世	1991年・1992年町教委発掘調査
3	27070	貝田Ｃ遺跡	古墳・古代	1992年県埋文センター発掘調査	16	27059	山王丸山古墳	古墳	自然地形か？
4	新規	東小室キンダ遺跡	古墳～中世	1994年県埋文センター分布調査で発見	17	27060	八幡ワガクチ遺跡	弥生・古代	
5	27071	東小室遺跡	縄文・中世		18	27061	高田遺跡	弥生～近世	1969年石考研発掘調査
6	新規	東小室ボガヤチ遺跡	弥生～中世	1994年県埋文センター分布調査で発見	19	27062	富来八幡遺跡	弥生	
7	27072	木尾嶽城跡	中世	町指定史跡	20	27063	八幡イチバンダ遺跡	弥生	
8	27073	田中遺跡	古代	1986年町教委発掘調査	21	27064	地頭中世墳墓窟群	中世	
9	27074	ボケワラ遺跡	縄文		22	27045	相神丸山遺跡	縄文～古墳	
10	27052	八幡イシズカ遺跡	不詳		23	27046	相坂遺跡	縄文・古代～近世	
11	27053	八幡座主遺跡	古代		24	27050	里本江遺跡	縄文	磨製石斧単独出土
12	27054	富来城跡	中世		25	27051	富来海岸遺跡	縄文	石鏃単独出土
13	27056	八幡バケモンザカ遺跡	縄文		26	27068	飛塚古墳	古墳	損壊、遺物多

第II章　経緯と経過

はじめに

石川県農林水産部耕地整備課（現農地整備課）では県下各地域で水田のほ場整備事業を進めている。主な事業内容は水田区画を大型化し同時に用排水路や農作業道を整備することであり、事業の目的は農作業の機械化・効率化をはかることにある。ほ場整備事業は工事の対象面積が広大であるが、遺跡が存在しても田面工事が主体であるため区画設計や工法の変更等により保存が可能となる場合が多い。そのため石川県立埋蔵文化財センターでは県耕地整備課に対して年度の前半の内に年度後半と次年度事業の照会を毎年行っており、早期に分布調査を実施し遺跡の分布状況が把握できるよう配慮している。そして、遺跡が確認された場合はその範囲や包含層への深さ等を提示し工事が影響を及ぼさないよう施工担当の県下各土地改良事務所に対して指導を行っている。さらに切土工事や水路の敷設等により遺跡に損傷が及ぶ場合については発掘調査を行っているものである。

以下、本書で報告する県営ほ場整備事業の羽咋郡富来町貝田地区について、発掘調査に至るまでの経緯、そして屋内整理作業、報告書刊行に至るまでの経過について、年度別に記す。

平成２年度[3]

羽咋郡富来町貝田地区の県営ほ場整備事業については平成２年度に計画・基本設計がなされ、平成３年度からの施工が予定された。平成３年度の施工予定区域は日本海側から見て貝田集落を隠すように位置する独立丘の前面に展開する33ha の範囲である。埋蔵文化財センターは県耕地整備課の事業内容の回答に対し当該区域について分布調査を行う計画を立て協議、平成２年12月４日から５日にかけて試掘調査を実施した。その結果、一部で遺構・遺物・包含層が確認され、遺跡の分布が確実となった。遺跡は周知の貝田遺跡である。埋蔵文化財センターは耕地整備課・施工担当の羽咋土地改良事務所と協議し、田面部については盛土を設けて遺跡を保護すること、但し包含層・遺構面以下への掘削が避けられない排水路・パイプライン敷設区域については来年度に発掘調査を行うことで合意した。

平成３年度[4]

この年度は分布調査、発掘調査が行われた。分布調査は平成４年度の施工予定区域について、前年度同様に計画し回答した。対象となる区域は独立丘と貝田集落の間及び八幡丘陵の間の13.5ha の範囲である。分布調査は平成３年10月29日に試掘調査が実施された。その結果は数箇所の試掘坑で遺跡の分布が確認され、２遺跡の分布が明らかになった。一つは前年度も確認された周知の貝田遺跡と同一、もう一つは新たに発見された遺跡であり、貝田日詰彦神社下遺跡と仮称した。埋蔵文化財センターは耕地整備課に対して昨年同様に田面部については盛土保存、排水路・パイプライン敷設区域については来年度に発掘調査が必要である旨回答している。この年度をもって貝田工区に関係する埋蔵文化財分布調査は完了した。

発掘調査は平成３年度施工区域内で確認された貝田遺跡のうち排水路・パイプライン敷設区域について、平成３年４月１日付けで耕地整備課から依頼があり、埋蔵文化財センターは年度後半の実施を計画し耕地整備課に回答した。貝田遺跡の発掘調査は平成３年11月28日から12月９日まで約170m²について実施した（第１次発掘調査）。第１次発掘調査は比較的順調に進捗したが、終了間際に担当者が周辺を踏査したところ、調査区の東約50m 先の町道の海側に張り出す法面に露出した遺物・包含層を発見し、遺跡が丘陵裾部一帯に分布する可能性があることが判明した。新たに遺跡の分布を確認した張り出し部は現行の町道を直線的に付け替え、張り出し部を切り崩しパイプラインを敷設、水田の一部に取り込む工事が予定される箇所であった。町道の付け替えそのものは富来町農林水産課施工で平成６年度以降に予定されているが、現町道の切り崩しと仮設道の設置は水田化・パイプライン敷設と連動して県耕地整備課施工で平成３年度中に完了する予定であった。埋蔵文化財センターは急遽耕地

整備課・羽咋土地改良事務所と協議し翌平成４年１月20日に再分布調査を実施し濃密な遺物包含層を確認すると、年度内工事完了を可能にすべく特に緊急性の高い事業として発掘調査を実施することに決定した。調査は２月６日・７日に現道路盛土の除去を行い一時中断、その間に埋蔵文化財センターではこの急遽決定した調査について方針、進行についてセンター内で打ち合せが行なわれた。調査担当者については職員２～３名を常駐させるが、２～３日で他職員と順次交代するものとし、各職員の冬期本来の整理業務や調整業務に支障をきたさないように配慮した。本格的な調査には、器材を準備し現地に搬入した２月19日から着手した。遺構検出作業と並行して下層の状況確認のためにトレンチ調査を行ったが、この作業で積層する包含層・遺構面が確認され、冬期の悪条件下では重層遺跡の調査を完了させるのは不可能と判断された。よって埋蔵文化財センターと耕地整備課・羽咋土地改良事務所間で再度協議が行われ、工事が最優先するパイプライン敷設区域については発掘調査を完了させること、切り崩され水田化する面工事区域についてはその水田の筆のみの休耕を羽咋土地改良事務所が補償し、来年度調査することで合意した。パイプライン敷設区域約110㎡については一部工事立ち会いも挟みながら調査が続行され、３月11日で完了した（第２次発掘調査）。面工事区域については翌年度の調査実施を前提として一時埋め戻した。

なお、この年度には石川県遺跡地図が全面改訂されており、それに伴って「貝田日詰彦神社下遺跡」の名称が「貝田Ｃ遺跡」に変更になっている[1]。

平成４年度[5]

この年度は発掘調査が実施された。平成３年度に実施できなかった貝田遺跡の面工事区域と、平成３年度の分布調査で確認された貝田遺跡の南東部、同北東部、貝田Ｃ遺跡の排水路・パイプライン敷設区域について、平成４年４月１日付けで耕地整備課から発掘調査依頼があり、埋蔵文化財センターは年度前半の実施を計画し耕地整備課に回答した。

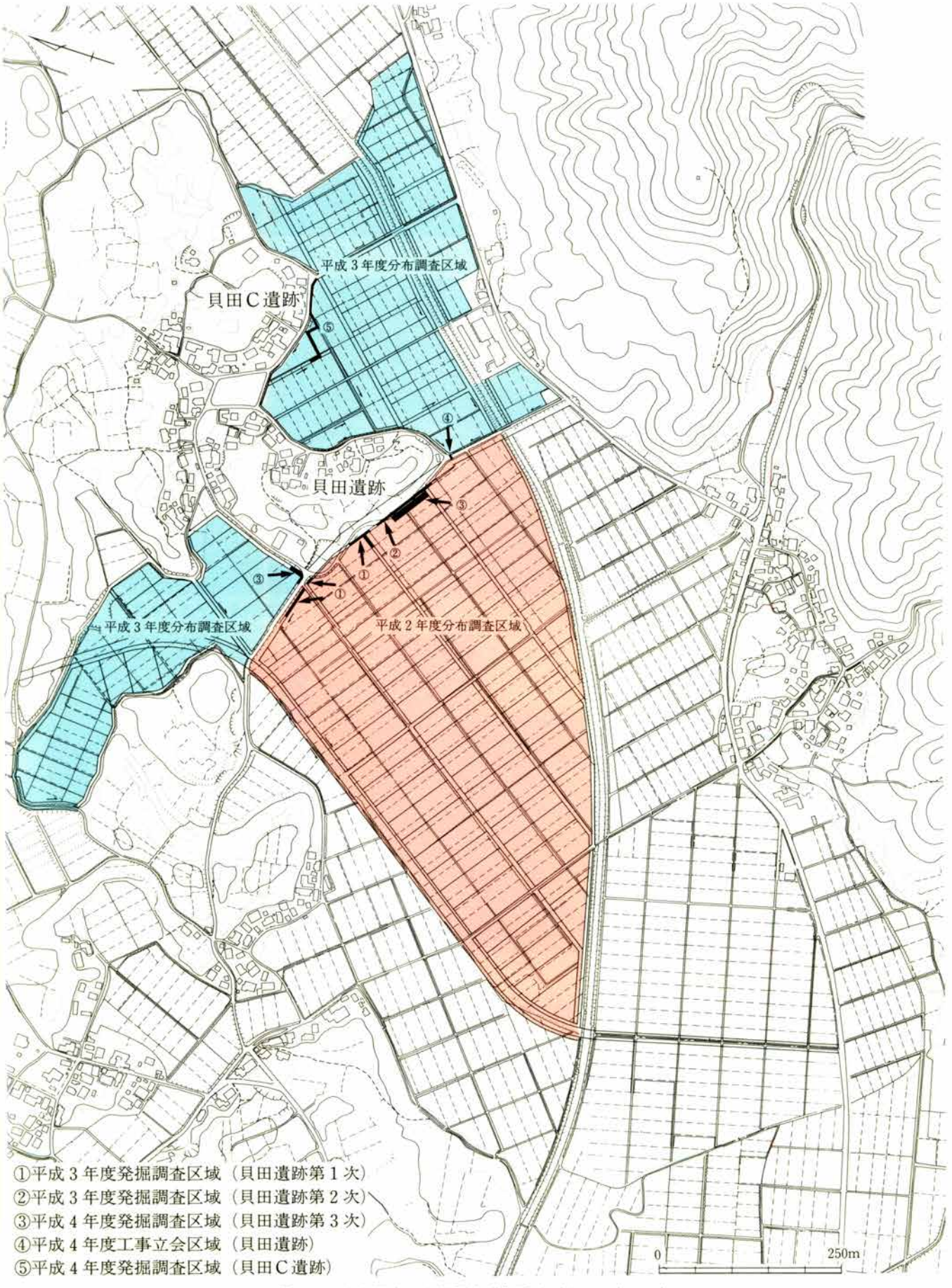
発掘調査は平成４年６月15日に、貝田遺跡から着手した。まず面工事区域（南調査区）約500㎡については着手前に羽咋土地改良事務所と協議を行った。協議事項は、発掘調査は今年休耕している水田一筆のうち面工事で掘削が及ぶ範囲のみを対象とすること、重層する遺構面については保護層20㎝を確保して工事可能な標高5.9m前後までを目安として調査し、それ以下の層・面は現状保存とすること、排土は調査対象外区域を置き場とし工事の際は埋土に使用すること、８月の旧盆あけに蕎麦を蒔き転作するためそれまでに調査を終了させること等であった。調査は予定をやや超過したものの無事終了し、一部並行させて貝田遺跡の北東部（北調査区）約65㎡の調査に移行した。貝田遺跡南東部については調査期間中に工事立ち会いを実施した。現道を掘削幅１ｍでたちわり２ｍ以上の深さにパイプラインを敷設する狭く深い箇所での発掘作業は不可能と判断されたからである（以上が貝田遺跡の第３次発掘調査）。貝田遺跡の調査と作業を一部並行しながら、最後に貝田Ｃ遺跡約200㎡の発掘調査を実施した。平成４年度の発掘調査は以上の内容で、９月19日に地元住民を主な対象にして現地説明会を実施、９月28日に終了した。調査面積は貝田遺跡、貝田Ｃ遺跡合わせて約765㎡である。この年度をもって貝田工区に関係する埋蔵文化財発掘調査は完了した。冬期は整理作業の一部を行った。出土遺物の整理は社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に委託して洗浄作業のみ行っている。

平成５年度[6]

この年度から報告書作成、刊行に向けての本格的な整理作業が実施された。整理作業は社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に委託して、平成５年４月１日から同年12月27日まで選別、接合、注記、実測、トレース、遺構図トレースを行った。整理作業は協会職員の尾田裕子、黒田和子、馬場正子が担当した。

平成６年度

整理作業は遺物実測、同トレース、遺構図トレースを若干追加して石川県立埋蔵文化財センターの直営で行った。その後、遺物写真の撮影、原稿執筆、挿図・図版作成、編集を行い、発掘調査報告書を刊行した。



第３図　分布調査・発掘調査対象区域（S＝1/7,500）

分布調査（平成２年度）

分布調査（平成３年度）

貝田遺跡第１次発掘調査（平成３年度）

貝田遺跡第３次発掘調査（平成４年度）

貝田遺跡工事立会（平成４年度）

貝田Ｃ遺跡発掘調査（平成４年度）

発掘調査現地説明会（平成４年度）

整理作業（平成５年度）

第Ⅲ章　貝田遺跡の第１次発掘調査

第１節　調査の概要

貝田遺跡の第１次発掘調査は、丘陵の裾付近を東西方向に走るパイプラインを敷設する区域と、それと直交して南北方向に伸びる排水路設置区域が対象になった。調査面積はパイプライン区域が掘削幅約１ｍで延長約120ｍの約120㎡、排水路区域が掘削幅２ｍで延長約25ｍの約50㎡、合計して約170㎡を測る。パイプライン区域については既設の農道や町道があるため連続した調査区にできず、調査区を分割して設定した。調査区は、東端から排水路との交点まで（パイプライン最西調査区）、交点から町道の張り出しの東端に当たるまで（パイプライン最東調査区）、張り出しの西端から農作業道まで（パイプライン西調査区）、農作業道から西端まで（パイプライン最西調査区）の４箇所に分かれることになった。排水路調査区をあわせて計５箇所の調査区を設定して発掘調査を行っている。

各調査区の層序は東部では概ね上位から耕作土、暗灰色土、青灰色砂となる。暗灰色土と土質的にほぼ共通する遺物包含層は均一な堆積ではなく、排水路調査区で認められるが、その他の調査区では不明確になる。パイプライン西調査区では耕作土の直下でベース土と思われる黄褐色砂質土が露呈しており、かなり削平を受けていると見られる。遺跡が立地する丘陵の張り出し部分と思われる。パイプライン最西調査区では盛砂、灰褐色砂、腐植土となる。腐植土層は数十cm以上の層厚を持つことがたちわりで確認されており、一応のベース面と理解できる。非常に湿地あるいは沼沢地的な堆積であろう。近現代の時期らしい竹敷きの暗渠はほぼこのレベルで確認された。各調査区のベース面の標高は5.2ｍ前後を測るが、細かく見るとパイプライン西調査区を挟んで東西へ落ち込んでいく地形がわかる。パイプライン最西調査区では落ち込みが激しく、第５図⑪の地点では4.7ｍ前後を測っている。谷あるいは沼沢の中央部への落ち込みと思われる。各調査区とも遺構・遺物はきわめて希薄な分布状況であった。

発掘調査は平田天秋（当時埋蔵文化財センター調査第一課長）、中島俊一（同主査）の指導の下で、谷口克好（現門前町教育委員会社会教育課主事）の助力を得た。調査期間、面積、担当者、作業員は下記の通りである。

調査期間　平成３年11月28日～12月９日

調査面積　170㎡

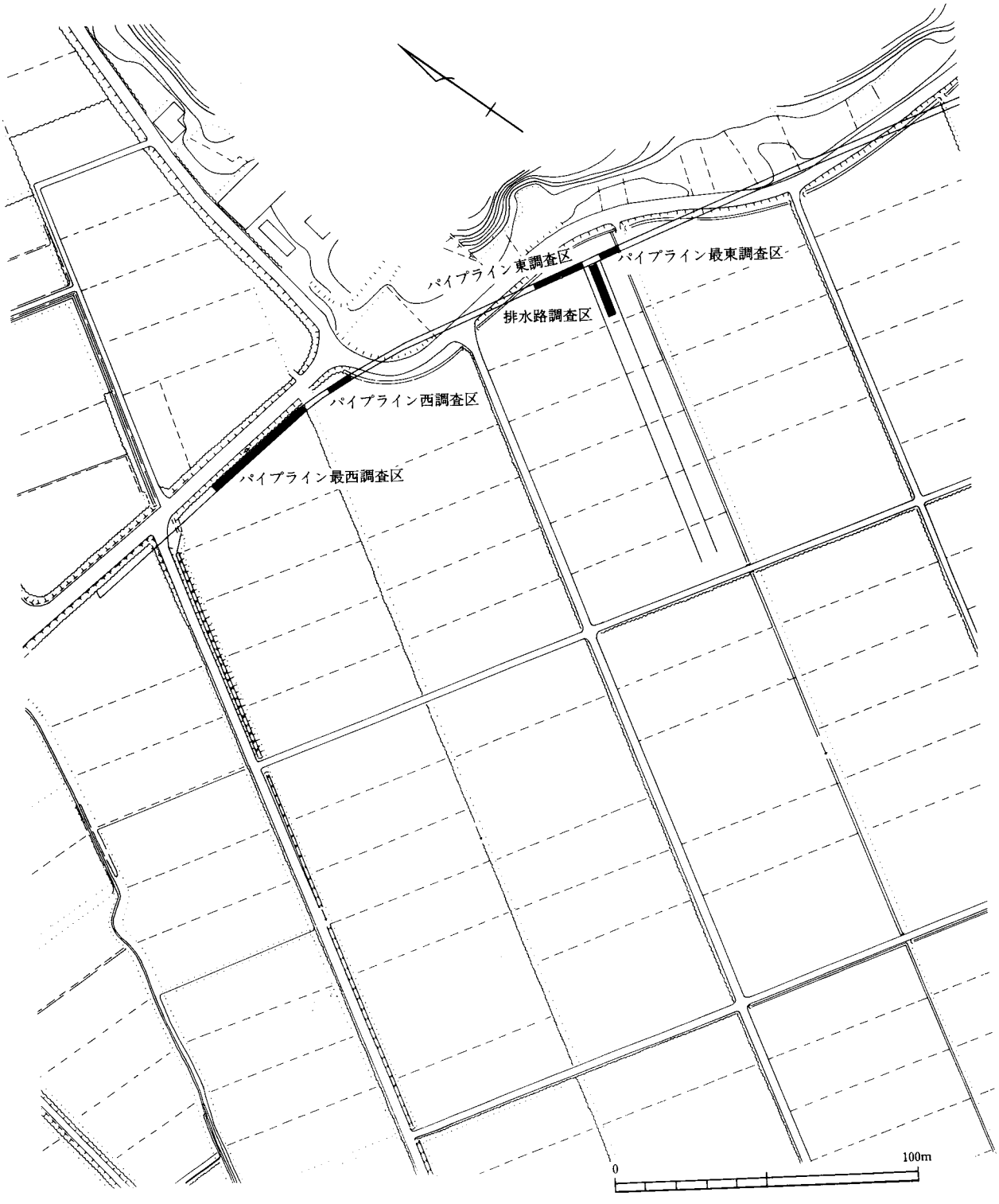
調査担当　垣内光次郎、　安　英樹

作 業 員　篠田信子、高京子、館きよい、西ハル、船木米子（富来町貝田地区）

第２節　遺構と遺物

遺構は、明確なものはパイプライン最東調査区でピットを確認したのみである。ピットは調査区の西へ寄って位置しており、遺構の北部は調査区外へ出ている。よって全形等は不明、規模は検出面で現存最大長76cm、深さ最大14cmを測る。覆土は暗灰色粘土の単層である。遺物は覆土中より古墳時代の土師器高杯（第５図１）が出土している。

遺物は弥生土器、土師器、須恵器、中世土師器、陶磁器が数破片ずつ出土しているが、遺構に伴うものはほとんどない。図化できたものは第５図１～５の５点のみである。１はパイプライン最東調査区ピットから出土した土師器の高杯である。第１次発掘調査では唯一遺構に伴う資料である。杯部は直線的で、脚部は中膨らみせず、ほぼ真っ直ぐに伸びる。脚端は擬口縁状を呈して折れており、裾の形態は不明である。厚手で器面にミガキ調整



第4図　調査区の位置（S＝1/2,000）

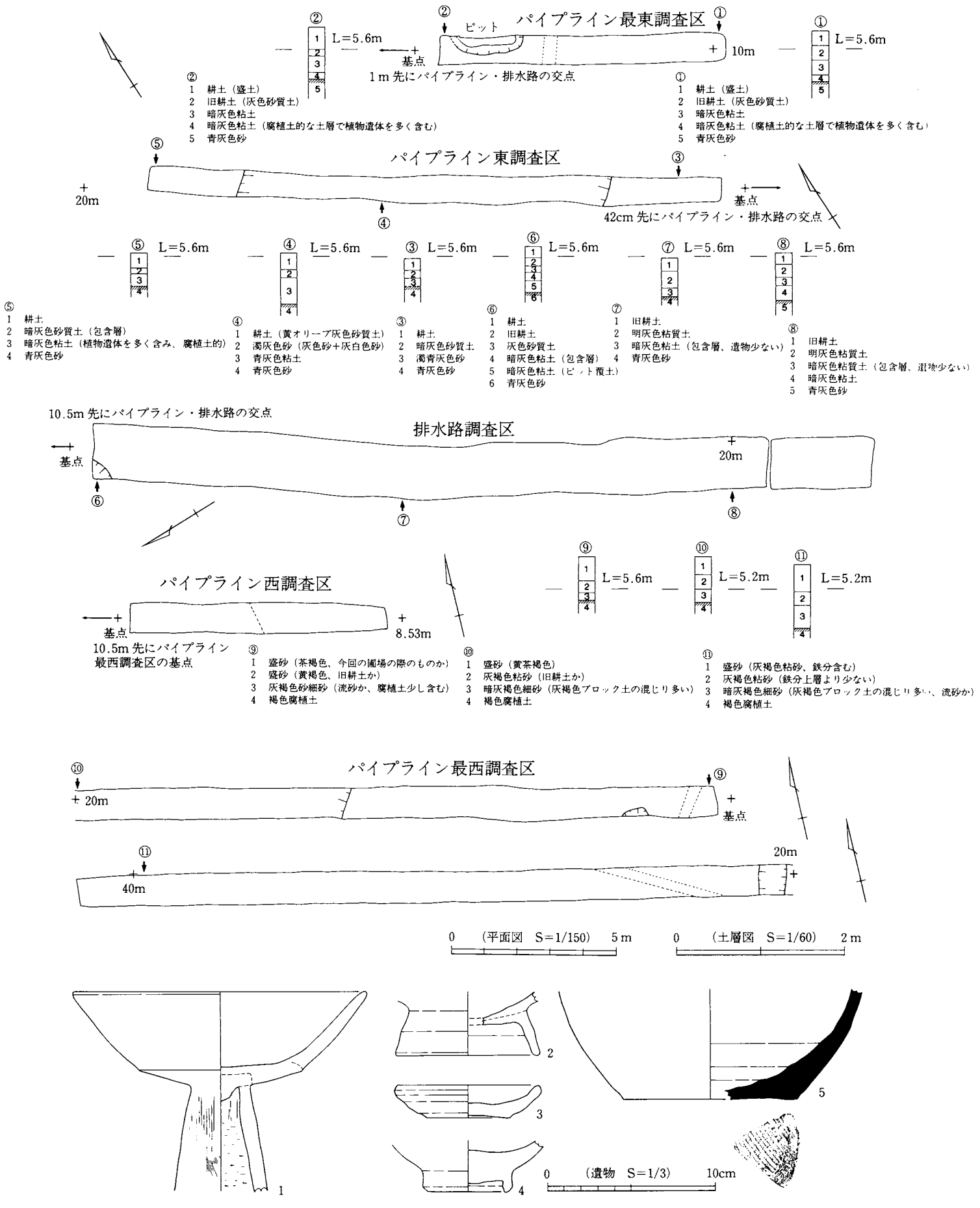
が見られず、タテハケ調整痕を残している。古墳中期頃のものであろう。２はパイプライン東調査区出土の土師器の底部であり、台高が大きいタイプの有台皿と思われる。平安後期のものであう。３は排土中から出土した中世土師器であり、無台小皿である。全体に摩耗しており、胎土は石英・長石等の微砂礫を多く含んでいる。12世紀代のものであろう。４・５はパイプライン最西調査区出土の陶磁器。４は青磁の底部であり、碗と思われる。内端で接地する高台を持ち、光沢に乏しいくすんだライトグリーンの釉調で、貫入が見られる。外底面は無釉である。龍泉窯系で、15世紀代のものであろう[7]。５は珠洲の底部で、片口鉢と思われる。身が深そうな器形で、内面には卸目が見られないようであり、外底面には糸切り痕が見られ、おそらく静止糸切りであろう。内面は滑らかになっており、使用によって摩耗した可能性がある。内面と断面に黒色の油脂状の被膜が付着しており、おそらく漆接ぎの痕跡であろう。吉岡編年の珠洲Ⅰ期[8]、12世紀後半代のものであろう。

第３節　小　結

貝田遺跡の第１次発掘調査で得られた遺構・遺物はごくわずかであり、各調査区は遺跡が立地すると思われる丘陵に近接するが、パイプライン西調査区を除いては低湿地あるいは沼沢地に位置する状況が示されていよう。遺物の時期は古墳中期、古代末から中世に位置付けられる。それぞれの時期は、東に隣接する第２次・３次発掘調査区での多量の出土遺物の中に非常に多く認められ、貝田遺跡の中心的な時期と推定されるものにほぼ一致する。第１次発掘調査区で確認された遺構・遺物は後述する第２次・３次発掘調査区と比較した場合、量的には比べものにならないくらい少ないが、その差異は逆に貝田遺跡の性格、構成を考える上で重要である。すなわち貝田遺跡は南東部で遺構が明確、遺物が多く、南西部はその逆のようである。そして第１次発掘調査区は南西部でもさらに縁辺に相当するものと思われる。貝田遺跡の南東部の状況については次章から記述される第２次・３次発掘調査の成果から順次検討していきたい。

第２表　貝田遺跡第１次発掘調査出土遺物一覧

挿図No.	遺物種類	器　種	出　土　遺　構	実測No.	備　考
第５図１	土師器	高杯	パイプライン最東調査区ピット	D 119	
2	土師器	有台皿	パイプライン東調査区	D 117	
3	中世土師器	無台小皿	調査区不明	D 116	
4	青磁	碗	パイプライン最西調査区	D 120	
5	珠洲	片口鉢	パイプライン最西調査区	D 121	



第5図　調査区実測図（S＝1/150、S＝1/60）・出土遺物実測図（S＝1/3）

第Ⅳ章　貝田遺跡の第２次発掘調査

第１節　調査の概要

第２次発掘調査の調査区は新たに確認された貝田遺跡の南東部であり、主対象はパイプライン敷設箇所である。調査期間、面積、担当者、作業員は下記の通りである。

調査期間　平成４年２月６日～３月11日

調査面積　110m²

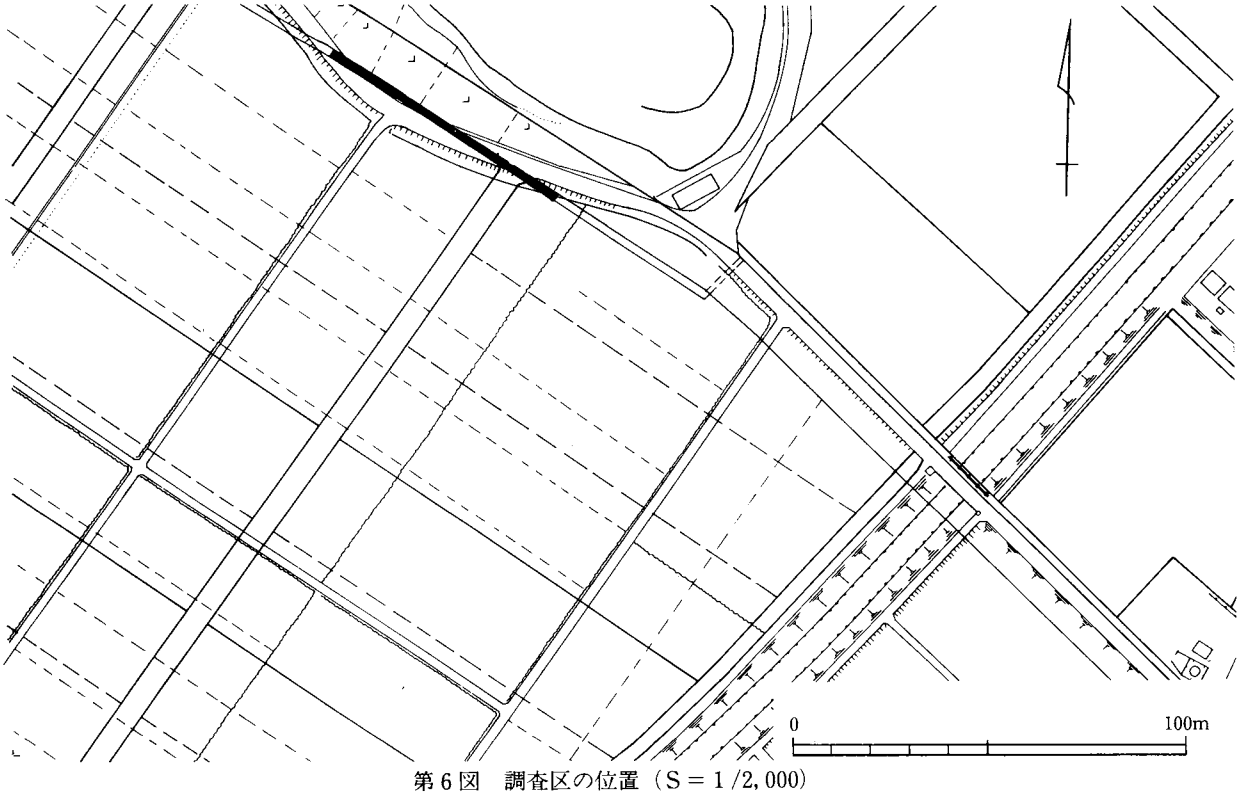
調査担当　湯尻修平、平田天秋、西野秀和、中島俊一、小嶋芳孝、福島正実、栃木英道、松山和彦、木立雅朗、冨田和気夫、土屋宣雄、安英樹、柿田祐司

作 業 員　貝崎伸次、貝崎輝子、篠田信子、高佐一、高京子、館きよい、西ハル、浜田清之、船木米子、坊富太郎（富来町貝田地区）

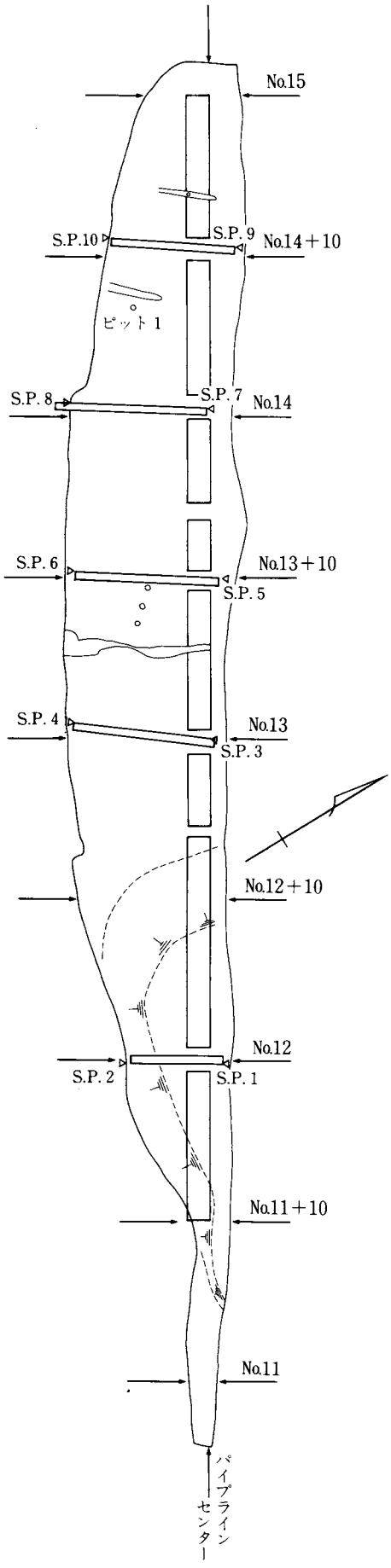
調査は、まず重機によって調査区の表土除去を行った後、その面で確認できる遺構を調査した。その後、主対象となるパイプラインの敷設箇所に対して調査を行った。調査区は層序確認のため、斜面に直交する方向（パイプライン埋設部分）に幅約1.5mで設定し約70m、斜面に平行する方向（パイプラインに直交）に５本のトレンチを入れた。パイプライン部分の調査は、幅約1.5mの限られた範囲であったということ、またパイプライン敷設レベルまでの調査ということもあり、充分な調査とは言えないかもしれない。発掘作業が冬期に行われたということもあってか、通常の時期でも軟弱な地盤がさらに軟弱となり、調査自体も困難をきわめた。

パイプライン敷設区域を主たる調査区とするため、全ての調査はパイプラインを基準として行っている。例えば遺物の取り上げに対してもその基準はパイプラインのある一点からの距離ということになる。例えばNo.12地区というのは基準点から12mの距離にある一点を指し、かつNo.12＋10（No.12から10mの距離にある点）までの間の部分を指すこととする。ともかくも、第３次調査につなげるべく調査を行った。

以下、層序・遺構・遺物の説明に対しても上記の地区設定によっている。



第６図　調査区の位置（S＝1/2,000）



第７図　調査区全体図（S＝1/400）

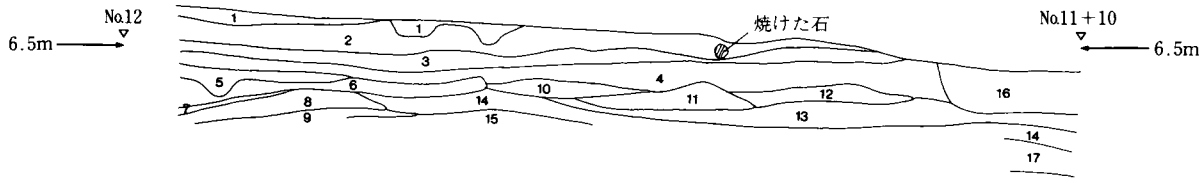
第２節　層　序

層序は基本的には上層が鉄分を多く含んだ赤褐色ないし(灰)褐色の砂質土層、中層が(暗)灰色の粘質土層、下層がピートと灰色砂の互層である。土層の堆積状況から、丘陵斜面であるためか幾度かの崩落を被ったとみられることが判明した。また、そういった傾斜地に生活するために、整地も行っているとみられ、かなり複雑な堆積状況を示す。よって、各土層に含まれる遺物も、上層に下層よりも古い遺物が多いといった状況が生じている。遺物からのみみれば、時代的な層序の逆転現象を起こしている。

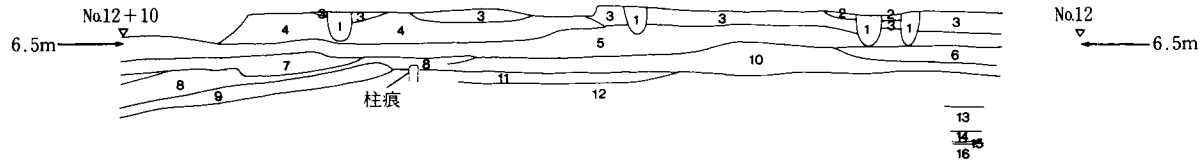
斜面に直交する方向の土層からは次のようなことがいえる。すなわち、No.11＋10～No.12の地区では、灰色粘質土層の堆積がみられず赤褐色ないし灰褐色系の砂質土層の下はピートと灰色砂の互層となる。この下層も他の地区に比較すればレベル的にやや高いことから、この部分がやや小高いところであったと推測される。この下層の上に弥生時代後期の土器を多量に含んだ層があることから、下層が形成されたのはそれ以前であるといえる。

中層とした灰色粘質土を主とする層は、No.12＋10～No.15地区に主にみられる。弥生時代後期以後中世にいたる間に形成されたものの可能性が出土遺物からみても推定できる。上層の赤褐色ないし褐色系の鉄分を多く含んだ層は全地区で認められるが、全て同時期に堆積したものではないと考えている。それは前にも述べたが、自然崩落を起源とするものもあれば人為的な整地活動を起源とするものもあると推測しているからである。その整地が行われた時期はおそらく中世段階以降であると思われる。そういったことによって、土層図でみるような複雑な堆積になったものと考えられる。

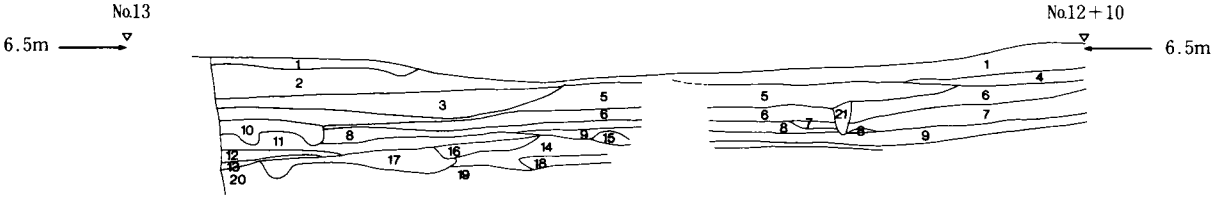
次に斜面に対して平行に入れたトレンチの土層をみると、炭を多く含んだ層が一つの鍵層となる。トレンチを入れた部分の全ての土層に確認できるが、おそらくこの炭層は同一の層ではないことが考えられる。また、斜面上方から斜めに堆積することから、ある時期の生活面から斜面に向かって捨てられた遺物や土などによって形成された層である可能性も推定できることをつけ加えておきたい。仮にそのことが言えるとすれば、その炭層の上に別の層が形成されるごとに、整地ないしは自然崩落が起こっていたことが考えられる。



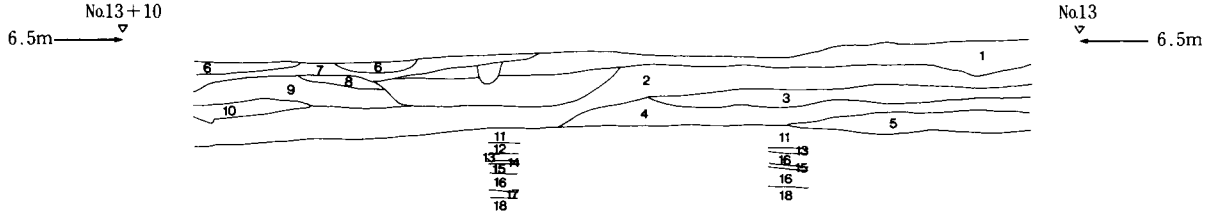
1．暗灰褐色砂層（炭・土器・鉄分混入）
2．灰褐色砂層（１層より炭少ない、鉄分・土器少量含む）
3．褐色砂層（炭・鉄分少ない）
4．灰褐色砂層（炭・鉄分とも含むが、２層よりも明るい）
5．黄褐色砂層（鉄分多い）
6．黄灰色砂層（粗い砂、鉄分含む）
7．灰色粘砂層（炭含む）
8．灰色粘質シルト（鉄分・炭少量含む）
9．黄灰色粘質粗砂層（鉄分含む）
10．暗乳灰色砂層（炭・鉄分含む）
11．黄褐色砂層（灰砂、炭含む）
12．10層と同じ（炭がやや多い）
13．灰色粘質粗砂層（鉄分少量）
14．黄色砂層（鉄分多い、炭は含まない）
15．灰色粘質砂層（粗い砂、炭を含む、７層よりも明るい）
16．明灰褐色砂層（鉄分・炭含む、攪乱？）
17．オリーブ灰色粘質土（炭含む）



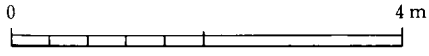
1．暗灰褐色シルト質砂（土師器片多い、炭含む）
2．濁灰砂
3．灰褐色砂（炭・土器・鉄分・マンガン含む、しまりよい）
4．黄褐色シルト質砂（灰シルト、炭・土器含む、部分的にマンガンが多い、しまりよい）
5．暗灰褐色砂（炭・土器・鉄分・マンガン含む、しまりよい）
6．赤茶褐色砂
7．暗灰褐色砂
8．暗灰色シルト質砂（土器・炭含む）
9．黒色砂質シルト（土器最も多い、炭含む）
10．赤褐色シルト質砂（かたい鉄分含む）
11．灰色シルト質砂
12．オリーブ灰色砂質シルト（シルト質砂）
13．淡茶褐色砂質シルト（ピート分含む）
14．灰色砂
15．茶褐色ピート層
16．灰色砂層



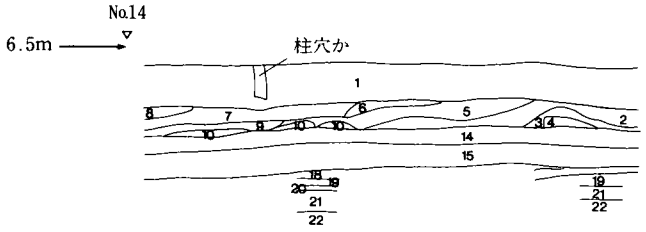
1．灰褐色砂層（赤褐色土・鉄分・炭・土器含む）
2．灰色シルト質砂層（炭・白灰色砂ブロック・土器含む、３・４層より暗い）
3．（乳）灰色砂質シルト（ピート気あり、炭・土器含む）
4．暗灰褐色砂層
5．（オリーブ）灰色砂層（白灰色小ブロック混じり）
6．灰色シルト質砂層（炭、暗灰色シルト混じり、土器多量に含む）
7．暗灰色シルト質砂層（土器・炭含む）
8．オリーブ灰色砂層（暗灰色シルト、炭・土器含む）
9．黒灰色砂質シルト層（土器最も多い、炭含む）
10．黒灰色シルト層
11．茶褐色ピート層
12．茶褐色ピートと灰色砂の互層
13．不明
14．茶褐色ピート層
15．不明
16．灰色砂層（ピート混じる、土器片はいる）
17．灰色砂層（ピート層状に混じる、土器含む）
18．灰色砂層（ピートの互層、木質残る）
19．茶褐色ピート層
20．茶褐色ピート層
21．暗乳灰色砂質シルト

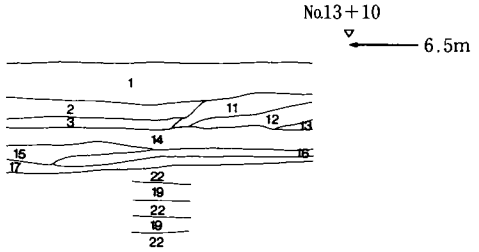


1．灰褐色砂層（赤褐色混じり）
2．灰色シルト質砂層（炭粒含む）
3．暗オリーブ灰色粘質砂層（炭粒含む）
4．オリーブ灰色粘質砂層（粘性３層より増す、炭粒含まない）
5．暗灰色シルト層（炭粒・土器含む）
6．鉄分と暗灰色砂の混層
7．赤褐色鉄分層
8．黄細砂ブロックと暗灰褐色砂の混層（黄細砂が大半しめる）
9．暗灰褐色砂層（黄細砂ブロック斑状に少しはいる）
10．９層より黄細砂多く含む
11．ベース質灰褐色シルト
12．暗灰色粘質シルト層（ピート質である）
13．灰白色砂層
14．暗灰色濁砂層
15．灰色砂層
16．ピート混じり灰色砂層（木質残る、土器小片含む）
17．花崗岩質灰粗砂層
18．ピート層

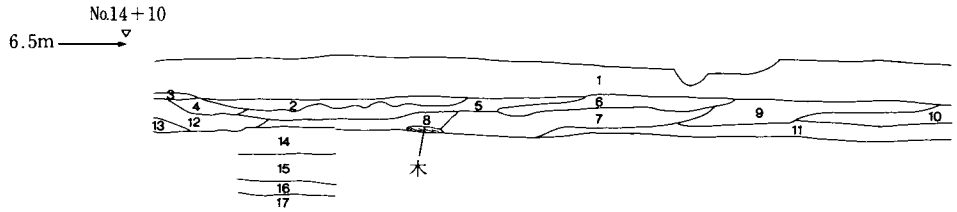


第８図　土層断面図(1)（S＝1/80）

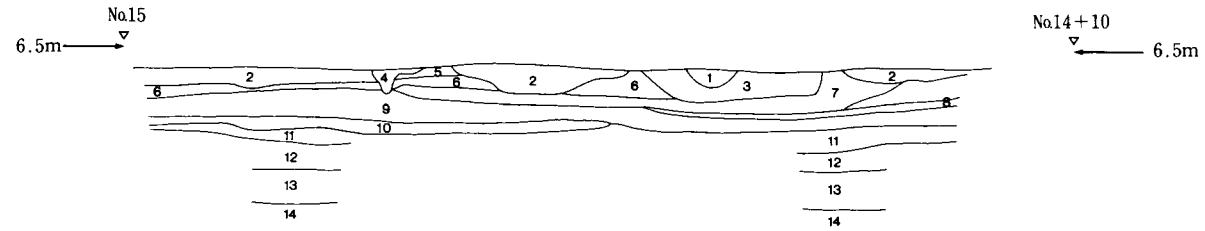




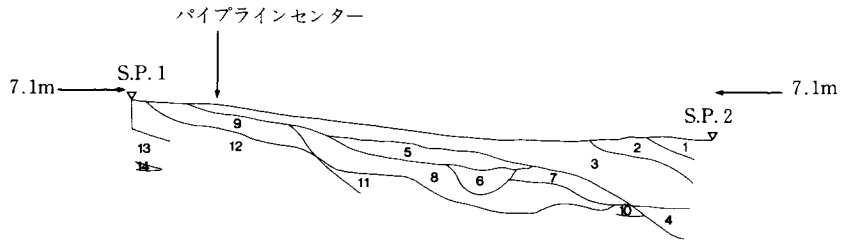
1．鉄分と暗灰色砂混層
2．暗灰褐色砂と灰色層・乳灰色砂の混層
3．暗灰色粘砂層（土器片含む）
4．2層と同質（乳灰色砂ブロック多い）
5．暗灰色粘砂層（3層と似る、乳灰色砂ブロック含む）
6．黄砂と暗灰色砂、乳灰色砂ブロック含む）
7．6層と同質だがブロックが小さくよく混じりあっている、粘性弱い
8．黄砂・乳灰砂が7層よりもっと多く混じる
9．灰色粗砂層（暗灰色粘土ブロック含む）
10．暗灰色粘土層（灰色粗砂混じる）
11．暗灰褐色砂層（黄細砂ブロック斑状に少しはいる）
12．9層より黄細砂多く含む
13．暗灰色褐色砂と灰色シルトの混層
14．暗灰色強粘性粗砂層（炭粒・土器少し含む）
15．11層よりさらに粘性増す（炭粒・土器少し含む）
16．灰色粘土ブロックと15層の混層
17．暗褐色粘質層（ピート層）
18．濁砂層
19．ピート質砂層
20．灰色砂層
21．ピート層
22．灰色粘質砂層



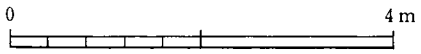
1．鉄分と暗灰色砂混層
2．灰褐色粘質シルト層（黄砂ブロック斑状含む）
3．鉄分層（土器片混じりやや黒みがかる）
4．灰褐色粘質シルト砂層
5．乳灰色砂層（暗灰色粘土ブロックはいる）
6．灰褐色粘質シルト砂層（土器含む）
7．6層と同質（木含む）
8．暗灰色粘土層（木含む）
9．6層と同質（土器含む）
10．暗灰色粘土層
11．乳灰色砂層（暗灰色粘土ブロック少量はいる）
12．灰褐色粘質シルト砂（乳灰色粘土ブロック斑状に含む）
13．暗灰色粘土（乳灰色粘土ブロック斑状に含む）
14．暗灰色強粘性粗砂層（炭・土器少し含む）
15．14層よりさらに粘性増す（炭粒・土器少し含む）
16．灰色砂層
17．ピート層



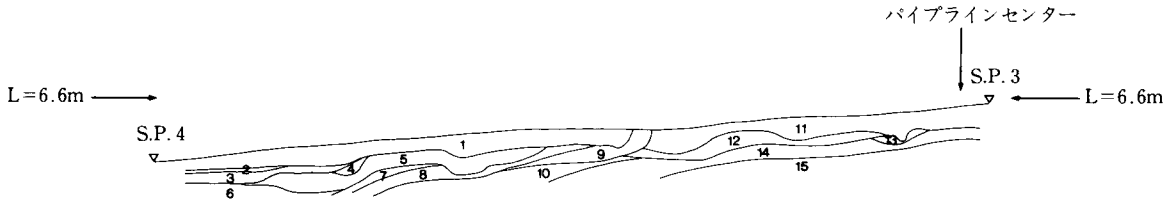
1．黄褐色砂層（鉄分少量含む）
2．暗灰褐色砂層（鉄分混じる、土器少量含む）
3．暗灰褐色砂層（炭粒・土器含む、遺構か）
4．暗灰色砂層（炭粒少し含む）
5．灰褐色砂層（4層よりやや明るい）
6．濁赤褐色砂層
7．赤褐色砂層（乳灰色ブロック砂混じる）
8．赤褐色砂層（鉄分含む、粒が粗い）
9．乳灰色粘土ブロック入る）
10．灰緑色粘質砂層（粒が粗い）
11．暗灰色粘土層（木・土器少量含む）
12．暗灰色粘土層（やや褐色がかる、粘性が強い、土器少量含む）
13．炭混じり暗灰色粘土層（粘性が12層より強く、土器少量含む）
14．灰色砂層（ピート混じる）



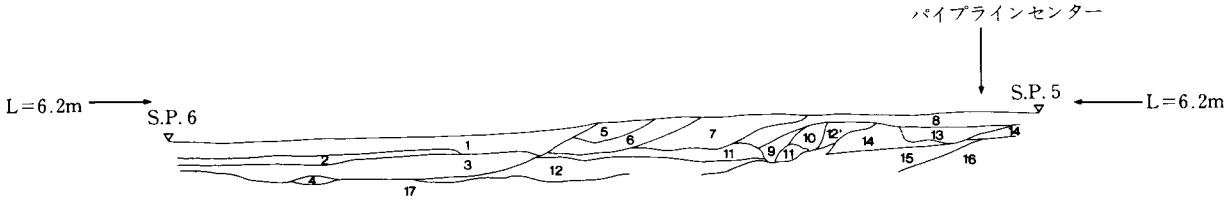
1．灰色シルト層（茶灰色砂ブロック状混入）
2．淡灰褐色砂質シルト層（炭化物・土器含む、黄灰砂ブロック少量含む）
3．暗灰色シルト層（炭化物・土器最も多い）
4．青灰色シルト層（炭化物・土器少量含む）
5．2層と同じ
6．明灰褐色砂層（シルト質砂、溝状遺構）
7．淡灰色砂質シルト層（鉄分・マンガン分を含む）
8．淡褐色シルト質砂層（7層より褐色強い、マンガン分多くややしまる、炭化物・土器含む）
9．明茶褐色シルト質砂層（炭化物・土器少量含む）
10．赤褐色砂質シルト層（鉄分多くかたくしまっている）
11．8層と同じだが色淡い（土器含む）
12．灰褐色シルト質砂層（炭化物・土器少量含む）
13．赤褐色シルト質砂層
14．淡灰色砂層
15．淡青灰色シルト質砂層



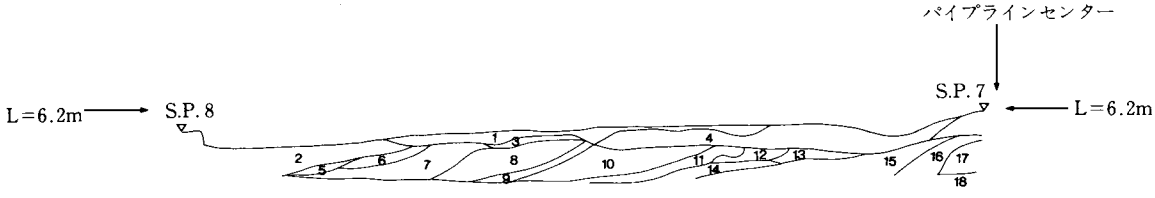
第9図　土層断面図(2)（S＝1/80）



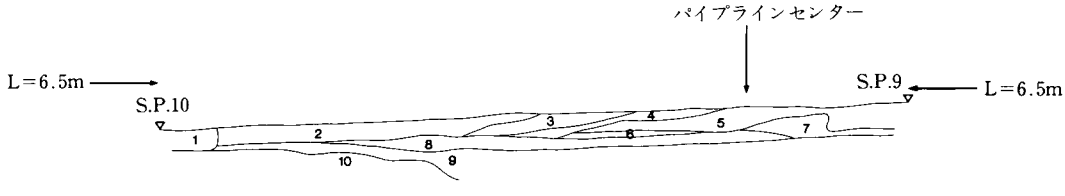
1．暗灰褐色シルト質砂層（炭・土器含む）
2．赤褐色砂層（鉄分を多く含む）
3．黒灰色砂質シルト層（炭・土器を多く含む）
4．青灰シルト混入濁赤褐色砂層（５層に３層が層状に混入）
5．黄灰色砂層（上面部分は鉄分多く含み赤褐色）
6．灰色シルト層（炭・木片含む、ピート分強い）
7．乳灰色砂層
8．黒色シルト層（炭多量に含む）
9．赤褐色砂層（鉄分多量に含む）
10．乳灰色砂層（灰色シルトブロック状混入）
11．淡灰褐色砂層（炭・鉄分含む、斑状に赤褐色）
12．淡灰色砂層（炭・土器少量含む）
13．灰色砂層（遺構か）
14．淡青灰色砂層
15．乳青灰色砂質シルト層（炭含む）



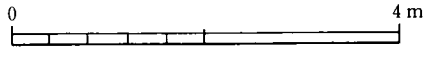
1．濁灰褐色砂質シルト層（下面に鉄分層あり、炭・土器含む）
2．乳灰色シルト質砂層（炭多い、土器含む）
3．暗青灰色砂質シルト層（炭多い、土器含む）
4．白灰色砂層
5．灰褐色砂層（炭少量含む、鉄分・マンガン粒含む）
6．淡灰色シルト質砂層（５層混入、炭含む）
7．５層と同じだがやや淡い
8．６層と同じ（炭・土器含む）
9．暗灰褐色シルト質砂層（炭含む）
10．灰褐色シルト質砂層（炭含む）
11．赤褐色シルト質砂層（鉄分強い）
12．乳灰色シルト質砂層（炭・暗灰色シルト混じる）
12′．黒色シルト層（炭多い）
13．８層と同じだが灰色シルト、14層がブロック状に混じる（炭含む）
14．灰褐色～赤褐色シルト質砂層
15．青灰色シルト混じり乳オリーブ灰シルト質砂層
16．暗青灰色砂質シルト層（灰色砂の小ブロック含む）
17．暗灰色シルト層（ピート質でややオリーブ色がかる）



1．淡灰褐色砂層（炭含む）
2．青灰色シルト質砂層（炭・砂の小ブロック含む）
3．赤褐色シルト質砂層（鉄分多くしまりよい）
4．３層と同じだが山側で灰色シルト混じる
5．黒色シルト層（炭・木製品多い）
6．濁乳灰色シルト質砂層（青灰色シルト混じり）
7．（暗）青灰色砂質シルト層（炭多い）
8．（乳）灰色砂層（炭細粒含む）
9．黒色シルト層（炭多い）
10．８層と同じ
11．淡黒色シルト層（炭・木製品？含む）
12．８層と同じ
13．暗乳灰色砂層（15層混じる）
14．明乳灰色シルト質砂層
15．青灰色砂質シルト（灰砂ブロック混じりで16層より淡い）
16．青灰色シルト層（炭含）
17．濁乳灰色シルト質砂層（灰色シルトブロック混じり）
18．乳灰色ピート質シルト層



1．乳青灰色砂質シルト層（耕土か、土器含む）
2．褐色シルト質砂層（鉄分多い、炭・土器少量含む）
3．黄褐色砂層（炭・土器少量含む）
4．灰褐色砂層（炭含む、マンガン粒含む）
5．２層と同じ（炭・土器少量含む）
6．淡赤褐色シルト質砂層（鉄分多く含む、マンガンを含む）
7．３層と同じ（炭・土器、鉄分・マンガン含む）
8．淡オリーブ灰色シルト質砂層
9．黒色砂質シルト層（炭・土器含む、灰色シルト質砂多量混入）
10．灰色シルト質砂層（オリーブ灰色砂多量混入、炭・土器含む）



第10図　土層断面図(3)（S＝1/80）

第３節　遺構と遺物

１　遺構

パイプライン敷設箇所では、遺構を検出していない。ただし、土層断面を観察する限りにおいては、ピットらしい痕跡が上層とした赤褐色あるいは褐色系の砂質土層にかなり確認できる。

No.13地区ではピット３基、溝１条を検出している。No.14地区ではピット１基と溝１条を検出している。遺物のところで述べるが、このピット１からは多数の中世の土師器皿が出土している。No.14＋10地区ではピット１基と溝１条を検出している。これらのピットと溝の性格については不明であるが、溝は遺跡の立地から考えて排水的な機能を持ったもの、ピットはNo.13地区にあるものについては建物の柱穴になる可能性が高いものと考えられる。No.14＋10のものについては土師器皿の一括出土から、祭祀的(地鎮？)な意味あいを持つものと考えられよう。

２　遺物

調査で出土した遺物は、弥生時代から近世までの時間幅があり連綿とした遺跡のつながりを追えそうである。しかし実際には、遺物の少ない時期あるいは全く存在していない時期が少なからず存在し、遺跡の盛衰があったことがわかる。その原因については現時点では明らかにしがたいが、自然環境の変化などが考えられよう。

前節の層序でも述べたが、土層は遺跡の立地条件もあり、かなり複雑な堆積状況を示している。そのため、調査段階では層位ごとに遺物を取りあげたつもりだが、前述のような状況もあり、層位的に遺物の前後関係を考えることは難しい。実際に層位的に上位の土層に弥生土器が多く含まれ、下位の土層に珠洲焼などの中世の遺物が含まれるといった状況もある。よってここでは、層位的な問題は脇に置くこととして、型式的分類によった区分から各時代ごとの遺物について述べることとする。

（１）弥生時代の遺物（第11図・第12図）

この時代の遺物のほとんどは、前節で上層とした赤褐色・（灰）褐色系の砂質土層からの出土であり、丘陵上部からの自然崩落ないし人為的な整地による流れ込みと考えられる。

第11図１・２は高杯形土器の口縁部である。１は口径25cm前後、２は口径20cm前後を測る。それぞれ胎土には径１mm程度の砂礫を含んでいる。３は器台の口縁部である。口径22cm前後を測る。外面には擬凹線を、内面には磨き調整を施している。胎土にはきわめて細かい白色の砂粒を含み、粘土は精選されたものである。この破片の断面部は、いわゆるサンドイッチ状に見え、内部までしっかり火が通っていないことがわかる。４は無頸壷である。全形は知り得ないが、脚が付くタイプと思われる。体部外面には磨き調整を施している。５は有段鉢。内外面とも赤彩を施してる可能性がある。６～10は高杯形土器の脚部。６は杯部の下半に磨き調整を施す。７は赤彩されるものである。杯部は内外面とも赤彩されているようである。８は杯部から伸びる中空の棒状部分しか残っていないため詳細はよくわからない。９は透かし孔を３つもつ。脚部内面はハケメ調整を施す。10は透かし孔を４つもつ。段をもつタイプであり、その部分に刻みを入れるものである。11は長胴の短頸壷。内面にはケズリ、外面にはハケメ調整を施す。12は小型壷。粘土の継ぎ目がはっきりと確認でき、内面下半には指による圧痕がみられる。13は無頸壷。外面を丁寧に磨き、赤彩を施す。内面下半にはハケメ調整を、上半と底部内面には指によるナデ痕がみられる。14は壷の底部。内外面とも同一の工具によるとみられる細かいハケメ調整が施されている。外底面にはヘラ状の工具によって焼成前に「×」印状に見えるものが入れられている。

第12図１～４、６～12は甕形土器。１は口縁部を引き伸ばして、端部に面をとる。面をとった部分はナデ以外の調整を施さない。２・10・11は口縁端部に面をもち、擬凹線状の沈線を入れる。２・10は頸部の内面に面をもつ。調整のわかるものでは、２・10は外面ハケメ調整、内面ケズリ調整を施している。３・４は有段口縁で擬凹線をもつ。４は頸部がかなり伸びる。調整では外面をハケメ調整した後、軽くナデている。６・７は有段口縁で

無文のもので、口縁部内面にはっきりとした段をもたないものである。８・９は有段口縁で無文のもので、はっきりとした段をもつ。全体の形がわかる９では、口径約15cm、器高約22cmを測る。調整は外面にハケメ調整を施し、内面はケズリ調整を施す。粘土の継ぎ目が明瞭に見える。12は有段状の口縁部をもつ。段はほとんどなく、口縁部に沈線状のものが１条巡る。５は広口壷。口縁端部を面取り、擬凹線を入れる。体部が球胴になる可能性が考えられる。13は把手。おそらく鉢についていたものと考えられる。

最後に少し胎土について触れておくと、これらの土器にはかなりの量の砂礫が含まれているが、粘土自体はかなり良質のものを使用していると思われる。これらの弥生土器は、後期後半を中心とする時期と考えられよう。

（２）古墳時代の遺物（第13図～第15図１・２）

第13図１～７は高杯。１は口径17.5cm、器高13.2cm、脚径11.1cmを測るもので、脚部はやや膨らみながら外に大きく開く。２は口径17.4cm、器高14.7cm、脚径10.5cmを測るもので、杯底部と口縁部の境に凸帯状のものをもつ。脚部はやや膨らみながら、外に開く。この脚部は粘土紐を巻き上げて作ったことが確認できる。３は口径17.4cm、器高13.2cm、脚径10.2cmを測るもので、脚部はやや膨らみながら外に開く。調整は杯の底部外面にはケズリ調整を施し、脚部の外面には磨き調整を施す。４は口径17.1cm、器高11.1cm、脚径10.0cmを測り、杯部は脚部の継ぎ目から斜め上方にまっすぐ立ち上がる。脚部はまっすぐ伸び、外に大きく開く。５～７は杯底部と口縁部の境に凸帯状のものが巡るものである。８は小型壷であり、胎土の継ぎ目は明瞭にわかり、口縁部内面には粗いハケメ調整を施す。９は手捏土器。10は甕であり山陰系のものである。調整は外面に口縁部から縦方向の磨き調整を施し、口縁部内面はハケメ調整、体部外面はハケメ調整、体部内面は横方向のケズリ調整を施す。体部内面には粘土紐の継ぎ目が残る。11は甕である。有段の口縁をもち、口縁部は無文である。体部は外面が縦方向のハケメ調整、内面が横方向のハケメ調整を施す。体部内外面ともに粘土紐の継ぎ目が確認できる。

第14図１～８は甕である。それぞれ「くの字」状口縁をもつ。１は表採資料で口縁部のみであり詳細はよくわからない。２は体部内面の下半部におこげ状の炭化物の付着、体部外面には頚部付近まで煤の付着が確認できる。調整は残りが悪くよくわからない。３は体部内面の頚部付近までおこげ状の炭化物の付着、体部外面には口縁端部まで煤の付着が確認できる。調整は体部外面は縦方向のハケメ調整を施し、内面は横方向のハケメ調整を施す。４は体部内面に頚部付近までおこげ状の炭化物の付着、体部外面には口縁部までの煤の付着が確認できる。調整は体部外面に縦方向のハケメ調整を施し、内面にはケズリ調整を施す。５は口径約16cm、器高18.6cmを測る。胴部最大径は体部下半にある。調整は体部内外面ともハケメ調整を施す。６は口径11.4cm、器高約32cmを測る。頚部はまっすく立ち上がり、口縁部は短く開く。調整は体部外面の上半はハケメ調整、下半はケズリ調整を施す。内面は体部下半にケズリ調整を施し、ハケメ調整も確認できる。７は土器表面の磨耗が激しく調整については外面にハケメ調整がかすかに確認できる他はわからない。８は体部外面には頚部付近まで煤の付着が確認できる。調整は体部外面はハケメ調整、内面はケズリ調整を施す。

これら土器の胎土は、壷など一部の精製のものを除けば、基本的に器種による差はほとんどないといって良い。大量に砂礫を含みザラザラとした質感をもつ。粘土自体もやや粗いといった印象を受ける。これらの土器は、漆町編年[9]でいえば漆12・13群土器に相当するものと考えられる。

第15図の１は鼎。調整は底部に手持ちヘラ削りを施す。胎土は緻密でありおそらく和泉陶邑窯産のものと考えられる。時期は５世紀後半ころであろう。陶邑窯の型式でいえば、TK208ないし23型式[10]併行と考えて良いだろう。２は杯身。胎土はきめ細かく、表面には黒色の吹き出しが多く見られる。おそらく在地産であろう。

（３）古代の遺物（第15図３～14）

第15図３は杯蓋。天井部分しか残っていないが、つまみの形態とその胎土などは羽咋市柳田タンワリ１号窯[11]の製品と類似している。４は杯身。口径10.5cm、器高3.3cmを測る。底部にはヘラ切り痕が残る。胎土から能登産であることは間違いないものと思われる。時期は７世紀後半でも古い頃であろう。５は甕の口縁部。口径は25

cm弱を測る。胎土から能登産であると思われる。6はおそらく長頸瓶ないしは平瓶の底部になると思われる。底部には丁寧な回転ヘラ削り調整を施す。胎土には海綿骨片、1mm弱の砂礫が目立つ。産地については、胎土中に海綿骨片が含まれていることを重視すれば羽咋窯跡群産である可能性が高いものと考えられる。能登産であることはまず間違いないだろう。7は高杯の脚部。脚部外面は赤彩、杯部内面は黒色処理を施されている。杯部の底が残存しているが、その外面にはわずかにハケメ調整の痕跡が確認できる。胎土には海綿骨片を多く含む。砂礫はほとんど含まないが、粘土のキメが粗いという印象を受ける。このタイプの土師器は羽咋市四柳白山下遺跡や寺家遺跡[12]などでも出土しており、時期は7世紀後半から8世紀前半の中におさまるものと考えられる。8は杯B蓋。口径12.3cm、器高2.8cmを測る。天井部にはヘラ切り痕が見え、回転ヘラ削り調整は行わずヘラ切り後ナデ調整を施す程度であることがわかる。胎土には海綿骨片を含む。重ね焼きの痕跡が自然釉の付着具合から観察でき、北野氏の分類[13]でいうIIb類にあたる。産地は能登産である可能性が高い。富来・志賀窯跡産の可能性もある。時期は8世紀末ないし9世紀初め頃と考えられる。9は杯A。口径13cm弱、器高2.9cmを測る。体部外面には意図して入れたものかわからないが、ヘラ記号状の「｜」がみえる。胎土には1cm弱の石が混じる。重ね焼きはIII類[13]。10は甕の胴部破片。胎土には砂礫をほとんど含まずきわめて精良である。花塚（内堀）氏の分類[14]による甕の叩き痕は、外面が平行線文E類、内面が同心円文B類になる。11は長甕の口縁部。胎土には1mm程度の砂礫を多く含んでいる。焼きは非常に良くて、須恵器窯で焼かれたものと推定できる。時期は8世紀末ないし9世紀前半と考える。12は瓶類の頸部。大きな長頸瓶か双耳瓶の頸部かもしれない。13・14は双耳瓶。13は体部破片。体部外面には上から4本の沈線が入る。耳はかなり大きく新しい様相をもっている。外面には濃緑色の自然釉がかかる。胎土には非常に細かい砂礫が多く入り、コンクリートの質感に近い。14は体部から頸部まで残る。胎土は13のものに似るが、より粒径の大きい粗砂も顕著に混和されている。底にはいわゆる「亀板」の痕跡が明瞭にみられる。双耳瓶の時期は9世紀後半から10世紀初頭、13は南加賀窯跡群産、14は富来・志賀窯跡産と推定される。

その他図化していないがNo.11＋10地区からは灰釉陶器椀の口縁部破片が出土している。また同じくNo.11＋10地区の茶褐色土層から製塩土器が出土している。平底の製塩土器と思われる。胎土には海綿骨片を多く含む。

（4）中世の遺物（第16図～第19図）

中世の遺物のうち、第16図・第17図1～4はNo.12地区を中心とした部分から、第17図5～12はNo.14地区を中心とした部分から出土している。地区的なまとまりが廃棄のまとまりを示している可能性が高いと考えまとめてみた。時期的なことについては第VII章第2節で詳しく述べることとするのでそちらを参照していただきたい。また、各土器のサイズについては第3～6表の観察表を参考にしてもらいたい。

第16図1～5・18は内面に黒色処理を行う有台椀である。1・18は内面にヘラ磨き調整を施すが、他のものはヘラ磨きを施さない。ただし18のヘラ磨きは粗い。また、1は底部から内湾気味に立ち上がる形態を示す。よって1は調整と形態から他の有台椀に比べ、古い様相を示すものと考えられる。9・19・20は黒色処理をしない有台椀である。黒色処理を行うものとそれほど形態的に差異はないように思われる。1・18・19を除く、全形のわかる有台椀を形態だけで分けるとすれば、底部から直線的に立ち上がるタイプ（2～4・9）と、やや内湾するようなタイプ（5・20）になる。6～8・21～23は無台椀である。形態は直線的なタイプ（8）とやや内湾するタイプ（6・7・21・22）に分けられる。胎土にはそれぞれ赤色酸化粒（シャモット）が目立ち、混和剤として意識して入れていることが考えられる。そのためか全体的に淡い朱色っぽく焼け上がっている。23は大きく外に広がってから、内湾して立ち上がる。胎土には1mm程度の砂礫を大量に含みザラついた質感がある。他のものとは形態、胎土とも異質である。やや古い様相をもつものかもしれない。10～17はIIIである。これらの特徴としては、10～13は口縁部が外反すること、14～17は外反こそしないが口縁端部に面をもたないということが上げられる。胎土の特徴としては、無台椀と同じく赤色酸化粒が目立つことが上げられる。これら有台椀、無台椀、IIIは全て底部糸切りである。

第17図の１・２は無台椀。形態は内湾気味に立ち上がるもので、胎土には赤色酸化粒を含む。３は皿。一見柱状高台風な皿だが、柱状部分が皿内面から空洞になっている。胎土には細かい砂を非常に多く含み、赤色酸化粒も含む。４は無台椀。形態は底部から直線的に立ち上がり口縁部を上方に持ち上げる。底部と口縁部の境目のやや口縁部よりに穿孔がされている。外面から内面に向かって穿孔されたことがわかる。胎土には極めて細かい砂礫が多くみられる。

有台椀と無台椀の直線的なもの、あるいは内湾気味のものをそれぞれ比較すると、高台が付くかつかないかの差であって、形態は非常によく似ていることがわかる。おそらく同一の技術上になり立つ製作者、ないしは同一の製作者によって作られたものと考えて良いといえよう。とすれば、少なくとも二つの系譜があったことが考えられる。ただし胎土のレベルで考えるとそれほど顕著な差は認められない。

第17図の５～12は無台椀である。形態としては直線的に立ち上がるタイプ（６・７～９・11・12）と内湾気味に立ち上がるタイプ（５・10）に分けられる。胎土には赤色酸化粒を含むもののそれほど目立たない。細かい砂礫が多く入り、目立つ砂礫が少なくなっている。13は皿。口縁部には灯明によってできた煤がみられる。14～16は柱状高台のついた皿である。14は柱状となる部分が糸切り後えぐり取られ、輪状高台風になっている。そして内面には灯明によるものと思われる煤が付着している。口縁部だけではなく内面にもびっしりと付着していることから、口縁部に付着するものとは違ったものを燃やした痕跡と考えられる。これら柱状高台の胎土は共通し、細かい砂が多量に入る。これら無台椀、柱状高台の皿は全て底部糸切りである。

第18図１～31は皿である。形態は底部から直線的に立ち上がり、口縁端部を面取るものが大半を占める。その他には、15・16・18のような体部中程で内側にやや折れて、口縁端部にも面をもたないもの、19のコースター形のもの、31のような小型で底部と口縁部の境が明瞭でない丸みをもったものがある。胎土をみると、これらの皿には細かい砂礫が比較的多く入るという特徴をもっていることがわかる。焼きもやや軟らかめで、色調も浅黄橙色を主体とする。これら皿は全て底部糸切りである。ただし31は残りが悪くよくわからない。

第19図１～８はピット１から一括で出土したものである。１～７は皿。形態は共通しており、体部から直線的に立ち上がり、端部に面を取るというものである。８は無台椀である。これも皿と同様な特徴を有している。これらの胎土も共通しており、細かい砂礫が多く入る。同一時期に作られたものとみて間違いないと思われる。

９は白磁の椀で、Ⅳ類に分類されるものである[15]。10～12も白磁であり、壷瓶類になるものと思われる。13・14は龍泉窯系の青磁椀。14は劃花文椀である。割れ口の断面の一部が研磨されたように非常に滑らかな状態になっている。これら青磁は12世紀後半～13世紀前半に位置付けられているものであろう。15～17は珠洲焼。15は甕の口縁部破片である。ナデによって稜線が２本入る。16は壷の肩部で、おそらく四耳壷であろう。17は鉢、残存部分ではおろし目はみられない。いずれも珠洲Ⅰ期[8]の範疇に入るものと考えられる。18は産地不明だが壷の口縁部になると思われる。越前焼の可能性も考えられる。19も産地不明のものである。器種は甕とみられる。外面はケズリないし研磨の調整を施している。内面はおそらくコテ状のものでナデたとみられる痕跡が明瞭に残っている。時期は良くわからないが出土状況からみると、13世紀には降らないと思われる。20は肥前陶器皿である。重ね焼きの痕跡である「砂目」がみえることから17世紀前半と考えられる。底部外面の高台内には「一」の墨書がある。

（５）木製品・石製品・金属製品（第20図）

第20図１は漆器椀。形態的には椀というよりも須恵器の杯に近いタイプであり、川畑誠氏の分類[16]でいう椀Ａ－ｂ類にあたり、それによれば古代のものである可能性が高い。２は漆器皿。底部には高台が剥落したような痕跡が確認できる。漆も高台の痕跡部分より内側には塗られていない。川畑氏の皿Ｂ-ａ類で、時期は中世のものだと思われる。これらの他に漆器は皿状のものが２点出土している。３は曲物の底板。長径13.8cm、短径13.5cmを測る。断面は台形状を呈し、側板を止める木製の目釘が２箇所確認できる。４・５・７・８は不明木製品。８は上

端部が一段薄くなっている。下端部は尖っており、舟形木製品である可能性もある。その他のものはおそらく建築部材になると思われる。そのうち7には刃物傷が確認でき、まな板を転用したものと考えられる。6は箸状木製品。破損しているため全形は知り得ないが、印象として実際に箸として十分に使用に耐えうる太さをもっていると考えられる。9は刀子。現存長は長さ約12cm、幅2.7cm、太いところで厚さ7mmを測る。10は叩き石。石材は輝石安山岩。11は擦り石。石材は凝灰岩質安山岩。

その他図化はしていないが、鉱滓もNo.11地区から出土している。

第4節　小結

調査で得られた結果を簡単にまとめると次のようになるだろう。

土層の堆積状況からは、傾斜地に立地しているということもあり、地盤が安定する期間がそれほど長く続かず、自然崩落ないし人為的な整地を受けたところであることがわかった。とはいえ、かなり長期にわたって人が住み続けたことは遺物の時期的な豊富さから理解することができる。

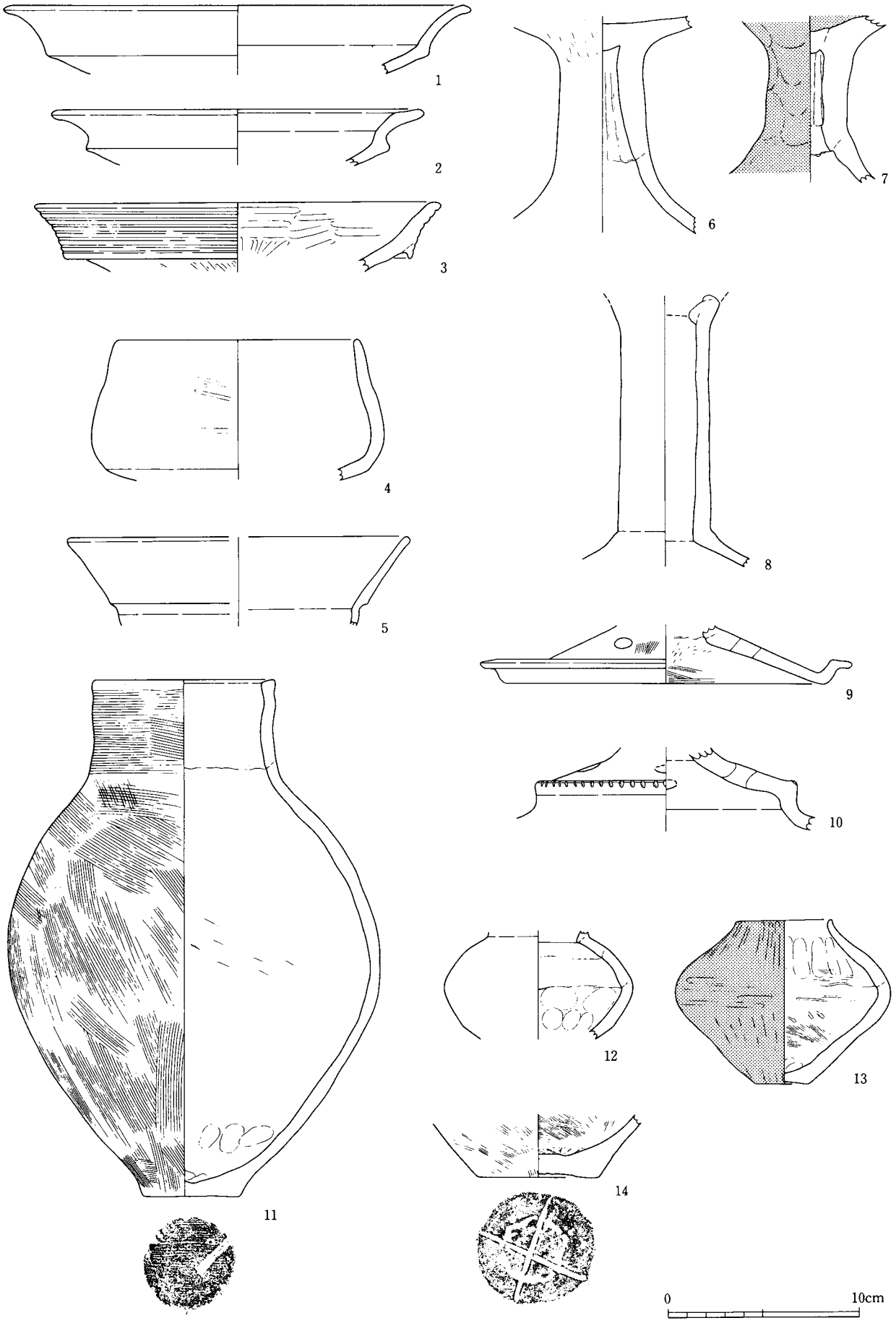
遺構については、この調査では良好な結果は得られていない。ピット4基と溝をわずかに3条検出しただけにとどまった。トレンチを入れた断面にはピットや溝らしきものが、かなり確認できることから、実際にはもう少し存在したと考えられる。これら遺構の時期についてわかるものはほとんどなく、唯一土師器皿が一括で出土したNo.14地区のピット1が12世紀前半と考えられる。

遺物は、弥生時代後期から近世までの幅広い年代のものが出土しているが、中心となるのは弥生時代後期、古墳時代中期、中世となる。弥生時代後期以前を除けば、4世紀、6・7・8世紀、14～16世紀は遺物量が少ない。これらの時期には集落が存在していないか中心が別の場所にあったことが考えられよう。

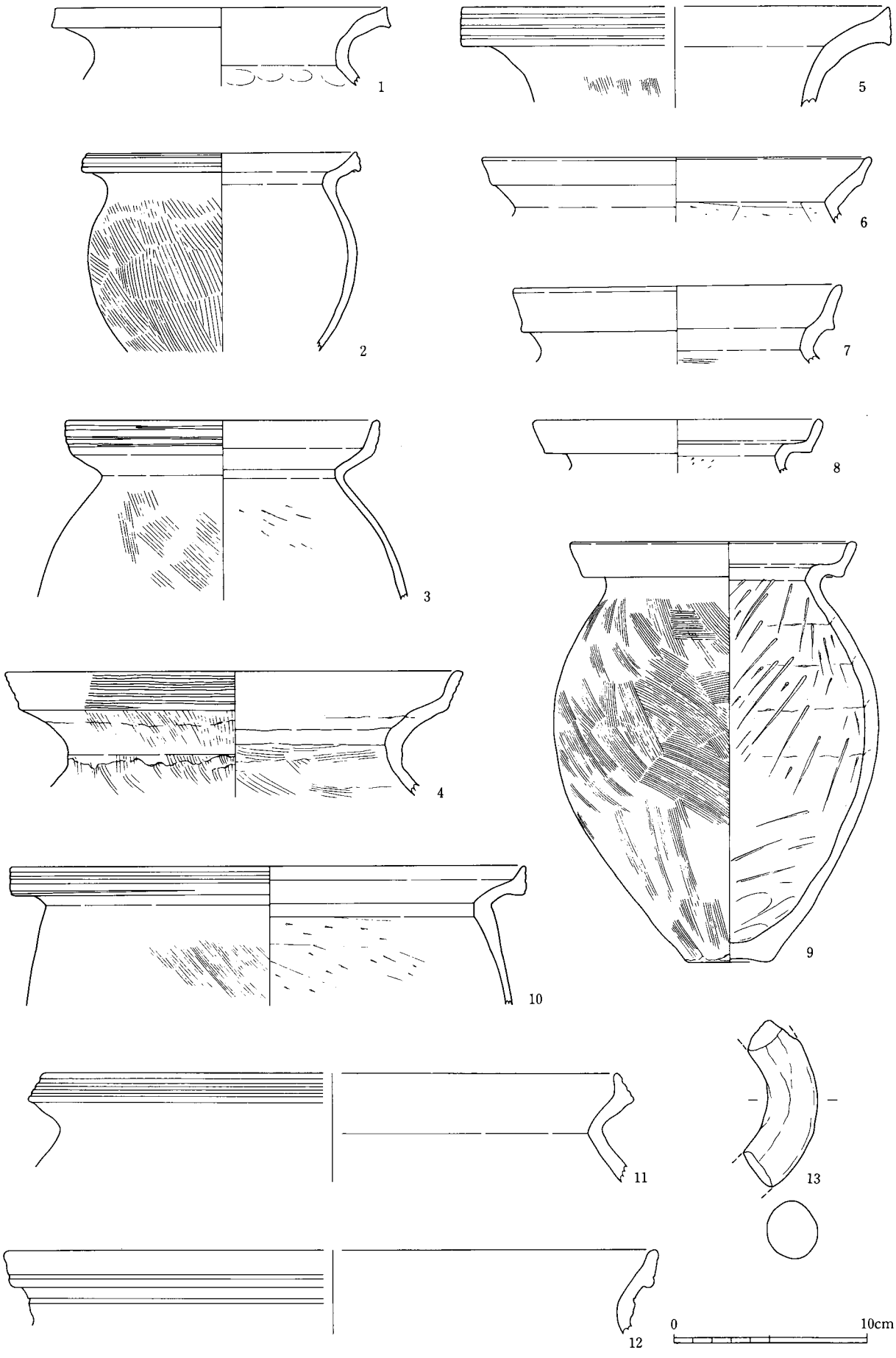
土器の胎土に注目してみていくと、それぞれの時代によって選択される胎土が変化していくことがわかる。当然その用途によっても変わっているのはもちろんのことだが、弥生時代後期は粘土自体は極めて精良であり、混和剤として粒のそろっている選択されたと思われる比較的大径の砂礫を多く混ぜる。古墳時代中期になると、粘土自体のきめが粗くなり大量のより細かい砂礫を胎土に含む。土器自体も赤褐色を呈する。古代は変遷をたどれる資料が無い。中世は古い時期(11世紀代)には赤色酸化粒を多く入れて赤く発色させようとする意図がみられ、新しい段階にはいると（12世紀代)、赤色酸化粒は入るが量的には少なく、薄黄色っぽく焼こうとしているようである。中世段階は粘土自体のきめはそれほど良くなく、古墳時代中期のものとよく似ている感がある。

以上のことから貝田遺跡のピークは弥生時代後期、古墳時代中期、中世前期の3つの段階が考えられる。そのうち特に人為的な開発が行われたのは中世前期と考えられる。

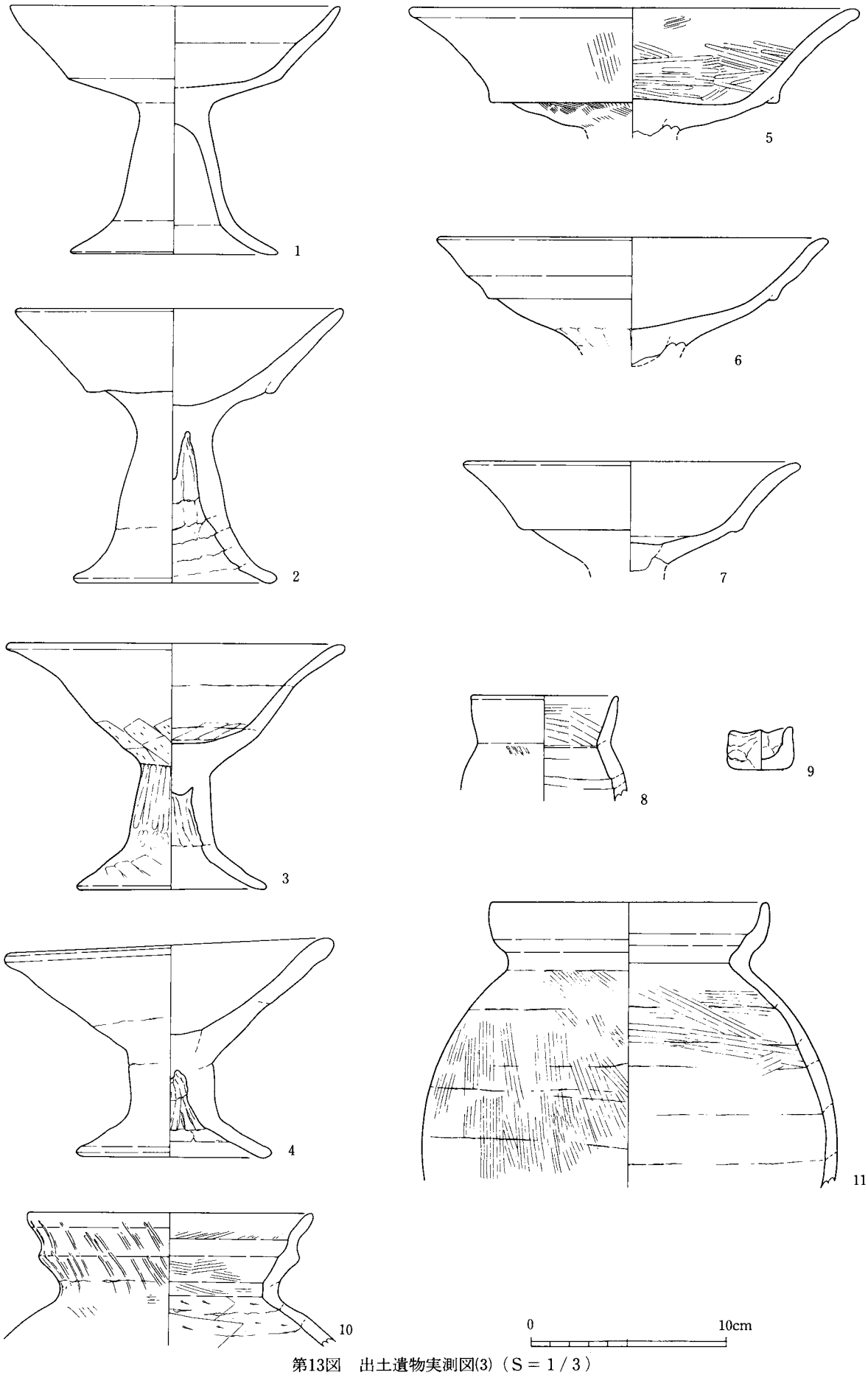
最後に、岡本恭一、滝川重徳、栃木英道、藤田邦雄の各氏には、多数の有益なご教示を得たことを記し、感謝の意にかえたい。



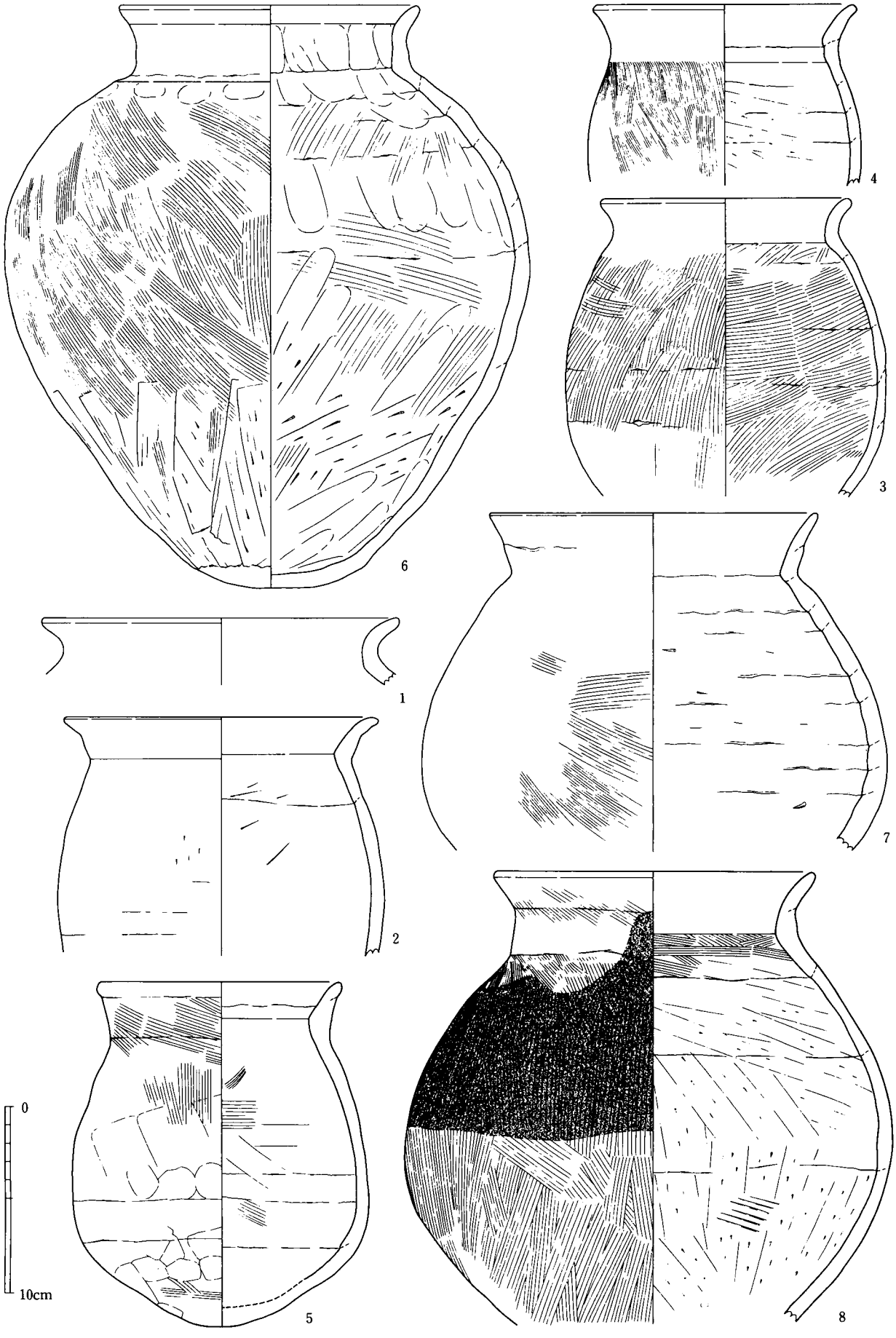
第11図　出土遺物実測図(1)（Ｓ＝１／３）



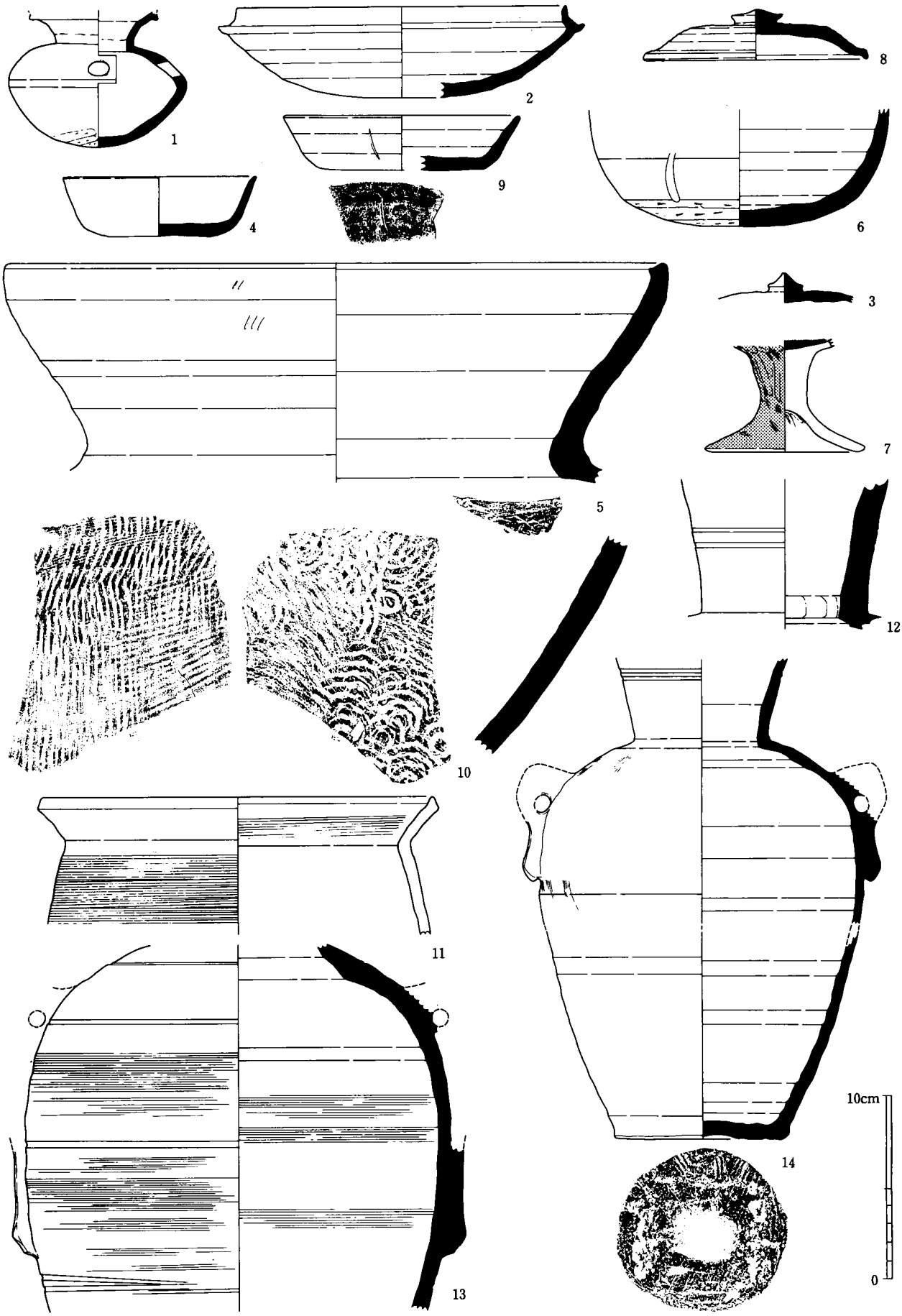
第12図　出土遺物実測図(2)（S＝1／3）



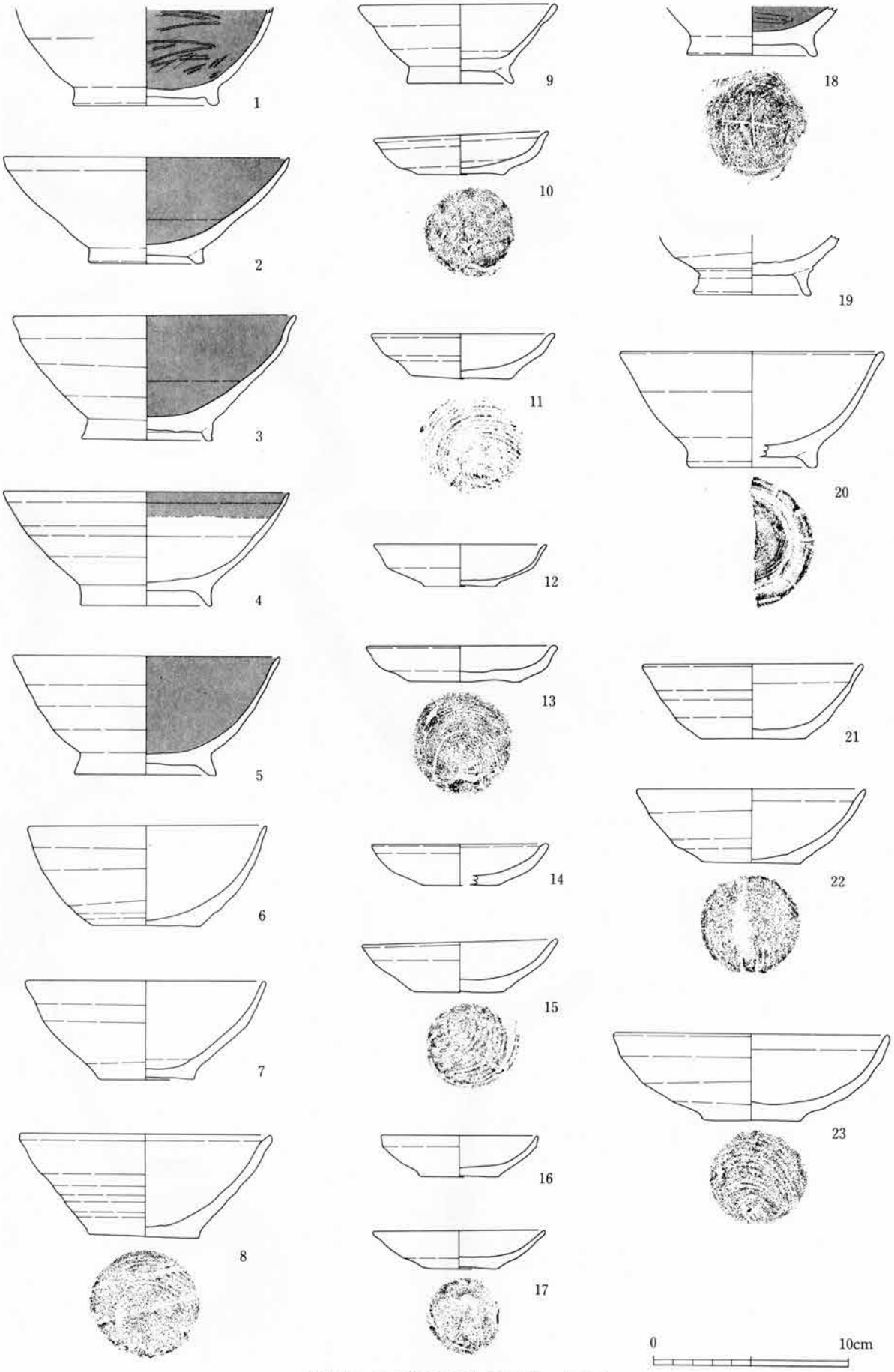
第13図　出土遺物実測図(3)（Ｓ＝１／３）



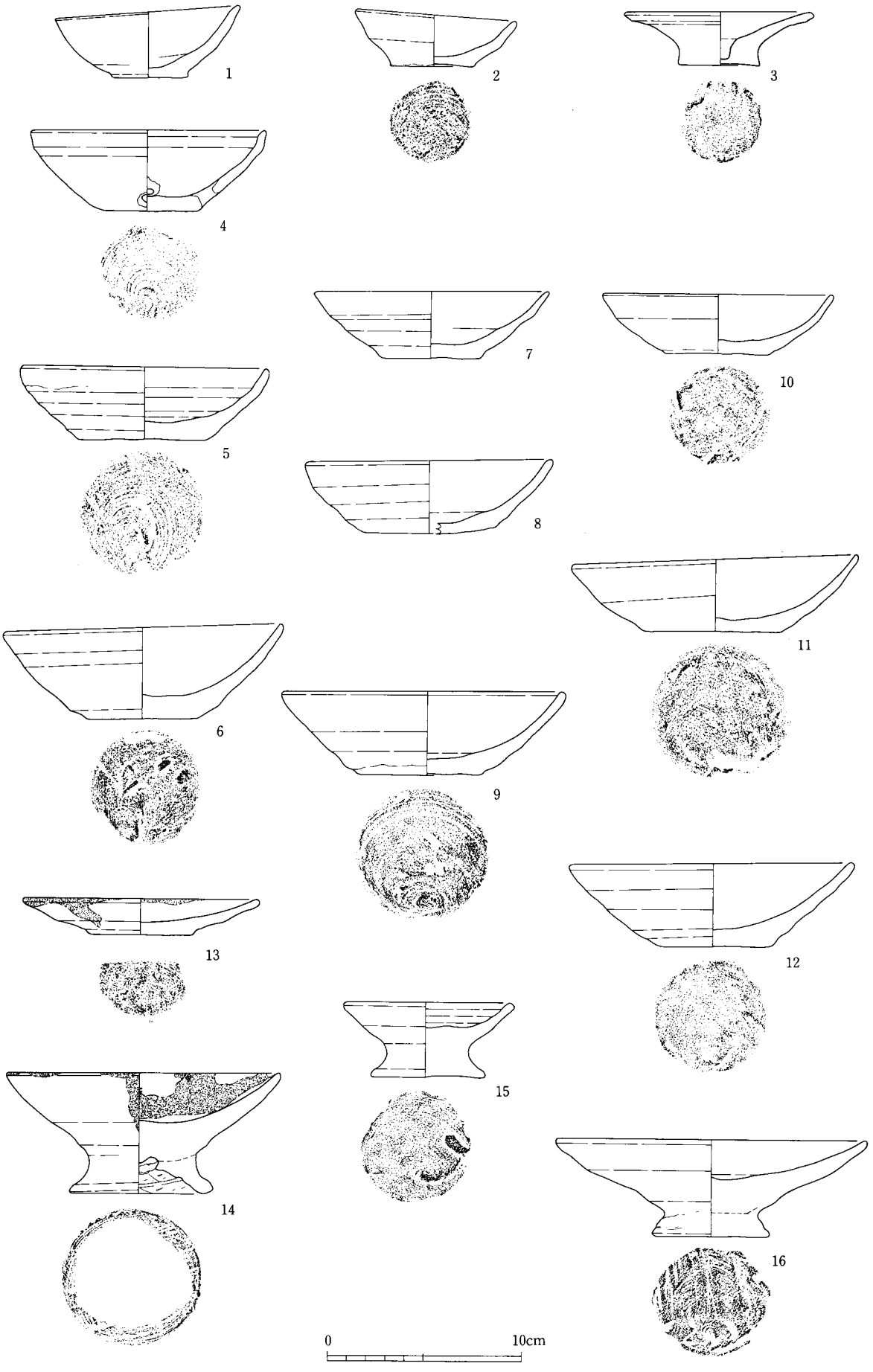
第14図　出土遺物実測図(4)（S＝1／3）



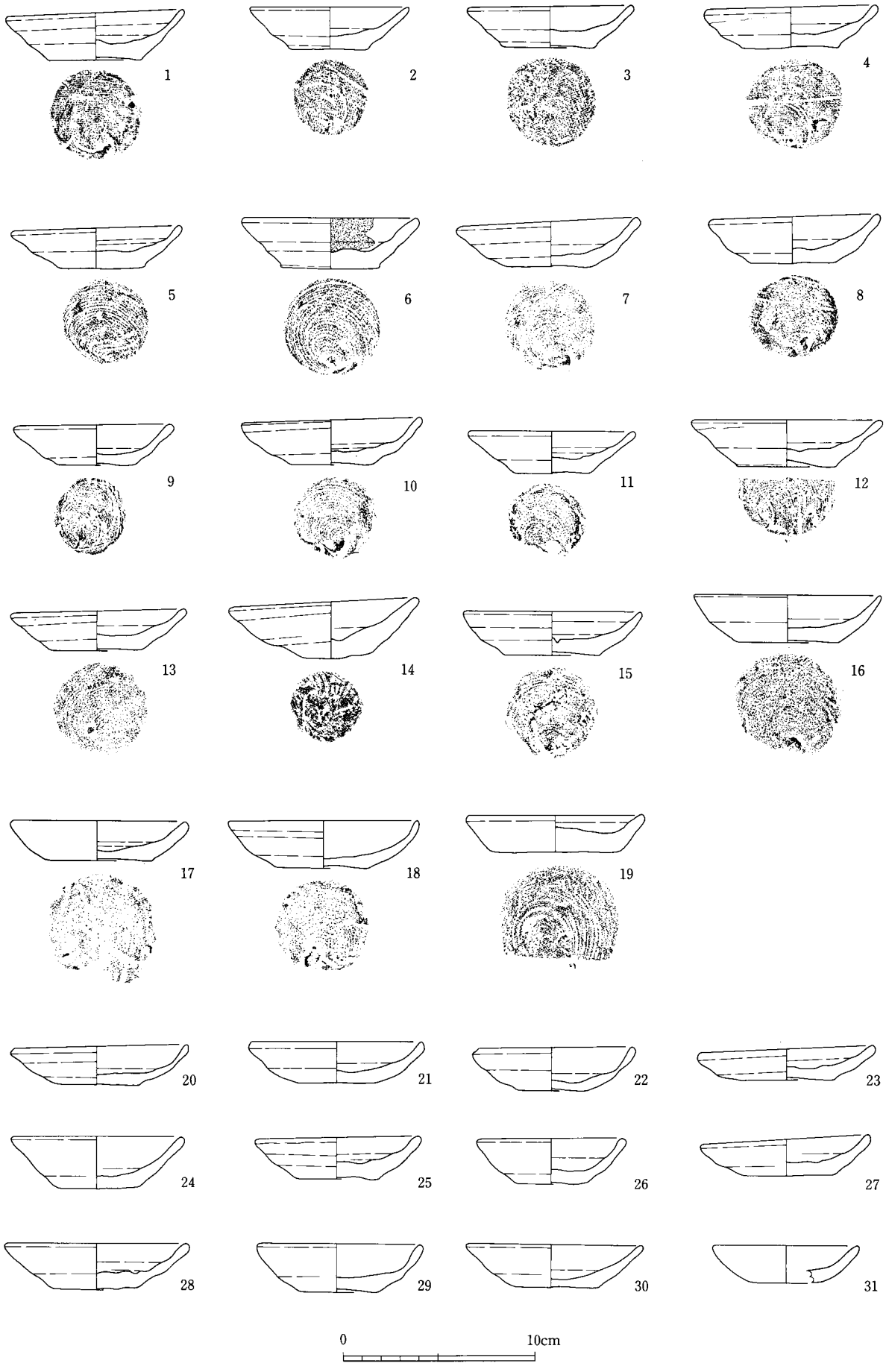
第15図　出土遺物実測図(5)（S＝1／3）



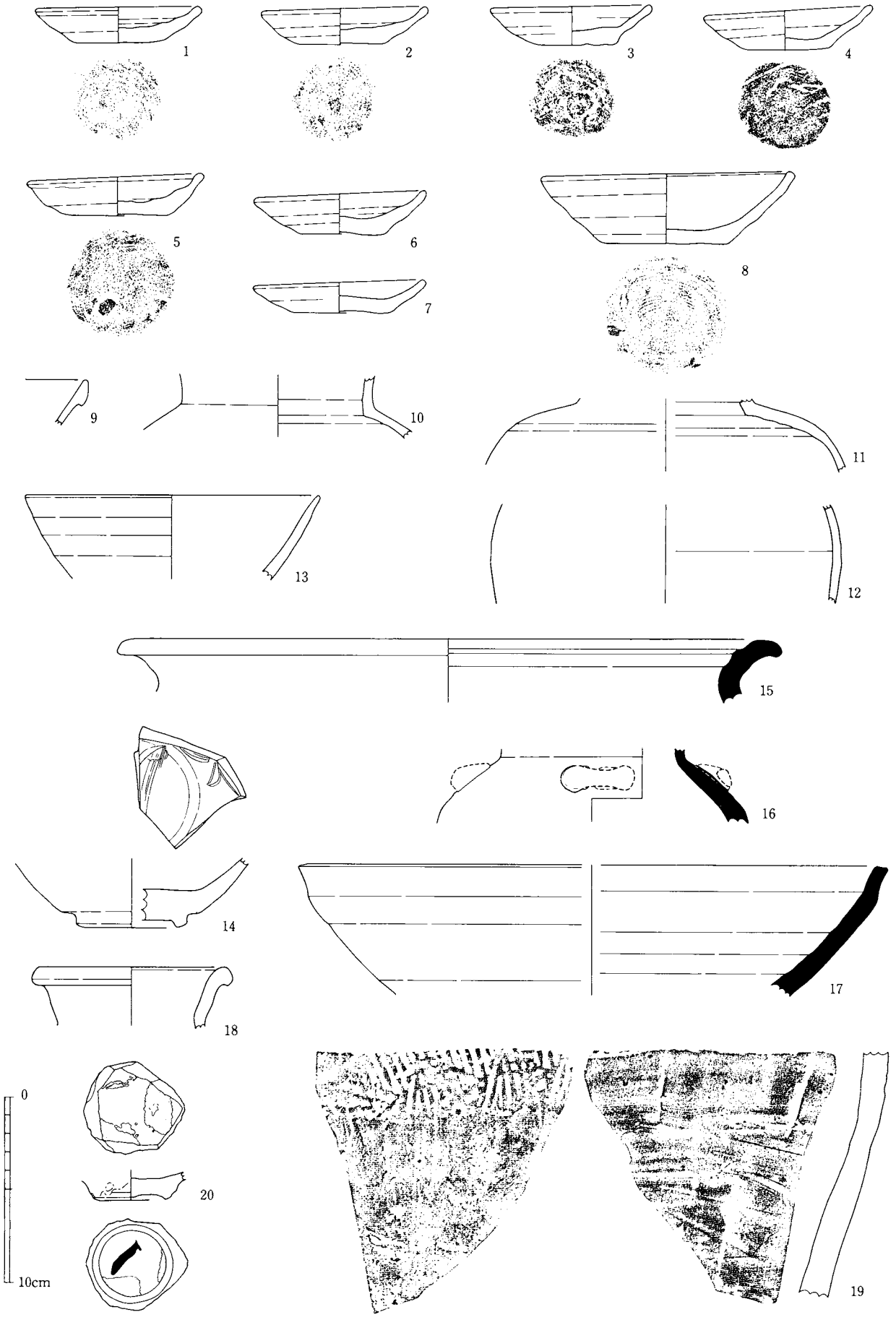
第16図　出土遺物実測図(6)（S＝1／3）



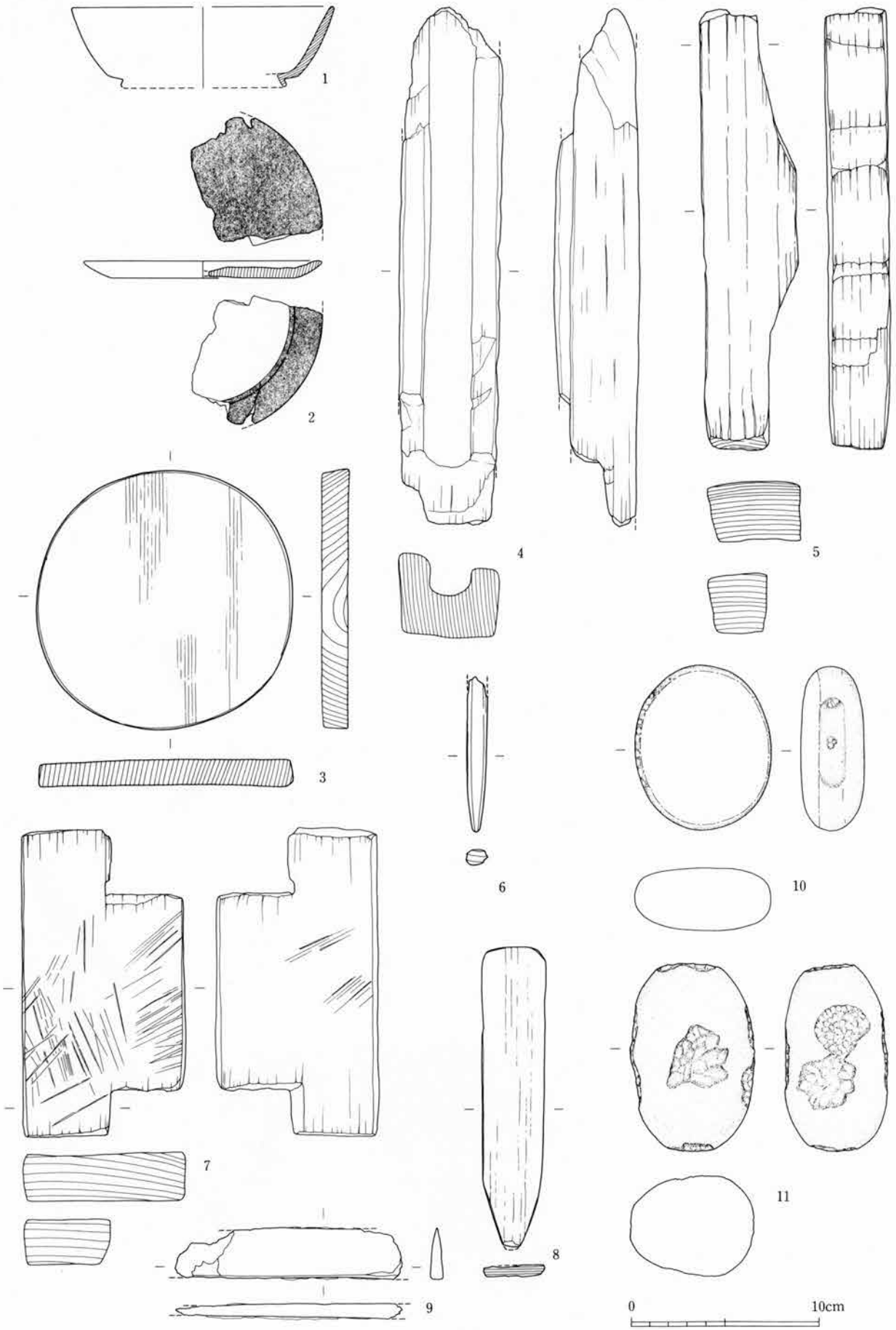
第17図　出土遺物実測図(7)（Ｓ＝１／３）



第18図　出土遺物実測図(8)（S＝1／3）



第19図　出土遺物実測図(9)（S＝1／3）



第20図　出土遺物実測図⑽（S＝1／3）

第３表　貝田遺跡第２次調査出土遺物観察表（１）

挿図番号	実測番号	出　土　位　置	器　種	備　考
第11図１	C27	13＋10①たちわり上層茶褐色砂	弥生土器高杯	
2	C30	14包含層	弥生土器高杯	
3	C24	12＋10・13杭そばピート砂互層下面ピート上面	弥生土器器台	
4	C33	13＋10東側茶褐色砂Ａ層	弥生土器鉢	
5	C7	11包含層	弥生土器鉢	
6	C32	14東側暗灰色粘Ｂ層	弥生土器高杯	
7	D99	不明包含層	弥生土器高杯	赤彩
8	C36	14＋10，15包含層	弥生土器鉢	
9	C34	14＋10東側暗灰色粘砂Ｂ層	弥生土器高杯	
10	C28	14包含層	弥生土器高杯	
11	C5	11＋10拡張区上層	弥生土器壷	
12	C14	12暗灰褐色	弥生土器壷	
13	C20	12＋10付近	弥生土器壷	
14	C18	12＋10東側	弥生土器壷	底部に「＋」
第12図１	C23	13西側赤褐色，暗灰色粘	弥生土器甕	
2	C3	10＋10拡張区上層	弥生土器甕	
3	C10	12＋10付近	弥生土器甕	
4	C22	12＋10西側オリーブ灰砂ピートとピート間	弥生土器甕	
5	C8	12包含層	弥生土器甕	
6	C29	14包含層	弥生土器甕	
7	C21	12＋10西側オリーブ灰砂ピートとピート間	弥生土器甕	
8	C13	12＋10西側	弥生土器甕	
9	C1	12＋10	弥生土器甕	
10	C11	12＋10付近	弥生土器甕	
11	C26	13＋10東側茶褐色砂Ａ層	弥生土器甕	
12	C31	14西側茶褐色砂Ａ層最上層	弥生土器甕	
13	C35	14＋10東側暗灰色粘砂Ｂ層	弥生土器把手	
第13図１	C12	12	土師器高杯	
2	D43	12＋10東よりＢ層下層	土師器高杯	
3	D500	12＋10東	土師器高杯	
4	D47	12＋10東より12＋10付近，13	土師器高杯	
5	D41	12＋10東よりＢ層上層	土師器高杯	
6	C44	12＋10東より	土師器高杯	
7	C4	10＋10拡張区上層	土師器高杯	
8	C9	12＋10付近	土師器壷	
9	D31	12暗灰褐色	手捏ね土器	
10	C25	12＋10西側	土師器壷	
11	C17	12＋10	土師器甕	
第14図１	D108	表採	土師器甕	
2	D42	12＋10東よりＢ層上層	土師器甕	
3	D59	12＋10，13杭付近	土師器甕	

第４表　貝田遺跡第２次調査出土遺物観察表（２）

挿図番号	実測番号	出　土　位　置	器　種	備　考
第14図４	C15	12東よりＢ層上層	土師器甕	
5	D48	12＋10東より	土師器甕	
6	C19	12＋10東よりＢ層下層（暗灰色粘）炭多	土師器甕	
7	C16	13西側赤褐色土	土師器甕	
8	C2	12＋10	土師器甕	
第15図１	D35	12＋10東より暗灰色粘炭多	須恵器瑯	陶邑産か
2	D33	12＋10東よりＢ層上層	須恵器蓋杯身	
3	D111	12＋10東よりＢ層上層	須恵器蓋	羽咋産か
4	D34	12＋10東よりＢ層下層	須恵器杯身	鳥屋産か
5	D13	11＋10茶褐色	須恵器甕	鳥屋産か
6	D65	13＋10西側	須恵器壷	
7	D60	12＋10	土師器高杯	内黒、外赤
8	D12	11＋10拡張区	須恵器蓋	
9	D67	14西側深掘り①	須恵器杯身	側面に「－」ヘラ記号
10	D46	12＋10　5層上層暗灰色粘砂	須恵器甕	
11	D52	13たちわり中～下層	土師器長甕	外面2.5ＹＲ７／６
12	D32	12＋10東側	須恵器壷	
13	D501	11＋10茶褐色	須恵器双耳瓶	
14	D11	11＋10茶褐色	須恵器双耳瓶	
第16図９	D98	14たちわり	白磁碗	釉は7.5Ｙ７／１
10	D107	排土表採	白磁壷	
11	D38	12＋10包含層	白磁壷	釉は7.5Ｙ７／２
12	D112	13＋10東側	白磁壷	釉は５Ｙ４／４
13	D105	13・排土中	青磁碗	釉は10Ｙ６／２
14	D103	現道下部包含層上層	青磁碗	釉は7.5Ｙ６／２
15	D63	13＋10②	珠洲焼甕	
16	D113	13＋10	珠洲焼壷	
17	D36	12＋10	珠洲焼鉢	
18	D64	13＋10③たちわり暗灰色粘	不明陶器壷	釉は緑色自然釉
19	D115	13たちわり中～下層	不明陶器	押印あり
20	D110	現道下包含層上層	唐津焼皿	外底面「－」墨書
第20図１	W10	13たちわり	漆器椀	
2	W4	14西側暗灰色粘	漆器皿	
3	W9	13西側	曲物底板	
4	W8	14東側深掘り	不明木製品	
5	W7	14西側	不明木製品	
6	W5	13＋10東側	箸状木製品	
7	W6	14たちわり下層	不明木製品	
8	W11	13西側溝	不明木製品	
9	F1	11＋10茶褐色	刀子状金属製品	
10	S3	13＋10包含層	叩き石	輝石安山岩
11	S2	13暗灰色粘	擦り石	凝灰岩質安山岩

第５表　貝田遺跡第２次調査出土中世土師器観察表（１）

挿図番号	実測番号	出土位置	器種	口径	器高	残存率	底径	色調		備考
第16図１	D15	11＋10茶褐色土層	有台椀	7.7				浅黄橙色	10YR8/3	内黒、内面磨く
2	D30	12裾側	有台椀	15.0	5.6	30	6.0	浅黄橙色	10YR8/3	
3	D23	12暗灰褐粘質（炭多）包	有台椀	14.5	6.7	190	6.8	浅黄橙色	10YR8/4	
4	D16	12暗灰褐粘質（炭多）包	有台椀	14.7	6.1	270	6.8	浅黄橙色	10YR8/4	
5	D29	12裾茶褐色包	有台椀	14.1	6.3	140	7.5	浅黄橙色	10YR8/4	
6	D17	12暗灰褐粘質	無台椀	12.3	5.5	225	5.8	橙色	2.5YR7/6	断面浅黄橙色
7	D21	12暗灰褐粘質	無台椀	12.3	5.3	120	5.0	浅黄橙色	7.5YR8/4	
8	D20	12暗灰褐粘質	無台椀	13.2	5.6	70	5.8	橙色	5YR6/8	
9	D19	12暗灰褐粘質	有台椀	10.2	4.2	250	5.3	黄橙色	0YR8/3	高台部は粘土が違う。鉄分が多い？。
10	D8	11＋10	皿	9.1	2.1	360	4.7	橙色	2.5YR7/6	
11	D7	11＋10	皿	9.2	2.2	140	5.5	橙色	5YR7/6	かなりゆがむ
12	D26	12暗灰褐粘質	皿	9.4	2.1	230	3.9	浅黄橙色	7.5YR8/3	薄い作り
13	D1	11包	皿	9.8	1.6	210	5.3	浅黄橙色	10YR8/3	
14	D2	11＋10	皿	9.1	2.2	210	4.2	橙色	2.5YR7/6	浅黄橙色部分もある
15	D14	11＋10茶褐色土層	皿	10.5	2.9	240	5.0	浅黄橙色	10YR8/4	
16	D27	12暗灰褐粘質	皿	8.2	2.3	30	4.1	浅黄橙色	7.5YR8/3	
17	D37	12＋10包	皿	8.9	2.0	165	4.0	浅黄橙色	7.5YR8/4	
18	D109	支線農道下包	有台椀				6.4	灰白色	10YR8/2	「×」外底面に記号。
19	D58	13西側暗灰色粘砂B層上層	有台椀				5.1	灰黄褐色	10YR6/2	
20	D6	エンビ管茶褐色１～４	有台椀	13.6	6.1	45	6.6	淡黄色	2.5Y8/3	
21	D28	12裾茶褐色包	無台椀	11.5	3.9	205	5.5	淡橙色	5YR8/4	浅黄橙色部分あり
22	D22	12暗灰褐粘質	無台椀	11.6	4.0	220	5.1	橙色	2.5YR7/8	浅黄橙色部分あり
23	D57	13東より暗灰色粘砂B層下層	無台椀	14.2	4.5	160	5.0	鈍黄橙色	10YR7/3	
第17図１	D9	11＋10	無台椀	9.6	3.4	270	4.0	浅黄橙色	10YR8/4	ゆがむ
2	D104	排土中	無台椀	8.3	2.9	340	4.3	橙色	5YR7/6	
3	D40	12＋10包	皿	9.6	2.8	180	4.3	橙色	2.5YR6/8	
4	D3	11＋10拡張部	無台椀	12.0	4.1	60	5.1	鈍黄橙色	10YR7/3	底部付近に穿孔１
5	D90	14＋10東側赤褐色砂A層	無台椀	12.7	3.9	240	6.5	浅黄橙色	7.5YR8/4	
6	D49	13タチワリ中～下層	無台椀	14.3	4.5	270	5.5	浅黄橙色	7.5YR8/4	
7	D5	エンビ管茶褐色１～４	無台椀	12.4	3.3	100	5.2	鈍黄橙色	10YR7/4	ゆがむ
8	D94	14＋10，15包	皿	13.0	3.9	250	6.9	浅黄橙色	7.5YR8/3	
9	D77	14包	無台椀	14.0	4.4	160	7.0	浅黄橙色	7.5YR8/6	
10	D93	14＋10東側暗灰色粘砂B層	無台椀	11.8	3.2	70	5.5	淡黄色	2.5Y8/3	
11	D78	14東側暗灰色粘B層	無台椀	14.7	4.1	220	7.0	浅黄橙色	7.5YR8/3	
12	D83	14タチワリ	無台椀	14.4	4.5	300	6.0	淡黄色	2.5Y8/3	
13	D91	14＋10西側暗灰色粘砂B層	皿	12.3	2.0	100	4.6	浅黄橙色	7.5YR8/3	灯明痕あり
14	D66	14東側暗灰色粘B層	柱状高台皿	14.5	6.3	70	7.4	浅黄橙色	7.5YR8/3	灯明痕いっぱい
15	D76	13＋10西側暗褐粘C層	柱状高台皿	9.0	4.2	130	5.9	浅黄橙色	10YR8/3	
16	D106	排土表採	柱状高台皿	16.5	5.0	60	5.8	浅黄橙色	10YR8/3	薄く油痕？

残存率360/360表示

第6表　貝田遺跡第2次調査出土中世土師器観察表（2）

挿図番号	実測番号	出土位置	器種	口径	器高	残存率	底径	色	調	備考
第18図1	D50	13タチワリ中～下層	皿	9.2	2.5	220	4.8	浅黄橙色	7.5YR8/4	
2	D54	13タチワリ中～下層	皿	8.2	2.3	165	4.0	浅黄橙色	7.5YR8/4	
3	D51	13タチワリ中～下層	皿	8.5	2.2	210	4.7	浅黄橙色	7.5YR8/4	
4	D53	13タチワリ中～下層	皿	8.8	2.1	220	5.0	浅黄橙色	7.5YR8/4	
5	D55	13東側茶褐色砂A層（最上層）	皿	8.6	2.1	310	4.5	浅黄橙色	10YR8/4	
6	D61	13＋10②タチワリ包	皿	9.3	2.7	120	5.2	浅黄橙色	7.5YR8/4	灯明痕あり
7	D89	14タチワリ下層	皿	9.3	2.3	180	5.0	灰白色	2.5Y8/2	
8	D86	14タチワリ下層	皿	8.8	2.4	210	4.5	浅黄橙色	7.5YR8/3	
9	D87	14タチワリ下層	皿	8.1	2.1	360	4.0	浅黄橙色	7.5YR8/4	
10	D88	14タチワリ下層	皿	9.3	2.3	360	4.5	灰白色	2.5Y8/2	粘土紐巻上状痕跡。
11	D84	14タチワリ	皿	8.5	2.1	190	4.2	浅黄橙色	10YR8/3	
12	D80	14東側暗灰色粘B層	皿	9.9	2.4	110	5.1	浅黄橙色	10YR8/3	灯明痕あり
13	D96	14＋10，15包	皿	9.0	2.0	310	5.0	淡黄色	2.5YR8/3	
14	D97	14＋10，15包	皿	9.4	3.0	360	3.8	浅黄橙色	10YR8/3	
15	D92	14＋10東側暗灰色粘砂B層	皿	9.3	2.2	80	5.0	浅黄橙色	10YR8/3	内面に2条の凹み。
16	D79	14東側暗灰色粘B層	皿	9.4	2.4	80	5.2	浅黄橙色	10YR8/3	
17	D39	12＋10包	皿	9.1	2.3	190	5.6	浅黄橙色	7.5YR8/6	
18	D10	11＋10	皿	10.0	2.9	340	5.0	浅黄橙色	10YR8/3	
19	D81	14東側暗灰色粘B層	皿	9.0	1.9	230	6.9	灰白色	2.5Y8/2	
20	D18	12暗灰褐粘質	皿	9.0	2.1	310	4.5	浅黄橙色	7.5YR8/4	
21	D24	12包	皿	9.0	2.3	140	4.0	浅黄橙色	7.5YR8/4	
22	D25	12包	皿	8.3	2.3	320	3.8	浅黄橙色	7.5YR8/4	
23	D56	13東側茶褐色砂A層（最上層）	皿	9.0	1.7	260	4.8	橙色	5YR7/6	
24	D82	14タチワリ中～上層	皿	8.6	2.5	250	4.7	浅黄橙色	7.5YR8/3	ゆがむ
25	D85	14タチワリ	皿	9.0	2.8	160	4.3	浅黄橙色	10YR8/3	
26	D4	14＋10茶褐包	皿	8.5	2.5	110	4.3	浅黄橙色	7.5YR8/6	ゆがむ
27	D95	14＋10，15包	皿	8.6	2.0	340	5.0	浅黄橙色	10YR8/3	ゆがむ
28	D100	現道下部包上層	皿	9.4	2.5	260	4.6	浅黄橙色	10YR8/4	
29	D101	現道下部包上層	皿	9.6	2.6	120	4.3	浅黄橙色	7.5YR8/4	
30	D102	現道下部包上層	皿	9.0	2.3	130	4.6	浅黄橙色	7.5YR8/4	
31	D114	13包	皿？	7.5	2.1	160	3.6	橙色	7.5YR7/6	
第19図1	D68	14ピット1	皿	8.8	1.9	230	5.0	浅黄橙色	7.5YR8/4	
2	D69	14ピット1	皿	8.4	1.9	360	4.6	橙色	2.5YR7/8	ゆがむ
3	D72	14ピット1	皿	8.6	2.2	230	4.6	浅黄橙色	10YR8/3	
4	D74	14ピット1	皿	8.8	2.4	210	5.0	浅黄橙色	7.5YR8/4	ゆがむ
5	D75	14ピット1	皿	9.5	2.2	320	5.9	浅黄橙色	7.5YR8/4	
6	D71	14ピット1	皿	9.2	2.4	320	4.8	浅黄橙色	7.5YR8/4	
7	D73	14ピット1	皿	9.2	1.4	300	5.4	浅黄橙色	7.5YR8/6	
8	D70	14ピット1	無台椀	13.3	3.6	180	6.3	浅黄橙色	10YR8/3	

残存率360/360表示

第Ⅴ章　貝田遺跡の第３次発掘調査

第１節　調査の概要

貝田遺跡の第３次発掘調査は平成４年度に行った調査を指し、調査区は北調査区、南調査区、工事立会区域に分かれる。発掘調査は第２次調査の未了部分でもある南調査区から着手し、続いて北調査区を進め、最後に工事立ち会いを行った。その後は引き続いて貝田Ｃ遺跡の調査に移行している。各調査区の詳細は各節に譲り、貝田Ｃ遺跡については第Ⅵ章で詳述する。調査には平田天秋（当時埋蔵文化財センター調査第一課長）が統轄、中島俊一（同主査）が指導し、川畑誠、柿田祐司（同主事）、的場勝俊（富来町教育委員会社会教育課主事）の助力を得た。貝田遺跡第３次発掘調査全体での調査期間、面積、担当者、補助員、作業員は下記の通りである。

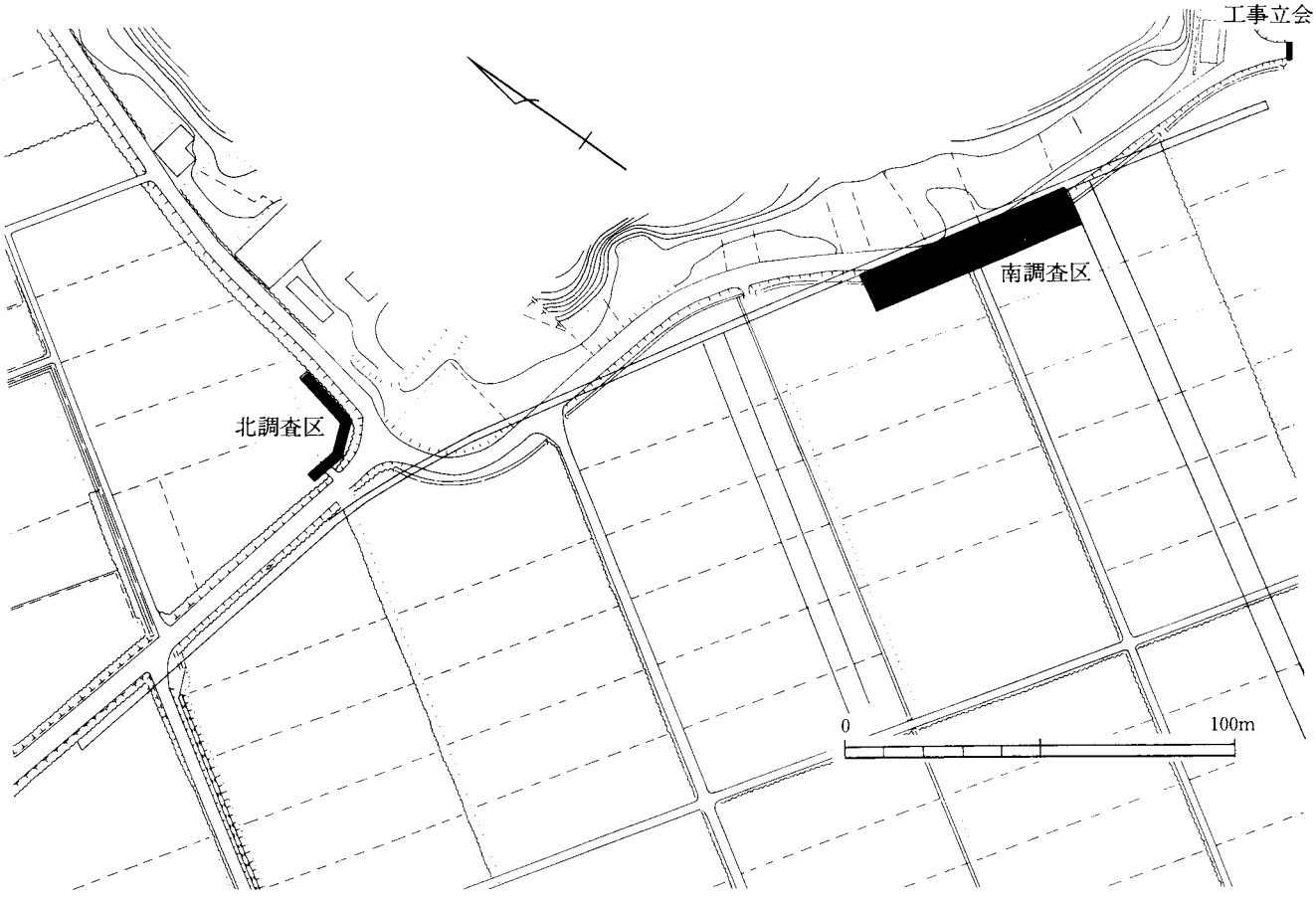
調査期間　平成４年６月15日～９月28日（貝田遺跡、貝田Ｃ遺跡合算）

調査面積　565m²（南調査区500m²、北調査区65m²合算）

調査担当　本田秀生、安　英樹（貝田遺跡、貝田Ｃ遺跡共通）

調査補助員　大藤雅男（貝田遺跡、貝田Ｃ遺跡共通）

作業員　漆原よしえ（富来町八幡地区）、干場功（富来町八幡座主地区）、織田原郁子、貝崎伸次、貝崎輝子、篠田信子、高佐一、高京子、館きよい、西ハル、橋谷定吉、浜田ノブ、船木米子（富来町貝田地区）（貝田遺跡、貝田Ｃ遺跡共通）



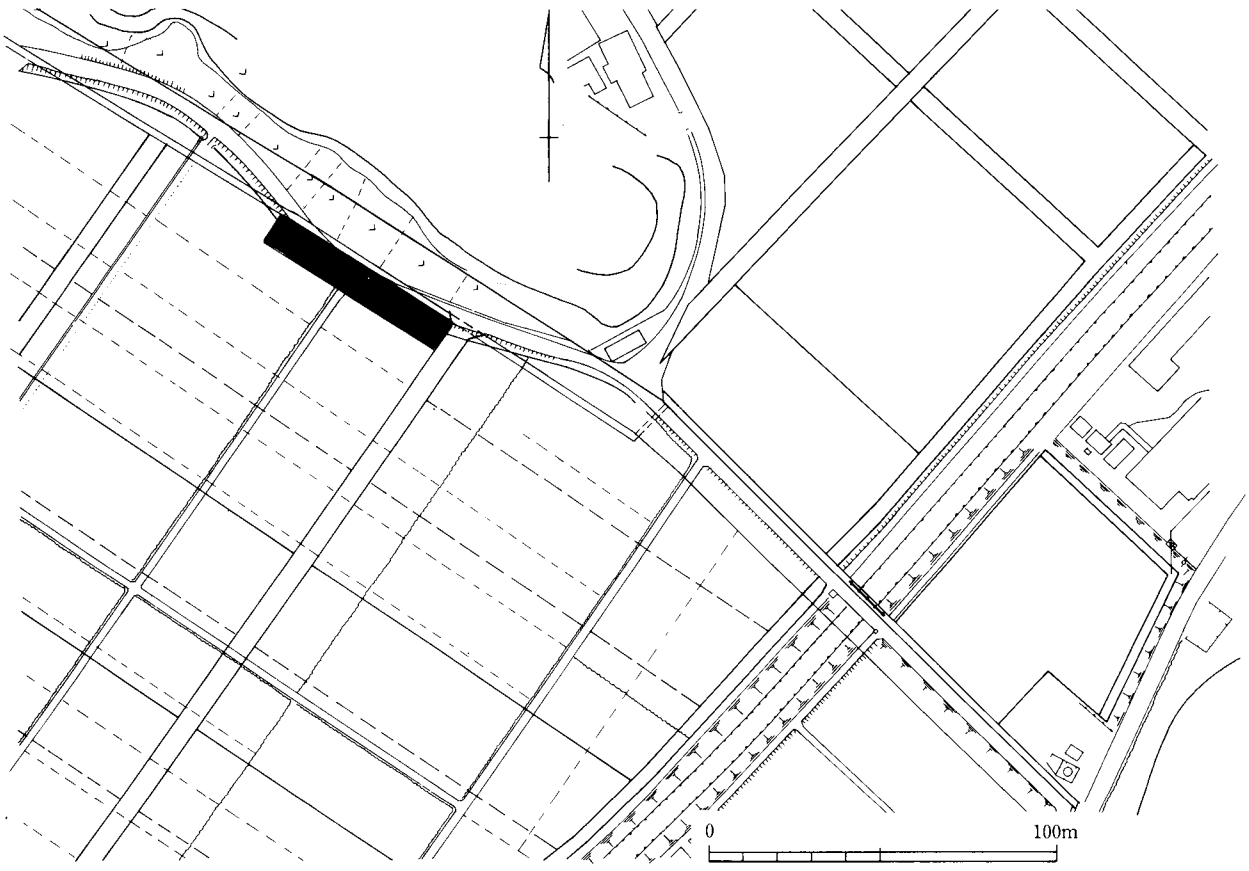
第21図　第３次発掘調査区の位置（Ｓ＝１/2,000）

第２節　貝田遺跡南調査区

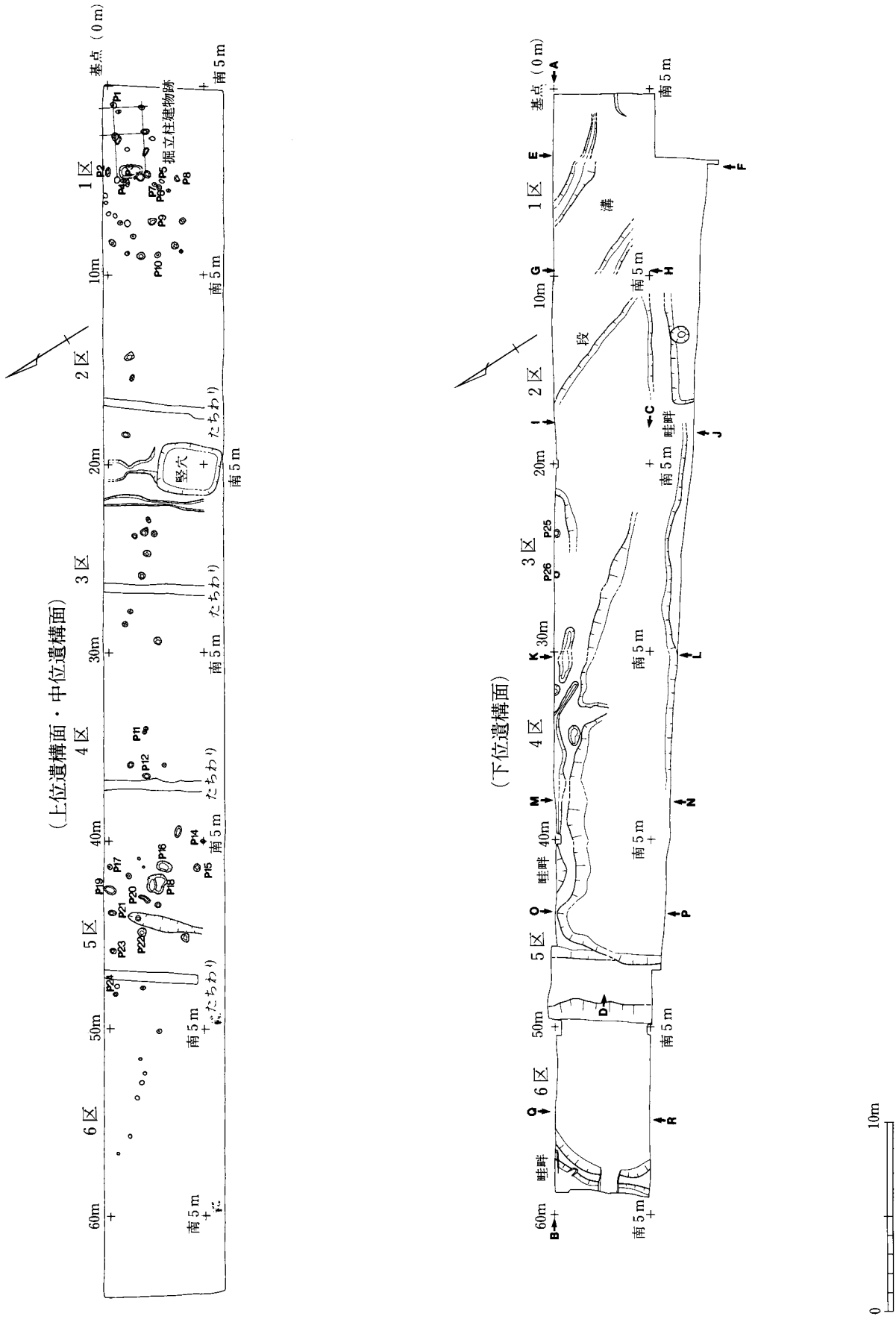
１　調査の概要

貝田遺跡南調査区は貝田遺跡の南東部、遺跡が立地する丘陵の裾部の緩傾斜地に位置する。発掘調査は第２次調査で調査を繰り延べた、切り下げられて水田となる旧道路部分を対象としている。周辺は調査着手時には既に事業が進み、調査区域を残し大区画の水田となっていた。調査区域は東西60m余、南北８m程度の平面形が東西に長い長方形で、面積は約500m²を測る。貝田遺跡の南東部には重層する複数の遺物包含層と遺構面が存在する事は既に第２次調査時に判明している。調査を完遂するには相当の期間と費用を要するものと推定され、この問題を最大の焦点として、石川県立埋蔵文化財センター・羽咋土地改良事務所間で調査前から協議が重ねられた。工事の基本設計では路面を切り下げた後、保護盛土を設けて水田とすることが可能な標高値は5.9mであり、それより上位に位置する遺構面と遺物包含層については掘削が及び、それより下位に位置する遺構面・遺物包含層については掘削が及ばない事になる。協議の結果、調査量を最小限にとどめ、遺跡を保護するため標高5.9mを目安としてこれより上位の遺構面・遺物包含層については分層して発掘調査を進め、より下位の遺構面・遺物包含層については水田下に保存されるため、調査の対象としない事に決定した。

調査区の主軸は第２次調査後に設置されたパイプライン・用水路に沿わせて東西を設定し、10m毎に区割りを行い、基本グリッドを設定した。N－58°－Wを指向する。これに直交する南北主軸については水路側を起点（０m）としたが、調査区南北長は８m程度しかなく、東西に長い長方形の略グリッドとして、東から順に１区から６区までを設定した。分層調査については、土層の堆積を地点別に観察する必要があったため、グリッドに沿った方向に細かく畦を残した。東西方向では主軸ラインと、それより下位で並走する畦を残した。南北方向では各区に最低１本は畦を残すように進めた。４区・５区については特に錯綜しており、遺物の出土量が多かったため、小グリッド状に更に細かい畦を残し、各区を分割する形で進めた。



第22図　南調査区の位置（S＝1/2,000）



第23図　南調査区全体図（Ｓ＝１/300）

調査の結果、予想以上に錯綜した層序が確認され、調査の対象とした検出面から標高5.9m前後のレベルまでの間だけでも最低3面の遺構面が存在する事が明らかになった。上位遺構面では掘立柱建物1棟、ピット多数を確認した。中位遺構面では竪穴1基、下位遺構面では畦畔状遺構、規模不明な溝、規模不明な掘立柱建物等を確認した。遺物は弥生土器、土師器、須恵器、中世土師器、陶磁器、木器・木製品、石器・石製品などが出土しているが、遺構に伴うものはきわめてわずかである。遺物の主体は圧倒的に多量を占める中世土師器であるが、下位遺構面上及び、限定的な一部の堆積層から集中的に出土した資料については時期的にもまとまっていると思われる。木器・木製品の大半も同様な出土状況であり、中世土師器とほぼ同じ時期と思われる。また、他の錯綜する堆積層からも多くの遺物が出土しているが、こちらは弥生時代から中世まで、時期的なまとまりはあまりない状況であった。出土遺物総量はパンケースで50箱に及んでいる。調査終了後、調査区は埋め戻されて水田となった。現在も耕作が行われ、より下位の遺構面・遺物包含層は保存されている。以下では、層序について次項2で、遺構について次項3で、遺物について次項4で詳しく述べたい。

2　層序

（1）土質の分類

貝田遺跡南調査区は傾斜地に位置するため、堆積土層は水平・垂直方向とも直線的で均一なものではない。また各層の堆積には人為的な要素も強く加わっているようであり、様々な土質・色調の層が複雑に錯綜する状況であった。きわめて複雑な堆積を見せる調査区の層序を整理するには、大まかな類型化が必要と思われ、また遺跡の形成を考える上で有効と思われる。そして南調査区では土質と色調の組合わせによってそれがある程度可能であった。よって層序について述べる前に、土質の分類を行い、提示しておくことにしたい。もちろん実際の土質は色調や粘性、遺物の含み方等にも層ごとに差があり、堆積の状況によっても異なるが、あくまで土質を大まかに示すもので、層序を整理する便宜として理解されたい。

土層各層の土質は粘性や粒子の細かさで識別した。土壌学的に粘質土あるいはシルトと分類される土質を示す層が大半であるが、この中でも細かい程度差は見られる。この他、砂質土、砂、粘土が幾つかの層で認められた。色調については黄褐色、茶褐色、明灰褐色、暗灰褐色に大別できた。土質・色調の関係については、黄褐色系、茶褐色系を呈する土層は概ね粘性が低く、明灰褐色系、暗灰褐色系は粘性が高い傾向がある。南調査区の土質はこれらの組合わせによって、主に以下の5種に大別される。

①黄褐色粘質土：低粘性で、かなり酸化の度合いが強いようであり、色調は明るい黄褐色を呈する。丘陵の地山に多い土質で、基本的に低湿地には存在しない土質と思われる。茶褐色の鉄分粒が多く含まれており、そのせいか硬質な土層である。付近の丘陵に分布する細粒黄色土壌、いわゆる「大原統」を構成する土質と思われる。以下「黄粘」と略称する。

②茶褐色粘質土：低粘性で、色調は茶褐色を呈する。茶褐色の色調は顕著に土壌に沈着した鉄分質が表象するものと思われる。鉄分質が土壌そのものを固めており、非常に硬質な土層である。鉄分層は土中にあって安定した本来の姿ではなく、酸素と結合する事で不安定になり表出した姿と思われる。おそらくは溶脱現象をきたした鉄分が表出して沈着したものであろう。「黄粘」に比べてやや粘性は低いが質的には準じており、似た質の土壌に鉄分が多量に沈着したものと推定する。以下「茶鉄粘」と略称する。

③暗灰褐色粘質土：高粘性で、色調は暗灰褐色から黒褐色に近いものまである。有機性が非常に高い土層であり、遺物や炭粒を含む層が非常に多い。以下「暗灰粘」と略称する。

③明灰褐色粘質土：比較的粘性は高く、色調は明灰褐色、黄灰褐色、茶灰褐色、青灰色などを呈する。色調からも還元度が強い土層である。沖積平野のベース土によく見られる、グライ土壌に近い。以下「明灰粘」と略称する。

⑤その他：灰色土層、炭層、鉄分層、砂質土層、砂層などがある。灰色土については、かなり還元の度合いが強いと思われるが、粘性、色調が多様であり、うまく類型化できなかったものである。参考までに土質では砂質、粘質、粘土の全てが認められる。色調も明灰褐色、青灰色、茶灰色、黄灰色など、多様である。高粘性で青灰色を呈するものは、沖積平野によく見られるグライ土壌に近い。炭層、鉄分層については基調になる土壌の含みが少なくてそれ以外の成分で主に構成される土層である。鉄分層については、上位層から溶脱した鉄分が、粒子の細かい下位層へ浸透することができず、停滞し固着し形成された層と推定できる。下位層は粘土など粒子が細かい土質であることが多いと思われる。砂質土層、砂層については調査区内での確認例がごくわずかしかなかったので分類を控えたものである。

土層の観察は、主軸方向に沿った２本の畦で丘陵裾の上位・下位の等高線にそれぞれ沿った堆積について、それに直交する７本の畦で丘陵上位から低地への堆積について主に行った。以下それぞれ「上位横断面」、「下位横断面」、「縦断面」と称する。以下、上位横断面から、層序について述べる。

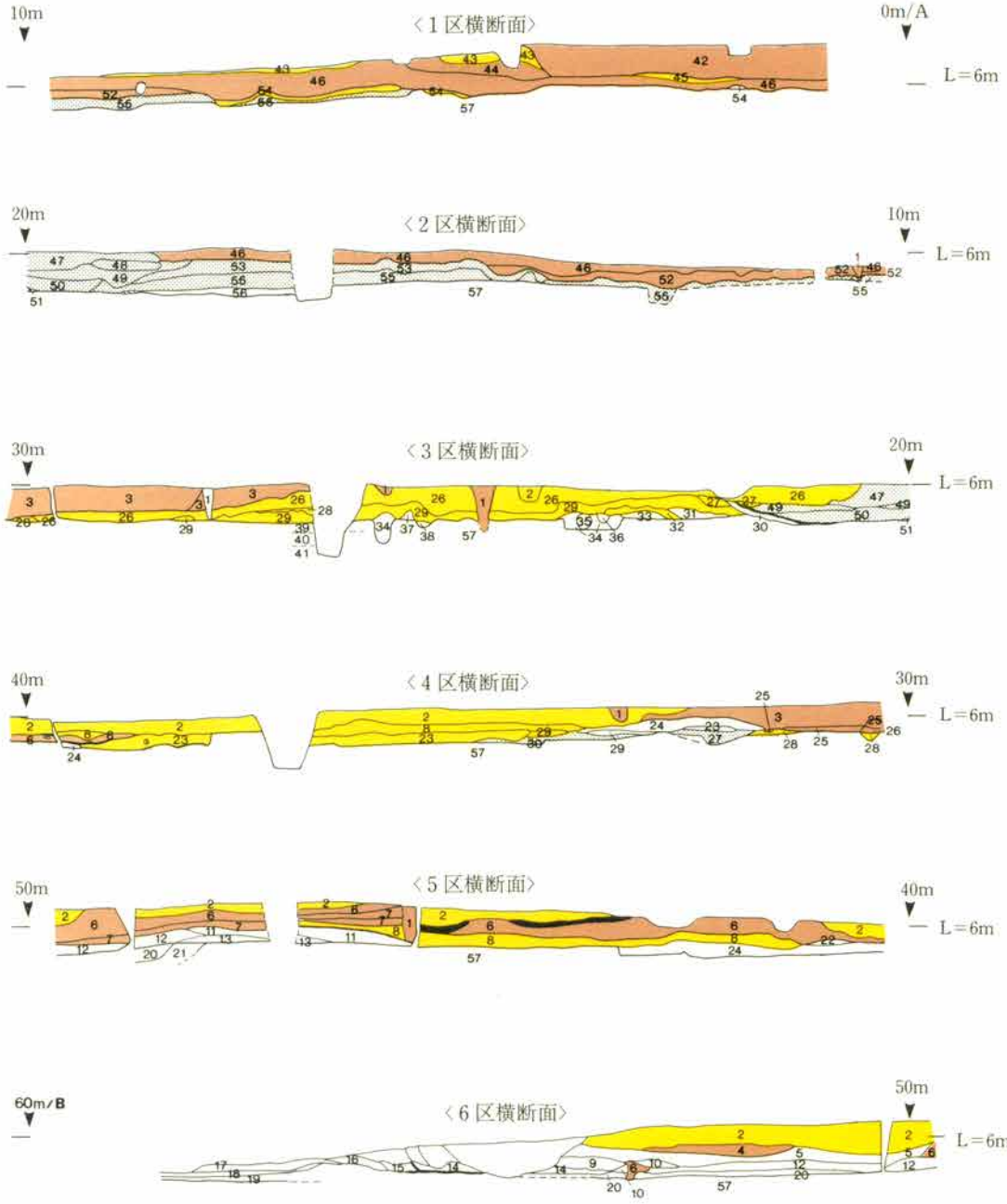
（２）上位横断面の土層（第24図）

まず、主軸ラインの位置の横断面の土層堆積について述べる。前述したとおり、「上位横断面」と称する。１区では上位から層42・44・46の順で厚い茶鉄粘層の堆積が認められる。層42は検出面で標高値6.4m、層厚で40cm前後を測り、層位的にその下位に位置する層44・46は鉄分の沈着度や、層45の鉄分層を間層として分層されたほぼ同質の層である。層42・層44は５～６ｍ地点でとぎれ、層46はその上面に鉄分層43をのせて２区側に向かって層厚を増して行くが、さらにその下位には層55の暗灰粘層（暗茶灰褐色粘質土）が見られるようになる。層55は粘性が高い有機質層である。１区では層55まで掘削しており、その下面は灰色粘土が堆積するようであり、標高値は5.6～5.8m を測り、２区側が低くなっている。

２区においては茶鉄粘層46と暗灰粘層55が14m付近から３区側に向かってレベルと層厚を増しており、層55は上位に同質の層53を分層する。層46の検出面は６～6.2m であり３区側が高まる。以上の層は19m付近まで見られるが、ここでとぎれ、暗灰粘層47・48・49・50が層46と層53の間を割るように、層53・55を切ってのるように堆積している。掘削は基本的に層50と層55まで行ったが、その下位に位置する木質・腐植質を含む層56は、17～19m付近にかけてのみ一部掘削した。層56の直上には板材が見られ、一応のベース面と捉えている。標高値は5.8m程度である。

３区においては暗灰粘層47はすぐに黄粘層26でとぎれ、層47の下位で同質の層48・49・50は２区の19m付近と区境を挟んで対称をなすようにレンズ状に堆積してとぎれ、その上位に黄粘層26・27、下位に黄粘層29が位置する。その境界には炭層と明灰粘層30が間層となる。黄粘層26・27・29は27m付近までわりに均一であるが、以降４区に向かってレベルと層厚を小さくしていき、その上位には茶鉄粘層３がのって逆に厚くなっていく。層３・26の検出面の標高値は6.1m前後、掘削は図示した層までで標高値5.7m前後と、最も上位の面、下位の面ともほぼフラットである。また、上位面・下位面とも遺構の存在を確認できる。下位面は黄粘ブロックの混じった明灰粘層が30cm程続き、暗灰粘層に至る。ほとんど無遺物で一応ベース面ととらえている。

４区においては鉄茶粘層３は32m付近から層が薄くなり、33m付近から５区に向かっては黄粘層２が上位にのるようにして推移しとぎれる。検出面の標高値は６～6.2m を測る。層３と層２の下位には明灰粘層23・24・29が堆積しており、検出面では比較的フラットで標高値5.8m前後を測るが、32～33m付近にかけて10～20cm程度の盛り上がりが見られる。確認された明灰粘層は平面的に見て正格子状に一定の方向性があるため、畦畔と推定している。詳しくは次項４で述べる。明灰粘層23は39m付近で低くなり、その上位には茶鉄粘層６があらわれている。明灰粘層の下位を一応のベース面と捉えているが、32～34m付近では暗灰粘層27・30が見られた。層27は畦畔の下位面の遺構となる可能性がある。掘削は標高値5.7mまで及ぶ。



1　暗灰褐色粘質土（遺構覆土。）
2　黄褐色粘質土（鉄分沈着。）
3　暗茶褐色粘質土（鉄分多く含む。）
4　茶褐色粘質土（鉄分多く含む。）
5　青灰色粘質土（炭粒含んで濁った質感有する。）
6　暗茶褐色粘質土（鉄分多く含む。）
7　暗茶褐色粘質土（6とほぼ同層。）
8　黄褐色粘質土（鉄分沈着、灰色粘土ブロック含む。）
9　茶灰褐色粘質土（やや黄色みがかる。）
10　暗青灰色粘質土
11　明茶灰褐色粘質土（よくしまる。）
12　青灰色粘質土（炭粒含む、5より砂っぽい。）
13　暗灰褐色粘質土
14　茶灰褐色粘質土（砂っぽい。）
15　茶灰褐色粘質土（炭層はさんで14と同質か。）
16　暗灰褐色粘質土（炭粒、黄色土ブロック含む。）
17　暗灰褐色粘質土
18　暗灰褐色強粘質土
19　暗灰褐色粘土（やや青みがかる。）
20　青灰色砂（粘性なくなる。）
21　暗灰褐色粘質土（13と同層か、黄色土ブロック含む。）
22　暗茶灰褐色粘質土（砂っぽい、畦畔か。）
23　明黄褐色粘質土（灰色土ブロック含むが、しまりよい。）
24　明茶灰褐色粘質土（砂っぽい、畦畔か。）
25　暗茶褐色粘質土（鉄分多く含む、よくしまる。）
26　黄褐色粘質土（鉄分層、オレンジがかる色調。）
27　黄褐色粘質土（暗灰色土ブロック、砂粒含む。）
28　明黄褐色粘質土（砂っぽいが、きわめてしまりよい。）
29　黄褐色粘質土（鉄分、灰色土ブロック多く含む。）
30　灰色粘土（ベース土に似る。）
31　明茶灰褐色土
32　黄褐色粘質土（鉄分、灰色土ブロック29より多く含む。）
33　黄色土・灰色土・暗灰色粘土ブロックの混層
34　灰色粘土（ピット覆土。）
35　灰色粘土（ピット覆土、34よりやや暗めの色調。木柱部分か。）
36　黄褐色砂ブロック
37　暗褐色粘質土（よくしまる、ブロック的。）
38　黄褐色粘質土（砂っぽい、ブロック的。）
39　黄～灰色粘土（同質の粘土で、色調が上部黄色から下部灰色へ漸移的に変化する。）
40　黄色・灰色・暗灰色粘土ブロック混層
41　暗灰色粘土（無遺物。）
42　暗茶褐色粘質土（きわめて鉄分多く含み、黒茶色に近い色調。）
43　黄褐色粘質土（鉄分層。）
44　暗茶褐色粘質土（やや鉄分少なく、黄茶色に近い色調。）
45　黄褐色粘質土（鉄分層。）
46　暗茶褐色粘質土（鉄分多く含む。）
47　暗灰褐色粘質土（黄色土・茶色土ブロック多く含む。炭粒含む。）
48　暗灰褐色粘質土（炭粒含む、比較的均質。）
49　暗灰褐色粘質土（暗い色調、比較的均質。）
50　暗灰褐色強粘質土（灰色粘土ブロック大小多く含む。）
51　灰色砂
52　暗茶褐色粘質土（46より鉄分多く含み、こげ茶色に近い色調。）
53　暗茶灰褐色粘質土（炭粒含み、よくしまる。）
54　黄褐色粘質土（鉄分層。）
55　暗茶灰褐色粘質土（炭粒含み、粘性増す。）
56　暗灰褐色粘土（木質多く含み、腐植質。）
57　下位遺構面のベース土

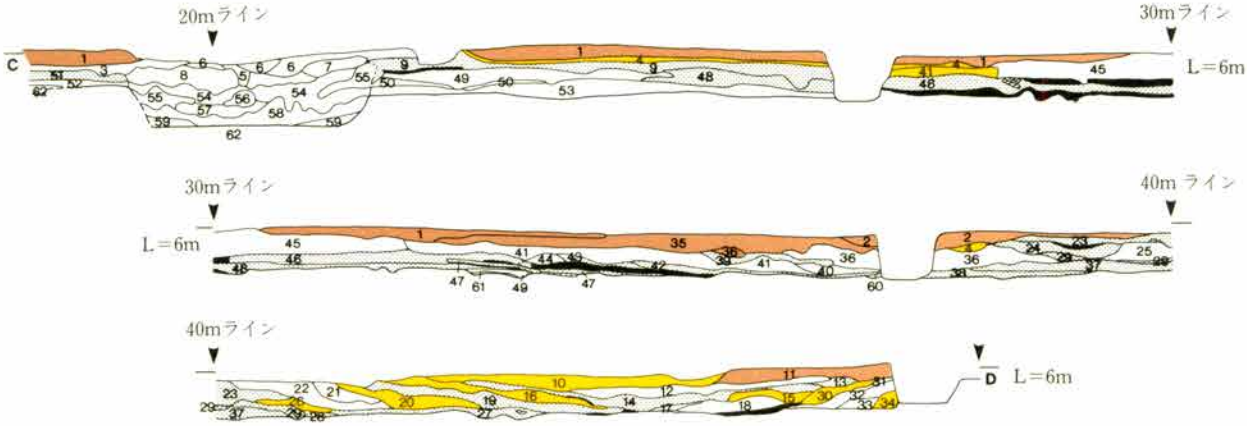
黄色は黄粘層、茶色は茶鉄粘層、アミは暗灰粘層、黒色は炭層を示す。

0　4 m

第24図　南調査区土層断面実測図(1)（S＝1/80）

５区においては黄粘層２・８と茶鉄粘層６・７が複雑な堆積をなす。検出面は標高値６～6.2m を測る。黄粘層２は41m 付近でいったんとぎれ、その下位に茶鉄粘層６が堆積、さらに下位には黄粘層８が堆積する。その下位は明灰粘層24で畦畔層である。層２・６間には43～46m にかけて炭層が見られる。また層８・層11間には46～47m にかけても炭層が見られる。明灰粘層と暗灰粘層は5.8m 前後の標高値で検出されるが、46～49m にかけて10～20cm程度のもりあがりが見られる。掘削は標高値5.7m まで及ぶ。

６区においては黄粘層２、その下位に茶鉄粘層４が堆積し、５区で見られた層６はとぎれる。検出面の標高値は５区側が最も高く6.2m、以下は徐々に下がっていく。黄粘層・茶鉄粘層の下位には明灰粘層５・９・12、暗灰粘層10、青灰粗砂層20と、１～５区では見られなかった灰粘層の厚い堆積が見られ、一応のベースと捉えた明灰粘層に至る。ベース面の標高は5.5～5.6m を測り、５区以東よりも低くなっていく。ベース面直上にのる層20は比較的均一な広がりをもっている。以上の層序は、54m 付近から57m 付近で撹乱され、一部ではベースまで及んでおり、連続性を追うことができない。しかし、54m 以西では層15・16・17が確認されることから同様に灰粘層を基調とする堆積であったと推定する。56～57m にかけては暗灰粘層19のもりあがりがあり４・５区同様に畦畔と考えているものである。55m 付近では層14・15・19間に炭層が見られる。



下位横断面　土層
1　暗茶褐色粘質土（鉄分多く含む。）
2　暗茶褐色粘質土（炭粒多く含む。）
3　茶灰褐色粘質土（黄色土ブロック含む。）
4　黄褐色粘質土（３に鉄分が強く沈着。）
5　黄褐色細砂（ピット覆土か。）
6　暗灰褐色粘質土（７とほぼ同質、同層でもよい。若干茶色みがかる。）
7　暗灰褐色粘質土（炭粒、黄色土ブロック少し含む。）
8　暗灰褐色粘質土（茶灰色土・灰色土ブロック少し含む。）
9　暗灰褐色粘質土（炭粒含む。）
10　黄褐色粘質土（鉄分沈着して、黄色み強い。）
11　暗茶褐色粘質土（炭粒含む、鉄分多く含む。）
12　明茶灰褐色粘質土（砂っぽい、炭粒含む。）
13　暗灰褐色粘質土（鉄分、炭粒含む。）
14　暗灰褐色粘質土（13と似るが鉄分をより多く含む。）
15　黄褐色粘質土（灰色土ブロック含む。）
16　黄褐色粘質土（灰色土ブロック、鉄分含んで硬質。）
17　茶灰褐色粘質土（砂っぽい。）
18　暗灰褐色粘質土（砂っぽい、黄色土ブロック含む。）
19　暗灰褐色粘質土（炭粒含む。）
20　黄褐色粘質土（灰色土ブロック含む。）
21　暗茶灰褐色粘質土（黄色土ブロック、炭粒含む。）
22　明茶灰褐色粘質土（黄色土ブロック多く含む。）
23　暗灰褐色粘質土（炭粒、黄色土ブロック含む。）
24　暗灰褐色粘質土（炭粒、黄色土ブロックきわめて多く含む。）
25　36の残りか（鉄分、炭粒多く含み、黄色み強い。）
26　明黄褐色粘質土（よくしまる。）
27　暗灰褐色粘質土（砂っぽい。）
28　暗褐色粘質土（炭粒多く含む。）
29　暗灰褐色粘質土（炭粒多く含む、色調均一。）
30　黄褐色粘質土（砂っぽい。）
31　暗灰褐色粘質土（炭粒含む、上部鉄分沈着。）
32　濁灰褐色粘質土（黄色土ブロック・明黄色土ブロック多く含む。）
33　暗灰褐色粘質土（比較的均質。）
34　黄褐色粘質土（黄色土・灰色土ブロックが多く含まれ、砂っぽいか、よくしまる。）
35　明茶褐色粘質土（１ほど鉄分多く含まず、明るい色調。）
36　明茶褐色粘質土（黄色みがかる。黄色土ブロック含む。）
37　暗褐色粘質土（炭粒多く含む、28と同質。）
38　濁灰褐色粘質土（砂っぽい、黄灰色土ブロック含む。）
39　暗灰褐色粘質土（黄色土、炭粒含む。）
40　灰褐色粘質土（砂っぽい。）
41　明黄褐色粘質土（黄色土・灰色土ブロックの混層状を呈する。）
42　灰褐色粘質土（やや暗めの色調で、均質だが砂っぽいか。）
43　黒褐色粘質土（炭粒、黄色土、茶色土ブロック含む。）
44　明茶褐色粘質土（41より灰色土ブロック層状に含み、黄色っぽく、砂っぽい。）
45　茶灰褐色粘質土（黄色土ブロック、炭粒含む。）
46　褐色粘質土（黄色砂ブロック等含む。）
47　明黄灰褐色砂（上下の砂層の間層か。）
48　暗灰褐色強粘質土（炭粒含む。）
49　灰褐色砂（炭粒含むが、比較的均質。）
50　暗青灰色粘土（炭粒、木質含む。）
51　暗灰褐色強粘質土（９・48と同質。同層の伸びか。やや暗い色調。）
52　暗灰色砂（下部木質含む。）
53　明黄褐色砂（50を挟むか49と同質で、互層的。下部は灰色を呈する。）
54　濁暗褐色強粘質土（茶灰色土ブロック含む。）
55　濁灰褐色強粘質土（黄色土ブロック多く含み、やや汚れた感じ。）
56　濁灰褐色強粘質土（木質含み、下部は腐植質。）
57　濁灰褐色強粘質土（木質、灰色粘土・黄色土ブロック不規則に含み、汚れた感じ。）
58　暗灰褐色粘土（炭粒少し含むが、竪穴の覆土中ではもっとも均質。）
59　暗灰褐色粘土（58よりさらに暗い色調で、炭粒含まれず均質。）
60　黄灰褐色砂粘質土（シルト質、均質。）
61　暗灰褐色粘質土（薄い、ベース土に比して弱粘性。）
62　暗青灰色粘質土（下位遺構面のベース土、砂っぽい。）

黄色は黄粘層、茶色は茶鉄粘層、アミは暗灰粘層、黒色は炭層を示す。

0　4 m

第25図　南調査区土層断面実測図(2)（Ｓ＝１/80）

（3）下位横断面の土層（第25図）

次に主軸ラインにほぼ平行するより低地側での横断面の層序について述べる。その層序は3区～5区を中心にして記録しており、以下は「下位横断面」と称する。主軸で見られた上位の黄粘層・茶鉄粘層の堆積は基本的に少なく、薄くなる。そして対照的にその下層の灰粘他の層序が複雑になっている。最も上位の検出面の標高値は6m、最も下位の検出面では5.5～5.6mを測る。1区～2区の層序は図の東端で示される層序でほぼ安定している。上位から茶鉄粘層、間層3を挟んで暗灰粘層51、粗砂層52であり、比較的フラットな堆積でわかりやすい。その下層は暗灰粘層62で層52との間に木質を多く含むことから一応ベースと捉えた。2区・3区間には竪穴が位置するが、その層序については次項3で述べる。

3区においては上位は茶鉄粘層、その下に黄粘層4・41、暗灰粘層9・48、層9の下には粗砂層49・53が間層50を挟んで位置し、層9と層49は4区側に向かってとぎれ、27m付近では層48とベース土間に炭層があらわれ、29m付近～30m地点にかけて層48の上位にあらわれる炭層とともに層48を挟み込んで位置する。

4区においては基本的に上位茶鉄粘層1・2・35、間層36・41を挟み、下位は暗灰粘層という層序である。ベース土直上には木質が多く見られる。32～35m地点にかけて下位の暗灰粘層が炭層を挟んで複数層堆積する。35～36m地点付近では層36・41間が層39を挟んで区切られている。39～40m地点では間層がとぎれていき、上位・下位の暗灰粘層24・29・37・38が一致し厚い堆積層を形成している。

5区においては41m付近で4区で厚かった暗灰粘層が黄粘層26を挟んで分かれ、とぎれる。そして42m～44m付近にかけて黄粘層10・16・20と暗灰粘層14・19・27が互層に堆積する。この部分については（4）で後述する5区層17出土土器群の低地側に近接しており、その投棄に関係する整地土と推定している。44m～47m付近にかけては暗灰粘層がまた厚くなる。その一部、層13・14は46m付近から6区側にかけて、大畦畔の表層と捉えている層30の上位に位置しており、大畦畔の肩部を覆う形になっている。大畦畔の層序については次項（3）で述べる。6区の層序については、検出時点で既に残りが悪かったが、上位横断面とそう大きな差は無いものであった。

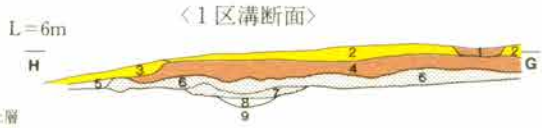
（4）縦断面の土層（第26図）

最後に、主軸に直交するライン、すなわち縦断面の層序について述べる。縦断面図は1区～6区それぞれの層序を把握できるように観察し作成した。1区については丘陵側から斜位に黄粘層12・茶鉄粘層13が層14・16～18上に堆積する。低地側では層15上に暗灰粘層5～8が堆積している。それより低地側は耕作で撹乱されているようである。1区・2区の境となる10m地点では上位から黄粘層2・3、茶鉄粘層4、暗灰粘層6の層序で一定している。標高値は最も上位の検出面で5.8～6.4m、下位の検出面で5.6m前後を測る。

2区～5区においては斜位の堆積が実に顕著であり、炭層を挟む箇所が複数見られる。2区での検出面の標高値は最も上位で6～6.2m、最も下位で5.7mを測る。2区の炭層は層4と層5・6間、層8と層11・13間、層10と層15・19間で確認される。層位関係から見て炭層は低地側から順に堆積したものと言える。暗灰粘層は概ね下位面近くで見られ、層7・14・15・20・21が相当する。これらのうち層7・14・15はきわめて炭層に接近した層位にある。層23を境として土質が一変するため、層23を一応のベース面と捉えたが、層23中には木質が目立って多く含まれており、より古期の包含層となる可能性がある。

3区の縦断面層序については30m地点縦断面で代表させる。検出面の標高値は最も上位で5.9～6.1m、最も下位で5.6mを測る。炭層は層4・ベース土間で確認される。また、質的に炭層によく似る暗灰粘層7・14、及び層15・16が存在する。層7・14は間に黄粘層を薄く挟み上下に分かれる。層位関係から見て、最も低地側の炭層が他の炭層よりも先行して堆積すると言える。層15・16からは中世土師器椀・皿がまとまって出土しており、次項4で後述する。さらに下位で、丘陵側には層18が段状に盛り上がっており、同様に低地側端にもベース土とした層19の盛り上がりがある。どちらも畦畔と推定している。ベース土とした層19の暗灰粘層は丘陵側では確認

1区縦断面　土層
1　耕作痕か（土質は黄色砂・黄褐色粘土など様々。）
2　暗青灰色粘質土（根茎含む。耕作痕か。）
3　暗青灰色粘質土（黄色砂ブロック大きいもの含む。耕作による攪乱か。）
4　茶褐色粘質土（炭粒含む。）
5　暗灰褐色砂（黄色土ブロック、炭粒含む。）
6　暗灰褐色粘質土（炭粒含む。）
7　暗灰褐色粘質土（6より強粘質で、炭粒少ない。）
8　暗灰褐色粘質土（7と同質で、やや腐植質。）
9　黄褐色砂（炭粒含む。）
10　暗青灰色粘質土（2よりも均質。）
11　黄褐色粘質土
12　黄褐色粘質土（11と同質だが、より後出的な堆積。）
13　暗茶褐色粘質土（鉄分沈着。）
14　茶灰褐色粘質土（鉄分、灰色土ブロック多い。）
15　茶灰褐色粘質土（14より鉄分ブロック明確。）
16　黄褐色粘質土（灰色土ブロック多い。）
17　黄褐色粘質土（16より粘性高く、黄色み強い。）
18　灰褐色粘質土（ベース土に近い。）
19　黄灰褐色粘土（下位遺構面のベース土。）



1区溝断面　土層
1　暗茶褐色粘質土
2　黄褐色粘質土
3　黄褐色粘質土（鉄分沈着、2より灰色土ブロック多く含む。）
4　暗茶褐色粘質土（1より粘性強く、鉄分多く含む。）
5　灰褐色粘質土（鉄分含む。）
6　暗灰褐色強粘質土（鉄分、炭粒含む。）
7　暗灰褐色強粘質土（6よりも暗い色調。）
8　灰褐色砂（溝内の流砂。）
9　灰褐色粘土（下位遺構面のベース土。）

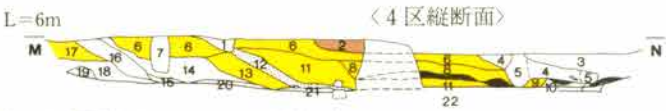
2区縦断面　土層
1　暗茶褐色粘質土（下部鉄分沈着。）
2　灰褐色粘質土（黄色土・茶色土ブロック、炭粒含む。）
3　黄灰褐色砂（黄色土・灰色土ブロック含む、溝内の流砂か。）
4　黄灰褐色砂質土（暗灰色土ブロック、炭粒含む。）
5　明灰色砂（4もしくは6がやや還元された色調か。）
6　黄灰褐色砂質土（暗灰色土ブロック多く含む。炭粒含む。）
7　暗灰褐色強粘質土（炭粒含む。）
8　黒褐色粘質土（色調は炭細粒と腐植による。炭層に似る。）
9　暗灰褐色粘土（鉄分・黄色土ブロック、炭粒含む。）
10　茶灰褐色粘土（鉄分・木質ブロック含む。）
11　黄褐色粘質土（下部鉄分多く含む。）
12　明黄灰褐色砂質土
13　明黄灰褐色砂質土（間に炭層挟んで12と同質。南側は均質、北側は灰色土ブロック含む。）
14　暗灰褐色粘質土（大粒の炭含む。）
15　暗黒褐色粘質土（黄色土ブロック、炭粒含む。南側は炭層に似る。）

16　暗茶褐色粘質土（南側は黄色を呈し、下部鉄分沈着する。）
17　黄褐色粘質土（灰色土・暗灰色土・黒色土ブロック含む。）
18　茶灰褐色粘質土（黄色土ブロック含む。）
19　明黄灰褐色粘質土（灰色土ブロック・黄色土ブロック含む。）
20　暗灰色粘質土（やや砂っぽい。）
21　暗灰褐色粘質土（20より均質になる。）
22　暗灰褐色粘質土（下位遺構面のベース土か、木片多く含む。）
23　明黄灰褐色粘質土（きわめてよくしまる。）

3区縦断面　土層
1　茶褐色粘質土（しまり悪く、ぼそぼそした感じ。）
2　茶灰褐色粘質土（しまり悪く、ぼそぼそとした感じ。）
3　黄褐色粘質土（茶色・灰色土ブロック多い。）
4　茶灰褐色粘質土（5か6と同層になるもの、炭粒含む。）
5　茶灰褐色粘質土（黄色土ブロック含む。）
6　茶灰褐色粘質土（炭粒含む。）
7　暗灰褐色粘質土（炭粒含む。）
8　黄褐色粘質土（茶灰色土ブロック含む。）
9　茶灰褐色粘質土（黄色土ブロック含む。）
10　黄褐色粘質土（8と同層になるものか。）
11　黄褐色粘質土（鉄分沈着。）
12　茶褐色粘質土
13　黄褐色粘質土（鉄分沈着。）
14　暗灰褐色粘質土（15と同層になるものか、木質多く含み、腐植土的。）

15　暗灰褐色粘質土（炭粒・土器を多く含む。炭層に似る。）
16　暗灰褐色粘質土（15より薄い色調。黄色土ブロック含む。）
17　明茶灰褐色粘質土（黄色土ブロック含む、炭粒少し含む。）
18　明黄褐色粘質土（均一でよくしまる。畦畔。）
19　暗灰色粘土（畦畔か。）
20　暗灰色粘土（下位遺構面のベース土。）

4区縦断面　土層
1　暗灰褐色土（やや黒みが強く、炭粒含む。遺構覆土。）
2　茶褐色粘質土（しまり悪い。）
3　茶灰褐色粘質土（炭粒含む。）
4　茶灰褐色粘質土（黄色土ブロック含む。）
5　茶灰褐色粘質土（4より均一な土質、遺構覆土か。）
6　黄褐色粘質土（下部鉄分多く含む。）
7　茶灰褐色粘質土（やや暗い色調、遺構覆土か。）
8　明黄褐色粘質土（炭粒目立って含む。）
9　明黄褐色粘質土（8とほぼ同質、続きか。）
10　灰色砂（暗灰色粘土ブロック含む。）



11　明黄褐色粘質土（黄色土ブロック、炭粒含む。）
12　暗灰褐色土（炭粒多く含む、下部本質含む。）
13　明黄褐色粘質土（黄色土ブロック含む。）
14　茶灰褐色粘質土（黄色土ブレック含む。下部砂っぽい。）
15　暗灰褐色砂質土
16　茶灰褐色粘質土（炭粒含む。）
17　黄褐色粘質土
18　明黄褐色粘質土（きめ細かくよくしまる、畦畔。）
19　明黄褐色粘質土（18よりも均一、改修前の畦畔か。）
20　黄色砂
21　灰白色砂
22　暗灰色粘土（木質非常に多く含む、下位遺構面のベース土。）

5区縦断面　土層
1　黄褐色粘質土（茶色土・黄色土ブロック、鉄分含む。）
2　茶褐色粘質土（黄色土・灰色土・暗褐色土ブロック含む。）
3　暗褐色粘質土（灰色粘土ブロック含む。）
4　茶褐色粘質土（黄色土ブロック、褐色土ブロック含む。）
5　茶褐色粘質土（下部鉄分強く沈着。）
6　茶褐色粘質土（炭粒含む。）
7　茶褐色粘質土（下部鉄分強く沈着。）
8　茶褐色粘質土（黄色土ブロック、炭粒含む。）
9　茶褐色粘質土（炭粒8より多く含む。）
10　暗灰褐色粘砂（下位遺構面の直上。）
11　暗灰褐色粘質土（8に似た色調、灰色砂ブロック含む。）
12　暗灰褐色粘質土（比較的均質、炭粒含む。）
13　明黄褐色粘質土（褐色土ブロック含む。）
14　暗灰褐色粘質土（灰色砂ブロック含む。）
15　暗灰褐色粘土（下位遺構面の直上。）
16　茶灰褐色粘質土（炭粒多く含む。）
17　茶褐色粘質土（6とほぼ同質で、やや灰色がかる。炭粒含む。）
18　灰褐色粘質土（下部に木質含む。）
19　明黄褐色粘土・茶褐色粘質土混層（炭粒含む。）
20　暗灰褐色粘質土（黄色砂多く含む。）
21　暗灰褐色粘質土（22と炭層の間層的。）
22　明黄褐色砂質土（均一でよくしまる。畦畔か。）
23　暗灰褐色粘土（畦畔か。）
24　暗灰褐色粘土（下位遺構面のベース土。）

6区縦断面　土層
1　攪乱
2　濁黄褐色砂質土
3　灰褐色粘質土（砂含む）
4　濁黄褐色砂
5　黄褐色砂
6　黄褐色砂層（粘質土ブロック含む）
7　灰色砂層
8　茶灰色砂層
9　暗灰色砂層（下部に炭層あり）
10　濁灰色粘質土
11　黄灰色砂
12　灰色粘土

黄色は黄粘層、茶色は茶鉄粘層、アミは暗灰粘層、黒色は炭層を示す。

第26図　南調査区土層断面実測図(3)（S＝1/80）

できていないが、層18の下位に位置するものと思われる。

4区では検出面の標高値は最も上位で5.8～6m、最も下位で5.6mを測る。炭層は層10の直上、ベース土の直上、層8・11間で認められる。層位関係から見ると3区同様に低地側の炭層から堆積していると言える。黄粘層の堆積が他区より顕著であり、炭層・暗灰粘層と互層状に上位から層8・炭層・層11・暗灰粘層12・層13と堆積するのが特徴的である。断面の丘陵側端には層18が段状に盛り上がっており、同様に低地側端にもベース質土の盛り上がりがある。どちらも畦畔と推定している。

5区では検出面の標高値は最も上位で5.8～6m、最も下位で5.5mを測る。炭層は層5・13・14と6・16・17間と、層7・19・20と層21・22間の2箇所で厚い広がりが認められる。この他の炭層はやや薄くなるが、層5・8間、層8・9間、層11・12と層6・15間、層10と層11間に認められる。暗灰粘層は層3・10・11・12・14・15・21が相当する。層3を除いては全て炭層に接して位置する。層17とその上位の炭層からは中世土師器椀・皿がまとまって出土しており（第27図）、次項4で後述する。上位の黄粘層1・茶鉄粘層2・4～9は炭層を覆うように堆積する層である。断面の丘陵側端には砂質土層22が、低地側端には暗灰粘層23が同様に盛り上がっており、どちらも畦畔と推定している。

6区では検出面の標高値は最も上位で5.9m、最も下位で5.6mを測る。2区～5区で見られた斜位の堆積は顕著ではなく、また一部に撹乱も受けておりあまり層序を明確に言えない。最も上位に黄砂層6の厚い堆積があるが、他の堆積層はいずれも不均一で薄い。炭層は層9とベース土層間に薄く認められている。

（5）層序小結

ここでは、各区の層位の状況から、貝田遺跡南調査区の層序の基本的な特徴をまとめてみたい。まずは各土質の分布状況について述べる。茶鉄粘層と黄粘層については、前述したとおり、鉄分溶脱前は同層であった可能性を考えている層であるが、土層の分布もよく似た状況を示す。両層が同一地点でみられる場合、上下に接して存在することが多い。また、両層とも均一で厚い安定した堆積層が調査区の北部、すなわち丘陵側で顕著に見られる。また、1区においても同様に認められる。そして低地側及び2～6区では対照的にあまり広域に連続せず、むしろ限定的なありかたを示し、他層と錯綜している点も共通している。暗灰粘層は2区段状遺構への堆積とも考えられる北部を除いては、他の層と錯綜しながら限定的な堆積層として認められることが多い。また、総じて調査区の南部、すなわち低地側でよく認められる。炭層については暗灰粘層とよく似たありかたを示しており、暗灰粘層に準じた存在と考えられる。これら堆積層の下位には、堆積層中の暗灰粘層に比べて遺物の含みがきわめて少なく、やや色調が暗く、締まりがよい暗灰粘層が比較的フラットな面を形成しており、一応のベース面と捉えている。この調査区の層序を簡潔に現わすことは難しいが、1区と調査区の丘陵側で比較的単純で安定した堆積、2区から5区及び低地側では非連続・限定的な土質が複雑に錯綜した堆積を示す、と言う事はできよう。1区と2～5区、丘陵側と低地側という両種の堆積状況の差異は遺跡内の各地点の性格の違いをあらわすものと考えておきたい。6区については撹乱がひどく、詳細な層位は不明であるが、2区～5区ほどの土層の錯綜はなくなってきていると言う印象を得ている。

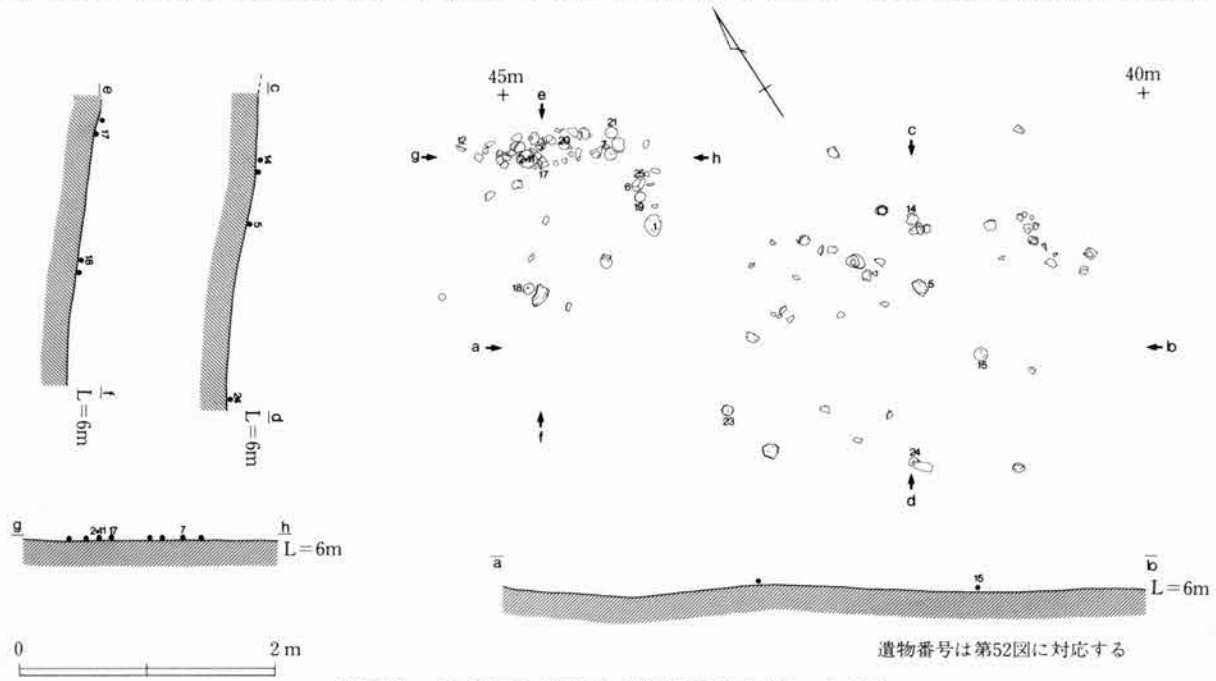
次に、層別・土質別の遺物の出土状況について述べる。各層から出土した遺物は非常に多く、遺物が出土しない層はないと思えるくらいに、実にほとんど全ての層に含まれている。土質別では、黄粘層、茶鉄粘層からは弥生時代から中世にかけての幅広い時期の遺物が出土している。酸性度が高いためか全体的に残りが悪く、土中の鉄分がこびり付いていたり、風化で器面が荒れているものが大半である。時期別では弥生後期の土器、中世前半期の土師器が多い。特に、弥生土器については出土遺物の大半が両層からの出土である。暗灰粘層からは中世前半期の遺物が多く出土しており、他の時期の遺物はきわめて少ない。また、主に低地側でベース土に密着する炭層や、ベース面上からも中世前半期に位置付けられる遺物が多量に出土している。暗灰粘層、ベース面上からは、

土質のためか、水分が多いためか、木器・木製品の遺存が良好で、出土量も多い。ベース土については土器等は見られないものの、木質が含まれており、より下位の遺物包含層となる可能性もあろう。

さて、ここで注目しておきたいのは、黄粘層、茶鉄粘層といった基本的に上位の堆積層に弥生土器など古い時代の遺物が多く、ベース面に中世土師器などのより新しい時代の遺物でほぼ占められるという、層の上下と新古が逆転した、層位学的に矛盾した堆積が認められる点であろう。この層位の逆転現象を説明するには、貝田遺跡の立地を考えることが有効である。貝田遺跡は富来川右岸の独立丘陵に立地しており、頂部から裾部一帯にかけて分布すると推定されているが、今回の分布調査、発掘調査及び関連調査によって地形的にも明らかになった部分は多い。まず遺跡が立地する独立丘陵は、厚く堆積した大原統の黄褐色土で構成されているが、風化が進んで砂っぽくなっており、かなり古い時期に形成されたものと思われる。南調査区は丘陵の裾部、丘陵から低地への地勢の変換ラインの周辺に位置しているが、検出されたベース土の質から考えると、当時は低地であったと考えられ、土層断面は現行よりもフラットな地形を描く。さらに、第２次調査の層位ではより下位に相当すると思われる位置でも、粘土層からなる堆積が続いており、より以前も低地であったろう。ところが南調査区で確認したベース面より上位の土層については、明らかに丘陵部で見られるはずの黄粘層・茶鉄粘層が存在し、斜位に堆積しており、緩傾斜面を形成している。すなわち、本来この地点にはあり得ない土質であり、現位置を移動してここに堆積したと考えられるのである。よって黄粘層・茶鉄粘層については基本的に２次的な堆積土であり、含まれた古期の遺物は、移動した土層内に含まれていたものと考えられよう。おそらくは貝田遺跡の丘陵上に存在する包含層や遺構覆土と推定している。

そして、２区～５区にかけて傾斜に沿って斜方向に限定的で非連続的な分布を示す炭層・暗灰粘層は、各堆積層間を縫うように認められ、他層と異なって中世前半期の遺物を多く伴っていることから、その形成時期をよく示している。炭層・暗灰粘層が堆積する機会は限定的ながら２区～５区のあちこちで点在的に幾度となくあったようである。それは、中世前半期の貝田遺跡にとってきわめて重要な局面であったろうと推定する。

以上から、貝田遺跡の土層堆積の過程をまとめてみたい。まず、ベース面の段階では調査区は低地であり、現況よりもフラットな地形が展開していた。次に、特に２～５区において丘陵土も含んだブロック的な各層の斜位堆積が盛んになされ、丘陵側が高くなり、少し傾斜が強くなる。この間、随時炭層・暗灰粘層も他層と互層的に形成される。そして丘陵側が黄粘層・茶鉄粘層で覆われて、現況に近い緩傾斜地形が形成される、とまとめられる。以上示した堆積はおそらくは中世に進行するものと思われるが、特に２～５区で錯綜した各層の堆積は非常



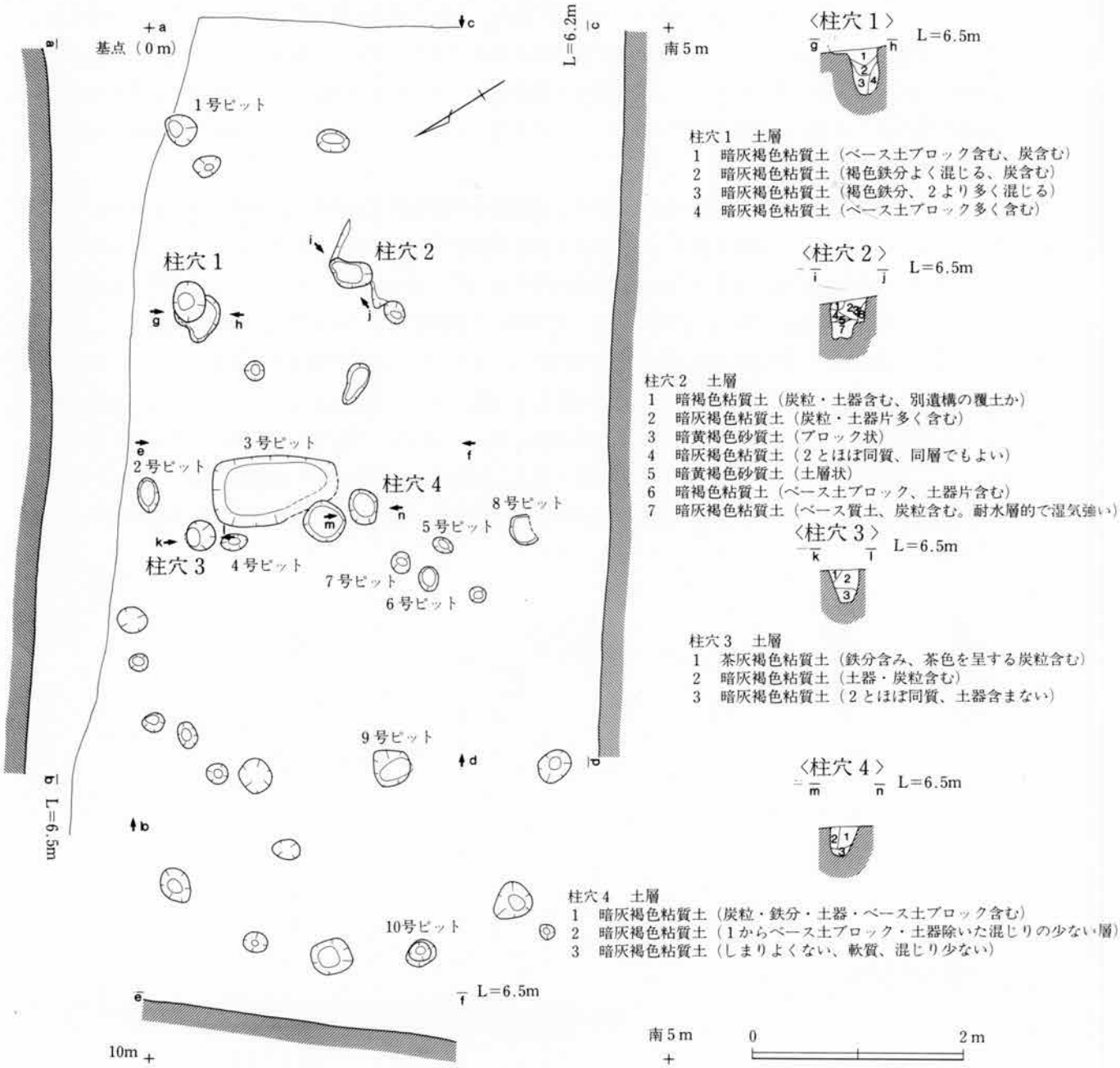
第27図　５区層17　遺物出土状況実測図（S＝1/60）

に人為性の高い、不自然な動向であり、貝田遺跡のピーク期の一つと思われる中世前半期の重要な動向の一端を示すものと思われる。この層序の形成については以後、次項3で遺構、次項4で遺物について述べた後、次項5で、3・4の所見も交えながらもう一度考えることにしたい。

3　遺構

（1）掘立柱建物（第28図）

1区北半、丘陵側の傾斜地に位置する。調査区の層序では最上位の茶鉄粘層（第26図1区層13）もしくは黄粘層（第26図1区層12）の上面で検出した。検出面の標高は丘陵側で6.3m、低地側で6.1mを測り、傾斜に応じた高低差がある。1区では同じ面で多くの小穴が検出されているが、深さ、断面形、覆土の土質などから確実に柱穴と断定できたものが4穴あり、第28図に示す通り柱穴1～4とした。柱穴1～4は四角形の四隅を占める平面配置を取っており、掘立柱建物跡の一部と認識される。ただし、柱筋は穴の中心からずれており、厳密には揃わない。柱穴1は北東隅、柱穴2は南東隅、柱穴3は北西隅、柱穴4は南西隅に位置する。規模的には平面形楕円



第28図　掘立柱建物実測図（S＝1/60）

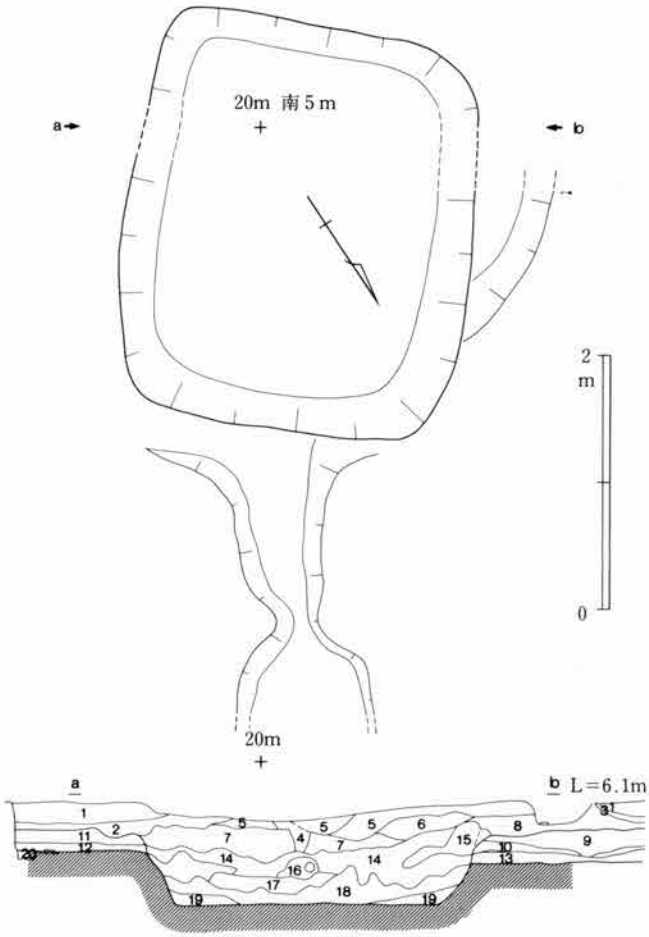
形で長径30～40cm前後、深さは柱穴１・柱穴２で40cm前後を測り、柱穴１・柱穴２がやや大きく、深い。また柱穴１・柱穴２は掘りかたが確認されている。各柱穴の覆土は暗灰褐色の粘質土を基調とし、どの柱穴でも細かい差で上下に分層されることが特徴的である。どの柱穴でも木柱そのものは遺存していなかった。柱間距離は東西列で約2.3m、南北列で約1.6mを測り、東西列が長くなる。東西列の方向はN－61°－Wを指す。

調査区内で確認しえた規模は以上のように東西１間、南北１間のみであるが、その周囲では東側で１号ピット、西側で９号ピット・10号ピット、南側で８号ピットなどが柱筋の延長線上に近接している。これらは覆土は似るものの柱穴１～４に比べると確実に浅く、東西・南北列の一方しか検出できていないことからも、建物の一部と断定することは難しい。柱穴を検出した面については、必ずしもプライマリーな状態で存在していたとは言い難く、後世に削平を受けた可能性が高い。本来の遺構面はより上位であり、別の層にあった可能性もあろう。ゆえに柱穴１～４の深さや形状に違いがあり、また柱穴を十分に検出できなかったのかもしれない。現状では東側・西側・南側・北側全てに柱筋が伸びている可能性が残されている。また、東西列、南北列のどちらが梁行、桁行となるのかも現状では不明である。

遺物は各柱穴から出土しているが、覆土には基本的には含まれない。柱穴が切り込む茶鉄粘層、黄粘層そのものが前項２で述べた通り多量の遺物を含んでおり、混入したものと思われる。弥生土器、中世土師器が主体であるが、いずれも小破片で残りが悪く、図化できるものはない。よってこの遺構の時期は確定できる遺物が乏しく、不明とせざるを得ない。ただし、検出した遺構面のうちでは最も上位に位置するため、どの程度の時期差をともなうのかはかりがたいが、その下位の堆積層よりは確実に後出するものと言える。

（２）ピット

調査区内で大小の穴は無数に確認されているが、そのうち遺物が出土したものについて番号を振ってピットと認定した。１号～26号まで、計26穴数えられる。１～24号ピットは掘立柱建物と同様に最上位の茶鉄粘層もしくは黄粘層の上面で検出できた。１～10号ピットは１区の掘立柱建物の周辺で、11～13号ピットは４区、14～24号ピットは５区に位置する。25号、26号ピットは調査の及んだ最下位のベース面で確認した。位置的には１区と５区の最上位面に集中する傾向がある。ピットの規模・形状は、長径で50cmを超えないような不整楕円形を呈する平面形、深さ40cmに達しない程度のものが多い。あてはまらないものは３号ピットぐらいである。長径10cm代は11号、20cm代は４号～７号・10号・14号・17号・23号・24号・26号、30cm代は１号・２号・８号・９号・12号・

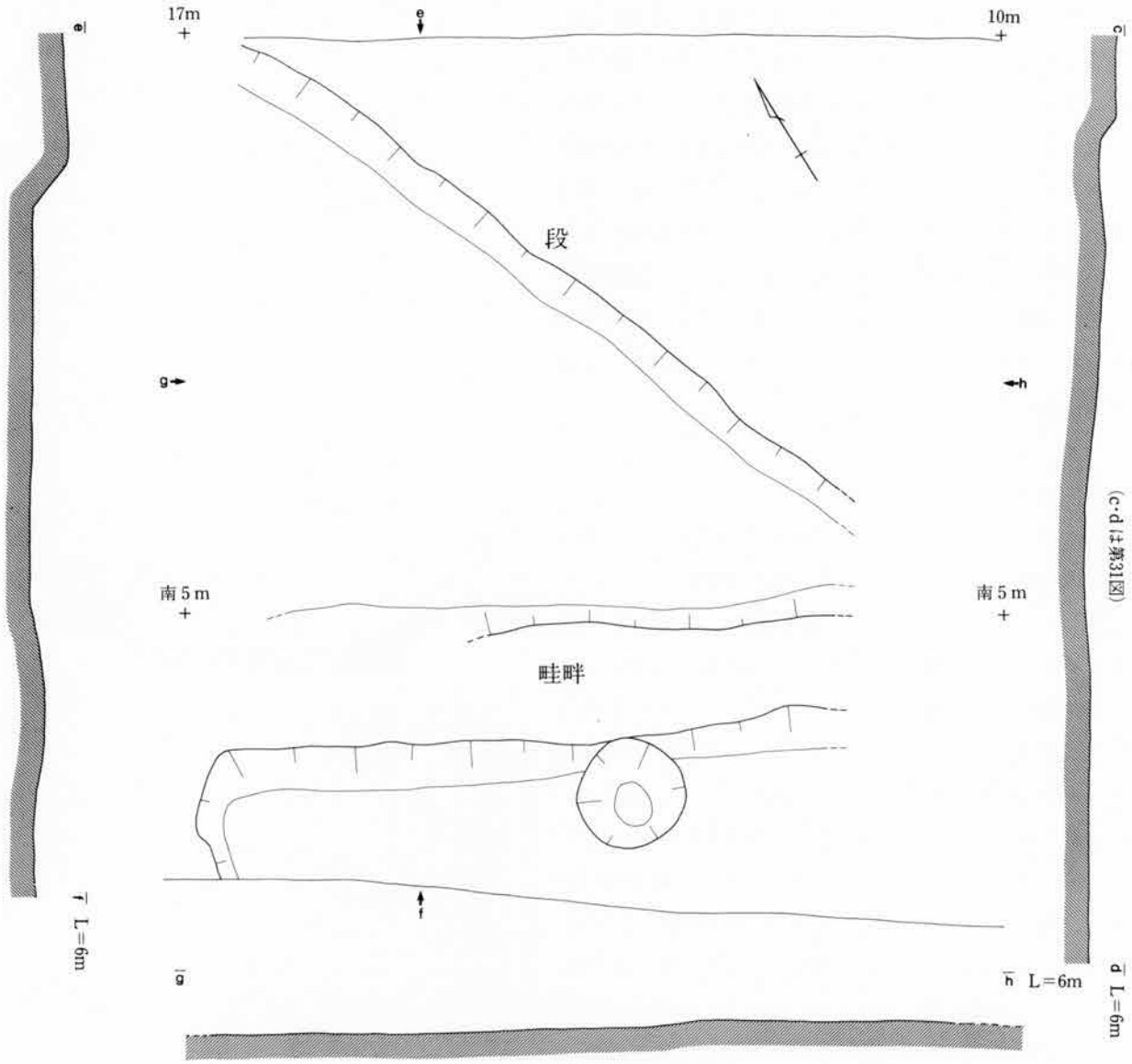


竪穴　土層
1　暗茶褐色粘質土（鉄分多く含む。）
2　茶灰褐色粘質土（黄色土ブロック含む。）
3　黄褐色粘質土（２に鉄分が強く付着）
4　黄褐色細砂（ピット覆土か。）
5　暗灰褐色粘質土（６とほぼ同質、同層でもよい。若干茶色みがかる。）
6　暗灰褐色粘質土（炭粒、黄色土ブロック少し含む。）
7　暗灰褐色粘質土（茶灰色土・灰色土ブロック少し含む。）
8　暗灰褐色粘質土（炭粒含む。）
9　灰褐色砂（炭粒含むが、比較的均質。）
10　暗青灰色粘土（炭粒、木質含む。）
11　暗灰褐色強粘質土（８と同質、同層の伸びか。やや暗い色調。）
12　明灰色砂（下部木質含む。）
13　明黄褐色砂（10を挟むが９と同質で、互層的。下部は灰色を呈する。）
14　濁暗褐色強粘質土（茶灰色土ブロック含む。）
15　濁灰褐色強粘質土（黄色土ブロック多く含み、やや汚れた感じ。）
16　濁灰褐色強粘質土（木質含み、下部は腐植質。）
17　濁灰褐色強粘質土（木質、灰色粘土・黄色土ブロック不規則に含み、汚れた感じ。）
18　暗灰褐色粘土（炭粒少し含むが、竪穴状の覆土中ではもっとも均質。）
19　暗灰褐色粘土（18よりさらに暗い色調で、炭粒含まれず均質。）
20　黄灰褐色砂粘質土（シルト質、均質。）

第29図　竪穴実測図（S＝1/60）

21号、40cmを超えるものは３号・13号・15号・16号・18号・20号・22号・25号である。３号・18号については他の穴と切りあっているので不明である。深さは10cm未満のものは１号・６号・11号・19号・24号、10cm代は４号・５号・７号・12～14号・16～18号・20号・21号・25号、20cm代は３号・10号・15号・22号・23号・26号、30cm代は９号である。覆土は暗灰色粘質土、明灰色粘質土、茶鉄粘の濁ったものなどがあるが、位置、遺構面と対応しないものが多い。出土遺物は最上位面で検出した１～24号ピットに関しては覆土にはほとんど含まれない。掘立柱建物と同様で、遺構が切り込む茶鉄粘層、黄粘層そのものが含んでいる遺物が混入したものと思われる。最下位面の25号ピットについては遺存していた木柱が得られている。26号ピットについては覆土から土器小破片が出土したのみである。

以上のピットのうちでは、柱穴と思われるものが幾つかあるが、柱筋が通らず規模は不明である。最下位面で検出された25号ピットは木柱が遺存しており、26号ピットと東西方向の柱列をなす可能性を持っている。ただ、25号・26号ピットについては最下位面の遺構とするならば、余り深くないこと、木柱が遺存するもののその上端のレベルが検出面よりかなり高くなっていることについてうまく説明ができない。検出面を誤認したか、一般的な掘立柱建物とは異なる性格や構造を持つ可能性も考えておきたい。他のピットのほとんどは柱列をなすかどうか不明確であり、柱穴と判定し掘立柱建物の一部と見ることが難しい状況にある。



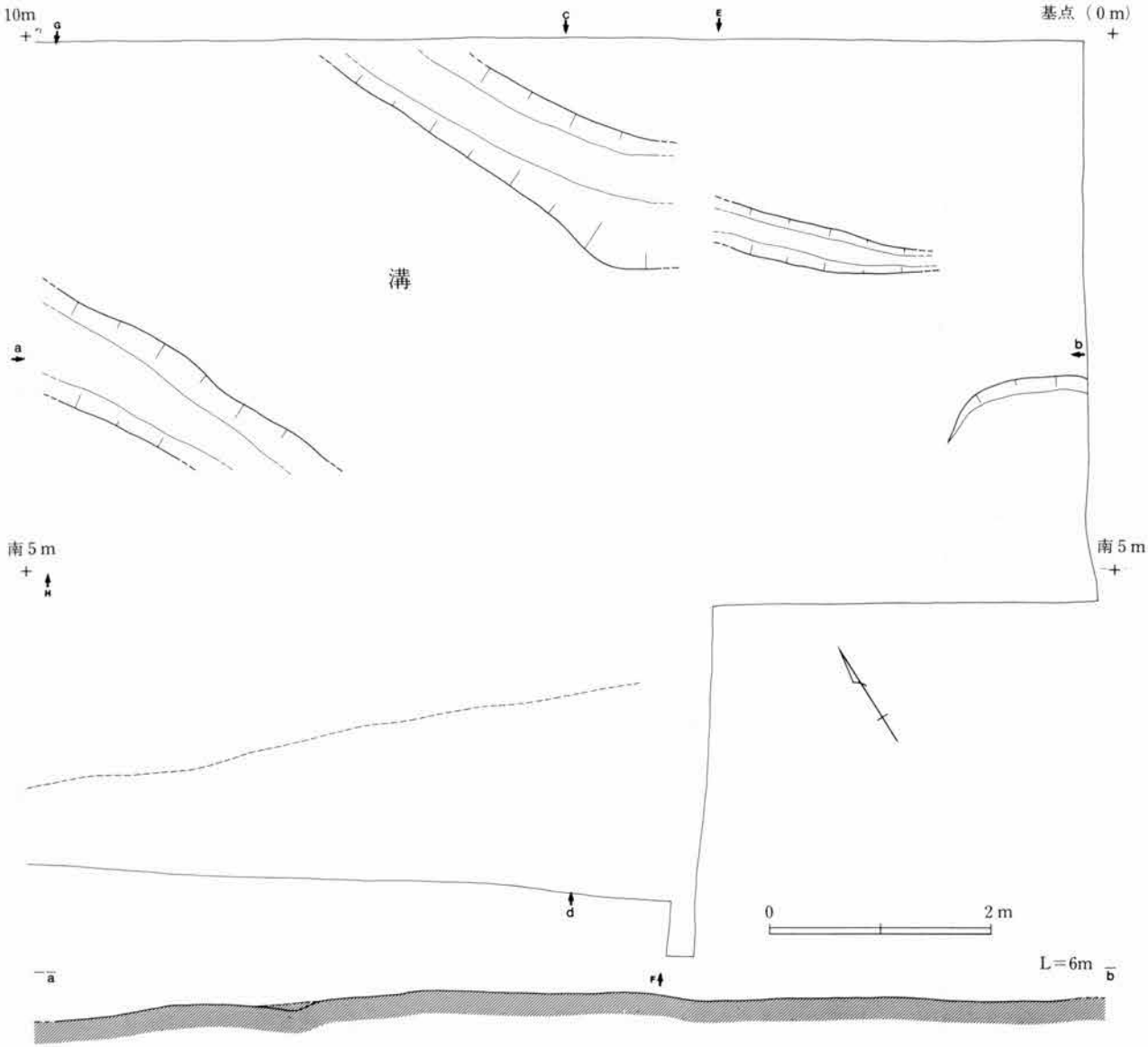
第30図　２区下位遺構実測図（S＝1/60）

各ピットの時期は確定できる遺物が乏しく、不明とせざるを得ない。ただし、層位的に最も上位に位置する１～24号ピットについては、掘立柱建物と同様に、その下位の堆積層より後出的な時期と言えよう。掘立柱建物と同時期か前後する時期かについては明らかにはできない。25号ピット・26号ピットについては堆積層以前の時期、と推定したいが、実際の遺構面をより上位にもっていた可能性もあるため位置付けは保留しておきたい。

（３）竪穴（第29図）

２区・３区境、南半に位置する。最下位のベース面上で検出した。検出面の標高は約5.8～６ｍを測る。平面形は隅丸長方形を呈する竪穴状の土坑である。検出面で長辺約3.2m、短辺約2.7ｍを測る。南北辺が長辺となる。強い傾斜を付けて掘り込まれ角度の急な壁を形成するが、底に至るには比較的緩やかに丸みを持って移行する。検出面からの深さは40cm前後、底面は概ね平坦であり、長辺2.7m、短辺2.1ｍを測る。また、同じ検出面で竪穴の北に隣接して溝状に南北に伸びる凹みが確認された。平面形は不整で深さも10cm以下と浅いものであり、竪穴との関係については不明である。

竪穴は上下の遺構面の中間的な層位から掘削されており、上下の遺構面間にさらに遺構面を見いだすことができる。竪穴とその周囲の土層は、断面で見ると複雑に錯綜しているが、竪穴がほぼ埋没してその形状を失うまで



第31図　１区下位遺構実測図（Ｓ＝１/60）

の堆積土は層14～19であり、6層の覆土になるものと思われる。覆土は上位の層14・15・17が混じりの多い粘土、下位の層18・19が均質な粘土であり、土質では上下に大きく分層される。各層の堆積は層19を除いては不均一な状況である。層19は底面壁際に寄って堆積しており、自然堆積と見たい。層14～18は比較的短期間のうちに堆積したと思われ、積極的に埋め戻されたものと推定している。

遺物は覆土から弥生土器、須恵器、中世土師器、陶磁器、銭貨、敲石が出土しているが、パンケースに1箱と少量で小破片が多く、時期的なまとまりはない。これらは覆土が竪穴に堆積する前の時点から、既に含まれていた遺物と考えられ、その掘削や埋没の時期を示すものではない。遺構の時期については遺物では明示できないが、層序から考えると、層1～3の錯綜する堆積層より古く、層9・11と同時かより新しいという位置付けがなされる。一応中世前半期と捉らえておきたい。

中世期の竪穴の用途については、具体的にそれを示す遺物の出土が少ないため明らかになっていないが、各地の類例には小住居、作業場、貯蔵場などが想定されているものがある。貝田遺跡例は調査区の南半、低地側に立地し、壁・底面とも柔弱な粘土で、湧水もあった。きわめて低湿な地下空間と言える。よって居住や火を使う作業、乾燥物の貯蔵等には適さないであろう。また、丘陵地形が展開している調査区の北半かそれ以北に同様に竪穴を掘削するならば水はけ・通気性は格段によいはずである。それにもかかわらずあえて低湿地に築かれたこの竪穴はおそらくは湿気を利用した、水が関わった用途をもつものと思われる。共通した立地をとる類例の増加を待って詳しく検討したい。

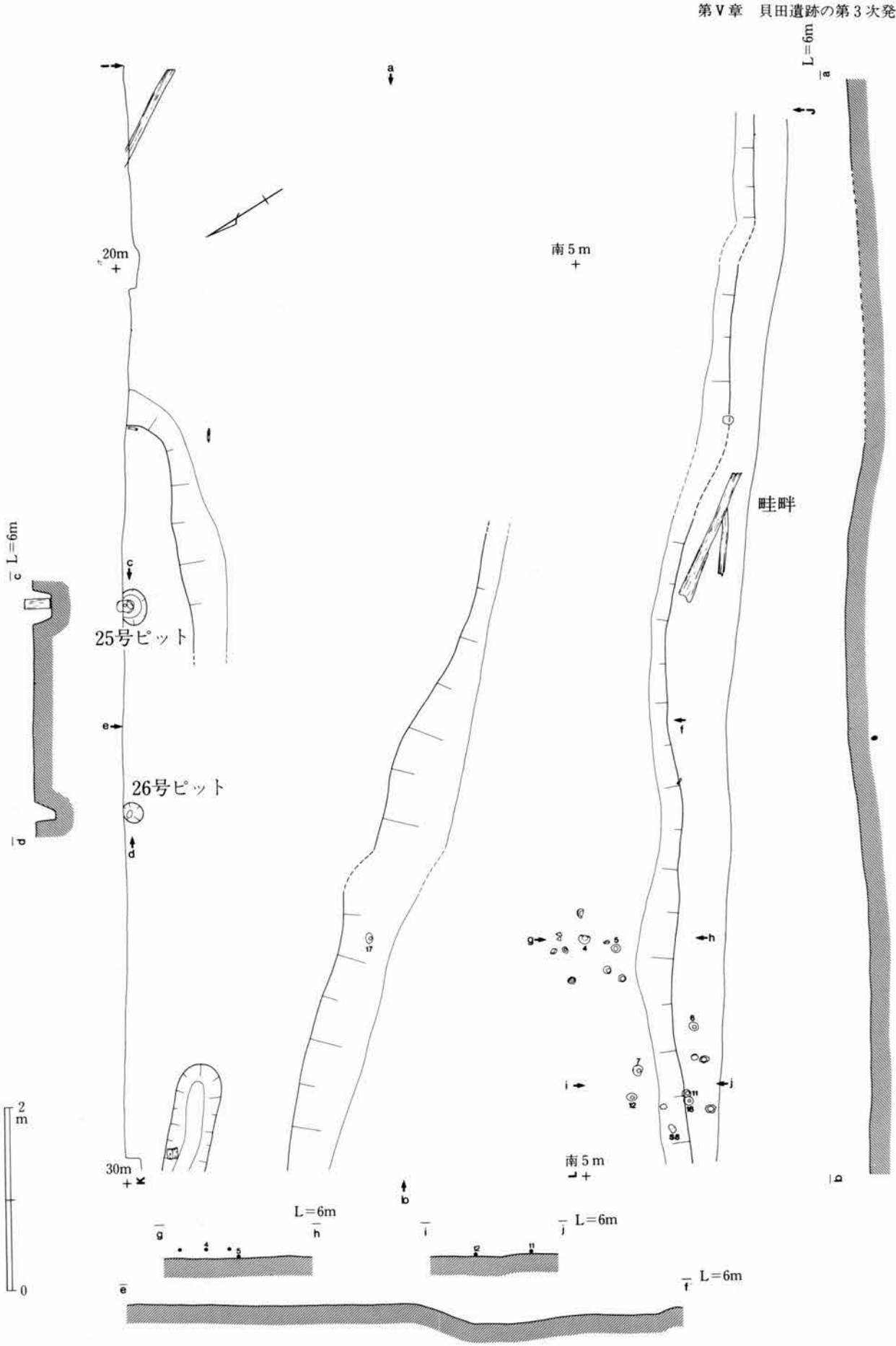
（4）畦畔（第30～35図）

4区から6区において錯綜した堆積層を掘り下げた際に、帯状に伸びた異質な土のブロックが検出された。帯状ブロック土は堆積層の下位に入り込んでおり、堆積層が除去されると最下層面に断面略台形の隆起が存在することが確認された。同様の隆起は2区・3区でも確認され、調査区全体である程度の規則性と方向性をもつ遺構となった。その性格や機能についてふれる前にまず、各区毎に遺構の特徴について述べてみたい。記述は基本的に2区から6区に向かって進めるものとする。

2区（第30図）においては南半に、調査区主軸及び丘陵の等高線に沿った方向で走り、3区側で南へカーブしてすぐにとぎれている。幅は上底部で80～95cm、下底部で1.25～1.5m、上底部と下底部間の比高は7～10cmを測る、低平な隆起である。土質はベースとした暗灰褐色粘土と基本的に同じであり、ベース土に手を加えることによって形成したと推定する。

3区（第32図）においては北半と南半の両側で確認した。確認したのは北半部は低地側の段、南半部は丘陵側の段のみであるが、4区に繋がって帯状となるものがあること、南北の段がかなり距離をおいて向い合うこと等から、段や溝とは性格の異なる遺構として、この項で扱うものとする。北半部の隆起はN－40°－W前後の方位を指して、調査区主軸に斜交して走り、4区へつながる。比高15～23cmを測る、比較的はっきりした段である。南半部の隆起は調査区の南端で確認した。等高線にほぼ平行して走り、4区と、ごく一部であるが2区へつながる。比高は3cm前後と浅く、低平である。南半部、北半部ともベース土と似た暗灰褐色粘土で形成されている。

4区（第34図）においては北半と南半において、3区から連続して隆起を確認した。北半部の隆起は、調査区北端で丘陵側の段があらわれており、帯状に走っていることが確認された。方向は3区よりやや西へ振れてきており、調査区主軸にほぼ平行する。幅は上底部で約42cm、下底部で約1.2m、比高約5～14cmを測る。また、33～34m地点では低地側に向かって1mほどほぼ直角に分岐して張り出す部分が検出されている。張り出しが付く部分は上底幅約1.2m、下底幅約1.7mと少し広がっている。張り出しはその最大幅約1.5mをその付け根で測り、低地側ほど幅が狭く、比高が小さくなり、端部は明確に捉らえられなかった。隆起の表面には溝状、土坑状、小穴等の浅い凹凸が見られ、平坦ではない。他区では平坦に検出されていることから、後世に流出したものと思

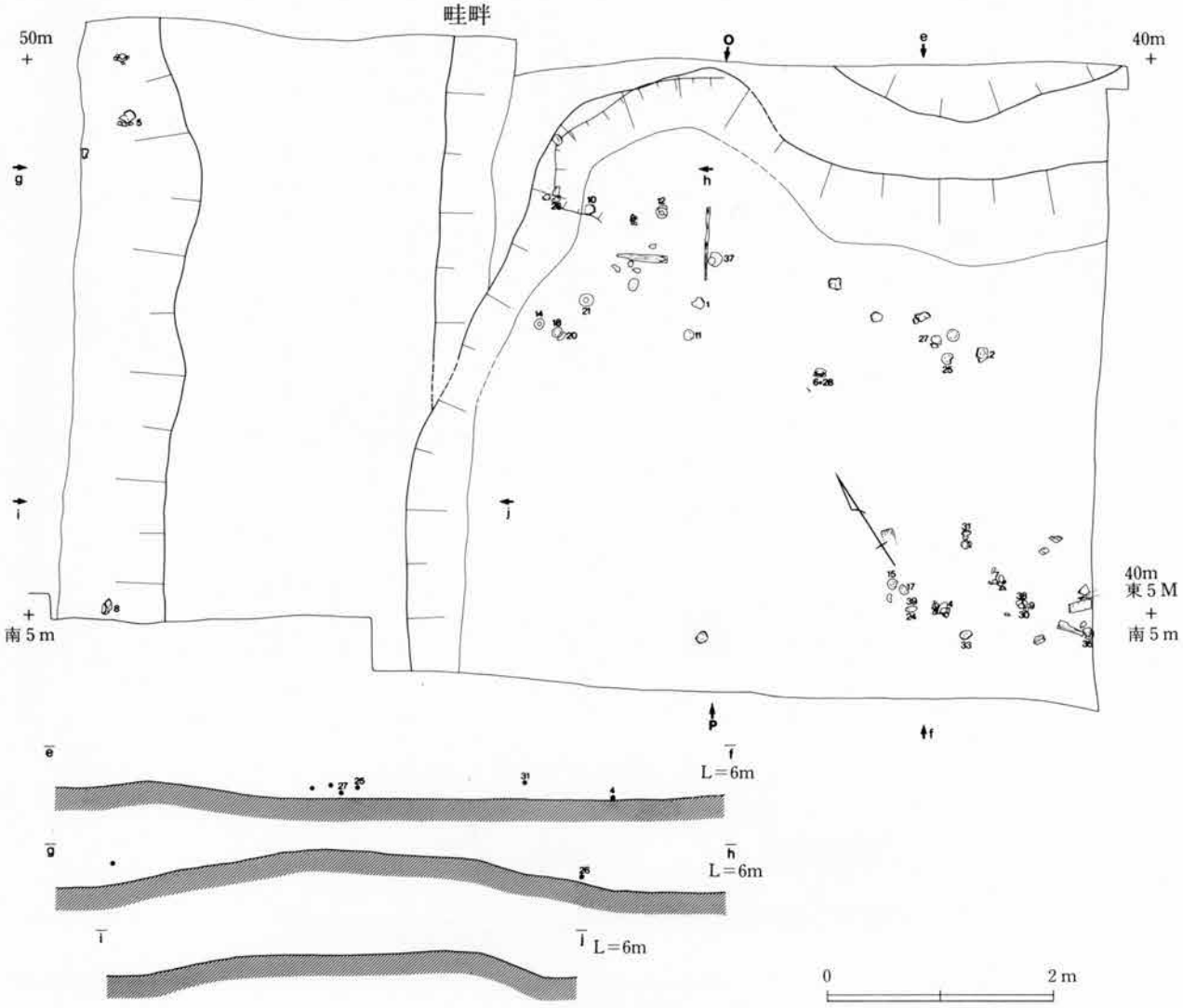


遺跡番号は土器・陶磁器については第43図、石については第69図に対応する。Ｓは石を示す。

第32図　３区下位遺構実測図（Ｓ＝１/60）

われる。隆起は明黄褐色砂質土で形成されており、硬く締っている。南半部の隆起は、３区から引続いて調査区南端で丘陵側の段が確認され、ほぼ主軸方向に走っている。面的に捉らえられるのは38m 地点まででであるが、土層では５区においても調査区南端に確認でき、より以西に続いているようである。比高は３㎝を超えない、低平なものである。北半部の土質とは異なり、ベース土と似た暗灰褐色粘土で形成されている。

５区（第33図）においては、調査区主軸及び等高線に平行する隆起と、それらに直交する隆起の、２方向の帯状隆起が確認された。主軸に平行するものは北半と南半で認められ、４区から連続する。北半の隆起は面的に捉らえて掘り上げているが、南半の隆起は土層で調査区南端に確認したものである。北半の隆起は44m 地点の付近から６区側にかけて少し丘陵側に振れ、また低地側にカーブして、調査区主軸に直交する方向に変わる。この地点には主軸に直交する帯状隆起が別に存在しており、重複する形になる。南半の隆起は土層でしか確認していないが、北半のものと同方向に走り、やはり重複しているものと推定される。主軸にほぼ直交する帯状の隆起は、西側の段の下底ラインがほぼ５区・６区境界に位置する。方向はＮ－35°－Ｅ前後を指して伸び、南北は調査区外へ出ている。上底幅2.1～2.5m、下底幅3.6～3.9m、比高24～31㎝を測り、非常に規模が大きく、他の帯状隆起とは大きな格差がある。断面形で見る限りでは、上底部分は丸みをもって中心がわずかに盛り上がっていることが分かる。この規模の大きい隆起は青灰色砂質土と暗茶褐色粘質土で形成されており、厚く、よく締って硬質であった。これに直交する形になる、主軸に沿った隆起は明茶褐色砂質土で形成されている。２方向に走る隆起は、切りあうような不連続感はなく、むしろ主軸に沿う小規模なものが直交する大規模なものに沿うか分岐し



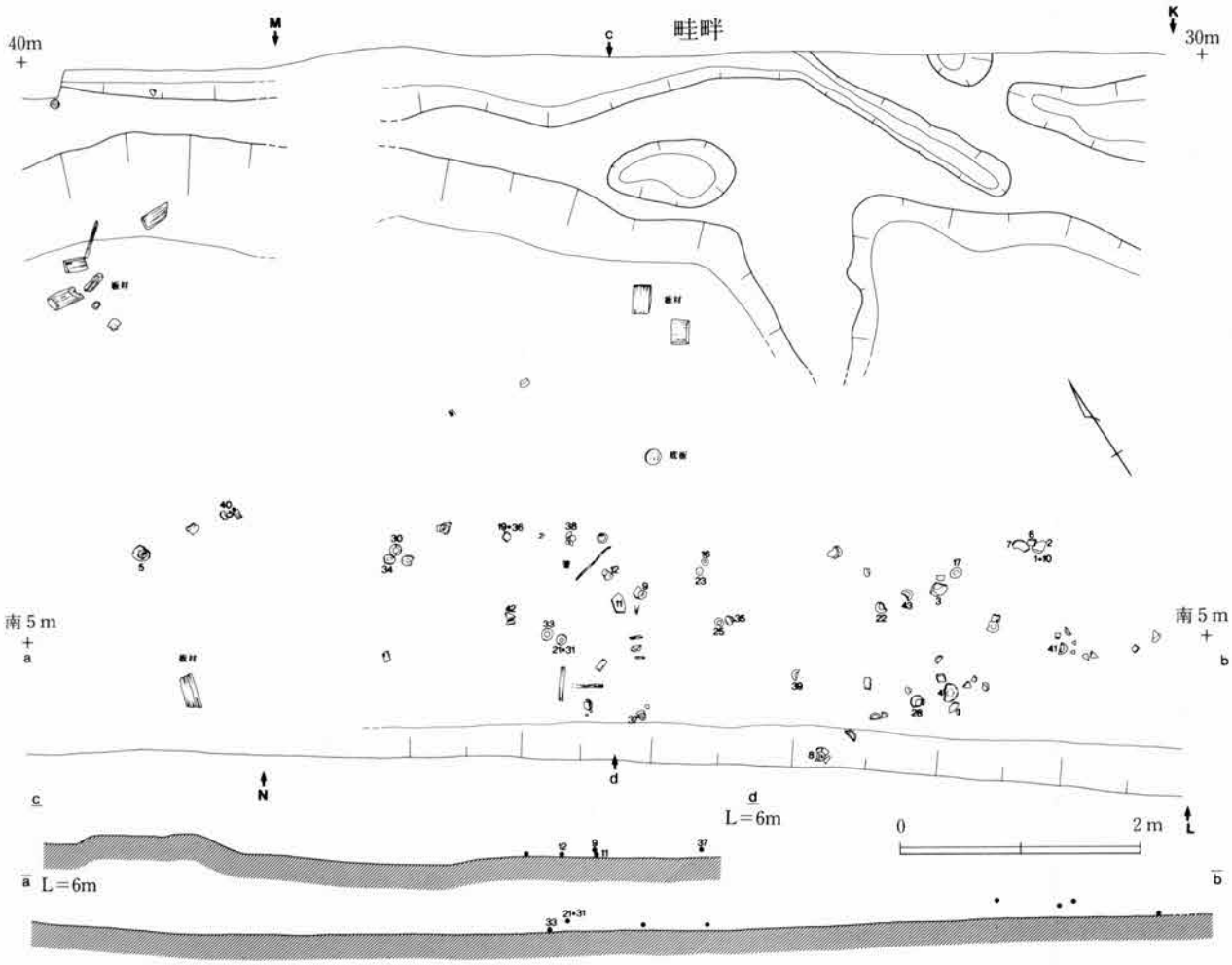
遺物番号は第53図・第54図に対応する。

第33図　５区下位遺構実測図（Ｓ＝１/60）

ているように見受けられる。実際、たちわりでは両者はほぼ同化しており、切りあい関係は確認されなかった。

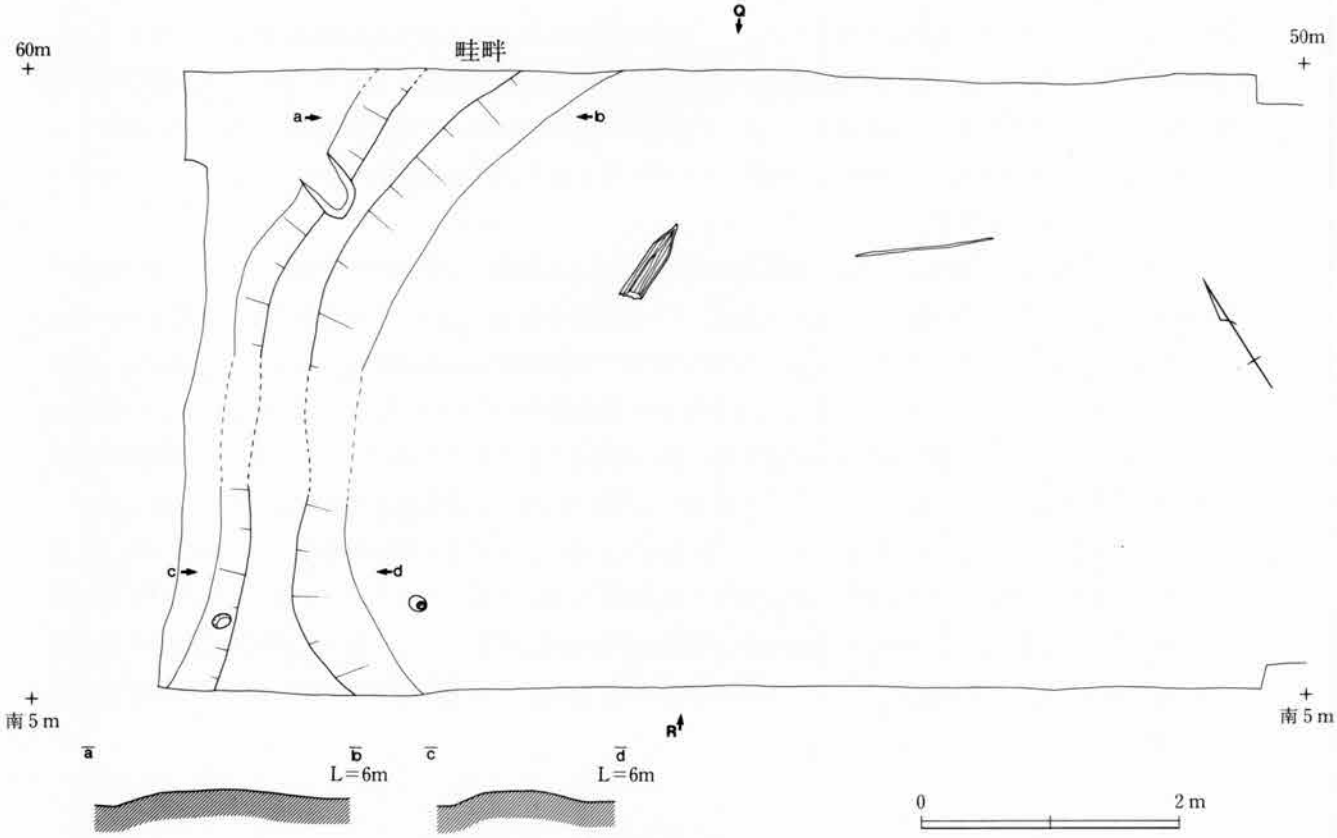
６区（第35図）においては、調査区西端部に、基本的には主軸及び等高線と直交する方向であるが壁に沿うように弧状にカーブして帯状隆起が確認された。その南北は調査区外へ出る。上底幅は30cm～１m、下底幅は１～1.8m、比高は５～10cmを測る。調査区の南北端がカーブが強くなるためなのか幅広になっている。ベース土と似た暗灰褐色粘土で形成されている。

以上、各区で検出された帯状の隆起は、限定された調査区であるため、全形は捉らえ切れていないが、それぞれが結びついて隅丸の長方形の格子状の区画を形成していると思われる。２区・３区ではそれほどではないが、４区・５区においては特に明確になる。４区から５区にかけて確認された区画は東西を長辺として約13m、短辺約６m程度の規模を持つものである。３区から４区にかけて確認された区画は東側へ狭まって行き、長方形とはならない。調査区内で見る限りでは区画は全て同じ形、大きさを持つものではないようである。区画が検出された遺構面は今回調査したうちの最下位のものである。この面では地形は上位面よりも傾斜がかなり緩くなり、平地に近くなっており、概ね低地の粘質土がベースになっている。よってこの遺構の特徴は「比較的平坦で低湿な地勢において帯状の隆起で形成される数十m²規模の長方形の区画」とまとめることができ、これらの条件を満たす遺構は「水田」を想定する。帯状の隆起はその畦畔となるものと推定できる。よって２区から６区で検出され、この項で述べてきた帯状隆起について、水田畦畔とここで認定し、最下位のベース面の段階の調査区を水田域として把握することにしたい。



遺物番号は第48図・第49図に対応する。

第34図　４区下位遺構実測図（S＝1/60）



第35図　6区下位遺構実測図（S＝1/60）

畦畔は規模的に2種類、方向的にも2種類に区別できる。規模的には5区西端に主軸に直交して走るものが大型で、比高も大きい。これ以外の畦畔は概して小型と言える。方向的には主軸に平行するもの、主軸にはっきり斜行するもの、主軸に直交するものがあるが前二者は基本的に東西方向の畦畔で、後一者はそれらに交差する南北方向の畦畔と言える。畦畔は基本的に盛土で構築されるようであるが、畦畔の土質は砂質土か、最下面のベース質の粘土の2種がある。5区の大型畦畔をのぞいては概ね北半すなわち丘陵側が砂質土、南半すなわち低地側がベース質粘土からなる。小型の畦畔は東西、南北方向とも存在するが大型の畦畔は南北方向のものでしかも1箇所でしか見つけられなかった。畦畔を概観すると、特に5区の大型の畦畔が際立った存在となろう。他の畦畔と隔絶した規模、さらに硬く締まった盛土は、水田畦畔以外の機能も考えさせる。その形成には一定量のまとまった土砂の移動と版築作業が不可欠と思われ、やはり同様の工程で構築される道路を、畦畔以外の用途として第一に考えたい。おそらくは水田区画の基幹として周辺に巡る小畦畔とともに存在し、道路的な機能も併せ持っていたものと推定する。

水田域の広がりについては調査区が限定されているため、全く不明であるが、おそらくは丘陵側へはこれ以上あまり広がらず、低地側、方向で示すと南、西、東には大きく広がる可能性が高い。4区北半の畦畔が3区では低地側の段のみになってしまう状況は、確実とはいえないがより丘陵側へ水田が展開しないことを示唆するものかもしれない。また、水田に用排水を行う水路については当然その存在が想定されるが、現状では検出できておらず、不明確である。1区・2区の溝などが相当する可能性がある。

出土遺物は、畦畔・ベース面直上の堆積層に含まれた中世前半期の遺物を畦畔・水田面直上層として取り上げたものが多数ある。しかしこれらは基本的に水田の機能停止後に被覆した錯綜する堆積層中の遺物であり、直接畦畔と水田に伴う遺物の存在は不明確である。よって畦畔と水田の時期は出土遺物で詳細に確定できないので、層位的に考えて堆積層が形成される以前と見なすことにしておきたい。

（５）溝・段（第23・30・31図）

（１）～（４）以外で遺構として認識したものには溝と段がある。溝は最上位面で３区に２条、５区に１条見られるが、どれも浅く不明確である。ただし等高線に直交するように、高所から低所に伸びている点は共通している。最下位面では１区で２条確認した。２条とも緩やかな掘り込みの浅い溝であり、ほぼ南北方向に沿って走る。うち西側の溝は幅75～90cm、深さ４～９cmを測る。東西両端は試掘調査時のトレンチが入っており不明であるが、トレンチを超えて伸びる様子はなく、溝の全長は今回の調査で捉らえたものと大差ないであろう。東側の溝もほぼ同じ方向に走り、北端は調査区外へ出ている。幅は最北部で約80cmで、南に向かって太くなっていき約1.2m、そして急に細くなって約30cm、以降徐々に細くなる。深さは北部で12cm、南部は浅くなり４cmを測る。南端は細く浅くなってしまうため明確に捉らえ切れなかった。

段は２区に位置する。最下位面で確認した。東から西への浅い落ち込みが直線的にほぼ南北方向に走り、北端は調査区外へ出て、南端は浅くなって捉らえられない。そのラインが直線的であったことと、対になる肩部を西側で検出できなかったことから、溝や落ち込みとは区別し、段と認識した。水平約30cmに対し垂直約12cm下降する程度で、その比高差は小さく、比較的緩やかな段と言える。

溝はほとんど遺物を伴っておらず、詳しい時期は分からない。段については丘陵側に暗灰粘層が集中して堆積しており遺物を含んでいるが、時期的なまとまりがなく、やはり詳しい時期はわからない。また段の底面では建築部材が出土している（図版41）。溝、段については面的には最上位面、最下位面にはっきり別れるので大まかで相対的な位置付けは可能である。すなわち上位面の溝については土層が錯綜して堆積する時期より後出、下位面の溝・段についてはより先行する時期が与えられる。

（６）遺構小結

今回の発掘調査の結果、貝田遺跡の南調査区では掘立柱建物１棟、ピット26穴、竪穴１基、畦畔、溝、段等の遺構を確認した。各遺構が位置する遺構面はそれぞれ異なっており、時期の違いを示す。１区で見ると掘立柱建物及び１～10号ピットと、溝には明確に上下遺構面の別がある。２区から６区にかけては11～24号ピットと、畦畔や段及び25・26号ピットも同様に分層される。上下遺構面の間層に複雑な土層が堆積している。また竪穴の掘削面が示す通り、上下の遺構面間にさらに遺構面を見いだすことができる。すなわち貝田遺跡南調査区においては上・中・下の３面の遺構面が最低存在することが今回の発掘調査で確認されたことになる。面別に遺構をまとめるならば、上位遺構面には掘立柱建物と１～24号ピットと溝が、中位遺構面には竪穴が、下位遺構面には畦畔と段と25・26号ピットと溝がそれぞれ位置することになろう。各遺構面の間にさらに遺構面・遺構が存在した可能性は否定できないが、把握することができなかった。

各遺構面及び遺構の時期については、確実な供伴遺物が乏しいため判然としない。しかし遺構面の間層となる土層の堆積が中世前半期であることは判明しているので、間層を基本的な時間軸として、層序からおおよその位置付けを試みておきたい。上位遺構面についてはそのプライマリーな面が削平を受けている可能性があるため、最も時期が掴みつらく、各遺構についても同一面上で形成されていたかどうか検証できない点には注意したい。ここでは中世前半期以降でおそらく中世期の範疇と見ておきたい。中位遺構面は、当初面的な認識がなく、下位遺構面まで掘り下げた後、竪穴の存在によってようやく始めて確認したものである。よって面的な調査は十分にできていないが、断面で見る限りは錯綜した土層の一部を切り込んでいる。よって錯綜した土層が堆積する中世前半期の内に位置付けられる。下位遺構面については錯綜する堆積層に先行するが、間層をほぼ持たず、遺構面の直上まで多くの中世前半期の遺物が包含されていることから、あまり時期的に隔たりがあるとは考えにくく、若干先行する時期と見ておきたい。また、下位遺構面のさらに下位については今回調査が及ばなかったが、より古期の遺構面と包含層が存在することが丘陵側に隣接する第２次発掘調査区で確認されており、この調査区にお

いてもその存在は確実視される。今回確認した下位遺構面は貝田遺跡最古期のものではなく、さらに古い時期からの営みに後続して展開するものと思われるので、今後遺跡の成立を考える上で注意しておきたい。

以上、ここまでで層序と遺構について述べた状況の検討から、大まかにではあるが貝田遺跡南調査区の中世前半期の前後の展開が辿れるようになってきた。より詳しい遺跡の動態については、次項4で遺物の出土状況、まとまり、細かい時期について明らかにし、最後に5で再び取り上げることにしたい。

4　遺物

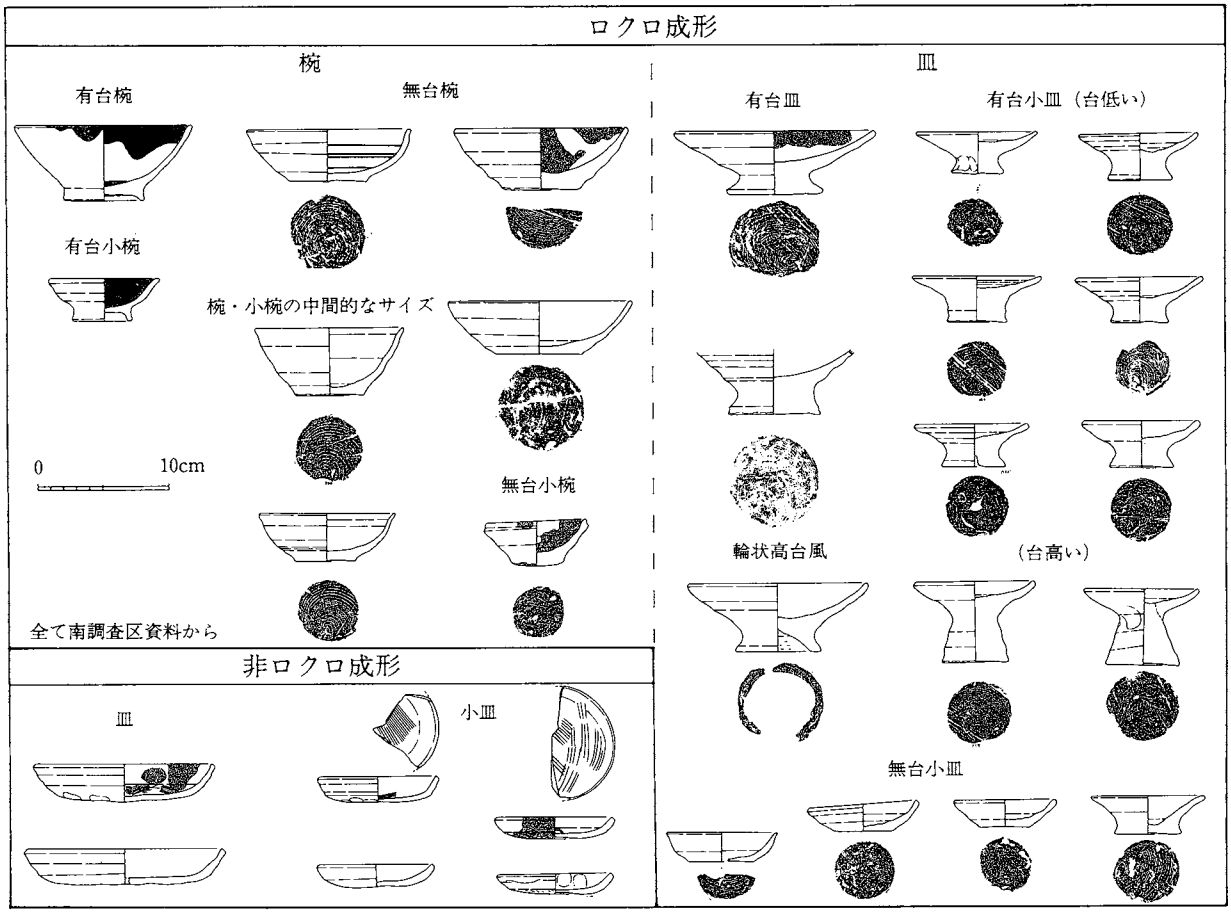
（1）土器・陶磁器・土製品

当調査区においては弥生時代から中世まで非常に汎時期、多種にわたる遺物が存在する。土器については弥生土器、土師器、須恵器、中世土師器が存在する。陶磁器は中世期の珠洲、越前、白磁、青磁等が存在する。土製品は主に土錘・陶錘である。ここでは区単位の位置的なまとまりと、土層単位の面的なまとまりを重視して扱いたいので、1～6区の区単位でまとめ、さらに各区内で土層単位で上層から順に紹介していきたい。その際の前提として土器・陶磁器・土製品について大まかな器種分類を示す。

中世土師器については12世紀代に属するものが当調査区出土遺物の主体を占めているが、その前後の時期となる11世紀代、13世紀代に属するものも若干量確認されており、中には識別しにくいものも存在することから、少し詳しく分類する。また、胎土と色調についても、一括性の高いまとまった量の資料で時期・器種・器形等との関連を探る目的で、複数種に分類を行った。

器種分類（弥生土器・土師器・須恵器）

弥生土器は大半が後期に属すると思われ、壷・甕・鉢・高坏・器台を基本的な器種とする。全般に遺存はよく



第36図　中世土師器の分類概念図

なく、器面が摩耗したものが多い。土師器と須恵器は古墳時代と古代の両方の時代で認められる。土師器は弥生土器の器種に椀と杯が加わるものである。須恵器は瓶・甕・鉢・高坏・杯・椀・蓋を基本とする。須恵器はその特性上、基本的に煮沸用途を分担せず、甕は貯蔵具である。蓋は基本的に杯とセットをなす。

器種分類（中世土師器・陶磁器）

中世土師器はまず製作技法によってロクロ成形品と手捏ねの非ロクロ成形品に大別される。ロクロ成形土師器の基本的な器種は椀と皿である。椀と皿の区別は身の深さに基準を設けており、深さ３cm前後を境として深いものが椀、浅いものが皿とした。椀・皿どちらも有台品と無台品がある。有台品の高台は中実の柱状高台と中空の輪状高台の両方が見られ、前者が主体である。輪状高台の有台椀にほぼ限って内面に黒色処理を施す品がごく少量ながら見られる。また古代から普遍的な口径13～14cm台の大きさの品の他に、ほぼ10cm未満におさまる小型品の存在が明瞭であり、椀皿それぞれ「小椀」、「小皿」として識別できる。小椀と小皿の区別については身の深さ２cm前後を境として判断した。小椀はほぼ有台品に限られ、無台品は例外的である。小皿は有台、無台両種とも見られる。非ロクロ成形土師器は無台の皿にほぼ限られた存在であるが、ロクロ成形品と同様に口径10cm代の皿と、それを確実に下回る「小皿」が存在する。よって貝田遺跡南調査区の古代末から中世にかけての土師器は、ロクロ成形土師器の有台椀、有台小椀、無台椀、無台小椀、有台皿、有台小皿、無台小皿、および非ロクロ成形土師器の皿と小皿から構成されていると言える（第36図）。

珠洲と越前は甕・壷・すり鉢を基本とする。白磁は碗・皿・壷がある。青磁は碗がある。

中世土師器の胎土と色調

土師器胎土は粘土地と混和される砂礫からなり、その両方とも鉱物などの微小な粒子を含んでいる。観察にあたっては粘土地の質感、砂礫種、砂礫の大きさ、砂礫の量に重点を置いた。しかし粘土地や砂礫種には大きな差異が認めがたく、かなり共通度が高い。砂礫は石英、長石が中心で、少量のチャート質岩石が加わるものが基本的な構成と思われる。概ね粒径は0.5mm以下である。石英は無色で透明度が低く、結晶形をなさない他形である。他、海綿骨片、赤色粘土粒、白色粘土粒も含まれることが多い。粒の大小の差はあるが雲母が含まれるものが見られ、雲母は風化して金色を呈する。むしろ以上の構成を基本的な胎土とみなして、砂礫の粒の大きさや量の多少で区分すると、以下に示すＡ～Ｄ類の４種に分類された。また、例外的な存在であろうが須恵器破片を含む個体が確認されている（図版61）。意図的な混和か、偶然の混入かは不明である。

胎土Ａ類　砂礫を多く含み、概ね焼成は良好で、堅緻な製品が多い。砂礫が多く、器面に浮き出るためか器面はざらついた感触である。粒径１mm程の大粒の雲母がかなりはっきりと認められる。

胎土Ｂ類　Ａ類より含まれる砂礫は少ないと思われるが、長石がよく認められるもの。粘土地はシルト成分が多いのか、Ａ類より軟質に感じられる。

胎土Ｃ類　Ａ類より含まれる砂礫は少ないと思われるが、肉眼では長石がほとんど目立たないもの。Ａ類、Ｂ類よりも緻密な質感をもつ。

胎土Ｄ類　砂礫がきわめて少ないが、粘土地が緻密で、摩耗しにくいもの。

胎土Ｅ類　砂礫がきわめて少なく、粘土地もシルト成分が多く、粗い。ひじょうに摩耗しやすい胎土である。

色調[17]は以下に示すａ～ｇ類の６種に分類された。区別しがたいもの、同一個体で複数の色調が認められるものや中間的な色調については併記して、ａ～ｂ、ｃ～ｄの様に現わす。

色調ａ類　橙色（５YR７／６・８）

色調ｂ類　鈍い橙色、黄橙色（５YR７／４、７．５YR７／４）

色調ｃ類　黄橙色（７。５YR８／８、10YR８／８）

色調ｄ類　浅黄橙色（７。５YR８／３・４、10YR８／３・４）

色調ｅ類　淡黄色（２。５Y８／３、５Y８／３）

色調ｆ類　灰白色（５Ｙ８／１・２）

色調ｇ類　灰黄褐色（10YR５／２）

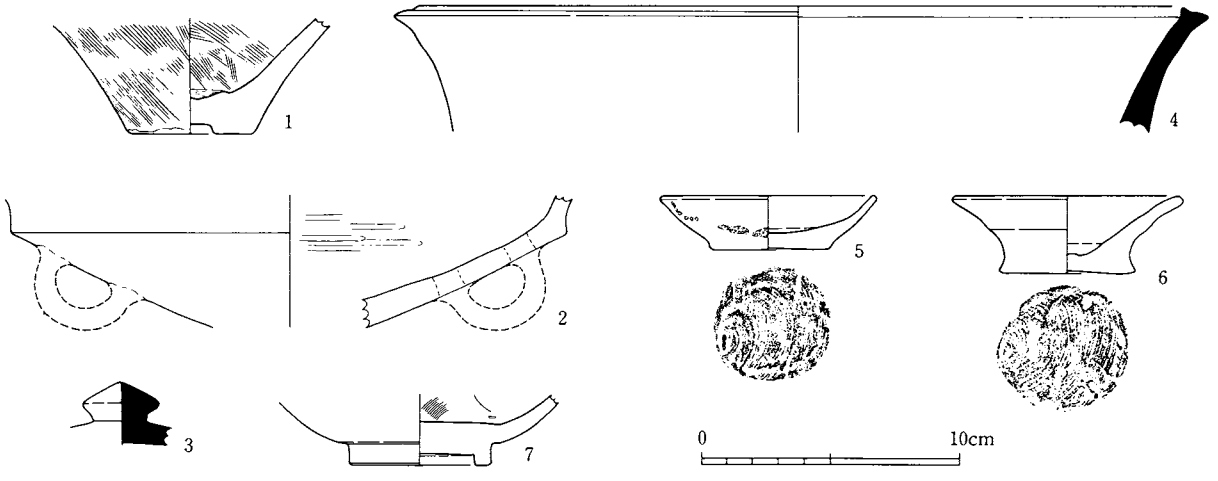
以上の器種分類に基づき、遺構及び１～６区各区・各層出土の土器・陶磁器・土製品について述べる。先に分類した中世土師器のサイズ、胎土、色調に関しては遺構・層単位でまとまった資料を比較する事に意義があると考え、良好な資料について観察表及び本文中に示す事にしたい。

竪穴出土土器・陶磁器・土製品（第37図）

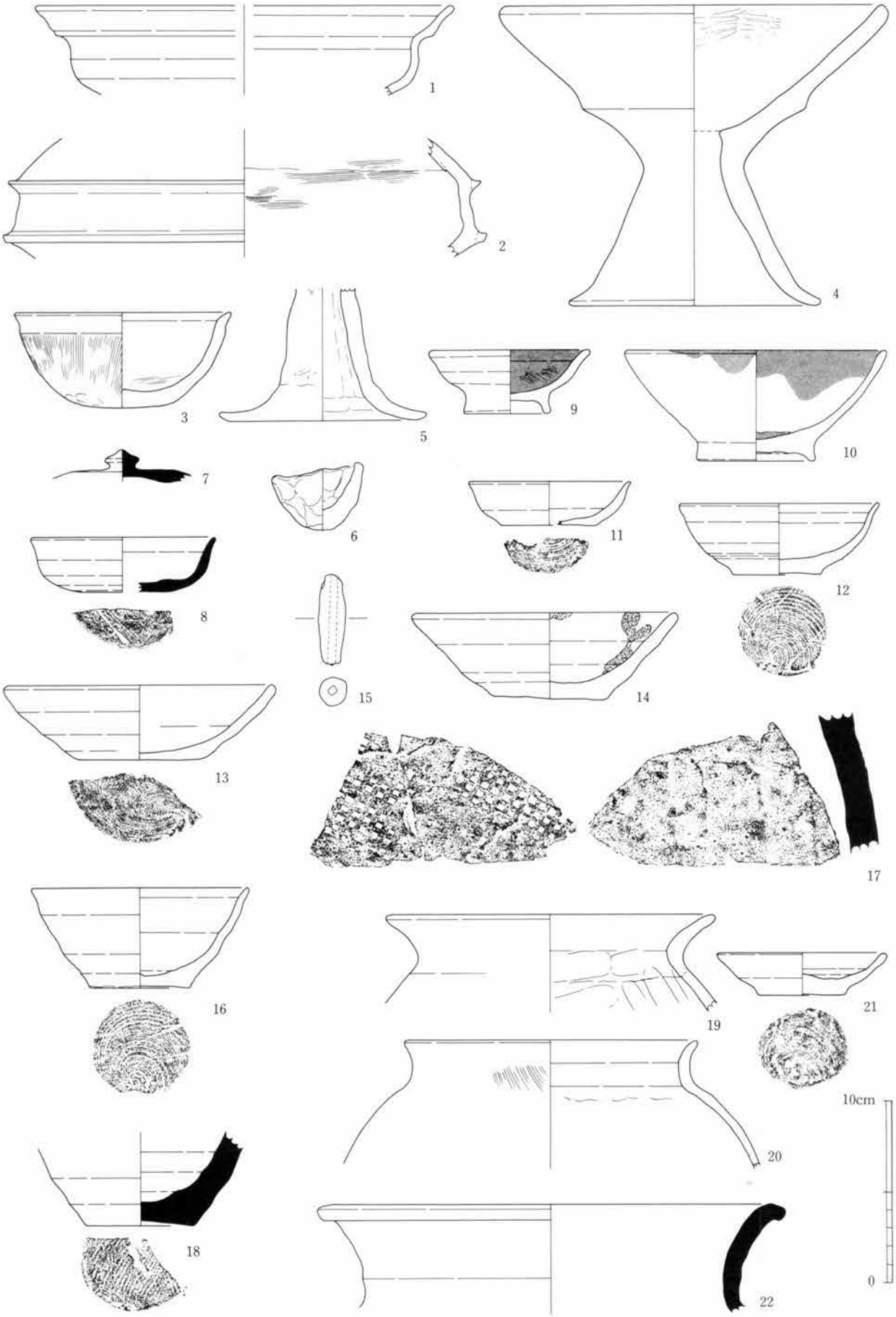
第37図１・２は弥生土器。１は底部。円盤状に底抜けに成形して最後に栓をしたものと思われるが、外底面まで栓が届かず、中凹み状となる。内底面に長さ６㎜、幅３㎜程度の籾状の圧痕が認められる。２は高杯。剝落しているが平坦で広い杯底面をもち、環状の把手が付くもので、丹後系の高杯と思われる。胎土に粒径１～２㎜大のチャート質の礫を顕著に含む。３・４は須恵器。３は杯蓋のつまみ部であり、径３cmと大型の宝殊形を呈する。堅緻な質感で、胎土に長石を多く含み、鳥屋窯跡群産と思われる。７世紀末から８世紀代のものであろう。４は甕の口縁部であり、端に面を取り、内端を引き出している。径１㎜以下の微粒の砂礫を多く含む。時期不明。５・６は中世のロクロ成形土師器の小皿である。５は無台小皿。底部糸切りが非常に丁寧で、外底面がきわめて平坦である。器面は全面が黒色化しその上に煤が付着しており、灯明皿的な使用法が窺われる。６は内底面が蛇の目状に抉り取られることにより、深身の器形を呈する。器種は明確にしえないが、内底の抉りを除いた器形、他遺跡での類例から、有台小皿に分類した。７は青磁碗の底部。３区下位遺構面直上層出土品と接合する。厚手で、釉薬は貫入があり、外底面のみ無釉。内面にヘラ・櫛状具で花文様を施す。龍泉窯系の製品で、森田分類の椀Ⅰ類[18]と思われる。

１区出土土器・陶磁器・土製品（第38図）

第38図１～15は第26図１区層13出土。１・２は弥生土器。１は有段口縁の鉢。脚台が付く可能性もある。淡赤橙色に発色する精良な胎土を使用しているが、器面が摩耗しており調整や本来の色調は不明。２は算盤玉状の器形の胴部であり、中位に断面三角形の細い凸帯を２条を巡らす。装飾壷の類であろう。内面上位にハケ調整が残るが、この部位のみ用具が届かず、なで消せなかったものと思われる。３～６は古墳時代の土師器。３は丸底の椀で、口縁端部を外面ヨコナデ、内面は内頃する面を持たせ尖り気味におさめる、いわゆる内斜口縁椀。外面はハケ調整をよく残す。６世紀代のものであろう。４・５は高杯。４は栓部分が剝落しているが、ほぼ完形に復元され、口径20cm、底径13.4cm、器高16.4cmを測る。きわめて厚手の作りで重量感に富む品である。杯部は段を持



第37図　竪穴出土　土器・陶磁器・土製品実測図（Ｓ＝１/３）



第38図　１区出土　土器・陶磁器・土製品実測図（Ｓ＝１／３）

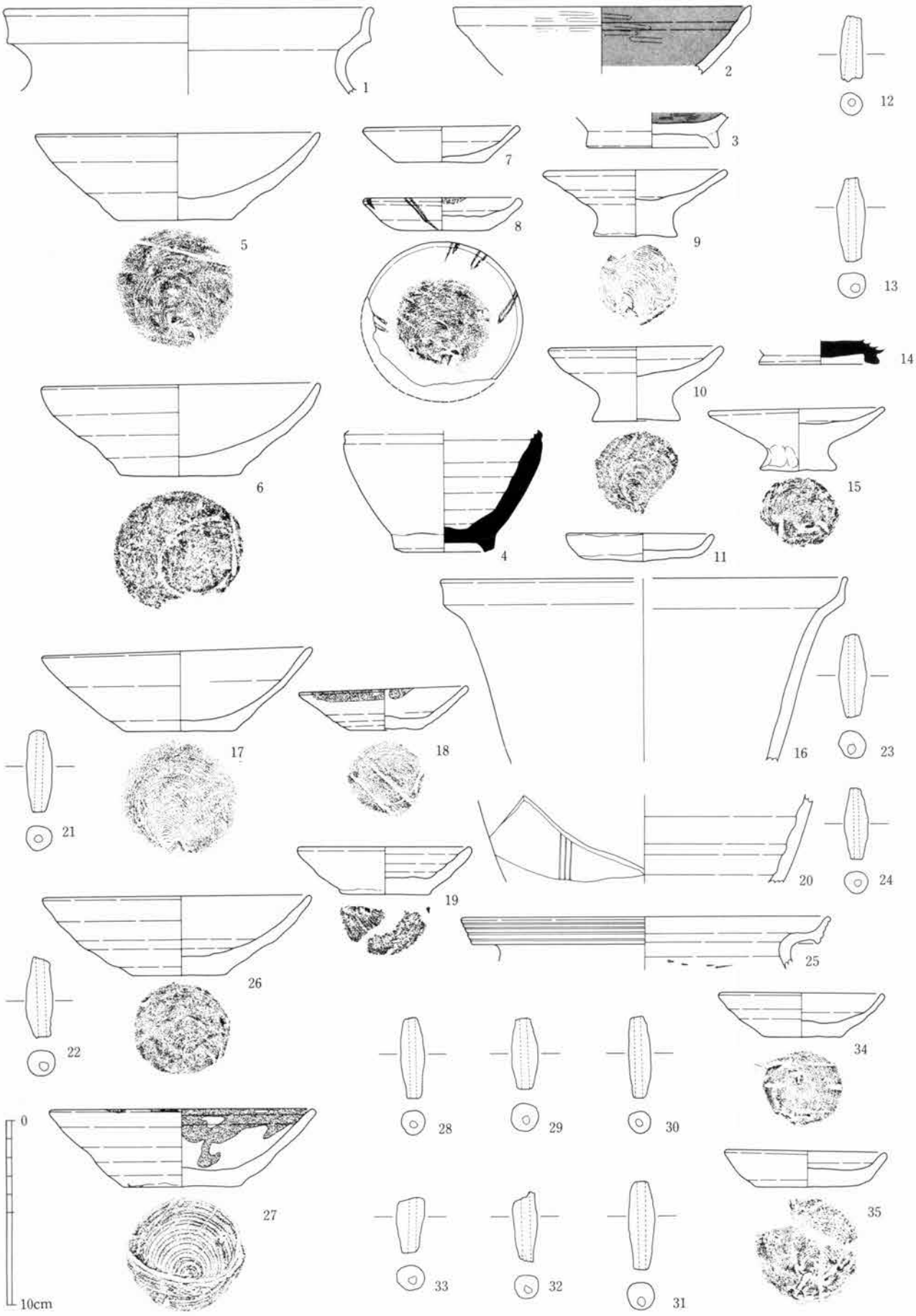
って直線的に広がり、脚部はやはり直線的に広がっていき裾でわずかに屈曲する。杯部内面に太く粗いミガキ状の調整が残る他は全体に摩耗している。5は脚部で、4とは対照的に開脚度が小さく、エンタシス状を呈し、裾で大きく屈曲して広がっている。4・5は5世紀代であろう。6は手捏土器である。7・8は須恵器。7は杯蓋の頂部付近。径1.7cmと小さな宝殊形のつまみが付く。接合はしないが同一個体と思われるかえしの付いた端部がある。8は無台杯。弱く外反する口縁部と接地面が小さい底部、ヘラケズリで丸みを持つ口縁部・底部境、からなる。7・8はいわゆる杯G形態の蓋・身であり、どちらも7世紀後半代に位置付けられる。7・8の胎土は白色の細かい砂礫の他、大粒の長石を含んでおり、鳥屋窯跡群産と思われる。9～14は古代末～中世のロクロ成形土師器である。9は有台小椀。完形品に復元され、口径8.5cm、底径4.5cm、器高3.5cmを測る。端で外反気味の口縁部、輪状高台を持つ。外底面に糸切り痕は見えず、なで消されたと思われる。内面黒色であるが、ヘラミガキは行っていない。10は有台椀で、ほぼ完形品。3号ピットの側壁面にめり込んで出土しており、遺構には伴わないと判断した。内湾気味の口縁部、断面三角形の低い輪状高台からなる深身の器形。内面が黒色であるがヘラミガキは行っておらず不均一で、一部外面にも及んでいる。また口縁周と見込みの間は黒色面が剝落したと思われる。9・10は11世紀後半頃のものと考えている。11は無台小皿、端で外反気味の口縁部、薄手で丁寧に切り放される底部からなり、橙色を呈する。11世紀代に遡る可能性もある。12～14は無台椀。12は端で外反気味の口縁部、丁寧に切り放される底部からなり、椀と小椀の中間的なサイズをもつ。13・14はよく似た規格・形態の無台椀であるが、14はより厚手で口縁部は直線的に開いている。15は陶錘である。胴張りの弱い紡錘形状を呈し、色調は器面に土中の鉄分がこびり付いているため鮮明でない。焼成は良好で堅緻であり、2～5区で出土しているものと同様に還元焔焼成された可能性が高く、陶錘と判断した。ほぼ完存しており長さ4.9cm、幅・厚さ1.6cm、重さ7.35gを測る。

16～18は第26図1区層5～8出土。16は中世土師器で、ロクロ成形の椀である。全体に薄手で、端でわずかに外反する口縁部、回転糸切りの丁寧な底部からなる。器面は橙色に発色している。16も11世紀代に遡る可能性がある。17・18は珠洲、どちらも焼成良好で器面断面に黒色の吹出しが見られる。17は甕、肩部付近と思われる。正格子の叩打文が何単位か施されている。17は底部である。底径が小さく、胴部への立ち上がりが強い器形から壷と思われる。外面は回転ヘラケズリ、底面には静止糸切り痕が認められる。内底面には白色斑が付いており、焼けむらと思われる。17・18の珠洲は吉岡編年の珠洲Ⅰ～Ⅱ期[8]に属するものであり、Ⅰ期に遡る可能性が高い。

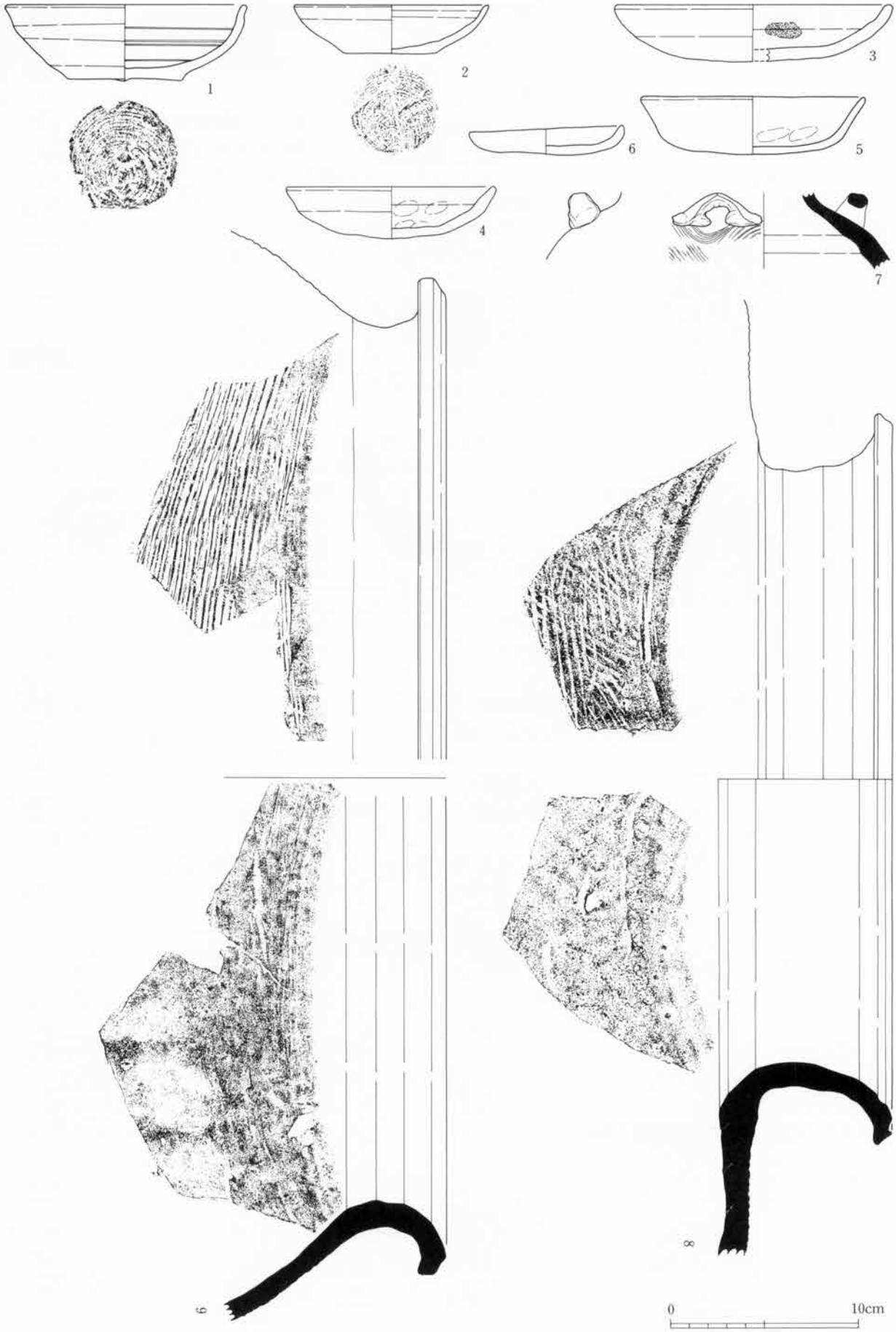
19～22は出土層位不明。19・20は「く」字口縁の土師器甕である。摩耗しており、調整は明確でない。19は頸部ではっきり屈曲し少し外反するもの。内面に継ぎ目が見える。胎土に焼土塊が含まれ、やや軟質である。20は直立した口縁が端で外反に転じたもの。19は5世紀代、20は6世紀代のものであろう。21は中世土師器で、ロクロ成形の無台小皿。底部は厚く、内底面はへそ状に盛り上がっている。22は珠洲で、甕の口縁部であろう。外反し、端で折り返される。内面に著しく自然釉がかかり、白色化している。吉岡編年の珠洲Ⅰ期[8]に位置付けられる。

2区出土土器・陶磁器・土製品（第39図・第40図）

第39図1～13は第26図2区層1出土。1は弥生土器である。無文の有段口縁を持つ甕であるが、摩耗しており調整は不明。2・3は古代の土師器で、内面黒色の椀である。2は口縁部で、端を尖らせその下位を肥厚する。金属器か陶磁器の影響を受けた形態と思われ、おそらく有台であろう。3は底部で、断面三角形の輪状高台を付す有台椀。2・3は内面にヘラミガキが認められ、10世紀後半～11世紀前半代の品と思われる。4は須恵器、小型の台付瓶であろう。高台は太く、内端で接地する。肩の、屈曲して沈線が入る部位で折損している。胎土に粒径1～3mmの長石が顕著に含まれ、器面にも浮き出ている。8世紀後半代の品で、鳥屋窯跡群産であろう。5～11は中世土師器。5～10はロクロ成形である。5・6は無台椀。5は口縁部端が尖り気味、底部は厚い。6も5と同様の器形であるが、口縁部はより内湾気味である。7・8は無台小皿、基本的な形態や口縁部端をなでる調整が共通する等、ほぼ同じ規格の品である。7は全体的に薄手、色調はd類で、胎土に焼土塊を含んでいる。



第39図　２区出土　土器・陶磁器・土製品実測図(1)（Ｓ＝１／３）



第40図　2区出土　土器・陶磁器・土製品実測図(2)（S＝1／3）

８は厚手で、色調はｂ類、胎土に砂礫を顕著に含まない。７と８はこの他、器高、底径も異なり、７が８より器高が高く底径が小さい。軽薄で均整が取れた感じの７と鈍重で偏平な感じの８、と全体的な器形のバランスも異なっている。９・10は有台小皿、柱状高台が付く。９と10は７と８同様に、軽薄・鈍重の形態差が看取される。その他、脚部端が少し張り出してナデが加えられているが、９は張り出しがわずかで10はより張り出しが強い。また９は胎土に焼土塊と白色粘土塊を、10は顕著に砂礫を含んでいる。11は非ロクロ成形の小皿である。薄手で、短い口縁部は立ち上がりが強い。胎土は精良である。11は13世紀前半代に位置付けが可能である[19]。12・13は陶錘である。いずれも紡錘形を呈し、色調は青灰色を呈し、焼成は良好で堅緻、珠洲の質感を持つ。窯内で還元焔焼成されたものと思われる。12は折損、13はほぼ完存している。13は長4.6cm、幅・厚さ1.4cm、重さ5.6g を測る。

第39図14・15は第26図２区層13出土。14は須恵器、小型の瓶類の底部と思われ、器面には黒色の吹出しが見られる。断面台形で偏平な高台が付き、内底面は自然釉がかかる。底部の縁できれいに割れており、意図的に打ち欠いた可能性もある。15は中世土師器で、ロクロ成形の有台椀。９・10よりも身が浅く、細い華奢な感じの柱状高台が付く。

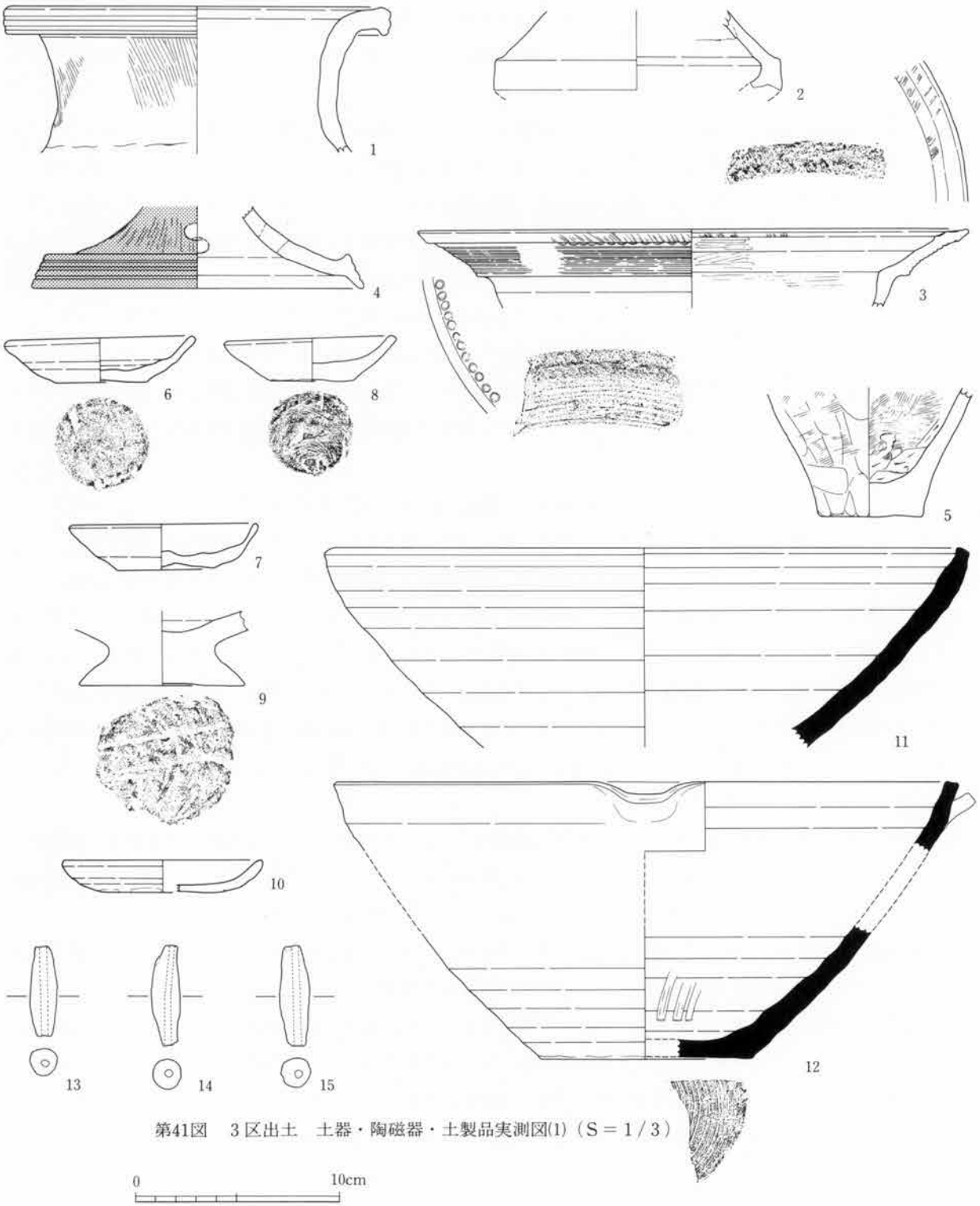
第39図16～24は第26図２区層15及びその上面の炭層からの出土。16は弥生土器の壷。摩耗して調整は不明であるが、口縁部先端に有段部分を持つ長頸壷と思われる。17～19は中世土師器で、ロクロ成形品。17は無台椀。比較的薄手で、底部糸切りも丁寧。18・19は無台小皿。18は薄手の作りで、口縁部下半にロクロヒダが顕著、外底面には回転糸切り痕を切って平行棒状の痕跡が見られる。19はより厚手でごつい感じのする品である。20は白磁の壷胴部で、水注の類と思われる。外面は３条の沈線文が縦方向に施され、内面はロクロヒダが顕著である。21～24は陶錘であり、いずれも紡錘形を呈する。21と22は端をわずかに折損しており、色調は浅黄橙色～青灰色を呈する。23・24はほぼ完存している。色調は青灰色を呈する。23は長4.6cm、幅・厚さ1.5cm、重さ5.7g を測る。24は長４cm、幅・厚さ1.2cm、重さ5.7g を測る。21～24について、22がやや酸化気味であるが、概ね珠洲の質感を持ち、窯内で還元焔焼成されたものと思われる。また、程度の差はあるが概ね器面には籾もしくは籾殻の痕跡が観察され、22は特に明確である。

第39図25～33は第26図２区層18・19出土。25は弥生土器甕。擬凹線を施す有段口縁は短く、直線的に外頃する。胎土に粒径１mm大の黒色の角ばった砂礫が見られる。26・27は中世土師器で、ロクロ成形の無台椀である。ほぼ同じ規格の品であるが、主に底部に違いが認められる。27は26より一回り底径が大きく、糸切りの条が粗く、さらにヘラ状具の条が入る。外底面は黒色化、内面は煤が付着する、確実な被熱品。28～33は陶錘である。28～31は完存、32・33は約１／２を折損するが、いずれも紡錘形を呈すると思われる。すべて色調は青灰色を呈し、珠洲の質感を持っており、窯内で還元焔焼成されたものと思われる。また、程度の差はあるが概ね器面には籾もしくは籾殻の痕跡が観察され、28・29・31は特に明確である。28は長さ4.5cm、幅・厚さ1.3cm、重さ6.5g を測る。29は長さ４cm、幅・厚さ1.4cm、重さ5.5g を測る。30は長さ4.6cm、幅・厚さ1.2cm、重さ5.9g を測る。31は長さ５cm、幅・厚さ1.5cm、重さ6.7g を測る。

第39図34・35は第26図２区層20・21出土。中世土師器で、ロクロ成形の無台小皿である。34は薄手で口縁部が伸びるもの。外底面は糸切りの上から３条の平行ヘラ状具痕が入り、内面は黒色化している。35は34と対照的に短い口縁部と、厚くて径が大きい底部からなり、コースター状の偏平な器形をとる。

第40図は出土層位不明。１～６は中世土師器。１・２はロクロ成形。１は無台椀で、内湾し部分的に端で外反する口縁部、薄手の底部からなる。内面はロクロナデの工具痕が沈線状に残っている。２は皿と椀、大と小のそれぞれ中間的な形態、サイズを持つものであり、一応皿としておく。薄手で丁寧な作りである。１・２は11世紀代に遡る可能性がある。３～６は非ロクロ成形である。３～５は皿である。３は口縁端部に軽いヨコナデを加える。胎土は精良だがシルト質で、軟質な感触を持つ。４は３よりも大振りな皿で、摩耗しているが、口縁部に連続的なヨコナデが認められ、内面の一部に煤が付着する。３・４ともいわゆる一段ナデ手法と思われる。５は薄

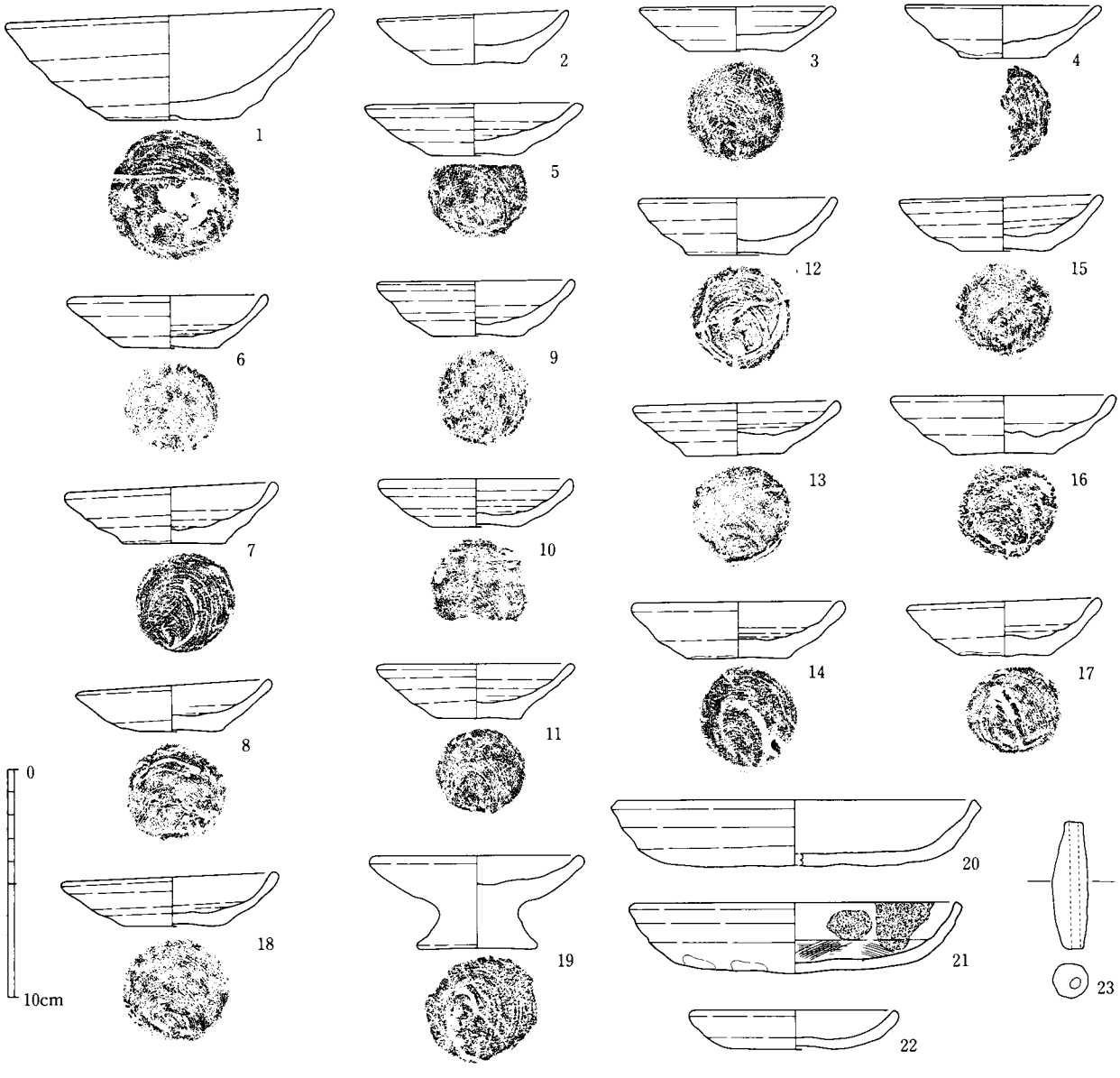
手で、口縁部が外反気味に伸びるもの。全体に少し歪んでおり、底面は凹凸がある。6は小皿で、薄手ながら歪みのある雑な作りで、器面にも凹凸がある。皿5と小皿6はともに薄手で、精良な胎土、明るい淡黄色を呈する色調など、質感がよく似ている。形態的に3は12世紀末～13世紀初頭頃、4～6は13世紀前半頃に位置付けが可能である[19]。7～9は珠洲。7は四耳壷の肩部と思われ、流動感に富む櫛目文の施文後に耳を張り付けている。焼成は良好で堅緻である。8・9は大型の甕である。どちらも口縁部の外反が顕著であるが、8の口縁部は内面を凸帯状に隆起させ、端は面を取る。肩部は直線的に伸びており、かなり張り出すものと思われる。焼成は良好で堅緻、外面肩部以下は自然釉がかかる。9は口縁部端を折り返し気味におさめるもの。焼成はやや甘く、胎土に粒径2㎜を超える大粒の砂礫が見られる。7～9は吉岡編年の珠洲I期[8]の所産と思われ、うち甕では8が9にやや先行する可能性が高い。



第41図　3区出土　土器・陶磁器・土製品実測図(1)（S＝1／3）

３区出土土器・陶磁器・土製品（第41図～第45図）

第41図は第26図３区層１～３・５～13出土。１～５は弥生土器である。１・２は壷である。１は端を水平近くまで外反させ、少し下位に拡張し、擬凹線を施す口縁部。広口壷の類であろう。２は算盤玉状の胴部で、中位には凸帯が付されたと思われるが、剝落している。装飾壷の類であろう。胎土に径１㎜大のチャート質の砂礫を顕著に含む。３は有段口縁を持つ大型の鉢と思われる。口縁帯に擬凹線を施す他、さらに口縁部端を肥圧し面取りして加飾、端内面は赤彩痕を残しており、非常に装飾豊かな土器である。端外面は面取りし、ハケ状具による斜位の刺突と、その直下に二重同心円スタンプ文を平行させて巡らせている。端内面は２段に面取りし面毎にハケ状具で斜位の刺突を巡らしている。３は器形的には鉢であるが、おそらく長大な脚台が付くと思われ、高杯と似た用途と推定する。６区出土遺物に同一個体がある。４は器台の脚部である。有段口縁に擬凹線を持つ鼓形器台であろう。透かしは４方または５方と思われる。外面は赤彩しているが、胎土も橙色に発色するものであり、焼土塊を顕著に含んでいる。４区層８・11出土遺物に同一個体がある。５は底部である。底面は厚手。４とよく似た胎土で、やはり橙色を発する。壷と推定したい。６～10は中世土師器である。うち６～９はロクロ成形で、う



第42図　３区出土　土器・陶磁器・土製品実測図(2)（Ｓ＝１／３）

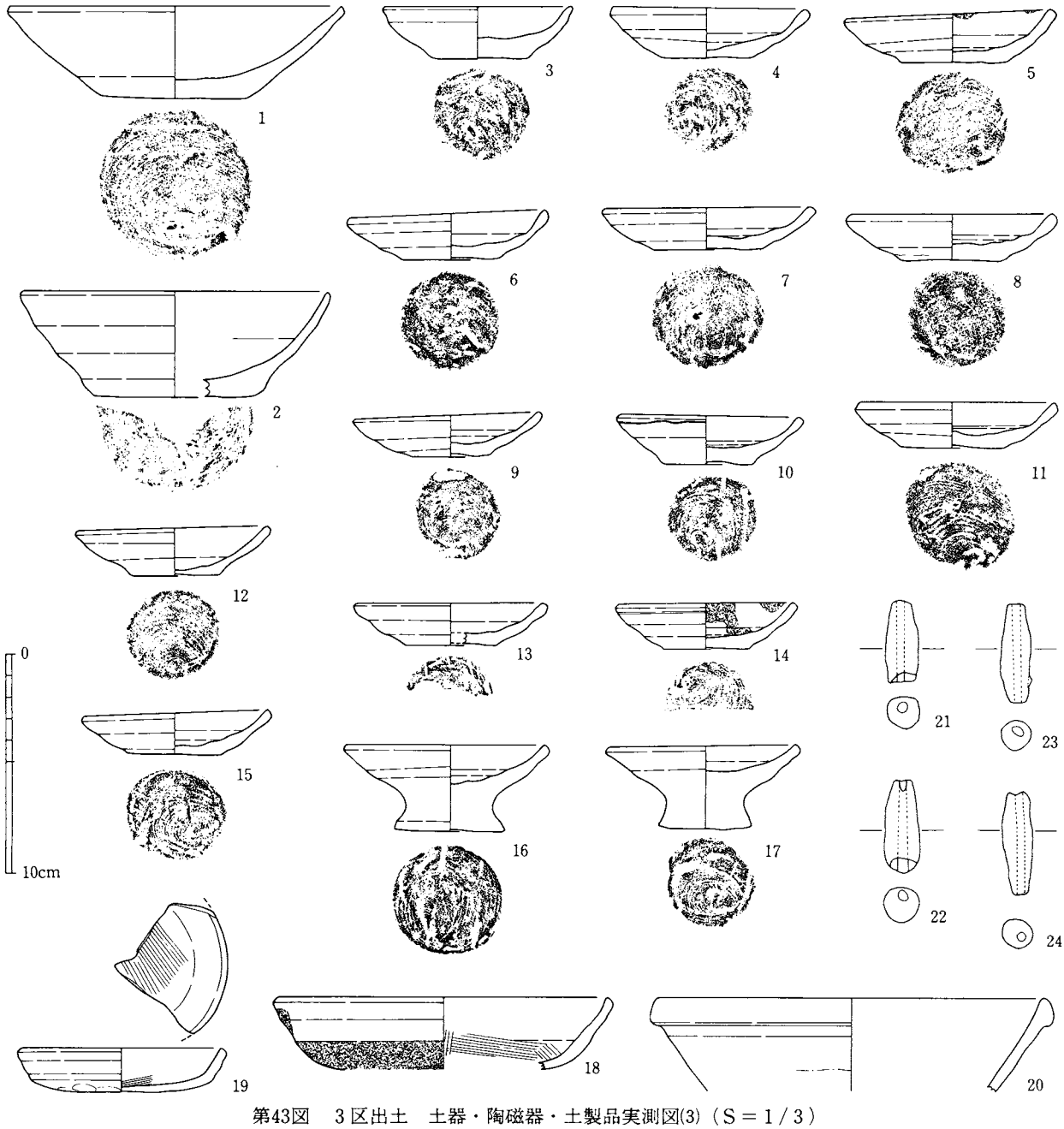
ち6～8は無台小皿、いずれも口縁部端が軽くなでられている。底部は7が糸切りが雑で外面に凸凹がある。8は6・7に比べて小さめの口径の割に底部はやや厚手である。9は底部、柱状高台部分であり、有台皿と思われる。裾部は強く張り出し、断面三角形状を呈する。10は非ロクロ成形の小皿である。口縁部が丸みを持って底部から立ち上がり、調整を分ける一段ナデ手法で、端は軽くなでられる。11・12は珠洲の片口鉢である。口縁が軽く内湾する器形で、器面はロクロナデ痕が顕著であるが、凹凸は小さく、稜は弱い。端はしっかりした面を取らせている。11の端は内面につまみ出されている。4区層8・11間炭層出土の資料と接合する。12は口縁部に片口と、底部外面に回転糸切り痕、内面に太いハケ痕が確認される。どちらも堅緻で色調青灰色を呈するが、比較すると11の方が焼成がやや甘く軟質である。11・12は吉岡編年の珠洲Ⅰ期[8]の範疇にほぼおさめることができる品であろう。13～15は陶錘であり、いずれも紡錘形を呈しており、ほぼ完存している。色調はややムラがあるものの概ね青灰色を呈し、珠洲の質感を持つ。窯内で還元焔焼成されたものと思われる。また、程度の差はあるが概ね器面には籾もしくは籾殻の痕跡が観察され、14は特に明確である。13は長さ4.5cm、幅・厚さ1.4cm、重さ6.5gを測る。14は長さ5.1cm、幅・厚さ1.4cm、重さ7.5gを測る。15は長さ5.1cm、幅・厚さ1.5cm、重さ7.9gを測る。

第42図は第26図3区層15・16出土。1～22は中世土師器である。うち1～19はロクロ成形である。1は無台椀。2～18は無台小皿。ロクロ土師器の無台小皿は多数あるが、口縁端部を軽くなでるタイプで占められており、概ね口径8～9cm、底径4cm前後、器高2cm代を範とし、形態、サイズにまとまりが見られる。19は有台小皿である。20～22は非ロクロ成形。20・21は皿で、口縁部に二帯のヨコナデを行い、その間にロクロヒダ状の痕跡が残る、いわゆる二段ナデ手法をとるものである。21の内底面にはハケ調整が見られる。22は小皿、一段ナデ手法によるものである。中世土師器1～22の胎土はB類主体で、C類がそれに次ぎ、A類は19の有台小皿のみである。色調はd類主体で、それに近いc～d類が次ぐ。非ロクロ成形品の胎土は、皿20・21が同じ類型のロクロ成形品より精良で緻密な質感を持つのに対し、色調が異なる小皿22は非常によく似た質感となっている。23は紡錘形を呈する陶錘で、ほぼ完存している。色調はムラがあり、青灰色の珠洲質の部分と浅黄橙色の土師質の部分の両方が認められるが、おそらくは珠洲窯で還元焔焼成されたものと思われる。長さ5.7cm、幅・厚さ1.5cm、重さ8gを測る。同層は前述したように3区において非常に限定的な範囲で分布していた炭層であるが、多くの中世遺物を包含しており、その一括性はきわめて高い。なかでも中世土師器2・3・5・6・8・9・10・13・15・18は数枚ずつ積み重ねられたようにして密集して出土しており、確実にセットで廃棄された状況を示す。この他、図化できなかったが、白磁、珠洲も出土しており、共伴するものと思われる。珠洲は甕胴部破片であり、内面に漆が付着している。時期的にも12世紀代で非常に限定された段階を示す土器群であり、よって、次項(5)での検討の基準資料として用いるものとする。

第43図は下位遺構面直上層からの出土。1～19は中世土師器で、うち1～17はロクロ成形である。1・2は無台椀。無台椀は器高が低くやや偏平な器形の1と、口縁が内湾気味でより深身の2がある。3～15は無台小皿。無台小皿は3以外は口縁端部を軽くなでるタイプで占められる。3は口縁部端直下に帯状にヨコナデし、端は細く立ち上げている。3～15のサイズは概ね口径8～9cm、底径4cm前後、器高2cm代の範囲におさまり、規格性が高い。16・17は有台小皿。16は身が深く、高台は裾で少し張り出す。口縁端、高台裾とも軽くヨコナデされる。17は16よりも高台の張り出しが弱いものである。18・19は非ロクロ成形である。18は皿。二段ナデ手法をとるもので、内底面はハケ調整。口縁部の一部と外底面に煤が付着している。19は小皿。二段ナデ手法をとり、サイズ以外は18とほぼ同じ形態・調整であり、18の縮小品的な存在である。ロクロ成形品1～17の胎土はB類主体で、C類がそれに次ぎ、A類は無台小皿の3と有台小皿の19のみである。色調はd類主体で、それに近いc～d類が次ぐ。非ロクロ成形品20・21の胎土はC類、色調はd～e類で共通しており、同じ類型のロクロ成形品に比べてより精良で緻密な質感を持つ様に感じられる。20は白磁。大振りな玉縁口縁を持ち、淡黄色のややくすんだ感じ

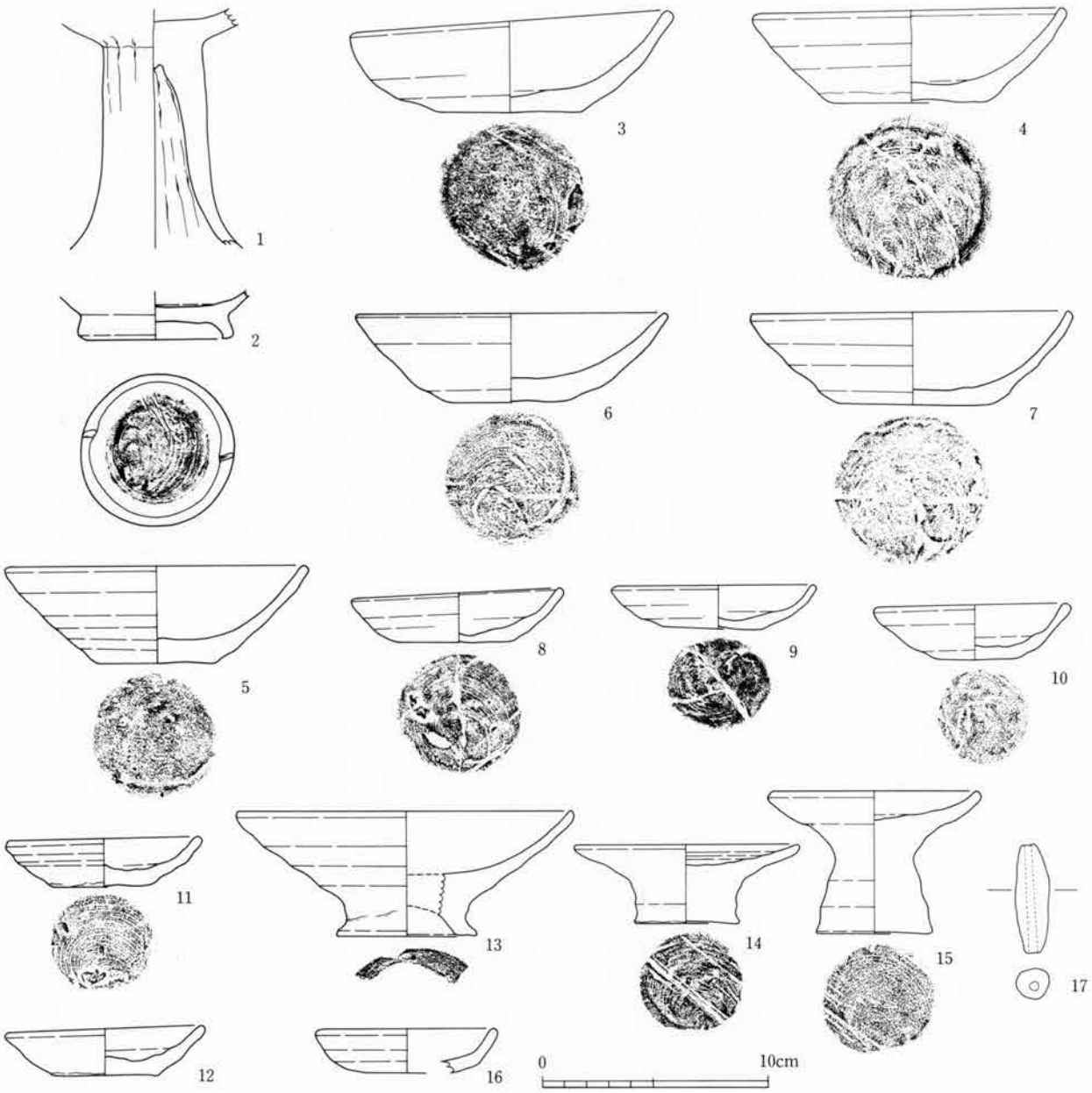
の釉が貫入する。口縁部下半は無釉で、露胎となるようである。森田分類の椀Ⅳ類[14]と思われる。21～24は紡錘形の陶錘で、色調はややムラがあるものの概ね青灰色を呈し、珠洲の質感を持つ。窯内で還元焔焼成されたものと思われる。器面には籾殻らしい痕跡が観察される。21・22は一方の端を折損しており、23・24はほぼ完存している。23は長さ4.6cm、幅・厚さ1.4cm、重さ６ｇを測る。23の器面には窯内のものと思われる粗砂と粘土塊が溶着している。24は長さ4.8cm、幅・厚さ1.4cm、重さ７ｇを測る。この他、図化できなかったが、白磁、同安窯系の青磁、龍泉窯系の青磁、珠洲の破片が出土している。以上の出土遺物は３区層15・16出土資料と比較すると、層位的には下位に位置するが、組成・形態といった内容はよく似ており、時期的にはきわめて近いものと思われる。よって、次項（５）で行う検討の基準資料として用いるものとする。

第44図・第45図は出土層位不明。１は弥生土器で、高杯の脚部である。大型で柱状部が長い器形で、裾と杯部は欠損する。器面は摩耗し荒れており、調整は不明である。２は古代の土師器底部で、有台椀と思われる。径6.3cmを測る高台は、外方へ踏ん張る断面四角形の輪高台で、底部糸切り後貼り付けられ、丁寧になでられている。高



第43図　３区出土　土器・陶磁器・土製品実測図(3)（Ｓ＝１／３）

台端には２点のヘラ状具痕が見られ、ほぼ直径線で結ばれる位置関係にある。制作過程で付いたと思われるが、詳細は不明。10世紀後半～11世紀前半代のものであろう。３～16は中世土師器で、16以外は全てロクロ成形である。３～７は無台椀である。基本的な形態はほぼ共通しているが、３のみ歪みが顕著である。８～12は無台小皿である。無台小皿は全て口縁部端を軽くなでるタイプであり、容量もほとんどばらつきがない。13は有台皿。高台は、柱状高台成形の後、内部を削り取って輪状高台風にしたものと思われる。高台は下方へ少し張り出し、裾が軽くなでられている。14・15は有台小皿である。14は裾がわずかに広がる程度の円筒状の直線的な柱状高台を持つものである。15は極端に器高が高い柱状高台を持つものである。14に比して高台高は約２倍であり、付け根から裾へ緩い「ハ」字状に広がる。16は非ロクロ成形の小皿である。やや摩滅しているが二段ナデ手法をとるものである。17は紡錘形の陶錘である。器面青灰色を呈し、珠洲の質感を持ち、窯内で還元焔焼成されたものと思われる。ほぼ完存しており、長さ５㎝、幅・厚さ1.5㎝、重さ7.5gを測る。第45図は珠洲の大甕。２区、３区層１～３・５・13、４区層６・８・11など、さらに第２次発掘調査出土資料に、接合しないが同一個体と思われる小破片が多く存在する。図上で器形を復元してみたが、胴部、底部の形態は不明確である。口縁部は外反し、端

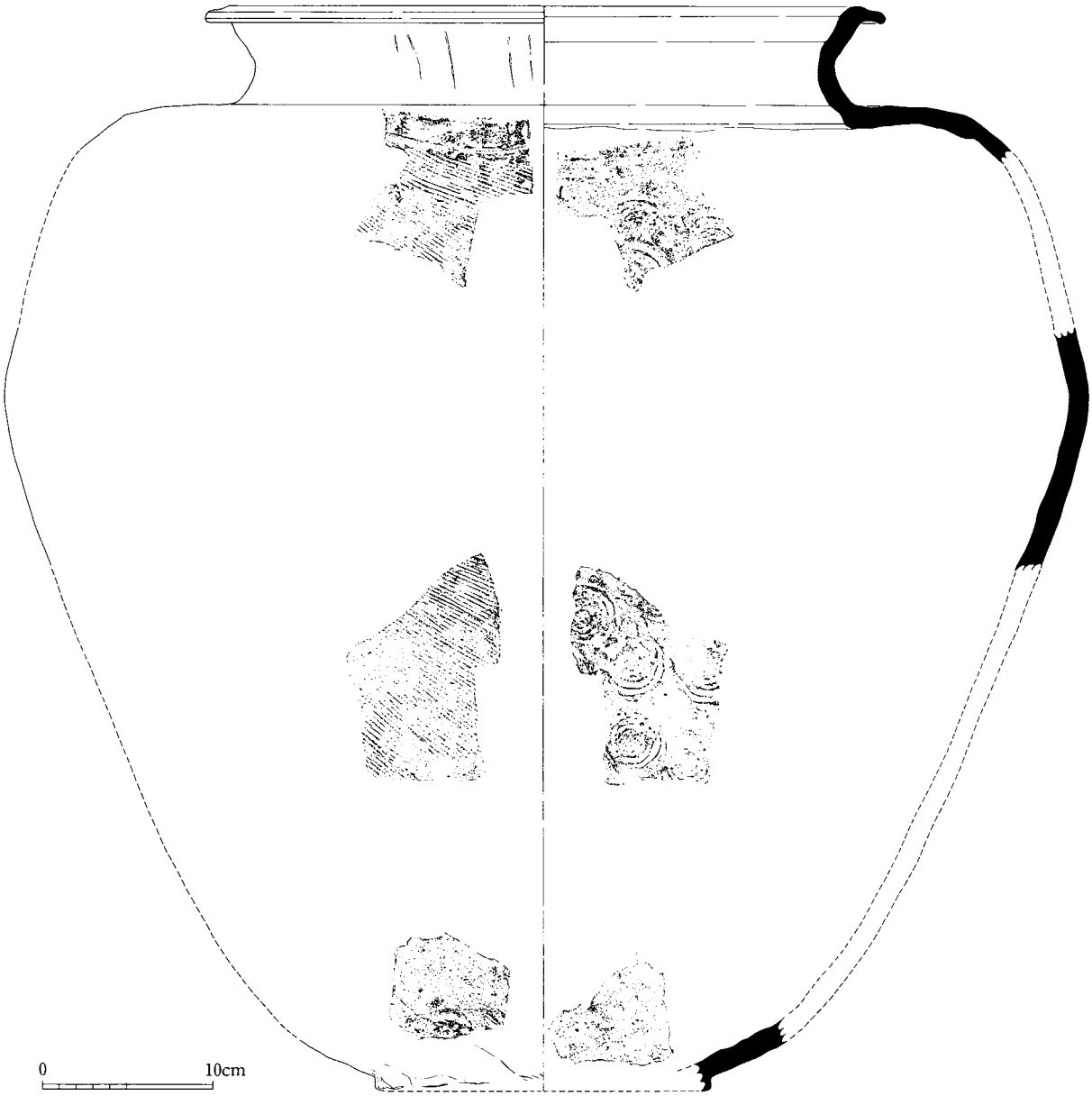


第44図　３区出土　土器・陶磁器・土製品実測図(4)（S＝1／3）

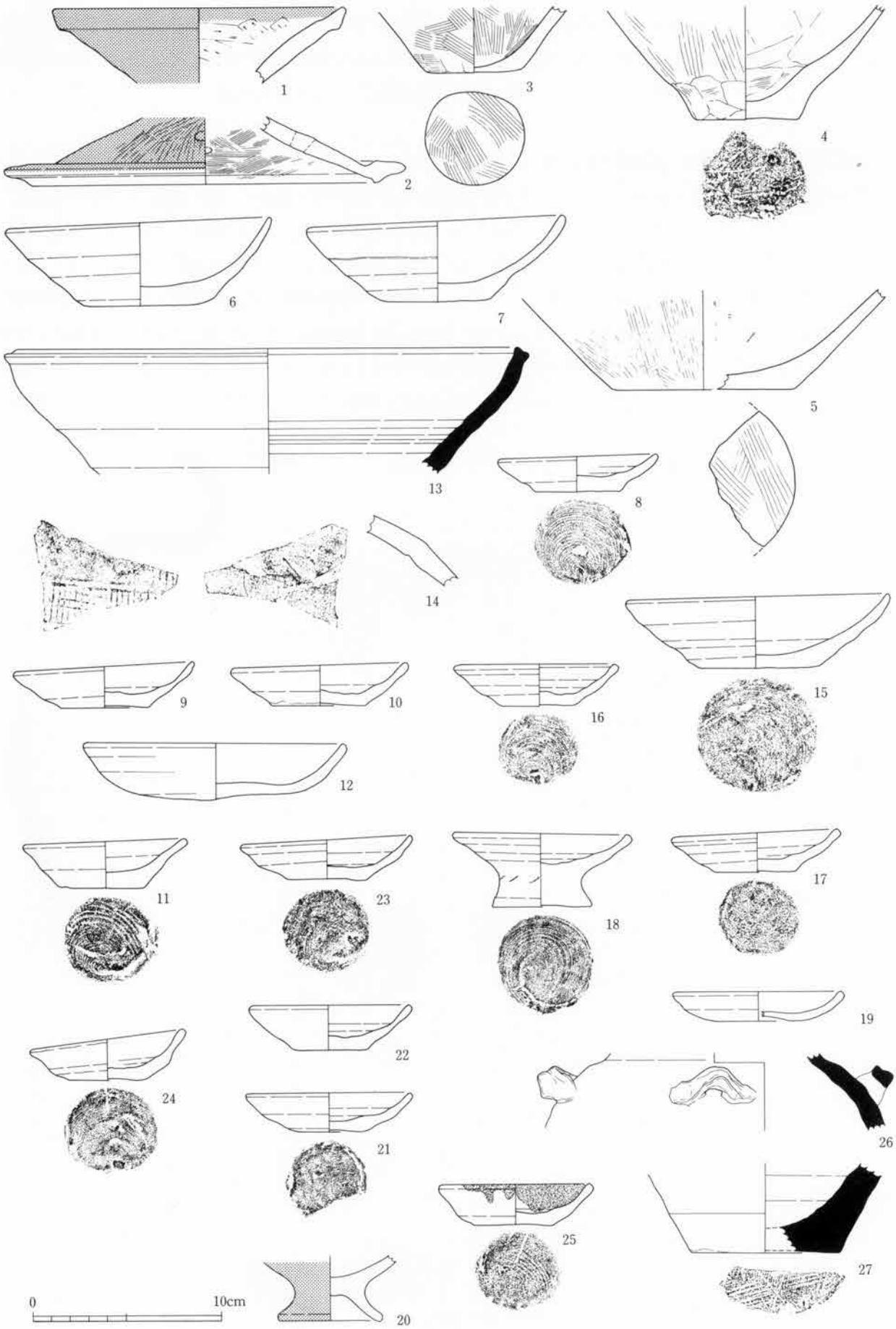
がさらに外面下がりに屈曲する。胴部は外面斜位の細かい平行タタキ、内面は散発的な同心円あて具痕を残す。焼成は良好できわめて堅緻、器面は黒色の吹出しや、白色の小斑点が見られる。胎土は大小の石英・長石粒を含んでいる。吉岡編年の珠洲Ⅰ期[8]に位置付けられ、特に古相に限定できる可能性が高い。

４区出土土器・陶磁器・土製品（第46図～第50図）

第46図１～14は第26図４区層６出土。１～５は弥生土器。１は外反する口縁部で、端を拡張し斜位の面を取り、外面と内面端が赤彩されている。壷と推定。２は「ハ」の字に直線的に開く大型の脚部で、端を折り返してさらに水平に拡張している。外面は拡張部端まで赤彩する。大型の高杯と推定。３～５は底部。３～５とも外底面を中心に大きな黒斑が見られる。４はやや摩耗しており、底部側面の外面指押さえ、内面螺旋状ハケ以外は調整不明。外底面に籾状の圧痕が複数確認されるが、やはり摩耗しており詳細は不明。５はかなり大径の底部で、平坦な外底面から屈曲して立ち上がり、胴部へ大きく広がる器形と思われる。６～12は中世土師器で、うち６～11がロクロ成形である。６・７は無台椀。どちらも摩耗しているが、形態・サイズ等はよく似る。８～11は無台小皿。



第45図　３区出土　土器・陶磁器・土製品実測図(5)（Ｓ＝１／４）



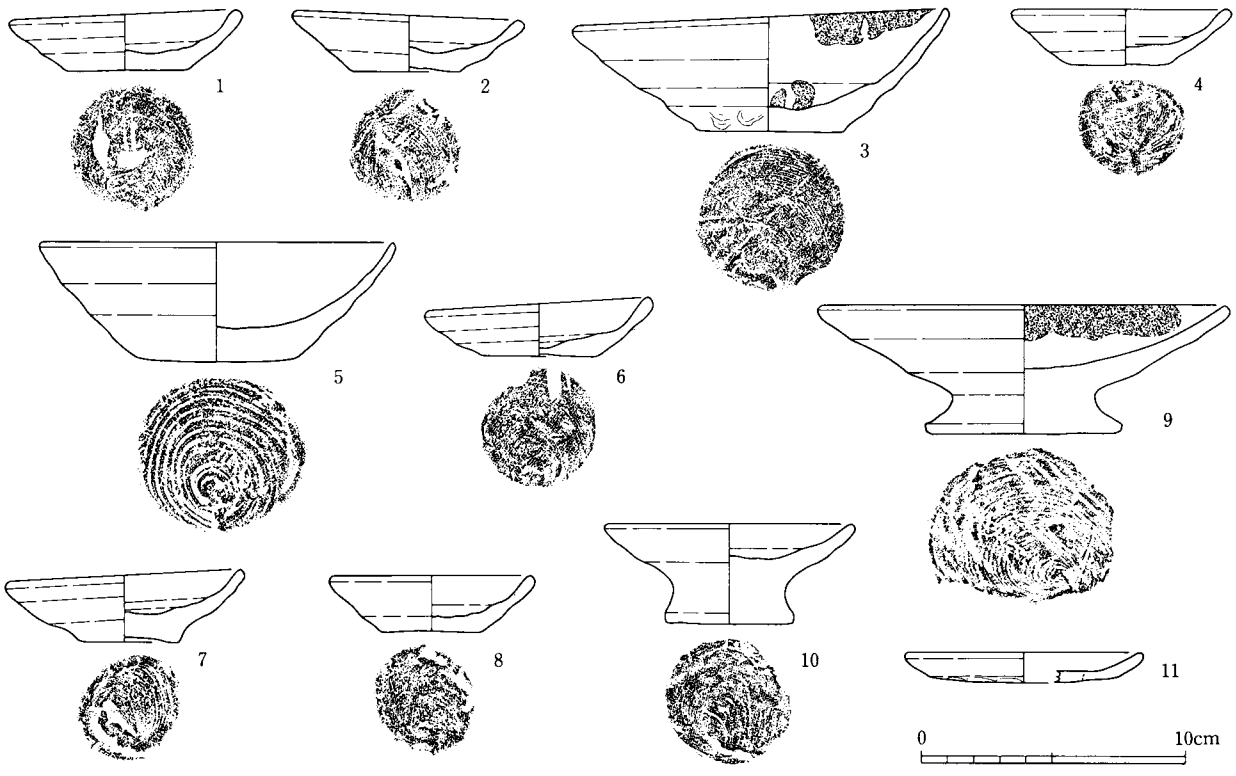
第46図　4区出土　土器・陶磁器・土製品実測図(1)（S＝1／3）

いずれも口縁部端をなでるタイプであるが、８はやや口径が小さく、９・10とは約１cmの差がある。11は身が深いタイプであり、口縁部はやや歪んでおり部分的に外反気味となる。12は非ロクロ成形の皿である。口縁部と底部の境が丸みを持つもので、器面は摩耗しており、細かい調整は不明。胎土中に径２mm大の大粒の焼土塊が見られる。13は珠洲の片口鉢。口縁部が内湾し、端は中凹みの面を取り軽く外方へ突き出させる。焼成は良好で、胎土には細かい白色の砂礫を多く含む。吉岡編年の珠洲Ⅰ期[8]に位置付けられる。14は甕で、外面肩部に格子原体の叩打を行っているものと思われる。内面はあて具痕が残る。色調は、外面褐色で叩打の上位は白色の小斑状、内面は黒褐色を呈する。断面には漆継ぎが見られる。珠洲とは質感が異なる瓷器系の陶器であり、能登では類例が少ない12世紀代の越前と考えている。

第46図15～19は第26図４区層３～５出土。全て中世土師器。15～18はロクロ成形。15は無台椀。16・17は無台小皿、どちらも口縁端部を軽くなでるタイプで、サイズもほぼ等しい。18は有台小皿。口縁端部とわずかに広がる柱状高台裾を軽くなでている。19は非ロクロ成形の小皿。一段ナデ手法をとるものであり、口縁部・底部境は丸みを持つ形態。

第46図20～27は第26図４区層８・11出土。20は弥生土器。台付土器の底部と思われ、「ハ」の字にやや外反気味に開き、外面を赤彩している。不明確ながら内面にも赤色顔料が付いており、赤彩されたものとするならば、広口の台付鉢の類と考えたい。21～25は中世土師器で、ロクロ成形の無台皿。24は口縁が歪んでいる。25は口縁内面を中心に煤が付着している。26・27は珠洲。26は四耳壷である。焼成は良好で堅緻、器面には黒色の吹出しと白色の斑が顕著である。27は珠洲の底部で、壷であろう。外底面は静止糸切りのち、細い２～３条のヘラ状具痕が切っている。焼成は良好で堅緻、色調は器面青灰色、断面紫灰色を呈する。吉岡編年の珠洲Ⅰ～Ⅱ期[8]に位置付けられる。

第47図１・２は第26図４区層12出土の中世土師器で、ロクロ成形の無台小皿。１は胎土中に長さ２cm・幅７mm



第47図　４区出土　土器・陶磁器・土製品実測図(2)（Ｓ＝１／３）

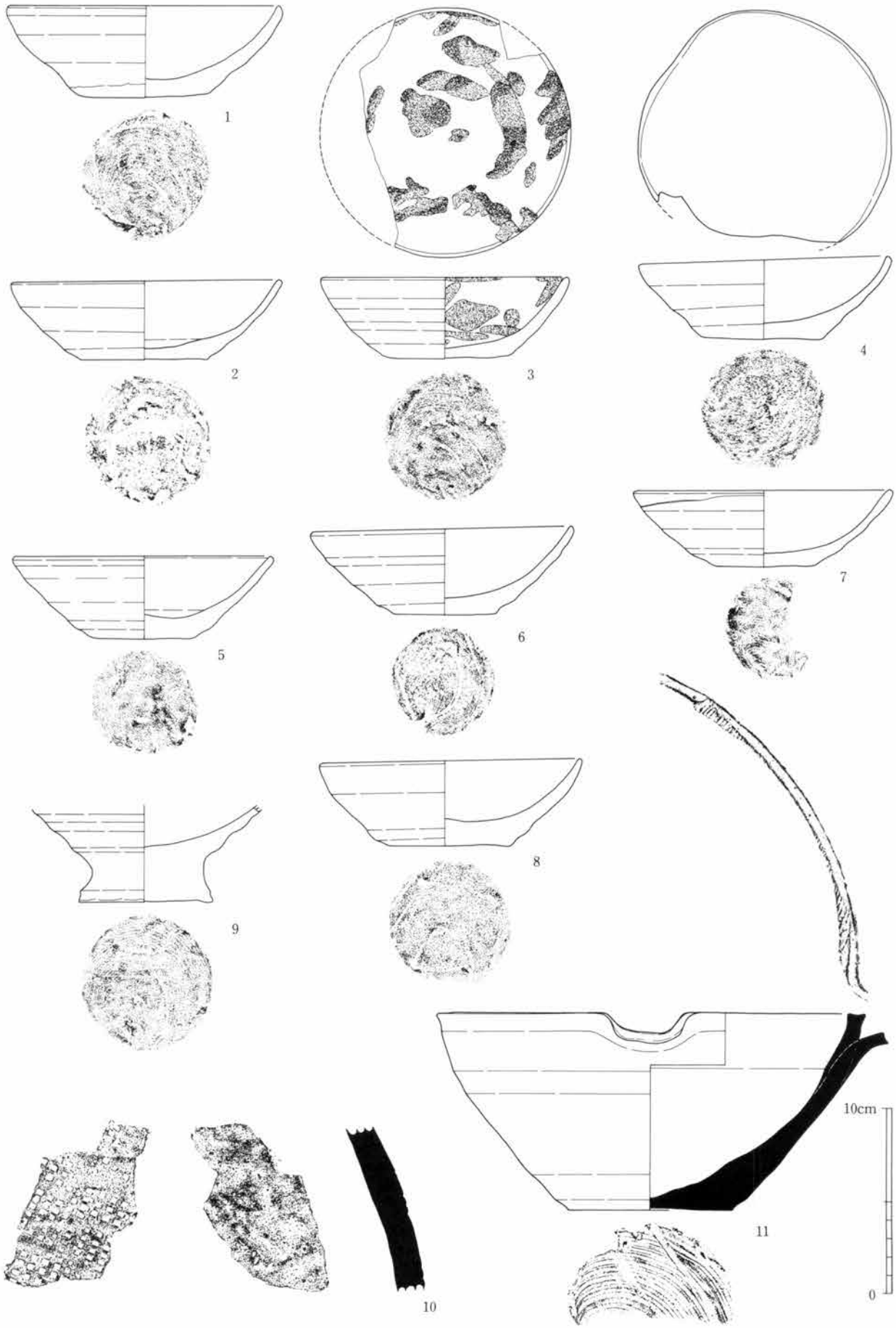
・厚さ3㎜と言うきわめて不整な角柱状の大きな白色粘土塊を含んでおり、その部位で歪んで割れ目が入っている。2は外底面に不整な凹みが2箇所見られる。

第47図3・4は第26図4区層13出土で、ロクロ成形の中世土師器。3は無台椀。外面は底部が黒色化しており、内面は斑点状に煤が付着する。使用の際に被熱したと考えたい。4は無台小皿。焼成良好で、黄橙色を呈する。器面の状態がよく維持されている個体。

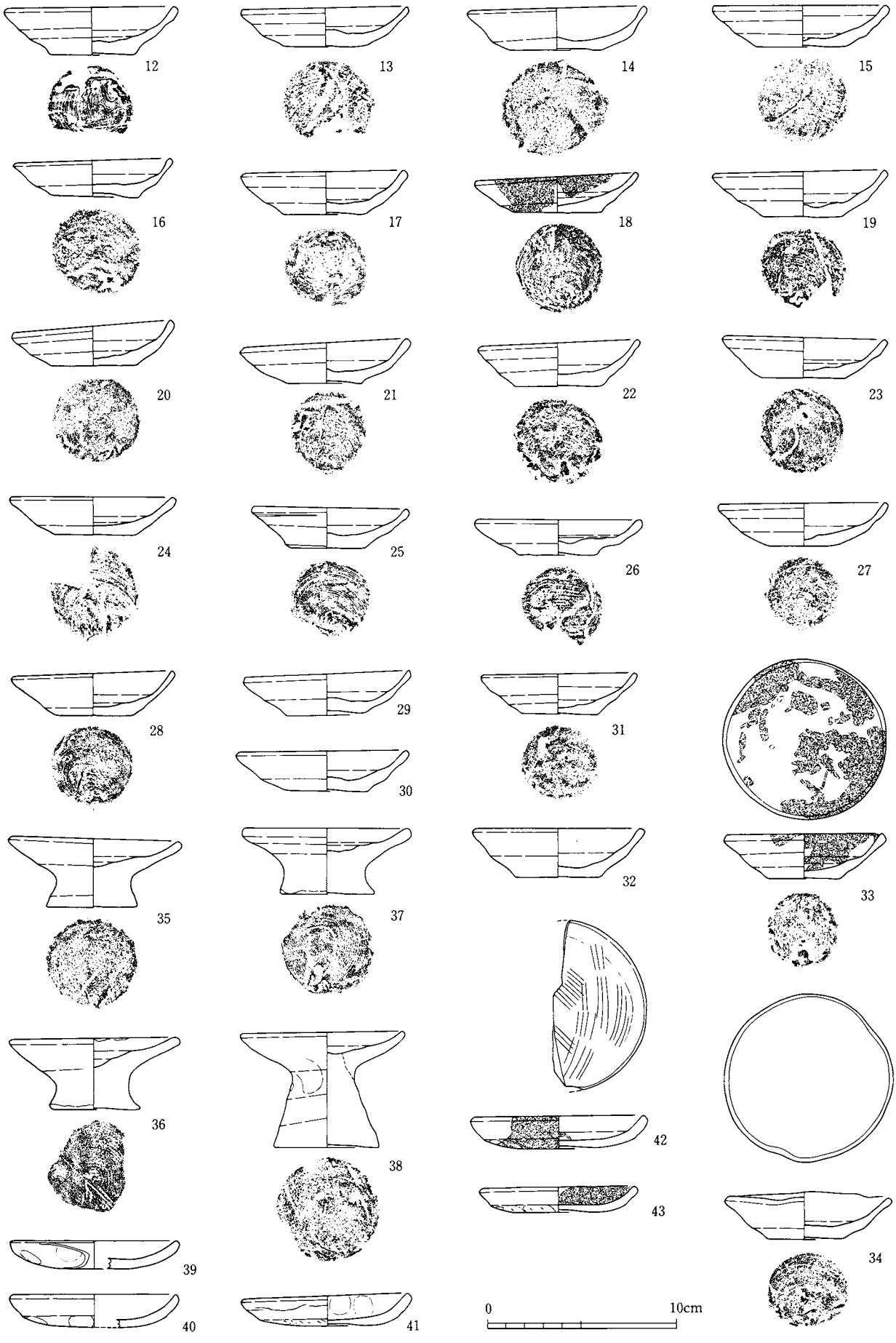
第47図5は第26図4区層15出土の中世土師器で、ロクロ成形の無台椀。口縁部に比して底部がきわめて厚手、底部糸切り痕の条間は他品に比して広い。口縁部と底部の境は丸みを持つ。隣接区の層位で3区層15・16にほぼ対応すると思われる。

第47図6～11は第26図4区層8・11間炭層出土の中世土師器であり、6～10はロクロ成形、11は非ロクロ成形である。6～8は無台小皿。7は他と比して底部が厚いが、底部の糸切りが雑で段がついて切り残したためであろう。8は口径がやや小さいもの。内面は黒色化している。9は有台皿。大きく広がって裾で面を取る柱状高台を持つ。内面は煤が付着するが、煤が濃い部分の裏にあたる外面は、これに対応するようにわずかに黒色化している。10は有台小皿。10の柱状高台は裾へ少し広がるもので、裾と口縁部端は軽くなでている。11は小皿である。一段ナデ手法で、口縁部端は軽くなでている。

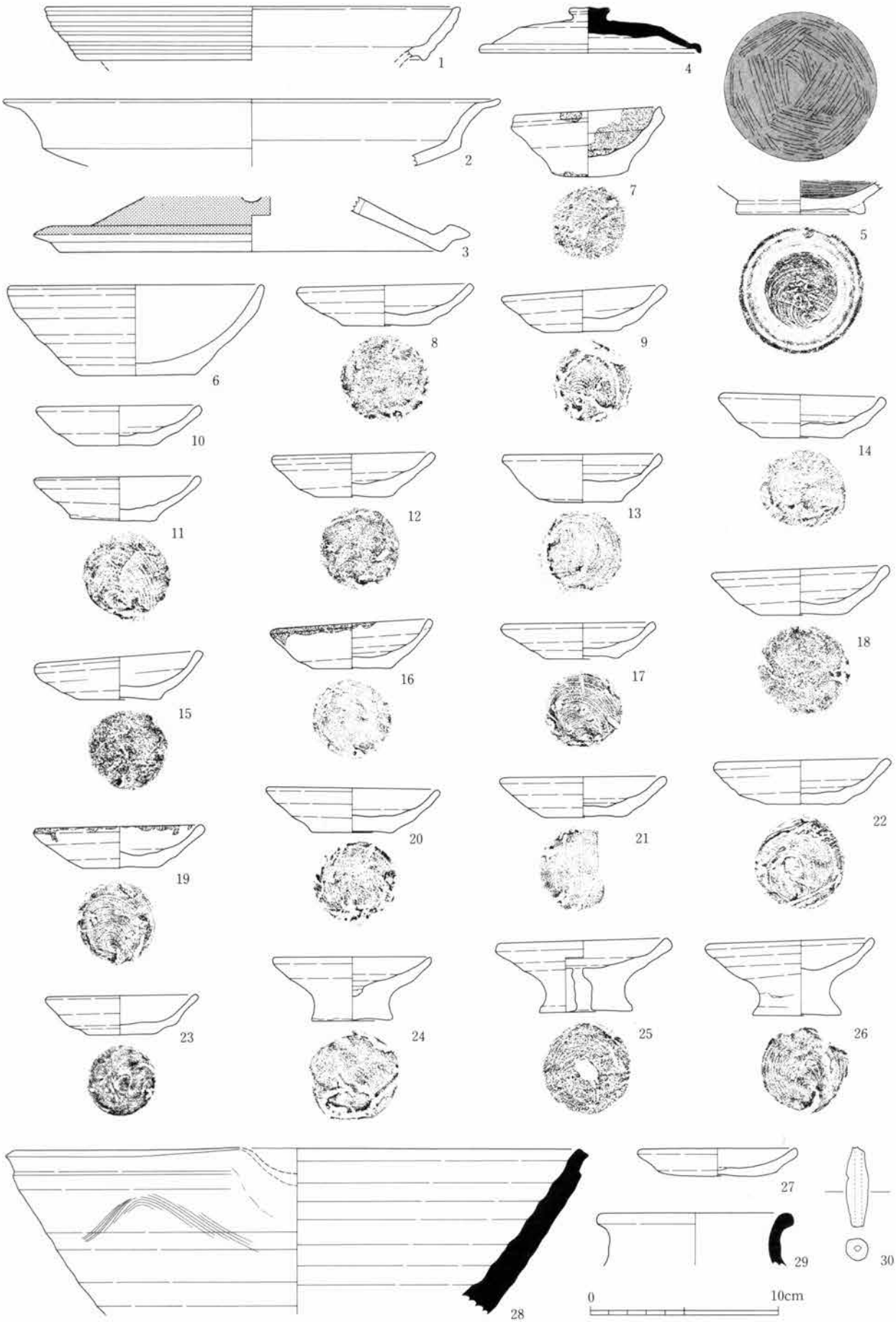
第48図・第49図は下位遺構面直上層からの出土。第48図10・11の珠洲以外は全て中世土師器である。中世土師器は第49図39～43を除いては全てロクロ成形である。第48図1～8は無台椀。やや内湾気味か直線的な口縁部と厚めの底部からなり、口径14cm前後、底径6cm前後、器高4～5cmのサイズにほぼまとまっている。1～8は微妙な形態差があるが、概ね底部の厚いものは口縁部が対応して短くなっている。口縁端部は軽くなでるものもあるが、なでていても必ずしも明瞭で連続的な面を取らない。3は内面に斑点状に煤が付着する。4は口縁部がやや歪んでおり耳皿状を呈するが、意図したものかどうかは分からない。6は内面が黒色化する。9は柱状高台が付く有台品の底部で、おそらくは有台皿と思われる。柱状高台は裾で少し張り出し、軽くヨコナデされて面が取られる。10は珠洲の甕である。肩部で、正格子の叩打文が何単位か施される。焼成良好で器面に黒色の吹出しが見られる。1区出土の第38図16と質感、装飾ともよく似るが叩打格子はこちらがやや小さいように思われる。11は珠洲の片口鉢で、ほぼ完形品である。北調査区出土の破片と接合する。口径22.8cm、底径8.8cm、器高10.8cmを測る。焼成は良好で、外面底部付近を除いてはほぼ全面に自然釉がかかり、内面底部はさらに焼けぶくれて白色斑が付く。口縁部は内湾し、端は中凹みの面を取る形状で、片口部を作り出し、その約1／4周間隔を置いて刻み目を入れている。外底面は静止糸切り、内面におろし目は入らない。吉岡編年の珠洲Ⅰ期[8]に位置付けられる。第49図12～34は無台小皿である。口縁部端を軽くなでるもので占められ、口径9cm前後、底径4cm前後、器高2cm代のサイズにまとまる。12は内面に成形から焼成までの間に付着したと思われる、径1cm大の粘土塊が見られる。17は口縁部端が赤色化しており、2次的な被熱痕と思われる。18は内面と外面に煤が付着するが、外面は口縁部端から底面までと、内面よりも広い範囲に認められる。19は外面の一部が黒色化している。26はきわめて器高が低い偏平な感じの個体であるが、口縁に歪みがあり、底部の切り放しも雑で段がついて凹凸がある。他品と別タイプと言うよりは成形に失敗した品と考えたい。28は内面ほぼ全面と外面の一部が黒色化している。33は内面に明瞭に煤が付着しており、底面は厚く色が濃いが、口縁近くでは薄くなり一部外面にもはみ出している。23の口縁部は図示したように歪みがある。35～38は有台小皿である。35～37は器高4cm未満で、柱状高台は少し広がり、裾を軽くヨコナデしているが、36はやや不整で波打つ部分がある。35と36は皿の底面が凹み気味である。38は柱状高台をさらに高くして、器高6cmを超えたもの。皿部分の形態については他品と大きな差はない。39～43は非ロクロ成形の小皿である。概ね口径8cm代、器高2cm以下を範とする。不定ナデの底部から、ヨコナデの口縁部が緩やかに立ち上がるもので、一段ナデ手法による調整。42は内面にハケ調整痕を残すもので、外面には煤が付着する。43は不明瞭ながら内面に煤が付着するようである。中世土師器の胎土はB類が圧倒的に多く、ご



第48図　４区出土　土器・陶磁器・土製品実測図(3)（Ｓ＝１／３）



第49図　4区出土　土器・陶磁器・土製品実測図(4)（S＝1／3）



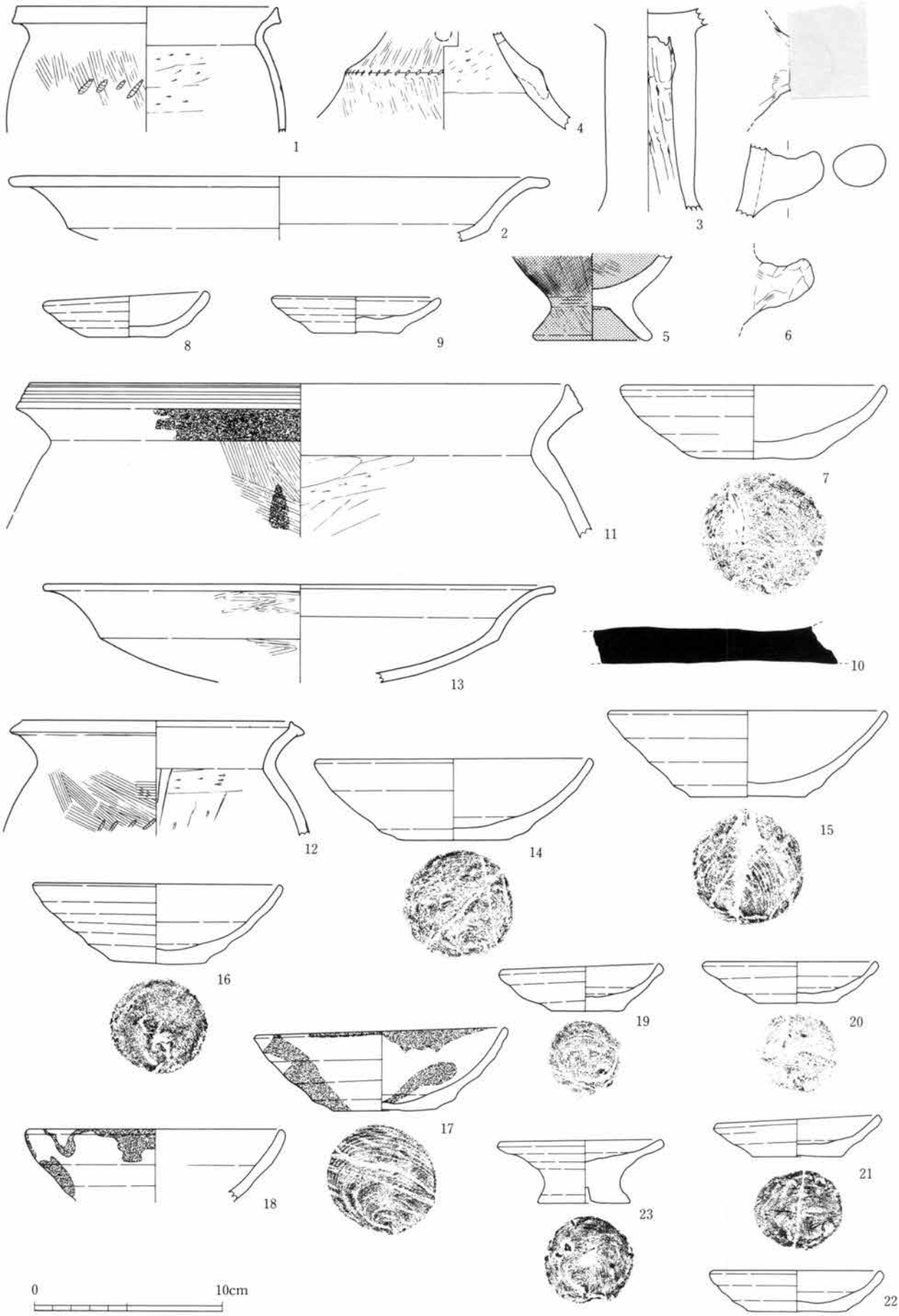
第50図　４区出土　土器・陶磁器・土製品実測図(5)（S＝1／3）

く少量A類、C類が存在する。色調はd類が多い。色調d類はより明るいc類、より暗いe類と判別しがたいものが存在するが、焼成具合による差であり、基調はd類と見たい。器種別ではロクロ成形が主体、その中でも無台椀、無台小皿が主体であり、胎土、色調の前述した傾向を代表する。ロクロ成形の有台皿、同じく有台小皿、非ロクロ成形の小皿はごく少量である。少量器種については、胎土B類が主なのは同じ、色調は多様ながら、暗めのe類、f類が目立つ。この他、図化できなかったが白磁碗が出土している。下位遺構面直上層については上位層に比べてきわめて混入品が少なく、出土した中世土師器、珠洲、白磁は一括性が高い資料として扱うことが可能と思われる。よって次項(5)で行う検討の基準資料として用いる事にする。

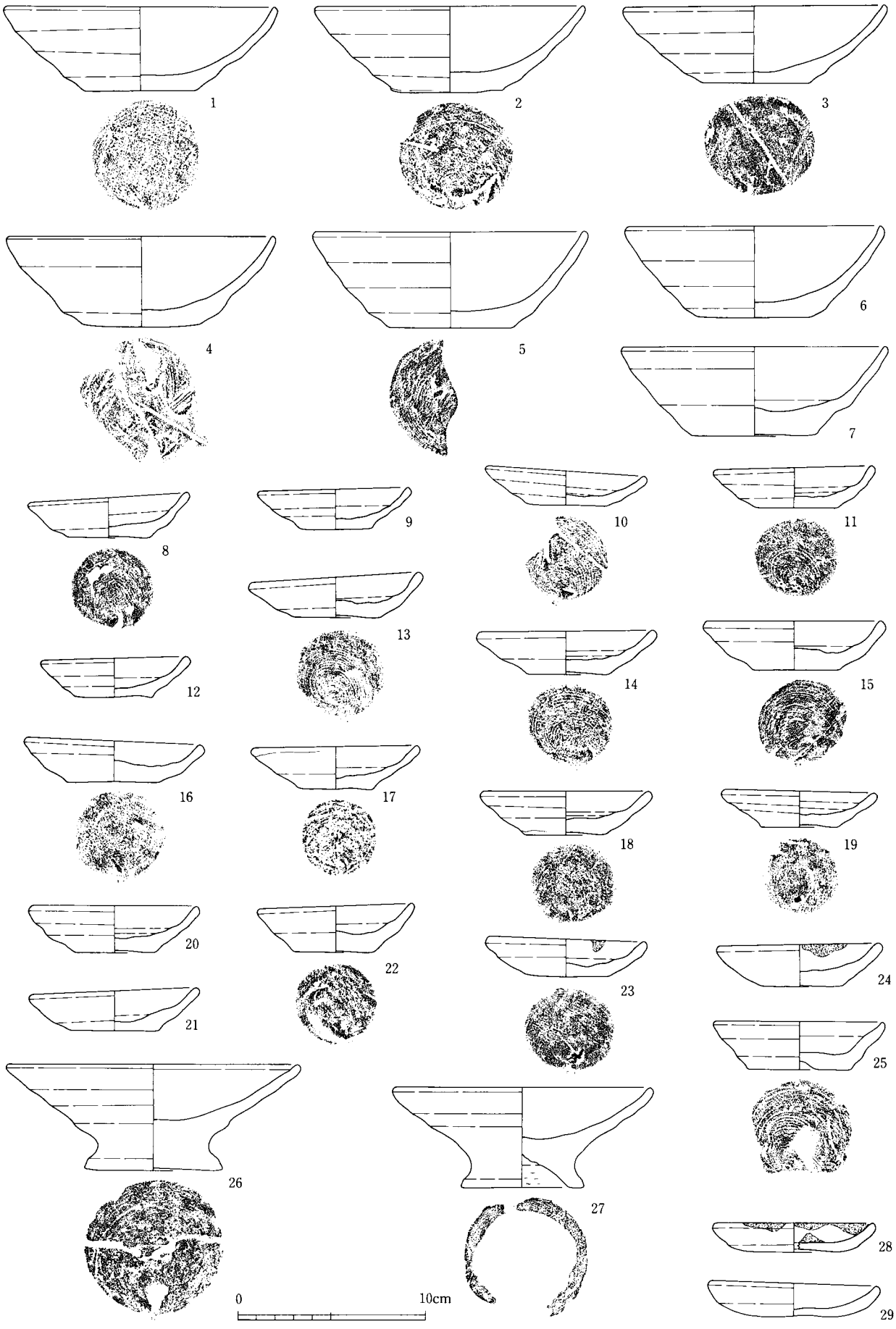
第50図は出土層位不明。1～3は弥生土器である。1は擬凹線を持つ有段の口縁部で、器表面は摩耗するが淡赤色に発色していることがわかり、大型の有段口縁鉢と推定する。2・3は高杯。2は杯部で、短い口縁部が外反し、端内面に面を取っている。3は脚部で、「ハ」字に直線的に開き、端を折り返して拡張する。器面は摩耗しており、外面に赤彩痕らしきものがわずかに残るが詳細は不明である。4は古代の須恵器で、杯蓋である。偏平なつまみを持ち、無ヘラケズリで平坦な肩部から口縁部が斜め方向に薄めに直線的に伸びるもので、端は水平に折り返された後、垂直に立てておさめる。胎土は海綿骨片を含む海成粘土と思われ、他の砂礫では長石を顕著に含む。9世紀前半頃の時期で、産地は明らかにしがたいが、富来、志賀など羽咋郡近辺の産地が考えられる。5は古代の土師器の底部で、内面黒色の椀と思われる。底部糸切り後、断面三角形の幅の広い輪状高台を貼りつけている。黒色部分がヘラミガキされていることから、10世紀代のものであろう。6～27は中世土師器で、27以外はロクロ成形。6は無台椀。口縁部端は軽くなでているが、はっきりした面取りはされない。7は器高、身の深さから無台小椀に分類した。きわめて例外的な器形で、確認例は調査区内でこの1個体のみである。口縁部端は強くヨコナデして立ち上げ、ほぼ垂直の面を取る。内面と一部外面に薄く煤が付着する。8～23は無台小皿で、口縁部端を軽くなでるもので占められる。13は底部がきわめて厚いもの。他品よりも糸切り痕が明瞭で、対照的にヘラを差し入れた痕跡はない。15は色調d類の器面上にc類部分が被膜状に遺存しており、胎土の地色はdで仕上がり色がcであったと推定できる。16は口縁部端に煤が薄く付着している。19は口縁部端を中心に厚く煤が付着している。23はひじょうに薄手で、底径が小さく、口縁部端のナデもほとんど認められない。胎土はE類、色調はa～b類で、軟質の、明るい色調の個体である。他の個体よりやや古い時期への位置付けが可能かもしれない。24～26は有台小皿。柱状高台は裾が少し広がり、軽くなでているもの。24は内底面に小孔が見られる。貫通はしない。25は径0.6～1.2㎜の孔が柱状高台をやや斜位に貫通している。外底側がやや大きくなっており、内底側がやや盛り上がっていることから、外底面から棒状具を突き刺していたものと思われる。26の底部糸切りは雑で、凹凸が著しい。27は非ロクロ成形の小皿。一段ナデ手法による調整を行い、端は面を取っている。28・29は珠洲。28は片口鉢。欠損しているが、片口部に近い部位の破片と思われる。全体的にロクロヒダが顕著な個体で、内面は多くの稜をなす。口縁部もヨコナデが顕著であり、面を取る端とその直下は特に強いヨコナデがなされて凹み、端直下は段が付く。焼成良好で全面に自然釉がかかり、外面は櫛状具で引き継ぎながら大らかな感じの波状文を施している。29は壷口縁部、外反して端を肥厚、ヨコナデして緩やかに面とりする。焼成良好で全面に自然釉がかかる。おそらく四耳壷であろう。28・29は吉岡編年の珠洲I期[8]に位置付けられる。30は紡錘形の陶錘である。器面青灰色を呈し、珠洲の質感を持ち、窯内で還元焔焼成されたものと思われる。端をわずかに欠損するが、長さ4.5cm、幅・厚さ1.2cm、重さ6gを測る原存値と大差ないであろう。

5区出土土器・陶磁器・土製品（第51図～55図）

第51図1～10は第26図5区層1・2・4・5出土。1～5は弥生土器。1は甕である。くの字口縁の端を立ち上げ、ヨコナデして面を取るもの。肩部にはハケ状具による斜位の刻みが巡る。2・3は高杯。2は杯部で、有段の口縁部は端をほぼ水平に折り、内面で面を取る。3は脚部で、円筒柱状を呈するが、裾の形態は不明。胎土



第51図　５区出土　土器・陶磁器・土製品実測図(1)（Ｓ＝１／３）



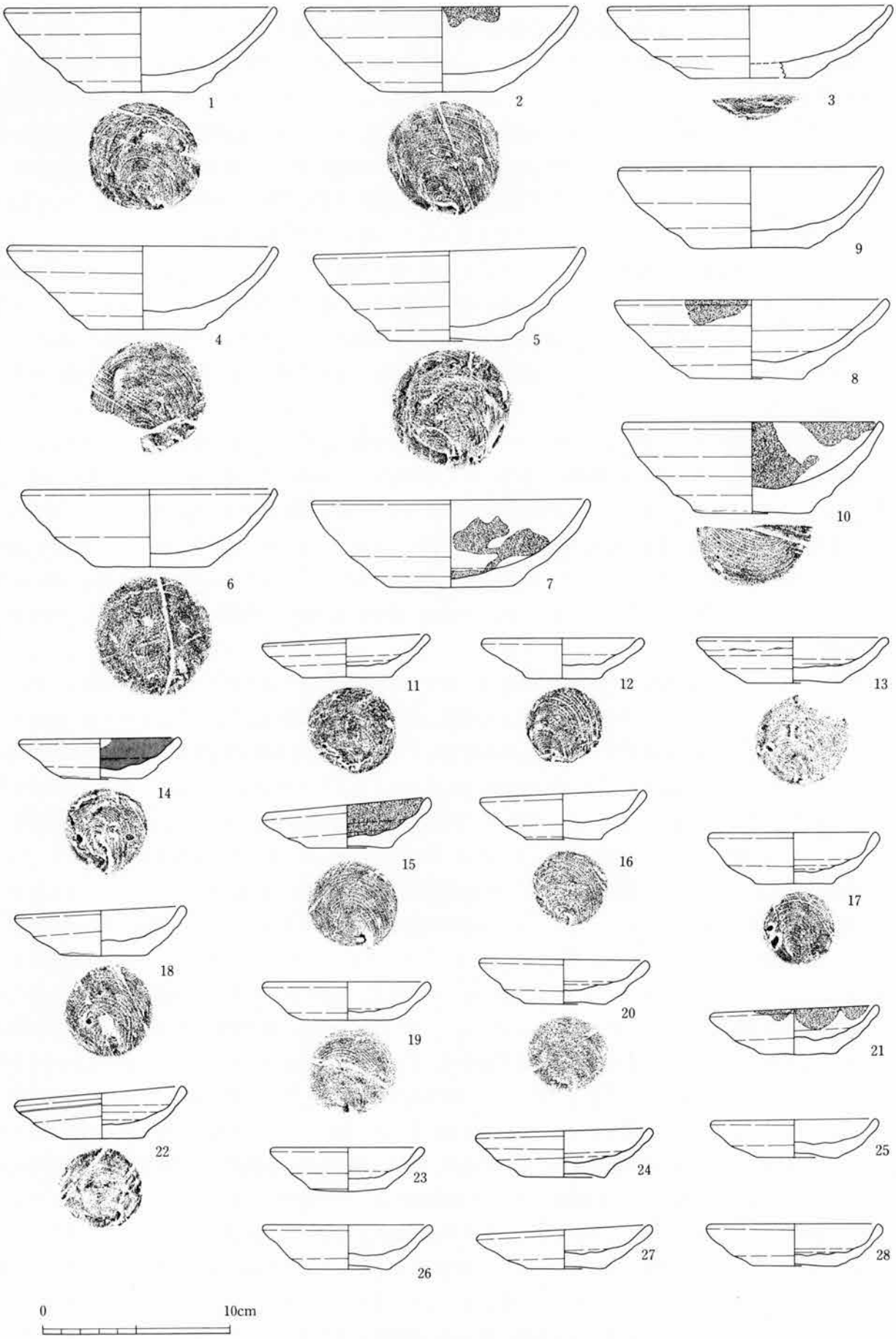
第52図　5区出土　土器・陶磁器・土製品実測図(2)（S＝1／3）

は紫灰色、赤色のチャート質の砂礫を顕著に含む。４は器台で、有段の脚部と思われる。段部分にヘラ状具による刻みを巡らせる。５は台付土器の底部で、台は「ハ」の字に直線的に開く。体部外面は細かい縦位のハケ調整。顔料の痕跡をわずかにとどめる程度の台内底面も含めて内外面ほぼ全面赤彩品と考えてよく、内面の彩色具合からみて括れの少ない鉢器形が想定される。６は鈎状に伸びる把手であり、古墳時代中後期の土師器で、小型の甑の一部と思われる。焼成良好で硬質、胎土は大小粒の石英、長石を顕著に含む。７～９はロクロ成形の中世土師器であり、７は無台椀、８・９は無台小皿であるが、どれも器面が摩耗しており、細かい調整等は不明。10は軟質ながら還元焔焼成されている厚さ２cm程度の粘土板であり、珠洲の大甕の類の底部と思われる。

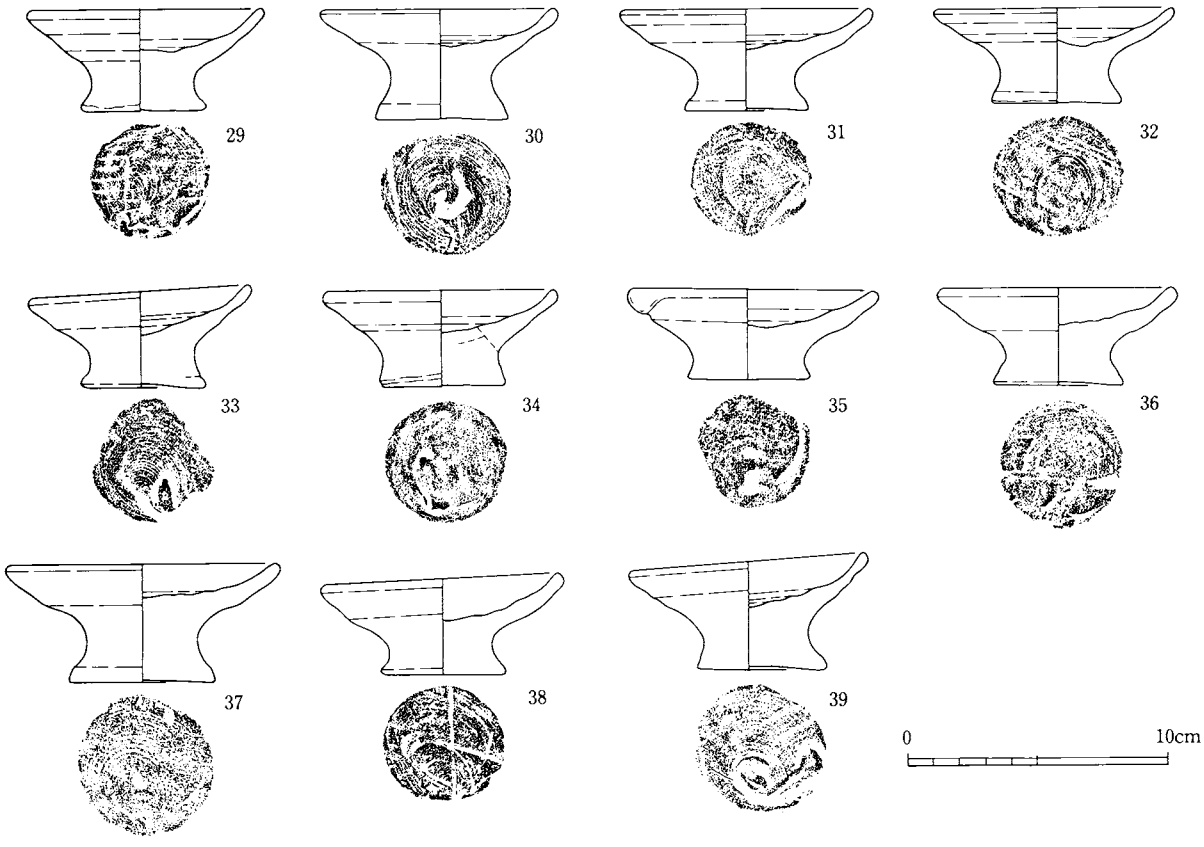
第51図11～13は第26図５区層８・９出土、全て弥生土器。11・12は甕である。11は擬凹線が入る断面三角形口縁を持つ大型品である。外面の口縁部端直下から頸部の屈曲点までの範囲に帯状に煤が濃く付着しており、特徴的。12はくの字口縁の端を拡張してより幅広の面を取るもの。肩部にはハケ状具による斜位の刻みが巡るようである。13は高杯の有段の杯部であり、その口縁部は大きく外反し内面端で稜をなす。胎土にチャート質の赤色の砂礫が見られる。

第51図14～23は第26図５区層10・14出土、全てロクロ成形の中世土師器。14～18は無台椀。17・18は器面に煤の付着が確認された。17は内面は口縁部から底部、そして口縁部へと直径線状に煤が見られ、口縁部の一部では横に広がっている。外面は内面に比べて付着範囲がより小さくなるが、内面に対応する位置に見られ、特徴的である。18の煤は外面でのみ確認される。19～22は無台小皿で、すべて口縁部端を軽くなでるタイプである。20は範囲がしぼれないが煤の付着、黒色化部分が内外面で認められ、被熱したものと思われる。23は有台小皿。柱状高台は少し広がり、裾を軽くなでているもの。23は外底面に径0.6～1.3mmの不整形な孔が見られるが、内底面まで貫通はしない。

第52図は第26図５区層17及びその上面の炭層出土、全て中世土師器。やや遺存が悪く、器面が摩耗して荒れているものが多い。１～25はロクロ成形。１～７は無台椀、わずかに内湾気味の口縁部、厚さ１cm前後の底部からなり、口径14cm前後、底径６cm前後、器高５cm前後を範とする。１～３は口径の割に低器高で偏平に感じられるもの、５～７はその逆に器高が高く身が深いと感じられるもの、４はその中間的に感じられるもの、であるが個体差はきわめて小さい。４は外底面に糸切り後あらゆる方向から棒状具を面に平行に差し入れた痕跡が認められ、器面の粘土が掻き取られて凹凸がある。５は内面に煤が付着している。８～25は無台小皿。ほとんど全てが口縁部端を軽くなでるタイプで占められている。概ね口径８～９cm、底径４～５cm、器高２cm台におさまる規格。８は薄手の作りで、後述するが胎土、色調とも大多数の個体と質感を異にする。９・10は他よりもやや小径のもの。９・10は形態のみならず、胎土と色調もひじょうによく似たものである。11も薄手の作りで、９・10の胎土、色調に近似するが、歪みが大きい。24は厚手で稜がはっきりせず、鈍重に感じられる。内面口縁部端の一部に煤が付着する。25は底径が大きく、口縁部が強く立つもの。26・27は有台皿。26は断面三角形に張り出し気味の径の大きい柱状高台を持ち、その裾をヨコナデして面を取っている。27は26よりも張り出しの小さい柱状高台を持つが、外底面を回転ヘラケズリで円錐状に抉り取り、輪状高台風にしたもの。けずり残した外底面の縁に糸切り痕が残っており、成形の最終段階で抉りとったことがわかる。28・29は非ロクロ成形の小皿、いわゆる１段ナデ手法による調整を行う。28は口縁部端を軽くなでるもの。煤が、内面に濃く広範囲に、外面は薄く内面からはみ出すように口縁部端に付着する。29は摩耗しているが形態的に非ロクロ成形と判断できる。ただし外底面に面に平行して棒状具を差し入れたような痕跡があり、ロクロ成形品によく見られる調整であることから、29もロクロ成形で、非ロクロ成形品の形態を模倣したものとなる可能性がある。中世土師器の胎土はＢ類が最も多く、Ｃ類がこれに次ぐ存在となる。Ｃ類が量的に多い印象を受けるが、摩耗していることもあり粒径の大きい長石が器面から抜け落ちた可能性もあり、積極的には評価できない。色調はｄ類が最も多いようで、他、ｂ～ｃ類、ｃ類、判別しがたいｃ～ｄ類、ｅ類がある。８は胎土Ｄ類、色調は摩耗した部位がｂ類、それ以外の部位ではｇ類で、



第53図　5区出土　土器・陶磁器・土製品実測図(3)（S＝1／3）

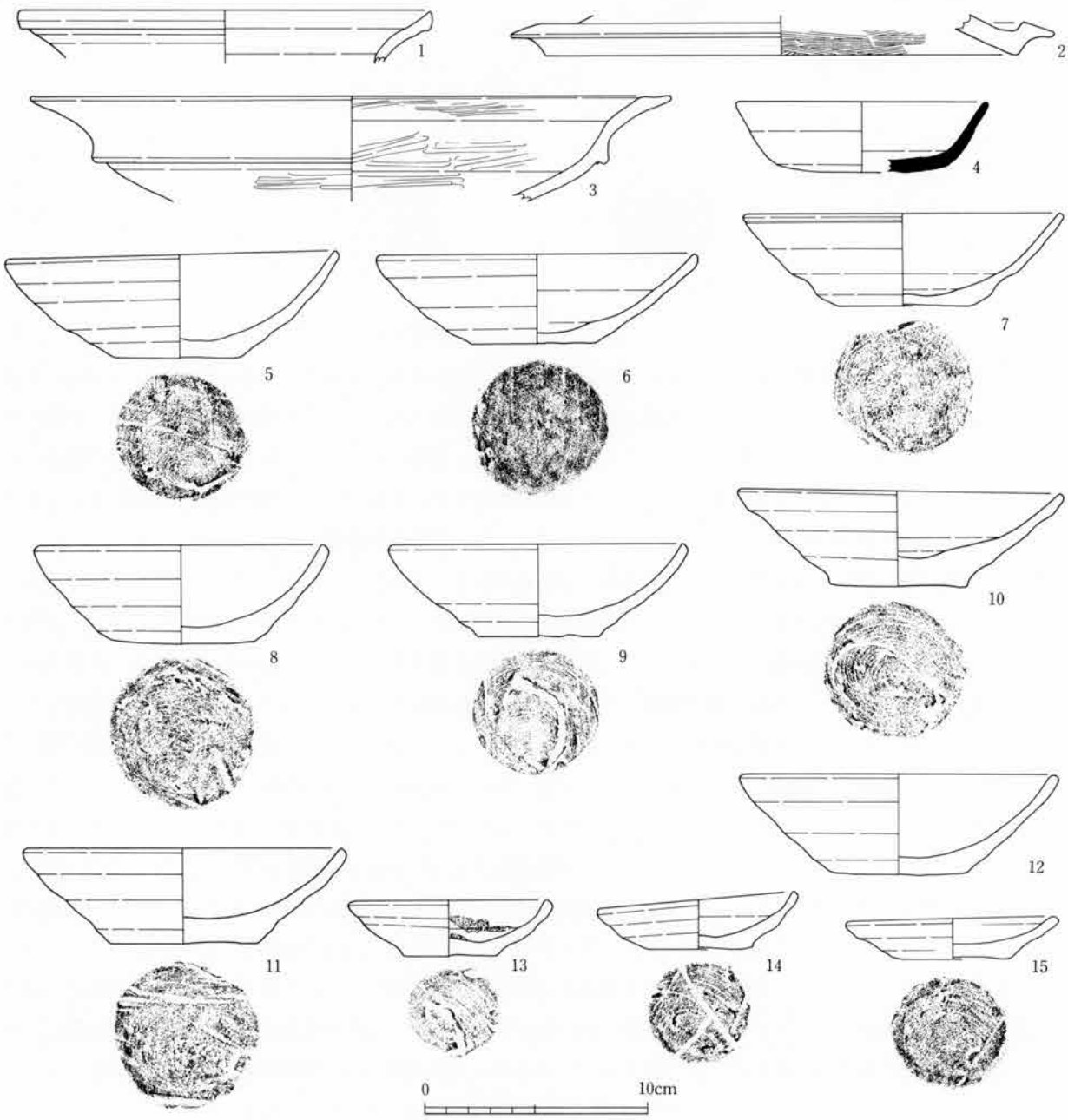


第54図　５区出土　土器・陶磁器・土製品実測図(4)（Ｓ＝１／３）

おそらく焼成直後はｇ類であったと思われる。きわめて異質で希少な存在であり、先述したように形態的にも古い系譜上にある製品であるが、生産地も他品と大きく異なる可能性もある。以上の中世土師器は器種、形態、サイズにまとまりを持っており、一括性は高いものと思われるが、地表に近い位置にあったせいか土器の遺存がよくないこと、層位的に上位に位置することによって生じる可能性がある12世紀代の時期幅を読み取れないことが惜しまれる。以上の様な問題点に注意しつつ、次項（５）で行う検討に基準資料として使用したい。

第53図、第54図、第55図１・２は下位遺構面直上層からの出土、第55図１・２が弥生土器である以外は全て中世土師器で、ロクロ成形である。第53図１～10は無台椀。概ねわずかに内湾気味に伸びる口縁部と厚さ１cm程度の底部からなり、口径14cm前後、器高４～５cm、底径６cm前後を範とする。３は器高がかなり低いと推定されるもの。胎土中に含まれる大粒の焼土塊が器面に表れており、径３mm以上と思われる。４は確実に口縁部端をヨコナデしていると思われ、一部で内面に粘土を丸く折り返している。５は口縁部外面下位に径５mm程の粘土塊が付着する。７・10は内面に広範囲に煤の付着が認められる。10は口縁部がやや強く内湾し、底部が厚いもので、器高も高くなっている。11～28は無台小皿。口縁部端を軽くなでるタイプで占められ、口径８～９cm、底径４～５cm、器高２～３cmを範とする。14は内面の約１／２が黒色を呈するが、器面と一体性が高いため煤とは言い難く、むしろ弥生土器等の黒班によく似た質感を呈し、特徴的である。15は内面ほぼ全域に煤が付着する。19は底部径が大きく、かつ口縁部との境が丸みを持つ点で、非ロクロ成形品に似る。21は口縁部端の器面に径３mm大の大粒の珪質の砂礫が表出している。口縁部端に煤が付着するが厚さ、範囲等は不均一である。23は外底面に径５mm大の大粒の珪質の砂礫が表出している。第54図29～39は有台小皿であり、全て柱状高台を持つもの。口縁部端とわずかに張り出す底部柱状高台裾を軽くなでるもので占められる。他の地区、他の層位に比べて出土個体数が多い。口径は９cm前後と無台小皿よりわずかに大きく、底径は５cm前後、器高は３cm代から５cm近くまで少し幅がある。37は口径、器高、底径ともこの群中で最大のものであり、重量感に富む製品である。器面に径３mm大の大粒の珪

質の砂礫が表出している。中世土師器の胎土は無台椀、無台小皿、有台小皿各器種を通じてB類が圧倒的に多く、他は無台椀でA類（3）、C類（2・6）、無台小皿でA類(26)がごく少量認められる。色調はd類が最も多いが、c類、c～d類、d～e類、e類も一定量認められる。また、少量ながらa～b類(24)、f類(13・39)、g類(30)も認められる。製品個々では、無台椀1の色調は内面がg類、外面がc～d類と異なっている。摩耗が顕著でなく、焼成直後から異色であったと思われる。意図したものかどうかはわからない。似た例は有台小皿38で個体の左右でd類、g類に分かれており、こちらは焼けむらの可能性がある。14・23は色調c～d類で、摩耗していない部分の観察から焼成直後の色調はc類であったと判断できる。中世土師器ではこれらの他に、図化できなかったが非ロクロ成形品の破片が出土しており、共伴する可能性が高い。第55図1・2は弥生土器である。1は甕口縁部である。くの字口縁で、端をつまみ上げ、ヨコナデして面を取るもの。2は高杯の脚部である。出土した弥生土器としては例外的に器面の遺存状態が良好である。「ハ」字に直線的に開く脚部で、端は折り返してさらに拡張している。外面と拡張部分は丁寧なヘラミガキ、ヨコナデ、内面はヨコハケである。内面に煤が付着してお



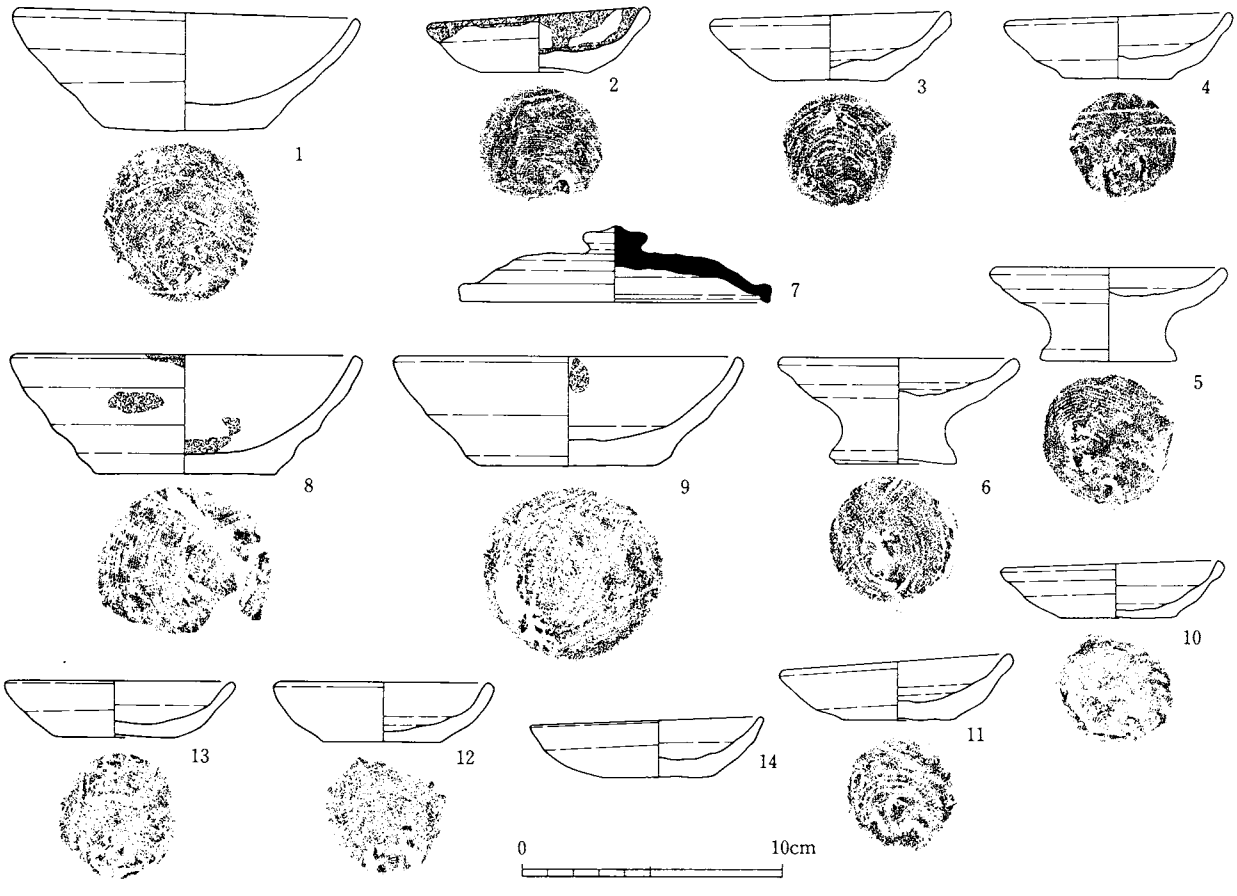
第55図　5区出土　土器・陶磁器・土製品実測図(5)（S＝1／3）

り、甕の蓋に転用されたものと推定できる。１・２は中世前半期堆積層への混入品と見られる。中世土師器群については各器種の形態、サイズにまとまりがあり、最も前後の時期の混入品が少ない層位から出土していることからも、一括性の高い資料として扱うことが可能と思われる。よって、次項（５）で行う検討に基準資料として使用する。

第55図３～15は出土層位不明。３は弥生土器で、高杯。有段の口縁部であり、段は小凸帯状に張り出し、口縁部は外反して内面端に稜をなす。４は古代の須恵器で、無台杯。直線的に外頃して伸びる口縁部を持つもので、外面端にⅢ類重ね焼き[13]の痕跡をとどめる。８世紀末から９世紀初頭頃の時期であろう。焼成は良好、胎土に径２㎜以下の長石が顕著に含まれ、鳥屋窯跡群産と推定される。５～15はロクロ成形の中世土師器。５～12は無台椀である。５～７は口径の割に器高が低く、偏平に感じられるもの。底部が薄く、７などはかなり軽量である。８・９はやや口径が小さく、口縁部の内湾もより強いもの。10は底部が厚く、漆器椀等に見られる平高台風に仕上げられている。13～15は無台小皿で、いずれも口縁部端を軽くなでるタイプである。13は内面に粘土塊、煤、炭化物が付着する。粘土塊は個体と同じ胎土、色調を呈し、同時に焼成されたものである。煤と炭化物は使用に伴う付着物であり、斑状ながらかなり厚く認められる。15は13・14に比べて器高が低く扁平な器形になる。

６区出土土器・陶磁器・土製品（第56図・第57図）

第56図１～６は第26図６区層９及びその下位の炭層出土で、全てロクロ成形の中世土師器。１は無台椀。２～４は無台小皿。どれも端に軽く面を取るタイプであり、サイズもほぼ同じである。２は煤が内面は広範囲に斑点状に濃く、外面は口縁部端にのみはみ出るように付着している。３・４は口縁部が片口状に丸く欠けており、意図的に感じられる。５・６は有台小皿で、どちらも口縁部端とわずかに張り出す底部柱状高台裾を軽くなでるもの。どちらも胎土に焼土塊が含まれており、６は器面に径４㎜程度の大粒の焼土塊が見られる。ちなみに色調は

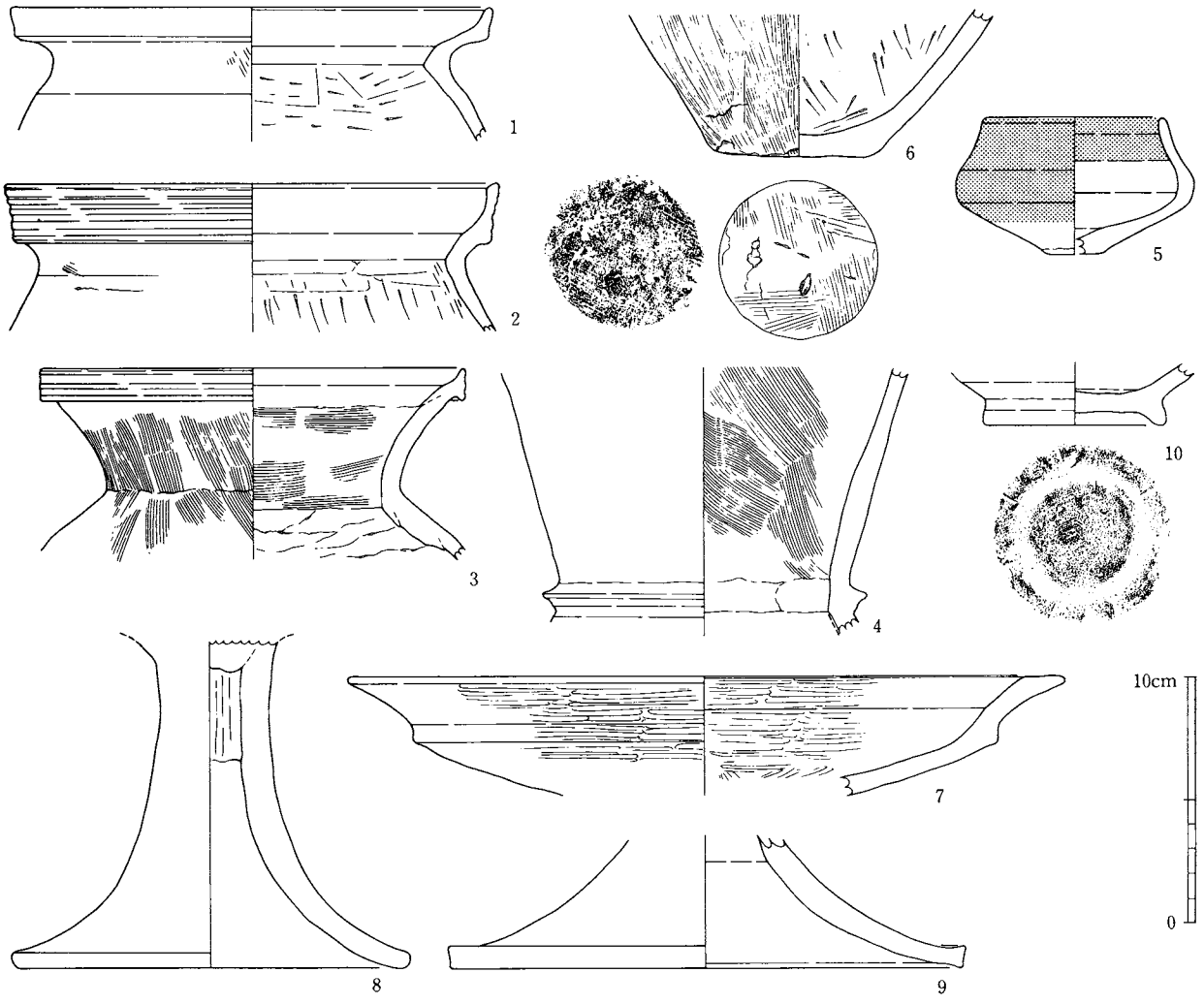


第56図　６区出土　土器・陶磁器・土製品実測図(1)（Ｓ＝１／３）

5がc類、6がd類と異なる。

第56図7～14は下位遺構面直上層からの出土。7は古代の須恵器で、杯蓋である。偏平なつまみを持ち、無ヘラケズリで平坦な肩部から口縁部が斜め方向に直線的に伸びるもので、端は水平に折り返された後、厚みを持って垂直に立てておさめる。8世紀末頃の時期であろう。焼成良好で胎土は大粒の石英、長石が顕著に含まれることから、鳥屋窯跡群産と考えられる。8～14はロクロ成形の中世土師器。8・9は無台椀。8は器面にヨコナデの痕跡がよく残っている。内面は黒色化しており、色調c類の外面の一部と色調g類の内底面に煤が付着している。9は口縁部内面と外面下半に部分的ながら器面と一体性の高い黒色部分があり、弥生土器等の黒斑のようである。10～14は無台小皿。10～12は口縁部端を軽くなでるタイプである。13・14はナデがはっきりしないもので、特に14は端が細く尖り気味に感じられる。サイズ的には10～14はほぼ同じである。

第57図は出土層位不明。1～9は弥生土器。1・2は甕。1は短い有段口縁を持つもので、摩耗しているが口縁帯は無文のようである。頸部内面はくの字に強く屈曲し、その直上に口縁部に向けたさらに広がる稜を持つ。胴部内面のヘラケズリは屈曲部まで及んでいる。2は1の倍ほどに長い有段口縁を持つもので、口縁帯は擬凹線を施す。頸部付近の形態、調整は1と大きく変わらない。3～5は壷。3は広口壷で、口縁部端を上下に拡張し、ヨコナデして面を取り小口縁帯を形成する。摩耗しているが口縁帯には擬凹線が入るようである。4は長頸壷と

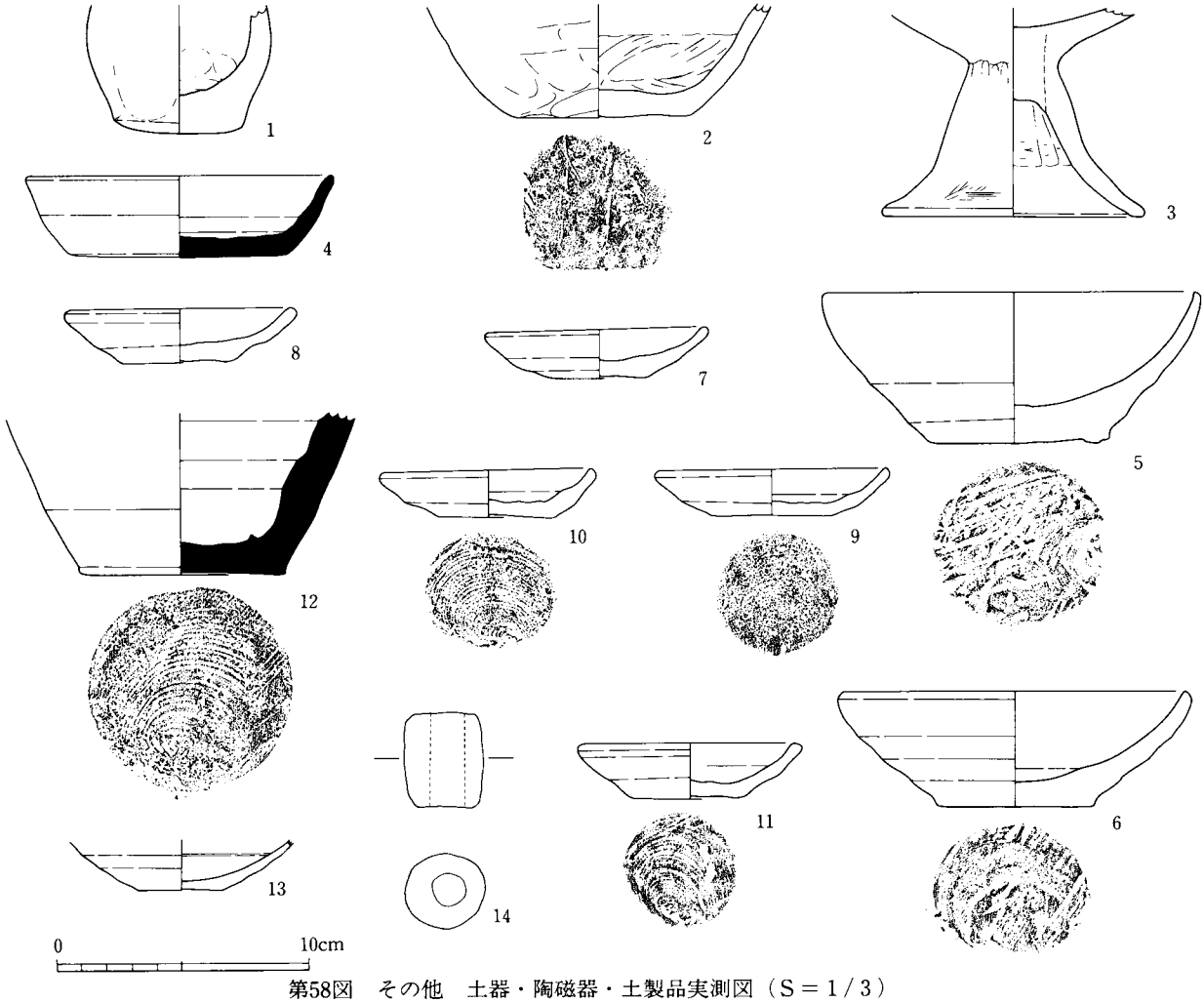


第57図　6区出土　土器・陶磁器・土製品実測図(2)（S＝1/3）

思われ、頸部に断面三角形の凸帯を付けている。内面は焼成時の火回りの具合からか黒色になっている。５は胴部と口縁部で緩やかなくの字状を呈する器形と平底からなる。口縁部のすぼまり具合から無頸壷と判断した。器面に遺存する赤色顔料から、実測図のような彩色が想定される。６は底部。外面は黒斑が器面の大半に及ぶ。胴部下位にはハケ調整を切る直線的なヘラ描きが、外底面には長径７㎜、短径４㎜程の種子あるいは籾状の圧痕が見られる。７・８は高杯。７は有段の杯部で、その口縁部は外反し端で水平の面を取っている。８は脚部で、ラッパ状に外反して開く無段脚である。９は高杯か器台か器種不明であるが、脚部で、おそらく無段脚。８よりも強く外反し大きく開いて端は垂直に面を取っている。弥生土器１～９の胎土は、径１～２㎜と大粒の珪質の砂礫が顕著に確認される個体（１～３、６、７）と、大粒の砂礫はほとんど見られず、細粒の石英、長石が顕著な個体（４、５、８、９）の２種が見られる。10は古代の土師器で、有台椀。全体的に摩耗しているが、底部糸切り後に外方へ踏ん張る断面三角形の輪状高台を貼りつけたと見られる。時期は10世紀代であろう。

その他（第58図）

第58図は出土地区、層位が不明の土器・陶磁器・土製品をまとめた。１は弥生土器。全体的に摩耗しているが、丸みを持った器形と厚い底部から、小型の壷と推定される。２・３は古墳時代の土師器。２は底部。成形時に丸底を叩いて平底としたように見えるもので、外面に黒斑が見られる。５～６世紀代の甕であろう。３は高杯。脚部が締りなく開いてゆくもので、裾の屈曲は弱い。裾に黒斑が見られる。５世紀代のものであろう。４は古代の須恵器、無台杯。口縁部と底部の境が明瞭で、口縁部は直線的に外傾して立ち上がる。９世紀前半頃の時期であろう。大粒の長石を顕著に含む胎土から鳥屋窯跡群産と推定できる。５～11はロクロ成形の中世土師器。５・６は無台椀。５はやや内湾気味の口縁部と、糸切り時にできた粘土塊が付着したままの分厚い底部からなる。６は色調ｃ類で、ｅ～ｆ類の５とは対照的に明るく映える個体である。７～11は無台小皿。全て口縁部端を軽くなで



第58図　その他　土器・陶磁器・土製品実測図（Ｓ＝１/３）

第７表　３区層15・16出土中世土師器観察表

挿図No.	器種	成形	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	色調	実測No.	備考
第42図１	無台椀	ロクロ	14.0	5.7	4.8	B	d	D236	
2	無台小皿	ロクロ	8.5	3.9	2.3	B	d	D239	セット
3	無台小皿	ロクロ	8.2	4.2	1.9	B	c d	D244	セット
4	無台小皿	ロクロ	8.2	3.7	2.3	B	d	D443	
5	無台小皿	ロクロ	9.1	3.9	2.3	B	d	D434	セット
6	無台小皿	ロクロ	8.5	4.2	2.3	C	e	D238	セット
7	無台小皿	ロクロ	9.0	4.4	2.7	C	e f	D249	
8	無台小皿	ロクロ	8.3	4.2	2.3	B	c d	D240	セット
9	無台小皿	ロクロ	8.3	3.9	2.4	B	e	D437	セット
10	無台小皿	ロクロ	8.4	4.0	2.1	B	c d	D436	セット
11	無台小皿	ロクロ	8.4	3.8	2.4	B	d	D243	
12	無台小皿	ロクロ	8.2	4.3	2.5	C	d	D439	
13	無台小皿	ロクロ	8.8	4.2	2.25	C	c d	D435	セット
14	無台小皿	ロクロ	8.9	4.3	2.5	C	d	D247	
15	無台小皿	ロクロ	8.5	3.8	2.5	B	c	D241	セット
16	無台小皿	ロクロ	9.2	4.3	2.55	B	d	D438	
17	無台小皿	ロクロ	8.1	3.9	2.55	B	c d	D440	
18	無台小皿	ロクロ	9.2	4.4	2.4	B	d	D237	セット
19	有台小皿	ロクロ	8.9	5.1	4.15	A	d	D248	
20	皿	非ロクロ	15.4		2.95	C	e	D252	二段ナデ
21	皿	非ロクロ	13.9		3.2	C	c	D251	二段ナデ
22	小皿	非ロクロ	8.6	5.5	1.7	B	c d	D242	一段ナデ

第８表　３区下位遺構面直上層出土中世土師器観察表

挿図No.	器種	成形	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	色調	実測No.	備考
第43図１	無台椀	ロクロ	15.2	6.8	4.3	C	f	D245	
2	無台椀	ロクロ	13.9	4.9	6.4	C	d	D515	
3	無台小皿	ロクロ	8.6	4.6	2.4	A	d f	D448	
4	無台小皿	ロクロ	8.7	4.1	2.4	C	c d	D516	
5	無台小皿	ロクロ	9.2	4.8	2.5	B	c d	D514	
6	無台小皿	ロクロ	9.0	4.5	2.3	B	e	D511	
7	無台小皿	ロクロ	9.3	5.0	2.0	B	d	D513	
8	無台小皿	ロクロ	9.0	4.4	2.2	B	d	D254	
9	無台小皿	ロクロ	8.5	3.6	2.1	B	c d	D444	
10	無台小皿	ロクロ	8.1	4.2	2.3	B	d	D445	
11	無台小皿	ロクロ	8.8	4.7	2.1	B	d e	D474	
12	無台小皿	ロクロ	8.6	4.1	2.3	B	d	D512	
13	無台小皿	ロクロ	8.4	4.2	1.9	C	d	D447	
14	無台小皿	ロクロ	7.9	3.9	2.1	C	d	D450	
15	無台小皿	ロクロ	8.4	4.4	2.2	C	e f	D250	
16	有台小皿	ロクロ	9.1	5.1	4.0	B	d e	D470	
17	有台小皿	ロクロ	8.5	4.2	3.9	A	c	D480	
18	皿	非ロクロ	15.0		3.3	C	d e	D446	二段ナデ
19	小皿	非ロクロ	9.2		2.1	C	d	D449	二段ナデ

第９表　４区下位遺構面直上層出土中世土師器観察表

挿図No.	器種	成形	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	色調	実測No.	備考
第48図１	無台椀	ロクロ	14.5	6.7	5.0	B	d	D486	
2	無台椀	ロクロ	14.3	6.8	4.4	B	c d	D289	
3	無台椀	ロクロ	13.2	7.0	4.45	B	d	D488	
4	無台椀	ロクロ	13.0	6.5	4.6	B	c d	D300	
5	無台椀	ロクロ	13.8	5.2	4.5	B	e f	D487	
6	無台椀	ロクロ	14.0	5.6	4.9	C	d e	D518	

7	無台椀	ロクロ	13.4	5.4	4.2	B	c d	D484	
8	無台椀	ロクロ	14.0	6.4	4.75	A	e f	D489	
9	有台皿	ロクロ		7.1		B	e f	D490	
第49図12	無台小皿	ロクロ	8.8	4.7	2.6	B	d	D481	
13	無台小皿	ロクロ	9.0	4.7	2.1	A B	f	D468	
14	無台小皿	ロクロ	9.3	5.0	2.4	B	d	D467	
15	無台小皿	ロクロ	9.1	4.8	2.3	C	d e	D297	
16	無台小皿	ロクロ	8.4	4.9	2.1	B	d	D294	
17	無台小皿	ロクロ	8.6	4.5	2.4	B	d	D291	
18	無台小皿	ロクロ	8.6	4.7	2.2	A	b	D466	
19	無台小皿	ロクロ	9.0	4.2	2.5	A B	e	D477	
20	無台小皿	ロクロ	8.5	4.6	2.5	B	c d	D283	
21	無台小皿	ロクロ	8.7	3.9	2.5	B	c d	D288	
22	無台小皿	ロクロ	8.3	4.6	2.5	B	c d	D473	
23	無台小皿	ロクロ	9.5	4.5	2.3	B	c d	D293	
24	無台小皿	ロクロ	8.7	4.4	2.2	B	a b	D459	
25	無台小皿	ロクロ	8.3	4.3	2.3	B	c d	D479	
26	無台小皿	ロクロ	8.7	4.3	2.0	B	d	D279	
27	無台小皿	ロクロ	8.9	3.8	2.4	B	d	D282	
28	無台小皿	ロクロ	8.5	4.2	2.4	B	d e	D471	
29	無台小皿	ロクロ	8.9	4.3	2.5	B	d	D284	
30	無台小皿	ロクロ	9.0	4.5	2.2	B	d	D478	
31	無台小皿	ロクロ	8.2	4.2	2.3	B	f	D482	
32	無台小皿	ロクロ	8.8	4.7	2.7	B	c d	D460	
33	無台小皿	ロクロ	8.4	4.0	2.5	B	d	D287	
34	無台小皿	ロクロ	8.5	4.1	2.6	B	c d	D295	
35	有台小皿	ロクロ	9.0	4.9	3.8	B	d f	D292	
36	有台小皿	ロクロ	8.8	4.6	3.9	B	e f	D492	
37	有台小皿	ロクロ	9.0	5.0	3.6	B	c	D491	
38	有台小皿	ロクロ	8.7	5.7	6.3	B	d e	D296	
39	小皿	非ロクロ	8.9	4.0	1.55	B	f	D469	一段ナデ
40	小皿	非ロクロ	8.8		2.0	B	d	D476	一段ナデ
41	小皿	非ロクロ	8.9		1.8	B	d	D290	一段ナデ
42	小皿	非ロクロ	9.2	4.0	1.8	C	f	D483	一段ナデ
43	小皿	非ロクロ	8.2	4.4	1.4	B	e f	D299	一段ナデ

第10表　５区層17出土中世土師器観察表

挿図No.	器種	成形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	色調	実測No.	備考
第52図１	無台椀	ロクロ	14.5	6.0	4.7	B	c d	D526	
2	無台椀	ロクロ	14.5	6.2	4.7	B	c	D426	
3	無台椀	ロクロ	13.8	5.7	4.3	C	d	D382	
4	無台椀	ロクロ	14.3	6.4	4.95	A？	b？	D442	
5	無台椀	ロクロ	14.6	6.7	5.3	B	e	D301	
6	無台椀	ロクロ	13.5	6.2	5.0	C？	c d	D521	
7	無台椀	ロクロ	14.1	6.7	4.9	B	c d	D384	
8	無台小皿	ロクロ	8.5	4.4	2.5	D	g b	D303	
9	無台小皿	ロクロ	7.8	4.2	2.25	B	b e	D369	
10	無台小皿	ロクロ	8.0	4.0	2.3	B	c	D368	
11	無台小皿	ロクロ	8.5	4.5	2.1	B	c	D427	
12	無台小皿	ロクロ	8.4	4.5	2.3	B	c d	D528	
13	無台小皿	ロクロ	9.1	4.8	2.5	B	d g	D304	
14	無台小皿	ロクロ	9.4	4.4	2.4	B	c d	D302	
15	無台小皿	ロクロ	9.4	4.7	2.7	B	e	D530	
16	無台小皿	ロクロ	9.4	5.1	2.5	B	e	D305	
17	無台小皿	ロクロ	8.8	4.6	2.4	B	c	D525	
18	無台小皿	ロクロ	9.0	4.5	2.4	B	b g	D519	
19	無台小皿	ロクロ	8.0	4.2	2.1	B	c	D520	

20	無台小皿	ロクロ	8.9	4.4	2.55	C	d	D524	
21	無台小皿	ロクロ	8.9	4.8	2.4	B	d	D523	
22	無台小皿	ロクロ	8.3	4.3	2.7	B	d	D306	
23	無台小皿	ロクロ	8.4	4.6	2.2	B	c d	D531	
24	無台小皿	ロクロ	8.5	4.5	2.4	B	d e	D330	
25	無台小皿	ロクロ	9.0	5.6	2.6	B	d	D425	
26	有台皿	ロクロ	15.6	7.4	5.95	C	d f	D383	
27	有台皿	ロクロ	13.9	6.7	5.55	C	c	D527	
28	小皿	非ロクロ	8.4		1.6	B	d	D441	一段ナデ
29	小皿	ロクロ？	8.9		1.95	B	c d	D522	一段ナデ

第11表　5区下位遺構面直上層出土中世土師器観察表

挿図No.	器種	成形	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	色調	実測No.	備考
第53図1	無台椀	ロクロ	14.3	5.8	4.6	B	c d	D339	内面g
2	無台椀	ロクロ	14.4	6.2	4.6	C？	c	D341	
3	無台椀	ロクロ	14.8	6.3	3.9	C	d e	D454	
4	無台椀	ロクロ	14.1	6.0	4.5	B	e	D352	
5	無台椀	ロクロ	14.3	6.8	5.05	B	d	D354	
6	無台椀	ロクロ	13.4	6.1	4.2	B	c	D347	
7	無台椀	ロクロ	14.8	6.9	4.8	B	d	D353	
8	無台椀	ロクロ	14.3	6.0	4.3	B	d	D359	
9	無台椀	ロクロ	13.8	6.3	4.4	B	c	D357	
10	無台椀	ロクロ	13.7	6.2	5.0	A	f g	D331	
11	無台小皿	ロクロ	8.3	4.9	2.35	B	c	D338	
12	無台小皿	ロクロ	8.5	4.0	2.2	B	c	D333	
13	無台小皿	ロクロ	9.8	4.9	2.6	B	f	D310	
14	無台小皿	ロクロ	8.3	4.3	2.25	B	c d	D334	
15	無台小皿	ロクロ	8.8	4.6	2.7	B	d	D348	
16	無台小皿	ロクロ	8.6	4.0	2.65	C	e	D298	
17	無台小皿	ロクロ	8.8	4.1	2.8	B	d	D345	
18	無台小皿	ロクロ	8.9	4.7	2.7	B	e f	D335	
19	無台小皿	ロクロ	8.6	5.0	2.1	B	d	D319	
20	無台小皿	ロクロ	8.8	4.4	2.35	B	d	D336	
21	無台小皿	ロクロ	8.6	4.1	2.65	B	d	D337	
22	無台小皿	ロクロ	8.7	4.3	2.9	B	c d	D315	
23	無台小皿	ロクロ	8.0	4.1	2.4	B	c d	D452	
24	無台小皿	ロクロ	9.3	4.6	2.7	B	a b	D349	
25	無台小皿	ロクロ	8.6	4.3	2.1	B	c	D343	
26	無台小皿	ロクロ	9.0	4.4	2.4	A	d	D332	
27	無台小皿	ロクロ	9.1	4.3	2.4	B	c d	D342	
28	無台小皿	ロクロ	9.0	4.6	2.25	B	c	D344	
第54図29	有台小皿	ロクロ	9.1	4.7	4.0	B	c	D312	
30	有台小皿	ロクロ	9.0	5.1	4.35	B	g	D356	
31	有台小皿	ロクロ	9.6	4.8	4.0	B	e	D351	
32	有台小皿	ロクロ	9.1	5.1	3.8	B	d e	D308	
33	有台小皿	ロクロ	8.5	4.9	4.0	B	d	D350	
34	有台小皿	ロクロ	9.0	4.7	3.75	B	d f	D311	
35	有台小皿	ロクロ	9.3	4.6	3.5	B	c d	D355	
36	有台小皿	ロクロ	8.8	4.8	3.85	B	d	D309	
37	有台小皿	ロクロ	10.4	5.7	4.65	B	d	D340	
38	有台小皿	ロクロ	9.1	4.8	4.0	B	d g	D358	
39	有台小皿	ロクロ	9.1	4.9	4.6	B	f	D346	

るタイプであり、サイズもほぼ等しい。しかし他の地区、層位の個体と比べると器高が２cm前後に集中しており、全体的にやや偏平に感じる。12は珠洲。回転糸切りを行う底部であり、底径と胴部下位の径、器形から壷と判断した。外面胴部下位のロクロヘラケズリから、回転が時計方向と分かる。内面は自然釉が底面まで白色斑状にかかっている。13は白磁の皿底部。内面体部中央に段を持ち、黄色みの強い釉薬は外面体部下半から底部にはかからない。以上の特徴から、森田分類の皿Ⅵ類[20]と思われる。14は管状の土錘。器面は摩耗しているがほぼ完存しており、長さ3.9cm、幅・厚さ3.2cm、孔径1.5cm、重さ36.5g を測る。

（２）木器・木製品

木器・木製品には下駄、底板、箸、漆器、船形、剣形、板材、棒材、柱材、桜樹皮がある。これらの大半は木質の遺存が良い堆積層の下位から出土している。このうち、下駄、底板の全部と、箸、漆器の一部、船形、剣形を図化した。板材では２区から切れ込みをもつ確実な建築部材が１点出土しているが、長大すぎて図化できなかった。なお、木器・木製品の樹種については同定を行っていないため、不明である。

下駄（第60図～第62図）

下駄は２区と４区で３点ずつの、計６点出土しており、全て横木取りの柾目材を用いた連歯下駄である。第59図に示した通りの部位計測を行った。第60図１～第62図１は一木で歯を削り出すものである。第60図１は２区段から、逆位で出土した。ほぼ直方体の連歯を持っており、非常に遺存が良い。台部のうち、前木口と前緒穴の間の左側がやや凹んでおり、親指の跡と考えると、右足用の下駄となろう。第60図２は２区第26図層15の上面の炭層から、逆位で出土している。２も１とほぼ同じサイズ、形状であるが、歯部の遺存は良くない。前歯は大部分を折失し、付け根のみ残る。後歯も中心部を欠損している。第61図１は２区層19から、正位で出土した。高い歯を持つもので、台部の左縁を折失している以外は、遺存が良好。台部は側面形が偏平な逆台形状を呈しており、側縁の面取りが非常に整美になされている。歯部は左右に広がる台形状を呈し、厚くしっかりしている。全体的には整美で、重量感にも富んだ製品と言える。『古今著聞集』に見られる「高あしだ」に相当するものであろう[21]。第61図２・第62図１・２はいずれも４区下位遺構面の直上層から正位で出土した、やや小型の下駄である。第61図２は歯部の遺存が悪く、前歯の大部分を折失、後歯は折れたものが残っている。第62図１は低い歯を持つもので、遺存は良好。台部上面は、縁以外の部分では黄褐色の木材の地色を発する。第62図２は差歯の下駄で、歯を装着するほぞ穴が台に表れる露卯下駄である。低い歯が遺存しており、前歯は抜けているが、後歯は完存している。ほぞ穴は２箇所存在する。台部はサイズ的には第61図２・第62図１とほぼ同じであるが、後端は直線的で、中央部は歯を固定するため厚めの形状である。

箸（第63図）

箸は竪穴、２区第26図層19、４区下位遺構面直上層から集中的に出土した。折損したものが大半であるが、お

台部

A　長さ（全長）　B　幅　（最大幅をとる）

C　厚さ　H　前木口－前緒穴

I　前緒穴－後緒穴　J　後緒穴－後木口

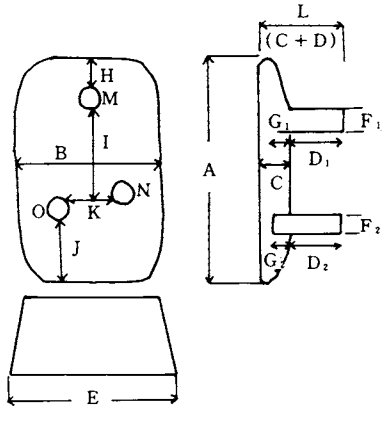
K　後緒穴間　L　全高　M　前緒穴縦長径

N　右後緒穴縦長径　O　左後緒穴縦長径

歯部

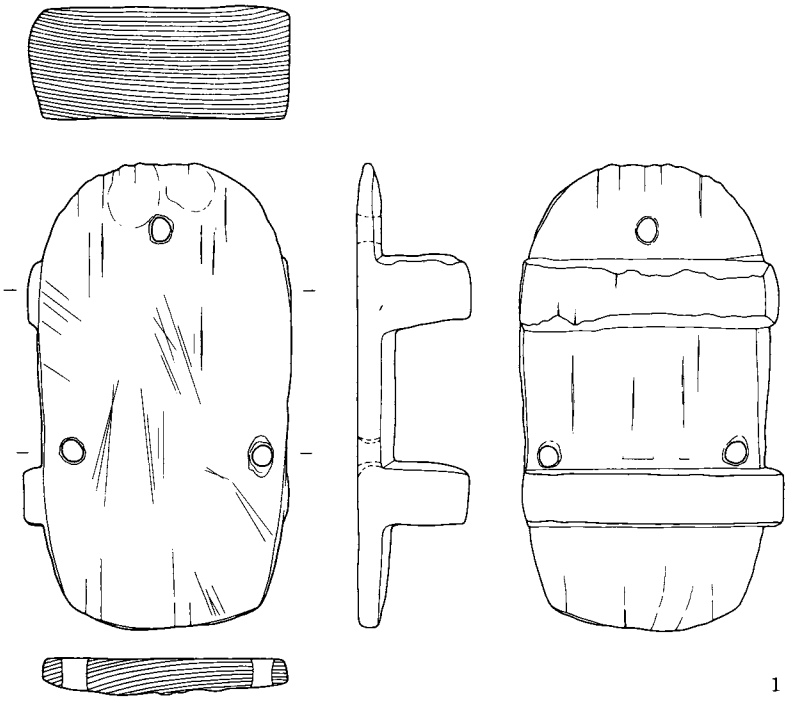
D_1 前歯高　E_1 前歯幅　F_1 前歯厚さ　G_1 前歯差し込み高

D_2 後歯高　E_2 後歯幅　F_2 後歯厚さ　G_2 後歯の　〃



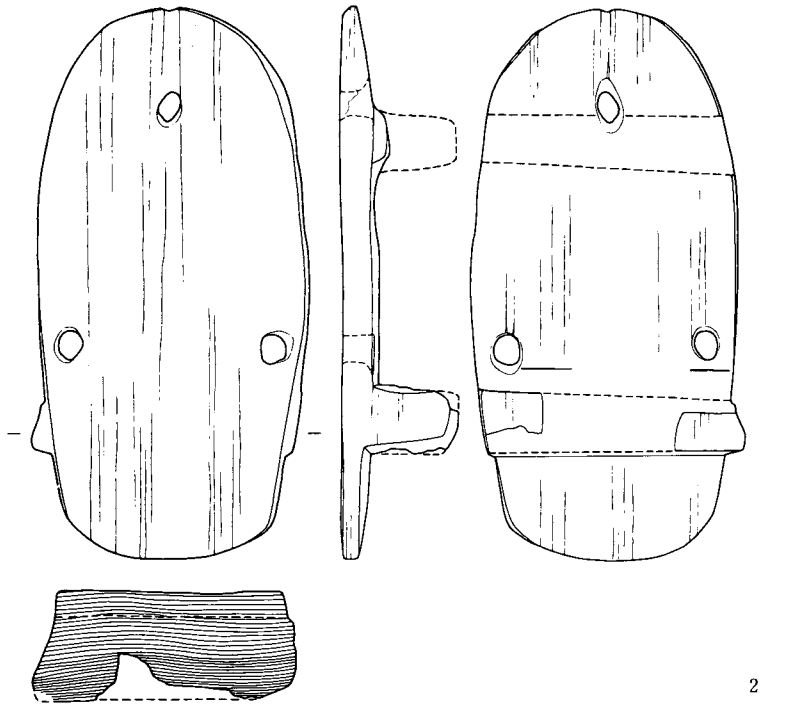
七尾市教委1992 P.41を転載

第59図　下駄の計測部位・名称



第12表　下駄計測表（1）　単位cm

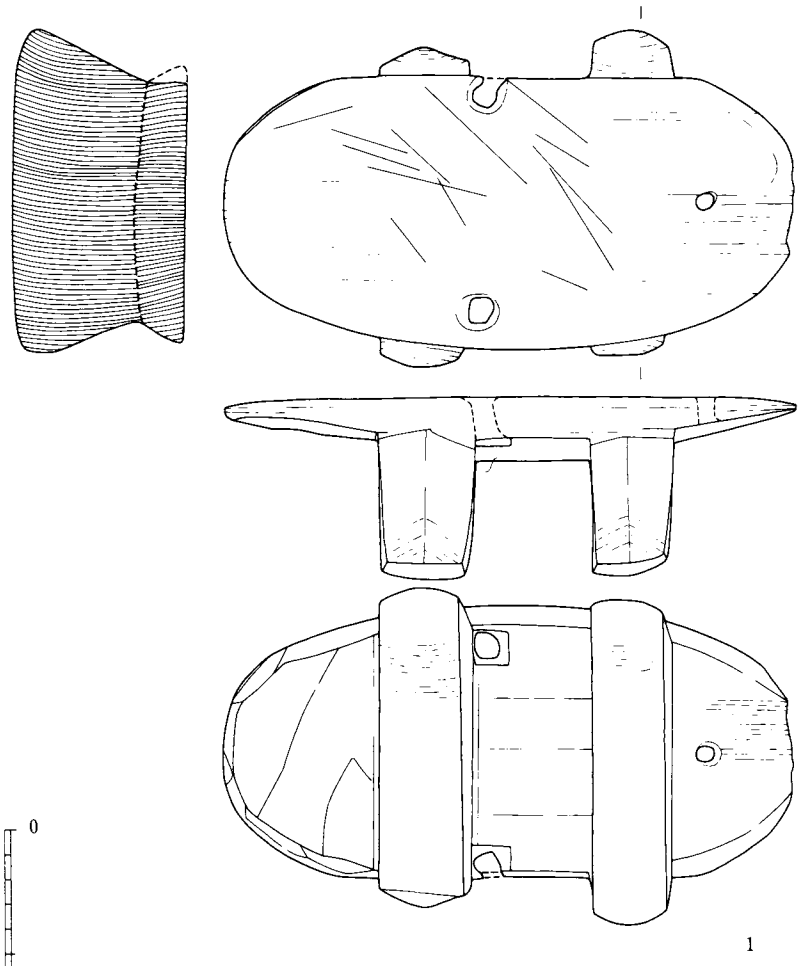
挿図No.：第60図1		実測No.：木48
型　式	連歯下駄	
出土遺構	2区段	
全長	A	19.0
全幅	B	10.2
台部	全厚 C	1.5
	前木口－前緒穴H	2.1
	前緒穴－後緒穴I	8.1
	後緒穴－後木口J	6.9
	後緒穴間 K	6.8
	前緒穴縦長径 M	1.0
	右緒穴縦長径 N	0.85
	左緒穴縦長径 O	0.9
歯部	前歯高 D1	3.1
	後歯高 D2	3.0
	前歯幅 E1	10.6
	後歯幅 E2	10.7
	前歯厚 F1	2.3
	後歯厚 F2	2.05
	前歯差込高G1	
	後歯差込高G2	
全高L（C＋D）		4.6



第60図　下駄実測図(1)（S＝1／3）

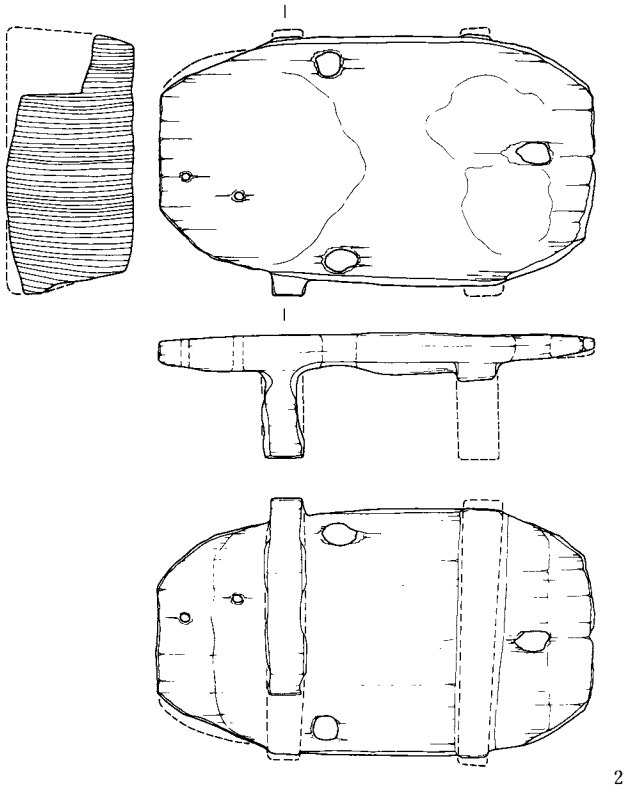
第13表　下駄計測表（2）　単位cm

挿図No.：第60図2		実測No.：木52
型　式	連歯下駄	
出土遺構	2区層15及び上位炭層	
全長	A	22.5
全幅	B	10.7
台部	全厚 C	1.5
	前木口－前緒穴H	3.3
	前緒穴－後緒穴I	8.55
	後緒穴－後木口J	8.1
	後緒穴間 K	7.1
	前緒穴縦長径 M	1.2
	右緒穴縦長径 N	1.15
	左緒穴縦長径 O	1.15
歯部	前歯高 D1	
	後歯高 D2	3.1
	前歯幅 E1	
	後歯幅 E2	10.7
	前歯厚 F1	
	後歯厚 F2	2.6
	前歯差込高G1	
	後歯差込高G2	
全高L（C＋D）		4.7



第14表　下駄計測表（３）　単位cm

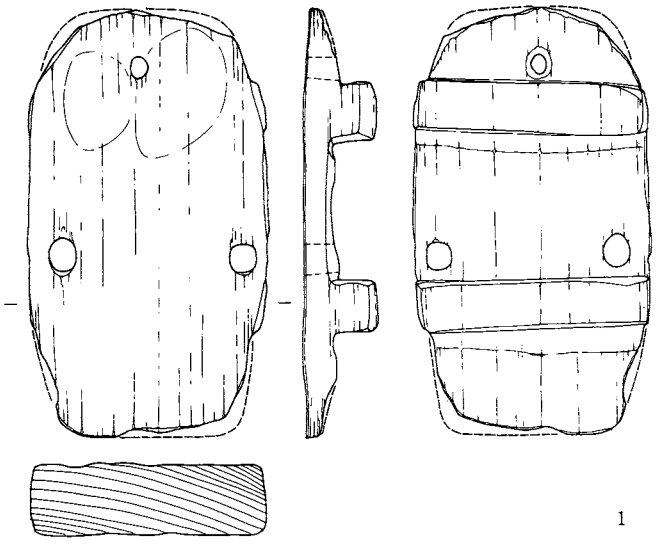
挿図No.：第61図１	実測No.：木49	
型　　式	連歯下駄	
出土遺構	２区層19	
全長	A	22.9
全幅	B	11.0
台部	全厚 C	2.6
	前木口－前緒穴H	3.15
	前緒穴－後緒穴Ｉ	8.1
	後緒穴－後木口Ｊ	9.8
	後緒穴間 K	7.7
	前緒穴縦長径 M	0.7
	右緒穴縦長径 N	1.0
	左緒穴縦長径 O	0.95
歯部	前歯高 D１	4.7
	後歯高 D２	4.7
	前歯幅 E１	13.1
	後歯幅 E２	12.95
	前歯厚 F１	3.0
	後歯厚 F２	3.4
	前歯差込高Ｇ１	
	後歯差込高Ｇ２	
全高Ｌ（Ｃ＋Ｄ）		7.4



第61図　下駄実測図(2)（Ｓ＝１／３）

第15表　下駄計測表（４）　単位cm

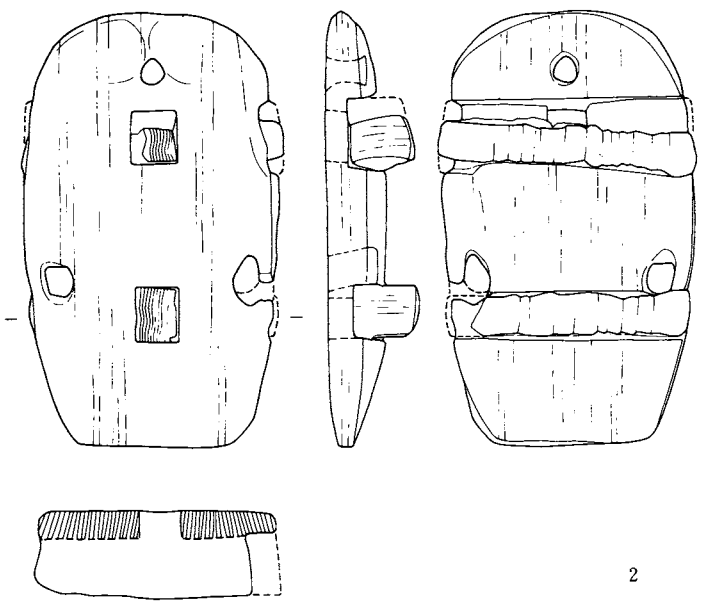
挿図No.：第61図２	実測No.：木51	
型　　式	連歯下駄	
出土遺構	４区下位遺構面直上層	
全長	A	17.5
全幅	B	9.5
台部	全厚 C	1.7
	前木口－前緒穴H	1.7
	前緒穴－後緒穴Ｉ	6.7
	後緒穴－後木口Ｊ	6.15
	後緒穴間 K	6.9
	前緒穴縦長径 M	1.3
	右緒穴縦長径 N	1.3
	左緒穴縦長径 O	0.9
歯部	前歯高 D１	
	後歯高 D２	3.5
	前歯幅 E１	
	後歯幅 E２	(8.0)
	前歯厚 F１	
	後歯厚 F２	1.6
	前歯差込高Ｇ１	
	後歯差込高Ｇ２	
全高Ｌ（Ｃ＋Ｄ）		5.0



1

第16表　下駄計測表（5）　単位cm

挿図No.：第62図1	実測No.：木47	
型　　式	連歯下駄	
出土遺構	4区下位遺構面直上層	
全長	A	17.55
全幅	B	9.65
台部	全厚 C	1.25
	前木口－前緒穴H	1.7
	前緒穴－後緒穴I	6.6
	後緒穴－後木口J	6.8
	後緒穴間 K	6.15
	前緒穴縦長径 M	0.9
	右緒穴縦長径 N	1.15
	左緒穴縦長径 O	1.35
歯部	前歯高 D1	1.6
	後歯高 D2	1.6
	前歯幅 E1	9.6
	後歯幅 E2	9.5
	前歯厚 F1	2.4
	後歯厚 F2	2.1
	前歯差込高G1	
	後歯差込高G2	
全高L（C＋D）		3.0



2

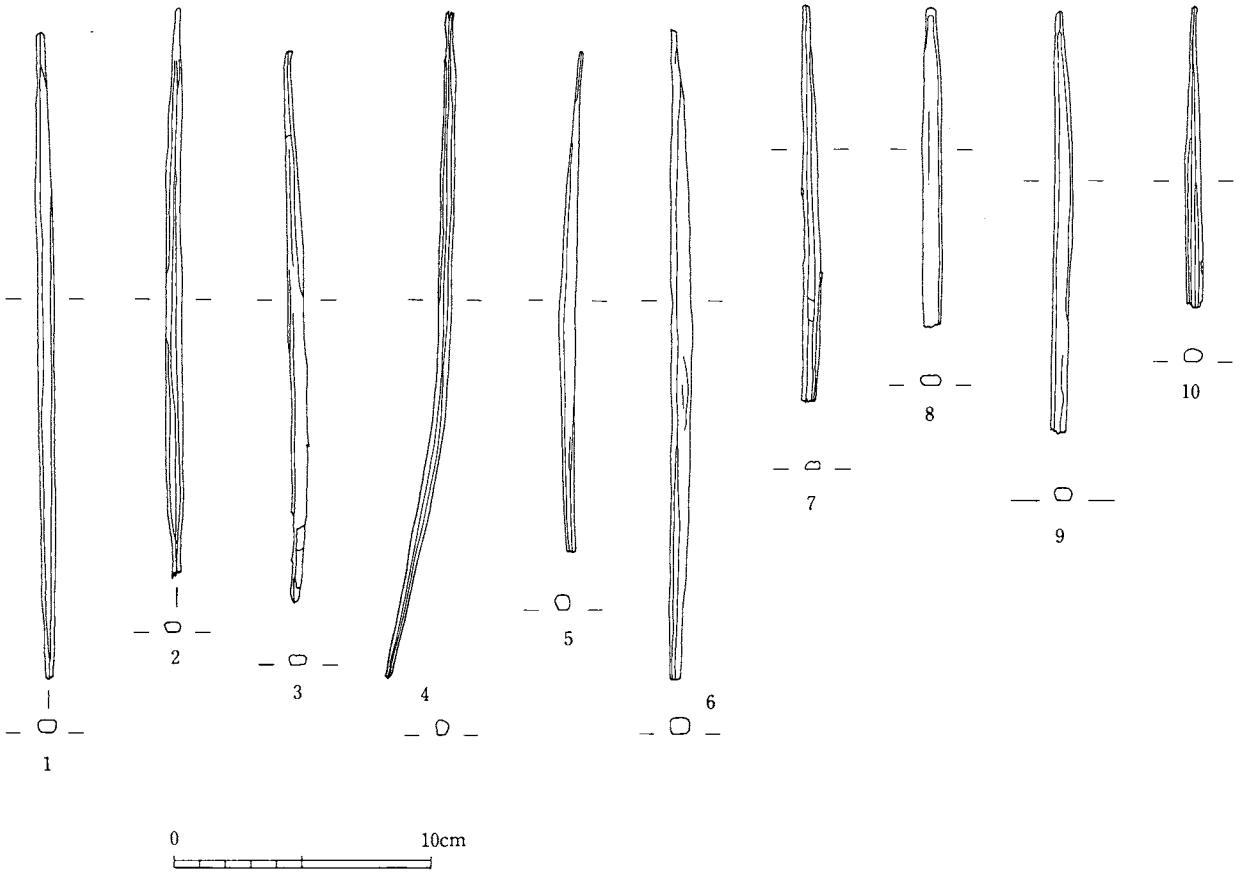
0　　10cm

第17表　下駄計測表（6）　単位cm

挿図No.：第62図2	実測No.：木53	
型　　式	連歯下駄（差歯下駄）	
出土遺構	4区下位遺構面直上層	
全長	A	17.75
全幅	B	10.0
台部	全厚 C	2.4
	前木口－前緒穴H	1.85
	前緒穴－後緒穴I	7.1
	後緒穴－後木口J	6.0
	後緒穴間 K	6.4
	前緒穴縦長径 M	1.05
	右緒穴縦長径 N	2.05
	左緒穴縦長径 O	1.2
歯部	前歯高 D1	1.2
	後歯高 D2	1.2
	前歯幅 E1	(10.6)
	後歯幅 E2	(9.8)
	前歯厚 F1	(1.9)
	後歯厚 F2	2.1
	前歯差込高G1	1.5
	後歯差込高G2	1.3
全高L（C＋D）		3.7

第62図　下駄実測図(3)（S＝1／3）

（　　）は現存値

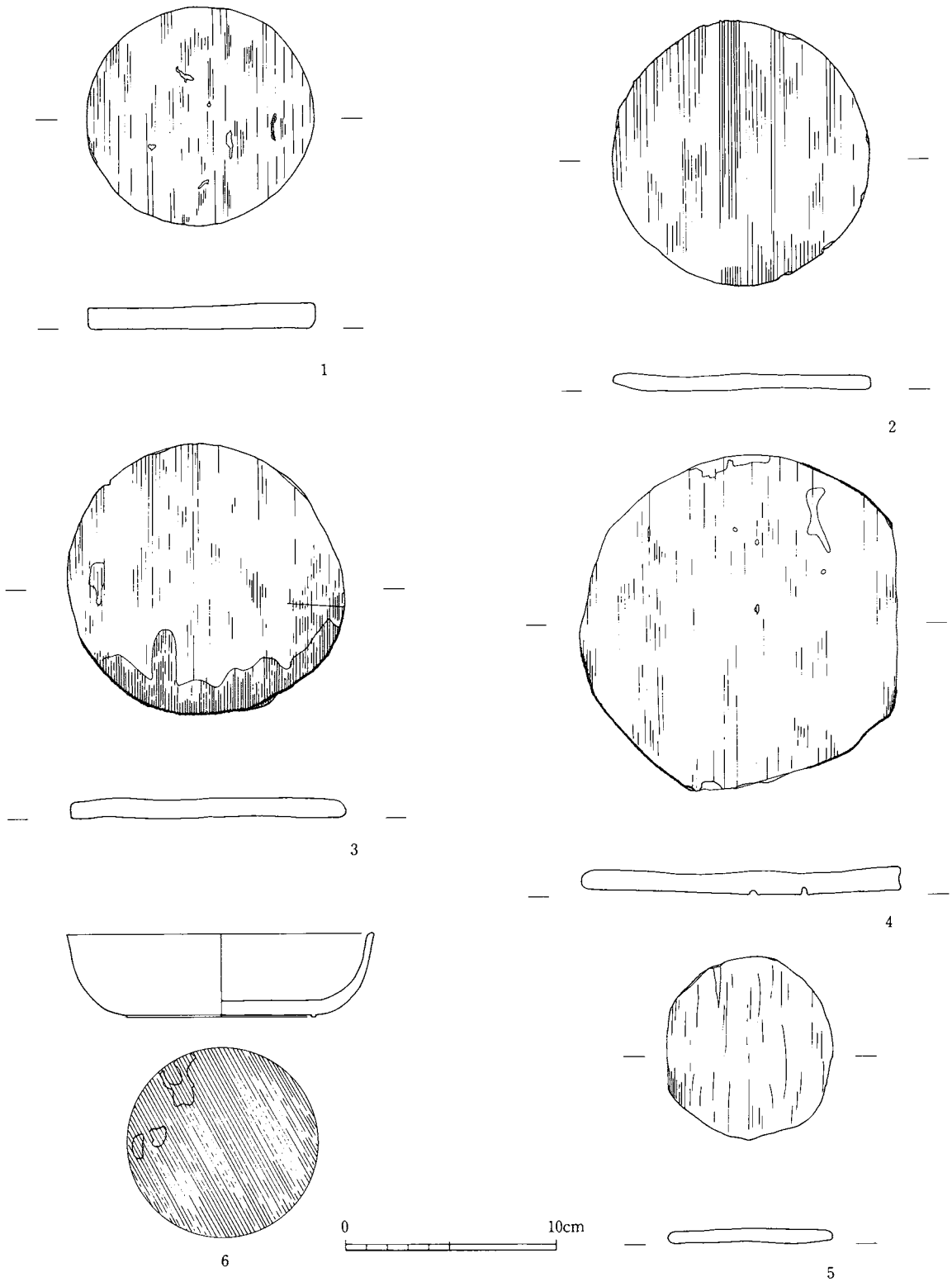


第63図　箸実測図（S＝1／3）

そらく数量的には貝田遺跡の出土木器・木製品の中心となろう。図化は、特に遺存の良かった第63図の10点を選択して行った。１～10は全て横木取りの柾目材を用いており、器面をあらく削っただけで仕上げとし、漆はかけていない。１～４はほぼ完存しており、両端を尖らせる「両口箸」[16]である。４はやや曲っているが、出土した製品中、最も長い。真っ直ぐなものでは１が最も長い。２・３は１・４よりやや短いものであるが、断面形はほぼ同じである。５・６は端の一方がやや太いが、１～４の同類と考える。５は取られた面が一定せず、細身の図の上端部では五角形、太身となる中位から下端部では六角形を志向している。６は断面が正方形に近いが、面取りの鋭さを欠き、全体に丸みを持っている製品である。７～10は端の一方を折損するが、残る一方は尖っており「両口箸」か片端のみ尖らせる「片口箸」[16]のどちらかと思われる。７は非常に偏平なもので、仕上げも粗い。８は一定していないが非常に鋭い面取りを行っている。10は仕上げが丁寧で、図の下端、折損部では厚みを持っている。

底板（第64図１～６）

底板は２区から１点、４区から４点の計５点が出土している。全て横木取りの柾目材を使用している。１は２区第26図層20・21から出土した。小径の割に厚みを持った板であり、縁がシャープで正円に近い形状である。全体的に調整が丁寧な印象を受ける。２～５は４区下位遺構面の直上層から出土した。２は１よりも大径であるがより薄いものである。直径線上の木目は周辺よりも深くなっている。３は木目が均質で比較的平滑である。縁には３箇所で先細りの孔が確認されており、筒部分を固定した目釘などの痕跡になる可能性がある。４はこの中で最大径を測るもので、厚みもありしっかりした底板である。縁の一部を折損している。片面のみ黄褐色の木材の地色を発する部分がある。５は小径で薄手のもの。縁は雑に仕上げられ楕円形を呈している。片面のみ縁とその周辺以外の部分で黄褐色の木材の地色を発する。以上の底板のうち、１・３・４はある程度の重量に耐えるものと思われ、桶類の底板の可能性がある。２・５は軽量な製品で、曲げ物と組み合わされる底板と推定している。



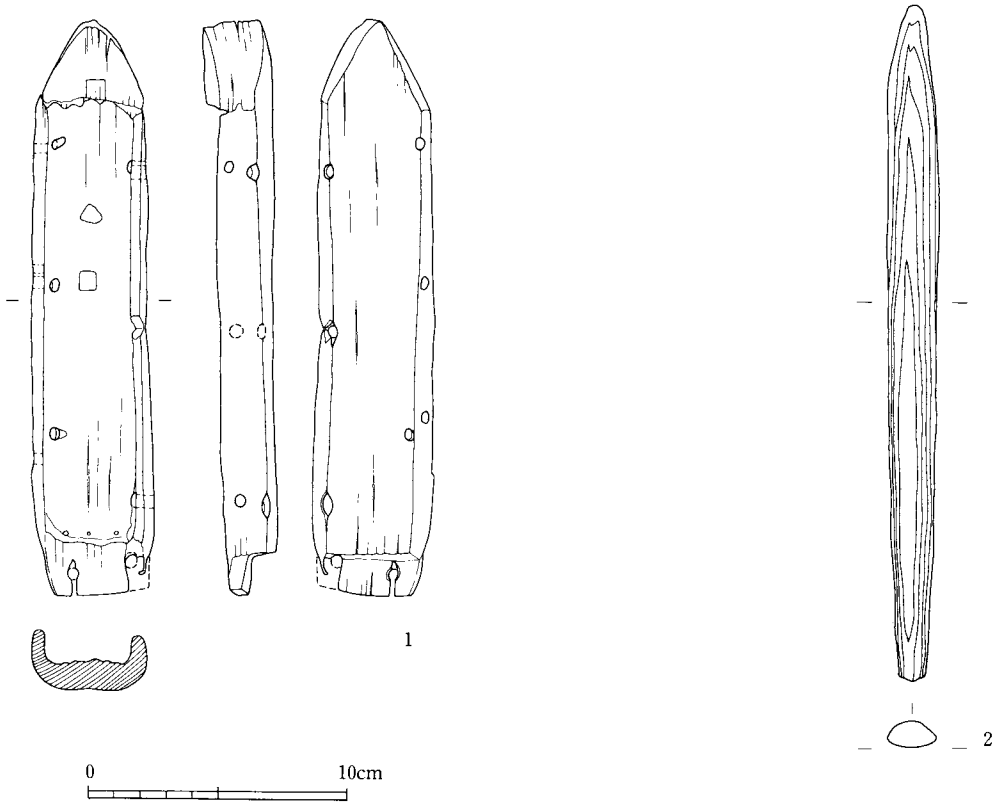
第64図　底板・漆器実測図（S＝1／3）

第18表　箸計測表　　（　）は残存値

挿図No.	出　土　遺　構	長さ (cm)	幅・厚さ (cm)	実測No.	備　考
第63図 1	2区層19	25.5	0.7/0.5	木63	「両口箸」
2	2区層19	22.5	0.7/0.4	木65	「両口箸」
3	2区層19	21.8	0.7/0.4	木66	「両口箸」
4	4区下位遺構面直上層	26.4	0.6/0.6	木61	「両口箸」
5	4区下位遺構面直上層	19.8	0.7/0.6	木62	「両口箸」?
6	4区下位遺構面直上層	25.7	0.8/0.65	木59	「両口箸」?
7	竪穴	(15.7)	0.7/0.3	木67	
8	4区下位遺構面直上層	(12.6)	0.8/0.4	木60	
9	2区層19	(16.7)	0.7/0.5	木64	
10	竪穴	(11.9)	0.7/0.5	木68	

第19表　底板計測表

挿図No.	出　土　遺　構	径 (cm)	厚さ (cm)	実測No.	備　考
第64図 1	2区層20・21	10.8	1.2	木69	
2	4区下位遺構面直上層	12.7	0.8	木70	
3	4区下位遺構面直上層	13.2	1.0	木73	目釘穴(?)有
4	4区下位遺構面直上層	16.1	1.3	木71	
5	4区下位遺構面直上層	8.7	0.7	木72	



第65図　舟形・剣形実測図（Ｓ＝１／３）

漆器（第64図６）

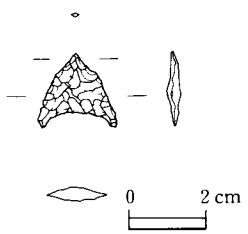
漆器は２区から１点、４区から１点、５区から１点の計３点が出土している。全て食器であり、椀と思われるが、図化しえたのは遺存が良好な４区下位遺構面直上層出土の１点のみである。第64図５は漆器椀であり、横木取りの柾目材を使用しており、口径14.6cm、底径９cm、器高４cmを測る。内湾する口縁部に、縁を高台風に削り残す厚手の底部が付く。漆は黒漆で、外底面のみ斑点状になっている他は、全体的に良好に遺存している。全面に塗漆されていたものが外底面のみ剥がれたものと思われる。

船形（第65図１）

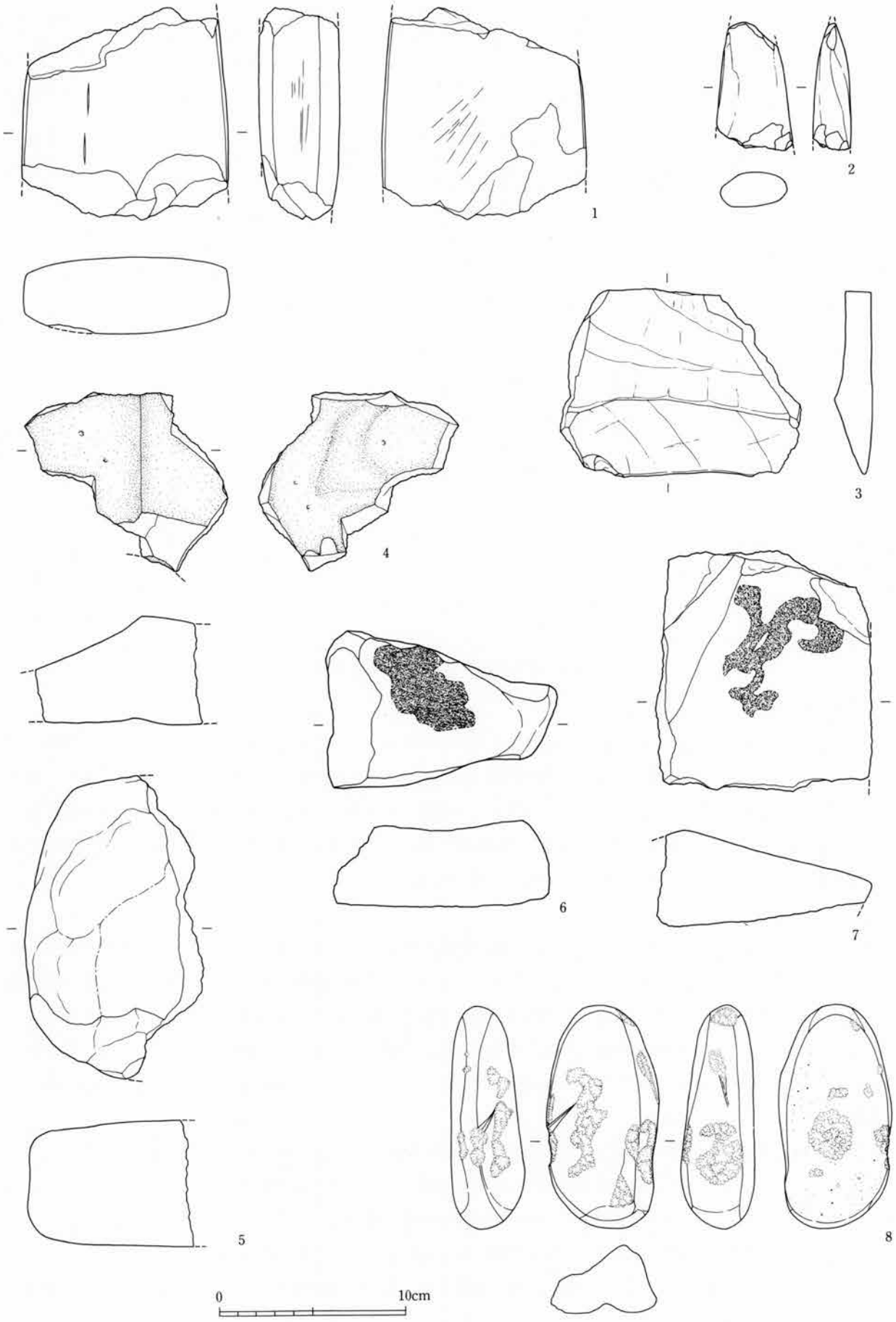
３区下位遺構面直上層から出土した、形状から船の形代と推定している木製品。横木取りで柾目材となる木材の端を尖らせて上面に方形の切れ込みを入れて船首を、もう一方の端を四角くおさめて上部を突き出させて船尾を、側面を抉って船内を成形している。各部で穿孔されており、船底面では左右縁に３箇所３孔ずつ千鳥状に、船側面では船底面にほぼ対応する位置に右縁で３箇所３孔、左縁で３箇所４孔、船尾に左右並列して２孔が配されている。ほぼ完存しているが船側面の右縁は折れてしまっている。全長22.8cm、全幅4.8cm、全高2.8cmを測る。

剣形（第65図２）

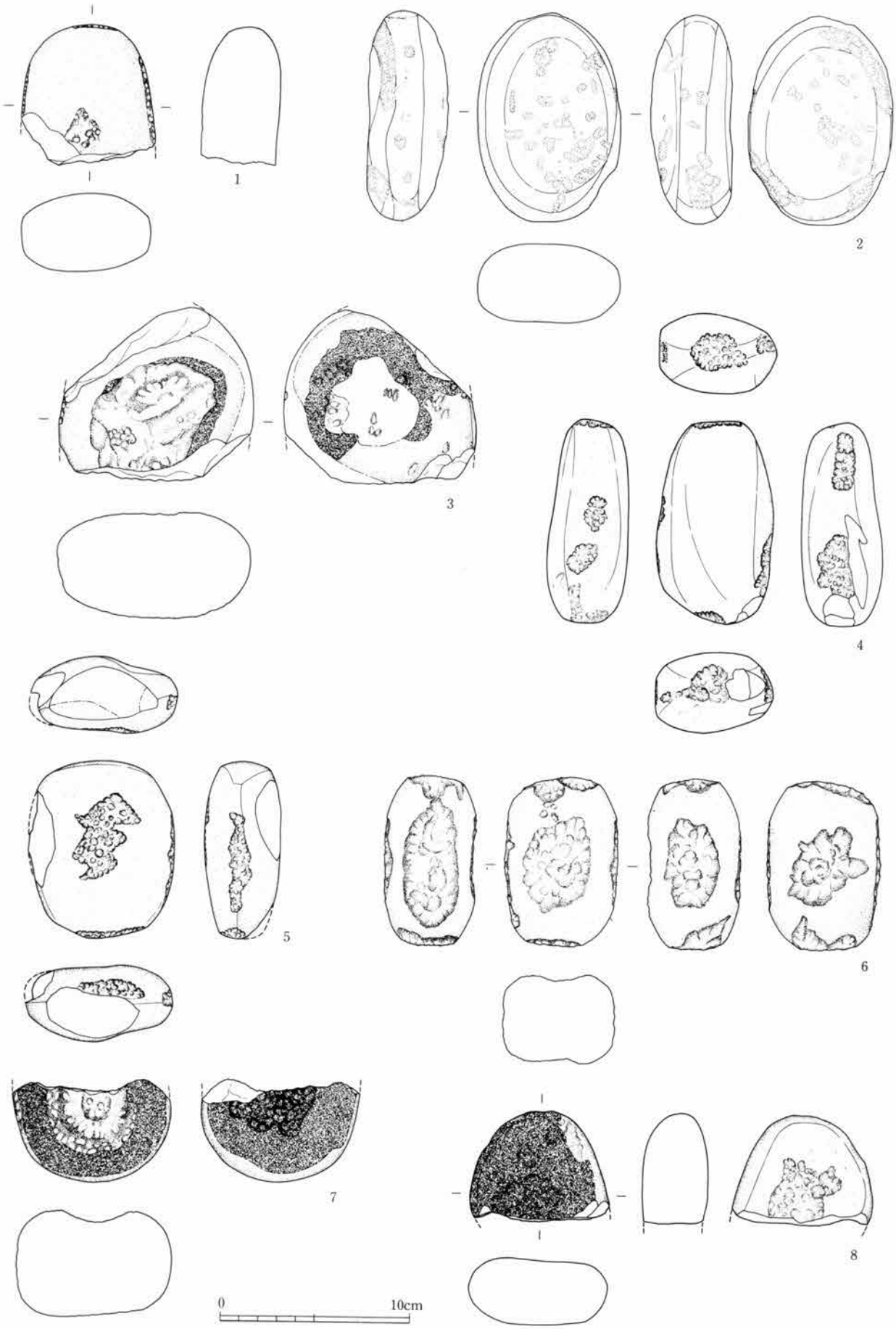
３区の溝状に落ち込む部分、層位では３区第26図層17から出土した、形状から剣の形代、もしくは箆と推定している木製品。横木取りで柾目材となる木材は蒲鉾型の断面で、端の一方は幅が広いが薄く、端のもう一方は幅が狭いが厚く仕上げられている。左右対称形で、全体的に木目は平滑で、丁寧な調整、仕上げがなされたと思われる。おそらく完存しているものと思われ、全長26.7cm、全幅２cm、全厚1.1cmを測る。



第66図　石鏃実測図
（Ｓ＝1/2）



第67図　石器・石製品実測図(1)（S＝1／3）



第68図　石器・石製品実測図(2)（Ｓ＝１／３）

（3）石器・石製品

石器・石製品には石鏃、石斧、石庖丁、焼石、敲石、磨石、凹石、軽石、石鍋、台石、砥石、剥片がある。加工痕、使用痕のあるものについては、剥片類以外は積極的に図化に努めた。図化できなかったものについては文中で補足するものとしたい。なお、石器・石製品の石質は小島和夫氏の肉眼鑑定による。

石鏃（第66図）

1区第26図層5～8から出土した。凹基式で無茎、長さと幅がほぼ等しい三角形の平面形を呈するもの。細部調整によって先端部はより鋭く、基部は内湾気味に成形している。完存しており、長さ2.0cm、幅2.0cm、厚さ0.35cm、重さ0.9gを測る。石質は珪質の黒色頁岩である。縄文時代まで遡る可能性が高い形態である。

石斧（第67図1・2）

2点出土しており、ともに磨製石斧。1は3区第26図層1、2は1～2区から出土した。1は基部、刃部とも折損している。現状での主面幅は約11cmを測り、主面と側面の境は直線的な鋭い稜を持っており、かなり大型の定角式の磨製石斧と思われる。石材は硬質で緻密なもので、器面はライトグリーン色と白色の糸が不規則に交錯しているように見える。おそらく珪質の緑色凝灰岩であろう。2は1と同様に器部・刃部とも折損しているが、1より基部側に近い部分で、1より小型のものである。断面がやや不成形である。石材は流紋岩系であろう。1・2とも形態、石質から見て縄文時代に遡る可能性が高い。

石庖丁（第67図3）

4区第26図層8・11から出土している。打製の石庖丁で、直線刃片刃の刃部をもつ。左右端部、背部を欠損するが、おそらく平面形は長方形で、一般的に稲の穂首刈り用とされる一般的な石庖丁よりもかなり大型で重いものとなろう。打製品であるが、整った板石状で器面の凹凸が少なく、剥離、敲打等の調整痕ははっきりしない。刃縁は擦痕が観察され、何かの切断に使用されたことは確実と言えよう。石材は安山岩である。弥生時代に存在する石器である。

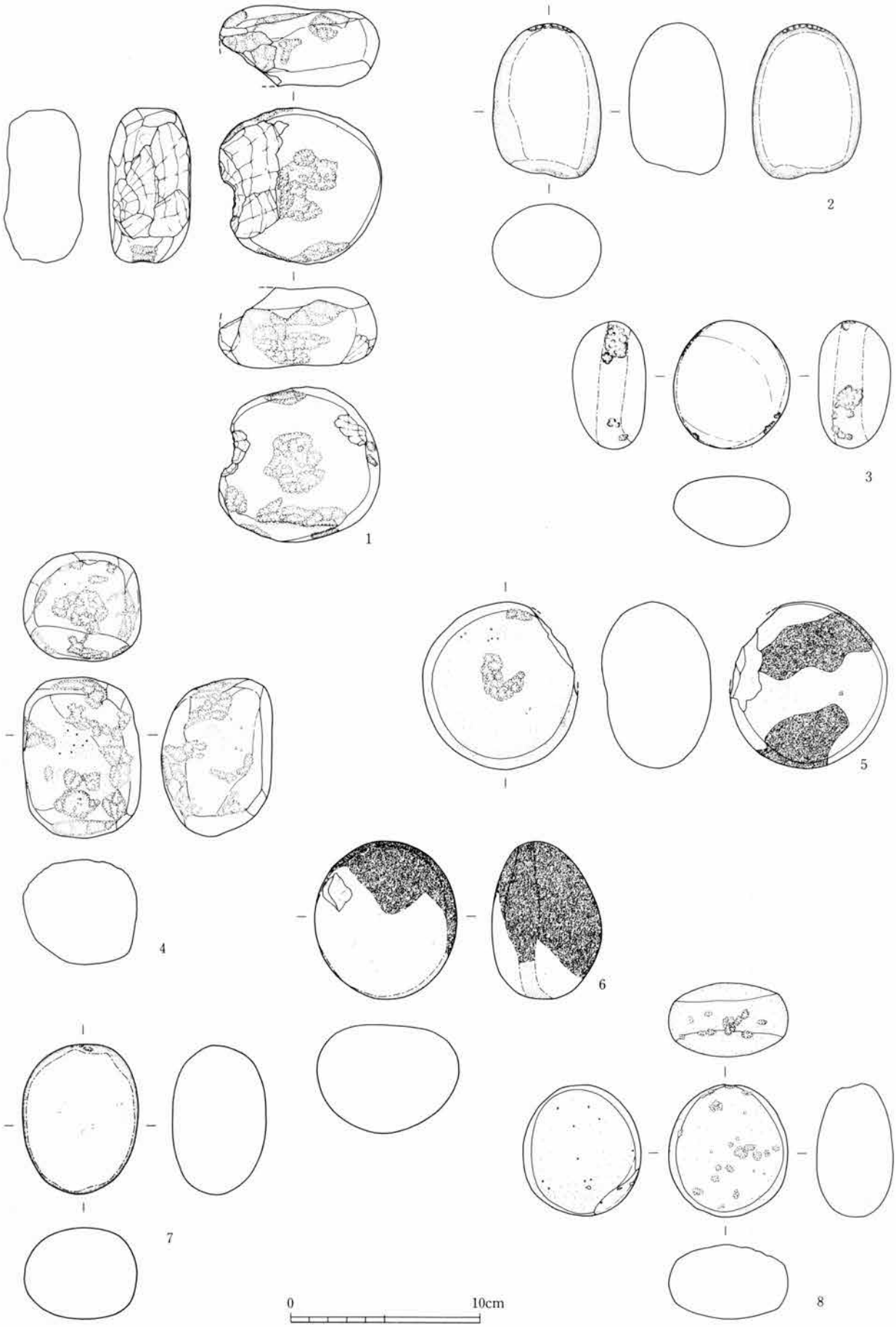
焼石（第67図4～7）

出土した石の中に、割れていて全形は窺えないものの、非常に形が整って厚い板石状を呈し、加工が加えられたことが確実な礫群が存在した。そしてそれらの大半が煤が付着していたり、黒色化・赤色化していたりと被熱が確実であったことから、炉石的な使用がなされたものと考えて、ここに紹介する。ただし遺構としての炉が確認できていないこと、時期が不明確なこと、欠損が大きいことから転用された可能性等を考慮して、炉石と断定することは避けておきたい。1区、3区、4区から数点出土しており、うち4点を図化した。石材は安山岩が大半と思われる。

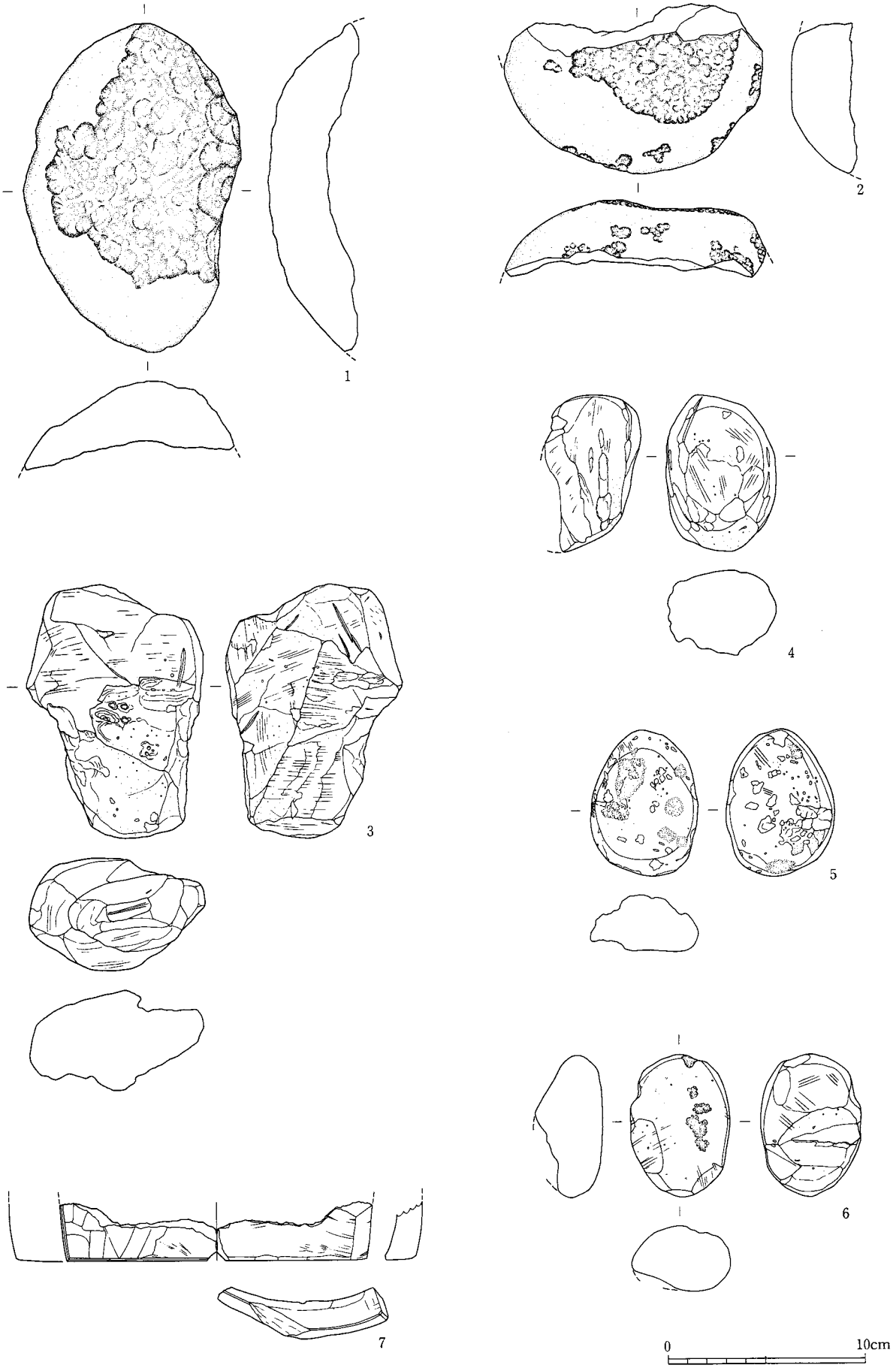
第67図4・5は4区第26図層8・11から出土した。4は周縁を全て欠いている。断面で見る上面は段を、下面は凹みをもっており、上下面ともやや赤色化している。石皿等を転用した可能性がある。5は角礫の隅部分で、周縁は欠損している。断面で見る上面は凹みがあり、下面は平滑である。上面・側面・下面と黒色化部分が連なるようであるが、詳細な範囲は不明である。6・7は出土地区が不明である。6は断面で見る上面の凹んだ部分にはっきりと煤が付着、このほかにも薄く黒色化した部分が見られる。7は断面で見る上面に段があり、煤が付着している。下面は剥離しているようである。1と同様に石皿を転用した可能性がある。

敲石・磨石・凹石（第67図8～第70図1・2）

調査区の1区から6区まで広い範囲から出土しており、数量的にも非常に多い。19点を図化した。竪穴からも1点出土しているが、図化できなかった。ここで紹介する19点の遺物の敲石・磨石・凹石の分類は、基本的に複数の機能を兼ねたものが多いため、特に行わず、特定できるものについてのみ個々に示すことにしたい。出土遺構・層位については一覧表に示してあるので、文中では基本的にふれないこととする。石材は大半が安山岩と思われる。なお、記述にあたっては断面をもとにして上面、下面、側面左右を、平面をもとにして側面上下を指す



第69図　石器・石製品実測図(3)（S＝1／3）



第70図　石器・石製品実測図(4)（S＝1／3）

ものとする。

第67図８は細長いやや曲った礫を素材としているもので、上面、下面、側面の全てに敲打痕が見られ、概ね下端に寄った位置にある。長さ12.2cm、幅6.1cm、厚さ５cm、重さ296.8gを測る。第68図１は約半分を欠損する。側面の上、左右に擦り痕が見られる。上面は擦り痕か敲打痕か不明確である。２は上下側面の全てに敲打痕が見られるもの。敲打の大きいものや集中するものは側面でよく見られる。長さ11.4cm、幅7.7cm、厚さ4.2cm、重さ481gを測る。３は上下端を欠損。上面に範囲の広い敲打、右側面に小敲打、左側面に擦り根が見られる。また上面は敲打の範囲に円形に、下面はドーナツ状に煤が付着しており、被熱していることを示す。４は全体的に細かい敲打が集中して左右側面、上下端に集中して見られる。長さ11.1cm、幅6.1cm、厚さ4.4cm、重さ434.9gを測る。５は左側面の一部のみ欠損する。上端は擦り根、下端と上面と右側面に敲打痕が見られる。６は５区の下位遺構面直上層から出土したもので、中世前半期の土器群と共伴する。全ての面ではっきりした敲打痕が集中して見られる、よく使い込まれた製品である。長さ9.3cm、幅6.2cm、厚さ５cm、重さ452.8gを測る。７は約半分を欠損する。上面は深い凹み、下面は敲打痕、側面は擦り痕が見られる。上面と下面はドーナツ状に黒色化しており、被熱しているようである。８は約半分を欠損している。上下面に弱い敲打痕が見られさらに黒色化している。石材はかなり風化しており、亀裂が入った部分もある。第69図１は左側面から上面にかけて一部欠損しているが、割れ面の観察から、敲打の結果割れた可能性が高い。上側面は擦り痕、上下面と下側面には敲打痕が見られる。２は敲打痕が上側面とへこんだ下側面以外では見られず、他の面は平滑である。長さ8.4cm、幅5.85cm、厚さ5.15cm、重さ359.5gを測る。３も側面に軽い敲打痕が見られる他は平滑になっているものである。長さ７cm、幅6.2cm、厚さ3.8cm、重さ239.5gを測る。４は敲打が上面と上側面に集中して見られるもの。下面はそれほど顕著でない。長さ8.65cm、幅6.4cm、厚さ６cm、重さ439.9gを測る。５は右側縁の一部を欠損する。片面に軽い敲打根が見られる他は平滑である。もう片面は斑状に黒色化しており、被熱を示す。６は敲打痕が認められない平滑な円礫である。表面の約半分が黒色化しており、被熱を示す。長さ8.5cm、幅7.7cm、厚さ6.9cm、重さ551.1gを測る。７は上側面のみ軽い敲打痕が見られるが、他の面は平滑である。長さ8.2cm、幅6.3cm、厚さ5.1cm、重さ369.7gを測る。８は上面と上側面に軽い敲打痕が見られ、他の面は平滑である。長さ7.2cm、幅6.4cm、厚さ4.1cm、重さ275.9gを測る。第70図１は剥片であるが、自然面に広い範囲で無数の敲打痕を持つもの。剥離面が敲打痕を切っているため、剥離する前の段階から敲打されていたと思われる。ただし、剥離前はかなりの大きさのものと予想されるために、台石的な使用がなされ、剥離後は手持ちできる大きさとなっているので、敲石的な使用がなされたと考えたい。２は１と似た剥片であるが、自然面側に敲打痕の他、剥離痕が見られるもの。剥離面が敲打痕を切っており、自然面側の剥離痕と敲打痕は切りあいが不明確である。剥離面の剥離までは１と同じような使用がなされたと思われるが、その後の使用や自然面の剥離の目的については不明である。

軽石（第70図３～６）

竪穴、２～６区から数点出土しており、そのうち４点を図化した。表面に擦り痕や刃物傷と思われる条が見られるものがほとんどであり、磨石や砥石に近い用途が考えられるが、それらとの素材の違いを重視し細かい機能差や別の用途への使用が反映されている可能性を鑑みて、別に項目を設けた。

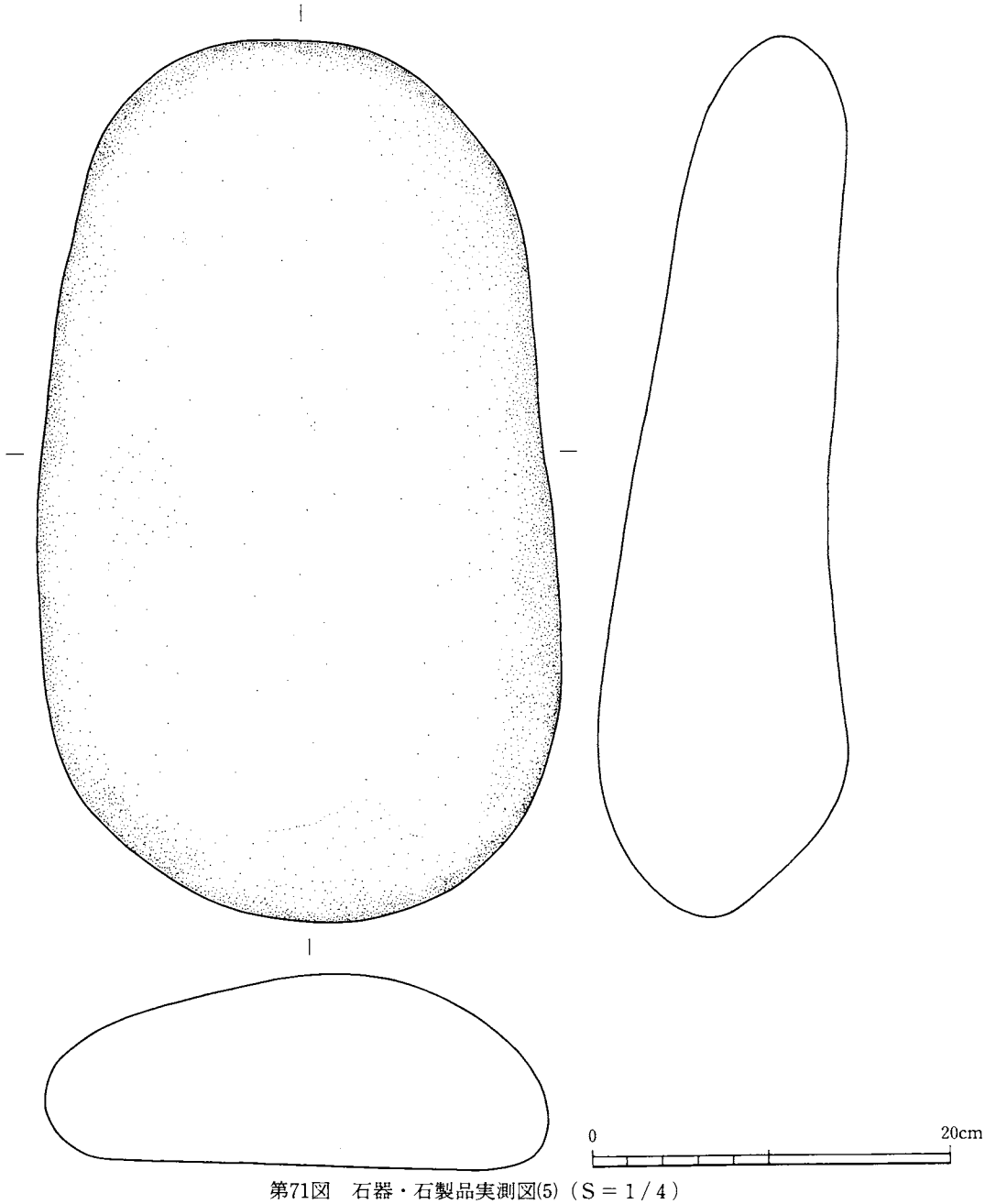
第70図３は出土例中で最も大きいもので、円孔や刃物傷と見られる条が観察される。長さ13.4cm、幅9.25cm、厚さ5.9cm、重さ118.6gを測る。４は側面の一部を欠くと思われるもので、擦り痕や刃物傷と見られる条が観察される。５は片面が使用によってすり減って平坦になったと思われるもので、径数mm前後の円孔が両面で多く見られる。長さ7.7cm、幅5.65cm、厚さ３cm、重さ26.7gを測る。６は片面に深い抉りの痕跡があるもので、すり痕も何箇所かで観察される。擦り痕の部分については周囲と色調が異なり、軽石の地色である淡黄色を発している。長さ7.5cm、幅5.25cm、厚さ3.5cm、重さ25.0gを測る。

石鍋（第70図７）

３区第26図層15・16から出土した。円弧状の反りを持った石製品であり、器面が平滑である。石材は滑石と思われる。器形から考えると径20cm、厚さ1.5cm前後に復元される石鍋の胴部であるが、底面と断面の一部が面を取られていることから、その転用品であろう。滑石製石鍋の転用例は小松市白江梯川遺跡等で温石として見ることができ[22]、本例も石鍋として使用された後に温石として加工され利用されたものと推定している。

台石（第71図）

１区下位遺構面に密着して出土した。長方形に近い平面形であるが四隅が丸みを持ち、厚みが小さくやや偏平な礫である。長さ50.9cm、幅30.2cm、厚さ11.5cm、重さ31.85kgを測る。石材は安山岩である。非常に大きく重いため台石以外の機能は考えにくいが、表面はごく小さな凹みがあるだけで概ね平滑であり、敲打痕は明確ではない。出土した時点ではその用途を把えかねていたところ、地元の発掘調査作業員の方々から「これは木槌で藁をたたいてほぐすときの台で、つい最近まで自分の納屋にあったものとほぼ同じものである。私たちはジョウバイシと通称していた」と教えて頂いた。仮に「ジョウバイシ」と同じものとすると、木製工具で植物の枝葉を敲



第71図　石器・石製品実測図(5)（S＝1／4）

く作業なら明確な敲打が生まれにくいのも納得できる。この台石の帰属時期は下位遺構面から出土したことから中世前半期を降るものではないだろうが、近現代にも類品を見ることができることから、縄文・弥生時代といった石器時代まで遡らせて限定する根拠はない。むしろ石器時代に存在したとするならば、以降脈々と近現代まで受け継がれてきたと考えるほうが自然であろう。ここではあえて帰属時期を石器時代まで遡らせることはせず、古代・中世、特に中世前半期に存在する可能性が高い遺物として紹介しておきたい。

砥石

３区から１点、４区から２点、６区から１点の計４点が出土している。いずれも使用による摩耗、欠損があり、原型がはっきりしなかったため図化しなかった。６区から出土した小型の蒲鉾型のものを除けば、他は全て幅３～４cm、厚さ１～２cmの直方体を基本とし、研ぎ面は円弧状の反りを持ち、鋭い刃物傷等も観察される。時期は特定できないが概ね鉄器、特に鉄鎌の普及以降の砥石と考えている。石材は珪岩や流紋岩が使われている。なお、３点の直方体の砥石の形状は近現代の砥石に通じるものである。

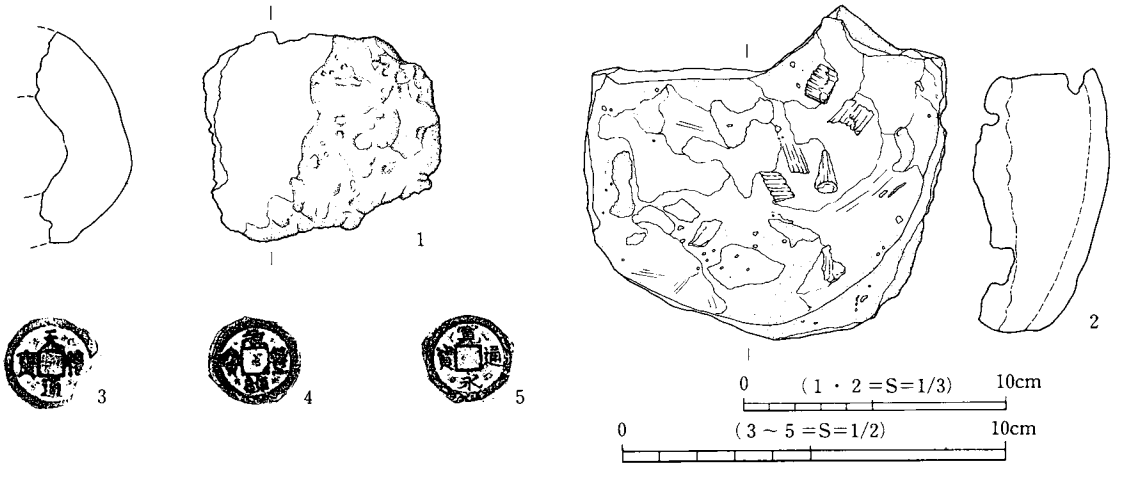
剥片

石鏃・石錐等の打製石器、不定型な剥片石器等の原材となり得る石質の剥片は非常に多く出土しており、１区11点、２区９点、３区20点、４区30点、５区14点、６区４点、その他10点、の計98点を数える。石質別では鉄石英が49点、輝石安山岩が21点、珪岩が17点、他、頁岩、玉髄、緑色凝灰岩等が１点から数点程度出土している。これら剥片類は基本的に後世の流れ込み資料であることや、特定の石器への調整を観察しえたものが存在しなかったことから、図化は行わなかった。しかしながらその石質と量比からは弥生時代以前の石器の生産と流通の様相の一端が読み取れるものと考え、少しその傾向についてふれることにしたい。

注目すべきは鉄石英の剥片が非常に多いことであり、縄文・弥生時代を通じて普遍的な石器素材とされる輝石安山岩を大きく量的に上回っている。鉄石英は出土地区別でも１～６区全てで最多量を示し、満遍ない分布状況からも貝田遺跡の出土剥片の主体と言える。その原産地については、近接する山王丸山遺跡では弥生時代の墓群から鉄石英製の管玉が多数出土しており、報告では周辺で現材が採取される可能性が示されている[2]。貝田遺跡での多量の鉄石英剥片の出土はこの可能性を強めるものとして考えたい。ただし、貝田遺跡では管玉の製品や未製品、玉剥片が出土しておらず、玉造との直接的な関係は求めにくく、関係は薄いと思われる。また、全体的な組成では輝石安山岩が少なく、鉄石英も含めて珪岩系が多いありかたは弥生時代よりもむしろより縄文時代に近い。貝田遺跡出土の剥片群の時期的な主体は縄文時代にあるのではないかと考えているが、縄文土器の出土が皆無であるため、断定はできない状況にあると言えよう。

（４）その他の遺物

その他の遺物としては主に製鉄・鍛冶に関係する遺物、銭貨、自然遺物がある。製鉄・鍛冶関係遺物は主に鉄



第72図　その他の遺物実測図（S＝1/2、1/3）

第20表　出土遺物一覧（1）

挿図No.	遺物種類	器種	出土遺構	実測No.	備考
第37図1	弥生土器	底部	竪穴	C46	籾圧痕（？）有
2	弥生土器	高杯	竪穴	C45	把手剝落
3	須恵器	杯蓋	竪穴	D431	つまみ部
4	須恵器	甕	竪穴	D432	
5	中世土師器	無台小皿	竪穴	D224	ロクロ成形
6	中世土師器	有台小皿	竪穴	D430	ロクロ成形
7	青磁	碗	竪穴	D253	3区に接合資料
第38図1	弥生土器	鉢	1区層13	C39	
2	弥生土器	壺	1区層13	C38	
3	土師器	椀	1区層13	D196	
4	土師器	高杯	1区層13	C41	
5	土師器	高杯	1区層13	D199	
6	土師器	手捏土器	1区層13	D194	
7	須恵器	杯蓋	1区層13	D193	
8	須恵器	無台杯	1区層13	D192	
9	中世土師器	有台椀	1区層13	D407	ロクロ成形
10	中世土師器	有台椀	1区層13	D399	ロクロ成形
11	中世土師器	無台小皿	1区層13	D201	ロクロ成形
12	中世土師器	無台椀	1区層13	D197	ロクロ成形
13	中世土師器	無台椀	1区層13	D198	ロクロ成形
14	中世土師器	無台椀	1区層13	D411	ロクロ成形
15	土製品	陶錘	1区層13	D560	珠洲質
16	中世土師器	椀	1区層5～8	D200	ロクロ成形
17	珠洲	甕	1区層5～8	D62	
18	珠洲	片口鉢	1区層5～8	D494	
19	土師器	甕	1区層位不明	C86	
20	土師器	甕	1区層位不明	C40	
21	珠洲	甕	1区層位不明	D191	
22	中世土師器	無台小皿	1区層位不明	D223	ロクロ成形
第39図1	弥生土器	甕	2区層1	C43	
2	土師器	椀	2区層1	D495	
3	土師器	有台椀	2区層1	D226	
4	須恵器	台付瓶	2区層1	D462	
5	中世土師器	無台椀	2区層1	D204	ロクロ成形
6	中世土師器	無台椀	2区層1	D215	ロクロ成形
7	中世土師器	無台小皿	2区層1	D216	ロクロ成形
8	中世土師器	無台小皿	2区層1	D412	ロクロ成形
9	中世土師器	有台小皿	2区層1	D205	ロクロ成形
10	中世土師器	有台小皿	2区層1	D214	ロクロ成形
11	中世土師器	小皿	2区層1	D203	非ロクロ成形
12	土製品	陶錘	2区層1	D542	珠洲質
13	土製品	陶錘	2区層1	D559	珠洲質
14	須恵器	有台椀	2区層13	D208	
15	中世土師器	有台椀	2区層13	D209	ロクロ成形
16	弥生土器	壺	2区層15及び上位炭層	C42	
17	中世土師器	無台椀	2区層15及び上位炭層	D207	ロクロ成形
18	中世土師器	無台小皿	2区層15及び上位炭層	D206	ロクロ成形
19	中世土師器	無台小皿	2区層15及び上位炭層	D211	ロクロ成形
20	白磁	壺	2区層15及び上位炭層	D464	水注？
21	土製品	陶錘	2区層15及び上位炭層	D541	珠洲質
22	土製品	陶錘	2区層15及び上位炭層	D540	珠洲質
23	土製品	陶錘	2区層15及び上位炭層	D544	珠洲質
24	土製品	陶錘	2区層15及び上位炭層	D545	珠洲質
25	弥生土器	甕	2区層18・19	C47	
26	中世土師器	無台椀	2区層18・19	D210	ロクロ成形
27	中世土師器	無台椀	2区層18・19	D225	ロクロ成形
28	土製品	陶錘	2区層18・19	D548	珠洲質
29	土製品	陶錘	2区層18・19	D547	珠洲質
30	土製品	陶錘	2区層18・19	D546	珠洲質
第39図31	土製品	陶錘	2区層18・19	D543	珠洲質
32	土製品	陶錘	2区層18・19	D549	珠洲質
33	土製品	陶錘	2区層18・19	D550	珠洲質
34	中世土師器	無台小皿	2区層20・21	D213	ロクロ成形
35	中世土師器	無台小皿	2区層20・21	D212	ロクロ成形
第40図1	中世土師器	無台椀	2区層位不明	D307	ロクロ成形
2	中世土師器	無台椀	2区層位不明	D122	ロクロ成形
3	中世土師器	皿	2区層位不明	D220	非ロクロ成形
4	中世土師器	皿	2区層位不明	D218	非ロクロ成形
5	中世土師器	皿	2区層位不明	D219	非ロクロ成形
6	中世土師器	皿	2区層位不明	D217	非ロクロ成形
7	珠洲	四耳壺	2区層位不明	D234	
8	珠洲	甕	2区層位不明	D222	
9	珠洲	甕	2区層位不明	D429	
第41図1	弥生土器	壺	3区層1～3・5～13	C48	
2	弥生土器	壺	3区層1～3・5～13	C52	
3	弥生土器	鉢	3区層1～3・5～13	C51	
4	弥生土器	器台脚部	3区層1～3・5～13	C59	
5	弥生土器	底部	3区層1～3・5～13	C49	壺？
6	中世土師器	無台小皿	3区層1～3・5～13	D271	ロクロ成形
7	中世土師器	無台小皿	3区層1～3・5～13	D453	ロクロ成形
8	中世土師器	無台小皿	3区層1～3・5～13	D227	ロクロ成形
9	中世土師器	有台皿	3区層1～3・5～13	D195	ロクロ成形
10	中世土師器	小皿	3区層1～3・5～13	D451	非ロクロ成形
11	珠洲	片口鉢	3区層1～3・5～13	D261	
12	珠洲	片口鉢	3区層1～3・5～13	D235	
13	土製品	陶錘	3区層1～3・5～13	D556	珠洲質
14	土製品	陶錘	3区層1～3・5～13	D558	珠洲質
15	土製品	陶錘	3区層1～3・5～13	D553	珠洲質
第42図1	中世土師器	無台椀	3区層15・16	D236	ロクロ成形
2	中世土師器	無台小皿	3区層15・16	D239	ロクロ成形
3	中世土師器	無台小皿	3区層15・16	D244	ロクロ成形
4	中世土師器	無台小皿	3区層15・16	D443	ロクロ成形
5	中世土師器	無台小皿	3区層15・16	D434	ロクロ成形
6	中世土師器	無台小皿	3区層15・16	D238	ロクロ成形
7	中世土師器	無台小皿	3区層15・16	D249	ロクロ成形
8	中世土師器	無台小皿	3区層15・16	D240	ロクロ成形
9	中世土師器	無台小皿	3区層15・16	D437	ロクロ成形
10	中世土師器	無台小皿	3区層15・16	D436	ロクロ成形
11	中世土師器	無台小皿	3区層15・16	D243	ロクロ成形
12	中世土師器	無台小皿	3区層15・16	D439	ロクロ成形
13	中世土師器	無台小皿	3区層15・16	D435	ロクロ成形
14	中世土師器	無台小皿	3区層15・16	D247	ロクロ成形
15	中世土師器	無台小皿	3区層15・16	D241	ロクロ成形
16	中世土師器	無台小皿	3区層15・16	D438	ロクロ成形
17	中世土師器	無台小皿	3区層15・16	D440	ロクロ成形
18	中世土師器	無台小皿	3区層15・16	D237	ロクロ成形
19	中世土師器	有台小皿	3区層15・16	D248	ロクロ成形
20	中世土師器	皿	3区層15・16	D252	非ロクロ成形
21	中世土師器	皿	3区層15・16	D251	非ロクロ成形
22	中世土師器	小皿	3区層15・16	D242	非ロクロ成形
23	土製品	陶錘	3区層15・16	D557	珠洲質
第43図1	中世土師器	無台椀	3区下位遺構面直上層	D245	ロクロ成形
2	中世土師器	無台椀	3区下位遺構面直上層	D515	ロクロ成形
3	中世土師器	無台小皿	3区下位遺構面直上層	D448	ロクロ成形
4	中世土師器	無台小皿	3区下位遺構面直上層	D516	ロクロ成形
5	中世土師器	無台小皿	3区下位遺構面直上層	D514	ロクロ成形
6	中世土師器	無台小皿	3区下位遺構面直上層	D511	ロクロ成形
7	中世土師器	無台小皿	3区下位遺構面直上層	D513	ロクロ成形

第21表　出土遺物一覧（２）

挿図No.	遺物種類	器種	出土遺構	実測No.	備考
第43図8	中世土師器	無台小皿	3区下位遺構面直上層	D254	ロクロ成形
9	中世土師器	無台小皿	3区下位遺構面直上層	D444	ロクロ成形
10	中世土師器	無台小皿	3区下位遺構面直上層	D445	ロクロ成形
11	中世土師器	無台小皿	3区下位遺構面直上層	D474	ロクロ成形
12	中世土師器	無台小皿	3区下位遺構面直上層	D512	ロクロ成形
13	中世土師器	無台小皿	3区下位遺構面直上層	D447	ロクロ成形
14	中世土師器	無台小皿	3区下位遺構面直上層	D450	ロクロ成形
15	中世土師器	無台小皿	3区下位遺構面直上層	D250	ロクロ成形
16	中世土師器	有台小皿	3区下位遺構面直上層	D470	ロクロ成形
17	中世土師器	有台小皿	3区下位遺構面直上層	D480	ロクロ成形
18	中世土師器	皿	3区下位遺構面直上層	D446	非ロクロ成形
19	中世土師器	小皿	3区下位遺構面直上層	D449	非ロクロ成形
20	白磁	碗	3区下位遺構面直上層	D255	
21	土製品	陶錘	3区下位遺構面直上層	D539	珠洲質
22	土製品	陶錘	3区下位遺構面直上層	D538	珠洲質
23	土製品	陶錘	3区下位遺構面直上層	D537	珠洲質
24	土製品	陶錘	3区下位遺構面直上層	D555	珠洲質
第44図1	弥生土器	高杯脚部	3区層位不明	C50	
2	土師器	有台椀	3区層位不明	D256	
3	中世土師器	無台椀	3区層位不明	D230	ロクロ成形
4	中世土師器	無台椀	3区層位不明	D228	ロクロ成形
5	中世土師器	無台椀	3区層位不明	D229	ロクロ成形
6	中世土師器	無台椀	3区層位不明	D422	ロクロ成形
7	中世土師器	無台椀	3区層位不明	D258	ロクロ成形
8	中世土師器	無台小皿	3区層位不明	D420	ロクロ成形
9	中世土師器	無台小皿	3区層位不明	D231	ロクロ成形
10	中世土師器	無台小皿	3区層位不明	D421	ロクロ成形
11	中世土師器	無台小皿	3区層位不明	D232	ロクロ成形
12	中世土師器	無台小皿	3区層位不明	D259	ロクロ成形
13	中世土師器	有台皿	3区層位不明	D246	ロクロ成形
14	中世土師器	有台小皿	3区層位不明	D260	ロクロ成形
15	中世土師器	有台小皿	3区層位不明	D257	ロクロ成形
16	中世土師器	小皿	3区層位不明	D423	非ロクロ成形
17	土製品	陶錘	3区層位不明	D552	珠洲質
第45図	珠洲	甕	3区層位不明	D233	破片多い
第46図1	弥生土器	壺	4区層6・8	C72	
2	弥生土器	高杯	4区層6・8	C88	
3	弥生土器	底部	4区層6・8	C56	
4	弥生土器	底部	4区層6・8	C55	籾圧痕（？）有
5	弥生土器	底部	4区層6・8	C58	
6	中世土師器	無台椀	4区層6・8	D267	ロクロ成形
7	中世土師器	無台椀	4区層6・8	D410	ロクロ成形
8	中世土師器	無台小皿	4区層6・8	D414	ロクロ成形
9	中世土師器	無台小皿	4区層6・8	D272	ロクロ成形
10	中世土師器	無台小皿	4区層6・8	D273	ロクロ成形
11	中世土師器	無台小皿	4区層6・8	D529	ロクロ成形
12	中世土師器	皿	4区層6・8	D274	非ロクロ成形
13	珠洲	片口鉢	4区層6・8	D533	
14	越前	甕	4区層6・8	D463	断面漆継ぎ
15	中世土師器	無台椀	4区層3～5	D263	ロクロ
16	中世土師器	無台小皿	4区層3～5	D264	ロクロ
17	中世土師器	無台小皿	4区層3～5	D266	ロクロ
18	中世土師器	有台小皿	4区層3～5	D262	ロクロ
19	中世土師器	小皿	4区層3～5	D265	非ロクロ成形
20	弥生土器	底部	4区層8・11	C60	
21	中世土師器	無台皿	4区層8・11	D475	ロクロ成形
22	中世土師器	無台皿	4区層8・11	D517	ロクロ成形
23	中世土師器	無台皿	4区層8・11	D456	ロクロ成形
24	中世土師器	無台小皿	4区層8・11	D507	ロクロ成形
第46図25	中世土師器	無台小皿	4区層8・11	D270	ロクロ成形
26	珠洲	四耳壺	4区層8・11	D268	
27	珠洲	壺底部	4区層8・11	D269	
第47図1	中世土師器	無台小皿	4区層12	D278	ロクロ成形
2	中世土師器	無台小皿	4区層12	D277	ロクロ成形
3	中世土師器	無台椀	4区層13	D455	ロクロ成形
4	中世土師器	無台小皿	4区層13	D275	ロクロ成形
5	中世土師器	無台椀	4区層15	D503	ロクロ成形
6	中世土師器	無台小皿	4区層8・11間炭層	D510	ロクロ成形
7	中世土師器	無台小皿	4区層8・11間炭層	D509	ロクロ成形
8	中世土師器	無台小皿	4区層8・11間炭層	D285	ロクロ成形
9	中世土師器	有台皿	4区層8・11間炭層	D499	ロクロ成形
10	中世土師器	有台小皿	4区層8・11間炭層	D508	ロクロ成形
11	中世土師器	小皿	4区層8・11間炭層	D461	非ロクロ成形
第48図1	中世土師器	無台椀	4区下位遺構面直上層	D486	ロクロ成形
2	中世土師器	無台椀	4区下位遺構面直上層	D289	ロクロ成形
3	中世土師器	無台椀	4区下位遺構面直上層	D488	ロクロ成形
4	中世土師器	無台椀	4区下位遺構面直上層	D300	ロクロ成形
5	中世土師器	無台椀	4区下位遺構面直上層	D487	ロクロ成形
6	中世土師器	無台椀	4区下位遺構面直上層	D518	ロクロ成形
7	中世土師器	無台椀	4区下位遺構面直上層	D484	ロクロ成形
8	中世土師器	無台椀	4区下位遺構面直上層	D489	ロクロ成形
9	中世土師器	有台皿	4区下位遺構面直上層	D490	ロクロ成形
10	珠洲	甕	4区下位遺構面直上層	D485	
11	珠洲	片口鉢	4区下位遺構面直上層	D534	北調査区と接合
第49図12	中世土師器	無台小皿	4区下位遺構面直上層	D481	ロクロ成形
13	中世土師器	無台小皿	4区下位遺構面直上層	D468	ロクロ成形
14	中世土師器	無台小皿	4区下位遺構面直上層	D467	ロクロ成形
15	中世土師器	無台小皿	4区下位遺構面直上層	D297	ロクロ成形
16	中世土師器	無台小皿	4区下位遺構面直上層	D294	ロクロ成形
17	中世土師器	無台小皿	4区下位遺構面直上層	D291	ロクロ成形
18	中世土師器	無台小皿	4区下位遺構面直上層	D466	ロクロ成形
19	中世土師器	無台小皿	4区下位遺構面直上層	D477	ロクロ成形
20	中世土師器	無台小皿	4区下位遺構面直上層	D283	ロクロ成形
21	中世土師器	無台小皿	4区下位遺構面直上層	D288	ロクロ成形
22	中世土師器	無台小皿	4区下位遺構面直上層	D473	ロクロ成形
23	中世土師器	無台小皿	4区下位遺構面直上層	D293	ロクロ成形
24	中世土師器	無台小皿	4区下位遺構面直上層	D459	ロクロ成形
25	中世土師器	無台小皿	4区下位遺構面直上層	D479	ロクロ成形
26	中世土師器	無台小皿	4区下位遺構面直上層	D279	ロクロ成形
27	中世土師器	無台小皿	4区下位遺構面直上層	D282	ロクロ成形
28	中世土師器	無台小皿	4区下位遺構面直上層	D471	ロクロ成形
29	中世土師器	無台小皿	4区下位遺構面直上層	D284	ロクロ成形
30	中世土師器	無台小皿	4区下位遺構面直上層	D478	ロクロ成形
31	中世土師器	無台小皿	4区下位遺構面直上層	D482	ロクロ成形
32	中世土師器	無台小皿	4区下位遺構面直上層	D460	ロクロ成形
33	中世土師器	無台小皿	4区下位遺構面直上層	D287	ロクロ成形
34	中世土師器	無台小皿	4区下位遺構面直上層	D295	ロクロ成形
35	中世土師器	有台小皿	4区下位遺構面直上層	D292	ロクロ成形
36	中世土師器	有台小皿	4区下位遺構面直上層	D492	ロクロ成形
37	中世土師器	有台小皿	4区下位遺構面直上層	D491	ロクロ成形
38	中世土師器	有台小皿	4区下位遺構面直上層	D296	ロクロ成形
39	中世土師器	小皿	4区下位遺構面直上層	D469	非ロクロ成形
40	中世土師器	小皿	4区下位遺構面直上層	D476	非ロクロ成形
41	中世土師器	小皿	4区下位遺構面直上層	D290	非ロクロ成形
42	中世土師器	小皿	4区下位遺構面直上層	D483	非ロクロ成形
43	中世土師器	小皿	4区下位遺構面直上層	D299	非ロクロ成形
第50図1	弥生土器	鉢	4区層位不明	C54	
2	弥生土器	高杯	4区層位不明	C62	非ロクロ成形

第22表　出土遺物一覧（3）

挿図No.	遺物種類	器種	出土遺構	実測No.	備考
第50図3	弥生土器	高杯	4区層位不明	C61	
4	須恵器	杯蓋	4区層位不明	D202	
5	土師器	有台椀	4区層位不明	D327	
6	中世土師器	無台椀	4区層位不明	D378	ロクロ成形
7	中世土師器	無台小椀	4区層位不明	D286	ロクロ成形
8	中世土師器	無台小皿	4区層位不明	D472	ロクロ成形
9	中世土師器	無台小皿	4区層位不明	D504	ロクロ成形
10	中世土師器	無台小皿	4区層位不明	D419	ロクロ成形
11	中世土師器	無台小皿	4区層位不明	D377	ロクロ成形
12	中世土師器	無台小皿	4区層位不明	D280	ロクロ成形
13	中世土師器	無台小皿	4区層位不明	D458	ロクロ成形
14	中世土師器	無台小皿	4区層位不明	D457	ロクロ成形
15	中世土師器	無台小皿	4区層位不明	D281	ロクロ成形
16	中世土師器	無台小皿	4区層位不明	D372	ロクロ成形
17	中世土師器	無台小皿	4区層位不明	D505	ロクロ成形
18	中世土師器	無台小皿	4区層位不明	D506	ロクロ成形
19	中世土師器	無台小皿	4区層位不明	D374	ロクロ成形
20	中世土師器	無台小皿	4区層位不明	D498	ロクロ成形
21	中世土師器	無台小皿	4区層位不明	D416	ロクロ成形
22	中世土師器	無台小皿	4区層位不明	D373	ロクロ成形
23	中世土師器	無台小皿	4区層位不明	D376	ロクロ成形
24	中世土師器	有台小皿	4区層位不明	D417	ロクロ成形
25	中世土師器	有台小皿	4区層位不明	D276	ロクロ成形
26	中世土師器	有台小皿	4区層位不明	D375	ロクロ成形
27	中世土師器	小皿	4区層位不明	D418	非ロクロ成形
28	珠洲	片口鉢	4区層位不明	D532	
29	珠洲	壺	4区層位不明	D497	四耳壺？
30	土製品	陶錘	4区層位不明	D554	珠洲質
第51図1	弥生土器	甕	5区層1・2・4・5	C67	
2	弥生土器	高杯	5区層1・2・4・5	C65	
3	弥生土器	高杯	5区層1・2・4・5	C73	
4	弥生土器	器台	5区層1・2・4・5	C64	
5	弥生土器	底部	5区層1・2・4・5	C66	
6	土師器	把手	5区層1・2・4・5	D314	
7	中世土師器	無台椀	5区層1・2・4・5	D379	ロクロ成形
8	中世土師器	無台小皿	5区層1・2・4・5	D313	ロクロ成形
9	中世土師器	無台小皿	5区層1・2・4・5	D328	ロクロ成形
10	珠洲	大甕底部	5区層1・2・4・5	D424	
11	弥生土器	甕	5区層8・9	C70	
12	弥生土器	甕	5区層8・9	C71	
13	弥生土器	高杯	5区層8・9	C69	
14	中世土師器	無台椀	5区層10～14	D321	ロクロ成形
15	中世土師器	無台椀	5区層10～14	D323	ロクロ成形
16	中世土師器	無台椀	5区層10～14	D324	ロクロ成形
17	中世土師器	無台椀	5区層10～14	D325	ロクロ成形
18	中世土師器	無台椀	5区層10～14	D326	ロクロ成形
19	中世土師器	無台小皿	5区層10～14	D316	ロクロ成形
20	中世土師器	無台小皿	5区層10～14	D317	ロクロ成形
21	中世土師器	無台小皿	5区層10～14	D322	ロクロ成形
22	中世土師器	無台小皿	5区層10～14	D318	ロクロ成形
23	中世土師器	有台小皿	5区層10～14	D329	ロクロ成形
第52図1	中世土師器	無台椀	5区層17及び上位炭層	D526	ロクロ成形
2	中世土師器	無台椀	5区層17及び上位炭層	D426	ロクロ成形
3	中世土師器	無台椀	5区層17及び上位炭層	D382	ロクロ成形
4	中世土師器	無台椀	5区層17及び上位炭層	D442	ロクロ成形
5	中世土師器	無台椀	5区層17及び上位炭層	D301	ロクロ成形
6	中世土師器	無台椀	5区層17及び上位炭層	D521	ロクロ成形
7	中世土師器	無台椀	5区層17及び上位炭層	D384	ロクロ成形
8	中世土師器	無台小皿	5区層17及び上位炭層	D303	ロクロ成形
第52図9	中世土師器	無台小皿	5区層17及び上位炭層	D369	ロクロ成形
10	中世土師器	無台小皿	5区層17及び上位炭層	D368	ロクロ成形
11	中世土師器	無台小皿	5区層17及び上位炭層	D427	ロクロ成形
12	中世土師器	無台小皿	5区層17及び上位炭層	D528	ロクロ成形
13	中世土師器	無台小皿	5区層17及び上位炭層	D304	ロクロ成形
14	中世土師器	無台小皿	5区層17及び上位炭層	D302	ロクロ成形
15	中世土師器	無台小皿	5区層17及び上位炭層	D530	ロクロ成形
16	中世土師器	無台小皿	5区層17及び上位炭層	D305	ロクロ成形
17	中世土師器	無台小皿	5区層17及び上位炭層	D525	ロクロ成形
18	中世土師器	無台小皿	5区層17及び上位炭層	D519	ロクロ成形
19	中世土師器	無台小皿	5区層17及び上位炭層	D520	ロクロ成形
20	中世土師器	無台小皿	5区層17及び上位炭層	D524	ロクロ成形
21	中世土師器	無台小皿	5区層17及び上位炭層	D523	ロクロ成形
22	中世土師器	無台小皿	5区層17及び上位炭層	D306	ロクロ成形
23	中世土師器	無台小皿	5区層17及び上位炭層	D531	ロクロ成形
24	中世土師器	無台小皿	5区層17及び上位炭層	D330	ロクロ成形
25	中世土師器	無台小皿	5区層17及び上位炭層	D425	ロクロ成形
26	中世土師器	有台皿	5区層17及び上位炭層	D383	ロクロ成形
27	中世土師器	有台皿	5区層17及び上位炭層	D527	ロクロ成形
28	中世土師器	小皿	5区層17及び上位炭層	D441	非ロクロ成形
29	中世土師器	小皿	5区層17及び上位炭層	D522	非ロクロ成形？
第53図1	中世土師器	無台椀	5区下位遺構面直上層	D339	ロクロ成形
2	中世土師器	無台椀	5区下位遺構面直上層	D341	ロクロ成形
3	中世土師器	無台椀	5区下位遺構面直上層	D454	ロクロ成形
4	中世土師器	無台椀	5区下位遺構面直上層	D352	ロクロ成形
5	中世土師器	無台椀	5区下位遺構面直上層	D354	ロクロ成形
6	中世土師器	無台椀	5区下位遺構面直上層	D347	ロクロ成形
7	中世土師器	無台椀	5区下位遺構面直上層	D353	ロクロ成形
8	中世土師器	無台椀	5区下位遺構面直上層	D359	ロクロ成形
9	中世土師器	無台椀	5区下位遺構面直上層	D357	ロクロ成形
10	中世土師器	無台椀	5区下位遺構面直上層	D331	ロクロ成形
11	中世土師器	無台小皿	5区下位遺構面直上層	D338	ロクロ成形
12	中世土師器	無台小皿	5区下位遺構面直上層	D333	ロクロ成形
13	中世土師器	無台小皿	5区下位遺構面直上層	D310	ロクロ成形
14	中世土師器	無台小皿	5区下位遺構面直上層	D334	ロクロ成形
15	中世土師器	無台小皿	5区下位遺構面直上層	D348	ロクロ成形
16	中世土師器	無台小皿	5区下位遺構面直上層	D298	ロクロ成形
17	中世土師器	無台小皿	5区下位遺構面直上層	D345	ロクロ成形
18	中世土師器	無台小皿	5区下位遺構面直上層	D335	ロクロ成形
19	中世土師器	無台小皿	5区下位遺構面直上層	D319	ロクロ成形
20	中世土師器	無台小皿	5区下位遺構面直上層	D336	ロクロ成形
21	中世土師器	無台小皿	5区下位遺構面直上層	D337	ロクロ成形
22	中世土師器	無台小皿	5区下位遺構面直上層	D315	ロクロ成形
23	中世土師器	無台小皿	5区下位遺構面直上層	D452	ロクロ成形
24	中世土師器	無台小皿	5区下位遺構面直上層	D349	ロクロ成形
25	中世土師器	無台小皿	5区下位遺構面直上層	D343	ロクロ成形
26	中世土師器	無台小皿	5区下位遺構面直上層	D332	ロクロ成形
27	中世土師器	無台小皿	5区下位遺構面直上層	D342	ロクロ成形
28	中世土師器	無台小皿	5区下位遺構面直上層	D344	ロクロ成形
第54図29	中世土師器	有台小皿	5区下位遺構面直上層	D312	ロクロ成形
30	中世土師器	有台小皿	5区下位遺構面直上層	D356	ロクロ成形
31	中世土師器	有台小皿	5区下位遺構面直上層	D351	ロクロ成形
32	中世土師器	有台小皿	5区下位遺構面直上層	D308	ロクロ成形
33	中世土師器	有台小皿	5区下位遺構面直上層	D350	ロクロ成形
34	中世土師器	有台小皿	5区下位遺構面直上層	D311	ロクロ成形
35	中世土師器	有台小皿	5区下位遺構面直上層	D355	ロクロ成形
36	中世土師器	有台小皿	5区下位遺構面直上層	D309	ロクロ成形
37	中世土師器	有台小皿	5区下位遺構面直上層	D340	ロクロ成形
38	中世土師器	有台小皿	5区下位遺構面直上層	D358	ロクロ成形

第23表　出土遺物一覧（４）

挿図No.	遺物種類	器種	出土遺構	実測No.	備考
第54図39	中世土師器	有台小皿	5区下位遺構面直上層	D346	ロクロ成形
第55図1	弥生土器	甕	5区下位遺構面直上層	C63	
2	弥生土器	高杯	5区下位遺構面直上層	C68	
3	弥生土器	高杯	5区層位不明	C74	
4	須恵器	無台杯	5区層位不明	D360	
5	中世土師器	無台椀	5区層位不明	D370	ロクロ成形
6	中世土師器	無台椀	5区層位不明	D381	ロクロ成形
7	中世土師器	無台椀	5区層位不明	D320	ロクロ成形
8	中世土師器	無台椀	5区層位不明	D366	ロクロ成形
9	中世土師器	無台椀	5区層位不明	D361	ロクロ成形
10	中世土師器	無台椀	5区層位不明	D363	ロクロ成形
11	中世土師器	無台椀	5区層位不明	D367	ロクロ成形
12	中世土師器	無台椀	5区層位不明	D415	ロクロ成形
13	中世土師器	無台小皿	5区層位不明	D364	ロクロ成形
14	中世土師器	無台小皿	5区層位不明	D362	ロクロ成形
15	中世土師器	無台小皿	5区層位不明	D371	ロクロ成形
第56図1	中世土師器	無台椀	6区層9及び下位炭層	D387	ロクロ成形
2	中世土師器	無台小皿	6区層9及び下位炭層	D385	ロクロ成形
3	中世土師器	無台小皿	6区層9及び下位炭層	D389	ロクロ成形
4	中世土師器	無台小皿	6区層9及び下位炭層	D388	ロクロ成形
5	中世土師器	有台小皿	6区層9及び下位炭層	D390	ロクロ成形
6	中世土師器	有台小皿	6区層9及び下位炭層	D386	ロクロ成形
7	須恵器	杯蓋	6区下位遺構面直上層	D391	
8	中世土師器	無台椀	6区下位遺構面直上層	D395	ロクロ成形
9	中世土師器	無台椀	6区下位遺構面直上層	D396	ロクロ成形
10	中世土師器	無台小皿	6区下位遺構面直上層	D392	ロクロ成形
11	中世土師器	無台小皿	6区下位遺構面直上層	D397	ロクロ成形
12	中世土師器	無台小皿	6区下位遺構面直上層	D398	ロクロ成形
13	中世土師器	無台小皿	6区下位遺構面直上層	D393	ロクロ成形
14	中世土師器	無台小皿	6区下位遺構面直上層	D394	ロクロ成形
第57図1	弥生土器	甕	6区層位不明	C78	
2	弥生土器	甕	6区層位不明	C82	
3	弥生土器	壺	6区層位不明	C77	
4	弥生土器	壺	6区層位不明	C76	
5	弥生土器	壺	6区層位不明	C75	
6	弥生土器	底部	6区層位不明	C85	
7	弥生土器	高杯	6区層位不明	C79	
8	弥生土器	高杯	6区層位不明	C81	
9	弥生土器	脚部	6区層位不明	C80	
10	土師器	有台椀	6区層位不明	D380	
第58図1	弥生土器	壺	地区・層位不明	C84	
2	土師器	底部	地区・層位不明	C87	
3	土師器	高杯	地区・層位不明	C83	
4	須恵器	無台杯	地区・層位不明	D401	
5	中世土師器	無台椀	地区・層位不明	D406	ロクロ成形
6	中世土師器	無台椀	地区・層位不明	D365	ロクロ成形
7	中世土師器	無台小皿	地区・層位不明	D408	ロクロ成形
8	中世土師器	無台小皿	地区・層位不明	D413	ロクロ成形
9	中世土師器	無台小皿	地区・層位不明	D400	ロクロ成形
10	中世土師器	無台小皿	地区・層位不明	D402	ロクロ成形
11	中世土師器	無台小皿	地区・層位不明	D409	ロクロ成形
12	珠洲	壺	地区・層位不明	D405	
13	白磁	皿	地区・層位不明	D404	
14	土製品	土錘	地区・層位不明	D551	
第60図1	木製品	下駄	2区段	木48	
2	木製品	下駄	2区層15及び上位炭層	木52	
第61図1	木製品	下駄	2区層19	木49	
2	木製品	下駄	4区下位遺構面直上層	木51	
第62図1	木製品	下駄	4区下位遺構面直上層	木47	
第62図2	木製品	下駄	4区下位遺構面直上層	木53	「露卯下駄」
第63図1	木製品	箸	2区層19	木63	「両口箸」
2	木製品	箸	2区層19	木65	「両口箸」
3	木製品	箸	2区層19	木66	「両口箸」
4	木製品	箸	4区下位遺構面直上層	木61	「両口箸」
5	木製品	箸	4区下位遺構面直上層	木62	「両口箸」？
6	木製品	箸	4区下位遺構面直上層	木59	「両口箸」？
7	木製品	箸	竪穴	木67	
8	木製品	箸	4区下位遺構面直上層	木60	「両口箸」？
9	木製品	箸	2区層19	木64	
10	木製品	箸	竪穴	木68	
第64図1	木製品	底板	2区層20・21	木69	
2	木製品	底板	4区下位遺構面直上層	木70	
3	木製品	底板	4区下位遺構面直上層	木73	目釘穴（？）有
4	木製品	底板	4区下位遺構面直上層	木71	
5	木製品	底板	4区下位遺構面直上層	木72	
6	木製品	漆器	4区下位遺構面直上層	木74	目釘穴（？）有
第65図1	木製品	船形	3区下位遺構面直上層	木50	
2	木製品	剣形？	3区層17	木58	
第66図1	石器	石鏃	1区層5～8	石44	
第67図1	石器	磨製石斧	3区層1～3・5～13	石43	
2	石器	磨製石斧	1～2区層位不明	石15	
3	石器	石庖丁	4区層8・11	石25	打製品
4	石器石製品	焼石	4区層8・11	石23	被熱
5	石器石製品	焼石	4区層8・11	石22	被熱
6	石器石製品	焼石	地区・層位不明	石39	被熱
7	石器石製品	焼石	地区・層位不明	石40	被熱
8	石器	敲石類	6区層位不明	石32	被熱
第68図1	石器	敲石類	2区層1	石18	被熱
2	石器	敲石類	6区層位不明	石31	被熱
3	石器	敲石類	2区層1	石13	
4	石器	敲石類	地区・層位不明	石36	
5	石器	敲石類	2区層18・19	石14	
6	石器	敲石類	5区下位遺構面直上層	石35	
7	石器	敲石類	1区層5～8	石12	
8	石器	敲石類	4区層位不明	石24	
第69図1	石器	敲石類	4区層位不明	石41	
2	石器	敲石類	地区・層位不明	石38	
3	石器	敲石類	地区・層位不明	石37	
4	石器	敲石類	6区層位不明	石33	
5	石器	敲石類	5区層位不明	石30	
6	石器	敲石類	1～2区層位不明	石16	
7	石器	敲石類	3区下位遺構面直上層	石20	
8	石器	敲石類	3区層位不明	石19	
第70図1	石器	敲石類	4区下位遺構面直上層	石26	
2	石器	敲石類	4区層6・8	石27	
3	石器石製品	軽石	5～6区層位不明	石29	
4	石器石製品	軽石	6区層位不明	石34	
5	石器石製品	軽石	4区層6・8	石21	
6	石器石製品	軽石	2区層18・19	石17	
7	石製品	石鍋	3区層15・16	石28	温石に転用
第71図	石器	台石	1区下位遺構面	石45	
第72図1	土製品	鞴羽口	2区層18・19	D465	
2	鉄滓	椀形滓	2区層18・19	金46	温石に転用
3	銭貨	北宋銭	地区・層位不明	金55	「天禧通寶」
4	銭貨	北宋銭	竪穴	金56	「元豊通寶」
5	銭貨	江戸銭	付近採集品	金57	「寛永通寶」

「出土遺構」の層位は全て第26図に対応する。

滓であり、１区から５区の各層から広範囲に出土している。この他、鞴の羽口や炉壁も出土しており、やはり製鉄・鍛冶に関係する遺物としてまとめた。銭貨は貝田地区内で採集されたものを含めて、計３点が確認されている。自然遺物は主に種子・種実である。なお、銭貨については芝田悟氏に、自然遺物については川端敦子氏に教示を得ている。

第72図１・２は２区第26図層18・19から出土した。１は鞴の羽口の一部であり、外径９cm、内径４cm程度を測り、大型の部類に含まれる。スサと推定される植物質が混和された粗い粘土からなり、内外面に残滓や灰、炭が溶解して付着している。２は椀形の鉄滓である。この形状は出土した鉄滓中でただ１点のみであり、群を抜いて大きく、重い。直径14cm程度で、鉄分が多い錆色の部分と少ないガラス状の部分と炭が溶結してできており、底面は４～５mmの厚さの砂が溶着して被覆している。この種の鉄滓は、一般的に鍛冶炉において鉄素材が精製される際に生じ、素材が取り出された後、炉底に付着するとされている[23]ものである。よって底を被覆する砂は炉壁と判断できる。８世紀後半頃の時期を上限とする精錬鍛冶滓もしくは鍛錬鍛冶滓と考えている。

第72図３～５は銭貨で、銅銭である。３は出土地区が不明の品で、右側面を一部欠損している。北宋銭の天禧通寶であり、初鋳年代は天禧年間（1017～1021年）である。銭径2.55cm、重さ1.6gを測る。４は竪穴出土で、北宋銭の元豊通寶である。字体は篆書体であり、初鋳年代は1078年である。銭径2.4cm、重さ3.1gを測る。５は貝田地区の畑地で採集され保管されていた品であるが、この機会を借りて紹介したい。寛永通寶であり、字体から新寛永で、1668年以降に鋳造されたものと判断される。銭径2.4cm、重さ2.75gを測る。

種子・種実はモモ、トチノミが確認されている。うち、量的に多いのはモモの種子であり、１区～６区にかけて広範囲に分布し、合計50点前後が出土しているが、概ね木質の残りの良い堆積層の下位、及び４区周辺に集中している。全てペルシカ種である。トチノミは竪穴、２区段、２区第26図層15、３区下位遺構面直上層からそれぞれ１点ずつ出土している。

（５）遺物小結

ここまで紹介してきた通り、南調査区で出土した遺物は実に多種多様であり、時期的にも弥生時代から中世にかけて幅広く認められる。ここでは、各時代の遺物の年代を中心にまとめるが、時期比定が容易な土器についてまず述べた後、その他の遺物について土器との共伴関係から年代を考える事にしたい。

弥生土器

弥生土器の大半は、調査区北方の丘陵上からの２次堆積層と理解される茶鉄粘層・黄粘層から出土しており、確認した遺構に伴うものはない。１～６区全てで確認されており、甕、壷、高杯、器台、鉢等の器種が揃っている。甕は有段口縁甕とくの字口縁甕に大別され、両種に量的な差は見いだしがたい。他、第51図11など擬凹線を持つ断面三角形口縁甕が小数ある。有段口縁甕については無文の口縁帯を持つものが多く、擬凹線を施すものはわずかである。擬凹線を持つ有段口縁甕の少なさは能登地方の特質の一つであり、当遺跡も例外ではない。壷は、広口壷、長頸壷、装飾壷があり、サイズ、形態の両面でバラエティーに富む構成である。高杯は口径30cm前後の大型で有段の杯部を持つものでほぼ占められる。脚部は有段のものと無段のものがあるが、総じて厚手でしっかりした作りである。無段脚は外反してラッパ状にひらくものと「ハ」字に直線的にひらくものがあり、後者は端を複雑に折り返す形態を取る。器台は量的には少ない。確実なものは第37図２の環状把手を付す丹後系の器台、第41図４の擬凹線を持つ山陰系の鼓型器台ぐらいである。鉢は、第38図１、第41図３など大型で有段口縁を持ち、脚台が付く可能性を持つものが目立つ。南調査区出土の弥生土器は前述した出土状況から一括性は低いのであるが、各土器の形態は概ね弥生時代でも後期後半、北加賀の法仏式並行期の範疇にほぼ限定することが可能と思われ、後期後半期の土器組成と捉らえてもほぼ矛盾しないものと考える。

さて、後期後半期の新古相への位置付けについては、甕については変化が緩慢な能登地方において、時期を細

かく特定することは難しい状況にある。しかし第51図11など古相の資料は確実に存在しており、一方で新相の特徴的な資料は見いだせない。高杯、器台、鉢については変化が比較的明確であり、前述した形態を中心にして後期後半期の中でも古相に位置付けられる資料が多く、これと対照的に新相を示す資料はほぼ見られない。ここでは変化が明確な器種を重視して推移を捉えるべきものと考え、南調査区出土の弥生土器について、弥生時代の後期後半期の古相に中心を持つ資料と類推したい。

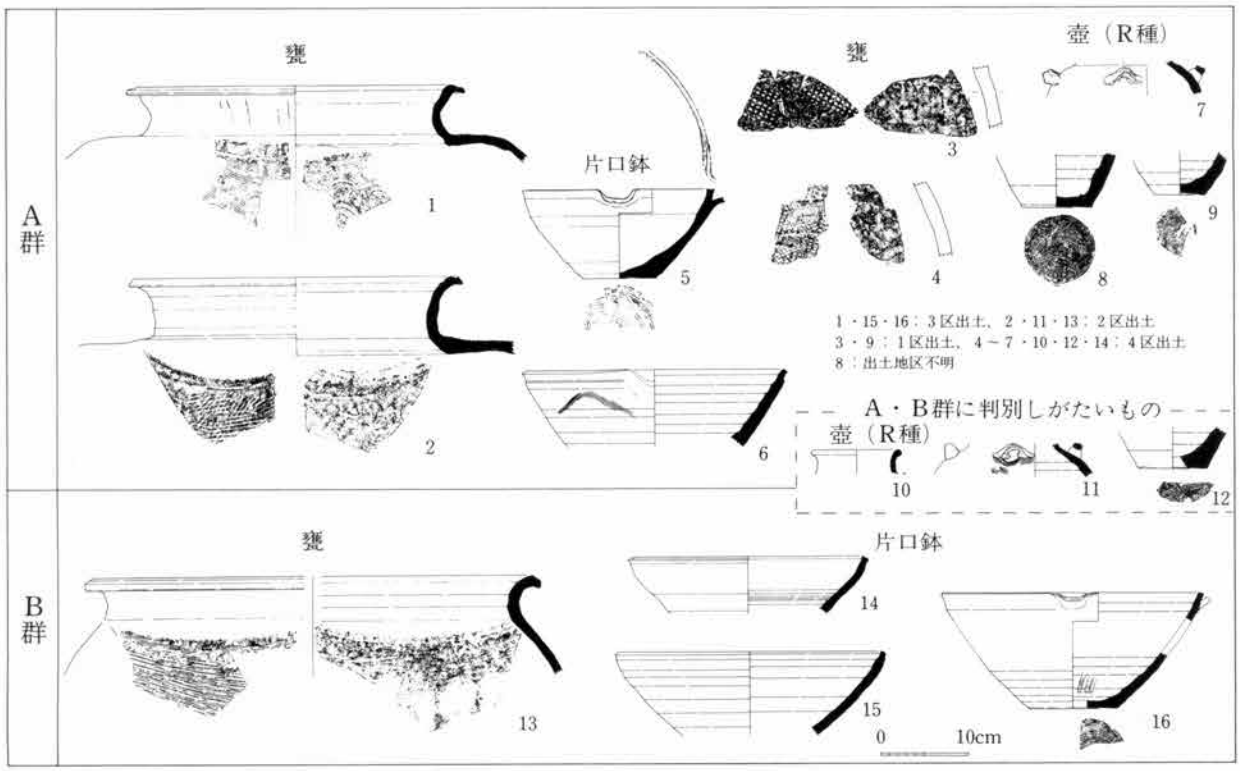
土師器

土師器は、古墳時代に属するものと平安時代に属するものに二分される。弥生土器と同様に茶鉄粘層・黄粘層から出土したものが大半であり、やはり一括性は低い。古墳時代の土師器は甕、椀、高杯、手捏土器、甑の把手等が出土しているが、弥生土器に比べて量的には少なく、図化も数点のみにとどまった。位置的には１区から比較的よく出土している。器種的には高杯が多い。高杯は粗製で脚部が中空のもので占められており、時期は概ね５世紀代であろう。椀と甑把手についてはそれらが顕在化する６世紀代の時期と考えられる。

平安時代の土師器は量的には多くないが、後半期の食膳具、特に有台椀でほぼ占められる。有台椀は内面がヘラミガキされるタイプを概ね10世紀後半～11世紀前半の時期としてこの時代に含め、粗製化した11世紀後半以降のタイプと区別した。２区～４区・６区で見られ、第39図２・３、第44図２、第50図５、第57図10が相当する。

須恵器

須恵器は、白鳳時代、平安時代に属するものを中心に認められる。古墳時代、奈良時代の須恵器は特徴的なものが見いだせず、その存在は確実ではない。量的には多くなく、出土地区・層位のまとまりも顕著でない。白鳳時代の須恵器は少量ながら無台杯、杯蓋がある。第38図７と８は７世紀後半代のいわゆる杯Ｇの蓋身のセットをなすと思われる。平安時代の須恵器は無台杯、杯蓋、甕がある。無台杯はいわゆる杯Ａ、杯蓋は杯Ｂ蓋であり、時期的には８世紀末から９世紀前半代にほぼおさまる資料である。甕は、図化しえなかったが、外面平行線・内面同心円のタタキ・あて具調整の一般的な品の他に、内外面平行線文のものが見られた。10世紀以降の品と思われる。須恵器の産地は白鳳期、平安期を通じて鳥屋窯跡群を主とするが、近隣の羽咋窯、志賀窯、富来窯など羽



第73図　南調査区出土珠洲分類図（S＝1／9）

咋郡北部の窯跡からも一定量の供給があったようである。

陶磁器

陶器は珠洲が中心であるが、産地が不明なものも定量存在し、ごく少量ながら越前らしい製品も見られる。磁器は白磁と青磁が中心である。陶磁器については全点を計量し[24]、量比を第24表～第26表に示した。

珠洲は１～６区で広く出土しており、中世土師器との共伴が明確な製品も存在する。甕、壷、片口鉢を基本的な器種とするが、形態的に古いものが多く、先に述べてきたとおり大半が吉岡編年の珠洲Ｉ期[8]に位置付けられる。珠洲II期以降の製品はごく断片的な存在と言える。珠洲Ｉ期の製品はさらに、形態・胎土・焼成の特徴から、２つのグループに大別する事が可能である。ここで珠洲A群、同B群と表記する両群の特徴は以下の通りである。

珠洲Ａ群：精緻な粘土を用いて大粒の砂礫を含む胎土、きわめて堅緻な焼成、シャープな稜をなす形態

珠洲Ｂ群：細粒で緻密な砂礫をよく含み砂っぽい質感の胎土、やや甘く軟質な焼成、鈍い稜をなす形態

Ａ群には甕で第40図８・第45図・第48図10、壷で第38図18・第46図26、片口鉢で第48図11・第50図28などがあてはまる。Ｂ群には甕で第40図９、片口鉢で第41図11・12・第46図13などがあてはまる。このグルーピングは、

第24表　貝田遺跡南調査区出土白磁計測表（破片数計測による、単位点）

碗				皿		その他	不明破片	合　計
II類	IV類	V～VIII類	IX類	II～VIII類	IX類	壷など	大半は碗？	
1	7	11	0	8	0	1	12	40

第25表　貝田遺跡南調査区出土青磁計測表（破片数計測による、単位点）

同安窯系			龍泉窯系				不明破片	合計
碗	皿	小計	劃花文碗	割花文皿	鎬蓮弁文碗	小計	龍泉か？	
2	0	2	6	0	1	7	1	10

第26表　貝田遺跡南調査区出土陶器計測表（破片数計測・口縁残存値計測併用）

	珠洲					越前	産地不明	合　計
	甕	壷	片口鉢	不明	小計	甕	大半は甕	
胎土Ａ	105(0.21)	18(0.86)	35(1.28)	10(0.0)	168(2.35)	0(0)	0(0)	168(2.35)
胎土Ｂ	26(0.5)	8(0.14)	27(0.31)	12(0.0)	73(0.95)	0(0)	0(0)	73(0.95)
その他	0(0)	0(0)	2(0.03)	22(0.0)	24(0.03)	7(0.0)	14(0.0)	45(0.03)
合　計	131(0.71)	26(1.0)	64(1.62)	44(0.0)	265(3.33)	7(0.0)	14(0.0)	286(3.33)

（表内の数値は左が破片数で単位片、右の（　）内が口縁残存値で単位個体）

能登地域のほぼ同時期の消費遺跡である鹿島町水白モンショ遺跡出土の珠洲資料にもほぼ対応させて行う事が可能と思われ、珠洲の時期や産地、流通を詳細に知る手掛かりとなり得る。しかしよりミクロな視点では両群中にもさらに形態、胎土、焼成とそれらの組み合わせにかなりバラエティーが存在するようであり、今後検討を要するものと思われる。また、例えば四耳壷などＲ種壷については全般に胎土精良・焼成良好な品が多く、Ａ・Ｂ群を判別しにくいなど、器種に応じても差異が生じている点も注意すべきであろう。

Ａ群とＢ群の形態差については、珠洲Ｉ期の中での時期差を示すものであろう。吉岡康暢氏は珠洲Ｉ期をI_1～I_3の三小期に細分し、I_1期は富山県福光町梅原胡麻堂遺跡Ａ地区ＳＫ309など消費遺跡資料、I_2期は珠洲市寺社カメワリ坂１・２号窯、I_3期は珠洲市寺家クロバタケ３・１号窯の窯資料をそれぞれ標式とした[25]。その形態を南調査区資料と比較すると、Ａ群の特徴はI_1～I_2期の製品、Ｂ群の特徴はI_2～I_3期の製品に概ね合致する事から、I_2期を接点として概ねＡ群を古相、Ｂ群を新相とする位置付けが可能となろう。よって、当調査区出土の珠洲は、Ａ群が12世紀中葉～後半、Ｂ群が12世紀後半～末頃と想定する。I_1期の珠洲は窯資料が確認されておらず、梅原胡麻堂遺跡など数箇所の消費遺跡資料でのみ見る事ができる存在である。南調査区のI_1期の製品には、Ａ群の中で片口鉢の器形、サイズや甕の内面調整などに珠洲定型化前の特徴を色濃く残す第45図の大甕、第48図11の片口鉢などを比定したい。数少ない該期の良好な資料になるものと考える。

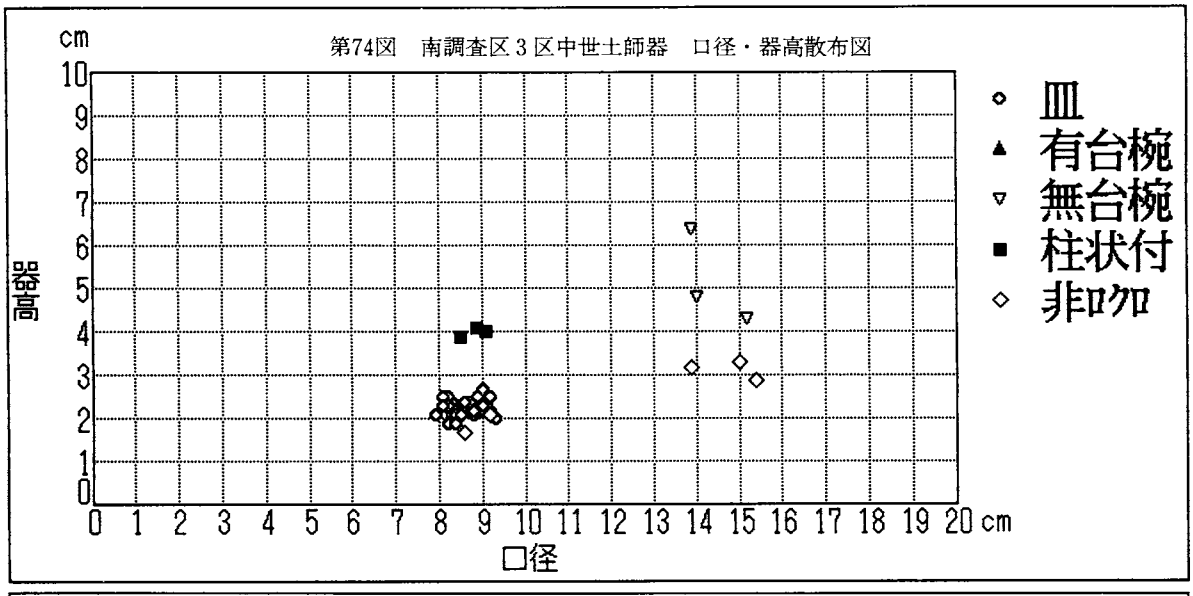
Ａ群とＢ群の胎土・焼成の違いについては時期差も関係するであろうが、製品が生産された珠洲窯及び工人の系譜の違いを示すものと思われる。Ａ群の質感はＩ期の珠洲窯では宝立支群の寺社カメワリ坂窯の製品に近いものが認められ、Ｂ群の質感は三崎支群の寺家クロバタケ窯の製品に近いものと思われる。よって、Ａ・Ｂの両群はそれぞれの窯小群もしくは窯支群内で生産された製品である可能性が高くなる。前述した通り、寺社カメワリ坂窯はI_2期、寺家クロバタケ窯はI_3期を中心時期としており、両窯の時期差はＡ群・Ｂ群の形態から見た時期差に概ね一致するので、今回の観察で得た質感を積極的に評価したい。Ａ群、Ｂ群はともに若干窯資料に先行する時期幅をもつようであるが、その要因として珠洲窯の小群、支群内の未確認窯での生産を考えておきたい。

珠洲の、主要器種の組成比については第26表に示した通りである。Ａ・Ｂ群の別では破片数で陶器全体の約59％、口縁残存値で約71％を占めるＡ群が多く、Ｂ群の倍以上に上っている。よって、貝田遺跡南調査区の珠洲資料はＡ群の存在を重視して、12世紀中葉～後半頃に中心時期を置くものと思われる。主要器種の別では、片口鉢が破片数で珠洲全体の約24％、口縁残存値で約49％と比較的多く、逆に壷は少ない傾向が読み取れる。

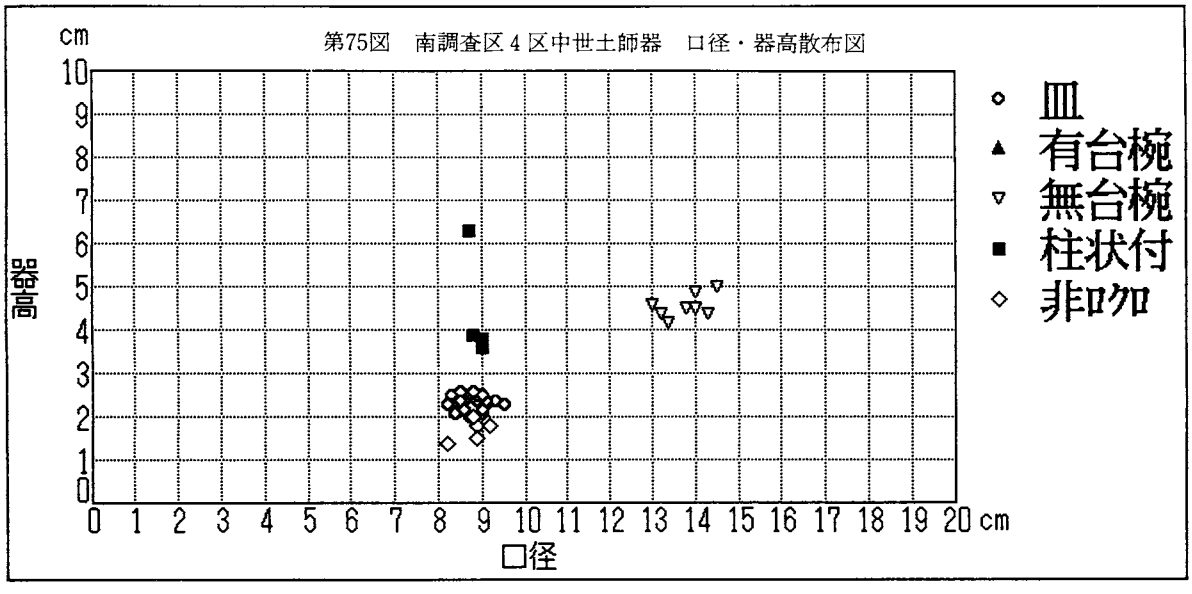
越前については第46図14の甕を特定した。産地不明陶器は主に甕の胴部破片で見られ、前述の越前に似た胎土・質感を有する群や、胎土に大粒の長石を含み器面が湿ったような質感を有する特徴的な群が見られる。おそらくは北陸でその流通が把握されていない地方窯の製品と思われるが、詳細は不明である。

南調査区内で中世土師器等と共伴するなど良好な出土状況の珠洲は、３区第26図層15・16で珠洲甕、３区下位遺構面直上層の珠洲甕、４区下位遺構面直上層の珠洲甕・同片口鉢・産地不明陶器があげられる。これら珠洲は概ねＡ群に限定でき、堆積層・遺構面の形成時期を示すものと言える。Ｂ群以降の後出的な珠洲はほぼ単独出土である。

白磁は２区から５区にかけて40点が出土している（第24表）が、その大半は小破片である。白磁の器種は碗、皿、壷があり、碗が多く全体の50％近くを占め、次いで皿が多く、壷はごく小数である。白磁碗では玉縁口縁を持つⅣ類と、端反口縁を持つⅤ類が主体となり、他の種類はごく小数しかない。青磁は２区から４区にかけて10点が出土しており（第25表）、白磁と同様にほとんどが小破片である。器種はほぼ碗のみであり、龍泉窯系が主体で、同安窯系は２点と少ない。龍泉窯系碗は劃花文を施す古相のものが大半であり、鎬蓮弁文を持つ新相のものも１点ある。時期的には白磁は12世紀代、青磁は同安窯系・龍泉窯系古相で12世紀中葉から13世紀代、龍泉窯系新相で14世紀代の時期幅を持つ。しかし量的には白磁が圧倒的に多いことから12世紀代が中心時期と判断できる。南調査区内では、３区層15・16で白磁、３区下位遺構面直上層で白磁碗Ⅳ類と青磁同安窯系碗と青磁龍泉窯



第74図　南調査区３区中世土師器　口径・器高散布図



第75図　南調査区４区中世土師器　口径・器高散布図

系碗、４区下位遺構面直上層で白磁碗が中世土師器等と共伴しており、概ね12世紀代に属する磁器は堆積層・遺構面の形成時期に矛盾しない出土状況を示すものと言える。13世紀代以降の後出的な磁器はほぼ単独出土である。

この他の陶磁器は小数、小破片であり、山茶碗、肥前陶磁器を除いては産地など詳細な情報が得られるものはない。山茶碗は12世紀代に東海から搬入された製品である。東海からの搬入経路が存在していたとするならば渥美、常滑系の陶器がもたらされている可能性があり、先述した産地不明陶器の中に含まれている可能性もあろう。

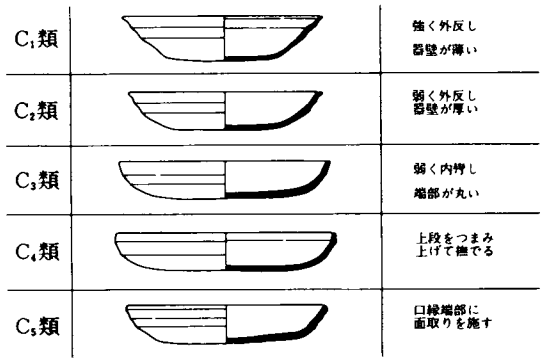
中世土師器

中世土師器は圧倒的な量が出土しており、南調査区出土遺物の主体を占める。地区的には１区～６区に満遍なく分布し、層位的にも大半の層が中世土師器を出土する状況である。各層の中でまとまった量を一括性が高い状況で出土した堆積層は３区第26図層15・16、５区第26図層17、３区・４区・５区の下位遺構面直上層にほぼ限定され、それら以外の各層からは比較的少量ずつの出土状況であった。ここではまとまりのある各資料について、形態、組成、共伴陶磁器、そして相互の比較、層位関係等から時期的な位置付けを考えてみたい。

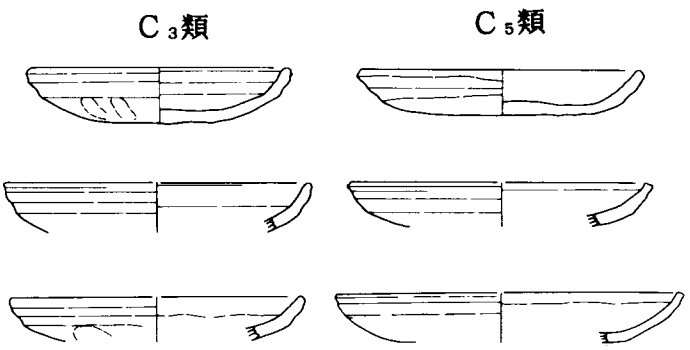
まず中世土師器の組成であるが、基本的な器種は椀と皿であり、主にロクロ成形の無台椀と無台小皿を中心にして、これにロクロ成形の有台小皿、非ロクロ成形の皿・小皿等が少量加わるというシンプルな組成で、共通している。組成の主体となるロクロ成形無台椀と無台小皿の量比については、資料毎にややばらつきがあるが、概

ね前者１に対して後者２の割合となり、小皿が多い。成形についてはロクロ成形が圧倒的に多い。ロクロ成形土師器は、平安時代の椀・皿の繊細で、薄手、軽量、小底径の特徴的な作りをほぼ失っており、逆に維持されたものがよく見られる第２次発掘調査No.11・12地区資料などに確実に後出する、12世紀代の資料が大半であろう。一方、全資料を通して、形態的にきわめて規格性が高く、口縁部端のナデ・面取り等の技法でも共通性が高い傾向が顕著に指摘できる。サイズ的には各資料の口径と器高の散布図を作成し、３区は層15・16資料と下位遺構面直上層資料を合わせて第74図に、４区下位遺構面直上層資料は第75図に、５区は層17資料と下位遺構面直上層資料を合わせて第100図に示したが、無台椀、小皿ともばらつきが少なく、集約度がきわめて高い、非常によく似た傾向を示す。以上から、各資料の組成及び形態、サイズについてはほとんど差がなく、きわめて特徴的な様相を示すものと見てよかろう。

さて、南調査区資料の位置付けについては、まず加賀も含めた県内資料と形態や組成を比較し、大まかな時期と、相対的な先後関係を示してみたい。能登地域で、比較が可能な資料は穴水町西川島遺跡群御館遺跡SK13資料[26]にほぼ限られよう。西川島遺跡群の最古期の様相を示すこの資料は、12世紀後半代に位置付けられており、組成的には非ロクロ成形品を欠く点以外では南調査区資料にほぼ共通する。ロクロ成形土師器はよく似た形態をとるものの、厚手で、底径が大きい、後出的なタイプとなっており、南調査区各資料では少なく、やや後出的な様相を示す。よって南調査区資料の時期的な下限はこの資料に求めたい。加賀地域の資料では、小松市白江梯川遺跡412号井戸資料[27]は12世紀中葉に位置付けられており、組成的には非ロクロ成形土師器を欠くが、ロクロ成形土師器は規格性が高い無台椀、無台小皿に器種がほぼ集約され、有台品が少量伴っており、南調査区資料に共通する。ただし、ロクロ成形土師器の形態を比較すると、白江梯川遺跡412号井戸資料は底部が円柱部をわずかに残した作りで、口縁部端のナデ・面取りが顕著でない点、それが主体的な存在とならない南調査区資料との間に違和感がある。白江梯川遺跡の様相は、隣接する小松市漆町遺跡群金屋サンバンワリ地区100号土坑[28]でも見られ、同じ時期に位置付けられている。両遺跡は南加賀地域に位置するため、この形態差が時期差なのか地域差なのかを検証するにはさらに多くの遺跡例を参照する必要があると考え、一括性が低く時期幅を持つ資料であるが、中島町オカ遺跡資料[29]、鹿島町水白モンショ遺跡資料[30]、七尾市藤橋遺跡ピット141資料[31]と比較した。その結果、オカ遺跡資料は底部円柱部がほとんど見られず、南調査区資料に近い形態であった。水白モンショ遺跡資料、藤橋遺跡ピット141資料は南調査区資料に近いもの、白江梯川遺跡412号井戸資料・漆町遺跡100号土坑資料に近いものの両方が見られ、中間的な様相であった。全体的に良好な資料が少なく判然としないものの、以上の比較から、時期差よりも地域差の要素が強いように感じられ、加賀地域と能登地域のロクロ成形土師器は、さらに小地域レベルで形態的な様相差を持ちながら、ほぼ同じ器種組成を取るものと捉えたい。よって、南調査区資料と白江梯川遺跡412号井戸資料は、主体とする時期をかなり近くするものと考える。以上の各遺跡資料の対比から、12世紀代のロクロ成形土師器はきわめて在地色の強い存在であり、地域間・遺跡間の比較では厳密な時期比定が難しい状況が明確になった。ロクロ成形土師器



第76図　非ロクロ成形二段ナデ手法土師器の分類
（S＝1／4）



第77図　鹿島郡中島町オカ遺跡出土
非ロクロ成形二段ナデ手法土師器（その一部、S＝1／4）

の時期的な位置付けを考えるには、時期比定が容易な陶磁器や紀年銘資料等の共伴遺物に恵まれ、組成的にも充実した、地域差の小さい一括出土資料による編年網が必要と考える。南調査区資料中のロクロ成形土師器は、組成、形態から概ね12世紀代、中でも12世紀中葉～後半代を中心時期として位置付けておきたい。

南調査区資料中の非ロクロ成形土師器についてはその全てを図示しえなかったが、基本的に検討の対象とする全ての資料にごく少量ずつながら存在する。非ロクロ成形土師器については、宇野隆夫氏が京都府京都市白河北殿北辺遺跡で行った形態分類と計量分析の成果があり、二段ナデ手法の非ロクロ成形土師器をＣ類（第76図）、一段ナデ手法のものをＤ～Ｆ類とあらわし、それぞれをさらに細分している[32]。南調査区資料の形態、時期の比定についても同氏の論考に負うところが大きい。南調査区資料には一段ナデ手法をとる品、二段ナデ手法をとる品の両方が認められる。県内には類例が少ない二段ナデ手法の非ロクロ成形土師器は３区層15・16資料、３区下位遺構面直上層資料に存在しており、前者資料では皿に認められ、一段ナデ手法の小皿と共伴する。後者資料では皿と小皿が認められ一段ナデ手法製品は含んでいない。４区下位遺構面資料は二段ナデ手法品をもたず、一段ナデ手法品で占められている。南調査区の二段ナデ手法は口縁部端に面取りを行うタイプであり、宇野分類のC_5類に相当するものであろう。C_5類は二段ナデ手法の末期的なタイプであり、平安京Ⅳ期中段階、すなわち12世紀中葉に盛行し、一段ナデ手法のＤ類と共伴する。同Ⅳ期の新段階においては二段ナデ手法は減少、形骸化している。C_5類を含む３区資料は一段ナデ手法の土師器とも共伴しており、平安京Ⅳ期中段階の様相にきわめてよく似るものと言えよう。南調査区の一段ナデ手法品は宇野分類のＤ類に相当するが、３区から５区において出土している形態差・サイズ差に乏しい小皿を中心とする一群と、２区出土の第40図３・４など明らかに後出的な形態の一群に大別でき、量的には前者が圧倒的に多い。前者の一群は二段ナデ手法品と共伴することから12世紀代を中心時期に定められ、後者の形態は12世紀末から13世紀以降に小松市白江梯川遺跡409号井戸[28]等で顕著に見られるので、前者を古相、後者を新相として扱う事ができる。よって前述した多量のロクロ成形土師器と共伴するものは古相の一群と判断される。また、第52図29の様にロクロ成形品をかなり意識したタイプについては、12世紀末とされる石川郡鶴来町白山町遺跡７号土坑[33]でまとまって出土している程度で、類例が少ない。第52図29については前者の一群と共伴していることから、新古相の接点を示す資料となる可能性があると思われる。

さて、二段ナデ手法をとる非ロクロ成形土師器は、北陸では12世紀代に京都系土師器として能登地域、越中地域で散見される。従来は、能登では中島町オカ遺跡、越中では福光町梅原胡麻堂遺跡などで確認されている程度であった。オカ遺跡例（第77図）は宇野分類では口縁部端の丸いC_3類、端をつまみあげるC_4類、面を取るC_5類に相当し、C_4類とC_5類の中間的なタイプ、形骸化したタイプも存在する。オカ遺跡資料そのものは12世紀代を超える時期幅をもつが、C_3類製品については12世紀前半代以前に比定でき、北陸では最古の部類に含まれよう[34]。その他の品は12世紀中葉～後半代に降るであろう。梅原胡麻堂Ａ地区ＳＫ309資料[35]はロクロ成形土師器と同等かそれを凌ぐ量が確認されており、共伴する珠洲から12世紀中葉の年代が与えられている。宮田進一氏は越中の中世土師器編年の中で12世紀中葉～後半代の指標として、二段ナデ手法の非ロクロ成形土師器の出現を掲げている[36]。南調査区資料の非ロクロ成形土師器は、オカ遺跡の最古段階までは遡らず、梅原胡麻堂遺跡Ａ地区資料、平安京Ⅳ期中段階にほぼ並行するものと考える。両遺跡例は12世紀中葉頃には二段ナデ手法の非ロクロ成形土師器が確実に存在するという点で、南調査区の様相に似るものと言える。一方加賀地域では現在までのところ12世紀中葉の段階では、前述した白江梯川遺跡412号井戸資料を始めとして二段ナデ手法は確認されておらず、非ロクロ成形土師器の共伴例もない。非ロクロ成形土師器の初現は12世紀後半代に位置付けられている白江梯川遺跡410号井戸の一段ナデ手法の品であろう。加賀、能登、越中の各地域においては、非ロクロ成形土師器の導入と普及は一様な過程をとるものではないようであり、加賀地域、特に南加賀と、能登・越中の北陸東部地域とは一線を画して考えるべきであろう。

以上から、非ロクロ成形土師器と、共伴陶磁器を指標として南調査区の各層資料の時期を考えたい。非ロクロ

成形土師器から位置付けるならば、３区層15・16資料、３区下位遺構面直上層資料は12世紀中葉頃にその中心時期を定める事ができよう。陶磁器との共伴関係も矛盾はないものと思われる。二段ナデ手法の占有度から見て３区下位遺構面直上層資料がやや古くなる要素を持つが、時期差はごく小さいと思われる。以下、両資料を全資料の時間的な基準として扱いたい。４区下位遺構面直上層資料は３区資料と比較して非ロクロ成形品に二段ナデ手法が見られず、一段ナデ手法で占められるが、３区資料と形態差がほとんどなく、Ａ群珠洲が出土している事からほぼ同じ時期と考える。５区層17資料は変質した非ロクロ成形品の存在からやや後出的と思われるが、圧倒的多量のロクロ成形品が存在する事から12世紀末葉までは降りえないであろう。５区下位遺構面直上層資料は非ロクロ成形品の存在が最も不明確である一方、有台小皿が最もまとまって出土している資料である。陶磁器も共伴せず、時期比定は困難であるが、ロクロ成形品については形態、組成、サイズとも３区資料と大差なく、ほぼ同じ時期と考えている。

次に各資料の層位から位置付けを検証する。各資料を出土した堆積層と遺構面は、丘陵側の堆積層上面が低地側の遺構面と連続する場合もあるが、概ね層的に上下関係があり、古・新の差があると言える。堆積層については第24図の上位横断面で３区（古）から４区・５区（新）という上下の層序が読み取れる。３区から５区の遺構面については面的には同一であり、層位的な上下関係はない。よって３区では下位遺構面直上層（古）から層15・16（新）という層序、５区では下位遺構面直上層（古）から層17（新）という層序を前記した条件にあてはめて考えると、最も時期差が生じる可能性がある資料は３区下位遺構面直上層資料（古）と５区層17資料（新）と考えられる。この序列は先に遺物で指摘した新古相に概ね対応するが、絶対的な時期差は小さく、基本的に12世紀中葉を中心として、一部後半代に降る資料も存在するが、12世紀前半へは遡らず、12世紀末葉へは降らない程度の時期幅であると考えたい。よって各資料の位置付けについて示すと、概ね12世紀中葉から後半にかけて、３～５区下位遺構面直上層、３区層15・16、５区層17と推移するものと考えられよう。

検討資料以外の中世土師器も、概ね同じ時期幅の中で考えられるが、少量ながら確実により古相、新相を示す個体が存在する。古相を示す中世土師器は１区・２区に分布が限定されるロクロ成形製品で、有台椀第38図９・10、無台椀で第38図12・16、第40図１が相当する。平安時代の同器種の特徴を残す資料であり、11世紀後半から12世紀前半代と、古代から中世への過渡期に位置付けられる。新相を示す中世土師器も１区・２区にほぼ分布が限定され、皿第40図３～５、小皿第38図11・第40図６などの非ロクロ成形製品が相当する。概ね13世紀前半代に属する。陶磁器の中にもほぼ同時期の製品があり、遺跡の存続をあらわすものと言える。中世の土師器・陶磁器資料から見ると11世紀後半から13世紀代にかけて存続し12世紀代に中心を持つ遺跡の消長を窺う事ができよう。

以上、南調査区の中世土師器について、時期的な位置付けを中心にまとめてきた。その中で、加賀、能登、越中の12世紀代に中世土師器はロクロ成形品、非ロクロ成形品ともに顕著な地域差、遺跡差を有している事が看取できたものと感じる。それは旧国単位から集落単位までの様々なレベルで展開したものと考える。こうした状況の下で、貝田遺跡は北陸ではかなり早い段階に非ロクロ成形土師器を受容するが、資料中ではごく少量にとどまり、個性の強いロクロ成形土師器が圧倒的に組成の主体を占めている事になろう[37]。実に印象的な様相であり、今後、地域・遺跡の性格も含めて評価すべきと考えている。

中世土師器の胎土と色調

中世土師器の胎土と色調については、時期を限定できる堆積層・遺構面出土資料を中心に観察を加えた。その結果、胎土はＢ類主体であり、Ｃ類がこれに次ぎ、Ａ・Ｄ・Ｅ類はごく少量というありかた、色調はｄ類主体でｃ類がこれに次ぎ、ａ・ｂ・ｅ・ｆ・ｇ類はごく少量ずつとなるありかたがほぼ共通して示され、各資料間に大きな差は見られなかった。中世土師器は概ね胎土Ｂ類・色調ｄ類を基調とするようである。基調となるものに対して胎土は粗・細、色調は明・暗の両方向にばらついたものがごく少量の非主体の群となろう。ごく少量しか見られない胎土・色調は、はっきりした相関は確認できなかったが、大量の基調製品群中にあっては特異な存在感

を放つと言え、特殊な使用法を示している可能性があろう。非ロクロ成形品の胎土も概ね砂礫が少なく、量的にもきわめて少ないため、よく似た存在と言えよう。以上から南調査区の12世紀中葉から後半の中世土師器については、主体・非主体のレベル差をもった複数の生産・供給の単位が存在することは確実であろう。その生産地については、胎土に含まれる砂礫、鉱物、生物遺体については、同じ調査区から出土した弥生土器、土師器、そして羽咋郡北部産と推定する須恵器に基本的に共通するものであり、遺跡近隣地での生産を想定してよいものと考える。ただし中能登地域一帯で共通する可能性もあるので、今後諸資料を比較してゆくことが必要と思われる。また、胎土A類については水白モンショ遺跡資料中に似たものが多く見られ、藤橋遺跡ピット141資料にも見られた。対照的に胎土B・C類は両遺跡で似たものが少量であるが見られ、オカ遺跡では主体であった。こうした様相は自然科学的分析の成果[38]とも概ね一致するものであり、B・C類とA類の製品が生産地を別の地域に求める事と、各地の集落へ積極的に持ち込まれた可能性を示すものとして評価しておきたい[39]。胎土と地域の厳密な特定にはまだまだ時間を要することを断っておく。

土錘・陶錘

土錘・陶錘は1区から4区にかけて出土しており、合計すると30点を超える量となる。その大半は2区と3区に集中しており、他の地区はわずかである。形態的には管状であるが、胴張りの小さい紡錘形の細長いタイプが圧倒的に多く、円筒形のタイプは第58図14の他1点しかない。紡錘形タイプは長さ4～5cmにおさまっており、サイズ的にもほぼ共通するものと言える。このタイプの大半は色調青灰色を呈し、還元焔焼成を受けているものと思われ、中には焼成堅緻な製品も多く、須恵器、珠洲に酷似した質感を有している。また、籾もしくは籾殻の痕跡が大なり小なり大半の個体の器面に認められ、制作時に混和もしくは付着しているものと断定できる。その意図するところが何であるのか興味深い。

須恵器質の陶錘については窯資料、集落資料ともに県下でも定量の確認例があり、古代においては普遍的な存在のようである。珠洲質の土錘については、珠洲市寺家クロバタケ5号窯、大畠1号窯、法住寺2・3号窯など窯資料に出土例があるが、消費遺跡では現在まで出土例がない状況にある[40]。南調査区資料は形態・質感が寺家クロバタケ5号窯資料に似る事、中世土師器が共伴し、かつ出土遺物の主体となっている事から、おそらくは中世に珠洲窯で生産され、貝田遺跡にもたらされたものと推定している。時期的には3区では層15・16、下位遺構面直上層で中世土師器や陶磁器と共伴した例があり、12世紀中葉、珠洲I期の時期には確実に存在していたようである。同タイプで出土状況が不明確な製品については、珠洲II期、13世紀前半へ降る寺家クロバタケ窯出土例を下限とする時期幅の中で考えておきたい。このタイプの陶錘の使用形態については出土状況から窺う事はできないが、ほぼ同じサイズの製品が、12世紀～13世紀前半代には遺跡付近で漁撈に中心的に用いられていたものと思われる。しかし前述したように中世の消費遺跡での類例はきわめて少なく、他の遺跡では同じ形態の酸化焔焼成の製品が圧倒的に多いのが現状である。酸化焔焼成で紡錘形タイプの製品は南調査区でも少量出土しているが、珠洲質の製品が圧倒的に多く、その様相は異質なものと言える。その流通の実態については不明確であり、窯跡、集落の両方で類例の増加を待ちたい。

円筒形の土錘については、形態的には中世後半期に多いタイプと思われ、ごく少量で堆積層や遺構面に伴わない出土状況を示すことからも、紡錘形タイプより後出する時期の製品と考えたい。

木器・木製品

木器・木製品には下駄、底板、箸、漆器、船形、剣形、板材、棒材、柱材、桜樹皮がある。これらの大半は下位堆積層か下位遺構面から出土している。このうち、下駄では第61図2、第62図1・2、箸では第63図4～6・8、船形、底板第64図2～5、漆器第64図6が3区・4区下位遺構面直上層から出土しており、12世紀中葉頃の時期に位置付けられる。大量の中世土師器と共伴しており、その投棄については祭祀的な性格が非常に強いものと考える。その他の木器・木製品も概ね下位遺構面直上層に近接する層から出土しているため、そう大きな時期

差、性格差はないものと思われる。ただし、２区においては11世紀から13世紀にかけての中世土師器が出土していることから、堆積層出土の木器・木製品についてはやや時期が前後する可能性があり、注意したい。

石器・石製品

石器・石製品には石鏃、石斧、石庖丁、焼石、敲石、磨石、凹石、軽石、石鍋、台石、砥石、剥片がある。このうち石鍋第70図７が３区第26図層15・16から出土しており、12世紀中葉頃に温石へ転用されたものと考えられる。また、第68図６、第69図７、第70図１、第71図の礫石器類が１・３・５区の下位遺構面直上層から出土しているが、こちらについてはより古い時期の遺物が流れ込んだものと考えたい。石鍋、軽石、砥石以外の石器・石製品については基本的に弥生時代以前が中心時期となる種のものであり、南調査区においては詳細な時期を比定することは難しい出土状況と言えよう。石斧と石鏃・剥片等の打製石器については縄文時代にほぼ限定できるが、詳細な時期を示す縄文土器は出土していない。石庖丁は弥生時代と思われるが、調査区から出土した弥生土器の中心時期である後期後半期に属するものかどうかは疑問である。敲石、磨石、凹石、台石等の礫石器については縄文時代の石器と言われるが、その下限については明確でない。民俗例には、似た形態の礫石が植物加工の用途に近現代まで用いられていた例もあり、南調査区出土品についても中世以降に下降する時期のものが存在するかもしれない。おそらく時代を問わず農村では不可欠な器具であるはずだが、古墳時代以降は確実な代替品を別形態でも別素材でも見つける事ができないため、存在する可能性は否定しないでおきたい。砥石、軽石については弥生時代以降としか答える事ができず、時期不明である。

その他の遺物

製鉄・鍛冶関係遺物のうち、鉄滓については１～５区にかけて数十点が出土している。鉄滓は生産遺跡でも消費遺跡でも出土する遺物であり、消費遺跡においては集落内における製鉄・鍛冶作業の存在を示す資料となる。南調査区においては土器・陶磁器資料と共伴する例が多い。共伴する土器・陶磁器は中世、12世紀代の中世土師器が圧倒的に多い。土師器・須恵器については鉄滓の点数と大差ないほどに微量である。よって鉄滓の大半は12世紀代に属するものと考えられる。他、鞴羽口や炉壁についてもほぼ同時期であろう。12世紀代には集落内でかなり頻繁に製鉄・鍛冶行為が行われていたようである。ただし第72図２の椀形滓については古代に遡る可能性も残すものであろう。

銭貨については北宋銭が２点出土しているが、基本的には初鋳年代の11世紀に国内に広く流通するものではなく、12世紀以降にもたらされたものと考えられる。第72図４が出土した竪穴は12世紀代の堆積層中に位置する中位遺構面に位置しており、その流通時期を提示するものと言える。

５　小　結

本節では貝田遺跡第３次調査南調査区について、層序、遺構、遺物について報告し、ここまで個々に検討を進めてきた。層序の項では傾斜地に位置する調査区に斜位の堆積層が形成されており、中には複雑に錯綜する地区がある事を述べた。遺構の項では最低３面の遺構面が存在することと、それぞれの面に属する遺構について述べた。遺物の項では縄文時代から中世までを中心とした広い時代の遺物が存在する事を述べた。この時点でようやく層序、遺構、遺物を関連付けてまとめる事が可能になったと判断されるので、ここでは南調査区における縄文時代から中世までの変遷について総合的にまとめてみたい。

南調査区においては縄文時代から中世までの遺物が見られるが、発掘調査が及んだ堆積層・遺構面が中世期の所産である事は既に述べた通りであり、古代以前の遺物は基本的に丘陵側からの流れ込み資料である。しかしその時期と質・量は調査区外も含めた遺跡の古代以前の消長をある程度反映しているものと思われ、少し概観しておきたい。縄文時代は石器が出土したのみであり、詳細な時期を示す土器は出土していない。よって遺跡の状況は不明確である。弥生時代は後期後半期の遺物が多く出土しており、その他の時期はほとんどない。時代別で比

較すると中世期に次ぐ遺物量と思われ、本格的な弥生時代の集落の成立と活性化が窺われる。古墳時代は5世紀代、6世紀代の遺物が少量見られる。古代は7世紀代、9世紀代、10～11世紀代の遺物が少量ずつ見られる。弥生時代から古代までの出土遺物を概観すると、多量な時期、少量な時期、出土しない時期があり、断続的な様相を示している。集落の小移動や盛衰、断絶と再開を繰り返した姿を想定しておきたい。

中世については現状で把握している最古の段階は下位遺構面となる。この面では3区の低地側から6区にかけて水田の畦畔、1区から3区の丘陵側にかけては溝、柱穴が確認されている。この段階では調査区の大半は水田域であり、東部の一部で居住域が含まれているようである。この段階の時期を直接示す遺物はほぼ皆無であるが、堆積層出土資料よりも古いことは確実であり、居住域と捉らえている1区・2区で出土した古相の遺物に求め、11世紀後半から12世紀前半代を想定したい。次いで下位遺構面上に堆積層が生じるが、丘陵側から水田を埋めるように堆積しており、この時点では水田は廃絶していると思われる。そして3区～5区にかけては堆積層が小規模に錯綜し、大量に遺物を含む層とあまり含まない層が互層状に堆積している。これと対照的に1区と2区、特に1区に向かうほど堆積層は直線的で安定した堆積を見せるようになり、遺物もそれほど含まれなくなる。3区～5区において出土する大量の遺物は、大半が完形品の中世土師器であり、少頻度の使用の後まとめて投棄したような出土状況を示す。錯綜する堆積層は遺物投棄がブロック的に何度も行われ、その都度軽く埋めかえす程度の軽微な整地が行われるサイクルを繰り返して形成されたものと推定しており、3区～5区は遺物投棄が集中したブロックとみなしている。遺物投棄は下位遺構面の直上から認められるので、水田の廃絶と投棄の開始は大きな時期差は持たないものと思われる。1区・2区・6区については遺物投棄が顕著でないが遺構も明確でなく、その性格は不明である。盛んな遺物投棄がなされた堆積層形成の時期は12世紀中葉から後半代であろう。盛んな土器投棄が終息する頃には調査区の丘陵側は堆積層が厚くなり、この過程の途次に中位遺構面、次いで緩傾斜地が形成された段階に上位遺構面が生じ、それぞれ遺構が形成される。中位遺構面では竪穴、上位遺構面では1区で掘立柱建物、他区では5区を中心にピットが確認され、居住域となったと見てよいようである。中位遺構面は堆積層の形成時期に近く下位の堆積層より後出的な時期と想定される。上位遺構面の時期を直接示す遺物は乏しく、時期を限定する事は難しいが、12世紀末を上限とし、2区出土の新相の遺物から13世紀代を含めて広く考えておきたい。以上をまとめると、南調査区の中世期の推移は下記の3段階に区分して捉らえる事ができるであろう。

第1段階（11世期後半～12世紀前半）　下位遺構面の段階
大半が平坦地の水田域で、一部居住域も含まれる。

第2段階（12世紀中葉～同後半）　堆積層・中位遺構面の段階
廃絶した水田に、軽い整地を伴う遺物投棄が盛んに行われる。

第3段階（12世紀末～13世紀）　上位遺構面の段階
堆積層で形成された緩傾斜地に遺構が築かれ、居住域となる。

以上で南調査区の様相についてはかなり明確になったものと思われる。遺跡全体の推移や、ここでふれなかった遺物投棄の要因については、第1次調査、第2次調査の成果とも合わせて最終章で検討する事にしたい。

第３節　貝田遺跡北調査区

１　調査の概要

貝田遺跡北調査区は遺跡が立地する独立丘陵の南西に位置し、発掘調査は町道に沿って弧状に巡る幅２m、延長約30mの排水路敷設区域が対象になった。調査にあたっては町道三叉路の交差点部の水路センター上に２箇所の基準点を２mの間隔を置いて設定し、それぞれ北起点、西起点と呼称した。そして北起点からはN－13°－Eの主軸で北東に19m、西起点からはN－77°－Wの主軸で北西に12m、北・西起点間はN－58°－Wの主軸で、幅２mの調査区を設定したものである。

層序は基点部の周辺と末端で異なった堆積を見せる。第79図④の地点（北基点部）や③の地点では上位から盛砂、灰褐色粘質土、明灰色砂と堆積しており、下位の灰褐色粘質土が遺物包含層、明灰色砂がベース土となる。ベース面の標高は5.8m程度を測る。遺物包含層は灰褐色粘質土であり、調査区全域に分布するが、含まれる遺物そのものはごくわずかであった。ベース土である明灰色砂は、粒子が細かくよく締まった土質であり、丘陵周囲で露出している風化した基盤土層に類似する。ここから調査区の北東及び、南西部では地形が調査区外へ向けた落ち込みを始めており、北東の②の地点、南西の⑤・⑦の地点ではベース土は粘土となり、その上位には黒色腐植土の堆積が見られる。調査区の北東端に近い①の地点では、③の地点からさらに30cm以上落ち込んでいる。調査区の南西端に近い⑥の地点では下降著しく、⑤の地点と比較して70cm以上は落ち込んでおり、ベース土も確

第78図　北調査区の位置（S＝1／2,000）

認できない。調査区の末端程、地形は低くなり、腐植土の堆積は厚くなっているようである。各層の土質と地形からみると、調査区の基点周辺が明灰色砂のベースが確認されており丘陵裾に、その周囲が粘土のベース土が確認されており丘陵から低地への地形の変換ライン周辺に、さらにその周囲は厚く堆積した腐植土が確認されており低湿地に相当すると思われる。

遺構・遺物はきわめて希薄な分布状況であった。

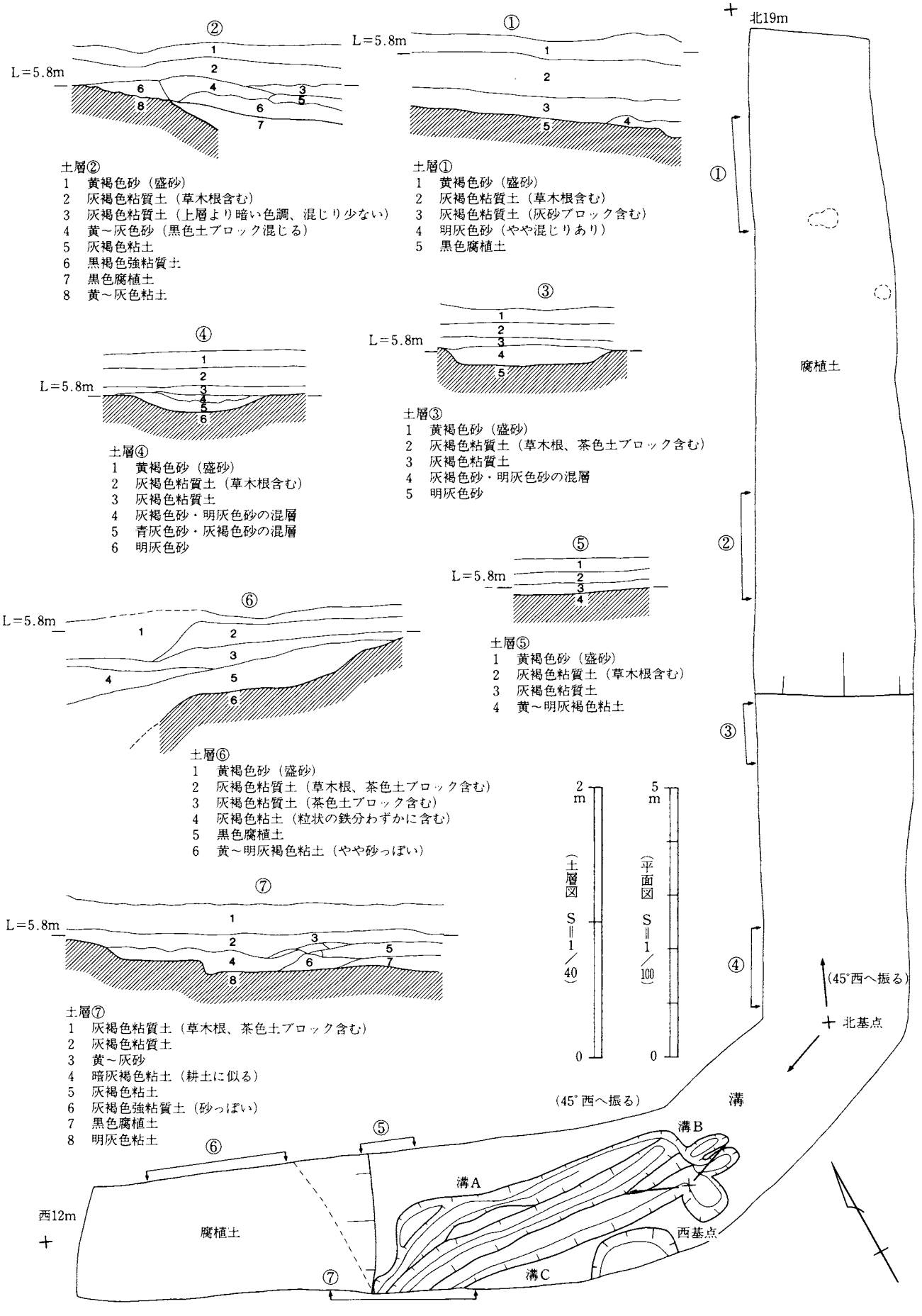
2　遺構と遺物

遺構は西基点部から南西へ6mの地点にかけて、溝を確認したのみである。3条程の溝が錯綜しているようであるが、いずれも東西方向に走り西側では南寄りにカーブして調査区外へ出る。3条の溝は北側から順にA溝、B溝、C溝と呼称する。第79図⑦の地点の層位で見る各溝の切り合い関係はA溝が最も古く、B・C溝が新しいが、B溝とC溝の先後関係は不明である。覆土はA溝が層6の灰褐色強粘質土、B・C溝が層4の暗灰褐色粘土の単層であり、遺物は土師器、須恵器破片が出土している。遺物の時期は古墳時代と古代の両方があるが、どちらも溝に流れ込んだ可能性が高いため、溝の時期は不明である。

遺物は土師器、須恵器、陶磁器が出土しているが、調査区全体で小袋一つ分の量であり、非常に少ない。そして小破片のみであり、図化できた遺物はない。ただし、珠洲の片口鉢破片が南調査区出土の第48図11に接合している。

3　小　結

北調査区で確認された遺構、遺物はきわめて希薄であった。前述したようにしっかりした砂質のベース面が高位で確認された範囲は基点部周辺であり、南西、北東に向かっては落ち込んで行き、低湿地へ連なっているものと思われる。確認された溝は、丘陵の等高線に沿って地形の変換点に掘削されているようであり、排水路的な性格が推定される。出土した遺物は、貝田遺跡南調査区に接合するものがあり、両調査区が同一の遺跡内にあること、遺物が可搬されたのか流動したのか不明確であるが、かなりの距離を移動していることを示している。遺構・遺物が希薄な状況は、第1次発掘調査で想定した貝田遺跡南西部の状況と一致するものと言える。特にこの北調査区では地形の変換が明確になったことから、集落域の縁辺部に相当する箇所と推定しておきたい。



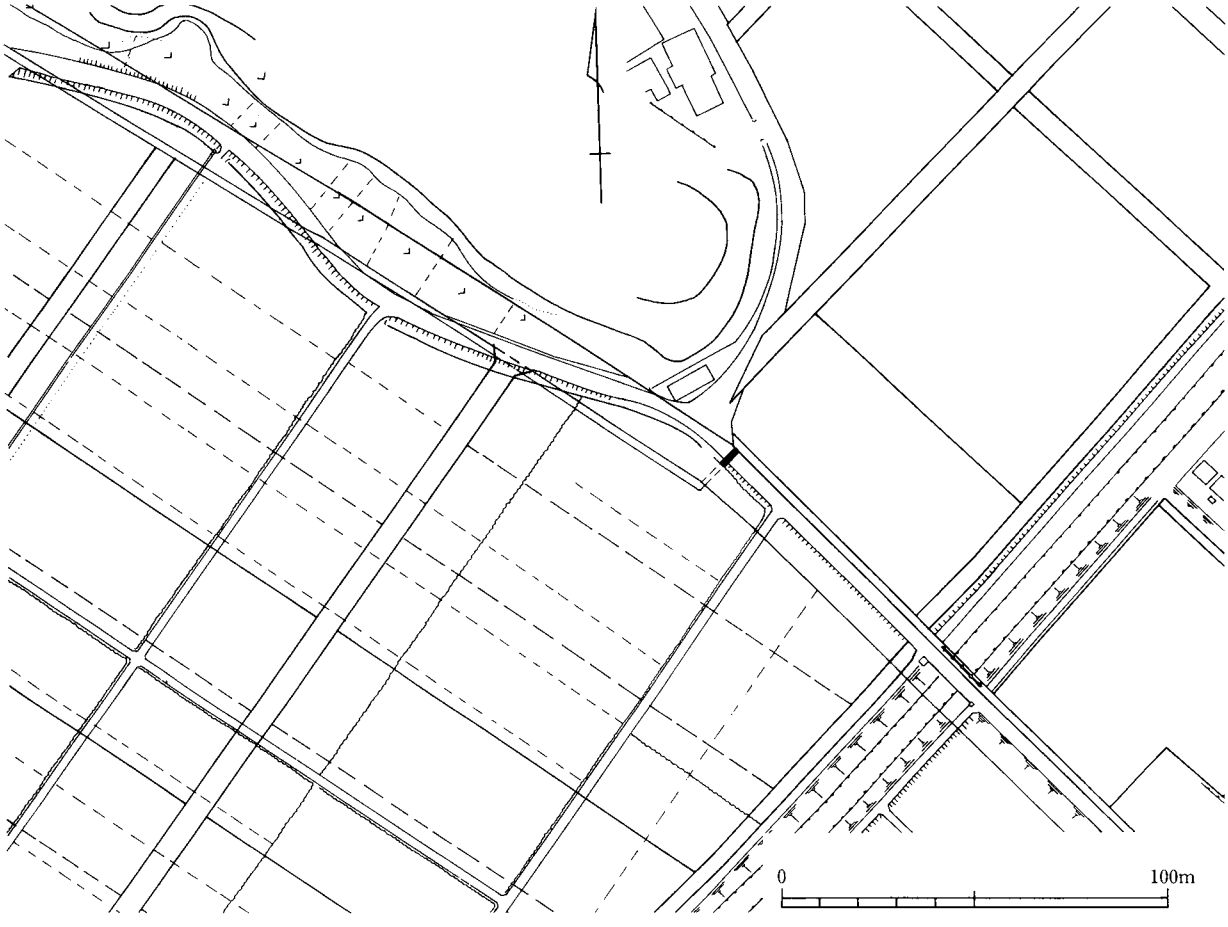
第79図　北調査区実測図　（S＝１/100、１/40）

第４節　貝田遺跡工事立会区域

工事立会区域は、貝田遺跡の南東部、遺跡が立地する丘陵の南東端に位置する。予定される工事は、現道路町道402号線を一時的に通行止にして路面をたち割り、道路と直交する方向のパイプラインを埋設すると言う内容であった。パイプライン埋設に伴う掘削は幅１m、深さ２m以上と予想され、発掘調査は壁面が崩壊する危険を伴うものであり、調査期間の確保も困難な状況にあった。また、調査区は分布調査及び第２次発掘調査の成果から、貝田遺跡の縁辺部にあたることが推測されていた。以上の状況を踏まえて、調査担当者が羽咋土地改良事務所担当者と協議した結果、工事が遺跡に及ぼす影響は軽微と判断し、危険を伴う発掘調査は回避して、工事中に調査担当者が立ち会うという事で、相互に了解した。

工事立会は平成４年９月24日に実施した。具体的には工事業者の掘削に立ち会い、遺構・遺物の有無を確認し、掘削後は土層観察を行い、終了した。基本的な層序は盛土下に、茶褐色粘質土、灰色粘土、暗灰色土の堆積が認められ、ベース土は青灰色粘土となる。ベース土は緩やかに丘陵から低地へ傾斜しており、深さは現道路面から測って、浅いところで1.6m、深いところでは２m を超えるものであった。遺構は傾斜面に浅い溝状の落ち込みが見られ砂が堆積していた。遺物は、暗灰色土層を中心にごく少量の土器片が出土した程度であった。弥生土器、土師器、須恵器、中世土師器が認められ、小破片で摩耗しているものが多く、詳細な形態、時期は分からないが、概ね第２次調査と第３次調査南調査区で出土した遺物の時期におさまるものと見たい。

工事立会の結果、区域はほぼ当初の予想通り、貝田遺跡の南東縁辺部に相当する事が確認されたと言えよう。



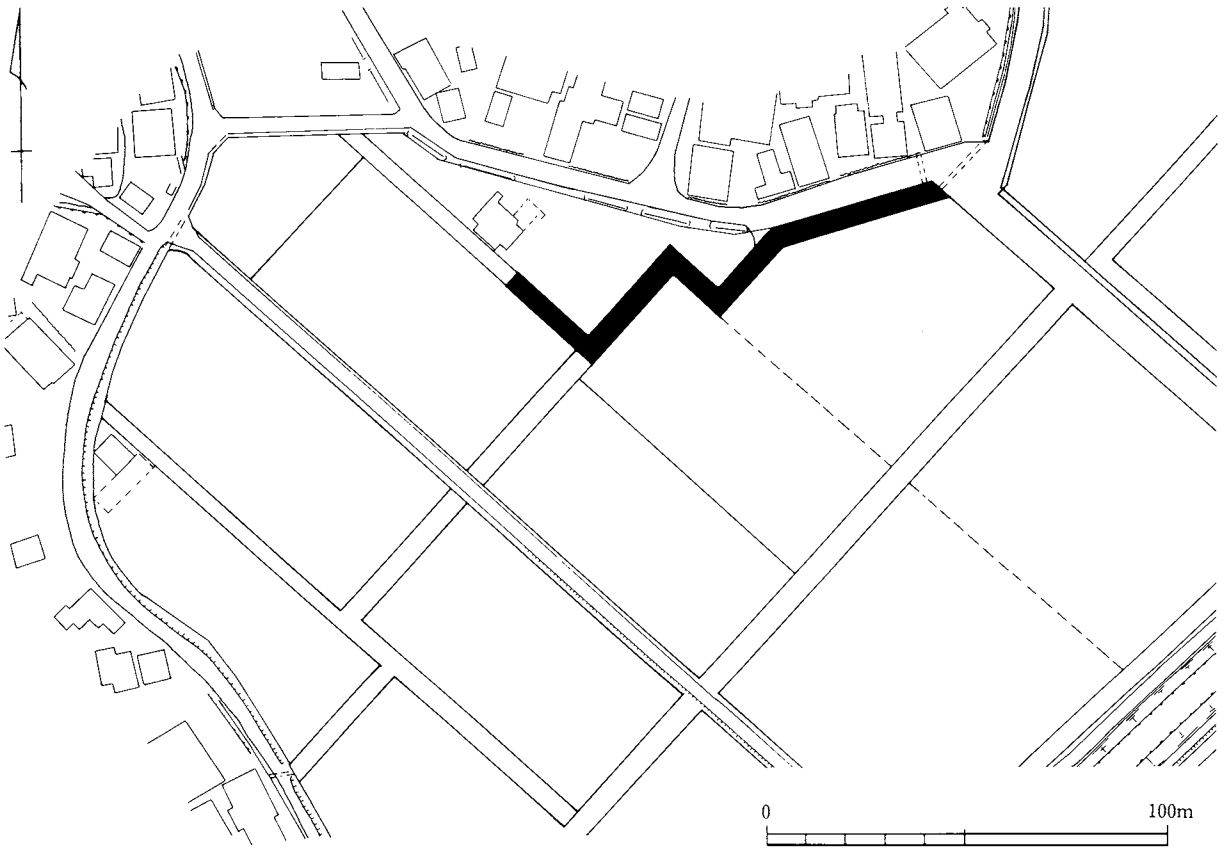
第80図　工事立会区域の位置　（S＝１/２,０００）

第Ⅵ章　貝田Ｃ遺跡の発掘調査

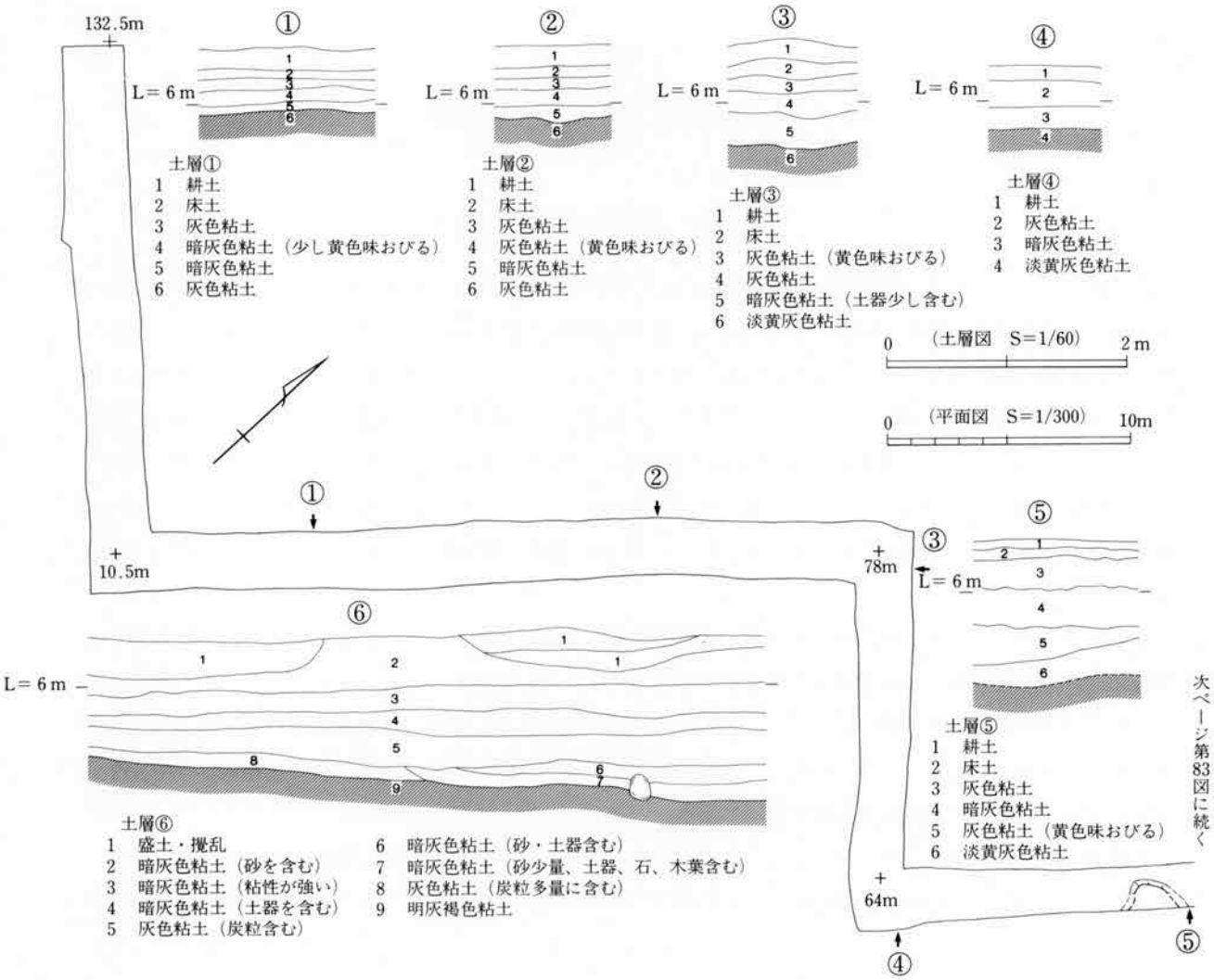
第１節　調査の概要

貝田Ｃ遺跡は貝田遺跡の北方約300m、高爪山系より派生する低山地丘陵の裾部に立地する。発掘調査は現在の貝田集落に近接する水田部の山裾側に巡る幅２m、延長約100mの排水路敷設区域が対象となった。排水路は水田部と集落の境の複雑なラインを直線的に区画し直すようにクランクして走る。調査に際しては、最東部を基点、最西部を終点とする水路センターに沿った基準ラインを設定し、調査区内の位置は起点（０m）からの基準ライン上の距離で表示した。調査区は主軸Ｎ－72°-Ｅを指して起点（０m）から38mの地点まで、38m地点で30°振りＮ－42°-Ｅを指して64m地点まで、64m地点で直角に振りＮ－48°-Ｗを指して78m地点まで、78m地点で直角に振りＮ－42°-Ｅを指して110.5m地点まで、110.5m地点で東へ直角に振りＮ－48°-Ｗを指して終点（132.5m地点）に至る。

層序は上位から耕土・床土、無遺物の粘土層、遺物包含層となる粘土層、ベース土とまとめられ、各地点とも概ね共通している。遺物包含層は調査区西部で概ね暗灰色、東部で暗青灰色を呈する粘土であり、古墳時代から奈良・平安時代を中心とした遺物が認められる。全般に遺物の含みは少ないがより西部ほど希薄になる傾向がある。層厚は10～50cmと一定したものではなく、また遺物量の多少とは比例しない。層の厚い地点では分層されるが、第83図⑥地点の様に下位部分に遺物が含まれるもの、第83図⑩地点の様に上位部分に含まれるもの、第83図⑨地点の様に各層ともほとんど含まれないものなど様々である。その下位、ベース土は概ね灰色粘土を基本とし、地点によって淡黄灰色、灰褐色などの色調や粘性に若干の違いがある。包含層、ベース土とも土壌的には還元性



第81図　調査区の位置（Ｓ＝１/2,000）



第82図　調査区実測図(1)（S＝1/300、1/60）

の高いグライ質であるが、表面が外気に触れるとすぐに酸化され見ているまに黄色くなる変化が特徴的であった。各層の土質や周囲の地形からは、山地裾に広がる低湿地堆積と理解される。ベース面の標高は概ね5.7m前後を測る。

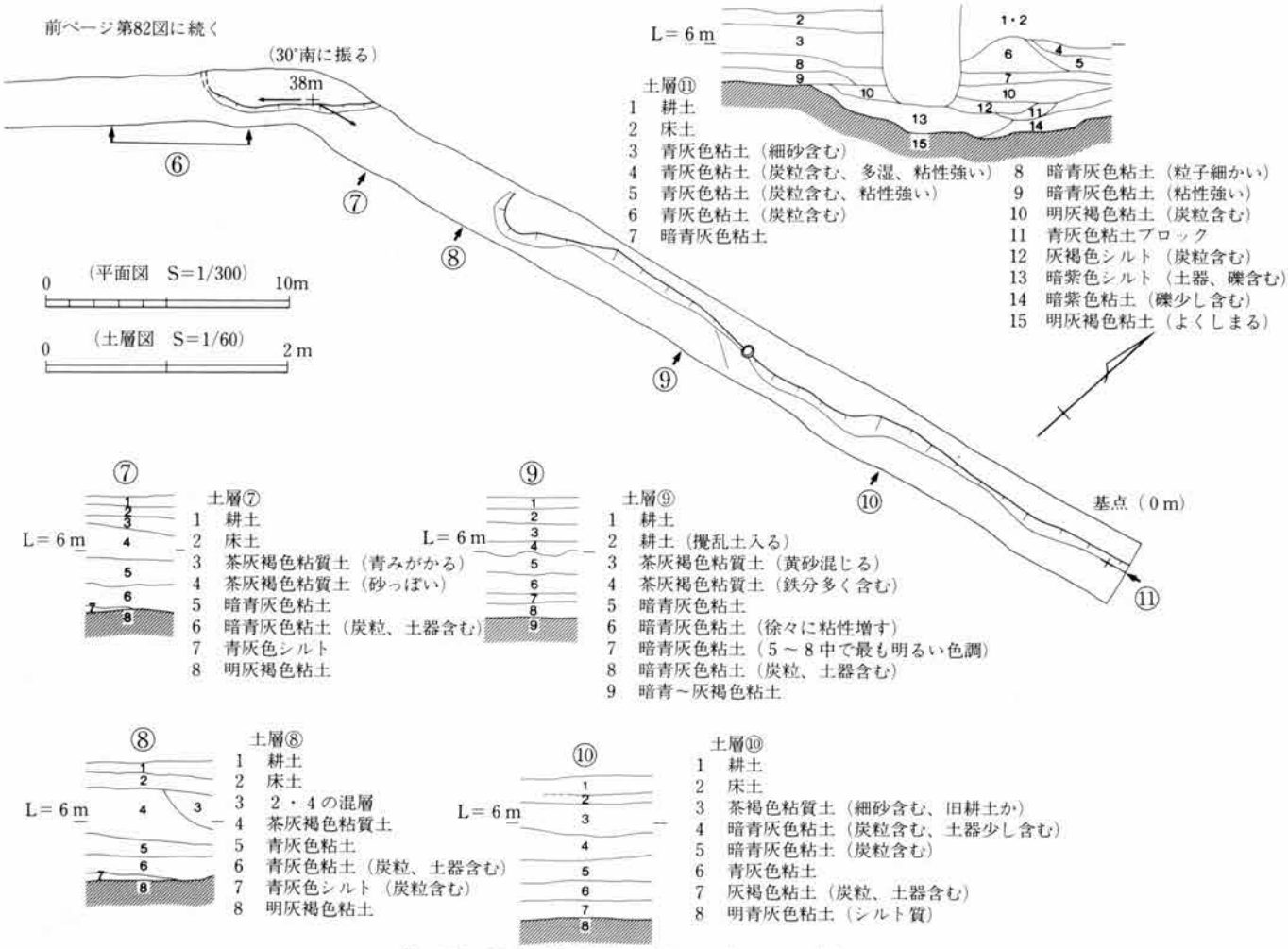
発掘調査は起点側から着手し、終点側に向かって進めた。土層断面はほぼ10m毎に観察して柱状図を作成し、複雑・不明確な堆積の箇所は随時観察地点を追加、延長し、またたちわりを行った。その結果、遺構は調査区の東半に、規模は大きいが不定形な落ち込みを確認した。遺物は落ち込みから土師器、須恵器を中心に比較的多く出土しており、その量はパンケース10箱に及んでいる。これ以外では遺構は確認できず、遺物も極めて少なかった。以下、ほぼ唯一の遺構である落ち込みとその出土遺物について述べる。

第2節　遺　構

遺構は落ち込みが起点（0m）から58m地点付近にかけて確認された。ベース面からの明確な落ちは0～30m地点、36～43m地点、51～54m地点、の3箇所において認められる。その他の箇所は落ち込みの内部に位置するものと思われる。0～30m地点では北から南への落ちが、不整なラインながらほぼ東西方向に連続し、東部はそのまま伸び、西部は北へカーブしてともに調査区外へ出る。肩部傾斜は25°前後と、通常の溝状遺構よりも比較的緩やかな傾斜で落ち込んで底面に至っており、深さは最大で44cmを測る。覆土は最も明瞭な箇所で5層（第83図⑪層10～14）に分層され、うち下位の層13と層14が遺物を多く含み、他層は殆ど含まない。36～43m地点では調査区が緩くクランクする位置にベースが山側から張り出す格好になり、東、西、南の三方へ落ち込んでお

り、深さは最大で64cmを測る。覆土は起点側では２層（第83図⑦層５・層６）、終点側では４層（第82図⑥層５～８）に分層される。うち遺物は下位層（第83図⑦層６、第82図⑥層６・層７）に多く含まれる。51～54m 地点では前２箇所と異なり、低地側から張り出すベースがごく小範囲で確認され、東、西、北の三方へ落ち込んでいる。西方へは非常に緩やかに立ち上がって行くようであり、西端は不明確である。深さは最大で34cm を測る。覆土は１層（第82図⑤層５）で、遺物はあまり含まれない。なお、概ね38m 地点以東の遺構覆土は最上位にベース質土（第82図⑥層５、同⑤層５）を持つようになるため、ベース面との識別が難しくなる。これ以東の遺構はたちわりにより確認されたものである。遺物は51m 地点以西で希薄であるのを例外として、全般に覆土下位にひじょうに多く含まれており、ベース面に張り付いたように出土したのが印象的であった。

以上の事実から、遺構の全形と性格について、少し推測したい。上記した各地点のうち０～30m 地点と36～43m 地点の肩部は落ち込む方向が類似し、また地形的に見て山裾のラインにほぼ沿っており、連続する可能性が高い。51～54m 地点の肩部はこれらと落ち込む方向が逆であり、起点側にこのまま伸びて行くならば前２箇所の対岸となり、不整な方向に走る大溝状の遺構が存在する可能性が指摘できる。地形的には山地裾から低湿地への落ち込みライン上にほぼ位置すると思われ、落ち込みの形成に際して人為が加わった痕跡は少ない。また水流の痕跡も少ない。しかしながら遺物は落ち込み形成後あまり時間をおかずに廃棄されており、廃棄をある程度想定して生じた可能性がある。遺構肩部から底面にかけての、溝さらいのような行為、若干のカットを加えるような行為は考慮しておくべきであろう。落ち込みの性格については、面的に限定された調査のため明らかにしがたいが、自然地形に強く規定されつつも、実に長期にわたって遺物が投棄された場所であった、とまとめておきたい。



第83図　調査区実測図(2)（S＝1/300、1/60）

第3節　遺　物

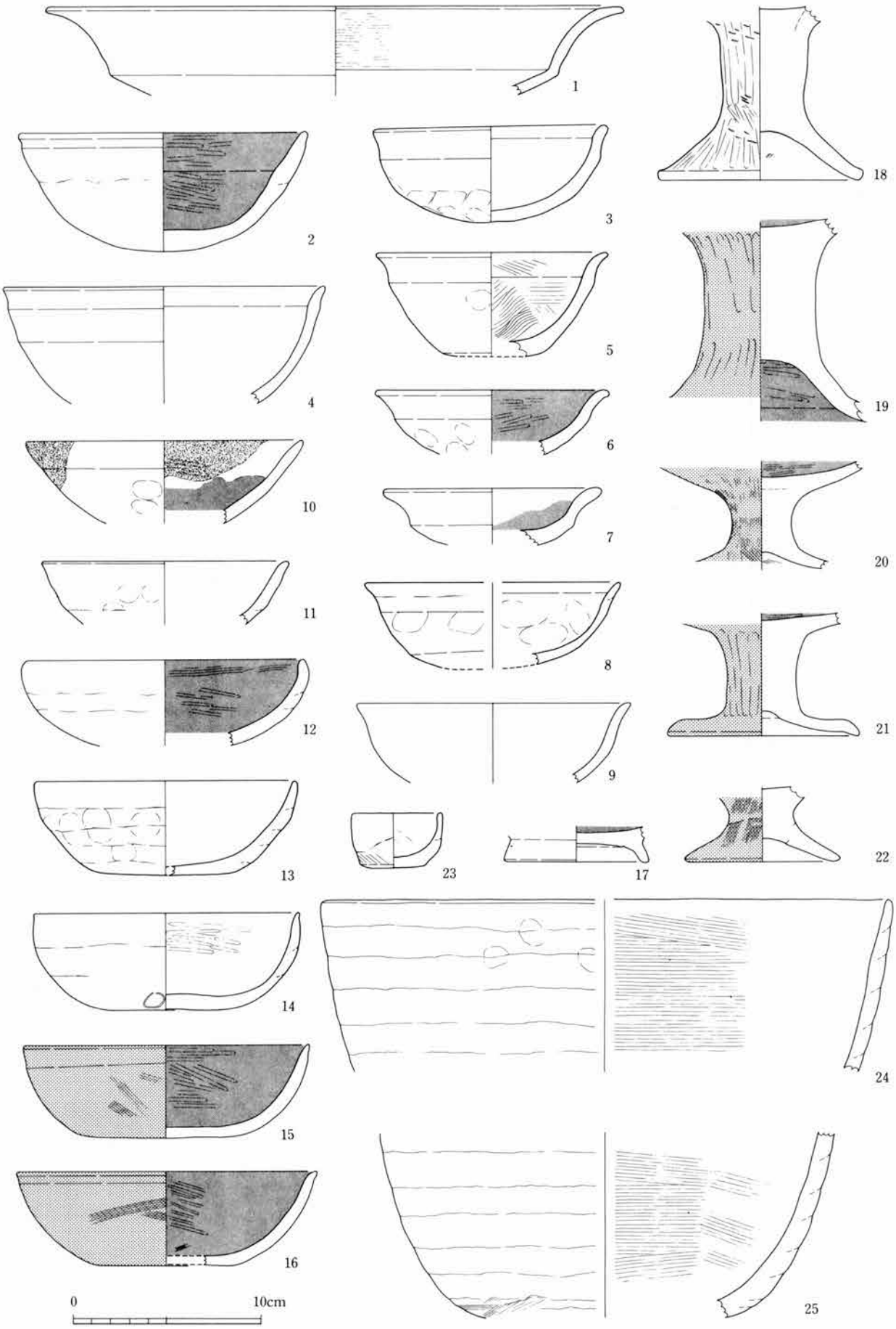
遺物は落ち込みから出土した古墳後期から奈良時代にかけての土師器・須恵器が大半で、他に石器、弥生土器、古墳前・中期の土師器、平安時代の土師器・須恵器、中世土師器、珠洲、青磁、近世・近代の陶磁器、鞴羽口などが小量存在する。以下、図化した遺物を中心に記述する。

弥生土器・土師器（第84図～第87図）

第84図1は弥生土器で、高杯である。口径30cm前後の大型の有段の杯部である。内外面とも赤彩痕が残る部分があり、おそらく全面に及んでいたものと思われる。弥生時代の後期後半に位置付けられる。1以外は全て土師器である。2～17は椀である。2～9は口縁部が外反するタイプである。2～4は口縁部が強くヨコナデされ、外面は稜を見せて軽く屈曲し、内面に内傾する面を取る、いわゆる内斜口縁をもつ。2はまっすぐ開いて端は細く尖る口縁に、はっきりした丸底が付く身の深い器形である。内面黒色仕上げは均一でなく濃淡に差が見られ、また口縁端部外面にまで輪状に及んでいる。口径15.3cm、器高6.5cmを測る。3・4は2に比べ内斜面が狭くつまった感じの口縁部をもつもの。3は口縁端部に丸みをもち、内斜面は不整で全周しない。4はより大型で、内斜面ははっきりしている。5～9は口縁が明確に外反するもの。5は内面にハケ調整をはっきり残すもの。小径ながら身が深く平底を指向しており、器形的には鉢に近い。6・7は5に比べて身が浅いと思われ、口縁部が段をもって屈曲するもの。6は明確な内面黒色仕上げとなる。7は6より厚手で、屈曲が明確である。内面は底面のみ黒色になる。8・9は稜・面が鈍いもの。胎土に砂礫が少なく、非常に軟質で、器面は磨耗している。10・11は口縁がほぼまっすぐ開くもの。口縁上半が帯状に区画される点は内斜口縁椀に似る。10は内面下半のみが黒色になるもの。口縁部上位には油脂が付着する。胎土には海綿骨片が含まれる。12は口縁部が内湾するもので、端部を厚く丸く仕上げ、内面は端部近くにハケ調整痕を残したまま黒色仕上げされる。非常に砂礫の含みが少ない胎土で、軟質。13は内湾ぎみの口縁で、端は細めておさまる。外面に接合痕をはっきり残す。14～16は比較的薄手で、つくりが丁寧なもの。内湾ぎみの口縁は端部が強くヨコナデされ、尖る。14は底面近くに環状の線刻が見られ、おそらく焼成前に草木等が貼り付いたものと思われる。15・16は特に外面赤彩・内面黒色仕上げの精製品である。両品とも赤彩は一部に痕跡をとどめるのみで残りは良くない。底部は平坦で、はっきりした平底といえる。胎土には海綿骨片が含まれる。15は口径15.4cm、器高5.1cmを測る。この他、図化していないが漆被膜を持つ土師器椀を数点、須恵器杯H身を模倣した土師器椀を1点確認している。

椀については口縁形態に最も多様性があり、内湾するものから外反するものまで、その度合いも細かく異なる。その一方で、口縁内面に内傾する面を持ち外面には強いヨコナデを加えるという技法は比較的高い普遍性を持って他と区別し抽出する事ができる。この一群はいわゆる内斜口縁椀と呼ばれるタイプであり、具体的には2～4が相当する。また、内斜が明確ではないものの口縁外面のナデが顕著な10・11も技法的には共通するものである。このタイプ以外では6～9が口縁の外反するタイプ、12・13が内湾するタイプとして分類できる。さらに14～16が、丸みをもって立ち上がり端をわずかにつまみあげる口縁部に、大径の平底の底部がつくタイプと言える。須恵器の椀もしくは杯に近い精製品で、赤彩・黒色仕上げを採用する特殊なタイプである。よって以上の4タイプを内斜タイプ、内湾タイプ、外反タイプ、特殊タイプと仮称して分類の大枠とし、主には時期比定が容易な加賀・能登の資料との対比から、各タイプの時間的位置付けについて述べる。

土師器の椀として最も古く確認されるのはこの中では内湾タイプである。能登では鹿西町金丸宮地遺跡[42]、加賀では加賀市永町ガマノマガリ遺跡[43]や小松市漆町遺跡[44]などで5世紀の末葉に遡る例がある。6世紀代にも矢田遺跡4号溝上層[45]や万行赤岩山遺跡[46]の竪穴住居などで確認されるが、伝統的に厚手で、口縁丸縁、黒色処理はされないものが多い印象を受ける。黒色仕上げを除けば12はこの形態に近い。7世紀代に入ると伝統的な内湾タイプはほとんど見られず、弱い内湾度、口縁端を細める、底部平底の13のような粗製椀が七尾市三室まどがけ



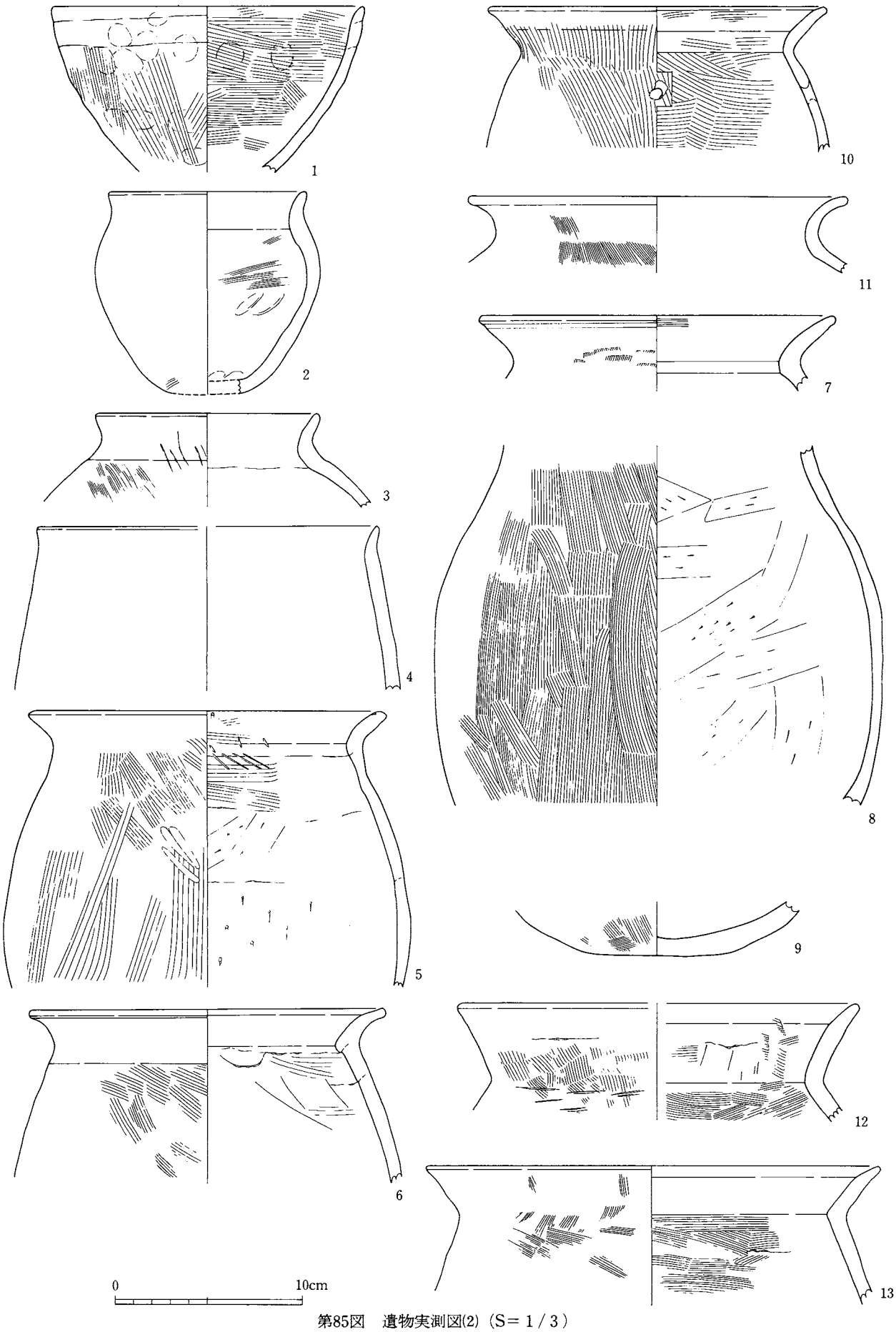
第84図　遺物実測図(1)（Ｓ＝１／３）

古墳群の２号墳・３号墳[47]で確認されている。13のタイプについて内面黒色仕上げはもちろん他タイプの黒色仕上げ品との共伴例はほとんどない。よって12は６世紀末頃を下限とする年代、13は７世紀前半頃に考えておきたい。内斜タイプは６世紀代の前半には既に出現しており、共伴須恵器が和泉陶邑窯ＴＫ10型式にほぼ並行する金沢市戸水Ｃ遺跡Ｆ区10号土坑[48]や千木ヤシキダ遺跡下層Ⅱ[49]の段階では、椀の大半が口縁が屈曲する内斜タイプの内面黒色仕上げ品で占められており、盛行に至っている。ＴＫ209～217型式に並行する野々市町御経塚ツカダ遺跡80－５号住[50]や千木ヤシキダ遺跡下層Ⅰ[49]などでは、内斜面が縮小したり黒色処理されないものが主体となっている。そしてこの段階をほぼ下限とし、７世紀中葉頃にはほとんど見る事ができない。内斜タイプは６世紀代の代表的な椀形態と考えられるが、内面の黒色仕上げの消長とも連動して推移するようであり、黒色仕上げと深く関わるタイプと思われる。必然的にミガキ調整をかけるものも多い。口縁部が直線的な２・10・11と、口縁端が屈曲する３・４とがある。戸水Ｃ遺跡や小松市高堂遺跡３号土坑[51]で主体となるような口縁がはっきり屈曲するものは見られない。２は内斜面が広くて身が深い６世紀代の特徴を示すが、戸水Ｃ遺跡の段階を上限とし、６世紀後半～末と見たい。10・11については高坏の杯によくある器形であり、椀で見る変化の限りではないかもしれない。３・４は御経塚ツカダ遺跡の椀に近く、６世紀末から７世紀初頭頃に位置付けたい。外反タイプははっきり段をもつ６・７と、段を持たない８・９があるが、いずれも類例に乏しく、時期も明らかではない。６・７は小型品で高坏の杯に多い形態。８・９は６世紀代にはほとんど見る事のない形態であるが、内斜タイプから派生した系統でかなり退化したものと考える事もできる。一応３タイプの中では最も後出すると予想しておきたい。特殊タイプは６世紀代の精製品とは明らかに異質な存在である。類例は乏しく、県下では羽咋市四柳白山下遺跡や同市寺家遺跡において赤彩土師器群中に類品が散見される程度である[12]。時期的には、平坦な底部の須恵器杯Ｇや杯Ａを意識したものとして７世紀後半頃を上限とし、寺家遺跡Ⅱ期段階の８世期前半頃を下限と見ておきたい。厳密な時期比定は、出土状況からも、きわめて難しいと言える。最後にハケの顕著な椀５については時期を特定する事はきわめて難しく、椀総体の時期幅の中で考えておくべきであろう。

第84図17は平安時代の土師器で、内面黒色の有台椀か皿であり、９世紀代に位置付けられる。18～21は高杯である。いずれも杯部を欠いているが、支柱部が中実につくられており、特徴的である。いずれも黒色仕上げされた杯部内面が残っており、ここで図示した椀などの内面黒色仕上げの土器と結合することは確実である。うち19～21は外面赤彩・内面黒色仕上げを行なっている。18・19は大型のもので、支柱も太く重量感に富む。18は斜め右下がりのハケ調整痕をわずかに残す。胎土には海綿骨片が含まれる。19は杯部に加えて脚部内面も黒色となるが、器面の調整は杯部とは比べて粗く、杯部ほど意図した仕上げとは思われない。20・21はより小型品であろう。20・21は脚部裾がほぼ水平に広がって大きく開くもの。どちらも胎土には海綿骨片が含まれる。20は特に低脚で支柱が短いタイプであり、ハケ調整痕を残したまま赤彩している。21は支柱が中実である点を除けば、須恵器高杯に似た器形である。非常に砂礫の含みが少ない胎土で、軟質、焼土塊も含む。椀10と同一個体の可能性がある。22は土器の台部である。胎土・質感等で19・20と変わるところがなく、同様に外面赤彩・内面黒色仕上げの土器と結合すると思われる。胎土には海綿骨片が含まれる。

土師器の高坏は基本的に椀と脚が結合するものであり、18～21は高椀とでも呼ぶべき形態である。同様に台と結合する22は低椀となる。杯部を欠いており、脚部は形態変化に乏しいため時期比定は難しい。18は小松市高堂遺跡、野々市町御経塚ツカダ遺跡に完形で類品がある。両資料の時期差から、短くとも６世紀後半～７世紀初頭の間には認められる形態と言える。19・20・22は容量・器高の差があるがいずれも椀15・16と同じ赤彩内黒の処理を行っており、ほぼ同時期と推定する。富来町山王丸山遺跡[52]でも類品が出土している。21は前述したように椀12と質感が酷似し同一個体の可能性があるため、時期も同様に推定する。

23はミニチュア土器で、椀がモデルであろう。椀５と同様、細かい時期はわからない。24・25は製塩土器で同一個体と思われる。口縁が少し外傾して直線的に伸びるバケツ型の器形であり、底部はおそらく平底で、胴部と



第85図　遺物実測図(2)（S＝１／３）

の境をヘラケズリ調整で丸くするものと思われる。外面に接合痕、内面にヨコハケが顕著に見られる。胎土に鈍い光沢をもつ赤色の特徴的な砂礫を多量に含む。8世紀初頭頃に見られる形態と思われる。

第85図1は鉢である。継ぎ目、指頭痕の凹凸を残し、内外面とも粗いハケ調整を行なう粗製鉢である。ハケは条幅1㎜に対し条間幅2㎜と非常に条間が広い。2・3は広口の壷と考えられる品で、短い口縁が緩やかに頸部から立ち上がる。2は小型で、頸部のくびれが小さいもの。3は外面頸部から口縁部にかけて斜め右下がりの刻線が数条入っており、調整とは別個の装飾的な意味をもつと思われる。4～13は甕である。4は口縁端部が細く尖るもので、甑の可能性がある。5～13はくの字状の口縁部をもつ。5・6は比較的短い口縁のもの。6は胎土に海綿骨片を含む。7は口縁部、8は胴部・9は底部で、それぞれは接合しないが色調や質感がよく似ており、同一個体の可能性がある。8は外面が細かいハケ、内面はヘラケズリかナデかはっきりしない調整。9は丸底である。頸部が厚い点、胴部があまり張らない点、ヘラケズリ様の調整という点で5・6に似る。10は薄手のつくりで、内外面ともあらいハケ調整が多用される。頸部直下の割れ面に環状に欠けた部分があり、その周囲は内外面ともすり鉢状に剝落しており、焼成後に打ち欠いて孔をあけた可能性がある。胎土に海綿骨片を含む。11は丸みをもって非常になめらかに外反する口縁部で、張り出す肩部が付くと思われる。12・13は口縁端部内面に面をもち、頸部が内面で強く屈曲しているもの。内面頸部以下はヨコハケ調整となるようである。13は胎土に海綿骨片を含む。

鉢、壷、甕は時期がよく分からないものが多い。甕11については6世紀代に遡る可能性がある。5・6・7～9については小松市佐々木ノテウラ遺跡Ⅰ期[53]の甕のバリエーションにほぼ相当し、ほぼ同時期の6世紀末～7世紀前半の時期におさまるものと推定する。中でも6は北野博司氏のいう「a手法」口縁[54]にあたり、加賀において7世紀前半の指標的な形態である。12・13はヨコハケ調整の多様、器形の長胴化などより後出的な特徴を有しており、7世紀後半以降の所産であろう。

第86図1は甑である。口縁形態は不明。胴部中位に把手を確認しており、二方に付くと推定される。底部全体が孔になるタイプである。2～4は鍋である。2は頸部の屈曲が緩やかな短胴の鍋。口縁は端部を細く尖りぎみにおさめる。胴部中位に把手が折れたかはがれたかした痕跡を確認した。二方に付く把手が付く部分の胴部内面は円盤状に周囲よりもりあがっており、本体の成形後、把手穴に把手を接合して完成させたと推定される。把手部の胎土は砂礫が多く含まれ、本体とは異なっており、乾燥・焼成時に歪みや割れを防ぐ工夫の一つと思われる。胴部外面には煤が付着するが、一部は把手より上位まで及んでいる。3・4は口径30㎝を超える大型品で胴部内面はヨコハケを入れる。胎土に鈍い光沢をもつ赤色の特徴的な砂礫を多量に含んでおり、特に3では顕著である。3のやや歪んだ口縁は端部をつまみ出してやや下がりぎみに張り出させているが、不揃いで連続しない。外面には指頭痕等による凹凸が見られる。頸部ははっきりと屈曲する。4は直線的な口縁部を除いては3と同巧の品である。

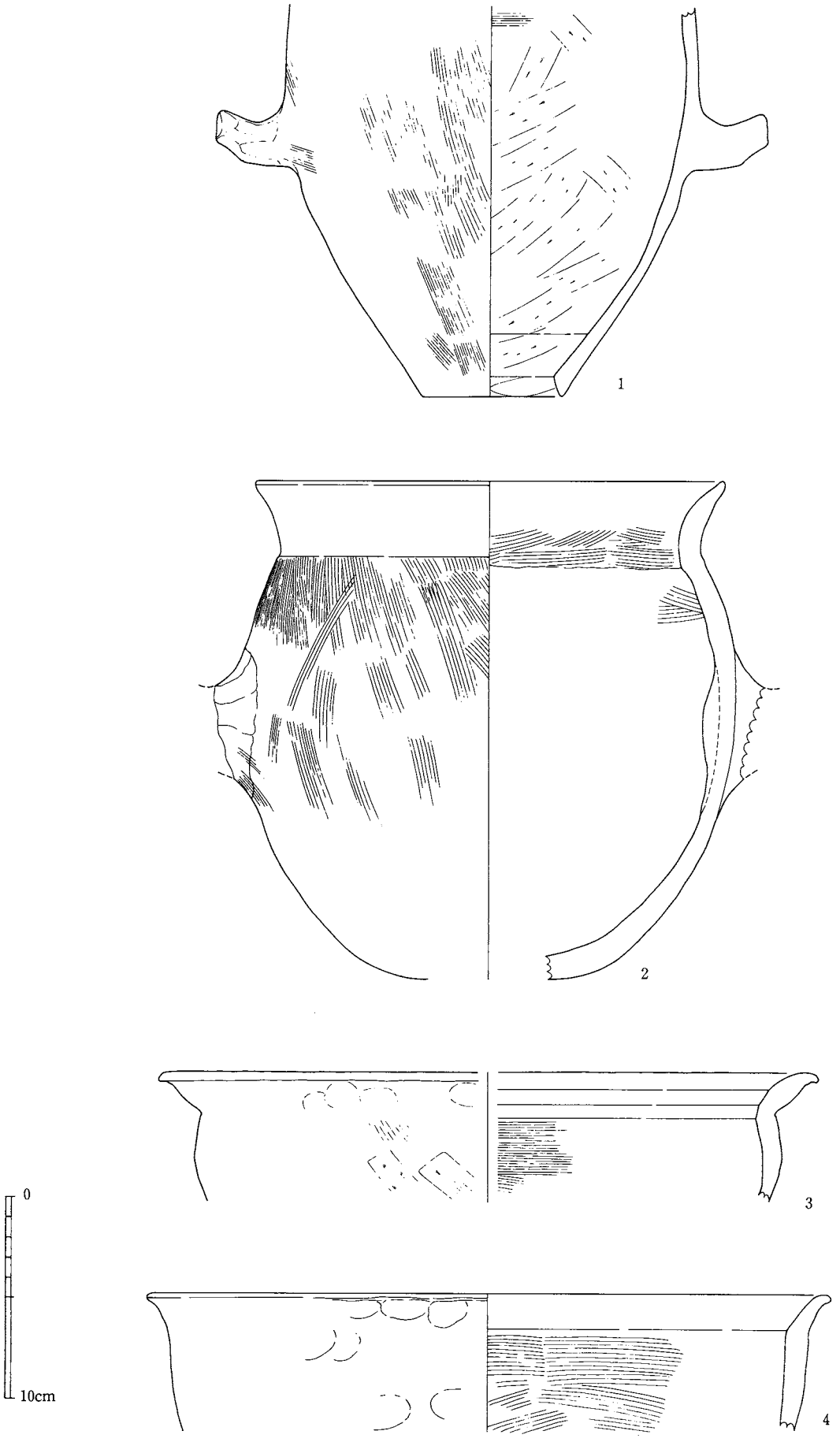
甑1は容量のわりに底孔径が10㎝以下と小さい点で、6世紀代の形態に近い事を指摘できる。鍋2も非ロクロ成形、短胴の6世紀代特有のタイプであり、御経塚ツカダ遺跡80－5号住資料をほぼ下限とする形態と見たい。鍋3・4は非ロクロ成形ながらロクロ成形鍋に近い形態をもち、7世紀後半以降の所産であろう。

第87図1・2は竈の一部になるものと思われる。1は体部上位にめぐる凸帯であろう。2は焚き口部で、廂部が剝離したものであろう。内面は接合痕をはっきり残している。1・2とも時期は不明である。

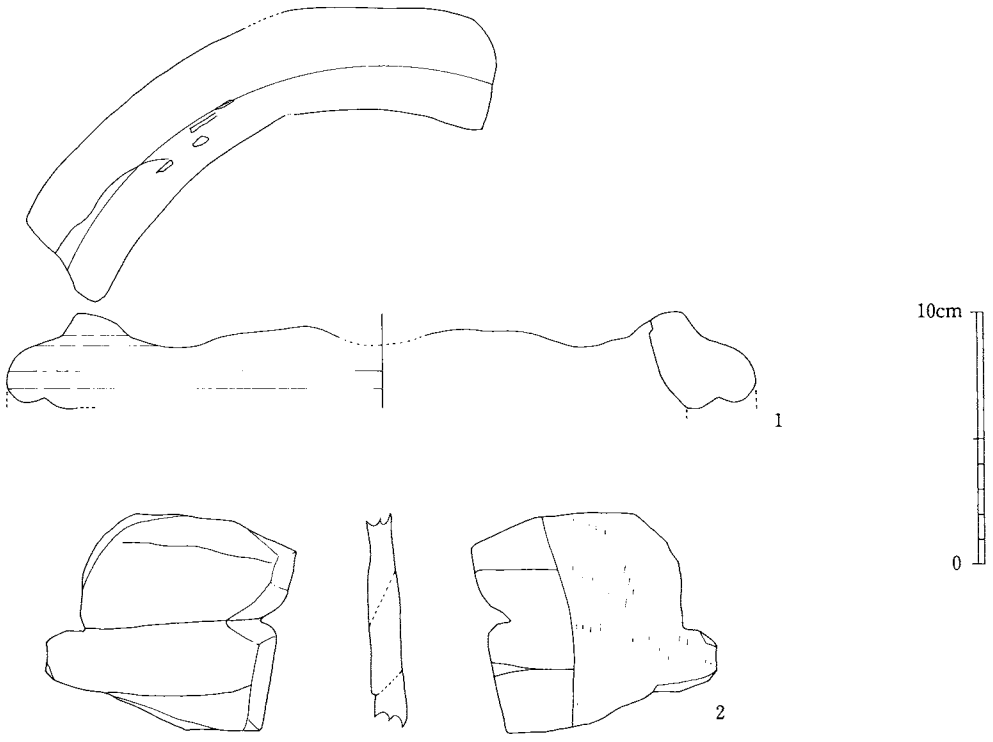
土師器の胎土について

前記した土師器については、筆者の不十分な時期比定と型式分類を補えるかもしれないとの期待を込めて胎土の観察を行っている。その結果、おおまかに次の4種類の胎土が抽出された。

A類　主に石英・長石等と推定される粗粒砂礫（粒径0.5～1㎜程度）を多く含む。さらに大粒の砂礫もよく観



第86図　遺物実測図(3)（Ｓ＝１／３）



第87図　遺物実測図(4)（S＝1／3）

察され、器面に表出しざらざらしている。全体的に砂礫の含みが多い胎土と言える。焼成は良好で硬質に仕上がっており、色調は赤褐色（5YR7／4）を呈するものが多い。第84図3・5・6・11・23、第85図1～3・7～10、第86図1があてはまる。以下、この胎土からなる一群の土師器をA群と称する。

B類　A群に比べ粘土地が粗くシルト的で、含まれる砂礫種は大きく変わらないが、大粒の砂礫が少なくなり全体に細粒化し、その量は少ない。また自形の石英等のごく微小な鉱物が確認されるものもある。海綿骨片は2～3個体に1個体といった頻度ではっきり確認される。焼成はやや甘いものが多く、やや軟質な仕上りを見せる。色調は淡黄色（5Y8／4）や浅黄色（10YR8／3）を呈するものがある。第84図2・4・7・10・13・14・18、第85図5・6・11・12・13、第86図2、第87図1・2があてはまる。以下、B群と称する。

C類　粘土地はB類に似るが、砂礫がより細粒・小粒になり、ほとんど目立たなくなるもの。海綿骨片は2個体に1個体かそれ以上の頻度ではっきり確認される。焼成は甘く、軟質に仕上がるものが多い。色調は第84図8のように橙色（2．5YR7／8）、第84図15・16のように灰白色（10YR8／1）、第84図19のように浅黄色（10YR8／3）と、様々である。C類の胎土については砂礫が極端に少ないため、特徴的な砂礫を欠く複数種類の胎土をひとまとめにしてしまった可能性がある。また、B類との区別は難しい個体も存在する。一応、第84図8・9・12・15・16・19～22、第85図4があてはまる。以下、C群と称する。

D類　シルト質の粘土地に大粒の砂礫が多量に含まれるもの。特に大粒の鉄石英や流紋岩の礫（粒径1～2㎜程度）が大半である。第84図24・25、第86図3・4があてはまる。以下、D群と称する。

土師器の胎土は、観察の対象とした図化品を見る限りではA～C群の三群でほぼ占められており、D群は極端に個体数が少ない。A～C群間では量的な差異ははっきりしないが、時期的にはA群・B群に第84図2～4、10～12、18など6世期末～7世紀初頭を下限とする古い形態の資料が多く含まれるのに対し、C群については第84図8・9・15・16・19～22など7世紀に降る新しい形態の資料でほぼ占められる傾向がはっきりしている。さらにはA群については本遺跡および貝田遺跡で出土した5世紀代の土師器から同質の胎土が認められ、7世紀代にはほぼ存在しないことから、B群より先行して存在し、より早く消失すると思われる。D群については時期が7世紀後半以降、器種が鍋や製塩土器等、頻繁に煮沸されるものに限られるため、C群と併存しつつ耐熱効果を意

識した胎土の群と考えておく。よって本遺跡の土師器の胎土は５世紀～７世紀代にかけて大まかにはＡ類からＢ類そしてＣ類・Ｄ類へと言う変化が起こるようであるが、より細かく見ると遅くとも５世紀代にＡ、６世紀代にＡ・Ｂ、６世紀末～７世紀初頭にはＡ・Ｂ・Ｃ、７世紀前半ではＢ・Ｃ、７世紀後半以降はＣ・Ｄとなる漸移的な推移を想定できる。この変化は胎土の軟質・細粒化と見る事ができるが、おそらくはこの時期の土師器食膳具・煮沸具の変化と一体的に進行する動きと思われ、社会・生活の変化を如実に反映しているものと理解しておきたい。なお、Ａ～Ｄ各群の土師器の生産地については、遺跡の近隣と考えている。

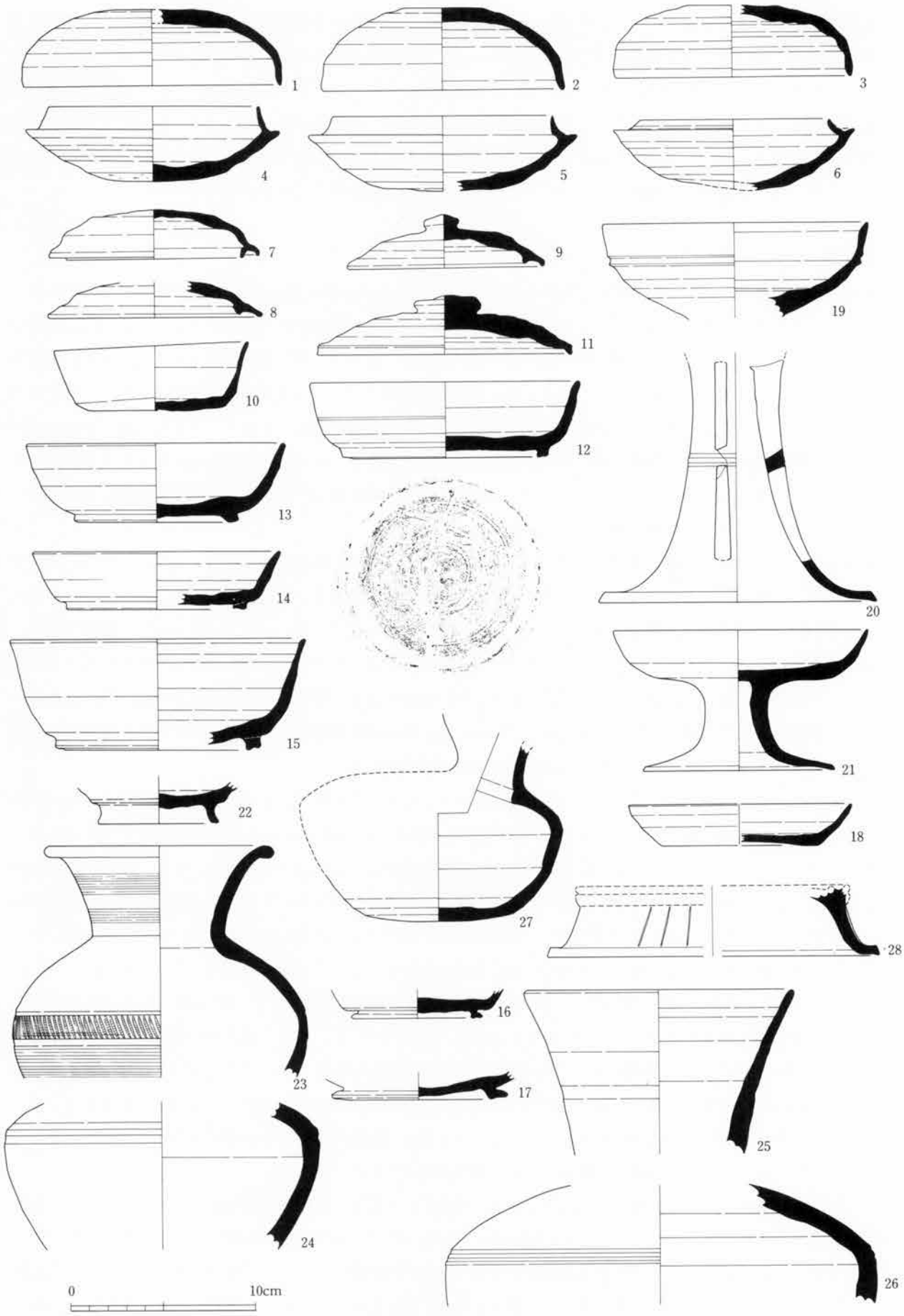
須恵器（第88図～第91図）

第88図１～17は杯である。１～６は椀器形の蓋身セットで、杯身口縁部に蓋受けをもつ、いわゆる杯Ｈであり、１～３は倒椀器形の杯蓋である。１・２は天井部にロクロヘラケズリ調整を行い仕上げており、全体的にも稜がはっきりしている。３は１・２よりやや小振りで、天井部にロクロヘラケズリ調整が見られず、全体的に角が取れて丸みを帯びる器形。４～６は杯身である。４・５は底部をロクロヘラケズリ調整で仕上げており、蓋受けから内屈して伸びる口縁部が長めのもの。５は底部内面にタタキ調整痕が残る。６は４・５より小振りでロクロヘラケズリ調整が見られず、口縁部が短いもの。杯Ｈは蓋１・２、身４・５が田辺編年の和泉陶邑窯ＴＫ43型式の新相に、蓋３・身６が後続しヘラケズリが消える段階、同ＴＫ209型式に比定され、杯Ｈ総体では６世紀後半～７世紀初頭頃に位置付けが可能である[10]。

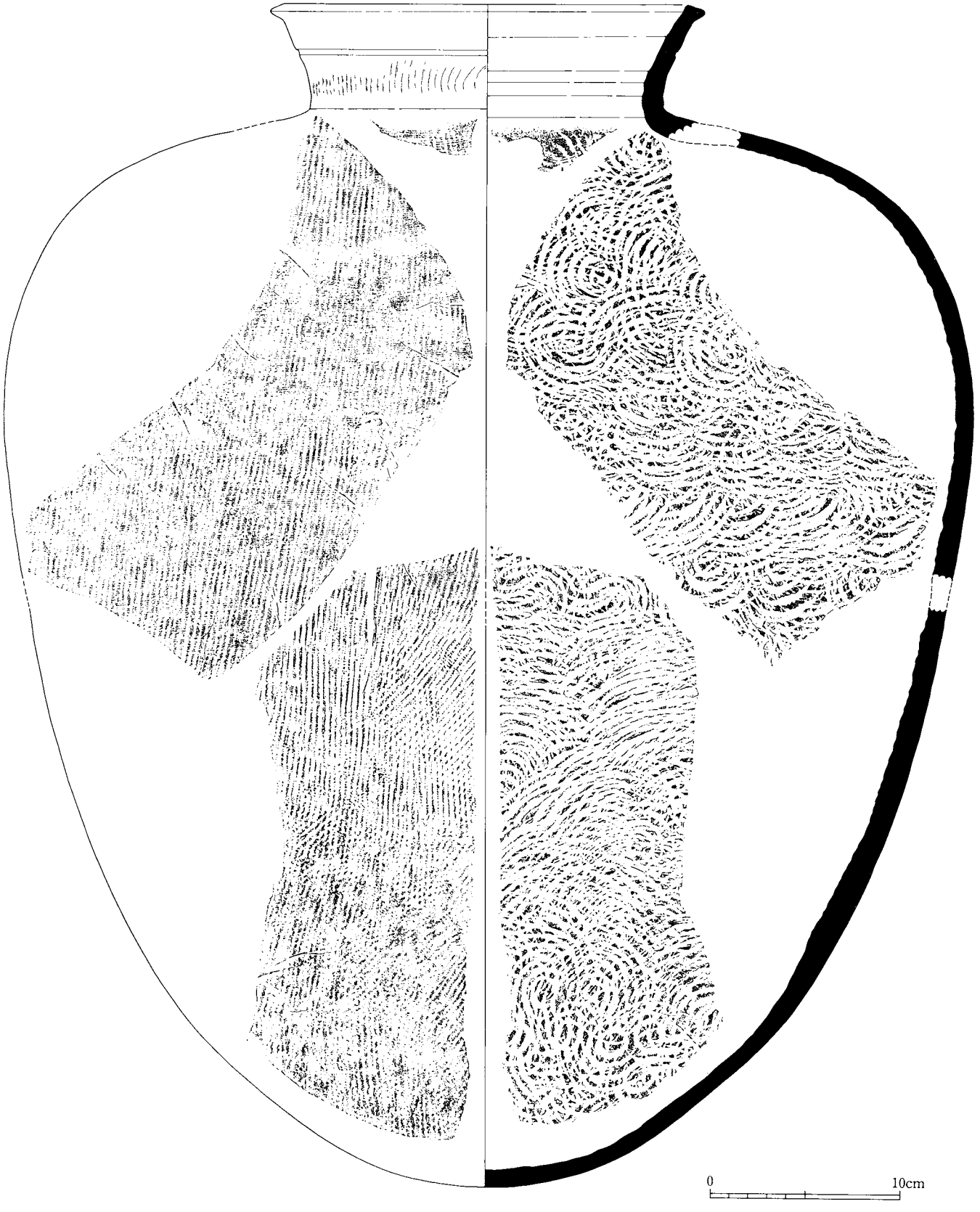
第88図７～10は仏器の影響を受けたと思われる器形の蓋身セットで、杯蓋端部に返しをもつ、いわゆる杯Ｇである。７～９は杯蓋である。７は内側のかえしが伸び、外側の口縁端部よりも突き出るもの。つまみをもっておらず、器形的には蓋だが、実際には身として使われていた可能性が高い。８は低平だが厚く幅広で重厚な感じのかえしをもつ。９は７・８よりさらに低平でさりげない感じのかえしをもち、宝殊形ながらやや稜が鈍いつまみがつく。10は杯身である。口径10.6cm、底径7.4cm、器高3.8cmを測る。口縁部・底部間は切り放し前のロクロヘラケズリ調整によって、はっきりした面と稜で区切られる。杯Ｇは田嶋編年[55]のII$_1$期、７世紀第３四半期頃に位置付けられよう。ただし蓋９についてはこれをやや遡る可能性がある。

11～17は底部に高台をもち、返しをもたない蓋身セット、いわゆる杯Ｂである。11は杯蓋で、口径14cm、器高（つまみ含む）3.3cmを測る。厚手のつくりで重量感がある器形で、端部は外展ぎみの断面三角形におさめる。偏平なボタン状のつまみがつく。12～17は杯身。12は底部が全存し、底径11.4cmを測る。高台は底面平坦なものがまっすぐつく。口縁部中ほど外面には強いロクロナデにより沈線状の凹みが見られる。13は外展する高台がつく。14は12・13よりも偏平な器形で身が浅く、口縁部はより外傾する。高台も低く幅が広い偏平なものになる。15は非常に深身の器形である。16・17は底部・高台のみが全存するもので、非常に特徴的な形態の高台がつく。16の高台は径7.2cmと小型、付け根は細く、端で内外方へ肥厚され突出するタイプ。17の高台は径9.5cmで、外展しさらに外側へ強く突出するタイプ。底部は中心に向かって凹んでいく。底部・高台とも焼き崩れたものではなく、製作当初から意図された抑揚が利いた器形と思われる。杯Ｂの時期については、身13・17は田嶋編年[55]II$_3$期（７世紀末～８世紀初頭）頃に、蓋11、身12・14は同III期からIV$_1$期（８世紀前半～中葉）頃に比定できよう。身15は平安時代、９世紀前半代の所産と推定される。18は無台で無蓋の杯、すなわち杯Ａである。偏平な器形で口縁は大きく外傾する。平安時代、９世紀前半代の所産であろうか。

19～21は高杯である。19は杯部、無蓋高杯である。椀器形の坏部は、口縁部中位に設ける沈線の上下端を突帯状に少し張り出させる。突帯をもつ系譜の末期的なものと思われる。20は脚部、大型で２段３方透かしを入れており、有蓋品の脚部と思われる。胎土に海綿骨片が含まれる。21は19とは別タイプの無蓋高杯。径のわりに低器高で偏平な杯部・脚部からなる。脚部は中空で裾は水平近くまで大きく外反する。色調が明灰白色を呈し、胎土が砂礫をほとんど含まずきわめて軟質、独特の質感を有する。高杯では19・20がＴＫ209～217型式をほぼ下限と



第88図　遺物実測図(5)（S＝1／3）



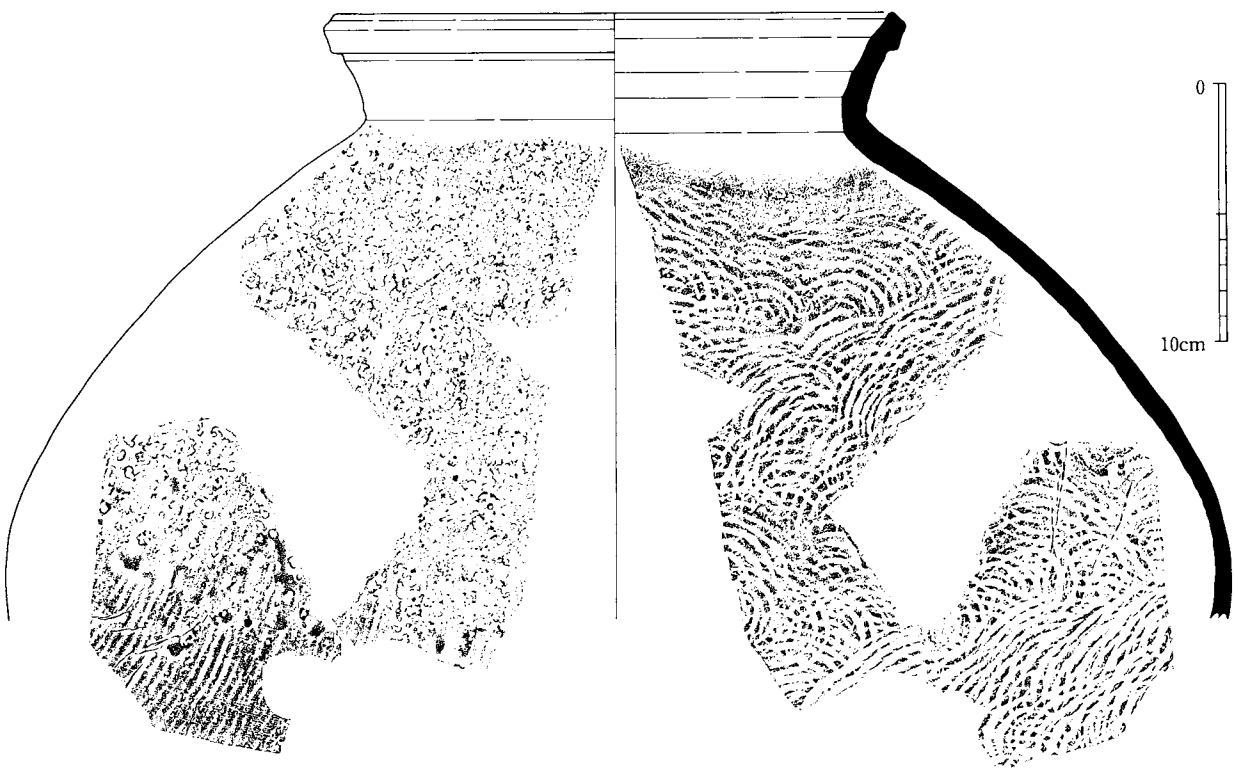
第89図　遺物実測図(6)（Ｓ＝１／３）

する形態と見る。21は杯部の形態から7世紀末以降の所産であろう。22はやや外展ぎみの器高の高い高台をもつ底部で、底部のみ全存する。平安時代の椀か皿で、9世紀後半以降の品と考える。

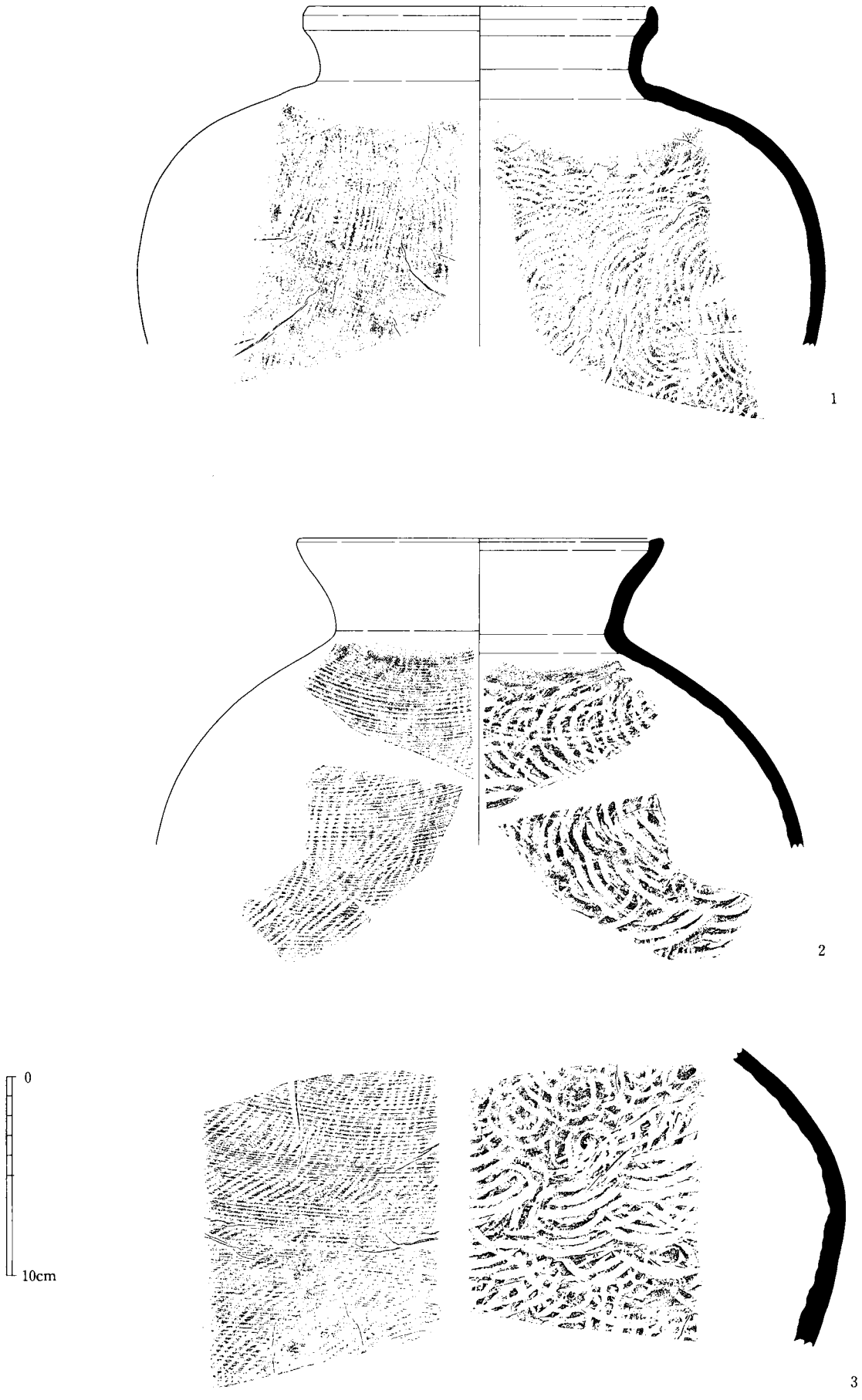
杯類についてはロクロの回転方向は調整の観察からみると全般に時計周り、すなわち右回転のようである。

23～26は瓶である。23は広口の瓶。厚い自然釉に覆われて頚部から肩部では不明確であるが、おそらくほぼ全面カキメ調整が入ると思われる。最大径をとる胴部中位には2条の浅い沈線間に斜位の刻みを巡らせる。24は瓶の肩部。胴部最大径をとる部位の直上に幅広の沈線を2条、段状に施している。25は瓶の口縁部、直線的に外展して長く伸びる。26は瓶の肩部。24とほぼ同様の沈線をもつが、より大型品と思われる。25・26は焼成や自然釉の付き具合から同一個体で、台付長頚瓶と推定する。27は平瓶である。口縁部端と、口縁部がつかない側の体部を欠損する。全体的に丸みを持った器形で、底面はロクロヘラケズリ調整で仕上げられる。底面には灰白色の粗砂が溶着しており、乾燥時か焼成時に安置された場所にあった砂と思われる。28は円面硯である。円面部分が剥離してのこっていない。脚は沈線を装飾とし、透かしはあるが単位は不明、裾は水平に屈曲し端に面を取っておさまっている。21と同質のきわめて精良で軟質な胎土からなり、色調は灰白色を呈する。瓶23は7世紀前半に位置付けられよう。瓶24～27、円面硯28は顕著に見られるようになる時期を考えると7世紀前半代には遡りにくい形態であり、7世紀後半以降の所産で8世紀に降る可能性も高いものと考えておきたい。

第89図～第91図は甕である。第89図は破片は多いが接合する部位が少なかったため、図上復元とした。復元値で口径22cm、器高65cm、最大径52cmを超える大型の甕である。直線的に外傾してひらく口縁部は端に面を取り、少し外面へ突出ぎみにおさめる。胴部外面の平行タタキ調整は一部ですり消した痕跡、及び使用により磨耗した痕跡がみられる。また口縁部下位から頚部にも痕跡をとどめており、外面前面にわたるタタキ調整の存在をうかがわせる。第90図は口縁部端を外側へ肥厚して面を取り、突帯状におさめている。残存する胴部の上半外面については自然釉が厚く付着して調整不明となっているが、おそらく下半と同様であろう。第91図1は口縁部の端を細く立ち上がらせておさめる。胴部外面の調整は太い木目が条に直交して格子状に見える平行タタキ、のちカキメ調整と思われる。その上から不整な自然釉が縦位に縞状に何本も走り、交差している。焼成時に燃料に使われ



第90図　遺物実測図(7)（S＝1／3）



第91図　遺物実測図(8)（S＝１／３）

た草木が載ったのであろうか。2は口縁部が長く、外半ぎみで、その端部は内面に肥厚して面を取っておさめる。胴部内面は同心円あて具痕の上から軽いヨコナデが入っている。3は胴部破片で、2と同一個体であろう。甕については、全体的に平行タタキと同心円当て具の原体は条間に比べてわりと条が細めと言えよう。その時期については主に口縁形態から推定しており、第90図の甕は6世紀代、第91図1～3は7世紀前半代、第89図の甕は8世紀代にそれぞれ類例が多いと思われるが、その上下限については必ずしも明確ではない。

この他、図化していないが須恵器の熔着資料が出土しており、杯＋杯、杯＋甕、杯＋？の3点が認められる。

須恵器の胎土

須恵器について、石川県下では各窯跡群で産出された須恵器の胎土の特徴がある程度把握されており、集落遺跡出土須恵器の生産地を胎土観察によって比定する検討手法が定着して久しい。当遺跡出土の須恵器についても既存の範型と比較するならばその産地と搬入状況を明らかにできるものと考え、胎土の観察を行った[56]。その結果は、大まかに次の4グループが抽出された。その名称は、前述した土師器胎土から連番とし、E～I類とした。

E類　全般に粘土地は緻密で、含まれる砂礫の量が多い。砂礫は大粒小粒を問わず長石や石英が顕著で、大粒のものは器面によく浮き出す。焼成は良好で、硬質に仕上がったものが多く、その際に色調は暗青灰色（10BG4／1）を呈する。第88図2・4・5・7～11・13・14・15・17、第89図があてはまる。産地を鳥屋窯跡群に比定できる胎土である。以下、この胎土からなる一群の須恵器をE群と称する。

F類　海成粘土と思われる、低密度で軽量な粗い粘土からなる素地を有し、比較的均質な細砂を多く含むもの。かなり精選された砂を混和しているものと思われる。この他風化が著しい長石、自形の石英等の微小な鉱物、海綿骨片も見られる。焼成は良好で硬質な仕上りのものが多いが、器面はややざらつきぎみである。色調は明青灰色（5PB7／1）を呈するものが多い。第88図3・12・15・16・18・19・20・23～27、第90図、第91図1～3があてはまる。また、9世紀以降に位置付けられる第88図22の胎土もこの類と思われる。産地は一部が羽咋窯跡群産に比定できる胎土と思われるが、現在把握されている同窯跡の須恵器の胎土、時期にあてはまらないものも多い。以下、F群と称するが、F群はE～H群中で最も胎土・質感にバラエティーを有する群であり、将来的には細分と、より細かな産地、窯跡比定を要しよう。

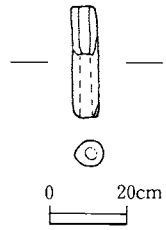
G類　粘土地はE類に似るが、砂礫をほとんど含まない精良な胎土のもの。自形の石英等の微小な鉱物を含むものがある。焼成は良好で、器面は平滑、湿った感じを醸す。第88図1・6があてはまる。以下、G群と称する。

H類　シルト質の粗い粘土地に、砂礫をほとんど含まない精良な胎土。自形の石英等の微小な鉱物は含む。焼成は甘く、非常に軟質、色調は明るい灰白色（7.5Y8／7）を呈する特徴的な質感をもっている。第88図21・28があてはまるが、この他にも全体からみれば少量ではあるが各器種に6世紀から9世紀にかけての時期幅をもって存在する。残念ながら大半が磨耗した小破片であり、図化を断念している。以下、H群と称する。

須恵器の胎土については、E群、F群でそのほとんどが占められ、かつ6世紀から9世紀にわたって広く認められる。G群、H群はごく少量である。以下はこの順に各群の状況について述べておきたい。E群は鳥屋窯跡群産と想定され、本遺跡出土須恵器の主要な生産地の一つに数えられる。6世紀末頃では深沢2号窯、8世紀前半頃では春木3号窯の製品が良好な資料としてよく知られている。F群は7世紀後半～8世紀前半にかけての瓶・甕製品、9世紀代の製品が目立つ点がE群と異なるように感じる。産地は羽咋窯跡群を考えているが、現状で確認されている6世紀初頭頃の柳田ウワノ1号窯、6世紀末～7世紀初頭頃の柳田テンジク1・2号窯、7世紀後半頃の柳田タンワリ1号窯出土須恵器では把握できない製品が多く、特に窯跡群が衰微する8世紀以降に顕著である。これらの産地を羽咋、鳥屋窯跡群以外に求めるならば、同質の胎土が産出される羽咋市の周辺に産地が求められる可能性が高いと言えよう。中能登地域においては7世紀前半頃に鹿島郡中島町上町マンダラ窯、9世紀後半に七尾市池崎窯、羽咋郡富来町給分小袋窯、10世紀後半に羽咋郡志賀町倉垣コマクラベ窯などが現在までに確認あるいは存在が指摘されている[57]。口能登地域では高松・押水窯跡群が7世紀代から本格的に稼働する。こ

れらのうち給分小袋窯、倉垣コマクラベ窯は貝田Ｃ遺跡、羽咋窯跡群と同じ羽咋郡の北部に位置しており、時期的には後出ながら、その製品の多量の細砂、海綿骨片を含む胎土・質感は、Ｆ群の製品に酷似するものである。また高松・押水窯跡群の製品に類似する点もある。今回は各窯跡の胎土を明確に特定できていないが、貝田Ｃ遺跡のＦ群須恵器については羽咋窯跡群と、富来・志賀の須恵器窯跡のどちらかに比定できる製品が主体になる印象を得ている。Ｇ群はごく少量な上、図化されたものの限りでは７世紀以前に限定されてしまい、以降の時期については不明確である。おそらくは基本的にＥ群・Ｆ群を補う程度のあり方と想定される。Ｉ群は少量ながら時期的には６～８世紀にかけて、器種的には杯・高杯・甕・瓶・円面硯などかなり普遍的に見られる。耐久性が非常に低い製品と推定されるが、かなり継続的に供給された群と見る事ができる。その使用実態についても興味深く、今後注目していくべきであろう。Ｈ群の製品は、本遺跡と近接する窯跡が存在し、ゆえに焼成不良品が恒常的に搬入されたものと考えるが、断定するべきではなく、独特の質感を意図した製品、祭祀用途など多様な生産・供給の状況を想定していくべきとも考える。Ｈ群の産地についてはＥ群に近い地域、Ｉ群の産地についてはＦ群に近い地域と考えている。

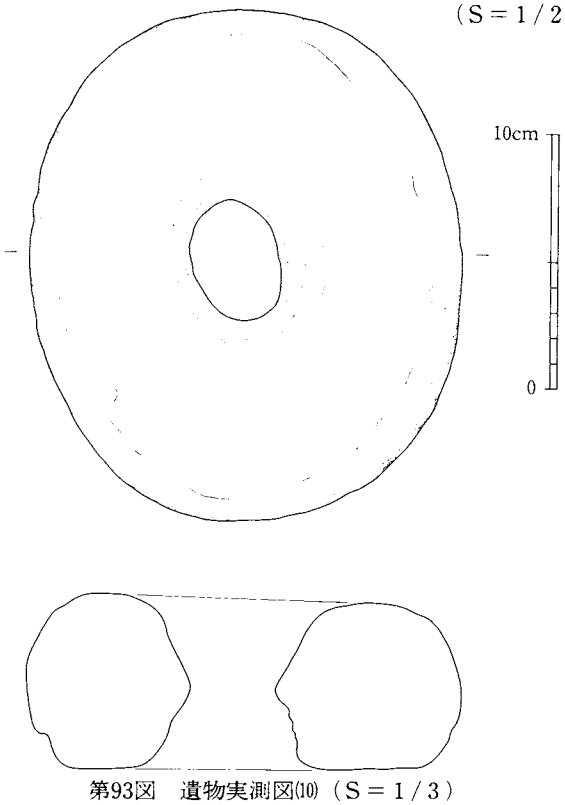
以上の胎土Ｅ～Ｈ類の群毎に見られた時期・器種の偏りは須恵器窯、集落、そして地域の性格や消長が反映されたものと思われる。貝田Ｃ遺跡への須恵器の供給は胎土Ｅ類、胎土Ｆ類の産地から主になされ、６世紀後半から９世紀前半にかけては基本的に変わる事はないようである。胎土Ｆ類は鳥屋窯跡群に比定したＥ類と並んで貝田Ｃ遺跡出土須恵器の主要胎土であり、その産地が時期に応じて羽咋窯跡群と富来・志賀窯跡の間で変動したとしても、羽咋郡北部の窯跡で集落遺跡への須恵器の供給を中心的に賄った様相を提示したものと考える。「胎土Ｆ類」についての細分とより詳細な産地比定は、現状では資料的な制約が強いため行い得なかったが、将来的には資料の増加とともに今回の不十分な点が補われ、当地域や周辺地域の集落遺跡についてその存在が検討されることを望むものである。



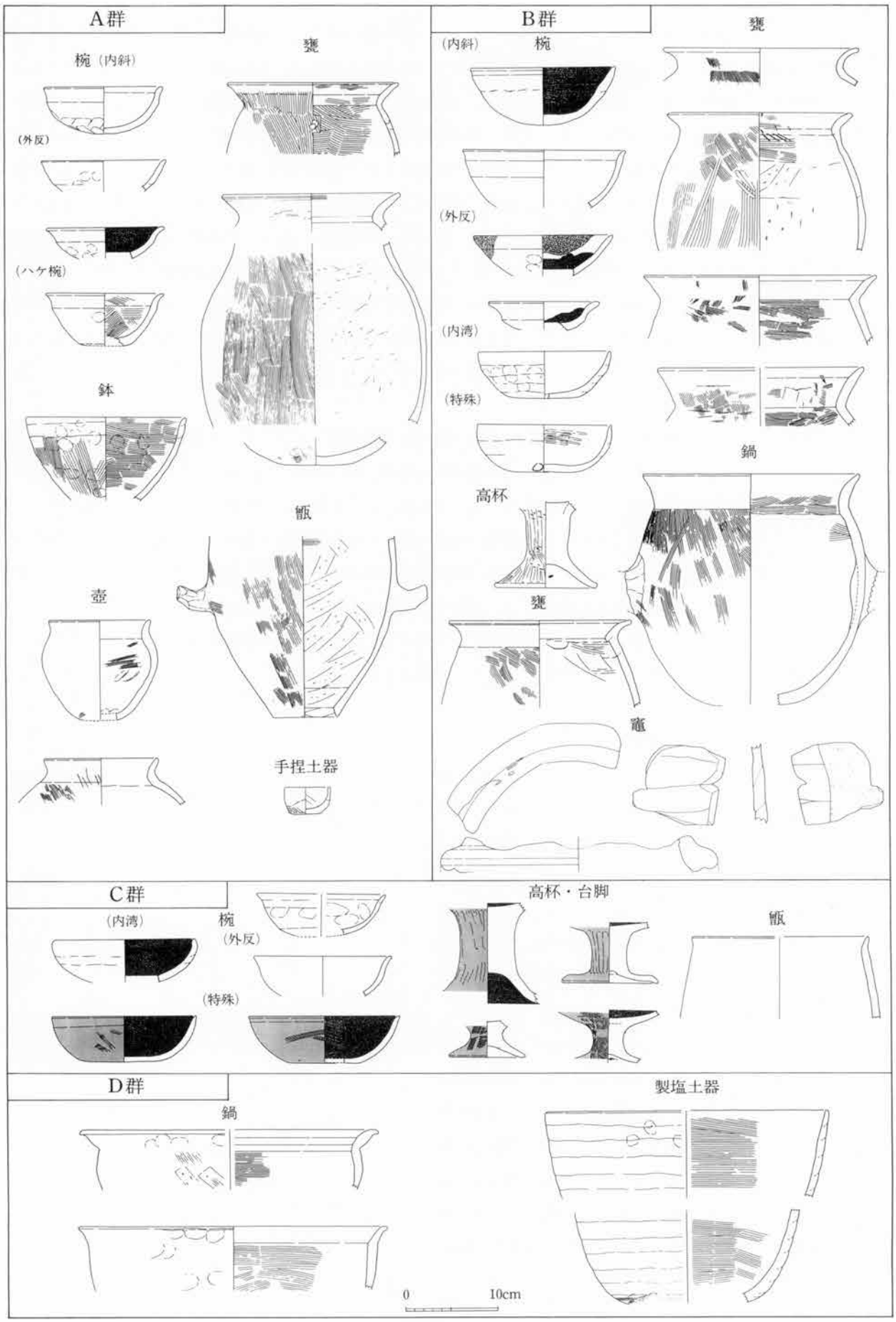
第92図　遺物実測図(9)（Ｓ＝１／２）

石器・石製品（第92図・第93図）

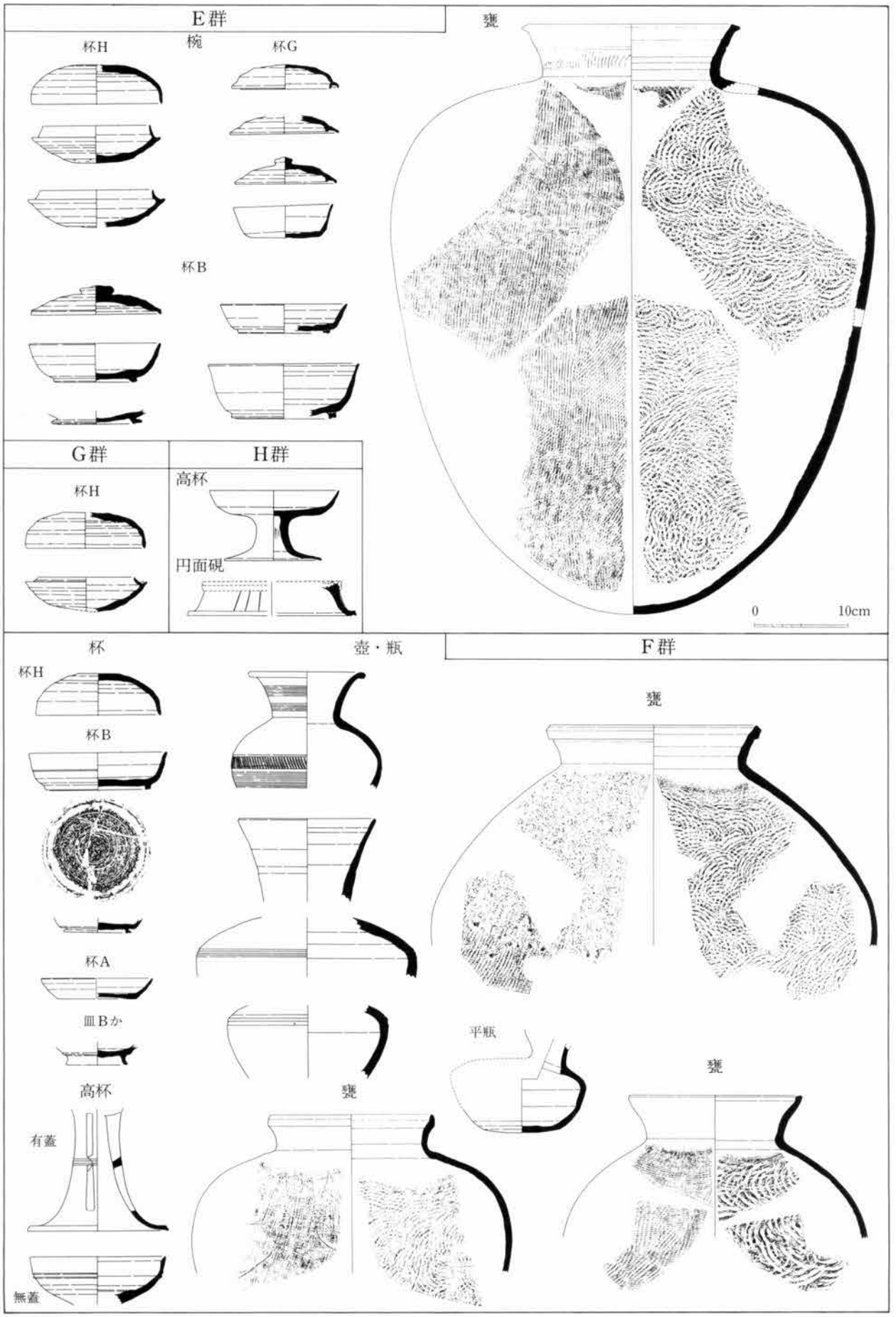
第92図は管玉である。一部欠損するが、長さ３cm、幅・厚さ0.7cm、孔径0.3cmを測る大型品で、両面から穿孔されており、石材は緑色凝灰岩と思われる。時期は弥生時代ころと思われるが、詳細な時期は不明。第93図は楕円形の円盤状の石の中央に穴があいている。穴径は中央部が最も狭くなっており、両側から空けられたと思われる。県外では縄文時代、弥生時代に類例が求められる[58]が、ともに用途は不明である。長さ20.5cm、幅17.1cm、厚さ7.1cm、重さ3350g、穴径3.5～4.9cmを測る。石材は安山岩である。第93図の石器は弥生時代以前の時期と考えたいところであるが、出土遺物から考えて古墳時代以降に降る可能性も否定はできない。結論は確実な共伴土器をもつ類例の増加に委ねたい。この他、図化しなかったが凹み石や叩き石、軽石、砥石、輝石安山岩剥片が何点か出土している。それらの時期については第93図の石器と同様に考えたい。



第93図　遺物実測図(10)（Ｓ＝１／３）



第94図　貝田C遺跡出土土師器の胎土（S＝1／6）



第95図　貝田Ｃ遺跡出土須恵器の胎土（S＝1／6）

第4節　小　結

貝田C遺跡はその発見時から山裾の緩傾斜地に立地する集落遺跡と推定されていた。今回の発掘調査で検出された遺構は広範囲の落ち込みのみであり、住居・建物跡などは確認されなかった。よって集落の規模・構成などは全く不明である。調査区は遺跡の縁辺部で低湿地への地勢の変換ライン上に相当し、遺跡の中心はより山側と推定される。出土遺物は前述した通り6世紀後半以降の土師器・須恵器を中心としており、胎土別で複数のグループで構成されている様相を示し得た。より古い時期では弥生後期の土器、5世紀～6世紀前半の土師器・須恵器が散見される。6世紀後半～7世紀前半は遺物が最も多く、7世紀後半～8世紀前半、8世紀後半～9世紀代はこれに次ぐ量を確認できる。以降の遺物は10世紀～12世紀頃の土師器の他、時期不明の陶磁器数片があるのみである。すなわち遺物においては潜在的に弥生後期から古墳中期、主には古墳時代後期から平安時代前期、また潜在的に中世前期にかけて継起性があり、集落の存続期間をある程度反映すると考えると、かなり長期間営まれた集落と推定される。ただし遺物が希薄かほぼ空白な小期も確実に存在するようであり、集落の断続を示すものかもしれない。富来川流域においてはこれまでに弥生時代で山王丸山遺跡、古墳時代で高田遺跡、平安時代で田中遺跡等の調査例があるが、貝田C遺跡からはその希薄な部分を埋める時期の遺物が出土していることも注目できる。今回の調査ではまだまだ遺跡の実像を明らかにできていないが、この地域で資料を蓄積した意義は小さくないものと考える。

第27表　貝田C遺跡出土遺物一覧

挿図No.	遺物種類	器種	実測No.	備考
第84図1	弥生土器	高杯	C 37	
2	土師器	椀	D143	
3	土師器	椀	D136	
4	土師器	椀	D135	
5	土師器	椀	D133	
6	土師器	椀	D124	
7	土師器	椀	D123	
8	土師器	椀	D139	
9	土師器	椀	D126	
10	土師器	椀	D125	
11	土師器	椀	D140	
12	土師器	椀	D128	
13	土師器	椀	D137	
14	土師器	椀	D138	
15	土師器	椀	D141	
16	土師器	椀	D142	
17	土師器	椀	D130	
18	土師器	高杯	D129	
19	土師器	高杯	D152	
20	土師器	高杯	D132	
21	土師器	高杯	D131	
22	土師器	器台	D160	
23	土師器	手づくね	D145	
24	製塩土器		D148	
25	製塩土器		D148	
第85図1	土師器	鉢	D144	
2	土師器	壺	D134	
3	土師器	壺	D146	
4	土師器	甕	D153	
5	土師器	甕	D150	
6	土師器	甕	D156	
7	土師器	甕	D151	
8	土師器	甕	D151	
9	土師器	甕	D151	
10	土師器	甕	D154	
11	土師器	甕	D127	
12	土師器	甕	D157	
13	土師器	甕	D155	
第86図1	土師器	甑	D147	
2	土師器	鍋	C 6	
3	土師器	鍋	D149	
4	土師器	鍋	D158	
第87図1	竈		D535	
2	竈		C536	
第88図1	須恵器	杯蓋	D163	
2	須恵器	杯蓋	D179	
3	須恵器	杯蓋	D185	
4	須恵器	杯身	D170	
5	須恵器	杯身	D161	
6	須恵器	杯身	D177	
7	須恵器	杯蓋	D167	
8	須恵器	杯蓋	D162	
9	須恵器	杯蓋	D172	
10	須恵器	杯身	D180	
11	須恵器	杯蓋	D168	
12	須恵器	杯身	D165	
13	須恵器	杯身	D166	
14	須恵器	杯身	D188	
15	須恵器	杯身	D189	
16	須恵器	杯身	D176	
17	須恵器	杯身	D178	
18	須恵器	杯	D164	
19	須恵器	高杯	D169	
20	須恵器	高杯	D171	
21	須恵器	高杯	D181	
22	須恵器	底部	D175	
23	須恵器	瓶	D173	
24	須恵器	瓶	D174	
25	須恵器	瓶	D187	
26	須恵器	瓶	D187	
27	須恵器	平瓶	D502	
28	須恵器	円面硯	D190	
第89図	須恵器	甕	D186	
第90図	須恵器	甕	D182	
第91図1	須恵器	甕	D183	
2	須恵器	甕	D184	D184－2
3	須恵器	甕	D184	D184－1
第92図	管玉		石54	
第93図	石器		石45	

第Ⅶ章　考　　察

序　　節

本書においては、県営ほ場整備事業貝田地区の施工に係り、富来町貝田地内において平成3年度から4年度に行われた貝田遺跡・貝田C遺跡の発掘調査の内容について、第Ⅱ章から第Ⅵ章にわたって報告してきた。発掘調査についてはその性格上、層位的、面積的に強く限定されたため、明確に認識できた遺構は少なく、かつ全形を捉えがたい。したがって出土した遺物についても明確な遺構に伴う資料は少ない状況であった。しかしながら貝田地区の46.5ha の水田域に対して網羅的に行われた分布調査、また複数の地点で集中的に行われた発掘調査は、同地区の遺跡の分布状況と時期をかなり鮮明に描き出したものと思われる。特に、出土遺物については縄文時代から中近世に至るまでの、土器・陶磁器を中心とする多種多様な資料を蓄積している。

縄文時代については土器資料が皆無であるため、その時期的な位置付けが不可能である。弥生時代については貝田遺跡において、時期的には弥生後期後半期にほぼ集約された土器群を見ることができ、この時期の遺跡の顕著な活性化を読み取る事ができた。

古墳時代、古代、中世においては、それぞれの時代である程度まとまりを持って特定の小期に区分される土器・陶磁器資料が複数群得られており、各群を序列、比較する事によりその推移を追う事が可能なものと思われる。しかし本書第Ⅲ章から第Ⅵ章では調査区単位の出土遺物の説明に終始し、全体的な流れを示す機会を得なかった。そこで本章では貝田遺跡と貝田C遺跡出土の古墳時代から中世に至る土器・陶磁器資料について、主に時期、器種組成、胎土等の観点から様相を整理し、推移を辿る作業をまず行いたい。ここでまとめられる様相は土器・陶磁器の変遷を明らかにするための基礎作業であると同時に、遺跡及び地域の動態に深く関連しており、その理解に大きく寄与するものと考える。本章では第1節で土師器・須恵器について、第2節では中世土師器についてそれぞれ検討し、その成果を踏まえて第3節で貝田遺跡・貝田C遺跡及び周辺遺跡の消長から、富来川流域の動向を考え、総括としたい。

第1節　貝田遺跡・貝田C遺跡出土の土師器・須恵器について

1　はじめに

本節では貝田遺跡・貝田C遺跡から出土した土師器・須恵器について、時期的なまとまり毎に区分を行い、主に器種組成、胎土の面から推移を追い、検討を加えてみたい。

本節で扱う土師器・須恵器は、貝田C遺跡出土資料を中心とし、貝田遺跡の第2次・第3次発掘調査出土資料を加えて構成されるものである。資料の出土状況は明確な遺構に伴うものではなく、貝田C遺跡では時期幅の広い落ち込みから、貝田遺跡では時期不明の堆積層から出土している。しかし本書第Ⅳ章から第Ⅵ章でそれぞれ検討した結果、ある程度時期的に限定できる複数群の資料が存在することが明らかになっており、本節の検討が可能と考えたものである。

2　土師器・須恵器の編年観

貝田遺跡・貝田C遺跡出土の須恵器・土師器の編年観はシンポジウム「北陸の古代土器研究の現状と課題」における田嶋明人氏の編年に依拠して、基準資料とされる他遺跡資料を中心に対比して位置付けを進めてきた[59]。これまでの報告を省みると、須恵器よりも土師器の時期区分が甘く、概ねより時期幅を広く持って位置付けられ

ている事が多いと感じる。それは北陸においては須恵器ほどには確立していない現行の土師器の編年観に起因するものであろう。特に能登地方の5世紀から11世紀代にかけては編年の基準となる良好な土師器資料が少なく、したがって土師器と須恵器の共伴およびセット関係が明確な資料が存在しない貝田遺跡・貝田C遺跡資料については細かい時期の比定がかなり困難な状況にある。よって今回は土師器・須恵器それぞれを個別に既存の資料と対比することによる相対的な位置付けを行っており、本節でもそのまま論を進める。比較資料には加賀地方の資料も用いているが、東西に長い北陸の地形からくる伝統的な地域差、また畿内など周辺地域との関係の違いから来る政治的な地域差は当然注意しなければならない。しかし土師器については加賀能登を合わせても十分な質・量とは言い難いほどに資料的な制約が強い現実から、細かい時期・地域差の検討よりも、その型式・系統の流れをおおまかにでも整理することが急務と考えて行ったものである。

3　資料の概要

貝田遺跡

検討の対象になる資料は第2次発掘調査及び第3次発掘調査南調査区から得られている。全て時期が不明確な堆積層出土であり、遺構に伴う品は皆無であるが、様々な時期の土師器・須恵器が一定量確認されている。基本的には5世紀代から11世紀代まであらゆる時期の資料が見られるが、量的に集中する時期と、きわめて希薄かほとんど見られない時期がはっきりしているのが特徴的である。また第2次調査と第3次調査南調査区では隣接しつつも地点が異なり、調査で到達した層位も異なるためか、概ね共通しながらも疎密な時期に若干ちがいが見られた。第2次調査区では5世紀代の資料が明確で、以降は7世紀後半、9世紀前半、9世紀後半～10世紀初頭頃の資料が少量認められる。4世紀、6世紀前半、7世紀前半、8世紀の資料はほぼ認められない。これに対して第3次調査南調査区では5世紀、6世紀後半、7世紀後半、8世紀後半～9世紀前半、10世紀の資料が少量ずつ認められる。4世紀、6世紀前半、7世紀前半、8世紀前半の資料はほぼ認められない。

貝田C遺跡

検討の対象になる資料は落ち込み出土の土師器・須恵器であり、時期幅が広く、古墳時代から平安時代の資料で主に構成されている。5世紀から10世紀までの資料が見られるが、貝田遺跡と同様に量的に密な時期、希薄な時期ははっきり区別できる。前者の時期は6世紀後半～7世紀初頭の資料が最多で、7世紀前半、同後半～8世紀前半、同後半～9世紀前半の資料が少量ずつ認められる。後者の時期は4世紀～6世紀前半、9世紀後半以降となるであろう。

以上から、貝田遺跡・貝田C遺跡の土師器・須恵器資料は量的にまとまった時期をいくつか、かなりはっきりと抽出できる。基本的には4世紀、6世紀前半を除く時期についてはある程度の器種を備えるものと捉えており、本章では古期から順に様相1～6をあてはめて区分することにしたい。すなわち5世紀を様相1、6世紀後半～7世紀前半を様相2、7世紀後半～8世紀前半を様相3、8世紀後半～9世紀前半を様相4、9世紀後半～10世紀を様相5とする。次項では様相1～5をやや時期幅を持った資料群として位置付け、主に器種組成と胎土について検討を加え、推移を追っていきたい。なお、土師器・須恵器の胎土については本書第Ⅵ章で分類した胎土A～H類を全資料に適用させている。

4　土師器・須恵器の様相

様相1（5世紀）

貝田遺跡第2次調査区№12＋10地区から出土した土師器・須恵器を中心資料とする。土師器が大半を占め、須恵器はきわめて少量である。土師器は甕、壷、高杯、手捏土器がある。確実な椀は確認していない。土師器の全ての器種で粗製化が著しく、特に調整に顕著である。器種毎の質感の差は小さく、甕も壷も高杯もほぼ一様な粗

雑さを印象付け、特徴的と言える。土師器の胎土はA類とB類が見られ、A類が主体である。器種間の差はほとんどなく、甕も壷も高杯も大小の砂礫を多量に混和する胎土で製作されている。須恵器は和泉陶邑窯産でTK208～23型式の瓲がある。土師器高杯には田嶋編年3様式に比定できるものがあり、須恵器と共伴して矛盾はない。

様相2（6世紀後半～7世紀前半）

貝田C遺跡落ち込みから出土した土師器・須恵器を中心資料とする。6世紀末～7世紀初頭の時期が中心になると考えているが、6世紀後半、7世紀前半代の資料を少量含み、区別し難いため一括した。様相1に比して格段に須恵器が増加して土師器と並存しているものと思われる。

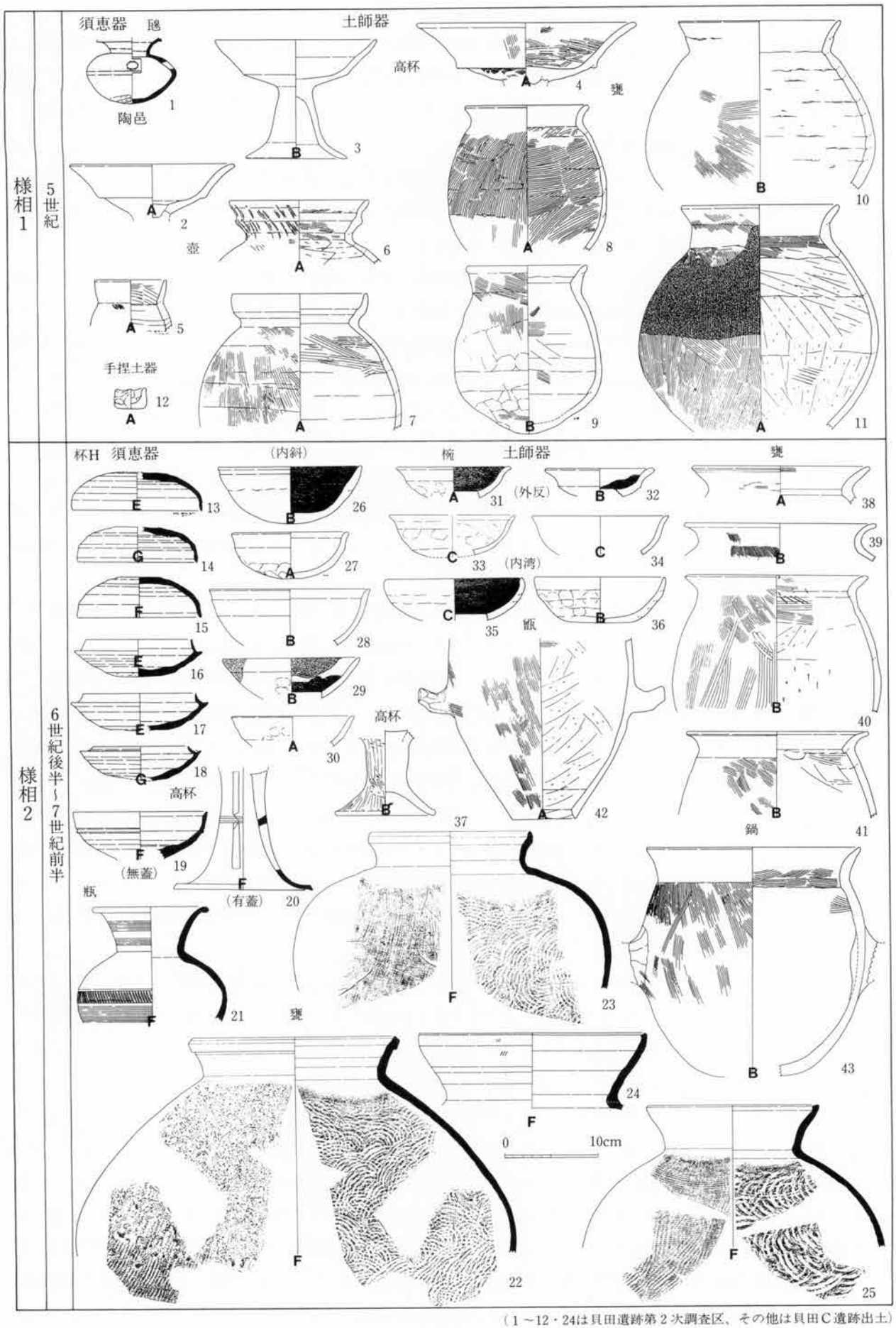
土師器は椀、高杯、甕、甑があり、様相1でみられた粗雑さは椀・高杯では解消されている。土師器椀も須恵器同様に多く、内湾、内斜、外反の口縁形態が見られ、内斜タイプで内面黒色処理されるものが主である。この他、須恵器杯H身を模倣したタイプも確認しており、両器種は確実に互換性を持つものと考えている。椀各形態はおそらく並存しながら漸移的に変化が進み、7世紀代には粗製椀が顕在化しつつ、量的には急減するものと予察する。高杯は基本的に椀に中実の脚台が付いたものと捉えてよかろう。形態変化も椀に準じたものと考えるが、7世紀代においては菅見に及ぶ限り、椀よりも内面黒色仕上げの頻度が高く、あまり顕著に減少していないように感じられ、椀とはやや異なる推移がある可能性もあろう。甕はその主体を新しいタイプに移行しているようである。また鍋、甑が定量存在する。図化品では甕が多く、鍋・甑は少ないように見えるが、把手はかなり多く確認されており、破片で区別し難い器種であるため、この限りではないであろう。土師器の胎土はA～C類が見られ、うちB類が中心である。

須恵器は杯、高杯、甕がある。杯は和泉陶邑窯TK43～217型式並行の杯Hである。高杯は有蓋品と無蓋品が見られる。甕は多くの破片があり、複数の型式が見られる。貯蔵具として一定の量比を占めるようである。須恵器の胎土はE～H類が見られ、全て能登産であろう。うち主体はE類とF類である。須恵器の普及は在地窯の本格的な稼働と集落遺跡への恒常的な供給が可能にしたものである。その主な産地は鹿島郡鳥屋と羽咋郡北部の二つの地域の窯跡群を想定した。両窯跡群ともその成立は様相2の時期を遡り、様相1と様相2の間に入る6世紀初頭～前半に位置付けられる。この前半段階の資料は遺跡周辺では富来町高田遺跡祭祀遺構[60]に存在し、須恵器は土師器に比肩する量比を呈し、この段階から普及している可能性もある。しかし、資料中に在地産の須恵器が顕著でないこと、きわめて祭祀色の濃い遺跡・遺構であることを加味すると、普遍的な存在としては積極的に評価できず、特殊な一部遺跡に大量に搬入され、限られた用途に使用された可能性も考慮しなければならない。本遺跡ではほとんど資料がない段階であり、その様相についてはこの地域の資料の増加を待って検討したい。

様相3（7世紀後半～8世紀前半）

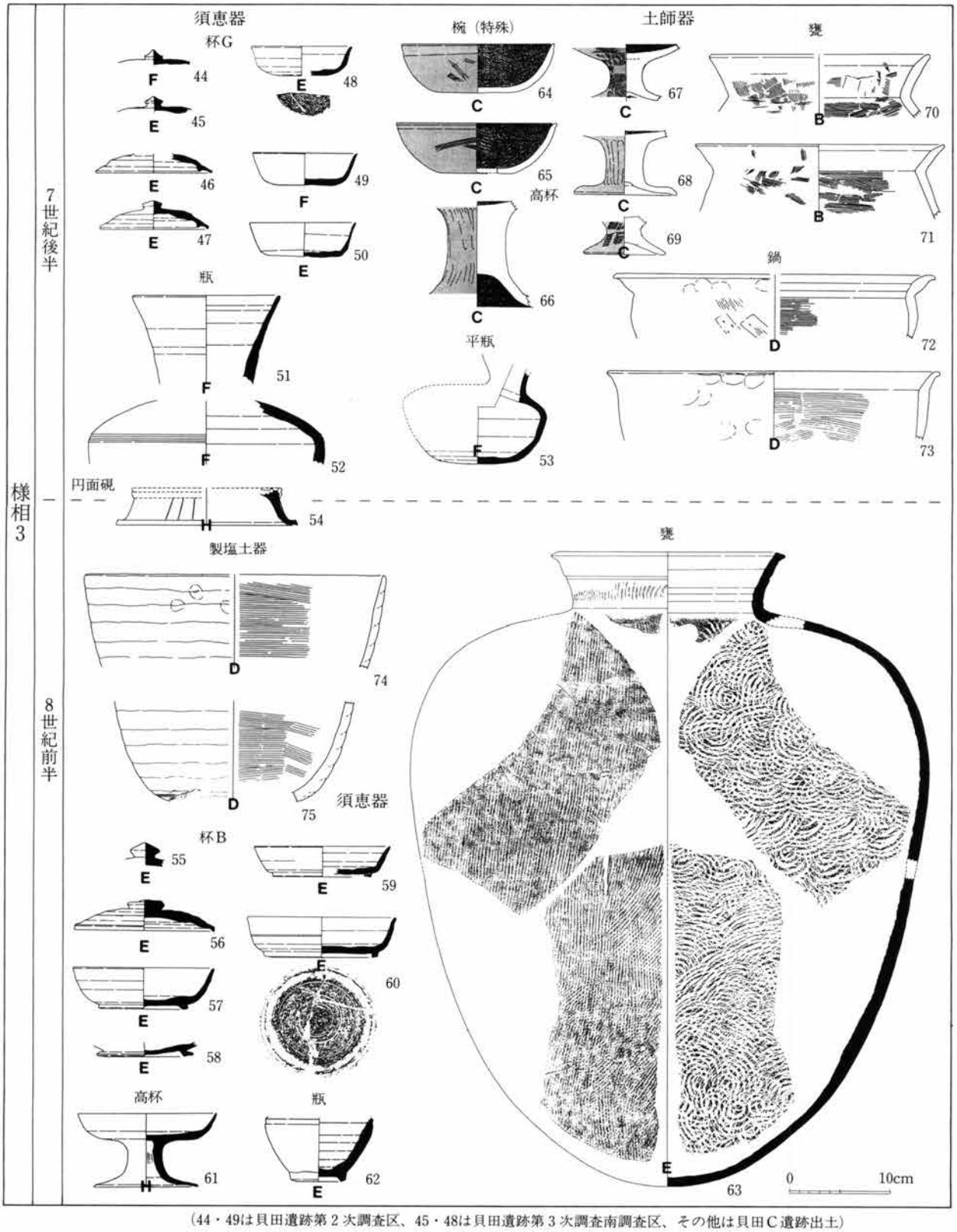
貝田C遺跡落ち込み出土の土師器・須恵器・製塩土器で器種がほぼ揃う他、貝田遺跡第2次調査、同第3次調査南調査区でも少量ずつ資料がある。本来は7世紀後半と8世紀前半とに様相を二分するべきであろうが、資料的な制約から、その境界期となる7世紀末から8世紀初頭を前後する時期の資料の帰属を明確に定めることができず、ここでは一括して捉え古段階・新段階の傾向を指摘するにとどめる。

土師器は椀、甕、鍋がある。椀は様相2と比して量的に急減著しいが、一方で特殊タイプが存在している。特殊タイプはミガキ調整と彩色を施す精製椀であるが、あまり類例を見ない器形と彩色パターンと言える。7世紀代の精製椀は一般にこの古段階に出現するとされ、現在のところ7世紀前半には遡らない。当地域においても精製椀の出現期と見たい。またその顕在化する時期は新段階に降るであろう。甕・鍋はヨコハケの多用、長胴化など須恵器の製作技法の影響を強く受けているものの、非ロクロ成形で古段階に位置付けたものが大半である。新段階は一般には精製椀とロクロ成形甕・鍋が存在し普及する時期とされるが、貝田遺跡・貝田C遺跡では確認されていない。能登地域においては非ロクロ成形のハケ調整甕が8世紀代も存続することは寺家遺跡などでも指摘されており[61]、ロクロ成形甕・鍋の普及が遅れている可能性もあろう。土師器の胎土は椀がC類、甕・鍋がB・



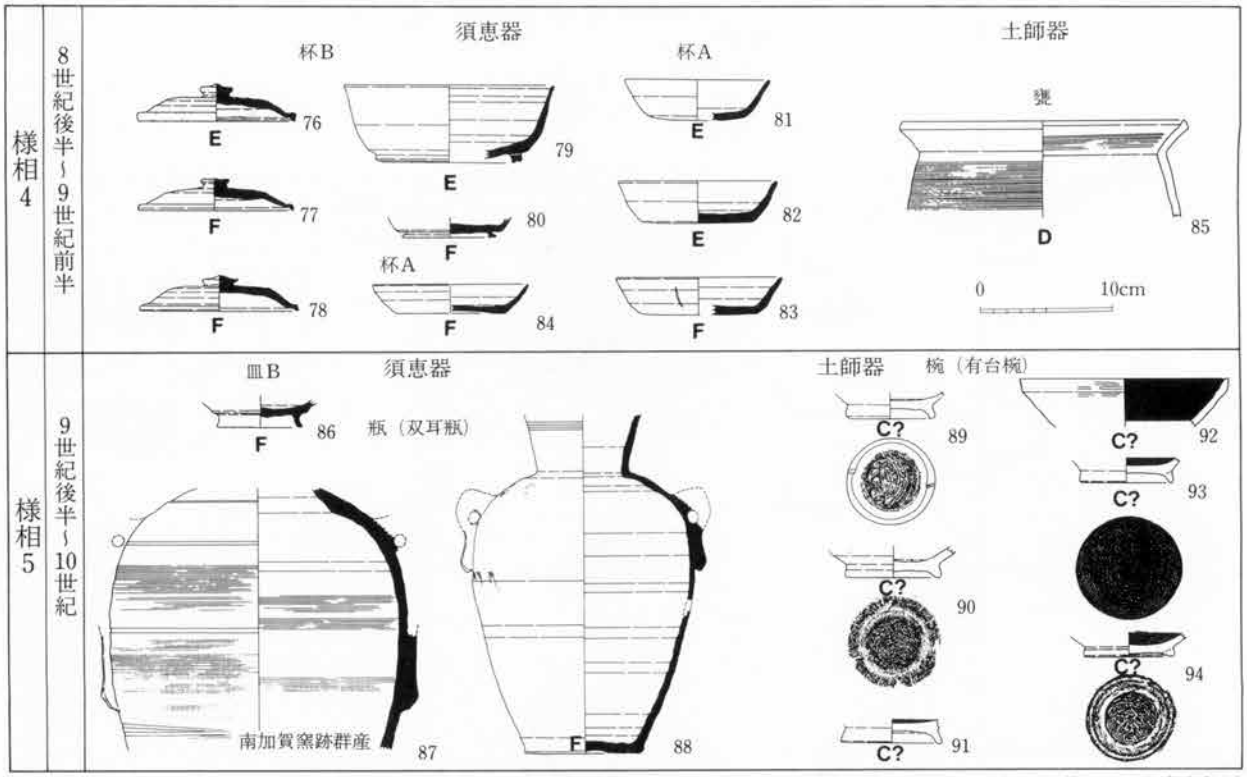
（1～12・24は貝田遺跡第2次調査区、その他は貝田C遺跡出土）

第96図　土師器・須恵器の様相(1)（S＝1／6）



（44・49は貝田遺跡第２次調査区、45・48は貝田遺跡第３次調査南調査区、その他は貝田Ｃ遺跡出土）

第97図　土師器・須恵器の様相(2)（Ｓ＝１／６）



（78・83・85・87・88は貝田遺跡第２次調査区、77・81・82・89・90・92～94は貝田遺跡第３次調査南調査区、その他は貝田Ｃ遺跡出土）

第98図　土師器・須恵器の様相(3)（Ｓ＝１/６）

Ｄ類と分かれ、食膳具に精良な胎土、煮沸具に耐熱効果の高い粗粒の胎土が意識的に使い分けられているようだ。

須恵器は杯、高杯、瓶、甕、円面硯がある。杯は古段階は杯Ｇを中心とする。新段階では杯Ｂを中心とするが、高杯の杯部の器形からは杯Ａの存在も予想される。瓶は多彩な器種が見られる。円面硯は境界期頃のものであろうか。須恵器の胎土はＥ～Ｈ類が見られ、Ｅ類とＦ類が主体である。様相２に比してＦ類の存在が目立ってきており、特に古段階の瓶についてはＦ類が多い印象を受ける。

製塩土器は境界期前後に位置付けられ、胎土はＤ類である。

様相４（８世紀後半～９世紀前半）

貝田遺跡第２次調査区、同第３次調査南調査区、貝田Ｃ遺跡落ち込みから少量ずつ出土している資料をまとめたものである。土師器は甕があるのみ。ロクロ成形長胴甕であるが、なぜか貝田遺跡・貝田Ｃ遺跡では希少な存在である。胎土はＤ類である。須恵器は杯があり、杯Ｂ、杯Ａである。胎土はＥ類、Ｆ類に二分され、Ｆ類が多くなっている印象を得ている。Ｆ類は時期的には後出するが富来町給分小袋窯の胎土に酷似するもので占められるようになっている。この段階には近接する須恵器窯から集中的に供給を受けるというような生産と流通の姿を想定し得る。土師器の食膳具、須恵器の貯蔵具については確実なものが見られず、その実態は不明である。日常生活には不可欠な器種であるので、量的な差はともかく、遺跡内には当然存在しているものと見ている。

様相５（９世紀後半～10世紀）

貝田遺跡第２次調査区、同第３次調査南調査区、貝田Ｃ遺跡落ち込みから少量ずつ出土している資料をまとめたものである。土師器は有台椀がある。内面黒色処理を行うものと行わないものがあり、前者が多い。土師器の胎土は様相４以前とは同列に比較し難いが、Ｃ類が質的に最も近い。須恵器は皿、瓶がある。皿は皿Ｂ、瓶は双耳瓶である。須恵器の胎土はほぼＦ類のみといってよい。Ｆ類は富来・志賀窯の胎土に酷似しており、様相５と同様に近接する須恵器窯から供給されているようである。また、例外的な存在であろうが南加賀窯跡群産に特定できた資料が１点のみある。おそらく製品として供給されたものではなく、内容物の容器として集落に搬入されたものと思われる。

5　土師器・須恵器の評価

様相１（５世紀代）

様相１は粗製土師器を主要器種とし、その後半段階には畿内産の須恵器を少量伴う組成をなす段階と考える。土師器においては調整や胎土に見る粗製化が顕著であり、偏りなくすべての器種に及んでいる。この変化については、弥生時代以来の土器製作に特徴的である、精製器種を作りわける伝統的なありかたが失われたとする解釈も可能である。様相１における土師器の変質は、須恵器の出現ともあわせて４世紀以前の段階と一線を画する様相を生み出しているものと評価する。

様相２（６世紀後半～７世紀前半）

様相２は普及した在地産の須恵器と、並存する土師器によって多様な器種組成をなす段階と考える。土師器と須恵器のどちらが主体であるかは計量分析を行っていないので確実に言えないが、貝田Ｃ遺跡では土師器が多いように感じている。器種と機能の面では煮沸具は土師器、貯蔵具は須恵器、食膳具は土師器椀と須恵器杯が共用されると見ているが、その実態については検討できる資料が少ないので明らかにできない。土師器が多い組成、須恵器模倣土師器の存在など、大局的には西日本よりむしろ東日本的な様相に近い傾向と言え、北陸では北東部に位置する越後地域の様相に共通する部分も見られる[62]。能登地域の地域性を考える上でも、越中、越後といった北陸北東部の状況には今後も注目していきたい。

様相３（７世紀後半～８世紀前半）

様相３は器種組成では様相２と大差ないが、様相２の多様さは整理されており、その古段階で既に律令期につながる動きも見られる。土師器は須恵器の影響を強く受けるが、新段階においてもロクロ成形煮沸具や赤彩精製椀などが顕著と言えない、独特の様相を示す。一方で食膳具は須恵器主体で土師器精製椀と共用、貯蔵具は須恵器、煮沸具は土師器という機能面での分化はかなり進行している段階と評価する。

様相４（８世紀後半～９世紀前半）・様相５（９世紀後半～10世紀）

様相４以降の段階は資料数自体も少なくなっており、器種の偏りが顕著である。このため、様相４・様相５の器種組成については過大に評価できないので注意したい。様相４・様相５の時期は他の遺跡の例を見ると、特に食膳具において豊富で複雑な器種組成を有しているが、貝田遺跡・貝田Ｃ遺跡においてそれを論じる資料はない。ここでは特に注目しておきたいことについてのみ、記す。

様相４の段階は同じ富来町の富来川流域の上流に位置する田中遺跡により良好な資料があり、その中心時期の範疇で捉えられる。様相３から引き続き食膳具は須恵器主体であろう。

様相５の土師器・須恵器は、様相４に比して須恵器食膳具は減少、土師器食膳具は増加という連動的な変化が指摘でき、様相５の後半段階には土師器食膳具が須恵器と拮抗かあるいは土師器主体に逆転している可能性が高い。この傾向は羽咋市寺家遺跡、鹿島町武部ショウブダ遺跡土坑など[63]で若干の時期差、小地域差を含む様相差を持つが概ね共通しており、普遍性が高い動向である。

様相４・様相５は資料数が少ないこともあって対照的な土師器・須恵器の組成となっているが、ともに土師器煮沸具がほとんど確認されていない点は共通している。煮沸具は集落においては不可欠な容器のはずであり、また様相３以前の段階と状況が一変しており、特に注目しておきたい。考えられる原因は、調査区の遺跡内での性格や、土師器・須恵器の投棄のされ方、投棄の原因となる土師器・須恵器の使われ方などが変化したものと推測される。様相４・様相５で確認した煮沸具の低頻度さは、単なる偶然で含まれなかったものではなく、遺跡周辺の生活や社会の変化を示しているものとして捉えておきたい。

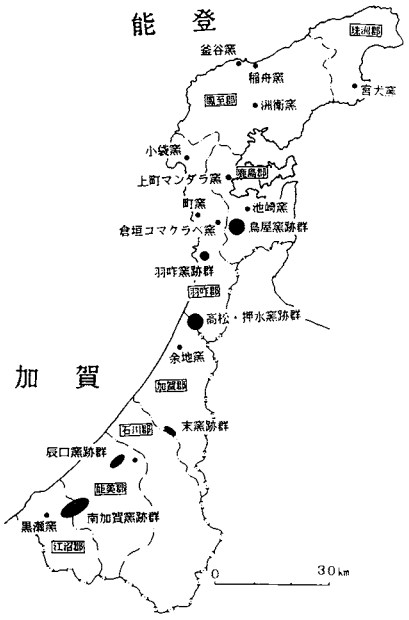
6　まとめ

既に述べたように貝田遺跡・貝田Ｃ遺跡出土の土師器・須恵器については、遺構に伴わない出土状況で、５

世紀から10世紀までの資料が存在する。本節では本書第Ⅳ章から第Ⅵ章で位置付けた個々の資料の時期をもとにして、様相１～５の各段階に区分して整理し、検討を進めてきた。そして各様相の特徴と変化を大まかにでも掴みえたものと思われる。ここでは土師器、須恵器の順に今後留意すべき点を提示してまとめとしたい。

土師器についてはその編年観、地域性、胎土について述べる。土師器の編年観については、結果として加賀の資料に沿った部分が非常に大きく、今後能登での資料の増加とともに補正が必要となろう。また、実際に比較する作業の中で、非常に対比しづらいもの、あるいはほとんど類例を求められなかったものが見られた。土師器は出土する地域で生産されるものが大半と推定されるが、それゆえにか非常に癖が強い個体が多いように感じられ、当初想像した以上に加賀能登間に地域差が強いものと思われる。独特の精製食膳具の存在やロクロ成形煮沸具が少ない様相は、遺跡周辺の地域の独特の土師器の様相を示すものかもしれない。現状では時期的・地域的に十分評価しきれたとは言えないが、今後能登地方において基準となる資料が増加し、編年網が整備されたのち、より適切な位置付けがなされる事を望む次第である。胎土については、様相１の粗粒・硬質に徹底された段階から、様相２以降再び硬軟・粗細で器種の機能に応じた胎土が用いられるようになると理解したい。

須恵器については、その胎土から検討した生産と流通についてまとめたい。様相１の段階では畿内からの遠隔地搬入であり、量的にもごく少ない。しかし在地窯が各地で成立して以後は普及し、様相２以降は鹿島郡鳥屋窯と羽咋郡北部窯で二分される供給が恒常化するものと思われる。羽咋郡北部窯は羽咋窯跡群に富来・志賀窯を含めて今回設定したものである。羽咋窯跡群と富来・志賀窯の関係については詳細に語りえないが、貝田遺跡・貝田Ｃ遺跡においては様相２の段階から並存し、羽咋窯跡群の衰退後は富来・志賀窯が供給を増大させていくという想定が可能である。そして現在までの研究成果では、能登地域においては邑知潟周辺以南では特に様相３の時期以降、鳥屋窯跡群と高松・押水窯跡群を須恵器の主要な供給源とすることが判明している。貝田遺跡・貝田Ｃ遺跡で認められた様相の、当地域、富来川流域や富来・志賀における普遍性、胎土分類については今後検証を必要としようが、当地域は邑知潟の北辺とは低山地を隔てる近接した地域でありながらも以南の地域とは大きく異なる生産・流通の様相が存在しているものと考えている。



石考研・北陸古代土器研1988　P.188を転載

第99図　加賀・能登の須恵器窯
（S＝1／2,000,000）

7　おわりに

以上、貝田遺跡と貝田Ｃ遺跡から出土した土師器と須恵器について、その時期、組成、胎土について検討を加えた。その結果、制約の大きい資料ゆえに不十分な面は否めないながら、５世紀から10世紀までの土師器、須恵器の推移が大まかに把握され、他遺跡、他地域との対比が可能になり、意義深い成果を得た。従来断片的で時期的に偏った資料の多かった富来川流域においては、貝田地区の土師器と須恵器は重要な資料である。今後さらなる資料の増加と研究の進展によって、本節での不備が補われていくことに期待したい。

第２節　貝田遺跡出土の中世土師器について－加賀地域と対比して－

１　目的

ここで行うことは、貝田遺跡から出土した中世土師器について、口径と器高、器種組成の変化を分析し、他遺跡の資料と対比することである。本来は能登地域を中心に比較し、検討すべきであるが、今回分析する資料は11世紀後半代～12世紀半ば頃と想定した時期のものであり、この時期の資料はまだ能登では少ない。もちろん加賀でもそれほど良好な資料が揃っているというわけではないのだが、ある程度の傾向性をみることができると考え、加賀地域との対比を中心として貝田遺跡の土師器を考えてみたい。

２　分析方法

口径と器高の散布図を作成し、その変化を比較検討しようというものである。底部径も対象にする必要があると考えるが、口径と器高がより変化を反映するものであろうと考えて今回は検討を行わなかった。また、それぞれ器種ごとに細かな形態差がみえるが、大きな流れを捉えようとするのが目的であり、本分析においてはそれほど重視していない。

３　分析資料

貝田遺跡からは第２次調査出土資料、第３次調査南調査区５区出土資料を、加賀地域からは加賀市田尻シンペイダン遺跡01大溝、加賀市三木だいもん遺跡溝６、小松市白江梯川遺跡412号井戸・410号井戸の資料である。今回加賀の資料と対比するにあたり、加賀地域の資料は藤田氏の論考[64]の中で選択されたものを採用した。

実際の計測は、貝田遺跡の第２次調査資料は土師器そのものを計測した。第３次調査資料は遺物観察表から、田尻シンペイダン遺跡のものは報告書の図版から、それ以外のものは報告書の遺物観察表から器高と口径の数値を得ることにより、その相関図を作成した。

（１）貝田遺跡出土資料

第２次調査の資料は、地区ごとにある程度廃棄の一括性があると考えられ、基本的にNo.11～No.12地区出土のものは古い様相をもつ一群であり、No.13～No.15地区のものは新しい様相をもつ一群であろうと推定している。しかしどちらの資料も若干の混じりを考慮しなければならず、かならずしも良好な資料とは言えないが、分析資料として取りあげた。第３次調査南調査区の資料には珠洲が共伴し、その年代は吉岡編年[25]でいうI_1～I_2期を中心とするものである。また、宇野隆夫氏のいうC_5類[32]とされる二段ナデの非ロクロ土師器が共伴している。これは宇野氏のいう平安京Ⅳ期中段階に盛行するものである。以上のことから、12世紀中葉～後半の時期が想定できる。今後、第２次調査の古段階を様相１、新段階を様相２、第３次調査南調査区５区を様相３というふうにあらわすこととする。

（２）加賀地域の資料

田尻シンペイダン遺跡の資料は、火事によるかたずけに伴う一括性の高いものであると評価されている。この資料は平安京藤原国明邸出土の寛治５年（1091年）銘の墨書をもつ須恵器に伴う小皿及び白磁碗と類似しているとされ、年代は11世紀末頃に位置付けられている。

三木だいもん遺跡溝６の資料には、田尻シンペイダン遺跡のような多様な組成はみられない。また有台椀もみられない。ただし、同時期と考えられる漆町遺跡４号井戸からは有台椀が少量出土していることから、この段階でも有台椀は残るとみられている[64]。三木だいもん遺跡の時期は12世紀前葉と考えられる。

白江梯川遺跡の412号井戸の資料には、有台椀は完全にみえなくなり、小皿と無台椀で構成され、きっちりとした規格性をみせる。時期は12世紀中葉とされる。

白江梯川遺跡410号井戸の資料には口縁部一段ナデの非ロクロ土師器が共伴するが、まだロクロ土師器のほうが多い段階である。時期は12世紀後半ころに位置付けられる。

4　分析

（1）貝田遺跡出土資料

様相1の資料は基本的に有台椀2種、無台椀4種、皿1種で構成される。有台椀は口径13.6～15cm・器高5.6～6.7cmのもの（Ⅰ）、口径10.2cm・器高4cmのもの（Ⅱ）である。有台椀には黒色処理をするものとしないものがあり、また黒色処理をするものにはヘラ磨きを施すものとロクロナデのみのものがあって、時期差があるものとみられる。ヘラ磨きを施すものが古いと考えるのが妥当であろう。無台椀は口径14.2cm・器高4.5cmのもの（Ⅰ）、口径12.3～13.2cm・器高5.3～5.6cmのもの（Ⅱ）、口径11.5～12cm・器高3.9～4.1cm（Ⅲ）、口径8.3～9.6cm・器高2.9～3.4cmのもの（Ⅳ）である。皿は口径8.2～10.5cm・器高1.6～2.9cmにまとまるがややばらつきがみられる。かなり器種組成にバラエティーが存在する段階と評価できる。

様相2の資料は無台椀2種、皿2種、柱状高台皿2種で構成される。無台椀は口径14～14.7cm・器高4.1～4.5cm（Ⅰ）、口径11.8～13.3cm・器高3.2～3.9cmのもの（Ⅲ）である。皿は口径12.3cm・器高2cmのものと、口径7.5～10cm・器高1.4～3cmのものがある。大形の皿は灯明に使用したとみられ、煤が口縁部に付着している。特殊なものとみられる。様相1と比較すると有台椀が存在しないことと、無台椀のⅡ・Ⅳとしたものが消えること、柱状高台皿が出現することが特徴である。

様相3の資料は無台椀1種、皿2（3）種、柱状高台皿2種で構成される。無台椀は口径13.2～14.8cm・器高3.9～5.3cm（Ⅰ）、皿（ロクロ）は口径7.8～9.8cm・器高1.9～2.8cm、皿（非ロクロ）は口径8.4～8.9cm・器高1.6～1.9cmである。この段階で非ロクロの皿が共伴してくる。相関図中には大形の非ロクロ土師器皿はみられないが、5区資料と同時期の3区資料中には存在している。

（2）加賀の資料

田尻シンペイダン遺跡は有台椀1種、無台椀1種、皿4種、柱状高台皿1種と豊富な器種組成が見られる。有台椀は口径14.4～14.7cm・器高6～6.3cm。無台椀は口径13.2～15cm・器高3.5～4.9cm。皿は口径16.8cm・器高4.4cmのもの、口径13.5cm・器高4.3cmのもの、口径7.7～10.2cm・器高1.8～3.6cmのもの、口径4.2cm・器高2.3cmとなる。柱状高台皿は口径7.4cm・器高3.3cmである。

三木だいもん遺跡では無台椀1種、皿2種、柱状高台皿1種となり、有台椀が見られなくなる。ただし同じ段階と考えられている漆町遺跡4号井戸からは、少量有台椀が出土していることから、若干この段階にも残るとみられる。無台椀は口径12.5～14.7cm・器高3.6～5cm。皿は口径16cm・器高4.4cmのものと、口径7.8～9.6cm、器高1.9～3.2cmのものがある。柱状高台皿は口径7.2～7.8cm・器高2.8～3.1cmである。

白江梯川遺跡412号井戸は無台椀1種、皿2種となる。無台椀は口径13.2～14.1cm・器高3.6～4.3cm。皿は口径13.2cm・器高5.1cmのものと、口径7.2～8.7cm・器高1.8cm～2.5cmのものがある。

白江梯川遺跡410号井戸は無台椀1種、皿4種となる。無台椀は口径14.1cm・器高4cmである。皿は口径13.3～16.2cm・器高2.5～3.6cmと、口径8.4～8.6cm・器高1.5～1.8cmの非ロクロ土師器と口径7.5～8.9cm・器高1.7～2.2cmのロクロ土師器。そして口径10.8cm・器高2.8cmの漆器模倣皿[64]がある。

以上、加賀の資料には、各器種の全体的な口径・器高の縮小傾向、無台椀と小皿という規格化されたものへの淘汰という時期的流れがみられる。

5　分析結果からの比定

上記の分析から貝田遺跡資料は次のようにまとめられよう。まず様相1の段階においては黒色の有台椀と4種

もの無台椀が存在するという豊富な器種組成をもっている。様相２の段階では有台椀はみられなくなり、また無台椀も器高の高いもの２種がみられなくなる。また柱状高台皿が出現してくる。様相３の段階になると無台椀も１種となり、口縁部二段ナデの非ロクロ土師器が出現してくる。この非ロクロ土師器は大小２種存在し、ロクロ土師器も小皿と無台椀、柱状高台皿と大小２種存在する。比較的きっちりとした規格性のとれた段階と考えられる。

これらのことを口径と器高の相関図の分布状況と合わせて加賀地域のものと比較すると、貝田遺跡の様相１は田尻シンペイダン遺跡とは一見似ているようにも見えるが、かなり様相が違うことがわかる。特に貝田遺跡の様相１には、12cm代の無台椀が存在するのに対し、田尻シンペイダン遺跡資料には存在しない。この12cm代の無台椀の類例を探すと、金沢市戸水ホコダ遺跡ＳＫ70の資料[65]、新潟県上越市一之口遺跡東地区ＳＤ１'の資料[66]に求められる。特に一之口遺跡の資料とは無台椀の形態が似るだけでなく、全体的な組成もかなり近いものをもっている。この資料には丸石２号窯式に比定されている灰釉陶器椀も共伴している。

貝田遺跡の様相２には口径12cm代の無台椀が存在するものの、有台椀がみられないことなど基本的に三木だいもん遺跡と対比できるものである。また口径12cm代の無台椀は様相１資料の混じりという可能性も考えられる。

貝田遺跡の様相３は白江梯川遺跡412号井戸と対比できるものである。ただし若干貝田遺跡のほうが口径が大きいものを含むという特徴がみられる。口径と器高は三木だいもん遺跡の様相と比較的よく似ていることから、白江梯川遺跡412号井戸よりも古い時期を中心とする可能性が考えられる。

６　まとめと課題

今回行った検討はあくまで口径と器高という二つの数値の比較によるものである。この数値だけで実際の土師器を表すことは当然無理がある。しかしながら口径と器高を比較検討することは、大まかな傾向性を見るには有効な方法であると考えて分析を行ってみた。

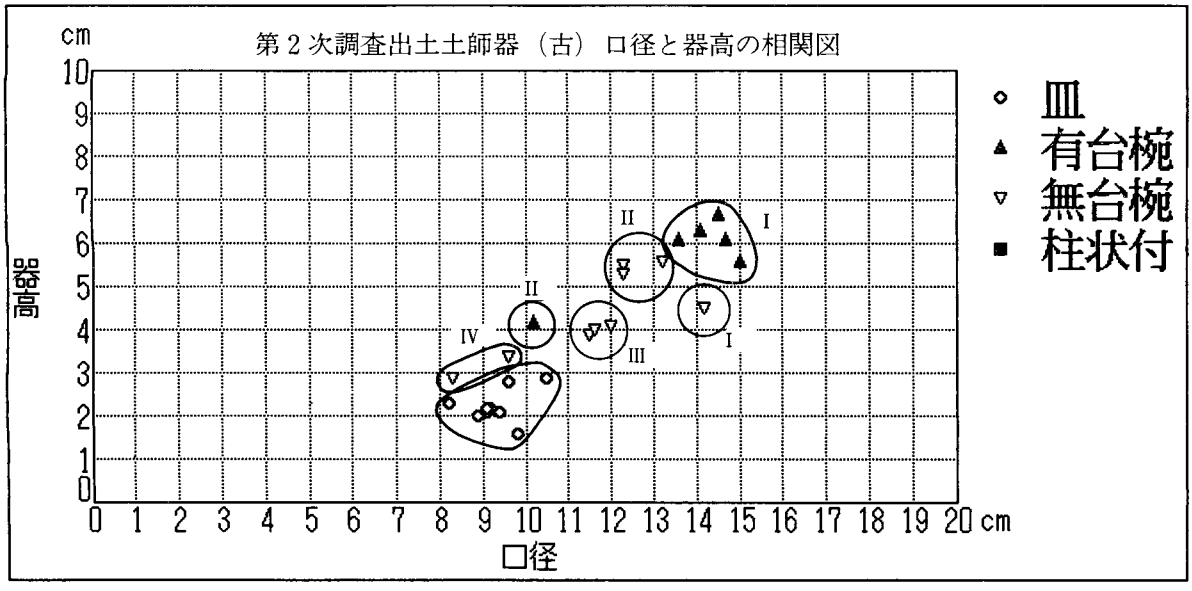
貝田遺跡の様相１は前述の一之口遺跡の様相ともよく似ていることから、11世紀前半代に溯る可能性もあるが現段階では11世紀中葉は溯らないものと考えておきたい。

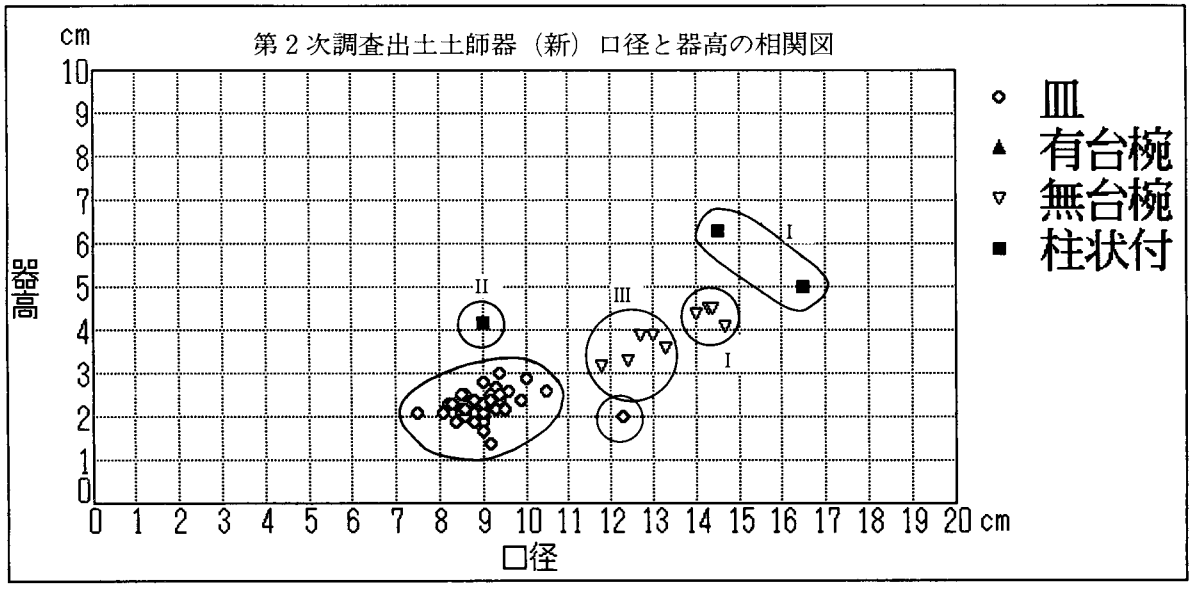
様相２は位置付けの難しい資料だが、概ね12世紀前葉を中心とする時期と考えられる。ただし前にも述べたが、若干新古の要素をもつ一群も混在していることから注意が必要である。

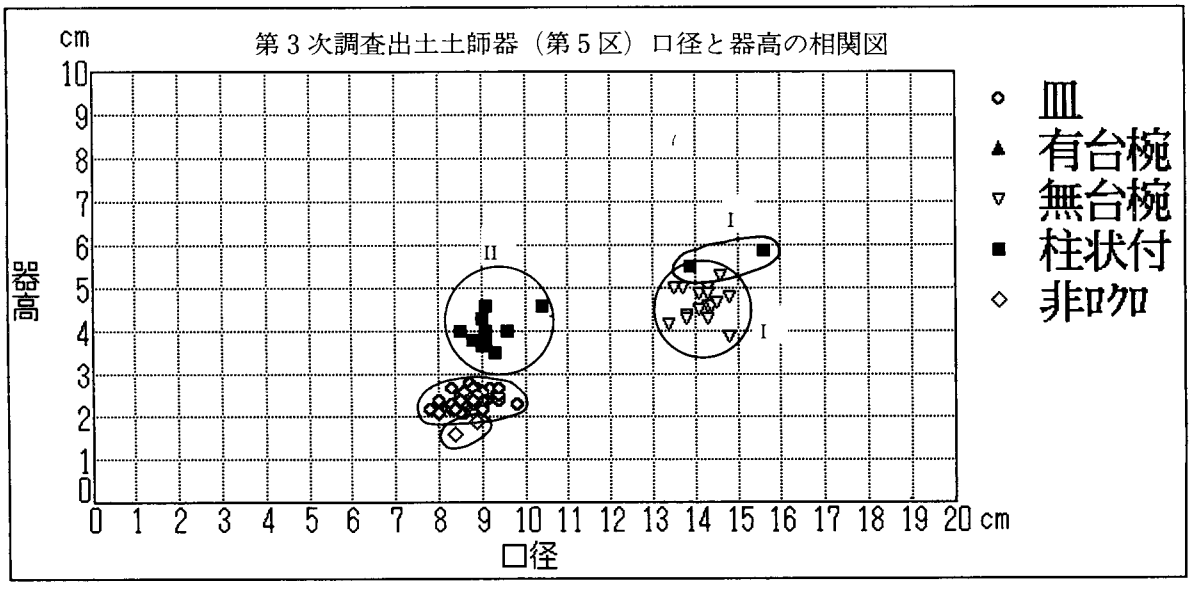
様相３は珠洲のI_1～I_2期のものと共伴していることから、12世紀中葉～後半の時期と考えているが、白江梯川遺跡412号井戸のものより若干口径が大きいものを含むことから、12世紀中葉でも古い段階を上限とする可能性があるかもしれない。

さて、ここまで貝田遺跡の出土土師器を11世紀後半代から12世紀半ばごろのものであろうと推定して分析を行ってきたが、地域差の大きい加賀地域との対比には限界があり、今後は能登地域の中で位置付けていく必要がある。そのためには能登地域で中世前半期の土師器の編年を整備することが必要だと考えられるが、まだ良好な資料がそろっていない。今後の調査によってそれらの資料は補完されていくものと考えられる。その段階になってもう一度貝田遺跡の位置付けを行う機会を得たい。

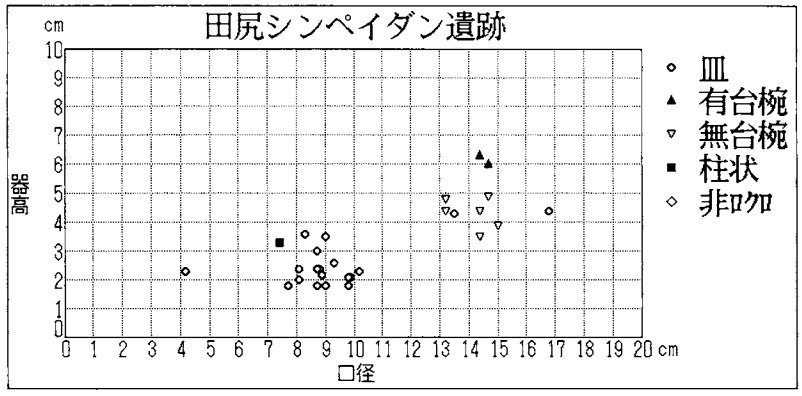
末筆になったが、藤田邦雄・滝川重徳・安英樹氏には有益なご教示をいただいた。記して感謝の意にかえたい。

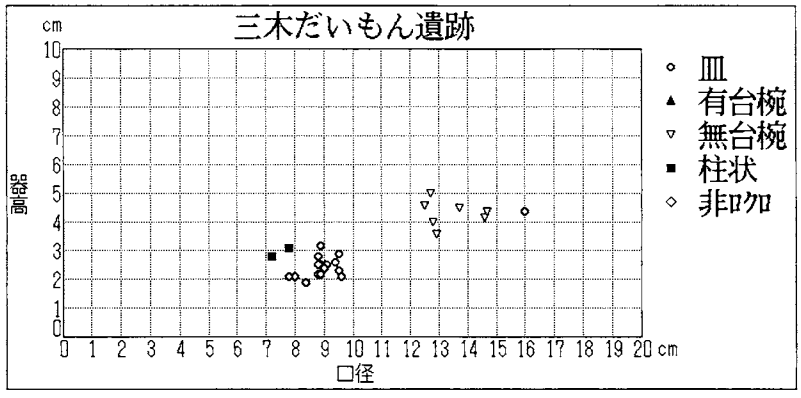


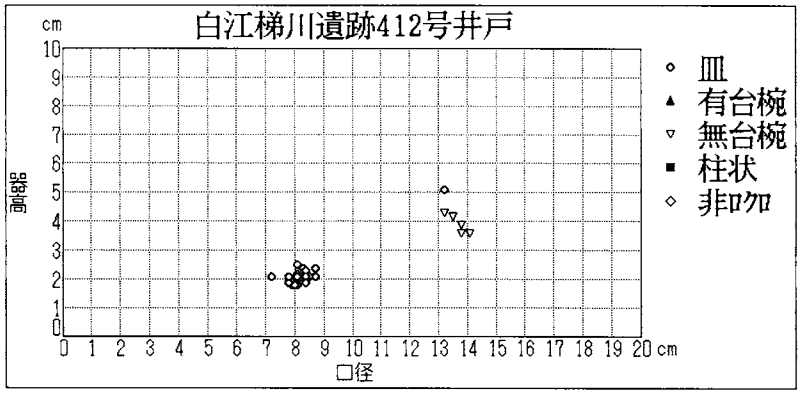


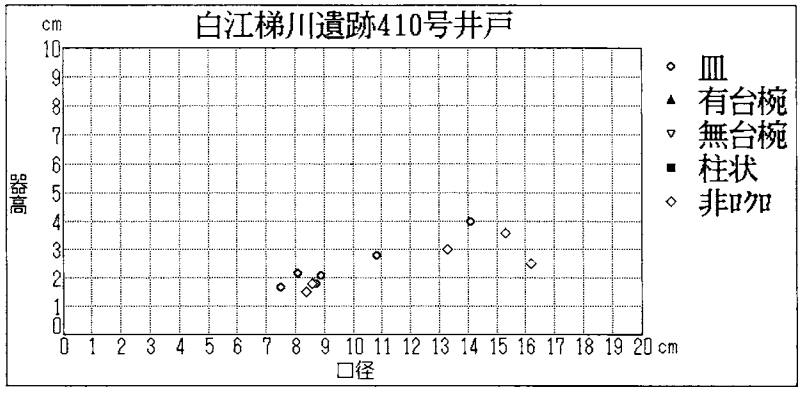


第100図　貝田遺跡中世土師器の口径と器高の相関図

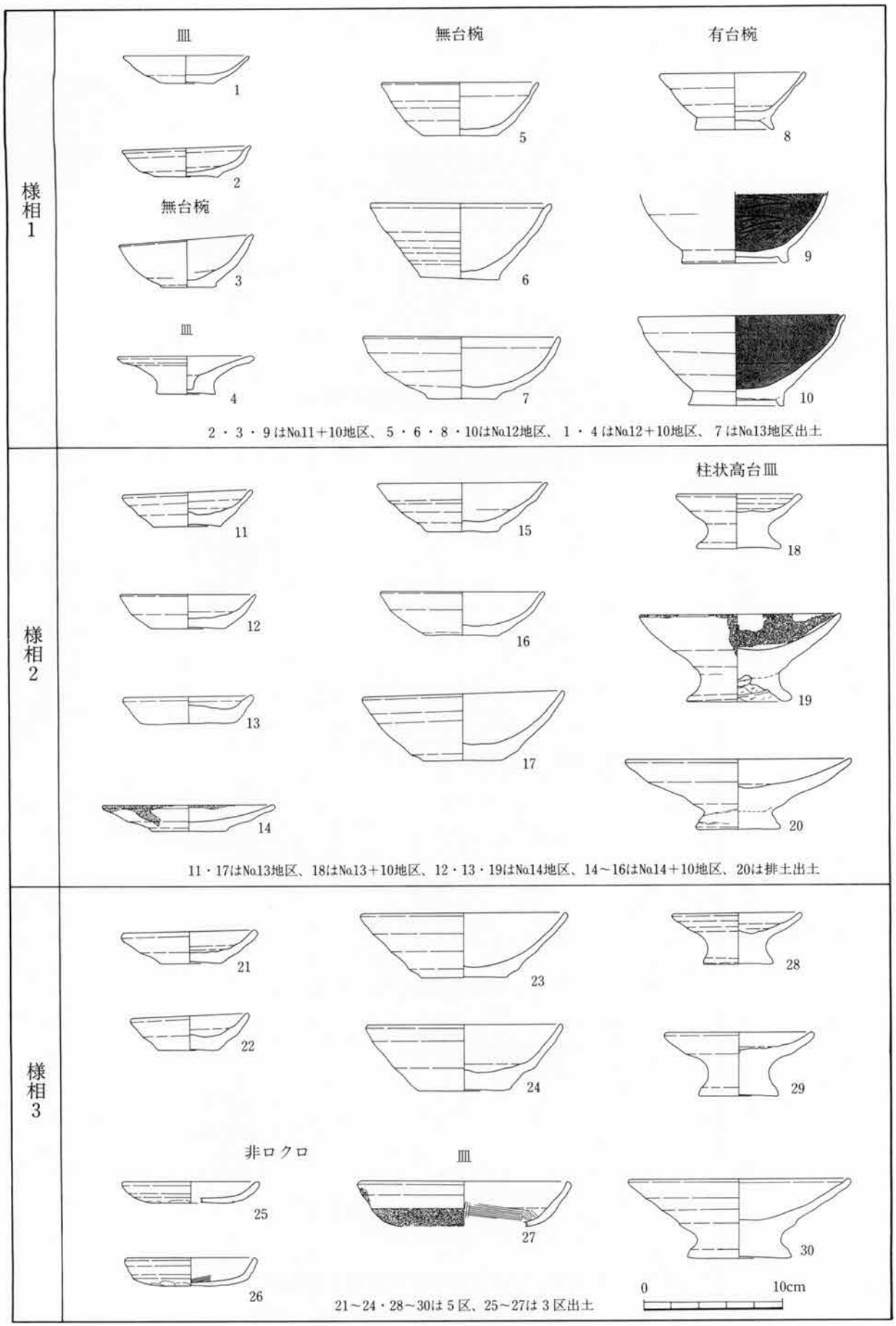








第101図　加賀地域資料の口径と器高の相関図



第102図　貝田遺跡中世土師器の様相（S＝1／4）

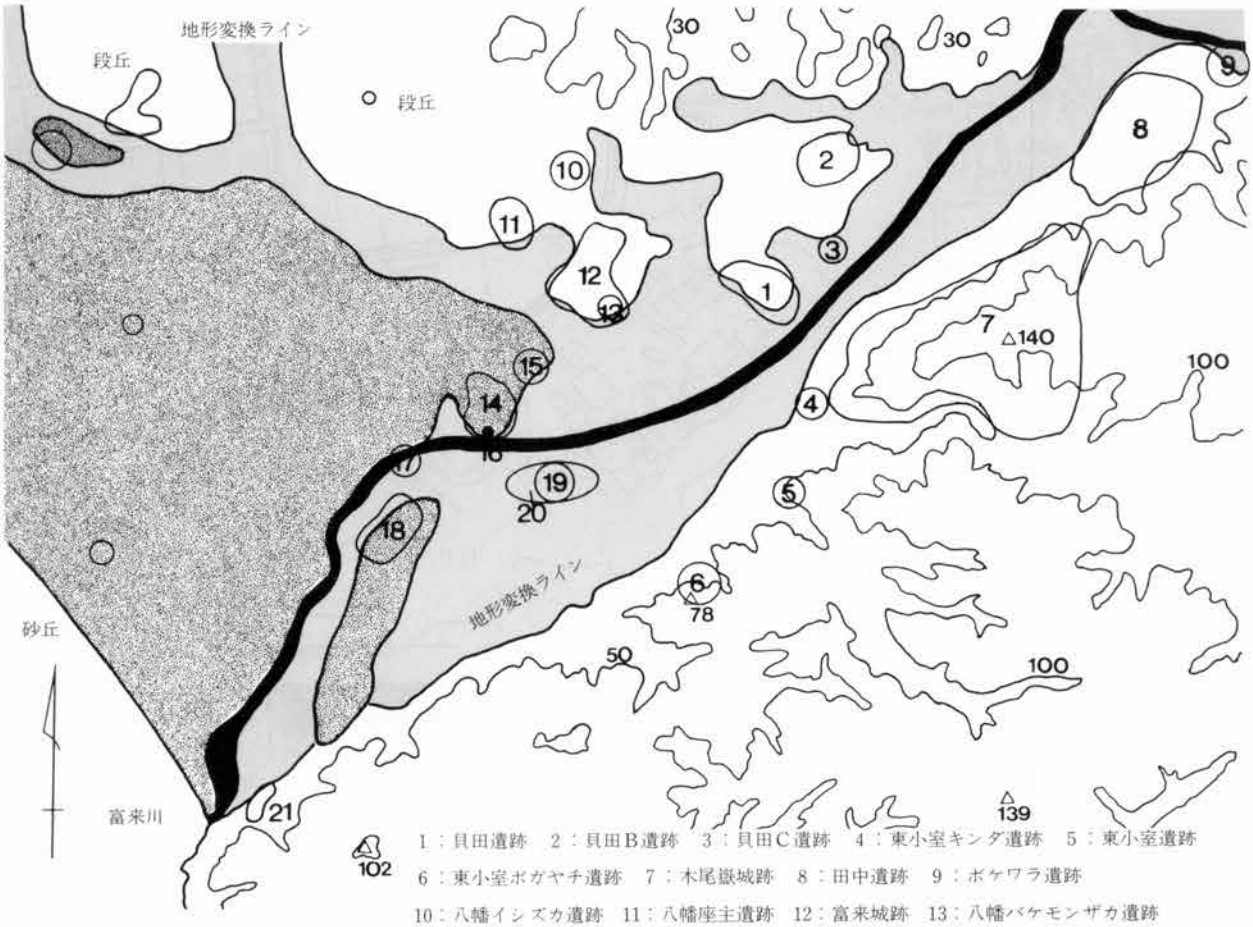
第３節　遺跡の消長にみる富来川流域の動向

１　序説

本書で報告している貝田遺跡と貝田Ｃ遺跡は石川県羽咋郡富来町貝田地内に所在する。周辺は富来川の沖積作用によって形成された小平野に、標高338m の高爪山などを中心とする低位山地の裾部や、派生する丘陵が河川の両岸の至る所に張り出し、山と谷の複雑な稜線を描いている。富来川の下流から河口付近には富来砂丘が存在し、扇状に広がる小平野を海から覆い隠すように発達している。貝田遺跡と貝田Ｃ遺跡が所在する富来川の流域は、沖積平野、山地、丘陵、砂丘、段丘といった別個の地形が一体化して、一つの河川水系において限定的な小地域を創出していることが、その大きな特徴と言える。また、遺跡が富来川を囲むようにその左右岸の山地裾もしくは丘陵に点在していることは、その地形的な特質をなんらかの形で反映しているものと予想される。本節では本書で報告された調査成果、及び既往の調査成果から、富来川流域の主な遺跡について、その消長を辿る作業を行う。そして、縄文時代から中世まで[67]、時代毎に異なる社会状況の中で遺跡、地域がどのように展開していったかについて考えてみたい。

２　主要遺跡の概要

富来川流域においては、現在までに調査例が増加し、その分布と時期が把握されている遺跡が数を増しているが、その性格まで明らかにした遺跡はきわめて少ない。ここでは貝田遺跡、貝田Ｃ遺跡、山王丸山遺跡、高田遺跡、田中遺跡を主に取りあげ、その他の遺跡については補足参考として扱いたい。また、古墳時代においては古



1：貝田遺跡　2：貝田Ｂ遺跡　3：貝田Ｃ遺跡　4：東小室キンダ遺跡　5：東小室遺跡
6：東小室ボガヤチ遺跡　7：木尾嶽城跡　8：田中遺跡　9：ボケワラ遺跡
10：八幡イシズカ遺跡　11：八幡座主遺跡　12：富来城跡　13：八幡バケモンザカ遺跡
14：八幡山王遺跡　15：山王丸遺跡　16：山王丸山古墳　17：八幡ワガクチ遺跡　18：高田遺跡
19：富来八幡遺跡　20：八幡イチバンダ遺跡　21：地頭中世墳墓窟群

第103図　富来川流域の地形と遺跡の分布（Ｓ＝１/25,000）

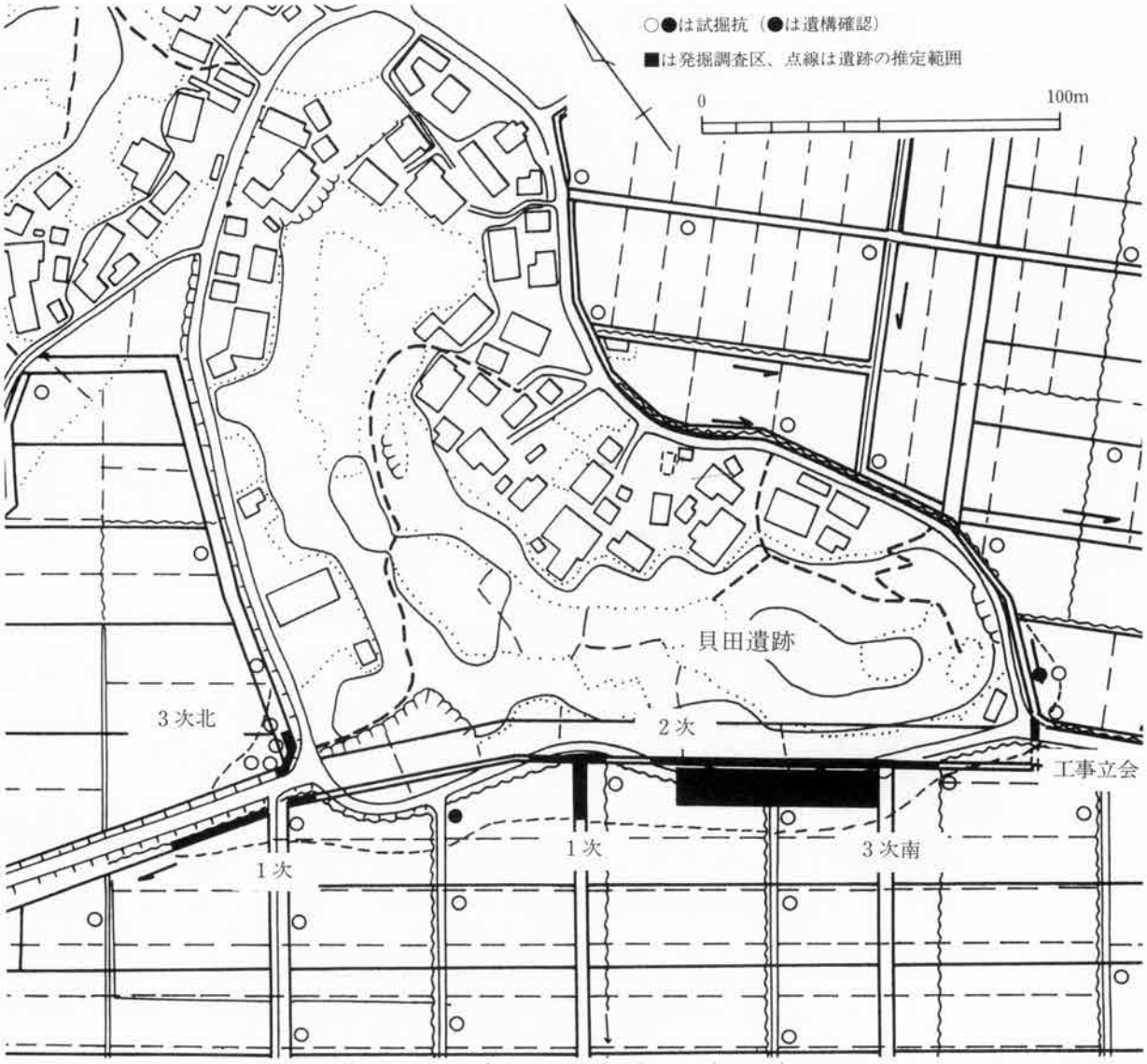
墳・横穴、中世においては城館跡が集落に深く関連すると思われるので、同様にその消長について述べて対比させてみたい。

貝田遺跡（平成３年・４年度県埋文センター調査、本書報告）

遺跡は富来川の右岸に張り出す島状の小丘陵に立地する。発掘調査は海に面する丘陵裾部で集中的に行われ、裾部一帯に遺構・遺物の分布を確認している（第104図）。複数の遺構面が存在し、中世期の遺構面では掘立柱建物や畦畔を検出し、より古期の遺構面は水田下に保存された[68]。堆積層からは縄文時代から中近世まで、長期に及ぶ遺物が出土しており、きわめて存続期間の長い複合集落遺跡と推定される。

古代以前の時期は遺構が確認できていないが、出土遺物はかなり時期を限定してまとまっており、遺跡の活動時期を概ね示すものと考え、論を進めたい。縄文時代は土器資料がなく、時期は不明である。弥生時代は後期後半期の遺物が圧倒的に多く、これ以外の時期はきわめて希薄である。古墳時代は５世紀の遺物が圧倒的に多く、これ以外の時期、４世紀、６世紀、７世紀前半などは希薄である。古代は全般的に遺物が少なめであるが、７世紀後半、８世紀後半～９世紀前半にはまとまった量が見られる。またこれ以外の時期、例えば８世紀前半、９世紀後半、10世紀の遺物も少量ながら出土している。

中世はその前半期において遺構の推移を第１～３段階に区分して把握しており、豊富な遺物が帰属しているので、遺構・遺物を絡めて遺跡南東部の状況についてまとめておきたい（第105図）。



第104図　貝田遺跡の分布状況（S＝1／2,000）

第１段階（11世紀後半頃～12世紀前半）

調査区に広がった畦畔が確認されており、付近の大半は丘陵裾から低地に展開する水田域と考えられる。ただし調査区の東部では畦畔が不明確であり、第２次調査のNo.11＋10地区、第３次調査の１区・２区などで対照的に遺物が多くなり、柱穴など遺構も確認されている。水田域よりも高所か東に近接した位置に居住域をもち、土師器の投棄などを行っていた段階と推定している。

第２段階（12世紀中葉～同後半）

第１段階では水田域であった場所に盛んな土師器の投棄や小規模な整地が繰り返される。土師器の投棄は丘陵斜面のほぼ全域に範囲と量を拡大しており、土師器投棄の専用ブロックと化している。調査区の東端部、西端部は地形的に大きく変わらないが投棄は顕著でなくなっており、どちらかに居住域の存在する可能性がある。広範な土師器投棄ブロックと、その高所か東西に居住域が存在した段階と推定される。

第３段階（12世紀末～13世紀）

第２段階で活発であった土師器の投棄や小整地行為は終息しており、これによって形成された緩傾斜地のほぼ全域に掘立柱建物などの遺構が掘削される。居住域の一部となった段階と推定される。この段階は出土遺物が乏しいため、下限となる時期は定め難いが、13世紀代の遺物は見られるのに対して14世紀以降の遺物はほとんど見られなくなっているので、一応13世紀代と仮定したい。

中世前半期の貝田遺跡南東部では11世紀から13世紀にかけて居住・水田・投棄などの領域移動が盛んに行われている。出土遺物は11世紀後半頃から増加し、12世紀中葉～後半に量的なピークを迎え、12世紀末以降は急減しても13世紀まで一定量存在、14世紀以降はほとんど見られなくなるものと考えられる。

貝田Ｃ遺跡（平成４年度県埋文センター調査、本書報告）

富来川右岸の低山地裾部に立地し、現在の貝田集落とある程度重複した分布範囲が予想される遺跡である。遺構は落ち込みを検出したのみであるが、落ち込みから出土した遺物から、古墳時代・古代を中心とする集落遺跡と推定される。住居遺構等については全く不明であり、ここでは出土遺物から予想される存続時期について述べる。遺物が最も多い時期は６世紀後半から７世紀前半であり、７世紀後半から８世紀前半、８世紀後半から９世紀前半のまとまりがこれに次ぐ。少量ながら確実な遺物が存在する時期としては、弥生時代後期後半、５世紀、12世紀がある。４世紀、６世紀前半の遺物はほぼ存在せず、空白期となる。よって、弥生時代から古墳中期にかけては空白期を挟みながら推移し、６世紀後半以降９世紀前半まで継続的に営まれる集落の様相を想定したい。ただし６世紀後半以降の遺物でも約300年にわたって連綿と連なるような印象は薄く、むしろ７世紀前半、８世紀前半といった、遺物がやや希薄になる小期を介して存続している可能性が高いものと考えている。

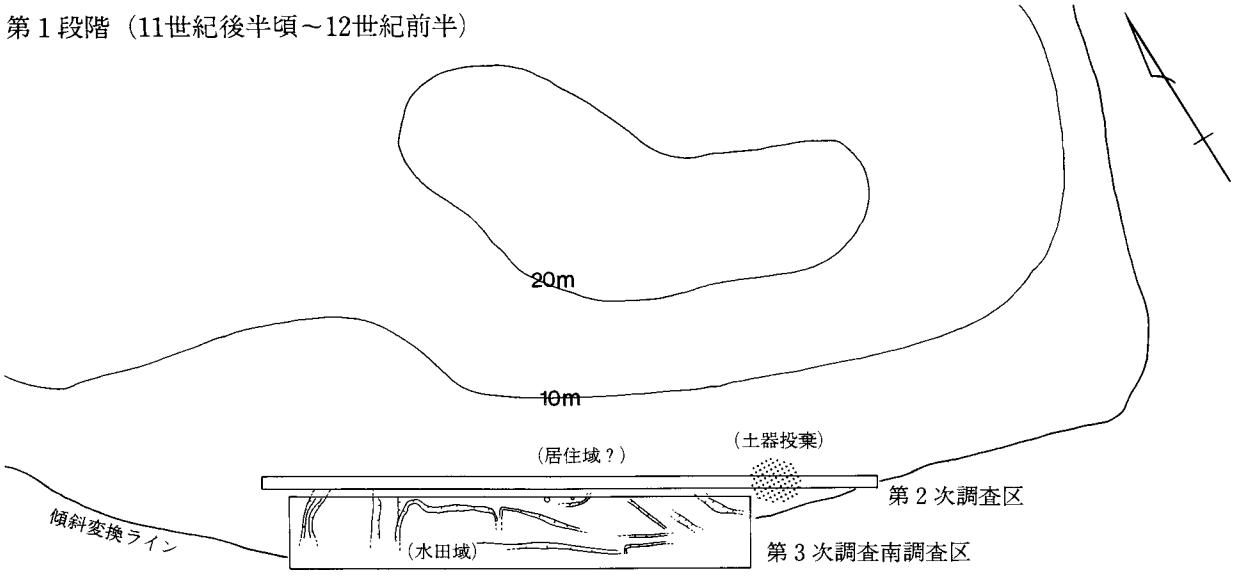
山王丸山遺跡（平成３年・４年度町教委調査）[69]

富来川右岸の砂丘に立地する。縄文時代から中世にかけての複合遺跡である。砂丘は平野部に向かって張り出すように見えるが、富来川によって浸食されている可能性も高い。遺構は弥生時代中期・後期の土坑墓・方形周溝墓が複数確認されている。出土遺物は縄文後期、弥生時代は中期が畿内Ⅱ様式・Ⅲ様式後半～Ⅳ様式並行（以下、畿内・並行省略）、後期は後期後半、古墳時代以降は、４世紀をほぼ空白期とするが５世紀から13世紀まで少量ながら継続的に見る事ができ、遺跡の長い存続期間を示している。遺跡の中心時期は土坑墓・方形周溝墓が築かれ多量の管玉が供献される弥生中期後半・後期後半であり、両時期は墓域となっていたと見なしてよかろう。

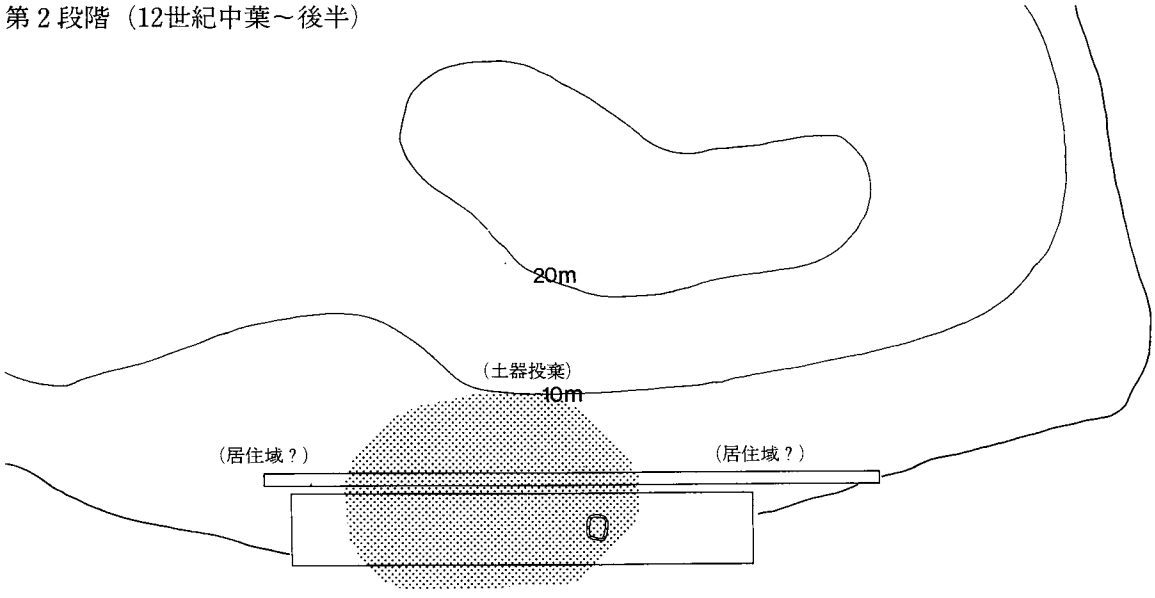
高田遺跡（昭和43・44年度町教委・高田遺跡調査団調査）[60]

富来川の左岸に位置し、河道に分断されるまでは右岸の富来砂丘と一体でその東端部であったと思われる砂丘に立地する。遺構は弥生時代中期の土坑・溝、古墳中後期の土坑・祭祀行為に関係した落ち込み、平安時代の竪穴住居２棟を検出している。弥生・古墳時代の土坑の多くは土坑墓の可能性が高いものであり、両時代の墓域の

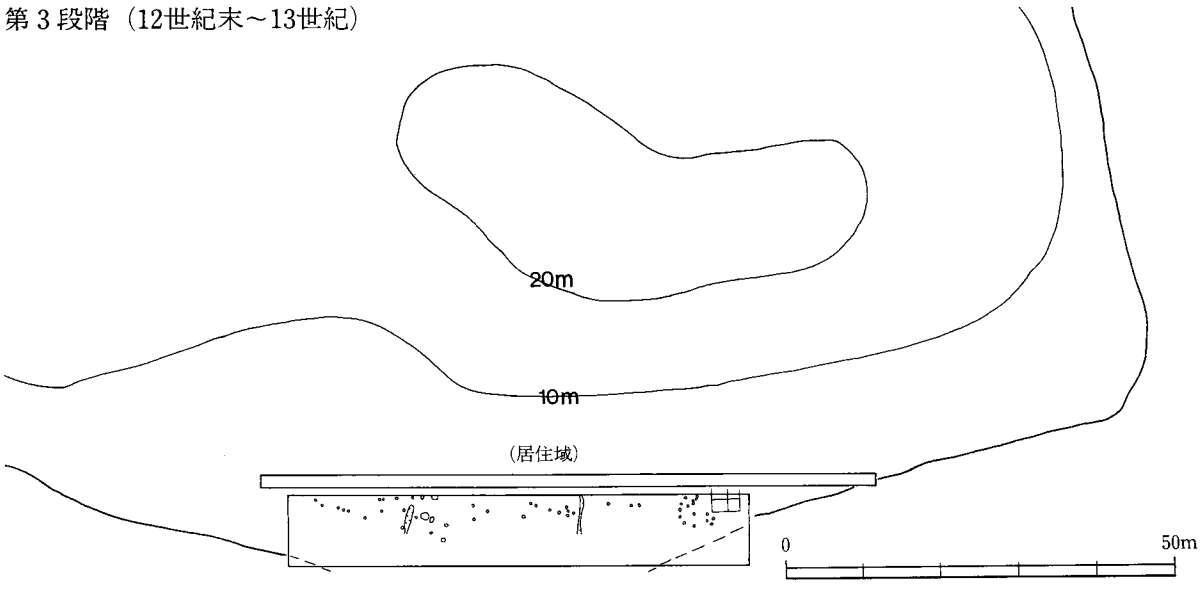
第１段階（11世紀後半頃～12世紀前半）



第２段階（12世紀中葉～後半）



第３段階（12世紀末～13世紀）



第105図　中世の貝田遺跡南東部の変遷想定図（S＝1／1，000）

存在を想定しておきたい。各遺構の出土遺物を見ると、弥生時代は畿内Ⅱ～Ⅲ様式に並行、古墳時代は5世紀後半と6世紀初頭に二分され、古代は8世紀後半から9世紀代を中心とする時期と思われる。この他、詳細は不明ながら中世の遺物も出土しているようである。

田中遺跡（昭和61年度町教委調査）[70]

富来川左岸に張り出す小段丘に立地しており、現海岸線から約4kmと、ここで紹介する遺跡では最も内陸に位置する。ほ場整備の排水路部分のみの限定的な調査であり、遺構は全形が不明確ながら土坑、溝が検出された。遺物は6世紀から7世紀の時期を少量含むが、8世紀後半から9世紀の時期でほぼまとまっており、中心時期となろう。B調査区の1号溝からは8世紀後半～9世紀前半の須恵器と共伴して、銭貨、木製品が出土している。銭貨は皇朝銭「和同開珎」であり、木製品には木簡・斎串が含まれている。さらに墨書土器も確認されており、古代官衙に関連する遺跡でよく見られる遺物の組成に近いものと言える。官衙的な遺物の出土例は富来町域でも現状では田中遺跡のみであり、富来川流域において同遺跡の存在は際立つものとなっている。

古墳・横穴[71]

富来川流域に含まれる古墳は、現在までのところ確認されていない。富来町域自体も古墳の確認例が少ない地域であり、ここでは富来川流域に限らずより範囲を広げて分布を探る事に努めたい。古い方から5世紀後半の鹿頭神明森古墳、次いで6世紀後半から7世紀初頭に千浦二子塚古墳、鹿頭アサホシバ古墳群、飛塚古墳などでほぼ全てである。前期古墳と終末期古墳は未確認である。分布は町域の北東端の鹿頭から千浦に広がる海岸段丘上に集中しており、唯一、富来川流域の北東の段丘に位置する飛塚古墳を例外とする程度であろう。規模・群は全般に小さいが、鹿頭神明森古墳は箱式石棺、その他の古墳は横穴式石室を導入しており、定量の副葬品を持っていたことが推定されている。富来の古墳については、次の①～④のようにその要点をあらわすことができよう。

①時期的には中後期の古墳で占められており、前期古墳、終末期古墳は確認されていない。

②地理的には鹿頭～千浦の海岸段丘上に集中的に分布し、その他の地域ではほとんど確認されていない。

③規模的には小さいものが大半で、群構成も小規模である。大型墳は確認されていない。

④構造的には中期古墳・後期古墳それぞれの時期に応じた格式を埋葬施設・副葬品等に持っている。

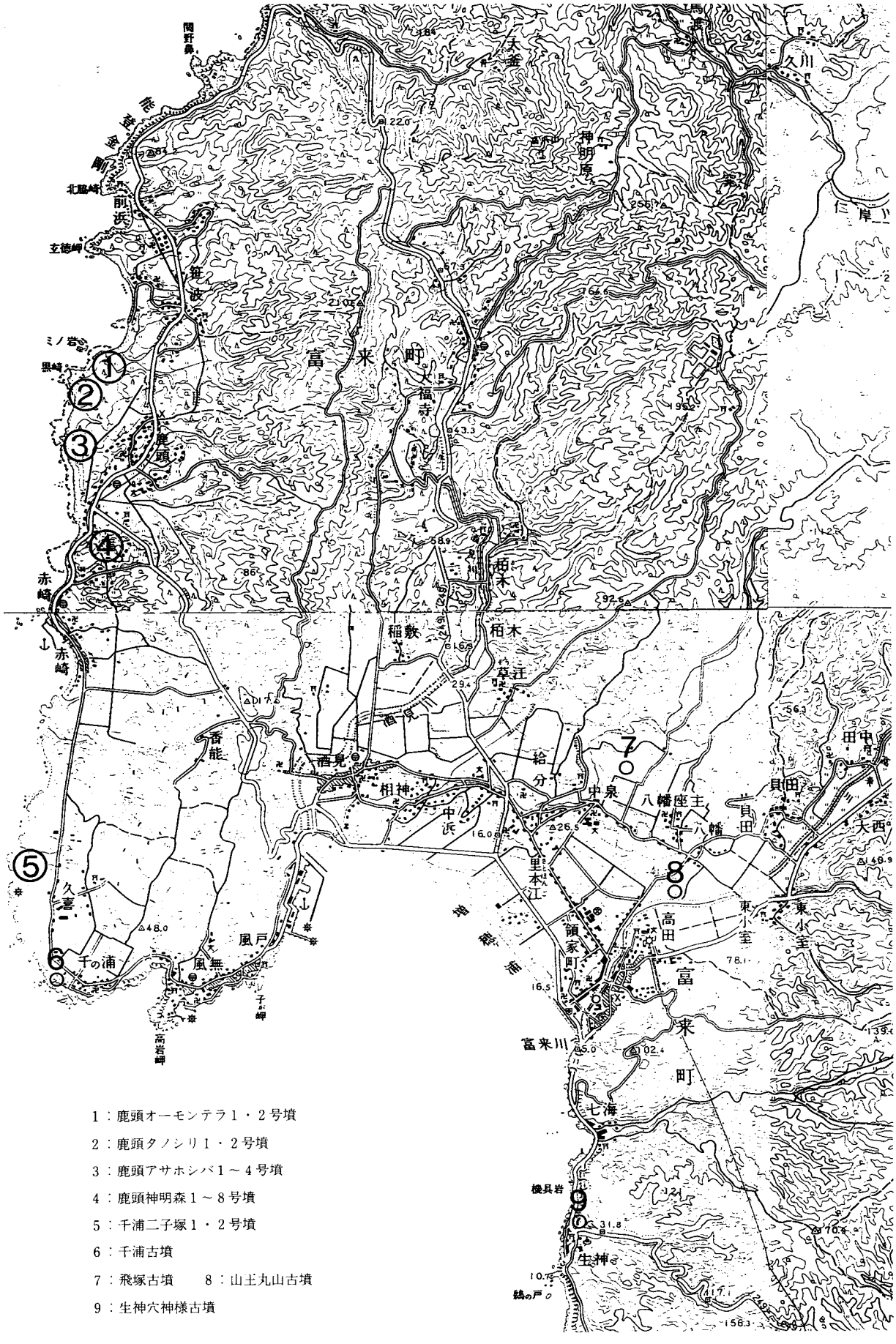
横穴については、富来川流域には和田横穴、今田横穴群が存在するが、発掘調査例がなく、詳細は不明である。

城館

富来川流域では木尾嶽城、富来城が存在する。どちらも発掘調査はなされておらず、踏査によってその構造を把握している。中世の遺物は確認された事がなく、詳細な時期は不明である。木尾嶽城は富来川の左岸にそびえる標高約140mを測る通称城ケ根山に占地する、主郭と副郭がはっきりした大規模な山城である。上田三平氏の残した記述によれば周辺の丘陵・砂丘に出城を設けて本城を取り巻かせていた姿が窺われる。富来城は富来川右岸の小丘陵に位置する。土塁が残っているが規模的には小さいものであり、配置から見て木尾嶽城の出城もしくは小城館と推定されよう。木尾嶽城については貞和2年（1346年）、富来城については天正4～5年（1576～1577年）に落城の記録がある。ただし、天正年間の富来城は、籠城戦に使用可能な規模・構造を考えると、木尾嶽城を指すものであろう[72]。よって木尾嶽城に関しては、概ね14世紀から16世紀にかけて築かれ使用されたものと推定する事が可能と思われる。

その他

その他の遺跡では東小室ボガヤチ遺跡、東小室キンダ遺跡、ワガクチ遺跡、八幡座主遺跡、八幡バケモンザカ遺跡、ボケワラ遺跡が存在する[73]。さらに、富来川の河口付近の山腹には地頭中世墳墓窟群が、富来川の上流域には今田A遺跡、今田B遺跡、尊保遺跡、阿川A遺跡、阿川B遺跡、中平遺跡、入釜遺跡が存在する。実態がはっきりしない遺跡が多いが、概ね上流域は縄文時代、中～下流域は弥生時代以降、と中心的な時代を分ける事ができそうである。



1：鹿頭オーモンテラ１・２号墳

2：鹿頭タノシリ１・２号墳

3：鹿頭アサホシバ１～４号墳

4：鹿頭神明森１～８号墳

5：千浦二子塚１・２号墳

6：千浦古墳

7：飛塚古墳　　8：山王丸山古墳

9：生神穴神様古墳

第106図　富来町の古墳の分布（S＝1/50,000）

第28表　富来川流域の遺跡の消長

時代 / 遺跡	縄文時代 中 後 晩	弥生時代 I II III IV V	古墳時代前 4 5 6 7前	古代 7後 8 9 10 11前	中世 11後 12 13 14 15 16
貝田遺跡					
貝田C遺跡					
山王丸山遺跡					
高田遺跡					
田中遺跡					
古墳・墳墓		高田　山王丸山	神明森　飛塚ほか		地頭中世墳墓窟群
城館					木尾嶽城

以上で、富来川流域における主要な遺跡の概要を述べ終えた。次項ではここで明らかになったそれぞれの消長をもとに時期別にまとめていく作業を行い、地域の動向を探ることにしたい。

3　富来川流域の動向

縄文時代

縄文後期には山王丸山遺跡で集落が成立しているものと思われるが、他の遺跡では時期が良くわからない状況である。当地域、特に富来川の中下流域において現況の地形が生じるには、特に深谷の埋没、沖積平野の安定、内列・外列砂丘の形成が必要であり、気候の変化や海水準の変動が進行させたと思われる。古環境の既往の研究ではその形成に縄文時代中期以前を費やしている可能性が高い。よって地形安定後の縄文後期の集落成立については一応の地形との整合性があり、本格的な集落の出現期と見ることも可能であろう。但し、地形の変化が少ないことが推測される上流域や山地部、砂堆積前の地形がよくわかっていない砂丘の砂層下についてはより古期の集落が存在する可能性が高い。縄文時代の遺跡については後期にその明確な出現期を求めるが、地形の変化を考慮して、現在の地形に見る分布の限りではないものと捉えておきたい。

弥生時代

弥生時代は中期、II様式には高田遺跡、山王丸山遺跡が出現している。その後は両遺跡ともその性格を変え、墓域化するようである。III様式前半には高田遺跡が継続、山王丸山遺跡は希薄になり、III様式後半からⅣ様式頃には逆に高田遺跡が終息、山王丸山遺跡で多くの遺構・遺物が見られる、という連動的な推移を見せる。後期の遺跡は前半の時期にはほとんど見られず、後半に多い。後期後半の時期は貝田遺跡、山王丸山遺跡を中心に実に多くの遺跡で遺物が出土するようになり、遺跡数・遺物量とも弥生時代において最も多い時期となろう。後期終末には再び遺跡が希薄となっている。

弥生時代においては中期II様式の時期を集落のはっきりした出現期と考えてよかろう。また、III様式には墓域も伴うようになっており、山王丸山遺跡で活発な造墓が見られるIII様式後半には本格的な墓域が発達するようである。後期後半は集落の飛躍的な増加・活性化を見て、富来川を囲むような分布がはじめて成立する。高田遺跡、山王丸山遺跡の墓域がどの程度の範囲の地域を統轄した首長層を被葬していたのかは不明である。

古墳時代

古墳時代は前期、4世紀の遺跡をほとんど確認できていない。4世紀は、遺跡がきわめて少ないか、全く別地点に存在しているものと推定できる。いずれにしてもその活動は低調なものと予想されよう。5世紀は対照的に遺跡が多くなり、貝田遺跡、高田遺跡を中心に、貝田C遺跡、山王丸山遺跡などでも遺物が出土する。6世紀の遺跡は前半が高田遺跡と山王丸山遺跡がある。後半は貝田C遺跡の他、貝田遺跡、山王丸山遺跡、田中遺跡でも遺物が出土している。6世紀の前半と後半を比較すると、後半の方が遺跡・遺物が多くなっている。7世紀前半は貝田C遺跡、山王丸山遺跡があるが、どちらもごく少量の遺物が出土しているに過ぎない存在である。

古墳時代においては、4世紀の遺跡の少なさが極端であるが、遺跡が多くなる5世紀以降は、多くなる時期、少なくなる時期がほぼ半世紀単位で巡り、断続・盛衰を繰り返している集落の姿が窺われる。

この時代は集落が母体となって首長墓たる古墳を築く社会にその本質が求められるので、古墳と集落を関連付けてまとめることにしたい。富来町域の古墳は現在までのところ5世紀後半を最古とし、6世紀後半～7世紀初頭頃に集中して確認され、鹿頭～千浦の海岸部に集中している。古墳の大半が富来川流域から離れた位置にありながらも、その消長が集落と一致する現象は注目してよく、未知の古墳・集落の存在を考慮しても富来町域において普遍化できる傾向と考えている。富来町域の古墳については、古墳時代の地域支配の象徴とも言える前期古墳を欠き、中期以降も邑知地溝帯や七尾湾岸と比べるべくもなく小数・小規模であり、終末期の古墳も欠く様相は、勢力を他地域ほどには伸張しえなかった小首長群と集落の存在を浮かび上がらせる。特徴的な造墓の低調さ、集落の断続性は、おそらくは羽咋君の勢力圏の一部、その北端として位置付けられた地域性を反映するものと推察したい。とは言え、中期以降に一定の格式を持って造墓される姿は郡内の地位を超えるような、西日本地域との独自の歩調を感じさせる様相であり、注意しておきたい。そして、当地が古代の律令期に移行するにあたっても、古墳時代の地域性が影響を及ぼした事は想像に難くないのである。

古代

古墳が基本的に消滅する7世紀後半の遺跡は、貝田C遺跡、貝田遺跡、山王丸山遺跡をあげることができる。あまり際立った変化ではないが、前半と比べると遺跡・遺物が増加するようである。8世紀前半は貝田C遺跡で少量の遺物、他の遺跡については断片的な遺物が見られる程度で、はっきりしない。7世紀後半に比べると遺跡・遺物は減少傾向である。8世紀後半の遺跡は貝田C遺跡、貝田遺跡、田中遺跡、山王丸山遺跡、高田遺跡があげられ、遺跡が増加し、富来川流域のほとんどの遺跡で量を問わず遺物が出土する。そしてここで形成された遺跡の多くは9世紀前半代に継続する傾向があろう。おそらくは9世紀後半以降10世紀代にも存続するものと思われるが、遺構・遺物の減少や断続的な様相が見られるようになる。古代の集落については全般に変化が比較的緩やかであるのか、その動向が掴みつらい傾向がある。

古代の富来周辺については古文献に「能登国羽咋郡荒木郷」と「福良」に関する記述を主に見る事ができる[74]。能登国は養老2年（718年）に立国するが、その後天平13年（741年）に越中国に併合される。再び能登国として分離される天平宝字元年（757年）以降は国としての安定を見ている。立国前後から朝鮮半島の北方に台頭してきた渤海国の日本への遣使が始まっており、『続日本紀』には宝亀3年（772年）に送渤海施設団が福良に逗留した記述が見られる。福良は現在の福浦にあたる。日本海に突き出し良港を作りやすい海岸を多く有する能登国においても随一の天然の良港である福浦は渤海の遣使前後から次第にその寄港地として定着していったものと思われる。国交は延長4年（926年）の渤海滅亡まで続いたものと見られ、主に8世紀後半から9世紀代を中心時

第107図　福浦の位置と富来川流域（S＝1/50,000）

期と考えてよかろう。この時期、延暦23年（804年）の能登国への客院建設命令、元慶７年（883年）の福良周辺の山林伐採禁止令などから、能登国、特に外浦側が国交の玄関口として重視されていたことが窺われ[75]、富来周辺でも非常に国家色の強い政策が取られていた可能性が高い。田中遺跡は周辺で唯一官衙的様相を持つ遺跡であり、広い範囲に分布し、この時期に中心時期を持つ点でも、地域内で群を抜いた存在であり、特に注目したい。この時期の集落増の背景に、渤海使に関係して施行されたような国家的な政策が関与していたとするならば、富来川流域においては田中遺跡を中核とした展開があったものと推定したい。田中遺跡については、鳳至郡方面へ通り抜ける街道の入口に位置し、富来川を使用すれば上下流域や海岸部との往来も容易である事から、交通の要衝を掌握した集落と想定している。

中世

中世はその初期、11世紀の後半頃から遺物の増加傾向が見られ、12世紀には富来川流域のほとんどの遺跡で出土するようになる[76]。この時期は土師器食膳具の廃棄行為が活発な時期でもあり、土師器投棄ブロックを確認した貝田遺跡では特に顕著である。貝田遺跡の遺物量は12世紀中葉～後半にピークとなり、12世紀末には急減するが、13世紀代も集落そのものは存続すると考える。14世紀以降は遺構・遺物とも不明確となり、集落の移動か廃絶が考えられよう。この傾向は、貝田遺跡以外の集落でも量的な差はあるが概ね共通するものと言える。

中世前半の富来は、能登国衙が作成した「国中四郡庄・郷・保公田々数目録」に「富来院」として記載される[77]。「院」は主として平安時代の公領に用いられた行政区画単位であり、富来院もまた国衙領の一つであった。しかし古代律令体制の崩壊後は、土地を社寺へ寄進し在地開発領主が運営する、いわゆる寄進地系荘園が発達し、全国的に土地私有化が進行する趨勢の中で、公領もまた国司の恣意的な運営によって形骸化していた。能登国において羽咋郡は荘園の成立が最も早かったようであり[78]、富来院においても、11世紀から12世紀には国司から土豪まで様々な階層の開発領主が台頭し、荘園経営を前提とした新田開発が進行しつつあったことは想像に難くない。そして、建保元年（1213年）には富来院の大半が荘園化して立券されている。貝田遺跡をはじめとする富来川流域にこの時期群在する集落は、富来院の荘園化の過程において、活発に行われた新田開発の母体となった集落群と推定している。貝田遺跡出土の多量の中世土師器、陶磁器、土製品、石製品、木器、木製品、銭貨、鉄滓等の多種多様な遺物は、急速に開発が進んだ地域の中心的な一集落の、生業、流通、祭祀等、日常・非日常にまたがる生活の所産であろう。余談であるが、貝田という地名は、その読みである「かいだ」が「開田」に通じるものがあり、その名残りなのかもしれない。

13世紀初頭に荘園化した富来院は、武家と公家の二重支配の中、徐々に幕府が派遣した守護・地頭に侵略され、貞和５年（1349年）に能登守護に完全に掌握される[79]。木尾嶽城はこの時期に築かれ、南北朝の対立や観応の擾乱といった中央の情勢も絡んだ守護と在地勢力の抗争の舞台となった。地頭中世墳墓窟群はこの合戦との関係は不明であるが、ほぼ同時期の武士を葬っているものである。そして約200年を経て、戦国期の覇権を巡る織田方と上杉方の地方武士の抗争の場となった。14世紀、16世紀のどちらの抗争もこの地に血塗られた歴史を刻んでいる。14世紀以降の集落についてはほとんど資料がないが、前述した城郭や墳墓の母体となった集落は確実にどこかに存在している。考古資料が皆無であるのであくまで推論であるが、その位置を考えるに、平野部を基本的に居住に適さないものとして除外すれば、富来川流域の各集落の位置が最も可能性が高いのではないだろうか[80]。

4　若干の考察

以上で、縄文時代から中世にかけての富来川流域の主要遺跡の動向をまとめる作業を終えた。その成果として、富来川流域という地域の展開、及び集落のあり方について、通史的な一定の評価を与える事が、現段階で可能になっているものと思われる。編者にその能力があるかどうかは分からないが、今後の地域研究への指針となるべき要素と考えており、ここに示しておくのは編者の責であろう。よって、富来川流域において、時代を超えて考

えるべき２つの「特質」について述べ、論を結ぶ事にしたい。

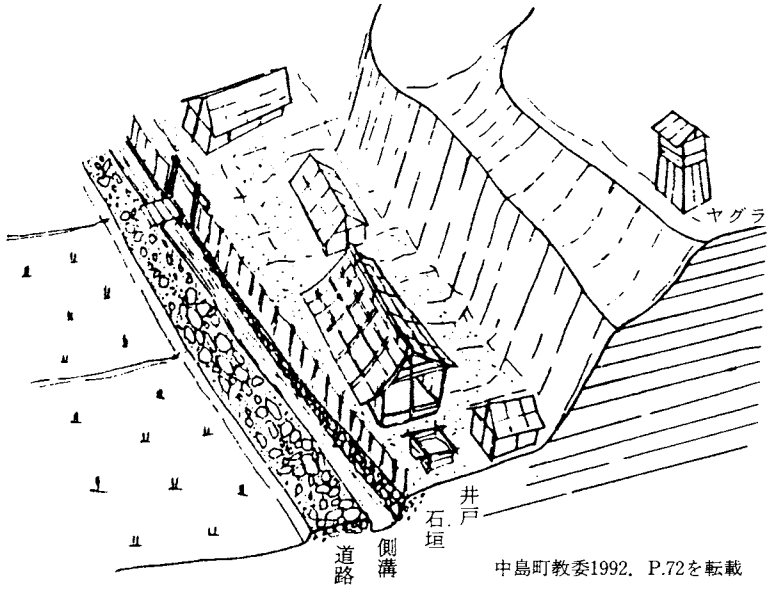
（１）集落遺跡の特質

ここで述べてきた主要遺跡は建物等の住居遺構が確認できたものが少なく、その内部の構造は不明である。しかし、その立地、時期についてはかなり共通した特徴的な部分が見られる。立地については山地裾か丘陵に占地する点で、大半の遺跡が一致しており、沖積地立地が明らかな集落は、存在しない。時期については、弥生時代から中世まで、断続期を挟みながらもかなり長期間にわたって存続する点で、田中遺跡を除けば一致する。

県下で他に集落の分布・時期がかなり明らかになっている地域としては、加賀の金沢・松任市域の平野部をあげることができる。金沢平野は沖積平野、松任の平野部は手取川扇状地と地勢は異なるが、大河川の解析作用で形成された微高地に立地し、比較的短期間で終息する継続性の低さゆえに結果として遺跡数が多くなるあり方は共通しており、富来川流域とは大きく異なるものである。金沢・松任と富来の間で見られるこの様相差は両地域間でやはり大きく異なる地形に起因する部分が大きい。金沢・松任は大河川とそれによって生じた広い平野を持つ地域であり、富来はそうでない地域である。富来川流域の狭小な平野は低湿・軟弱で基本的に居住には適さないため、集落を構える場所は自ずと限られる。すなわち山地裾か丘陵といった緩傾斜地を集落とし、近接する低地をその生業に応じた生産域として活用するあり方が最も理にかなうのである。富来川流域において発見された集落遺跡の大半は、その地形に強く制約されて成立した形態として、ここにその存在を示したい。おそらくは水稲農耕が普及した弥生時代には生活様式として確立しており、以降の時代に受け継がれたものと想定している。

この形態の集落は移動にあたっても地形の制約を強く受ける。おそらくは集落の経済的な基盤となる生産域や水源を変えない限りは、丘陵の範囲内か、山地裾の稜線沿いの、近接した場所に限られよう。居住適地も、移動する範囲も限られるがゆえに、遺跡としては継続性が高いものになり、独特の分布が形成されるのであろう。現在の集落もまた、規模の差はあるが基本的に同様の立地を取っており、当地で集落をなす上でなかば不文律とも言えよう。現在の集落もまた居住適地である事は確実なので、集落遺跡が重複している可能性も高い。

この形態の集落遺跡は管見に及ぶ限り、当地域と同様か近似する地形を有する地域ではほぼ確実に存在する。例えば志賀町、中島町[81]、田鶴浜町など旧福野潟以北の中能登地域で顕著であり、現集落も含めてかなり普遍的な存在である。一方、鹿島郡・羽咋郡の邑知地溝帯地域は、ある程度の規模の河川と平野を持ち、微高地が点在する状況にあるため、金沢・松任と富来の両相が見られる地域と捉えている。よって富来川流域で見いだした集落形態は地域的にも非常に伝統的な集落形態と認識できるが、その出自は地域ではなくむしろ地形に求めるべきと考える。すなわち地形的な条件が合致すれば、地域を問わず存在する性格のものであり、加賀でも河北潟沿岸の山麓などに存在する可能性を指摘したい。ただし、基本的に同じ地形の奥能登地域で確認例が増えてくる可能性が大きいため、能登に偏在する傾向が逆転する事はなく、むしろ今後いっそう顕著になるものと予想しておきたい。集落構造については全く不明であり、その解明が今後の最大の課題である。



第108図　中島町オカ遺跡推定復元図

（２）地域の展開にかかる画期

富来側流域の集落遺跡が高い継続性をもつことは（１）でも述べたが、各遺跡をより細かく見て比較すると、遺跡・遺物が多くなる

時期や逆に少なくなる時期が複数存在することが明らかになった。それらの時期は複数の集落が同じ傾向を示すわけであるから、地域にとってきわめて重要な段階であり、地域の動態が反映されているものと思われる。よって各遺跡が消長を揃える、特に注目すべき時期について検討し、富来川流域における集落遺跡の画期について考えてみたい。

まず、縄文時代から中世にかけての集落の消長で注目すべき時期について述べる。縄文時代は地形の変化を念頭において集落の分布を考えねばならない。現在までのところ本格的な調査例を欠くが、後期を一応の集落の出現期と見るべきであろう。弥生時代は中期II様式に集落の出現、後期後半に集落・遺物の増加を見る。古墳時代は4世紀に極端な空白期、5世紀と6世紀後半に集落・遺物の増加を見る。古代は変化を求めにくいが7世紀後半と8世紀後半～9世紀前半に集落・遺物は増加する。中世は11世紀後半～12世紀後半に集落・遺物増加、14世紀以降に集落の位置がわからなくなっている。

各時代毎にその背景は異なるであろうが、集落・遺物が飛躍的に増加を見せる時期は、おそらく集落が一斉に活性化しているものと考えられ、地域の開発という面では大きな画期を迎えているものと評価する。該当する時期は、大半の遺跡で遺物が出土する様相を示す弥生時代後期後半、5世紀、8世紀後半～9世紀前半、11世紀後半～12世紀後半があげられよう。弥生後期後半に数えられる遺跡数は、実に以降の時期に展開する遺跡数の最大値に比肩し、位置も同じであることから、地域の基礎的な単位となる集落をはじめて成立させた可能性に注目しておきたい。後続する5世紀、8世紀後半～9世紀前半、11世紀後半～12世紀後半の遺跡もほぼ同数である。5世紀はその前段階にほぼ空白期となる4世紀との格差が極端であり、両時期は地域にとってきわめて大きな意味を持つ段階と評価したい。8世紀後半～9世紀前半はここで示した4時期のうちでは最も資料が少ないので、その評価については保留したい。11世紀後半～12世紀後半はその背景から察するにおそらく未曾有の開発期であったものと思われ、人為が及んだ範囲も最も大きかったであろう。各時期はそれぞれ集落の増加・伸張ばかりでなく、社会構造、生活様式、価値観、思想に至る精神面までの大きな変革を伴っているように感じられ、ゆえに集落の消長が鮮明になるのだと推定している。

5　結語

本節では本書及び既往の調査・研究成果に立脚し、集落遺跡の消長を軸にして、富来川流域という地形的に限定された一地域の動態について考えた。その結果、弥生時代から中世に至るまでの長期間に及ぶ展開を考古資料を中心にして追及することができた。また、地域に即した集落形態の存在、地域にとって重要な幾つかの画期の存在という特質を導出し得た。一方、問題点としては発掘調査自体が遺跡のごく一部にしか及んでおらず、我々が得ている資料は遺跡・地域についての断片的な情報に過ぎないことが第一にあげられる。貝田遺跡では、長い存続期間の中で、遺跡の各ブロックは性格と中心時期が少しずつ移動しずれていくことが予想される。調査の及ばなかった部分に今回確認したものとは別の時期が中心となる領域が潜在することは大いに起こり得るであろう。よって今回掴み得た遺跡・地域の動態、特質は当然ながら完全なものではなく、今後に大きな課題を残す。とはいえ、わずかの調査面積・期間においてもこれだけの問題を提起したことはきわめて重要な成果である。今後の調査・研究や、文献史や地質学など他分野からのアプローチによって、補足・修正がなされてゆけば、富来川流域は独自の地形、風土で育まれたであろう能登の歴史・文化を考える上での一モデルとなり得る資質を十二分に備えていると確信した。多くの課題を残したが、今後の調査・研究の進展に強く期待したい。

注

1　石川県教育委員会（以下、石川教委）1992　図44・45、表86～88。

2　高田遺跡、飛塚古墳については、高堀勝喜他「第三章　富来町の考古資料」富来町史編纂委員会（以下、富来史委）1974、山王丸山遺跡については富来町教育委員会（以下、富来教委）1994、田中遺跡については富来教委1988。地頭中世墳墓窟群については桜井甚一「第五章第五節　石造遺物」富来史委1974、木尾嶽城については富来史委1977　p122－124。

3　石川県立埋蔵文化財センター（以下、石川埋文セ）1992c p24。

4　石川埋文セ1993　p10・p22。

5　石川埋文セ1994c p11・p53、社団法人石川県蔵文化財保存協会（以下、社石川協）1993b p35。

6　石川埋文セ1995予定、社石川協1994　p31。

7　滝川重徳氏の教示による。

8　珠洲焼資料館1989　p97－101。

9　田嶋明人「Ⅳ　考察－漆町遺跡出土土器の編年的考察－」石川埋文セ1986a。

10　田辺1981。

11　石川埋文セ1982。

12　小嶋芳孝「ＸＶ　寺家遺跡の層位関係と基準資料」石川埋文セ1988d p133～134、羽咋市教育委員会1990。

13　石川埋文セ1988b p114。

14　花塚信雄「報告の部　４－２　須恵器について」金沢市教育委員会1984。

15　森田・横田1978　ｐ４。

16　川畑1994。

17　色調については、『新版標準土色帳』1989年版　を基準として分類し、表示した。

18　森田・横田1978　p12。

19　垣内光次郎氏の教示による。

20　森田・横田1978　ｐ８。

21　三浦1995刊行予定。

22　垣内1990　p151～153。

23　関清「第１章４　北陸における鉄生産」北陸古代手工業生産史研究会1989　p128、社石川協1993a p122・p124第80図28等。

24　南調査区出土の白磁、青磁については、遺物整理途中の段階で算出された滝川1994の計測値をもとに、整理終了後に再度計測を行っており、その結果、数値を一部修正したものを提示している。

25　吉岡康暢「第二部第二章第二節　窯跡資料の編年」・「第二部第四章第一節二　珠洲窯の創業」吉岡1994。

26　四柳嘉章ほか「遺跡編　Ⅲ　御館遺跡」「研究編　Ⅰ　中世土師器の編年」穴水町教育委員会1987。

27　石川埋文セ1989a。

28　石川埋文セ1988a。

29　中島町教育委員会（以下、中島教委）1992。

30　石川埋文セ1989b。

31　石川埋文セ1992b。

32　宇野隆夫「白河北殿北辺の土器・陶磁器」宇野1989。

33　石川埋文セ1985　p112。

34　四柳嘉章「能登における中世土師器の編年について（補遺）」北陸中世土器研究会（以下、北中土研）1992・「第Ｖ章３　能登における中世土師器の編年について（補遺）」中島教委1992。

35　富山県文化振興財団1990。

36　宮田進一「越中における中世土師器の編年」北中土研1992　p165～166。

37　南調査区出土のロクロ成形土師器は全般に口縁部端の面取り、顕著なロクロひだなど独特の形態を呈するが、一方で共伴する非ロクロ成形の二段ナデ手法土師器に類似し、非ロクロ成形・二段ナデ手法を意識していると見る事もできる。早い段階に導入された二段ナデ手法の非ロクロ成形土師器がロクロ成形土師器に影響を与えて成立させている可能性があろう。

38　三辻利一・木立雅朗「第５章　胎土分析」石川埋文セ1992b。

39　胎土Ａ類の特徴の一つとした黒雲母の含有については、本節の報告にあたって実見した資料では藤橋遺跡、水白モンショ遺跡の中世土師器で多くの個体に認められるのに対して、貝田遺跡や中島町オカ遺跡では小数であった。また、第Ⅶ章第１節の検討にあたり関連資料として実見した寺家遺跡、武部ショウブダ遺跡の９～10世紀代の土師器でも顕著であったが、貝田遺跡ではほとんど見られなかった。弥生土器や古墳時代の土師器についてもやはり似た傾向があり、黒雲母を胎土に含む土器は邑知地溝帯

周辺の遺跡で多く見られるようである。黒雲母は石動山系・眉丈山系に広く分布する造岩鉱物の一つであり、その含有個体が顕著な遺跡の分布地域と一致する。弥生土器・土師器が基本的に在地生産性が高いという前提に立つならば、邑知地溝帯周辺という生産地域をほぼ特定する指標となりうるであろう。能登地域において羽咋郡北部や鹿島郡北部で出土する場合は、郡内レベルでの搬入の可能性を考えておくべきであろう。黒雲母を含む胎土については、時代を問わず能登地域において土器の生産と流通を考える上で重要な存在と言えよう。

40 珠洲市教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室1992、富山大学人文学部考古学研究室・石川考古学研究会1993　p19・図版42、吉岡康暢「資料編　珠洲（系）陶器集成」吉岡1994　p93。

41 珠洲質の陶錘の、窯跡からは定量出土するが集落遺跡ではほとんど見られないようなありかたは、珠洲質の椀皿にも共通しており、甕・壷・片口鉢の「基本三種」を集約的に生産した余剰の製品とも考えられる。珠洲質の椀皿は珠洲市粟津小学校遺跡SK18から出土しており、生産地の集落遺跡にはもたらされているようである。椀皿類と似たありかたを示す陶錘も出土する可能性があろう。逆に、珠洲質の椀皿についても貝田遺跡の陶錘のように他地域へもたらされている可能性もあるものと考えている。

42 吉岡・橋本1965。

43 石川埋文セ1987。

44 石川埋文セ1986b。

45 七尾市教育委員会（以下、七尾教委）1986。

46 七尾教委1983。

47 石川埋文セ1994a。

48 石川埋文セ1986a。

49 金沢市教育委員会1991。

50 野々市町教育委員会1984。

51 石川埋文セ1990。

52 富来教委1994　p86第51図221～223。

53 北野博司「第５章第１節　加賀における７～８世紀の煮沸形態土師器」石川埋文セ1986c。

54 石川埋文セ1992a p63。

55 田嶋明人「古代土器編年軸の設定」石考研・北古土研1988　報告編。

56 須恵器の胎土分類と産地同定については、木立雅朗「第Ⅴ章　須恵器」七尾市教委1986、川畑誠「第４章第５節４　古墳時代以降の遺物」石川埋文セ1991等の論考があり、参考にした。

57 福島正実・木立雅朗ほか「能登　生産遺跡」石考研・北古土研1988　資料編。

58 福井県教育委員会1979　p67　第41図17・18（山本直人氏の教示による）ほか、財団法人愛知県埋蔵文化財センター1993　図版Ⅰ・34～37。

59 本書においては、田嶋氏の編年観（前掲55）を大まかに西暦に置き換えて区分しており、古墳３様式＝５世紀後半、同４様式＝６世紀、古代Ⅰ期＝７世紀前半、同Ⅱ期＝７世紀後半～８世紀初頭、同Ⅲ期＝８世紀前半、同Ⅳ期＝８世紀後半～９世紀初頭、同Ⅴ期＝９世紀、同Ⅵ期を９世紀末～10世紀前半、同Ⅶ期＝10世紀後半～11世紀におおまかに比定している。

60 橋本澄夫「高田遺跡の調査概要」富来史委1974、四柳1983。

61 小嶋芳孝「ⅩⅥ　土器に見る画期と年代観」石川埋文セ1988d p144～145。

62 越後の６～７世紀代の代表的な集落遺跡である新潟県上越市一之口遺跡東地区では、極端に須恵器の比率が少なく、土師器が食膳具・煮沸具とも独特の形態で卓越しており、北陸においては最も東日本的な文化圏の一端を形成している。

63 湯尻修平「能登　消費遺跡」石考研・北古土研1988。

64 藤田邦雄「加賀における様相－土師器－」北中土研1992。

65 出越1994。

66 鈴木俊成「平安時代の土器」新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団1994。

67 ここで用いる時代区分は、縄文・弥生・古墳・古代・中世とし、弥生時代と古墳時代を３世紀と４世紀の間で、古墳時代と古代を７世紀前半と同後半の間で、古代と中世を11世紀前半と同後半の間で分かつ、と便宜的に定めておきたい。

68 貝田遺跡については調査区に近接する町道402号線の改良にかかり、富来町教育委員会が平成７年度・８年度に発掘調査を予定しており、その成果が期待される。

69 富来教委1990、同1994。

70 富来教委1988。

71 高堀勝喜「第一章第三節　古墳時代の富来」富来史委1977、橋本澄夫「第三章第三節　古墳」富来史委1974。

72 戸澗幹夫「昭和58年度（第一次）城館跡調査（南能登地区）　木尾嶽城」石考研1988、和嶋俊二「第二章第三節　南北朝・室町時代」富来史委1977　p122～123。

73　東小室ボガヤチ遺跡、東小室キンダ遺跡については平成６年度に県埋文センターが実施した分布調査で発見されており、どちらも出土遺物から、弥生時代から中世にかけて複合した遺跡と推定されている。平成７年度に県埋文センターによる発掘調査が予定されており、その成果が期待される。今田Ｂ遺跡からは御物石器が、ワガクチ遺跡、八幡座主遺跡からは古代、八幡バケモンザカ遺跡からは弥生時代の遺物が確認されている（高堀勝喜他「第三章　富来町の考古資料」富来史委1974、富来教委1990）。

74　「荒木」については正倉院文書・『和名類聚抄』で見られる（和嶋俊二「第二章第一節　国衙領・荘園の時代」富来史委1977　p81）。

75　高堀勝喜「第一章第四節　奈良・平安時代の富来」富来史委1977　p75～77。

76　11世紀後半から12世紀にかけての遺物は貝田遺跡から圧倒的に多く出土している他、貝田Ｃ遺跡、山王丸山遺跡からも出土している。また、東小室ボガヤチ遺跡、東小室キンダ遺跡でも分布調査の際に出土している。この時期は弥生時代後期後半、５世紀、８世紀後半～９世紀前半に並んで遺跡数が最も多い時期の一つにあげることができ、富来川流域において集落の群在する景観を想定できるものと考えている。

77　和嶋俊二「第二章第一節　国衙領・荘園の時代」富来史委1977　p82。ちなみに「富来」の所見は、その記述がある中島町藤津比古神社神職の尾沢家々譜が近世文書であるため検討を要するが、皇和元年（1099年）まで遡る。

78　和嶋俊二「第二章第一節　国衙領・荘園の時代」富来史委1977　p83～85。和嶋俊二氏は古代の駅制に代わる海路交通の発達によって強まった中央との結びつきが深く関係すると推定している。

79　和嶋俊二「第二章第三節　南北朝・室町時代」富来史委1974。

80　伝承をもとに富来町史跡保存会によって作成された木尾嶽城の復元図（石考研1988　p22）によると、富来川流域の主要な丘陵はのきなみその出城となっている。木尾嶽城の築城を14世紀代とし同時に出城が設置されたと仮定すると、集落の位置が不明確になる時期とほぼ一致する。さらに推測を進めると、13世紀まで群在していた集落は、この時期に移動するとしても、移動が可能な場所は地形的に見て現在の集落の位置にほぼ限られてしまうものと感じる。そして現在の集落のうちで最も規模が大きく中心的な存在である地頭・領家の両集落の成立もその名称が示す通り、この時期に求められる可能性が高い。あまり明確でない状況から仮定を重ねた末の推測であるが、この時期に集落の現在地への移動、新しい中心集落が成立し、以降、現代に至る富来川流域の集落配置の原型が成立している可能性を指摘しておきたい。

81　中島町では熊木川の下流域、特に左岸域においては上流側から熊木城、上町カイダ遺跡、定林寺前遺跡、ノギヤチ遺跡、ヤトン谷内遺跡、オカ遺跡が丘陵裾に連なって分布しており、縄文時代から中世にかけての長期間にわたって複合する遺跡が大半である。富来川流域と同質の地形、遺跡分布、消長が最も顕著に見られる地域として注目しておきたい。そして、今後さらに能登地域で類例の増加を望むものである。

参考文献

穴水町教育委員会『西川島　能登における中世村落の発掘調査』1987年

石川県教育委員会『石川県遺跡地図』1992年

石川県農林水産部耕地整備課『土地分類基本調査』七尾・小口瀬戸・虻が島　1984年

石川県農林水産部耕地整備課『土地分類基本調査』穴水・富来・剣地　1991年

石川県立埋蔵文化財センター『柳田タンワリ１号窯』1982年

石川県立埋蔵文化財センター『鶴来町白山遺跡・白山町墳墓遺跡（II）』1985年

石川県立埋蔵文化財センター『漆町遺跡　Ｉ』1986年ａ

石川県立埋蔵文化財センター『金沢市戸水Ｃ遺跡』1986年ｂ

石川県立埋蔵文化財センター『佐々木ノテウラ遺跡』1986年ｃ

石川県立埋蔵文化財センター『永町ガマノマガリ遺跡』1987年

石川県立埋蔵文化財センター『漆町遺跡　II』1988年ａ

石川県立埋蔵文化財センター『辰口西部遺跡群　Ｉ』1988年ｂ

石川県立埋蔵文化財センター『寺家遺跡発掘調査報告II』1988年ｄ

石川県立埋蔵文化財センター『白江梯川遺跡　II』1989年ａ

石川県立埋蔵文化財センター『水白モンショ遺跡』1989年ｂ

石川県立埋蔵文化財センター『小松市高堂遺跡』1990年

石川県立埋蔵文化財センター『押水町冬野遺跡群』1991年

石川県立埋蔵文化財センター『石川県松任市相川遺跡群』1992年ａ

石川県立埋蔵文化財センター『藤橋遺跡』1992年ｂ

石川県立埋蔵文化財センター『年報（平成２年度）』第12号　1992年ｃ

石川県立埋蔵文化財センター『年報（平成３年度）』第13号　1993年

石川県立埋蔵文化財センター『石川県七尾市三室まどがけ古墳群』(概報) 1994年 a
石川県立埋蔵文化財センター『大屋ヒヤマ窯・寺家クロバタケ窯跡』1994年 b
石川県立埋蔵文化財センター『年報 (平成4年度)』第14号 1994年 c
石川県立埋蔵文化財センター『年報 (平成5年度)』第15号 1995年刊行予定。
石川考古学研究会『シンポジウム「月影式」土器について』報告編・資料編 1986年
石川考古学研究会『石川県城館跡分布調査報告』1988年
石川考古学研究会・北陸古代土器研究会『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』報告編・資料編 1988年
宇野隆夫『考古資料に見る古代と中世の歴史と社会』1989年 真陽社
蝦夷穴古墳国際シンポジウム実行委員会『蝦夷穴古墳国際シンポジウム 古代能登と東アジア』1992年
垣内光次郎「中世北陸の暖房文化」『石川考古学研究会々誌』第33号 1990年
金沢市教育委員会『畝田・寺中遺跡』1984年
金沢市教育委員会『千木ヤシキダ遺跡・II』1991年
川畑 誠「石川県内出土の木製食器・容器に関する覚書」『北陸古代土器研究』第4号 北陸古代土器研究会 1994年
財団法人愛知県埋蔵文化財センター『朝日遺跡Ⅳ』1993年
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要Ⅳ 水田跡調査の方法と研究』1993年
財団法人富山県文化振興財団『東海北陸自動車道関連発掘調査概報 (1) 梅原胡麻堂遺跡』1990年
社団法人石川県埋蔵文化財保存協会『小松市林遺跡』1993年 a
社団法人石川県埋蔵文化財保存協会『社団法人石川県埋蔵文化財保存協会年報4 平成4年度』1993年 b
社団法人石川県埋蔵文化財保存協会『社団法人石川県埋蔵文化財保存協会年報5 平成5年度』1994年
珠洲市立珠洲焼資料館『珠洲の名陶』1989年
珠洲市教育委員会・富山大学考古学研究室『珠洲市寺家クロバタケ窯試掘調査の成果 - 現地説明会資料 - 』1992年
田辺昭三『須恵器大成』 角川書店 1981年
滝川重徳「北陸における土器から見た貿易陶磁」『古代末から中世前期における土器から見た貿易陶磁器』(中世土器研究会第13回研究集会報告資料) 1994年
出越茂和「加賀におけるロクロ土師器の出現と展開」『中近世土器の基礎研究X』日本中世土器研究会 1994年
富来町教育委員会『田中遺跡』1988年
富来町教育委員会『山王丸山遺跡 遺跡詳細分布調査概要報告書』1990年
富来町教育委員会『山王丸山遺跡』1994年
富来町史編纂委員会編『富来町史』資料編 1974年
富来町史編纂委員会編『富来町史』通史編 1977年
富山大学人文学部考古学研究室・石川考古学研究会『珠洲大畠窯』1993年
中島町教育委員会『オカ・ノギヤチ遺跡』1992年
中島町教育委員会『ヤトン谷内遺跡』1995年刊行予定
七尾市教育委員会『万行赤岩山遺跡』1983年
七尾市教育委員会『矢田遺跡』1986年
七尾市教育委員会『七尾城下町遺跡 七尾城跡シッケ地区遺跡発掘調査報告書』1992年
新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団『北陸自動車道上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅳ 一之口遺跡東地区』1994年
野々市町教育委員会『御経塚ツカダ遺跡発掘調査報告書I』1984年
農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所『新版標準土色帳』1989年版 1989年
羽咋市教育委員会『四柳白山下遺跡I』1990年
福井県教育委員会『鳥浜貝塚 - 縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査1 - 』1979年
北陸古代手工業生産史研究会『北陸の古代手工業生産』1989年
北陸中世土器研究会『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』1992年
松井健・近藤鳴雄『土の地理学 - 世界の土・日本の土 - 』1992年 朝倉書店
松井健『土壌地理学序説』1988年 築地書館
三浦ゆかり「石川県内出土の下駄について - 古代・中世の資料を中心として - 」『石川考古学研究会々誌』第38号 1995年刊行予定
森田勉・横田賢次郎「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4 1978年
吉岡康暢『中世須恵器の研究』1994年 吉川弘文館
吉岡康暢・橋本澄夫「石川県鹿島郡鹿西町金丸宮地遺跡出土の土師器」『石川考古学研究会々誌』第9号 1965年
四柳嘉章「古墳時代の沙庭と祭具 - 富来町高田遺跡祭祀遺構の一考察 - 」『北陸の考古学』(『石川考古学研究会々誌』第26号) 1983年

図　　版

遺跡周辺航空写真（㈱セントラル航業提供）

遺跡周辺遠景（南西から）

貝田遺跡遠景（南西から）

パイプライン最東調査区全景（東から）

パイプライン最東調査区全景（西から）

パイプライン東調査区全景（東から）

パイプライン東調査区全景（西から）

排水路調査区全景（北から）

排水路調査区全景（南から）

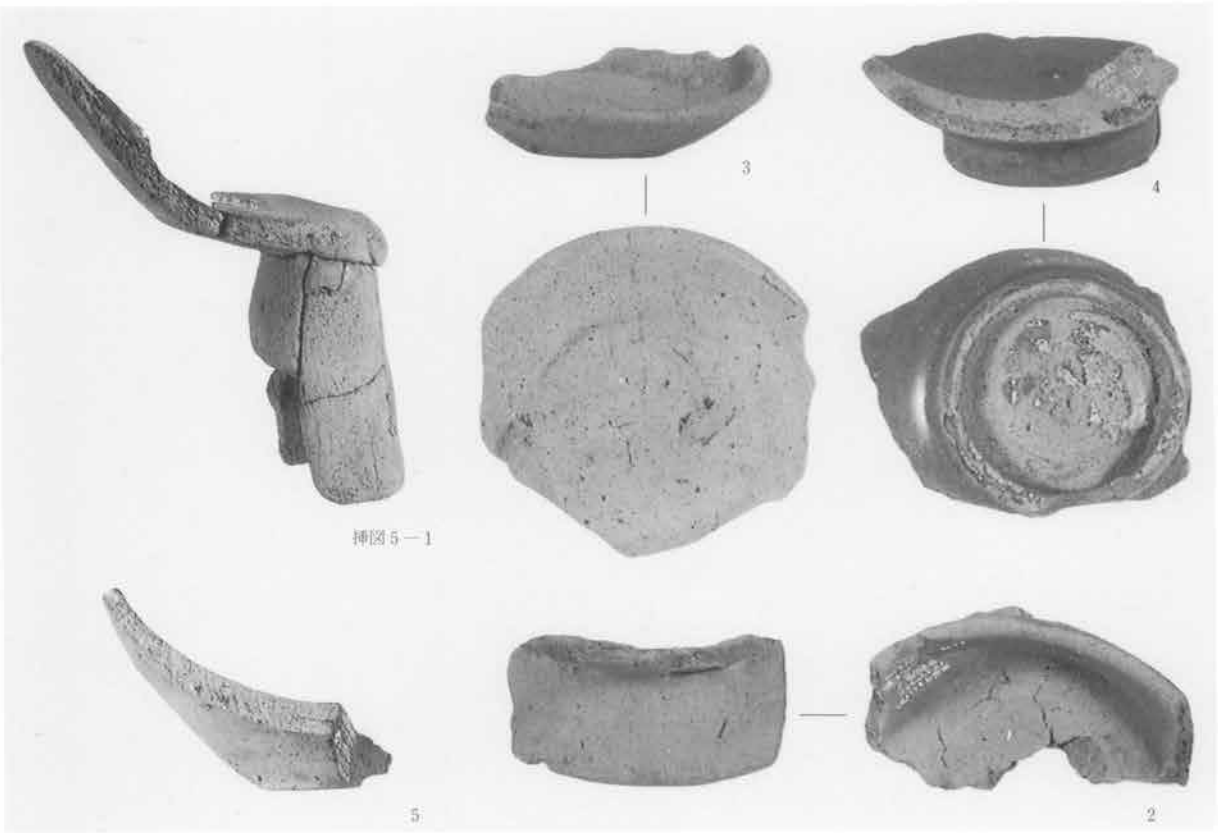
パイプライン西調査区全景（東から）

パイプライン西調査区全景（西から）

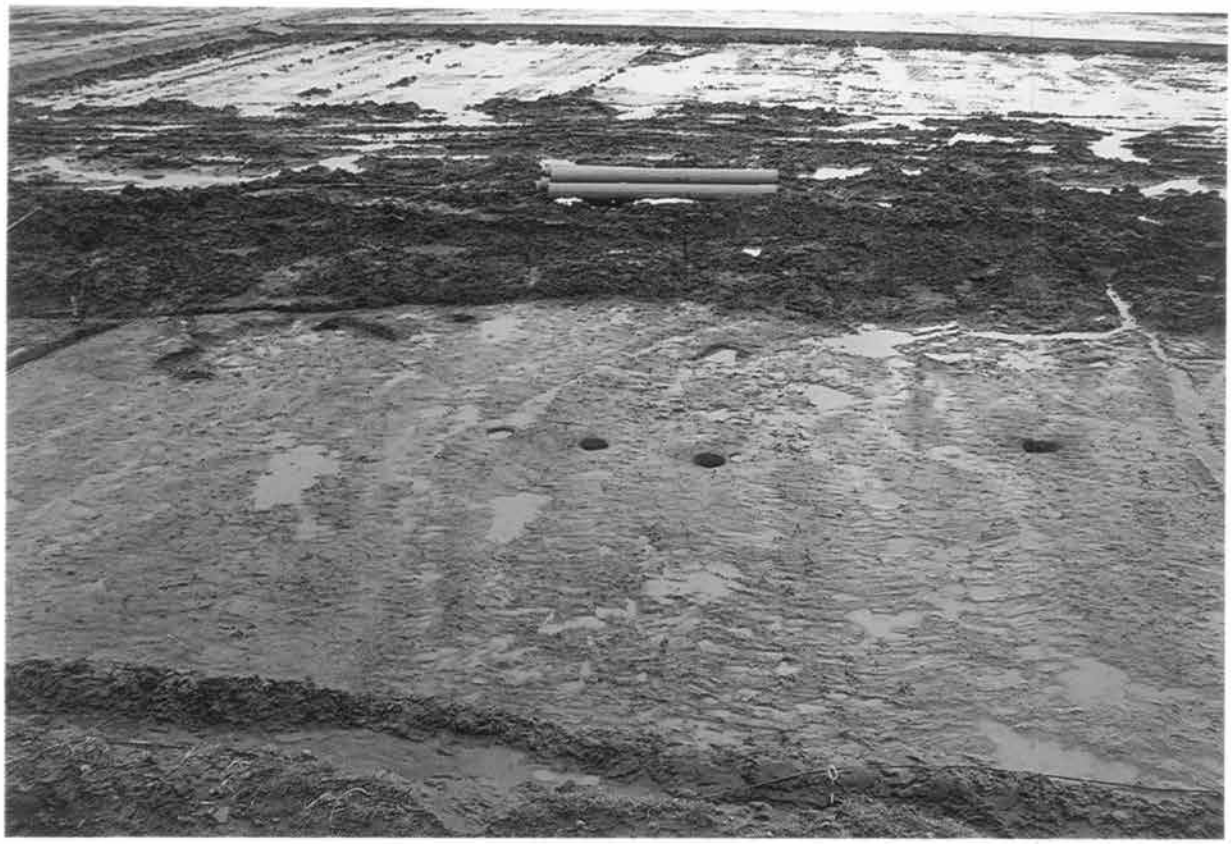
パイプライン最西調査区全景（東から）

パイプライン最西調査区全景（西から）

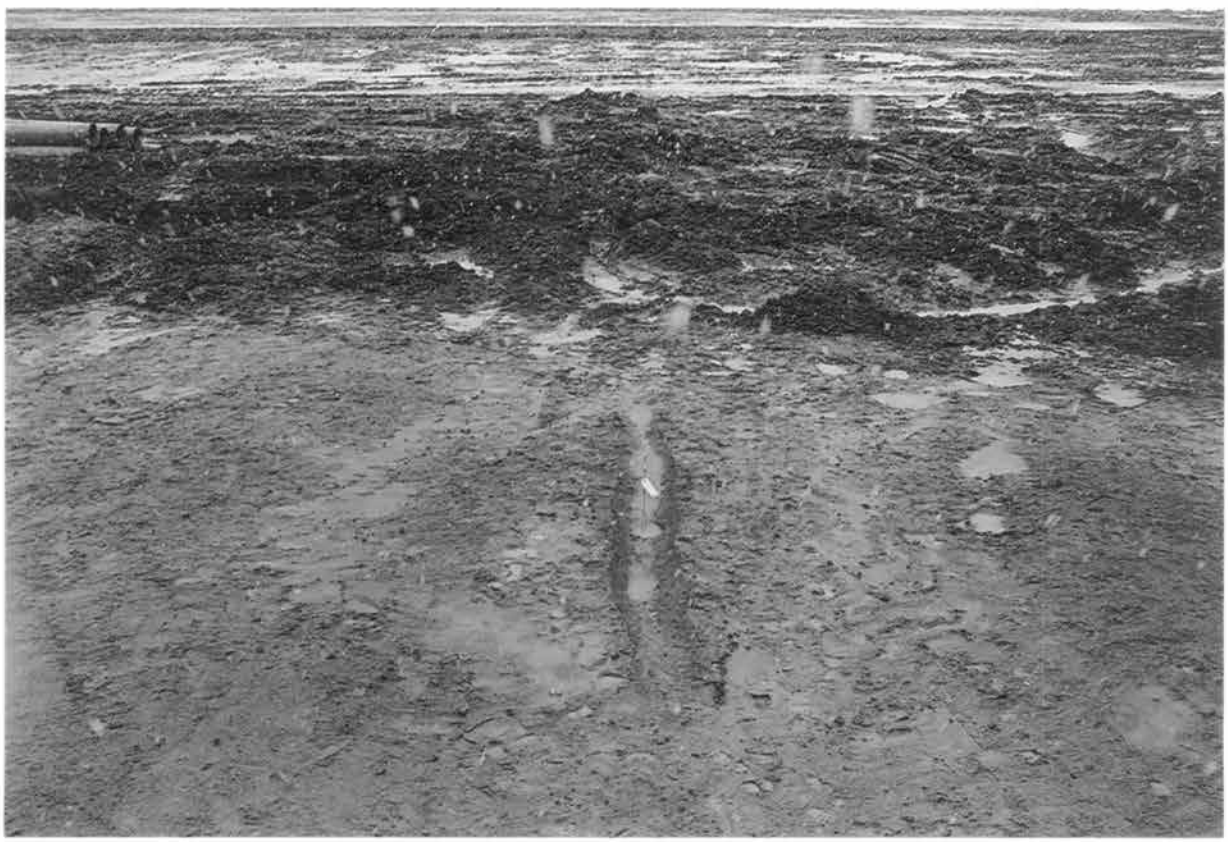
東半調査区全景（西から）



出土遺物



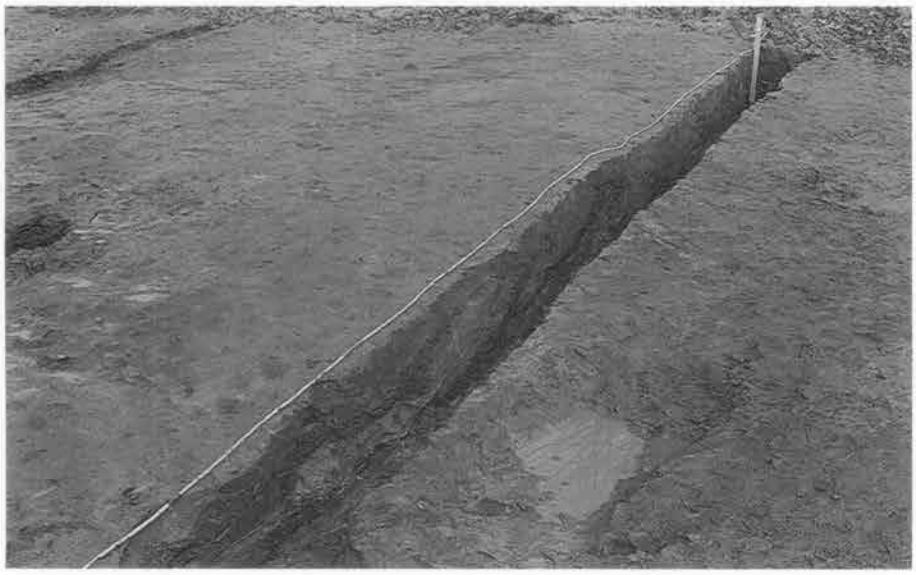
No.13地区柱穴状ピット（北東から）



No.14地区溝状遺構（北東から）

No.12地区断ち割り土層断面
（北西から）

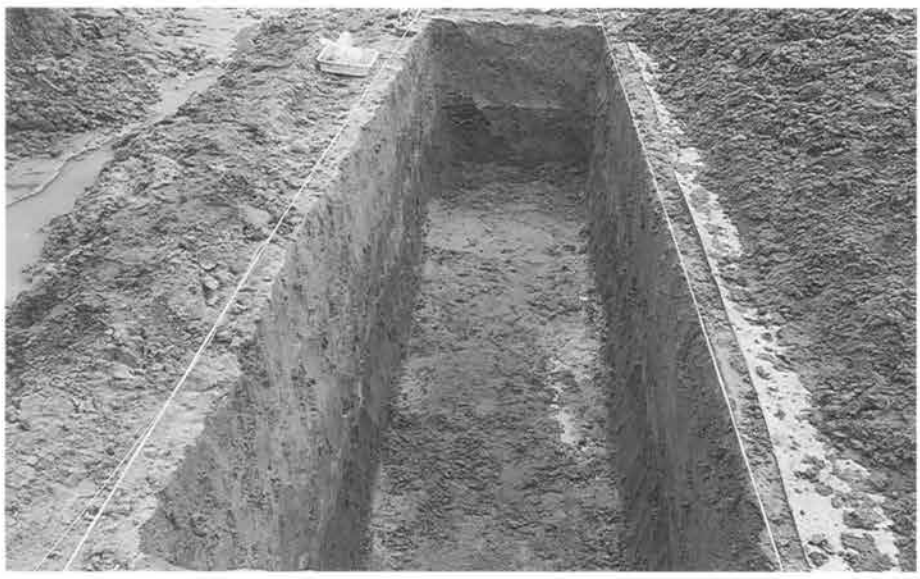
No.12地区　パイプライン
調査区北東壁土層断面
（南から）



No.13地区断ち割り土層断面
（南から）

パイプライン調査区
作業状況（北西から）

パイプライン調査区
作業状況（北西から）

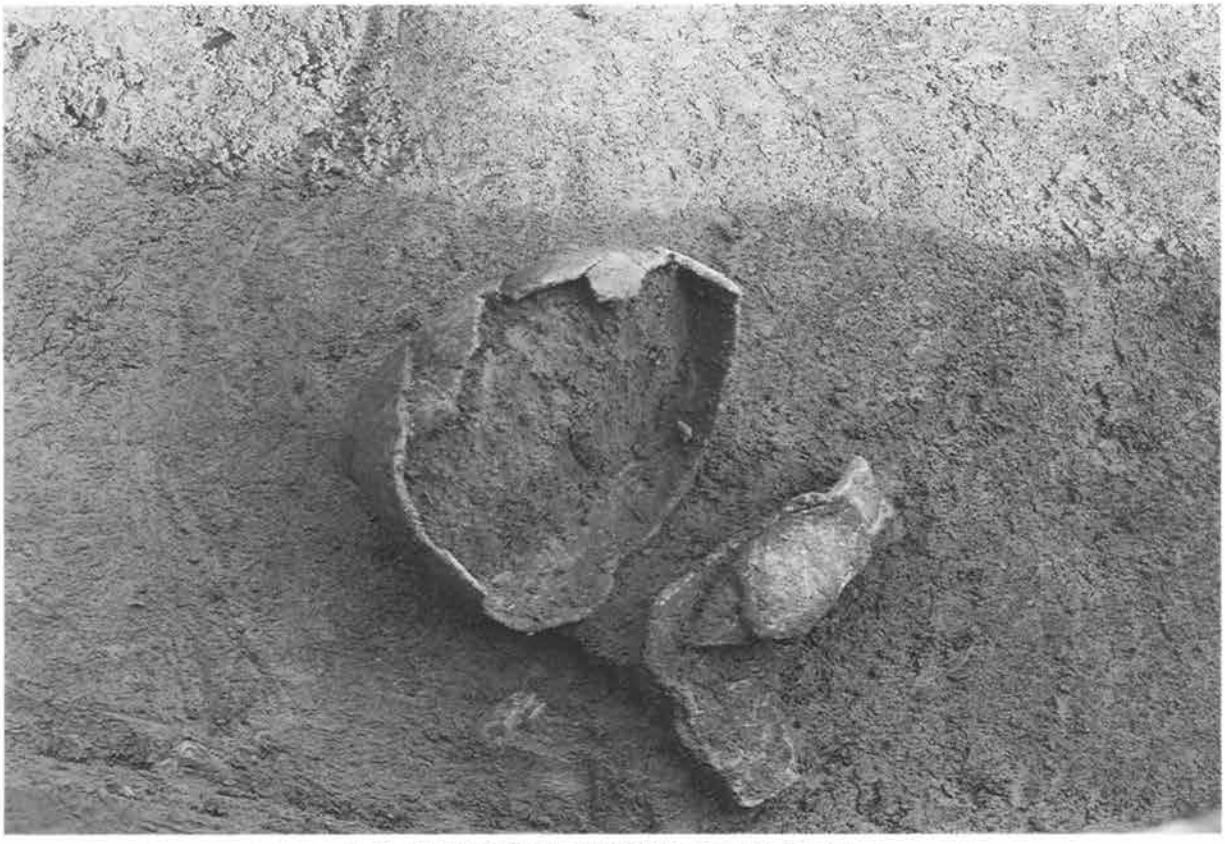


No.13＋10地区パイプライン
調査区
完掘状況（北西から）

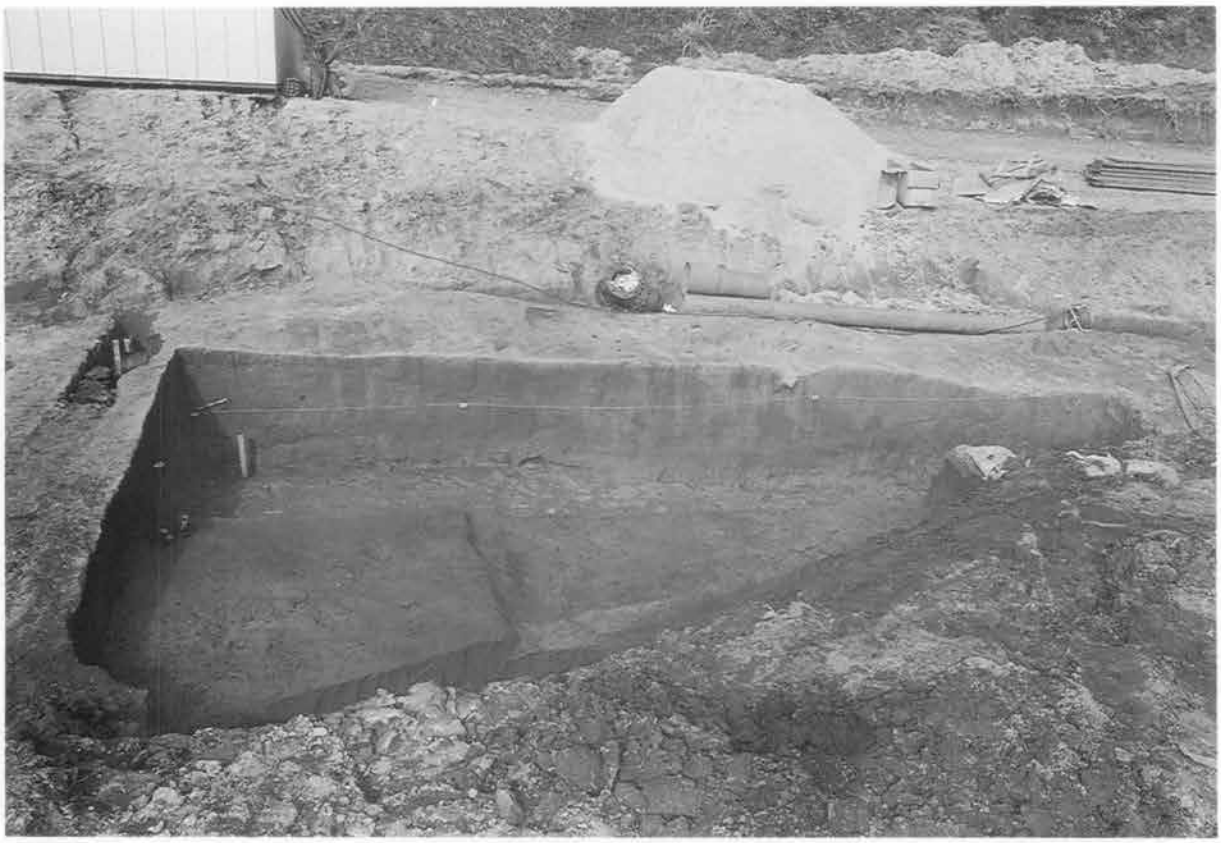
パイプライン調査区完掘状況（北西から）

パイプライン調査区完掘状況（南東から）

No.11＋10地区拡張部土師器甕出土状況、土層断面（南東から）

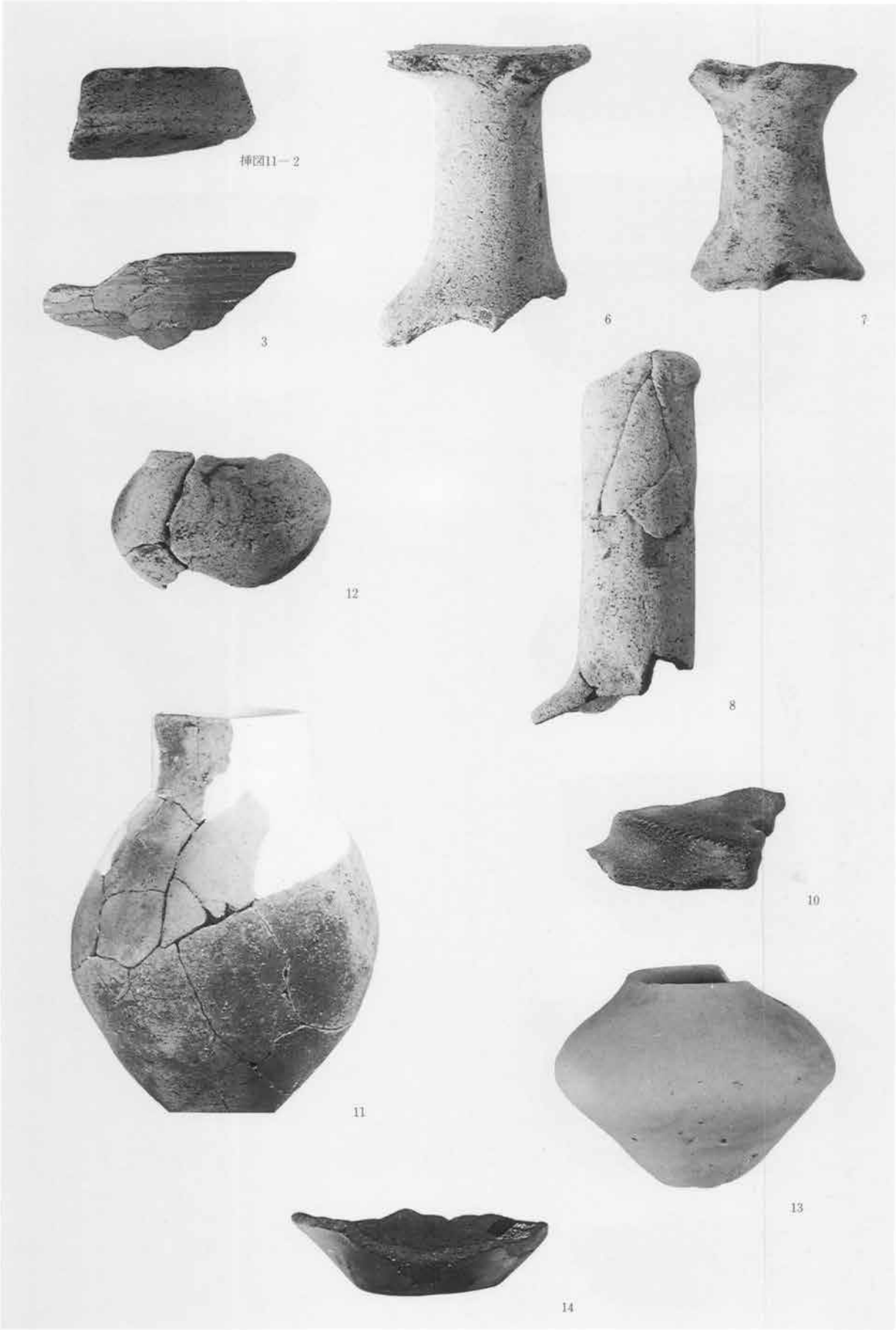


No.11＋10地区拡張部土師器甕出土状況（南西から）



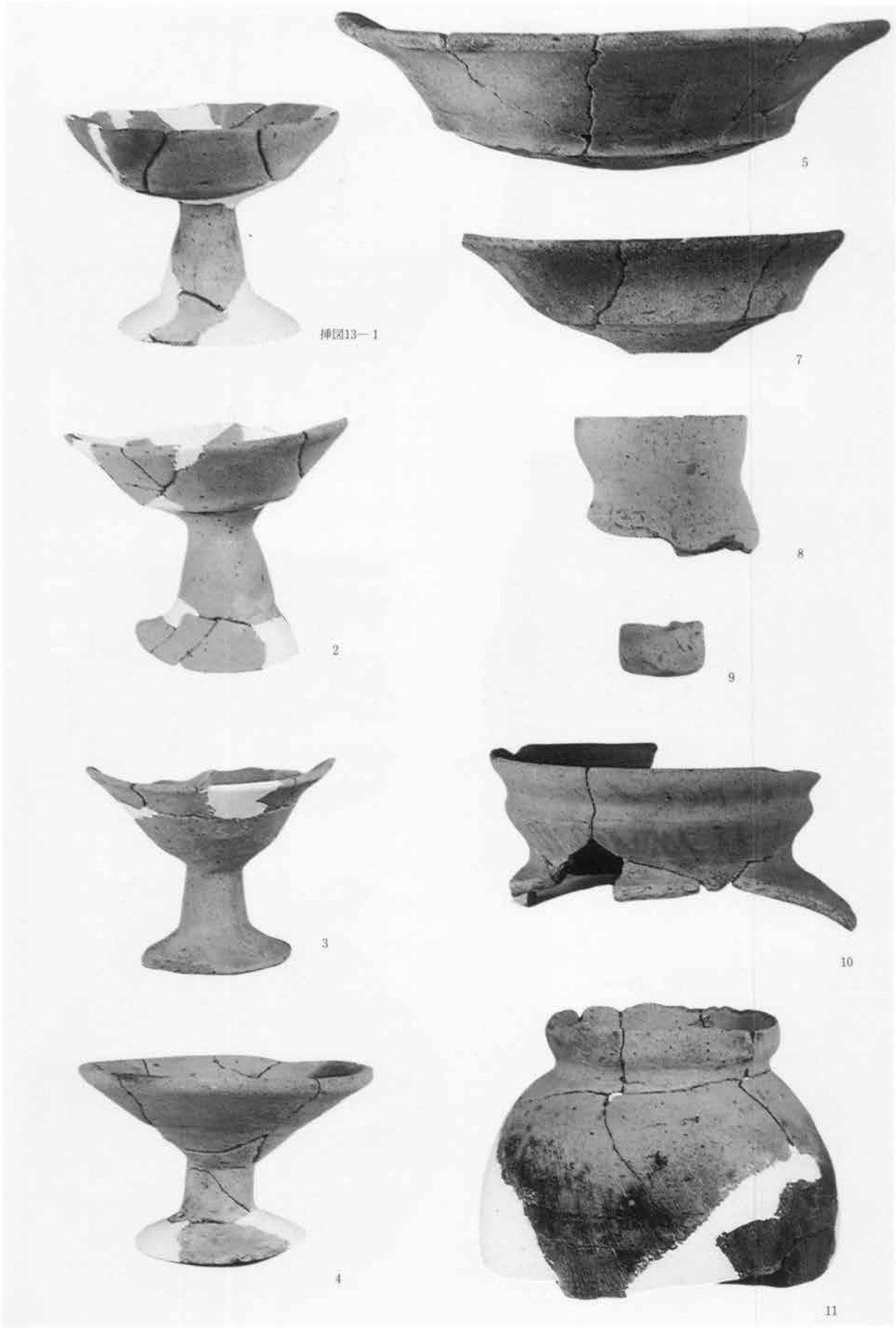
No.11＋10地区拡張部完掘状況（南西から）

調査区全景（南東から）

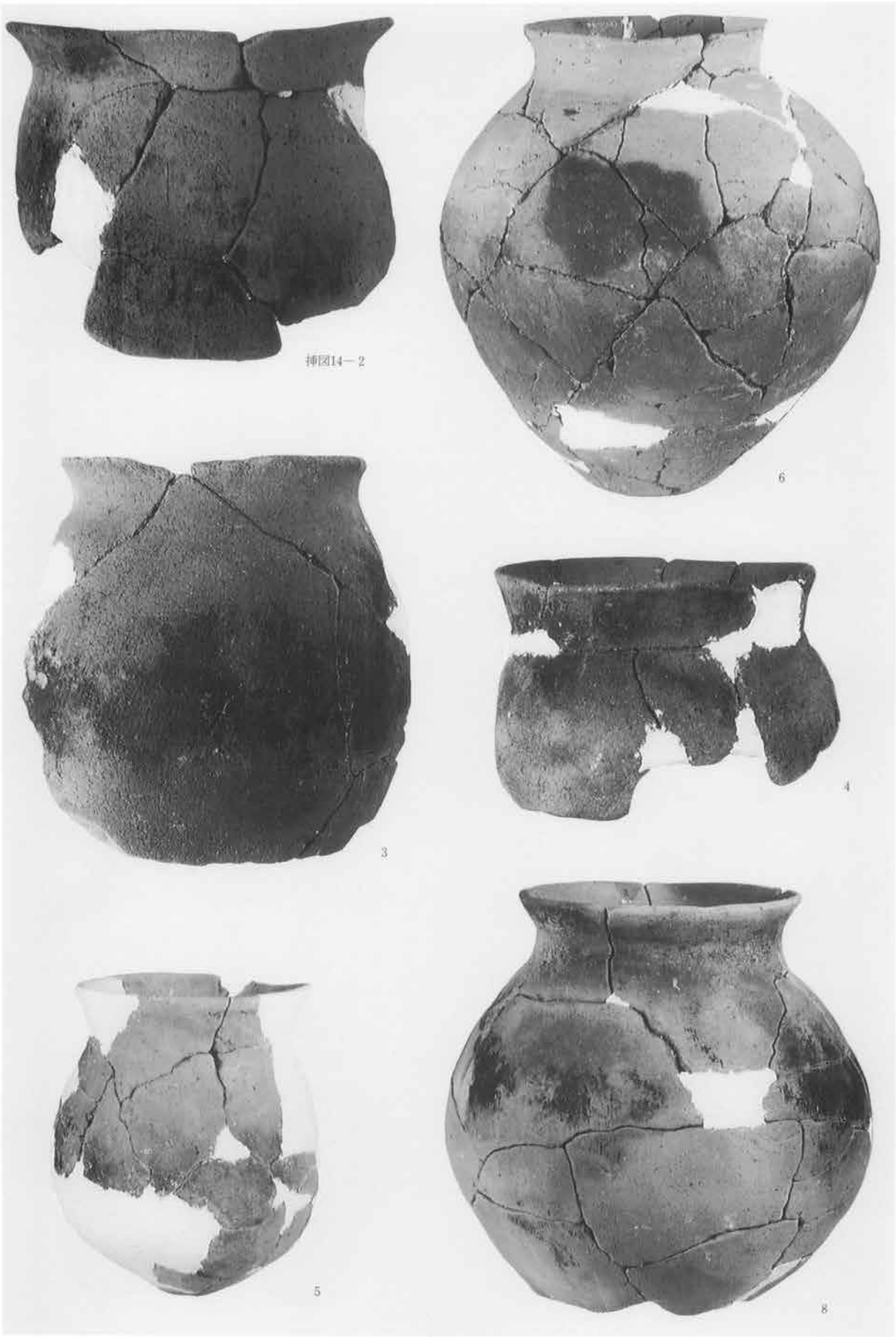


出土遺物（1）

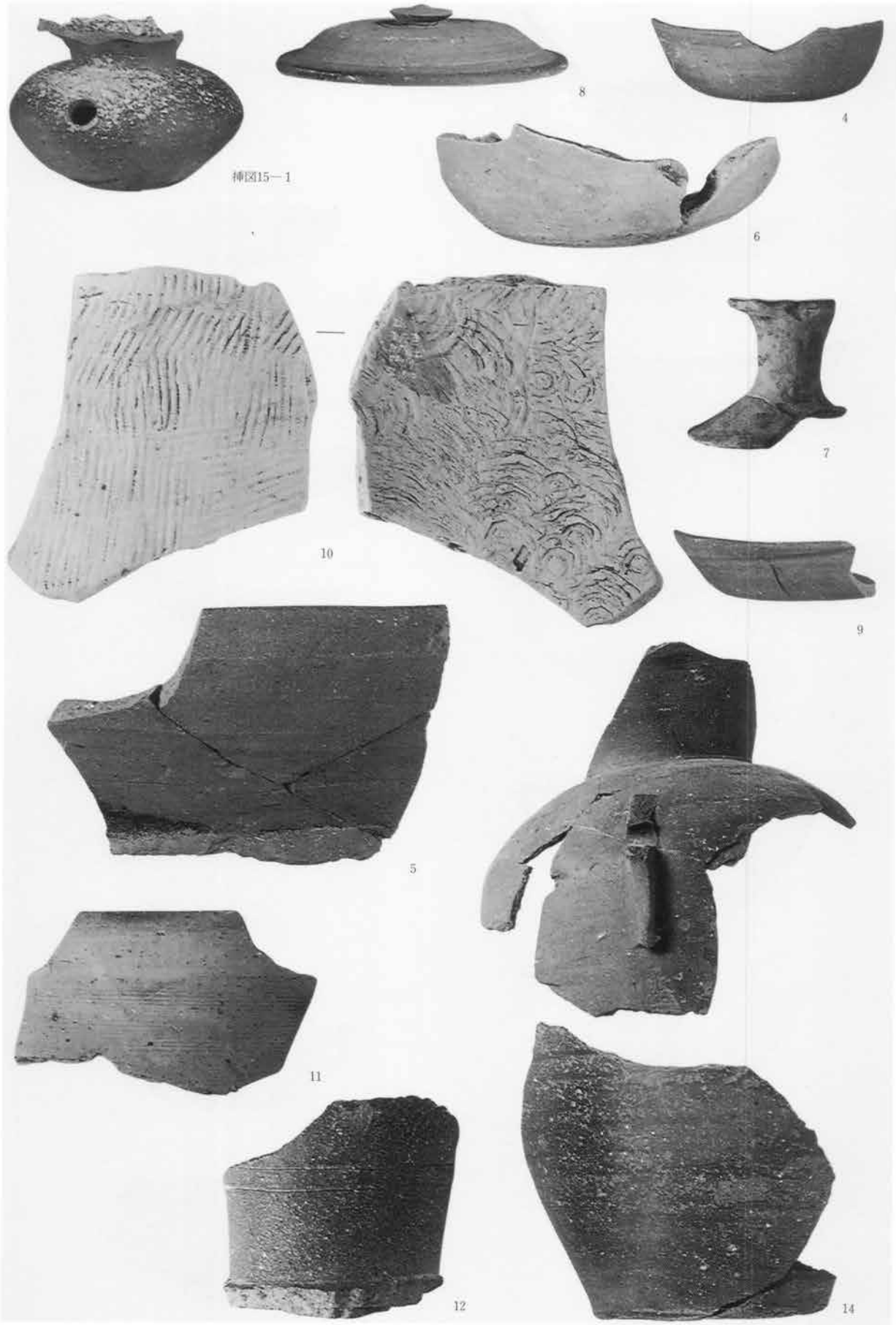
出土遺物（2）



出土遺物（3）

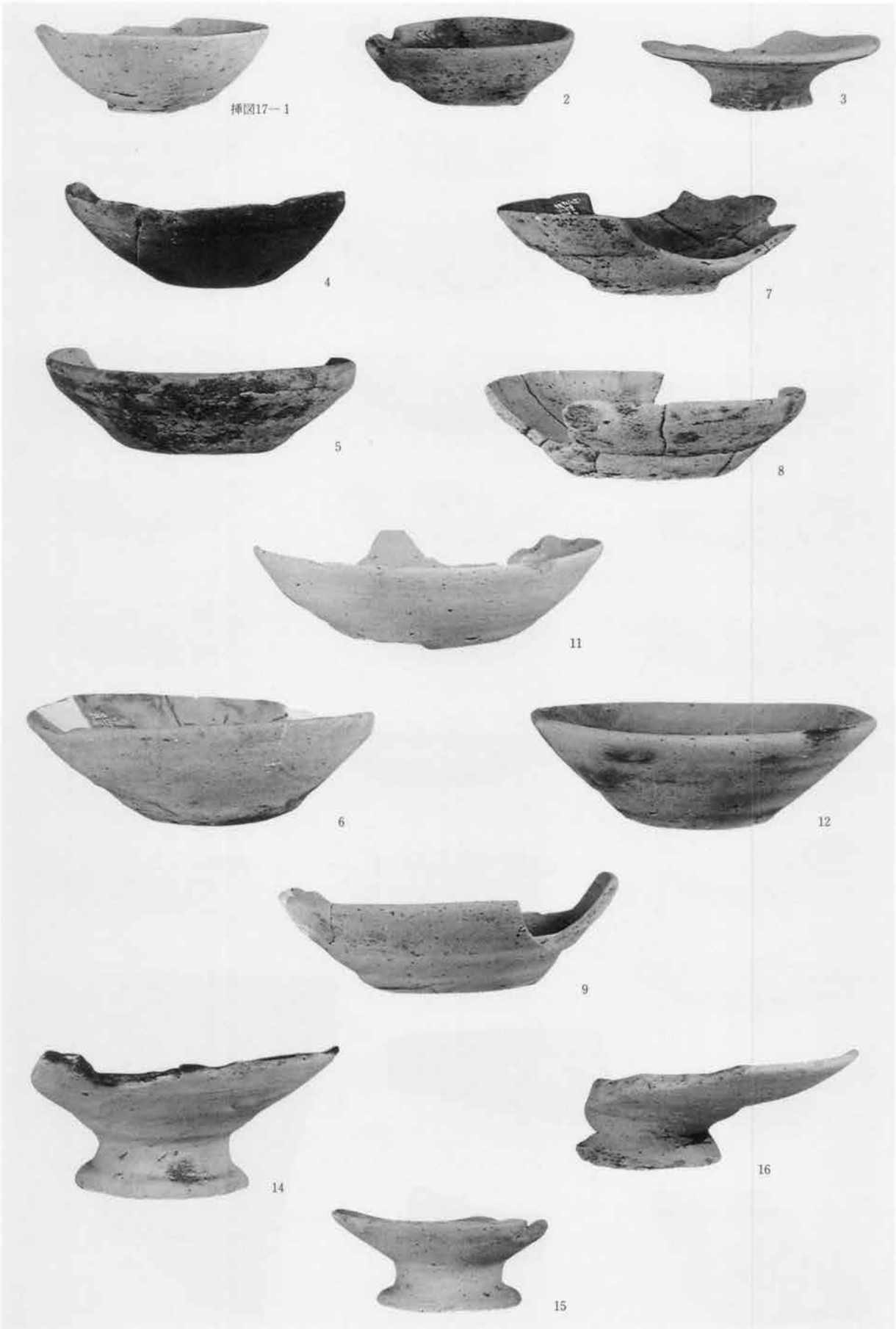


出土遺物（4）

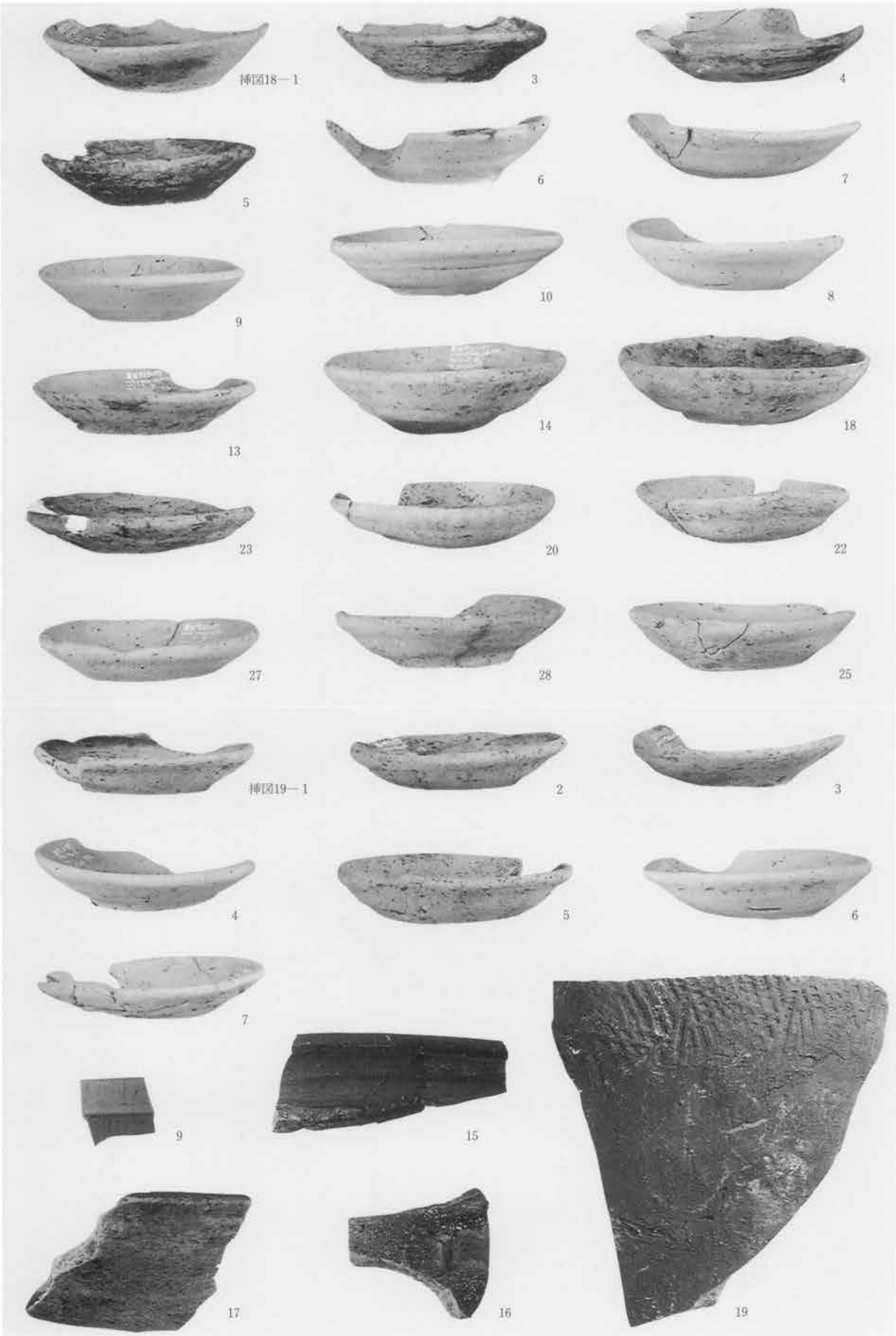


出土遺物（5）

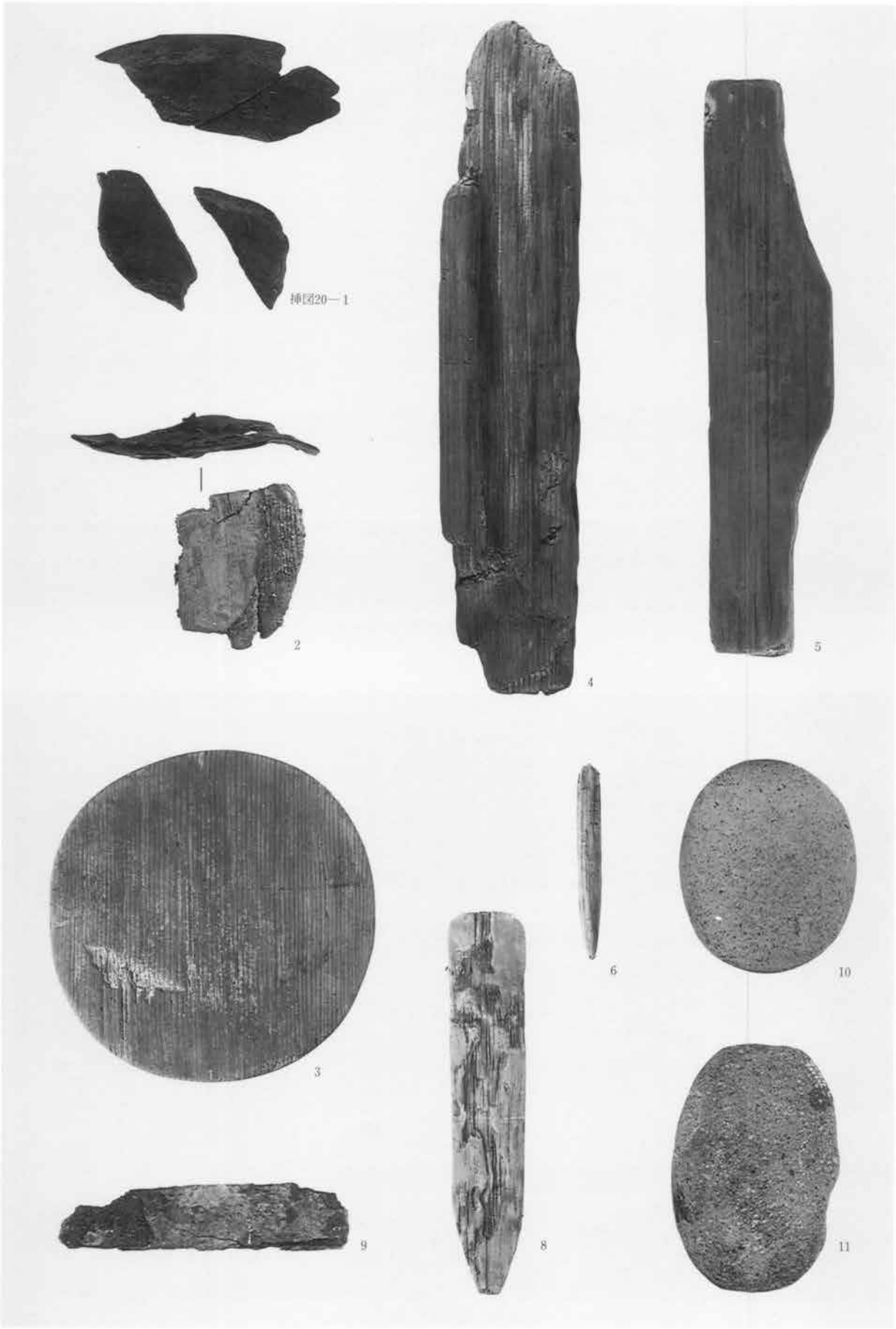
出土遺物（6）



出土遺物（7）


挿図18－1
3
4
5
6
7
9
10
8
13
14
18
23
20
22
27
28
25
挿図19－1
2
3
4
5
6
7
9
15
17
16
19

出土遺物（8）



出土遺物（9）

1区上位遺構面全景（北から）

2～3区上位遺構面全景（北から）

3～4区上位遺構面全景（北から）

4～5区上位遺構面全景（北から）

5～6区上位遺構面全景（北東から）

掘立柱建物（東から）

18号ピット（南西から）

5区層17　土器・陶磁器出土状況（検出時、南から）

5区層17　土器・陶磁器出土状況（検出時の遺物の下位のもの、南から）

図版28（貝田遺跡第3次発掘調査南調査区）

竪穴（北から）

25号・26号ピット（南から）

25号ピット（南から）

1区下位遺構面全景（北から）

2区下位遺構面全景（南から）

3区下位遺構面全景（南から）

4区下位遺構面全景（南から）

5区下位遺構面全景（南から）

6区下位遺構面全景（南から）

図版32（貝田遺跡第3次発掘調査南調査区）

2区北半縦断面土層（西から）

2区南半縦断面土層（西から）

3区北半縦断面土層（西から）

3区南半縦断面土層（西から）

4 区北半縦断面土層（西から）

4 区南半縦断面土層（西から）

5 区北半縦断面土層（西から）

5 区南半縦断面土層（西から）

図版33（宮田遺跡第3次発掘調査写真）

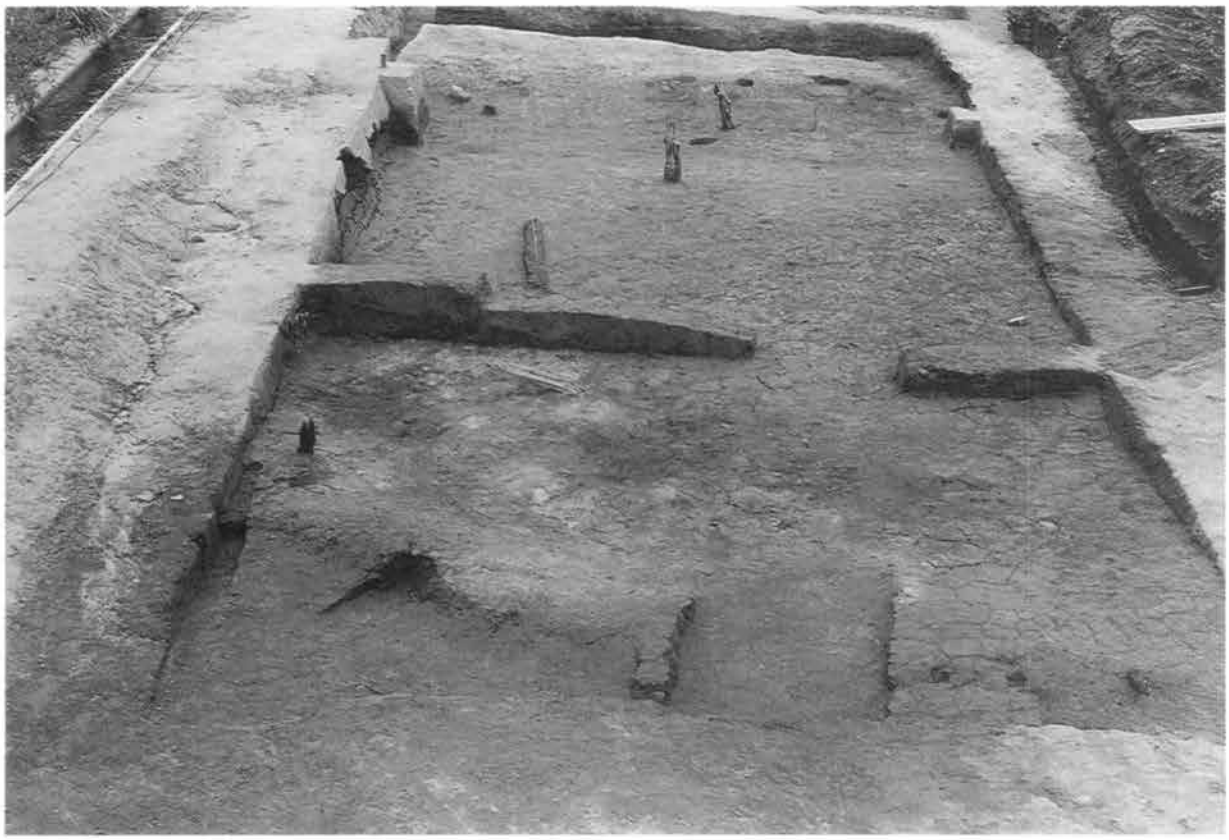
図版34（貝田遺跡第3次発掘調査南調査区）

3区畦畔（南から）

4区東半畦畔（南から）

4区畦畔（南北方向畦畔に近接、北から）

4区西半畦畔（南から）



5～6区畦畔（西から）

3区遺物出土状況（北から）

4区遺物出土状況（北から）

4区遺物出土状況（北半部に木器集中、北から）

4区遺物出土状況（北半部に木器集中、北から）

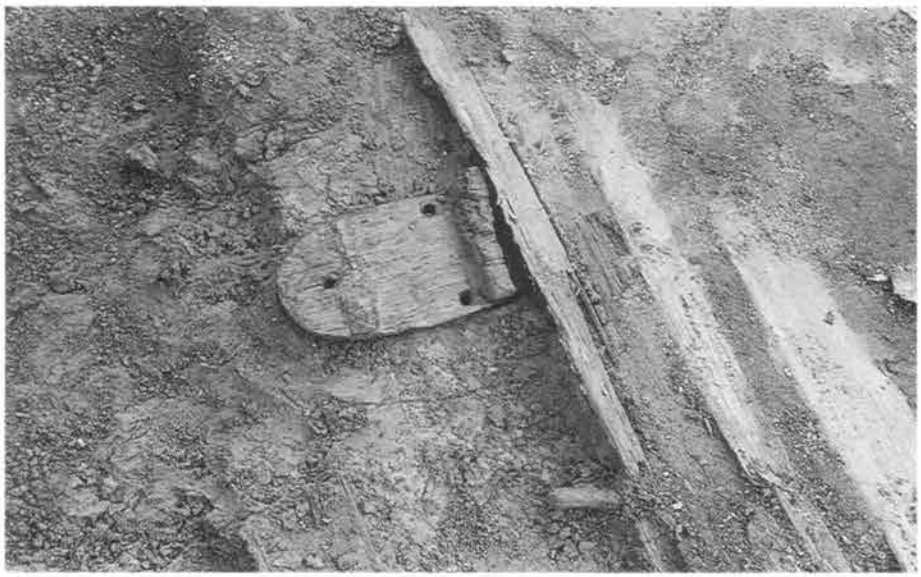
4区遺物出土状況（南半部に中世土師器集中、西から）

4区遺物出土状況（南半部に中世土師器集中、南から）

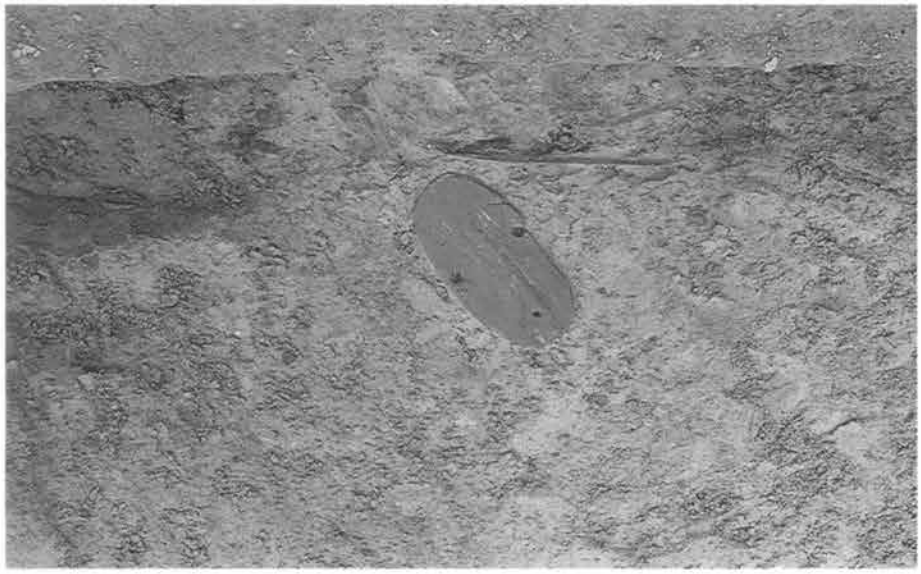
5区遺物出土状況（南から）

5区遺物出土状況（畦畔のコーナー部分に中世土師器集中、北から）

2区下駄（第60図1）出土状況



2区下駄（第60図2）出土状況



2区下駄（第61図1）出土状況

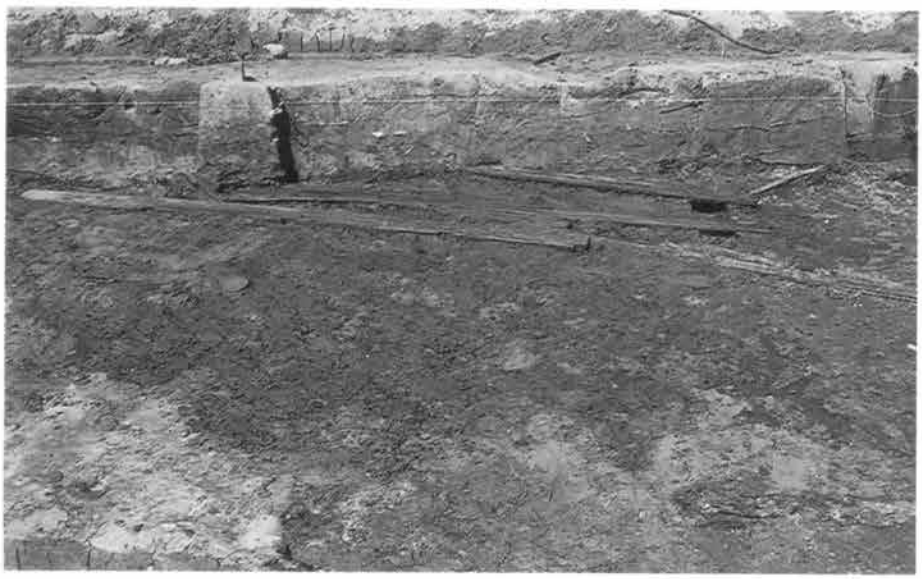
4区下駄（第62図1）出土状況

4区下駄（第62図2）出土状況

3区舟形出土状況

4区漆器出土状況

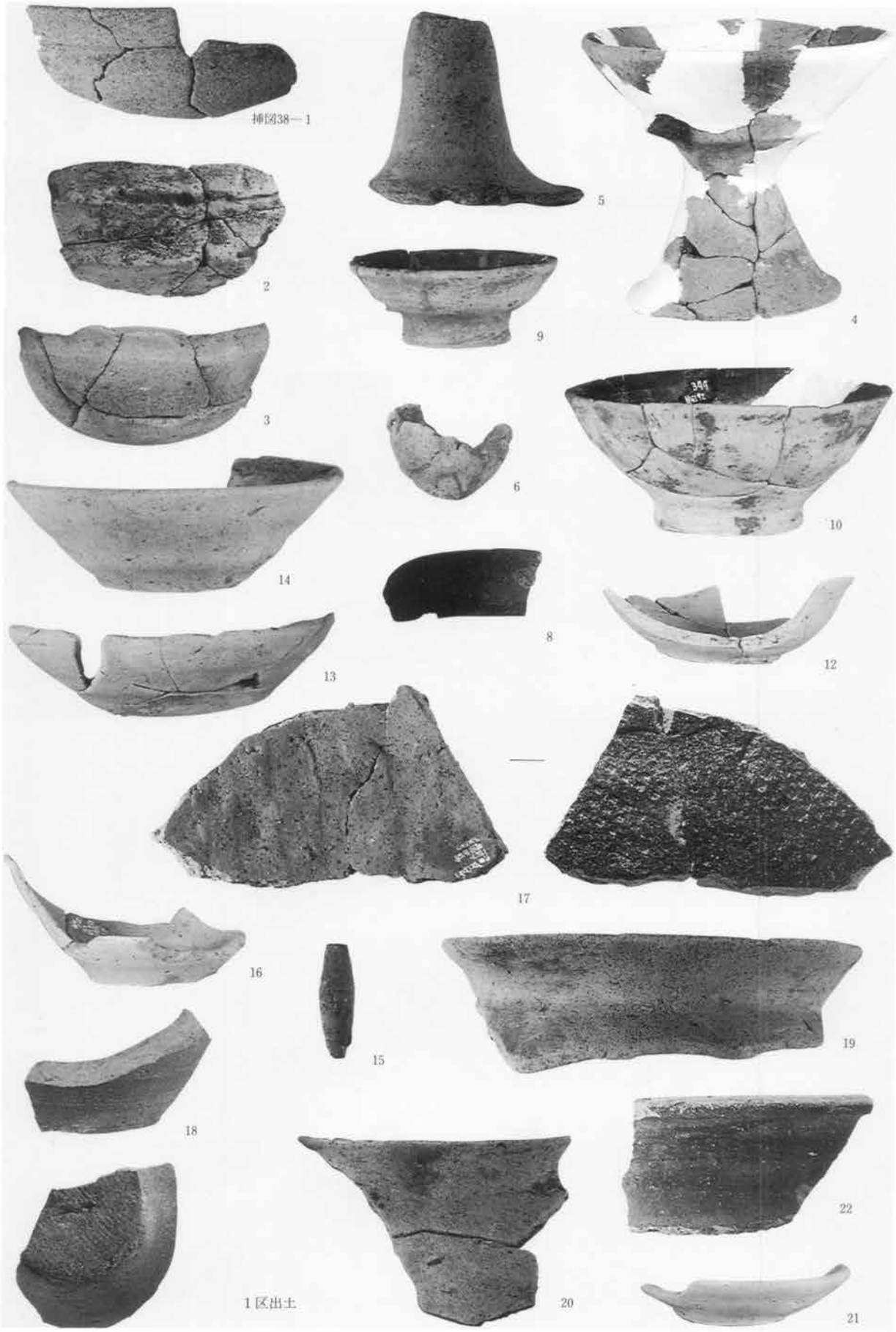
2区部材出土状況（段南部、西から）



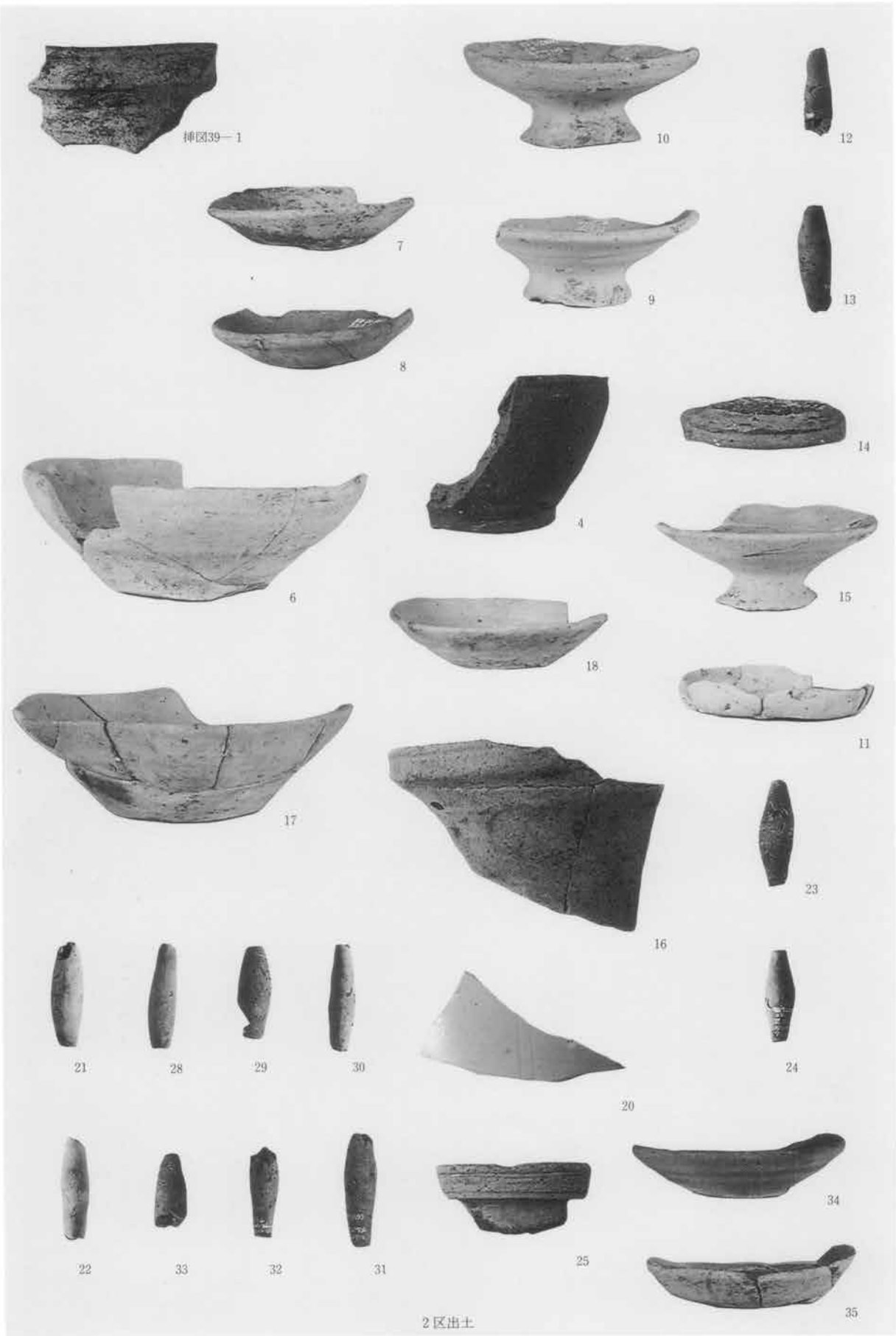
2～3区部材出土状況（段北部、南から）

調査区全景（東から）

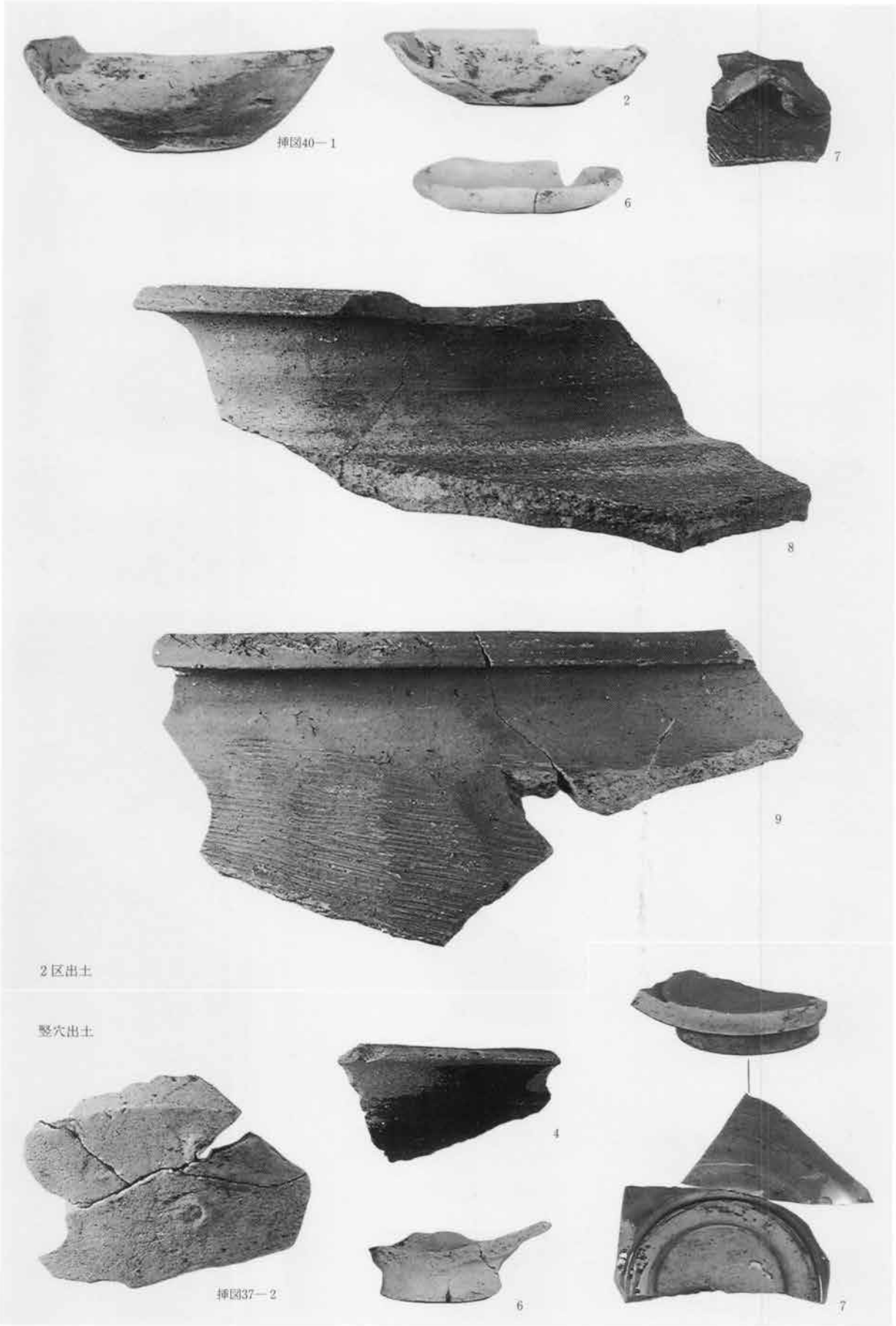
調査区全景（西から）



出土遺物（1）


挿図39－1
10
12
7
9
13
8
14
4
6
15
18
11
17
16
23
21
28
29
30
24
20
34
22
33
32
31
25
35
2区出土

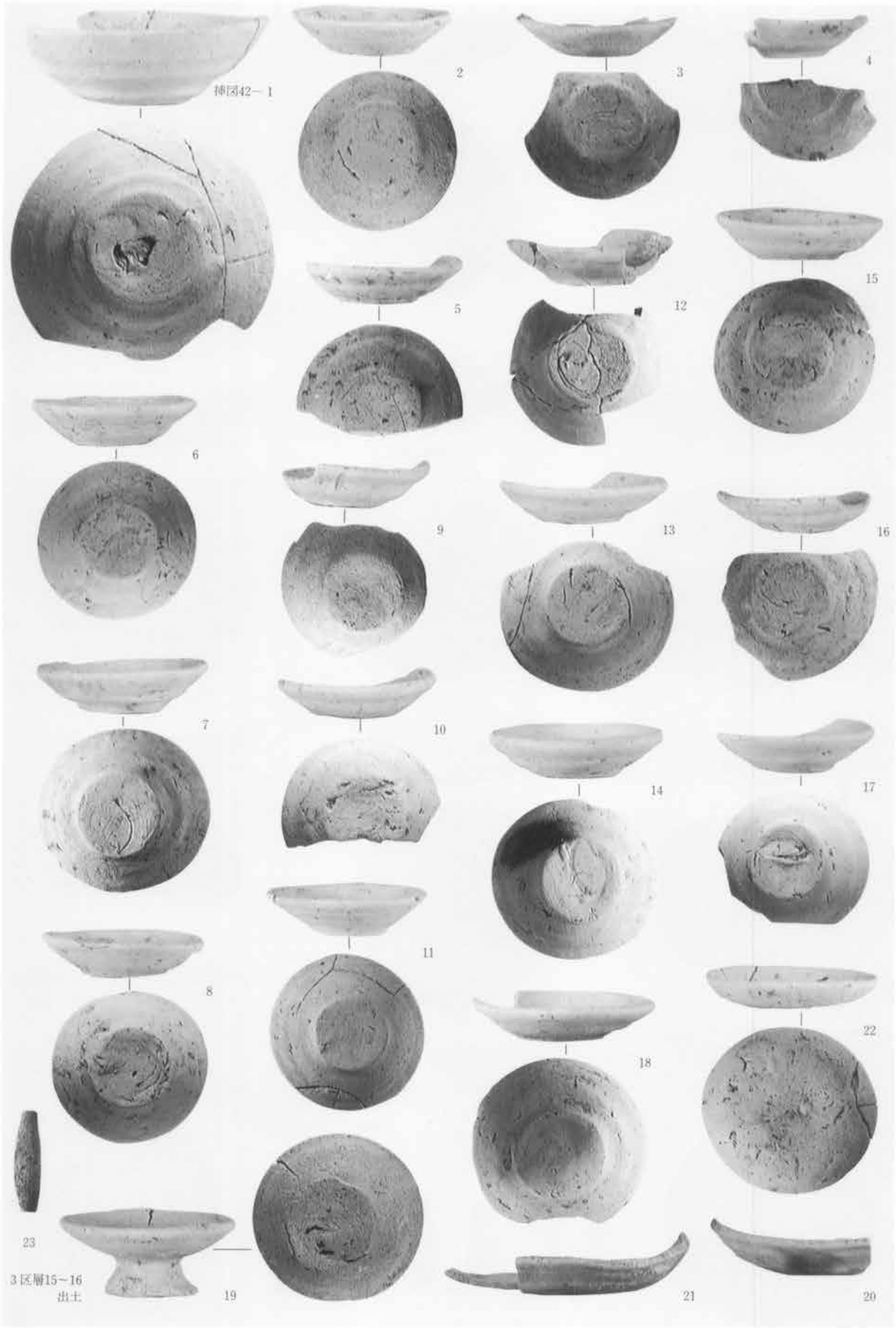
出土遺物（2）



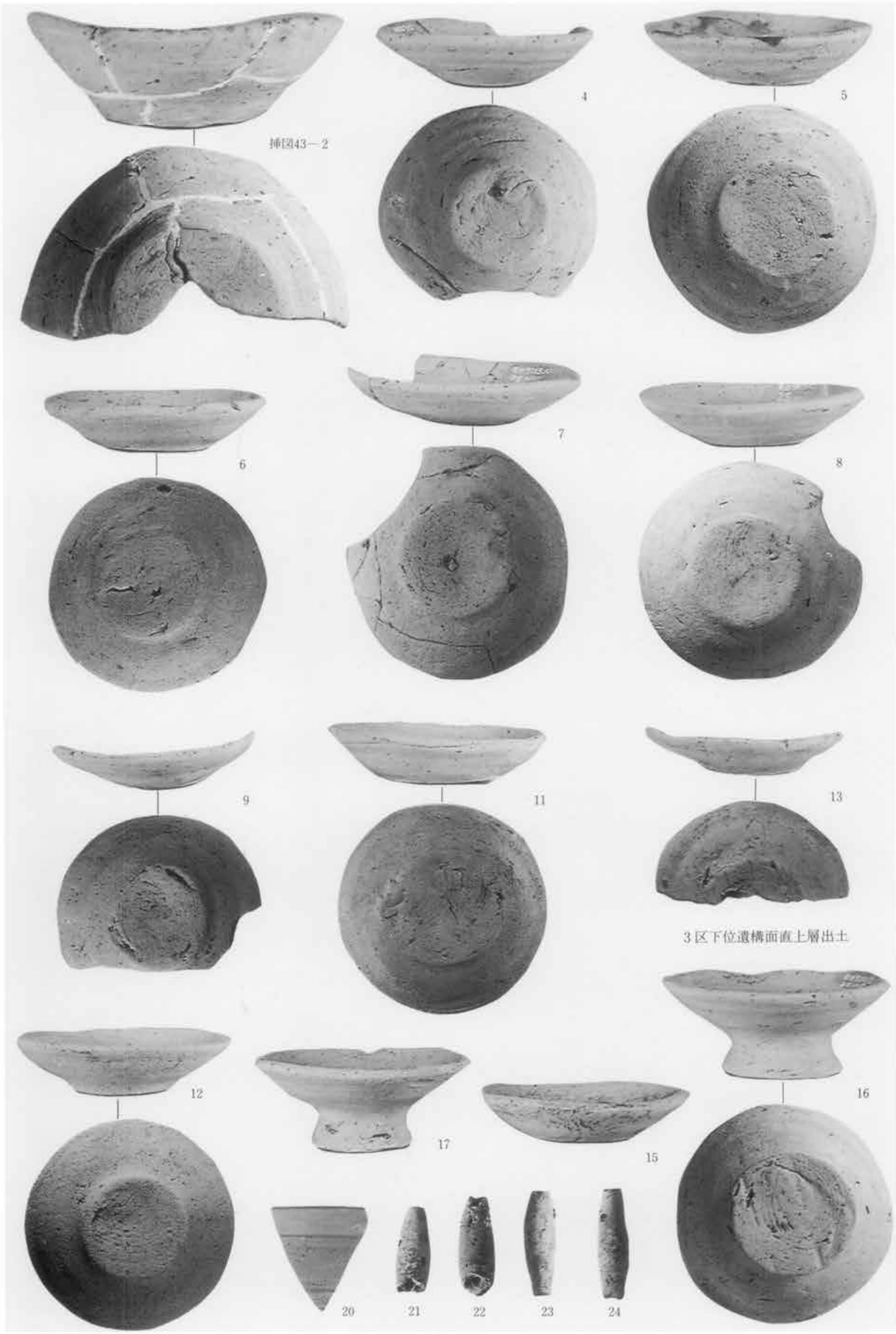
出土遺物（3）

3区出土
挿図41－1
3
4
13
14
6
7
12
11
15
挿図44－1
6
7
4
2
5
8
13
10
15
11
12
14
17
挿図45

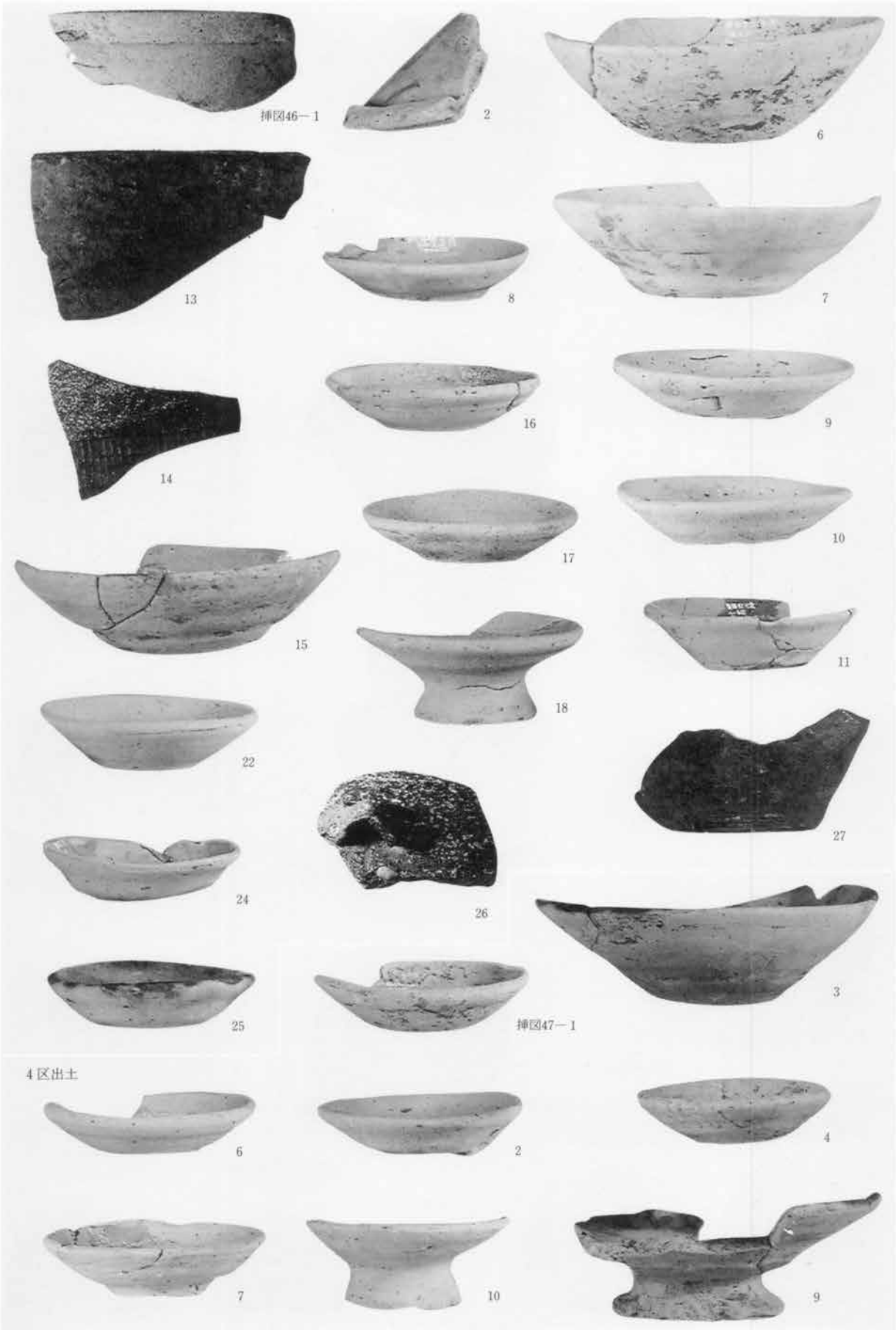
出土遺物（4）


挿図42－1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
3区層15～16
出土

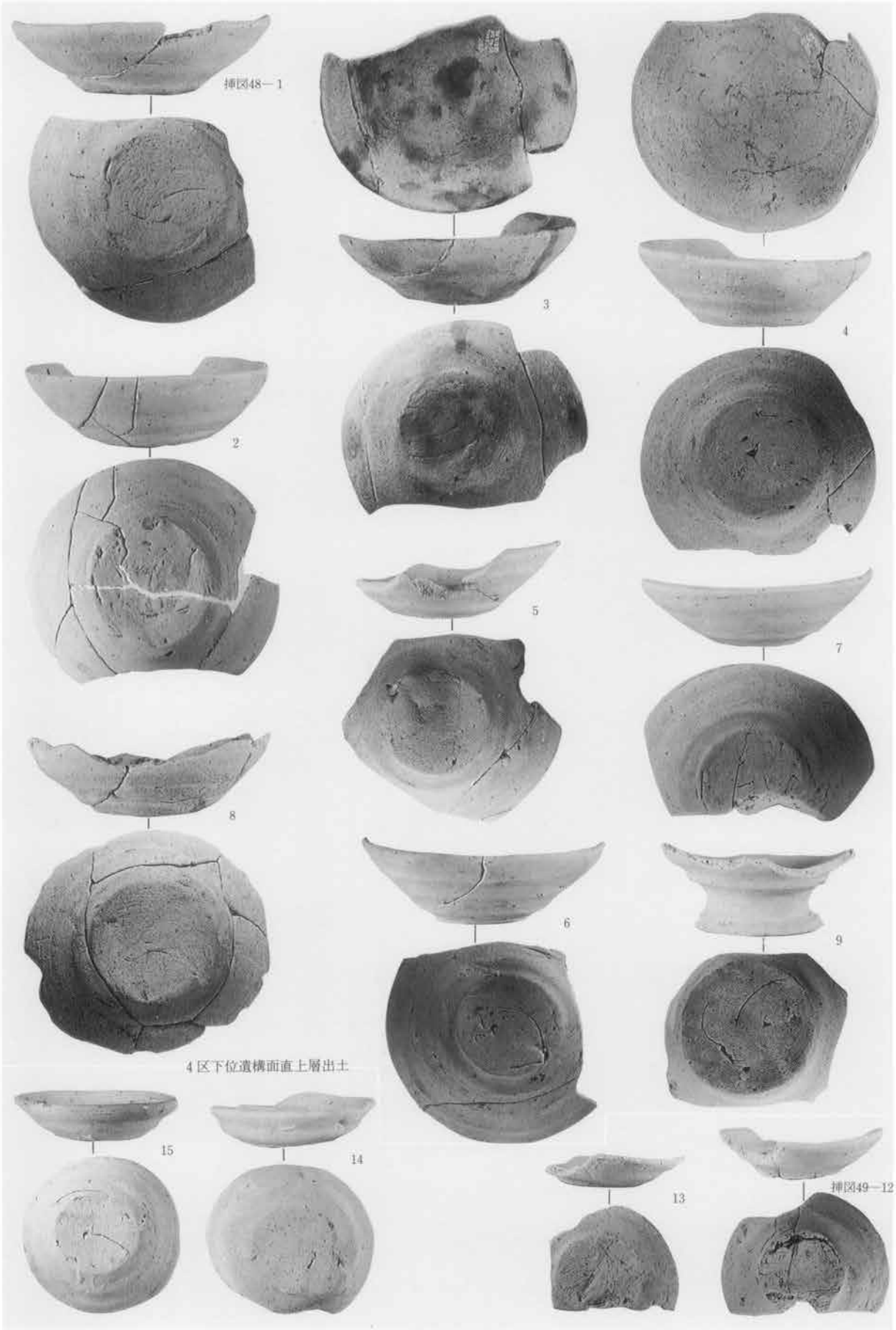
出土遺物（5）



出土遺物（6）


挿図46－1
2
6
13
8
7
16
9
14
10
17
15
11
18
22
27
24
26
3
25
挿図47－1
4区出土
6
2
4
7
10
9

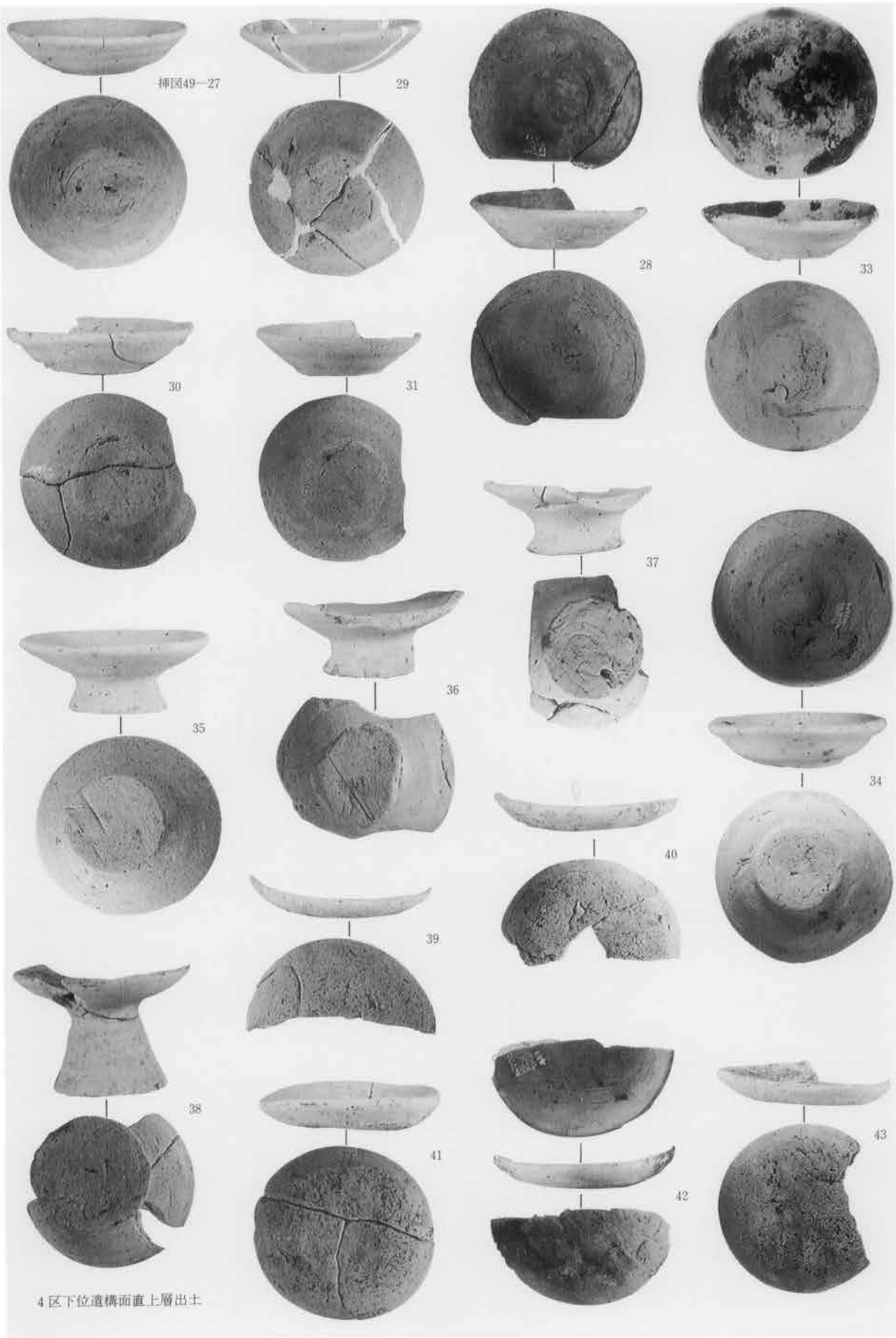
出土遺物（7）



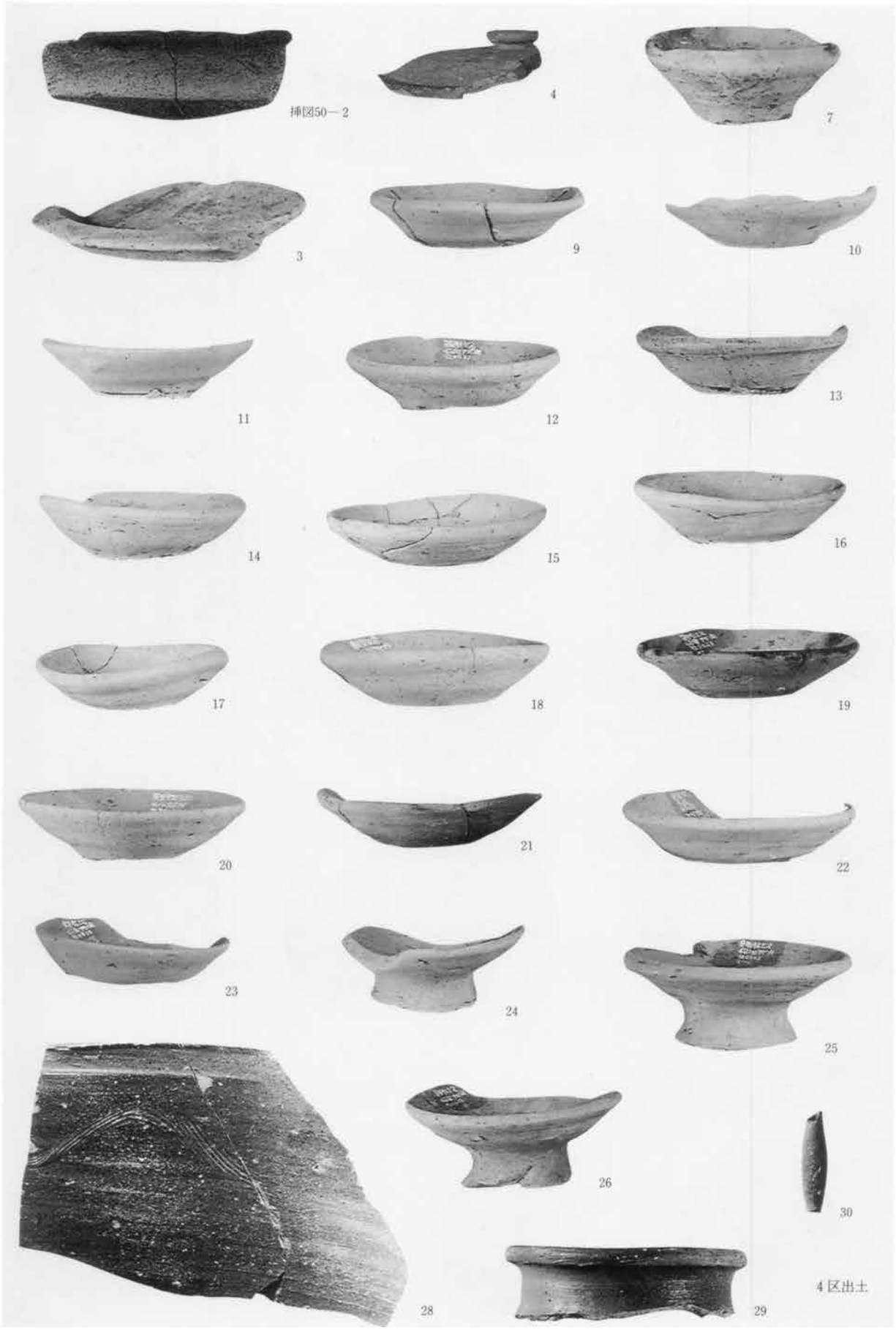
出土遺物（8）

挿図48—10
46—21を除いて4区下位遺構面直上層出土
11
挿図49—16
17
18
19
20
21
22
23
25
26
23
46—21

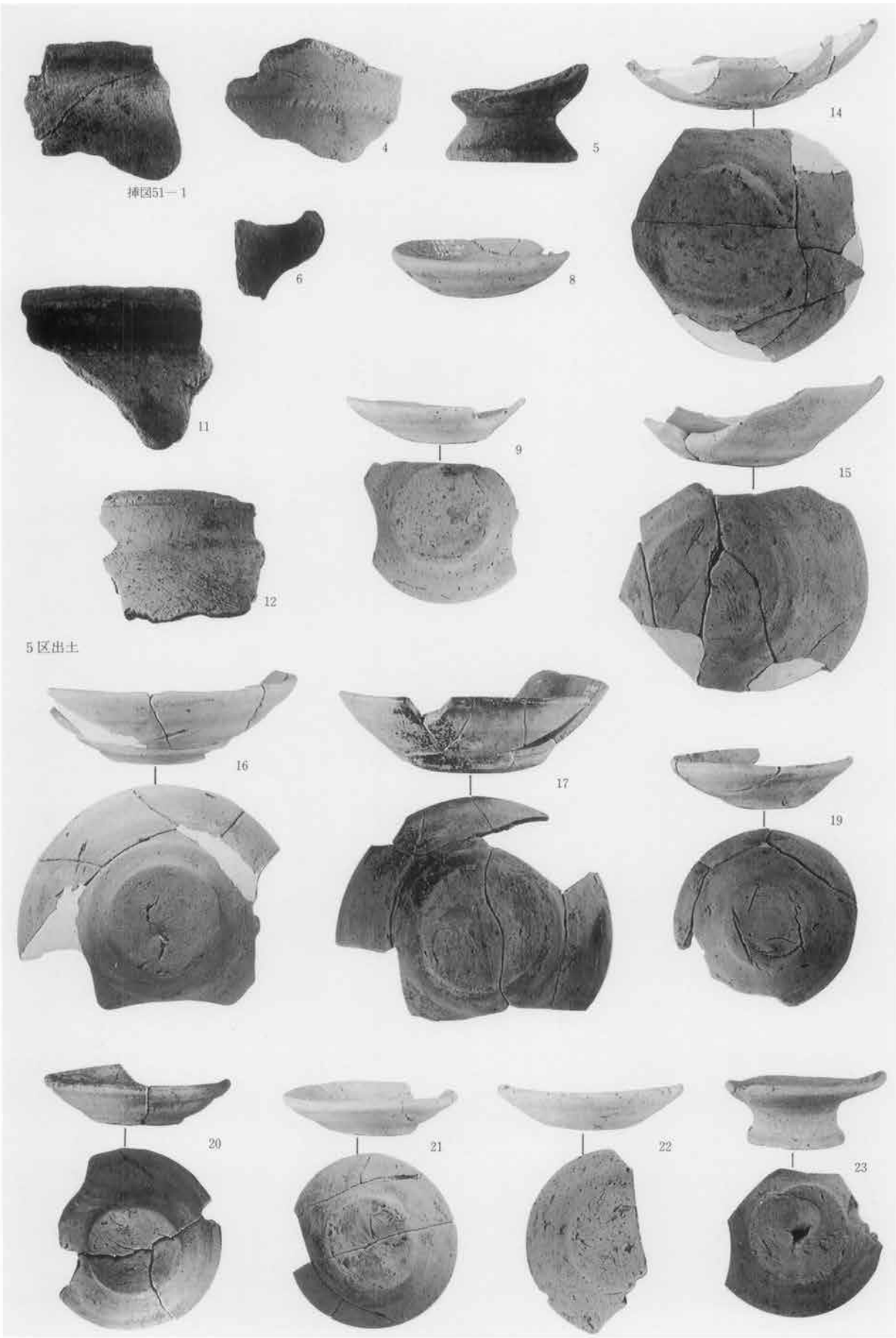
出土遺物（9）



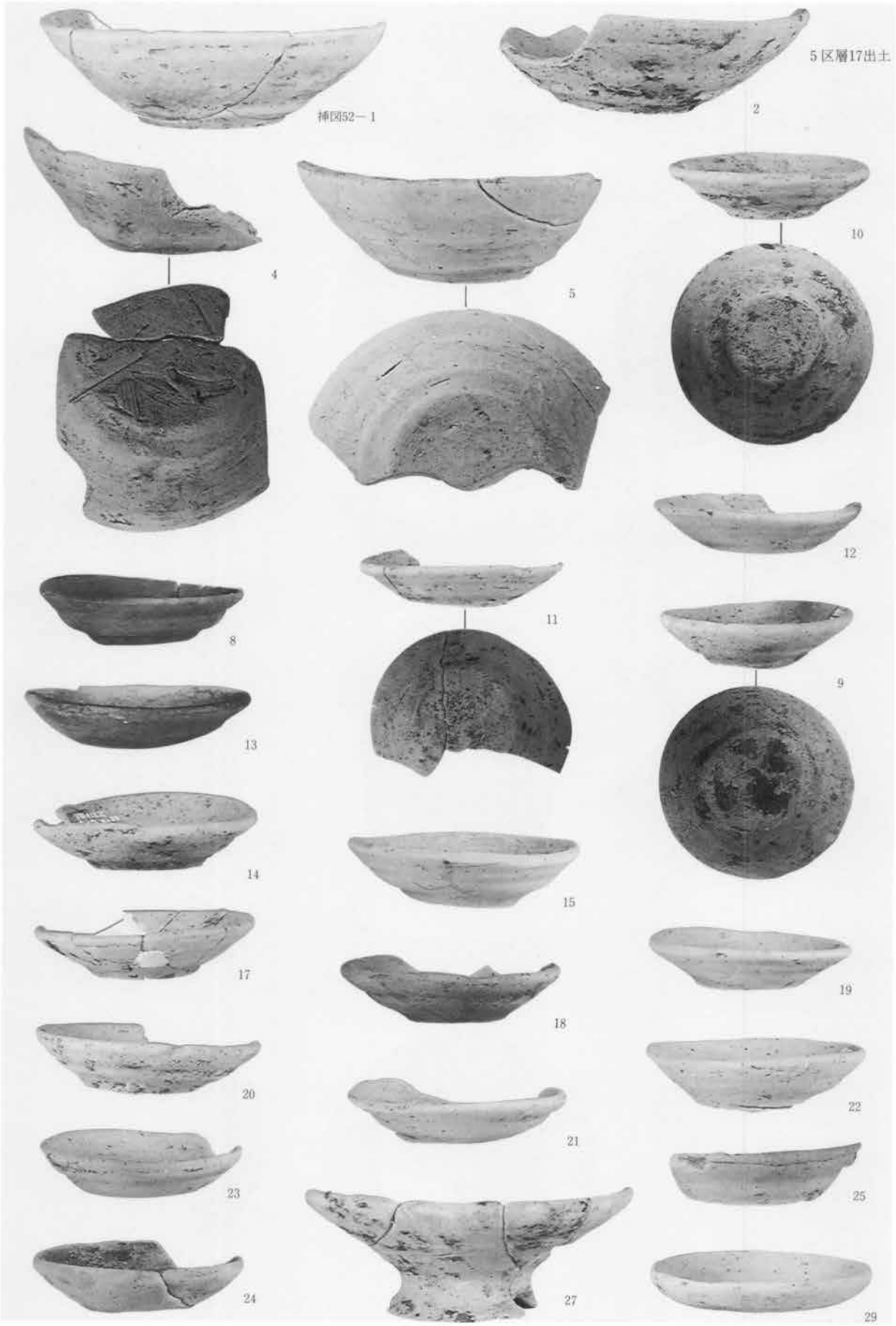
出土遺物（10）


挿図50－2
4
7
3
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
30
28
29
4区出土

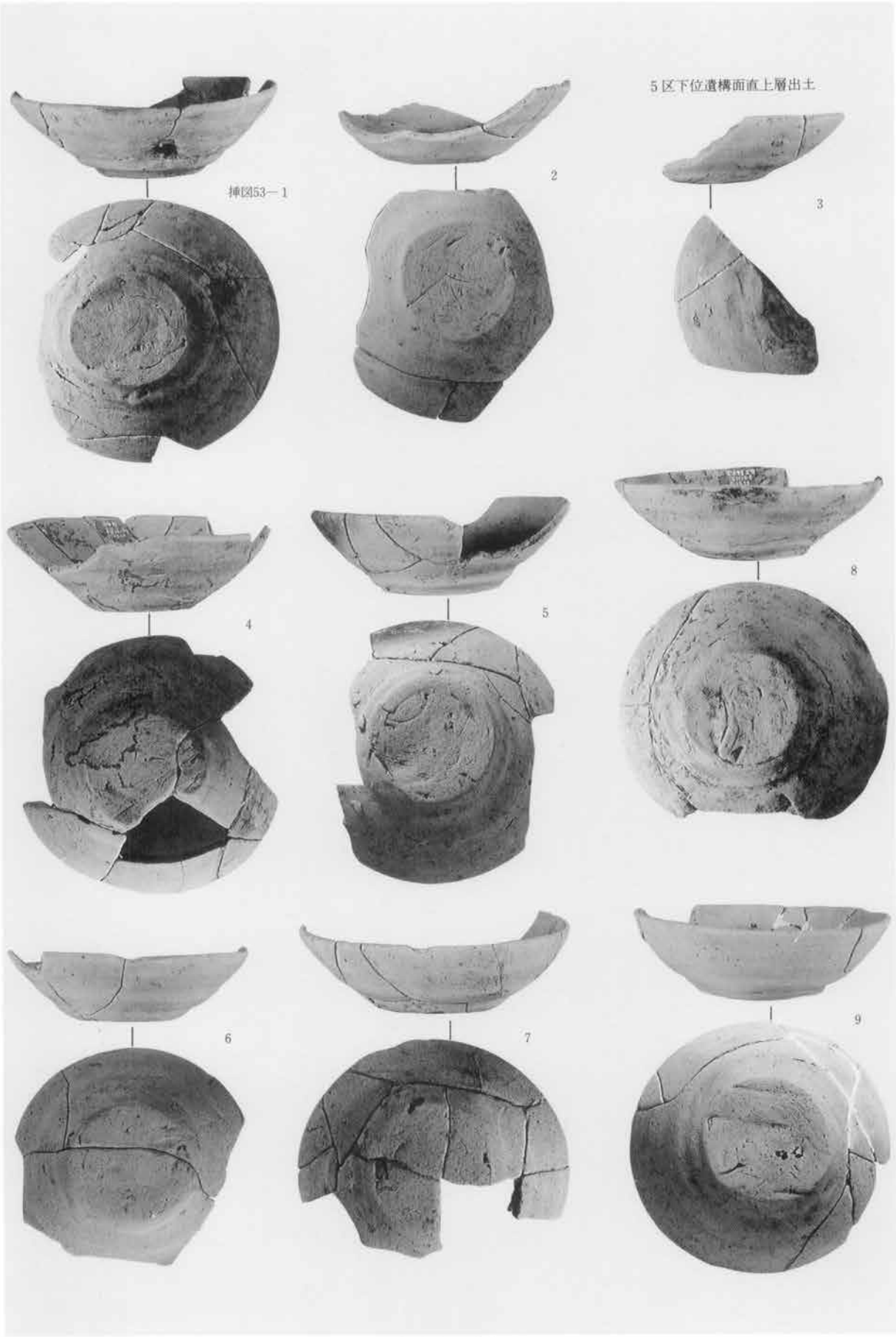
出土遺物（11）



出土遺物（12）


5区層17出土
挿図52－1
2
4
5
10
12
11
8
9
13
14
15
17
19
18
20
22
21
23
25
24
27
29

出土遺物（13）



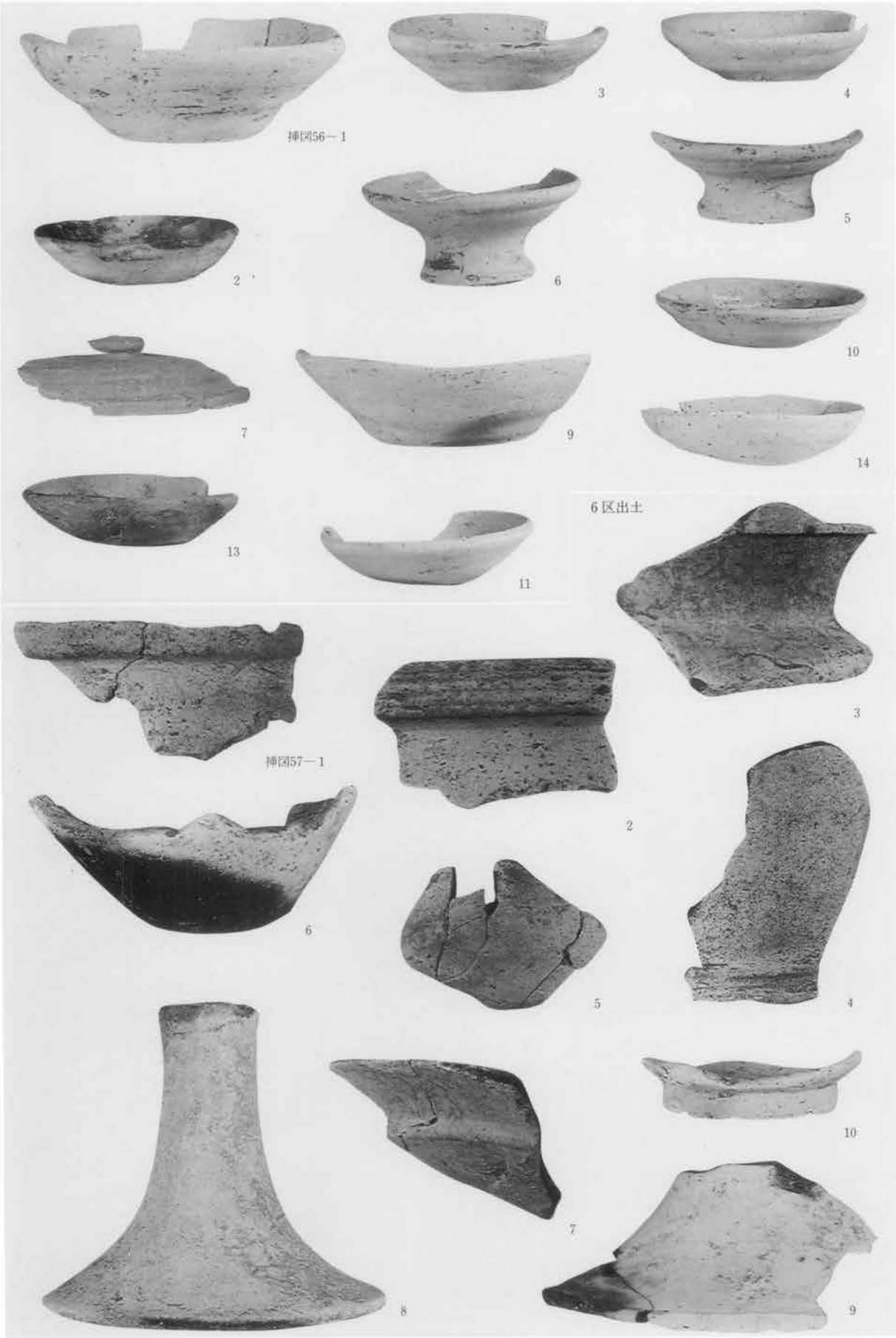
出土遺物（14）

挿図53—11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
5区下位遺構面直上層出土

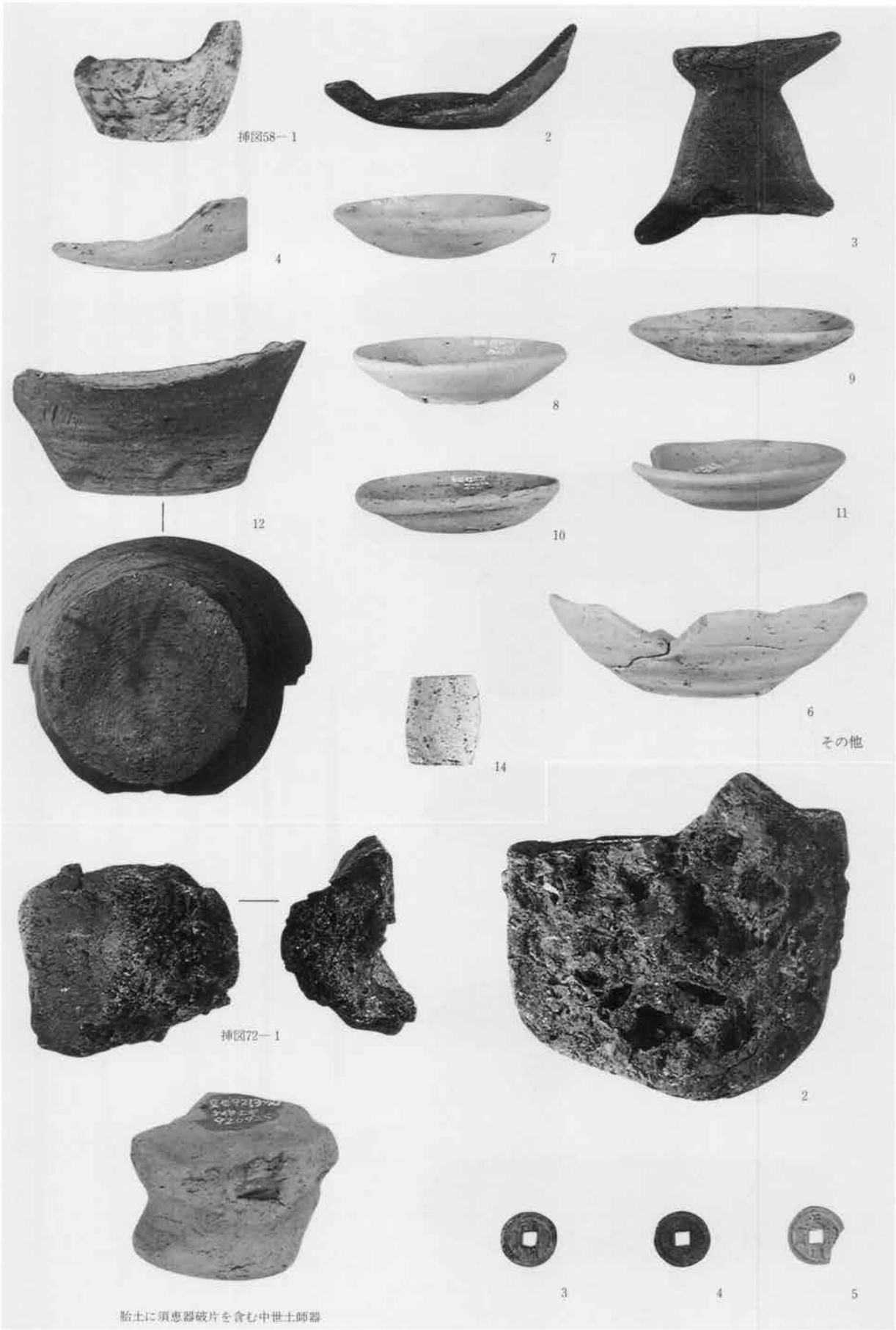
出土遺物（15）

出土遺物（16）

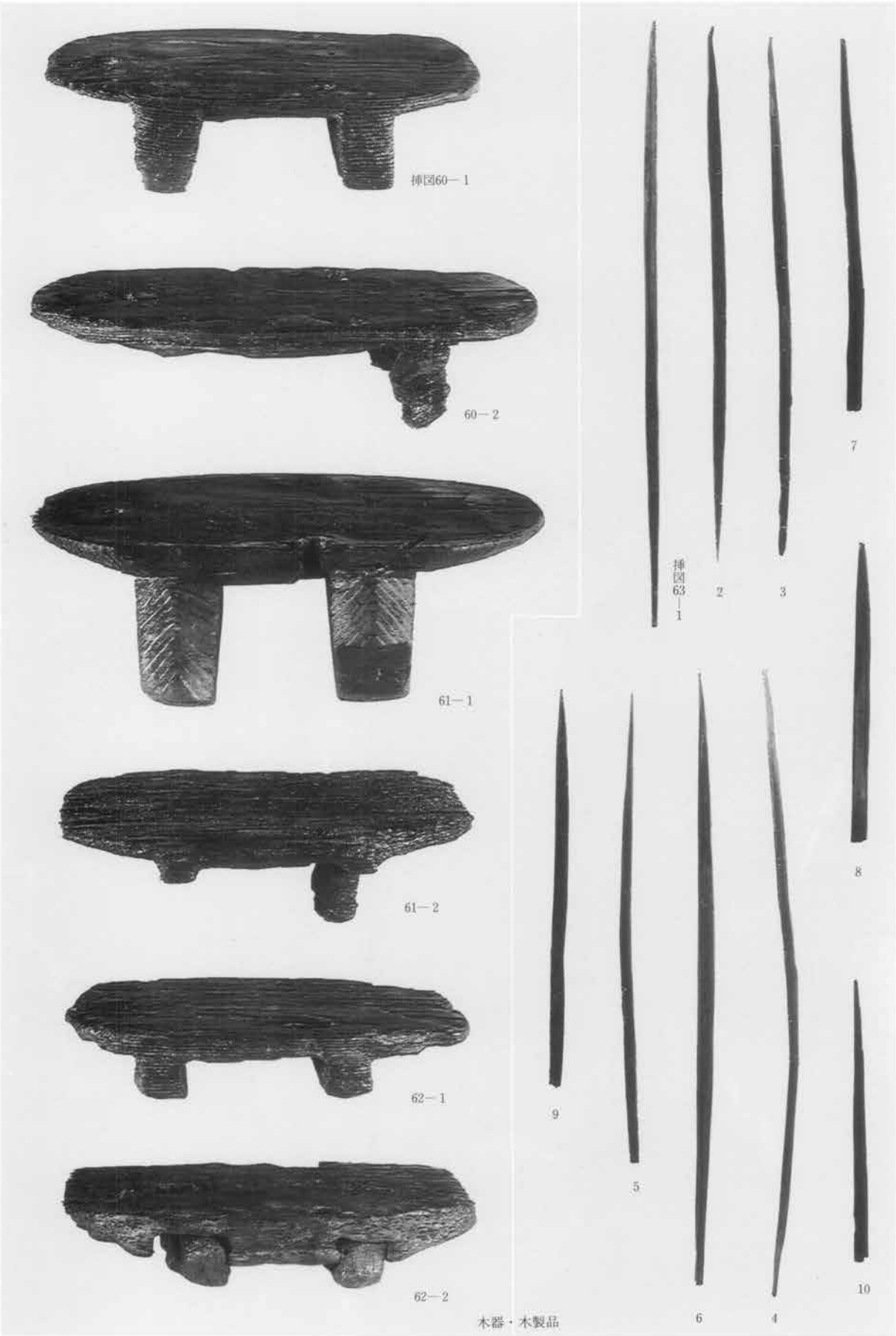
出土遺物（17）



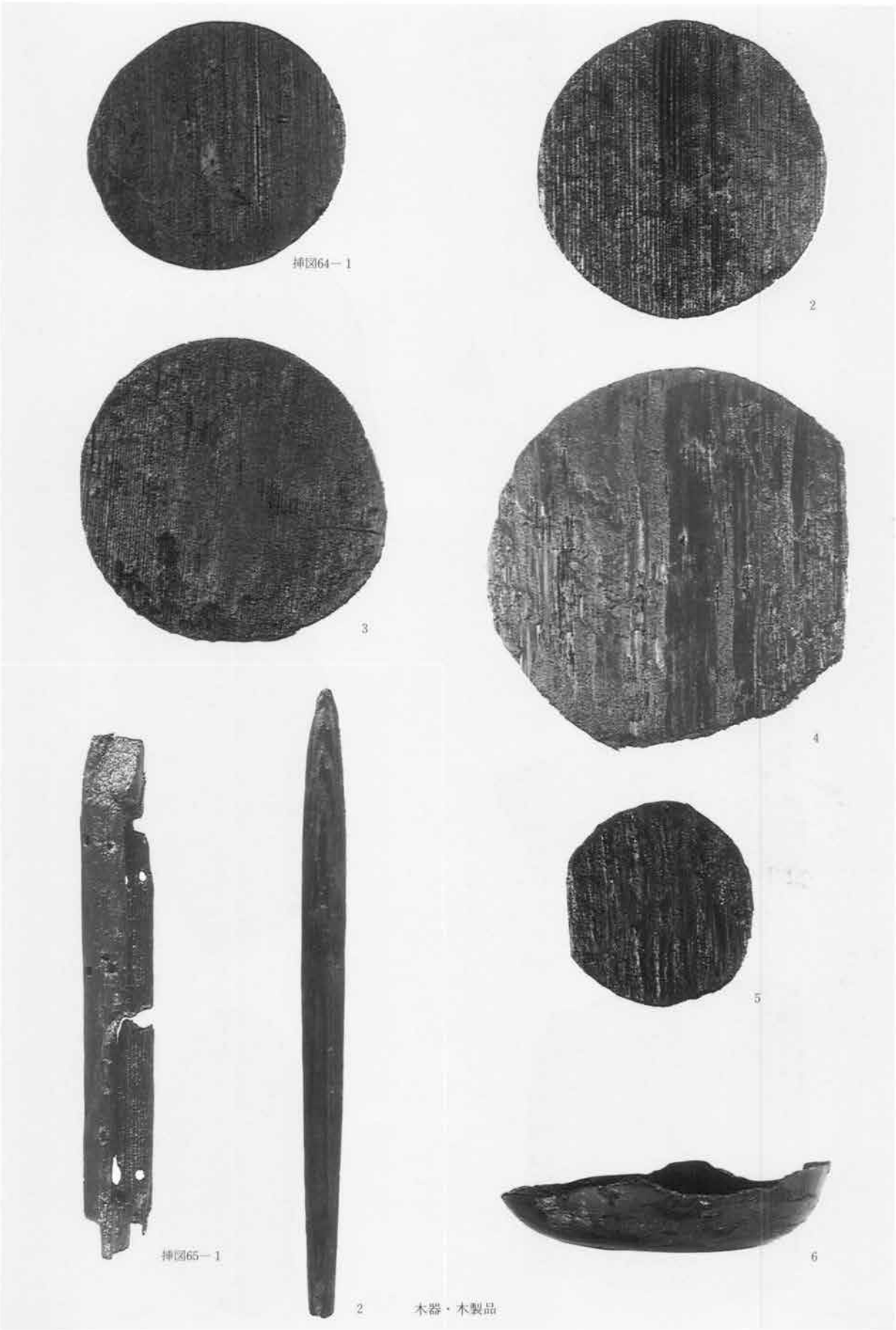
出土遺物（18）



出土遺物（19）



出土遺物（20）



木器・木製品

出土遺物（21）

挿図67－1

2

挿図66

3

4

6

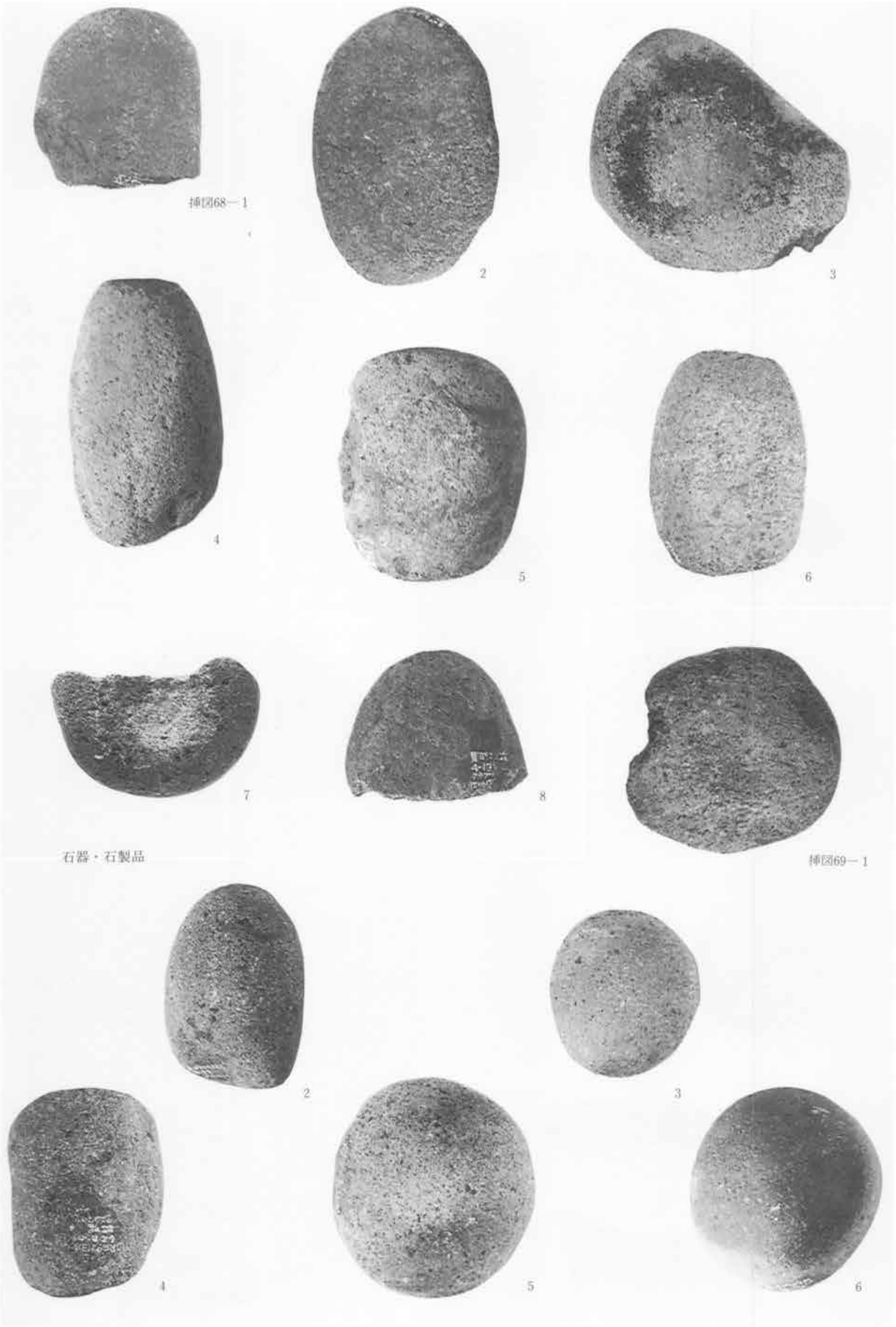
5

7

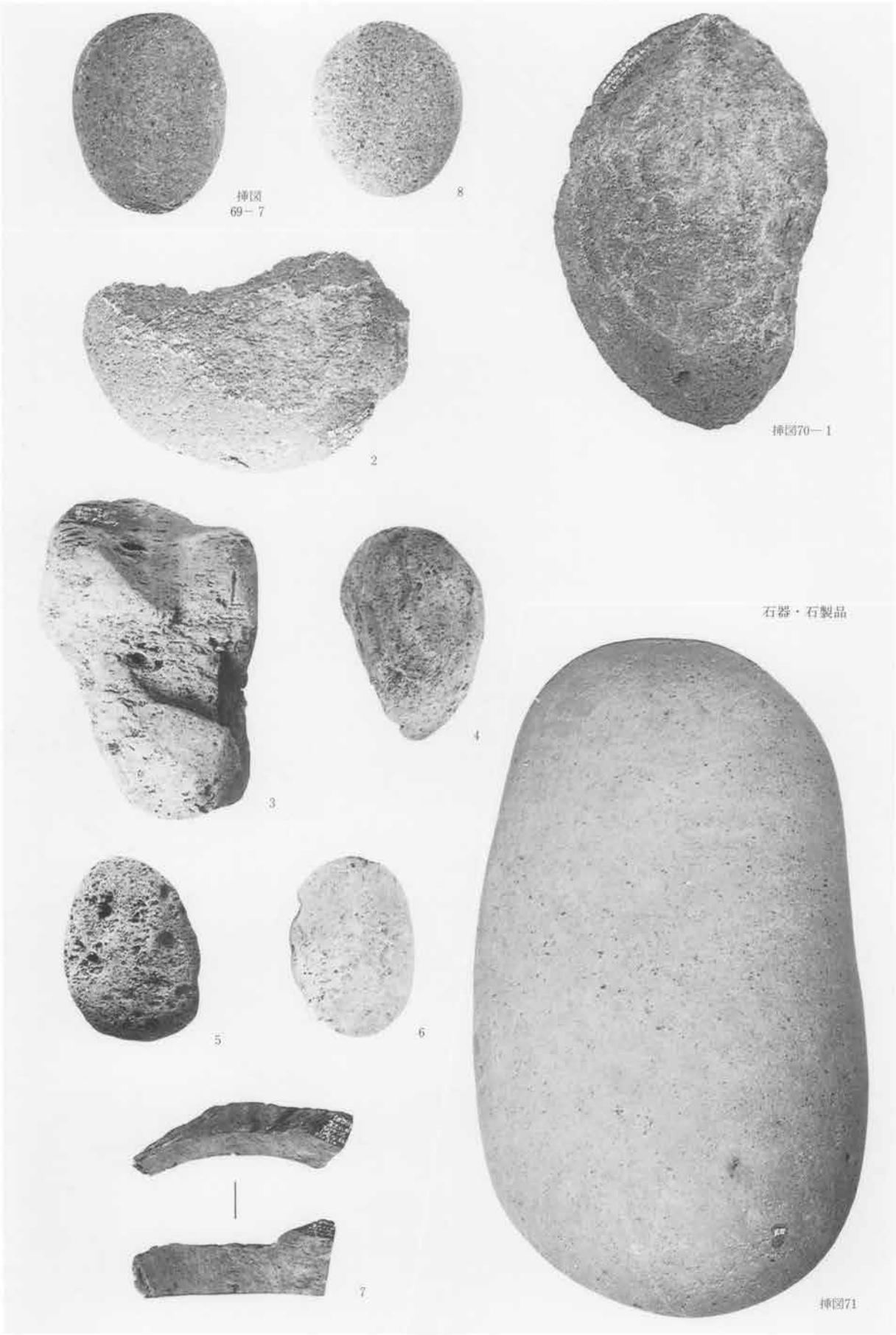
8

石器・石製品

出土遺物（22）



出土遺物（23）



出土遺物（24）

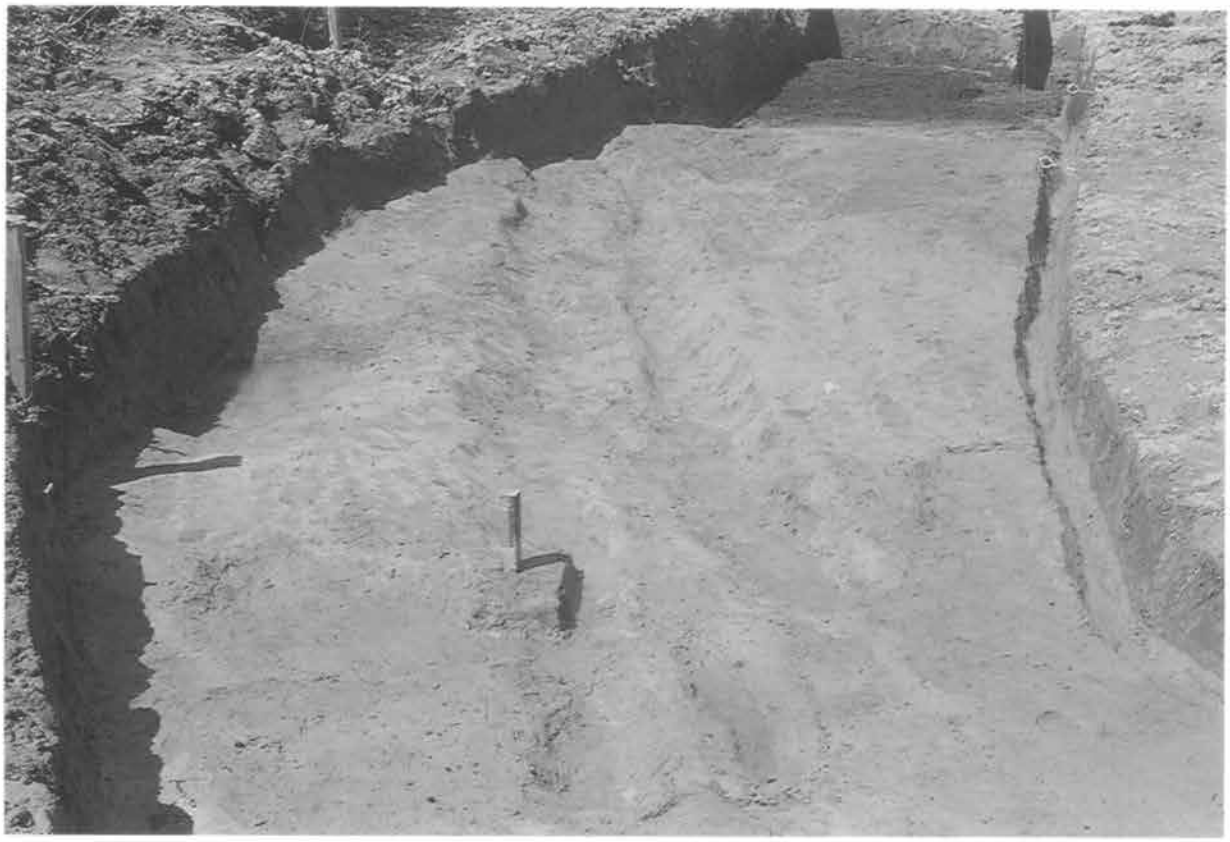
調査区全景（東から）

調査区全景（西から）

図版68（貝田遺跡第3次発掘調査北調査区）

調査区北部全景（南から）

調査区西部全景（東から）



溝全景（北から）

溝全景（東から）

調査区（0～38m）全景（東から）

調査区（0～38m）全景（西から）

調査区（0～20m）近景（東から）

調査区（38～64m）全景（北東から）

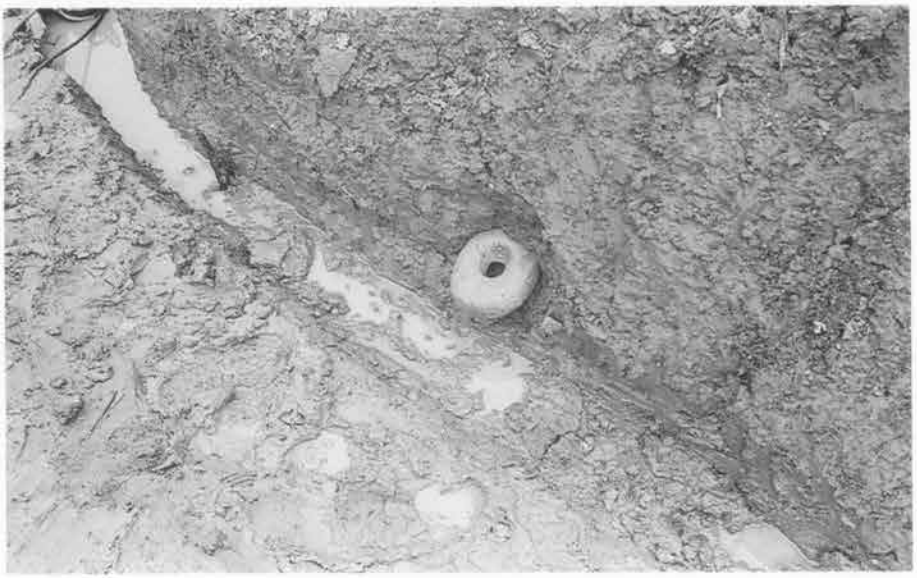
調査区（38～50m）近景（北東から）

調査区（50～64m）近景（北東から）

調査区（78～110.5m）全景（北東から）

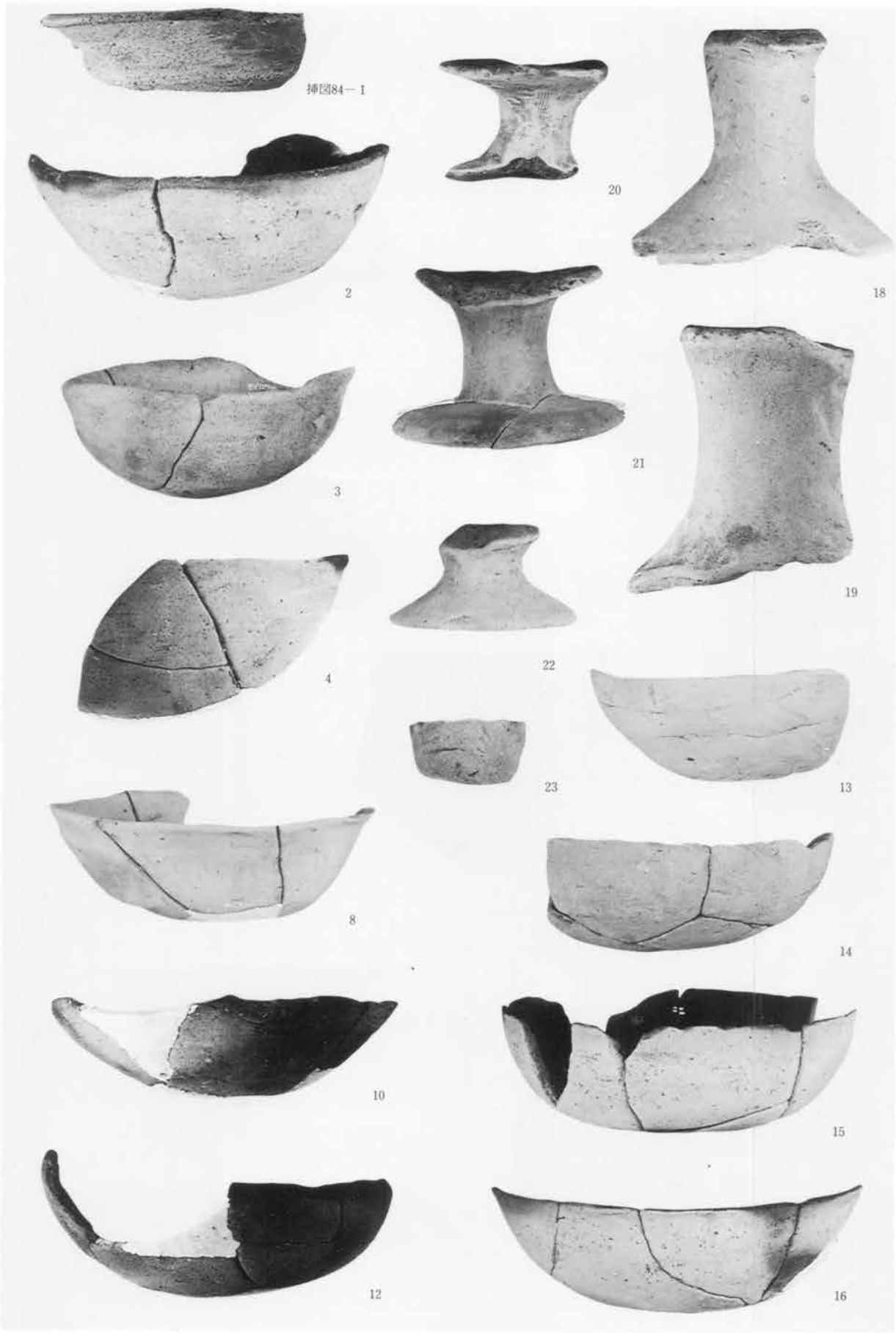
調査区（78～110.5m）全景（南西から）

落ち込み土層断面（西から）

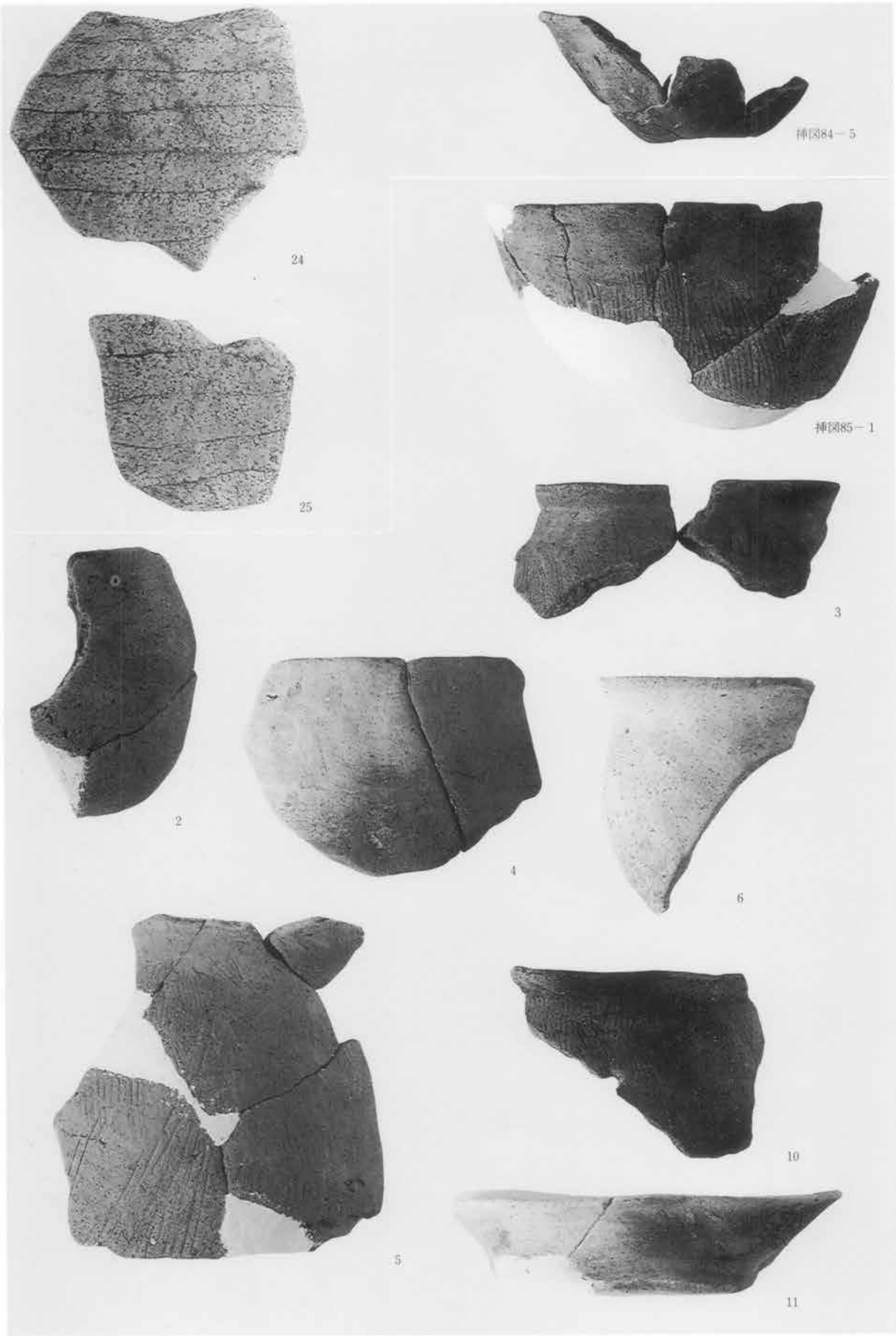


環石出土状況（北西から）

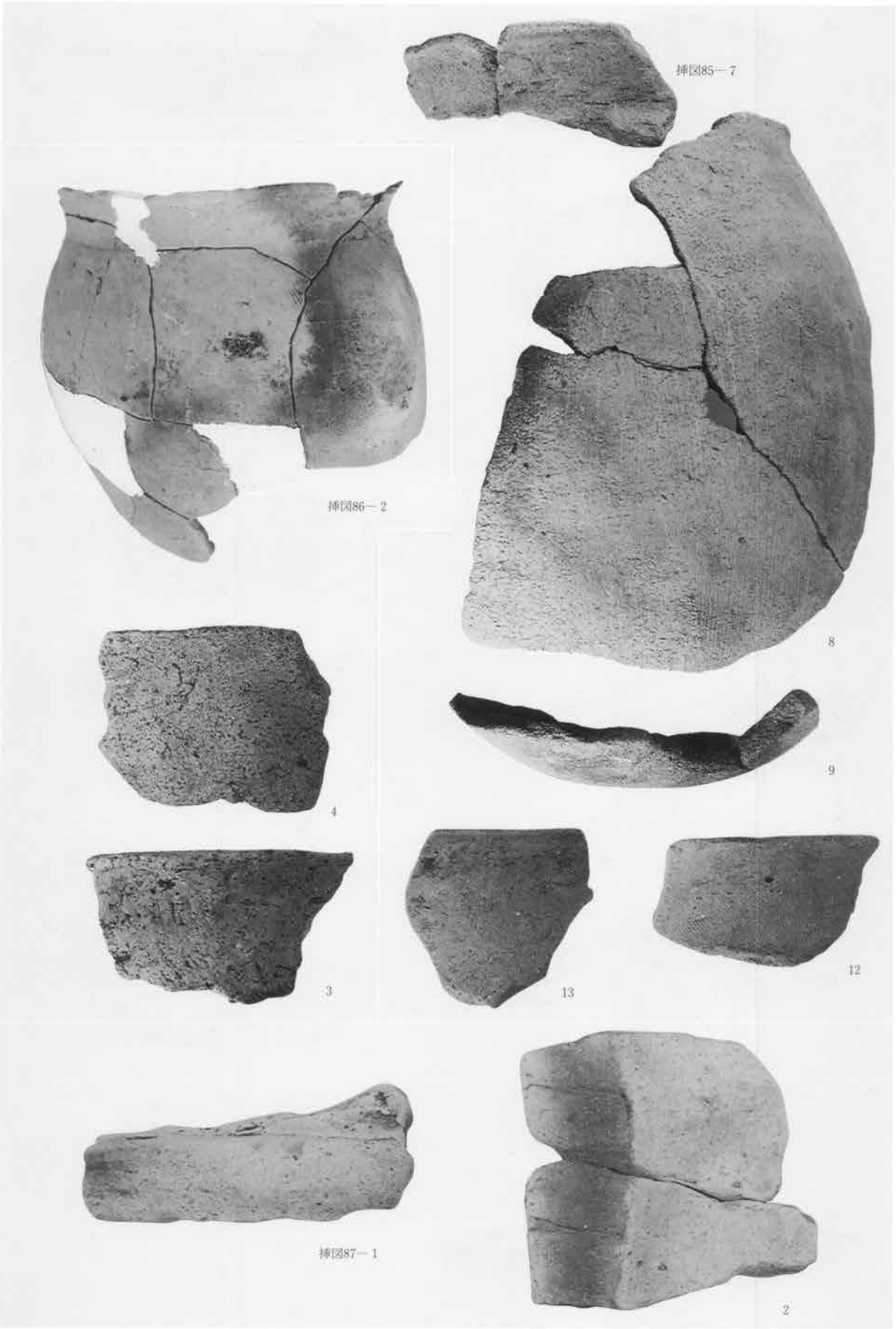
環石出土状況（北西から、近接）



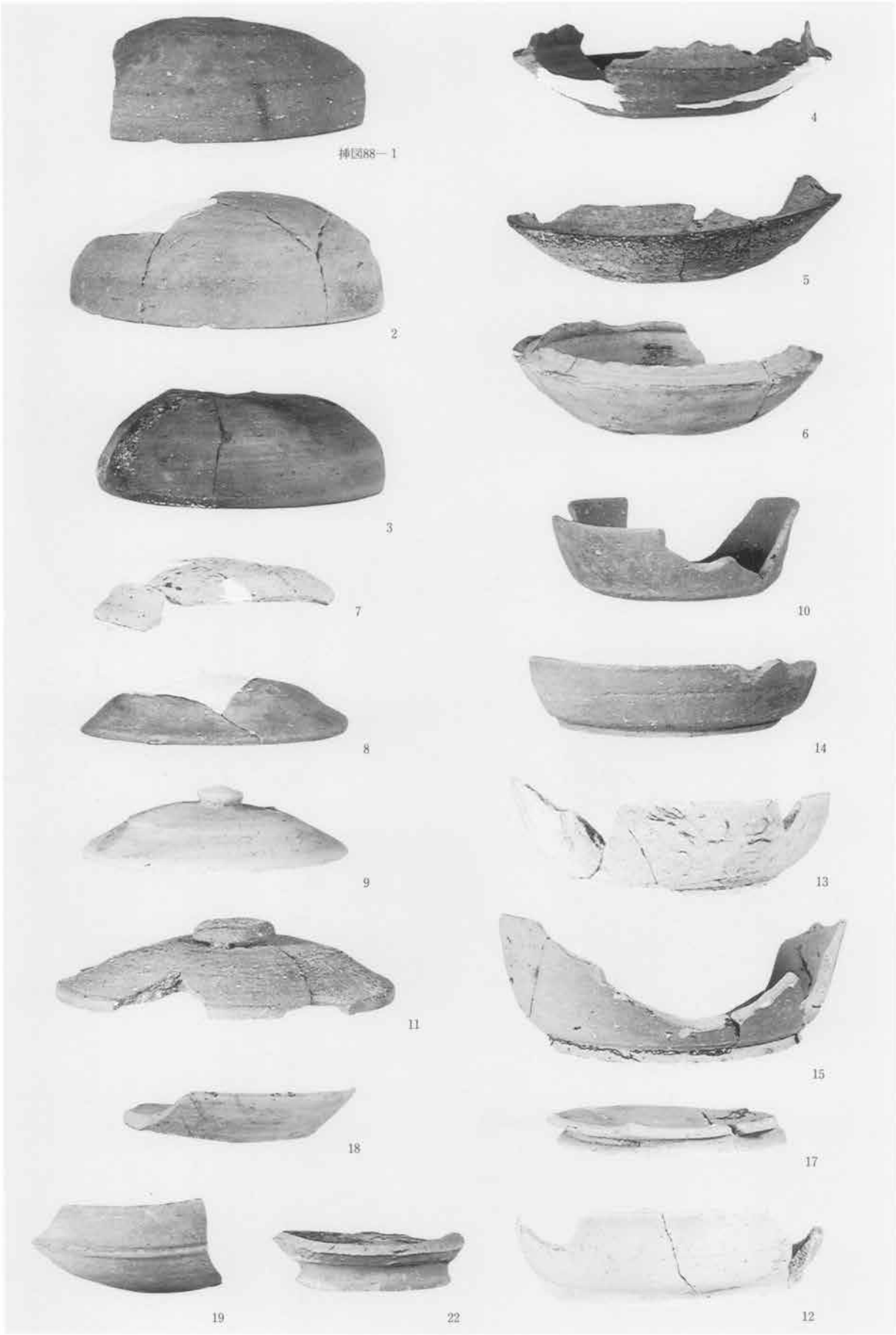
出土遺物（1）



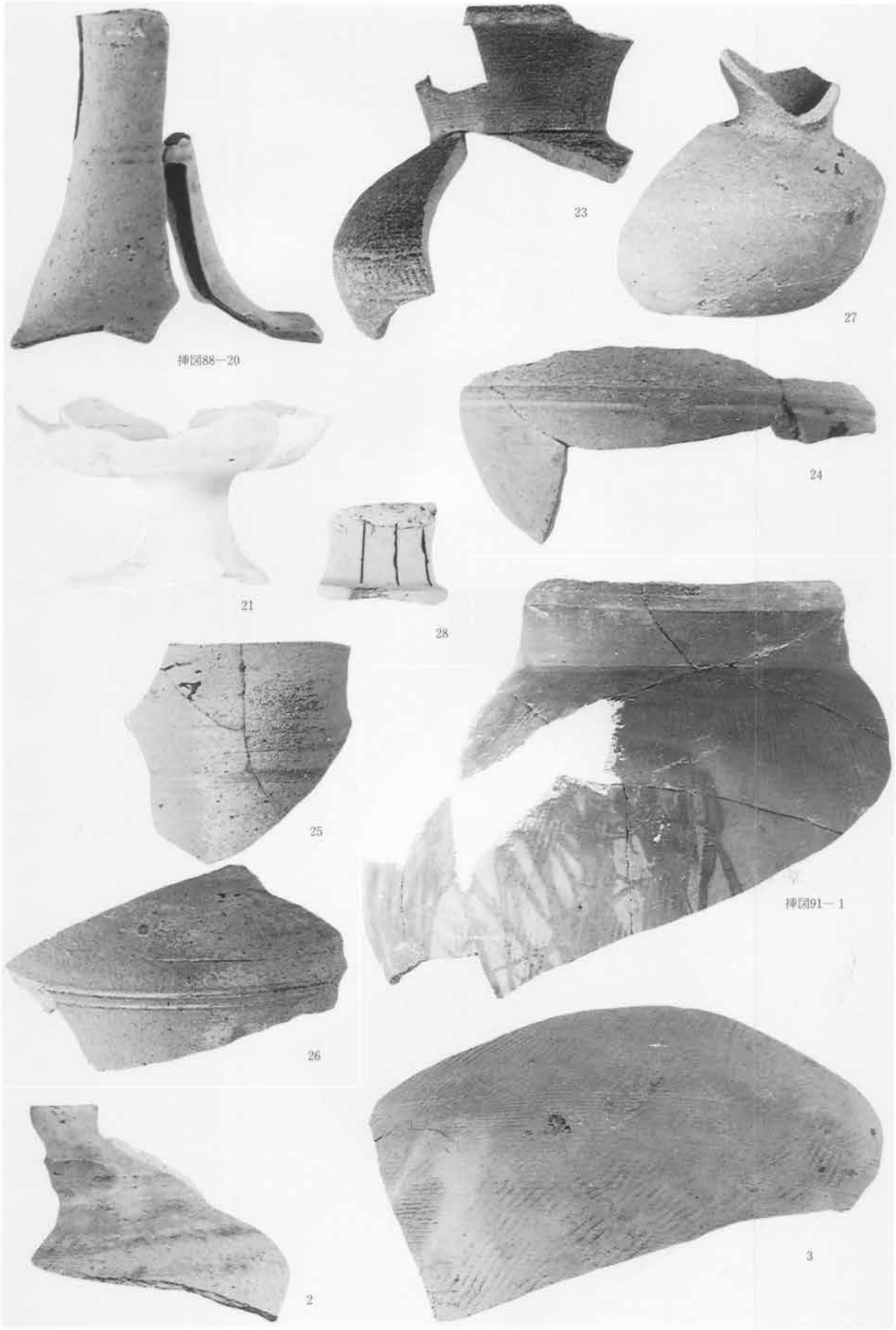
出土遺物（2）



出土遺物（3）



出土遺物（4）



出土遺物（5）

出土遺物（6）

富来町貝田遺跡・貝田C遺跡
—県営ほ場整備事業貝田地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成7年3月30日　印刷・発行

編集・発行　石川県立埋蔵文化財センター
石川県金沢市米泉町4丁目133番地
〒921　電話（0762）43－7692番(代)

印　　刷　株式会社　橋本確文堂
石川県金沢市大手町2－35

©石川県埋蔵文化財センター　1995